

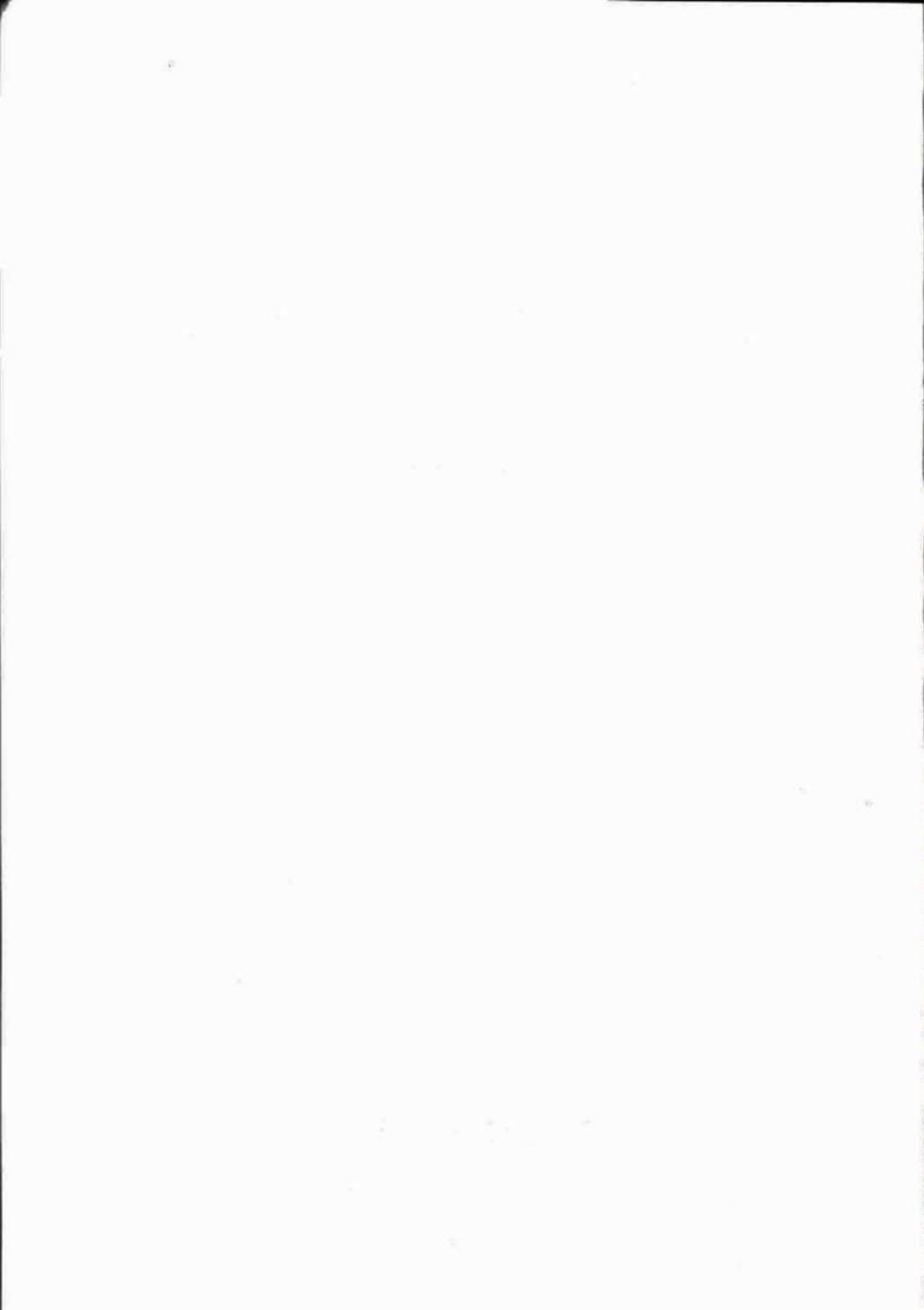
# **鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18**

平成13年度発掘調査報告

(第2分冊)

平成14年3月

**鎌倉市教育委員会**





水道山遺跡出土の土器群



# 総 目 次

## (第1分冊)

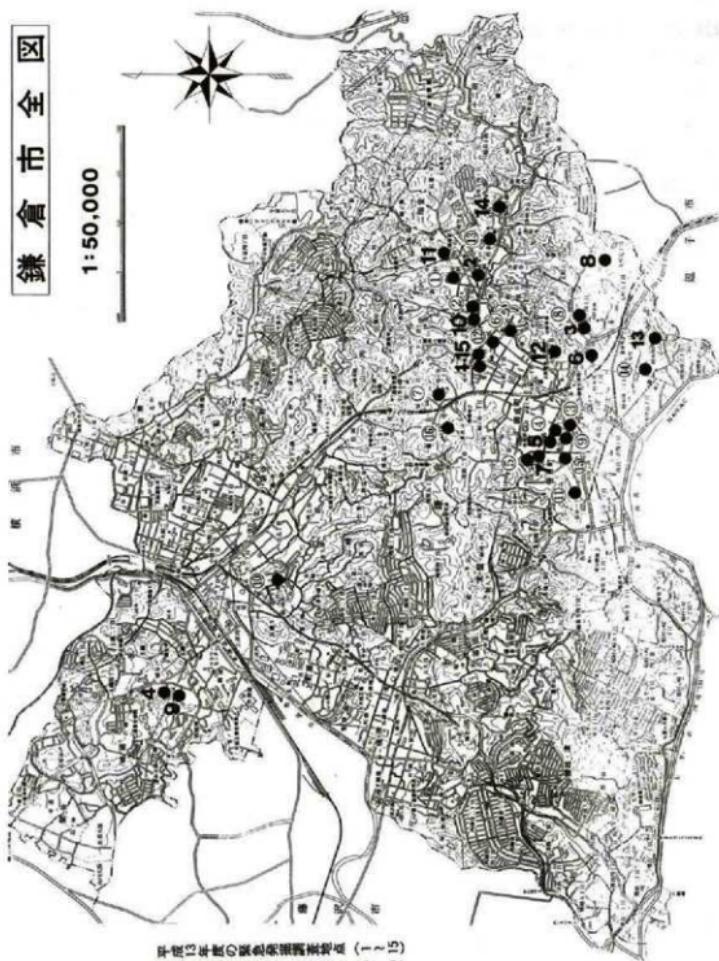
ごあいさつ	I
例 言	II
平成13年度調査の概観	
<b>1 大倉幕府周辺遺跡群 (NO.49) 二階堂字荏柄58番4外</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の概要	9
第3章 検出遺構と出土遺物	14
第4章 まとめ	108
<b>2 大倉幕府跡 (NO.253) 雪ノ下三丁目618番4</b>	
第1章 環境と立地	131
第2章 調査の概要	132
第3章 遺構と遺物	133
第4章 調査成果	137
<b>3 下馬周辺遺跡 (NO.200) 由比ガ浜二丁目106番6外</b>	
第1章 環境と立地	146
第2章 調査の概要	153
第3章 遺構と遺物	154
第4章 調査成果	173
<b>4 今小路西遺跡 (NO.201) 由比ガ浜一丁目148番1</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	185
第2章 調査の経過	189
第3章 発見された遺構と遺物	190
第4章 まとめ	194
<b>5 佐助ヶ谷遺跡 (NO.245) 佐助一丁目476番1</b>	
第1章 調査地点の位置と歴史的環境	202
第2章 調査の経過と堆積土層	204
第3章 検出された遺構と遺物	206
第4章 まとめ	214
<b>6 東勝寺跡 (NO.246) 小町三丁目468番10</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	224
第2章 調査経過・グリッド配置・基本土層	227
第3章 検出遺構と出土遺物	229
第4章 まとめ	242

<b>7 武藏大路周辺遺跡 (NO. 194) 鳩谷二丁目298番1イ</b>	
第1章 遺跡概観	258
第2章 検出した遺構と遺物	263
第3章 まとめ	351
 (第2分冊)	
<b>8 名越ヶ谷遺跡 (NO. 231) 大町三丁目1826番9</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査の経過	10
第3章 発見された遺構と遺物	11
第4章 まとめ	25
<b>9 今小路西遺跡 (NO. 201) 由比ガ浜一丁目183番1</b>	
第1章 環境と立地	55
第2章 調査の概要	56
第3章 遺構と遺物	59
第4章 調査成果	67
<b>10 水道山遺跡 (NO. 20) 台四丁目1169番1</b>	
第1章 遺跡の位置と諸環境	79
第2章 調査の概要	81
第3章 検出された遺物	85
第4章 自然科学分析	128
第5章 まとめ	130
<b>11 長谷小路周辺遺跡 (NO. 236) 長谷一丁目205番12</b>	
第1章 環境と立地	148
第2章 調査の概要	152
第3章 遺構と遺物	154
第4章 調査成果	162
<b>12 北条小町邸跡 (NO. 282) 雪ノ下一丁目400番1</b>	
第1章 調査地点概観	175
第2章 調査の概略	181
第3章 遺構と遺物	183
第4章 まとめと考察	200
<b>13 浄妙寺旧境内遺跡 (NO. 408) 浄明寺三丁目16番1</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	218
第2章 調査の経緯	220
第3章 発見された遺構	221
第4章 調査のまとめ	224

<b>14 材木座町屋遺跡（N0.261）材木座四丁目256番1の一部</b>	
第1章 環境と立地	229
第2章 調査の概要	232
第3章 遺構と遺物	234
第4章 調査成果	247
<b>15 笹目遺跡（N0.207）笹目町302番11</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	261
第2章 調査の経緯	263
第3章 発見された遺構と遺物	264
第4章 調査成果のまとめと課題	278
<b>16 亀谷山王堂跡（N0.185）扇ガ谷四丁目327番5</b>	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	292
第2章 調査の概要	294
第3章 遺構と遺物	296
第4章 まとめ	307

# 鎌倉市全図

1:50,000



平成13年度の緊急避難場所地点（1～15）  
本部組織の平成12年度避難地点（①～⑩）  
※道路名は一覧表を参照

な ごえ が やつ  
名越ヶ谷遺跡 (No. 231)

大町三丁目1826番9地点

## 例 言

1. 本報は鎌倉市大町三丁目1826番9地点における住宅建設に伴う発掘調査報告である。
2. 調査は平成12年8月1日から9月30日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。  
担当者 手塚直樹  
調査員 野本賢二、渡辺美佐子  
調査補助員 幾島審、横田真吾  
作業員 安斎三男、大戸迫猛、柴崎英輔、渡辺輝彦（（社）鎌倉市シルバー人材センター）  
調査協力 宮田真（鎌倉考古学研究所）、諸星真澄、滝沢晶子
4. 本報の執筆、編集は手塚、野本が行い、資料整理は手塚、渡辺、野本と山上玉恵、田畠衣理が行った。
5. 付編（科学分析）の執筆および図版作成は（株）パレオ・ラボ（鈴木茂、松葉礼子の両氏）に委託した。
6. 写真是空撮写真（図版1）をフジテクノが、それ以外の遺構を手塚、野本が、遺物を野本が撮影した。
7. 本報中の遺構図縮尺は基本的に1:60である。
8. 遺構図中のPは柱穴を表す。
9. 遺物実測図の縮尺は基本的に3分の1である。それ以外は各々に縮尺を付した。
10. 出土遺物の情報は遺物観察表に記した。遺物実測図番号、遺物観察表番号、遺物写真番号はそれぞれ一致する。
11. 遺物写真的縮尺は不同である。
12. 図面、写真、遺物等の資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している。
13. 本報にかかる出土品には略号である「03N0」を註記した。
14. 繩文土器に関しては天野賛一氏（（財）かながわ考古学財团）に御教示を賜った。
15. 発掘調査及び出土品整理にあたっては次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。（順不同・敬称略）  
上本進二（神奈川県立七里ヶ浜高等学校）、宮田真、菊川英政、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）、（社）鎌倉市シルバー人材センター、東急ホーム

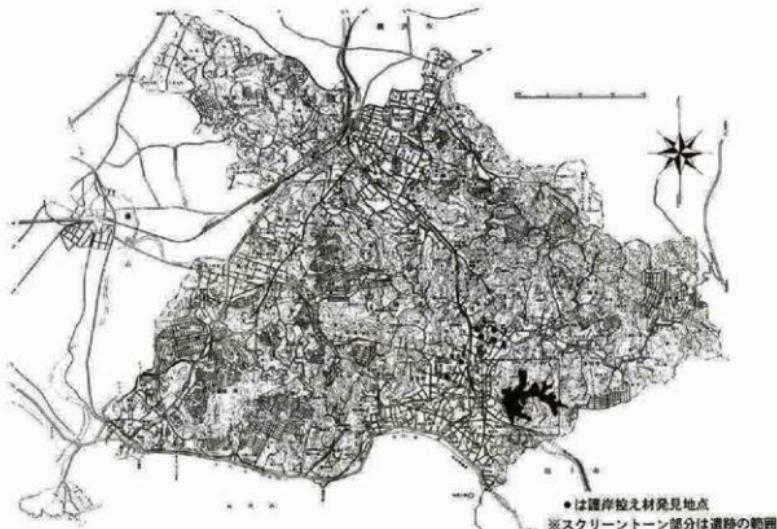


図1 「名越ヶ谷遺跡」の範囲

## 本文目次

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章	調査の経過	10
第3章	発見された遺構と遺物	11
第1節	1面の遺構	11
第2節	河川護岸関連遺構	12
第3節	2面の遺構	23
第4節	中世以前	24
第5節	その他	24
第4章	まとめ	25

## 挿図目次

図1	「名越ヶ谷遺跡」の範囲	2
図2	調査地点と周辺の遺跡	5
図3	グリッド設定図	10
図4	1面遺構図(河川護岸石積1)	11
図5	1面出土遺物	12
図6	河川護岸木組1	12
図7	河川護岸木組2	13
図8	河川護岸木組3	15
図9	河川護岸石組2・木組4	16
図10	木組模式図	17
図11	河川護岸層出土遺物(1)	17
図12	河川護岸層出土遺物(2)	18
図13	河川護岸層出土遺物(3)	19
図14	河川護岸層出土遺物(4)	20
図15	河川護岸層出土遺物(5)	21
図16	河川護岸層出土遺物(6)	22
図17	2面遺構図	23
図18	2面出土遺物	24
図19	中世以前「落ち込み」	24
図20	中世以前遺物・表採遺物	25
図21	調査区壁土層堆積図	28

## 表目次

表1	周辺の遺跡一覧表	5
表2	木組1部材計測表	13
表3	木組2部材計測表	14
表4	木組3部材計測表	15
表5	木組4部材計測表	16
表6	柱穴・土坑計測表	23
表7	遺物観察表(1)	29
表8	遺物観察表(2)	30
表9	遺物観察表(3)	31
表10	中世遺物総破片点数	32

## 写真図版目次

図版1	調査地点周辺空撮(上空・西から)	47	図版4	護岸木組2b沈下防止材差し込み状況(南から)	50
	調査地点周辺空撮(上空から)	47		護岸木組2f・g(東から)	50
	1面全景(上空から)	47		護岸木組3(北から)	50
図版2	護岸石組1(北から)	48	図版5	護岸石組2および木組4(北から)	51
	護岸木組1(北から)	48		同上(東から)	51
	護岸石組1(断面)と木組1(南から)	48		漆塗箱出土状況(北から)	51
図版3	護岸木組2(北から)	49	図版6	2面(北から)	52
	同上(南から)	49		出土遺物	52
	護岸木組2b(東から)	49			

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鶴岡八幡宮の南約1km、JR鎌倉駅の南東約800mの鎌倉市大町三丁目1826番9に位置する。大町を含む一帯は中世において名越と呼ばれ、その範囲は現在の大町一丁目～七丁目、材木座二・四・六丁目（材木座東側）にあたる<sup>(注1)</sup>。本地点は滑川の支流である逆川によって大きく開拓する名越谷<sup>(注2)</sup>の開口部にあたる。名越谷には「名越山王堂遺跡」（神奈川県遺跡台帳NO.234）<sup>(注3)</sup>、「恵恩寺跡」（同台帳NO.230）<sup>(注4)</sup>、「北条時政邸跡」（同台帳NO.247）<sup>(注5)</sup>が存在し、それ以外は「名越ヶ谷遺跡」（同台帳NO.231）としている。「名越ヶ谷遺跡」の南には「米町遺跡」（同台帳NO.235）がある。

## 【縄文時代】

縄文時代前期（約5000～6000年前）の海進時、本地点周辺を含む平地のほとんどは海中にあったと考えられている。縄文時代中期の海退後、砂質低湿地・砂丘間低地もしくは砂泥質平野となる<sup>(注6)</sup>。当該期の遺構の発見例は無いものの本地点周辺では縄文土器が数点出土している<sup>(注7)</sup>。

## 【弥生時代】

名越地区北方の大倉で中期後半（宮ノ台期）を主体とする集落が発見されているが、本地点周辺での当該期の遺構の発見例は無い。

## 【古墳時代】

前期の住居址や後期の古墳群が南の海浜地域で発見されているが、本地点周辺での当該期と確定できる遺構発見例はほとんど無い。

## 【奈良・平安時代】

8世紀前半には相模国鎌倉郡が成立していた。その範囲は現在の鎌倉市のほか、逗子市、横浜市・藤沢市の一部と推定されている。本地点を含む旧鎌倉地域一帯は鎌倉郷・荏原郷に推定され、本地点西方の今小路西遺跡（御成小学校）では鎌倉郡衙が発見され、本調査地点周辺の大町地域では当該期の遺構は少なからず発見されている<sup>(注8)</sup>。

平安後期、旧鎌倉内には生源寺、大倉観音堂（杉本寺）、荏柄天神社、御靈神社、甘闇神明社、鶴岡八幡宮（現在の由比若宮）、長善寺などが存在していた。

## 【鎌倉時代】

鎌倉時代初期、本地点北方の大倉に御所（幕府）が置かれる。これは縄文時代晚期以降、谷底平野・山麓平野が広がりはじめ、土地の乾燥化が進んでいたため、都市鎌倉がこの大倉の地から始まったという上本氏の指摘があり興味深い<sup>(注9)</sup>。鎌倉時代中期以降、御所は大倉の南西（若宮大路東）に置かれ、幕府関連の建物や北条氏邸宅や御家人邸宅等が集中する政治中枢域であったことは史実に明らかである<sup>(注10)</sup>。

名越には北条時政の名越浜御所や北条義時、名越（北条）氏の山荘が存在したが、実際の場所はわかつていない。

## 【南北朝・室町時代】

鎌倉幕府が滅亡してからも、淨明寺字公方屋敷辺りに御所（鎌倉府）が置かれ、鎌倉は関東の中心として繁栄していく。その後、永享の乱（永享十年（1438）頃から鎌倉が衰えはじめ、康正元年（1455）、鎌倉公方足利成氏が將軍足利義政の命を受けた駿河の守護今川範忠によって鎌倉を追われ、下総古河に移った。さらに、文明九年（1477）には関東管領上杉氏も上野に移ったので、関東における政治的中心としての機能が失われた。



図2 犯罪地點と周辺の道路

番号	神奈川県 遺跡台帳 番号	遺跡名	所在地	種別	時代	調査年度	文献
1	231	名越ヶ谷遺跡（本地点）	大町三丁目1826-9	都市	古代・中世	2000年	
2		名越ヶ谷遺跡	大町三丁目		中世	2000年	
3		名越ヶ谷遺跡	大町四丁目1880-6		古代・中世	1993年	a
4		名越ヶ谷遺跡	大町四丁目1888		中世	1998～1999年	b
5		名越ヶ谷遺跡	大町三丁目1217-1		中世	1993年	c
6		米町遺跡	大町二丁目2338-1		古代・中世	1997～1998年	d
7	245	米町遺跡	大町二丁目2411-2		中世	1988年	e
8		米町遺跡	大町二丁目2404		中世	1999年	f
9	231	名越ヶ谷遺跡	大町四丁目1736-2外		中世・近世	1996年	g
10		名越ヶ谷遺跡	大町三丁目1367-4		中世	1985年	h
11	234	名越山王堂遺跡	大町三丁目1340他		中世	1986～1987年	i

表1 周辺の遺跡一覧表

日蓮宗寺院である長勝寺境内では、15世紀後半から16世紀前半にかけての土壙墓が発見されている<sup>(20)</sup>。

#### 【江戸時代】

鎌倉は都市の面影が薄れ、鶴岡八幡宮、長谷寺、大仏、江ノ島等が物見遊山の対象とされ、多くの人々で賑わったらしい。16世紀末、旧鎌倉地域はほとんど幕府領となる。本地点周辺は大町村に組み込まれ<sup>(21)</sup>、その多くが幕府領や社寺領（鶴岡八幡宮、祇園社（八雲神社）、妙本寺、安養院、長勝寺等）であった。19世紀以降、幕府領は大名領となり、明治時代の廢藩置県まで続く。

#### 【明治時代以降】

明治時代前半までは近世とあまり状況は変わっていなかったようで、昭和初期頃まで田畠が広がっていたと考えられる<sup>(22)</sup>。第二次大戦時には鎌倉市内には多くの塹が掘られ、安養院裏などにも防空壕が残っている。

#### ○調査地点周辺の道について

本地点の南、東西に走る国道134号線は長谷から大町を経由して名越切通を抜け逗子方面に行く古代の道を踏襲していると言われる<sup>(23)</sup>。本地点西の南北道路は、国道134号線の交差点（通称「名越四角」）から駿遊堂の洞門を経由して六浦道と結ばれている<sup>(24)</sup>。調査地点南の道路（「妙法寺道」）や名越西谷から葛西谷に抜ける道<sup>(25)</sup>は、江戸時代末に描かれた「鶴岡八幡宮往還谷々小道分間図」にもみえる<sup>(26)</sup>。現在、「名越四角」から長勝寺北付近まで新道が通っているが、安国論寺前を経由する道が近世の道筋である。明治十五年（1882）に作成された迅速図を見ても同様である。

#### ○調査地点付近の寺社（廃寺含む）について

- ・山王堂 山王堂谷にあったらしい。宗旨、開創年、廃年は不明。『吾妻鏡』に建長四年（1252）、建長六年（1254）、弘長三年（1263）の記事があり、いずれも火災関連である。
- ・西門寺 『鶴岡八幡宮寺供僧次第』に名越花谷とあるだけで不明。
- ・木東寺（日足寺・無垢息寺）跡 花谷にあった。禅宗。開創年、廃年は不明。文安三年（1446）円覺寺正統院領である瓜谷山上の昭西堂跡の地に移転している。
- ・慈恩寺 花谷にあった。禅宗。山号は白華山。開山は桂堂士聞というが、鎌倉時代まで遡ると推定されている。足利直冬の菩提寺。『梅花無尽藏』には「脚倦不登慈恩塔婆之旧礎」とあり、文明末年（1485）にはすでに廃絶していたらしい。昭和二十九年（1954）に推定地の山裾から、丸く成形した泥岩で蓋をされた常滑窯大甕が発見されている（図2-a地点付近）<sup>(27)</sup>。
- ・善導寺 宗旨、開創年、廃年は不明である。『金沢文庫古文書』に正応元年（1288）、弘安十年（1287）の記事に見える。現在の安養院の場所と伝える。
- ・大宝寺（多福寺） 日蓮宗。多福山一乘院大宝寺と号する。『新編相模國風土記稿』に佐竹義盛が応永六年（1399）多福寺を建てたとある。嘉吉四年（1444）に妙法寺の日出が再興した。寛政八年（1796）の銘がある梵鐘には「名越佐竹屋鋪多福山大宝寺」とあり、境内には「佐竹屋鋪」という名が残る。
- ・妙法寺 日蓮宗。楞嚴山妙法寺と号する。開山を日蓮とし、延文二・正平十二年（1357）に草庵跡を妙法房日叡が妙法寺として中興開山したと伝える。境内奥の尾根上に護良親王墓所があるが、明治十一年（1878）理智光寺谷所在のものが陵墓と決定された。
- ・安国論寺 日蓮宗。妙法山安国論寺と号する。開山を日蓮とする。
- ※妙法寺、安国論寺、長勝寺はいずれも松葉ヶ谷の法難の旧跡と伝えるが、草庵の位置については実際のところ不明である<sup>(28)</sup>。
- その他に別願寺、安養院、八雲神社がある。

## ○名越谷に比定される邸宅について

- ・三善康信邸（名越文庫） 間注所執事三善康信（法名善信）の邸宅（文庫）が焼けたことが『吾妻鏡』承元二年（1208）一月十六日条に見える。この記事から「町大路の東の名越」に邸宅があったことがわかる。昭和九年（1934）、鎌倉史蹟めぐり会によって三善邸が推定されているが、根拠は不明である<sup>〔20〕</sup>。
- ・北条時政邸 『吾妻鏡』建永元（1206）年二月四日条に「（前略）特軍（源実朝）為覽雪。御出名越山辺於相州（北条時政）山庄。有和歌御會。（後略）」と見え、名越山の近くにあったと見える。が、この名越山は近代以降呼ばれる名越山と同一か不明である。『吾妻鏡』には「小門」、「惣門」、「廊廻脱」、「北面」、「侍所」と見え、大規模な邸宅であったことが想像される。糸迦堂の洞門の南東、神奈川県遺跡台帳で「北条時政邸跡」と指定されている地域が推定地である。昭和八年（1933）、鎌倉史蹟めぐり会によって推定されているが、積極的な証拠は無い<sup>〔21〕</sup>。

## ○本地点周辺の発掘調査

### 【名越ヶ谷遺跡】

- ・大町四丁目8-7地点（図2-3・文献a） 本調査地点の東、逆川の対岸に位置する。中世基盤層上面まで調査。東西に布壙状の溝と方形の柱穴が発見されている。年代は14世紀代と推定されている。
- ・大町四丁目1888地点（図2-4・文献b） 本調査地点の東方、妙法寺の南に位置する。中世基盤層上面まで調査。13世紀初頭から14世紀にかけて3時期にわたる遺構群が発見されている。
- ・大町三丁目1217-1地点（図2-5・文献c） 本調査地点の南西に位置する。中世面5面のうち3面が調査された。13世紀中頃から15世紀代にかけての遺構群が発見され、通路と堀を持つ屋敷地が15世紀代に区画変更されたことがわかった。
- ・大町四丁目1367番4地点（図2-9・文献d） 本調査地点の北東、赤門と呼ばれる谷開口部に位置する。中世基盤層まで中世面4面が確認され、4面では屋敷地の一角（掘立柱建物、板塀）が発見された。
- ・大町四丁目1736番2外地点（図2-10・文献e） 本調査地点の北東、名越谷のほぼ中央に位置する。中世面5面が調査されたが、深度規制により中世基盤層まで調査は行われていない。土塁をともなう屋敷地の一角が発見された。

### 【名越山堂遺跡】<sup>〔22〕</sup>

- ・大町三丁目1340他（図2-11・文献f） 本調査地点の北方、山王谷の奥に位置する。中世3期にわたる遺構群が確認され、I期遺構群から石積基壇上建物や池、III期遺構群からは「やぐら状遺構」が発見された。なお、掘削深度の関係から中世基盤層まで調査は行われていない。

### 【米町遺跡】

- ・大町二丁目2338-1地点（図2-6・文献g） 本調査地点の南西に位置する。古代、中世の遺構が発見された。古代においては溝5条、土坑等が発見されている。中世においては13世紀前半から14世紀中頃にかけての遺構群が発見され、寺院もしくは屋敷地と推定されている。
- ・大町二丁目2411-2地点（図2-7・文献h） 本調査地点の南方、逆川左岸に位置する。中世の遺構が発見され、14世紀中頃から15世紀にかけての遺構群が発見されている。
- ・大町二丁目2404地点（図2-8・文献i） 本調査地点の南方に位置する。狭小なトレンチ調査であったが、溝、掘立柱建物等の中世の遺構が発見されている。

### 【鎌倉城所在やぐら】

- ・大町三丁目1375地点（図2-12・文献j） 本調査地点の北東、赤門と呼ばれる谷の西山裾に位置する。築道部を持ち、天井が屋根型を呈する大型の「やぐら」1基が発見された。床面は後世の改変を受け

ていたが、床面を穿った土坑内からは14世紀中葉と推定されるかわらけが一括して出土した。

#### 註

1. 遠子市にも「名越」、「東名越」、「西名越」の小字名が残っている。
2. 名越谷の範囲は鎌倉市大町三～七丁目に該当する。
3. この遺跡が存在する地は山王谷と呼ばれ、名越山王堂の推定地である。  
入田整三「鎌倉名越の山王堂について」『鎌倉』第5巻・第1号 鎌倉文化研究会 1939年
4. 三浦勝男「鎌倉の地名考(八)~花ヶ谷について~」『鎌倉』52号 鎌倉文化研究会 1986年
5. 現在まで発掘調査は行われていないものの、昭和二十八年、衣張山山麓から青磁鉢が3点出土している。表土下に板石があり、その下に大型の鉢を伏せ、中に小型の鉢2個を重ねて伏せてあったという。  
『埋蔵文化財要覧』1 文化財保護委員会 1954年
6. 上本進二「鎌倉・遠子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡(遠子市No.100)』(仮称)医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所 2000年
7. 赤星直忠「1. 鑑文土器時代の鎌倉」『鎌倉市史』考古編 吉川弘文館 1959年
8. これには調査掘削深度の関係もある。米町遺跡(大町二丁目929番地)では奈良～平安時代前期の堅穴住居が6軒発見されており、土師器、須恵器のほか古代瓦が出土している。米町遺跡(大町二丁目2338-1番地)では溝5条が発見されている。
  - a. 「米町遺跡発掘調査概要」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』31 神奈川県社会教育部文化財保護課 1989年
  - b. 宮田真ほか「米町遺跡発掘調査報告」米町遺跡発掘調査団 1999年
9. 註6と同じ。
10. 鎌倉時代における北条氏邸宅の変遷については貴連人氏、秋山哲雄氏の論文に詳しい。
  - a. 貴連人「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号 神奈川県立金沢文庫 1971年
  - b. 秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史學雑誌』第106編第9号 東京大学史學會 1997年
11. 20基の土壙墓(うち1基は火葬)が発見されおり、被葬者は庶民層と推定されている。  
大輪龍彦ほか『長勝寺遺跡-中世鎌倉の民衆生活を探る-』長勝寺遺跡発掘調査団編 かまくら春秋社 1978年
12. 大町村は現在の大町(一～七丁目)、御成町、笹目町、由比ガ浜一丁目と二丁目の一部、材木座一丁目の一部、佐助一丁目と二丁目の一部にあたる。字は名越、名越坂、名越大谷、黄金矢塚、糸迦堂口、北側、南側、西町、麻屋敷、久保、塔ノ辻、笹目、佐助ヶ谷に分けられ、本地点は名越に含まれる。
13. 大森金五郎「かまくら(再版)」(村田書店 1976年)のP36に「名越谷全景」と題した写真が掲載されており、田園風景が広がっているのがわかる。
14. この道を中世における大町大路と推定する説と、夷堂橋から材木座までの道を大町大路とする説がある。後者の道筋に関して、高柳氏は筋替橋から九品寺辺りまでを小町大路と推測している。これに対し、阿部氏、田代氏は小町大路と大町大路は連続した南北路で夷堂橋より北を小町大路、南を大町大路と推測している。吉田氏が作成した大町字名略図を見ると、夷堂橋から八雲神社付近にかけての両側の小字名は「町小路」となっており、道に「大町大路」と記している。
  - a. 阿部正道『鎌倉の古道』 鎌倉国宝館・鎌倉市教育委員会 1958年
  - b. 高柳光寿「第11章9. 小町大路・小坪路・横大路」『鎌倉市史』総説編 吉川弘文館 1959年
  - c. 吉田友一『大町名越ヶ谷もネエ話』(私家版) 1993年
  - d. 田代都夫「大町大路と小町大路-中世都市の中の「町」と「路」-」『湘南考古学同好会報』73湘南考古学同好会 1996年
15. この道が作られる前には、杉本寺前から犬掛谷を通り名越谷に出る道があったことが、『源平盛衰記』(卷二十一「小坪坂合戦事」)、『延慶本・平家物語』の記事からわかる。なお、山村氏は犬懸谷から糸迦堂洞門の東の谷に抜けるルートを想定している。
  - a. 石井進「中世六浦の歴史」『三浦古文化』第40号 三浦古文化研究会 1986年

- b. 山村亜希「中世鎌倉の都市空間構造」『史林』八十卷二号 1997年
16. トンネルは昭和初期に作られた。註13文献c参照。
17. 『鎌倉の古絵図Ⅲ』 鎌倉国宝館・鎌倉市教育委員会 1995年
18. 中には土葬人骨、宋錢6枚と硯が入っていた。常滑窯大甕は、口縁部の形態を見ると中野編年9型式（1400～1450年）と考えられる。
- 八幡義生「足利直冬開基の鎌倉花ヶ谷慈恩寺と開山桂堂上人ゆかりの大甕の研究」『国寶史蹟』第39号 国寶史蹟研究会 1965年
19. 妙法寺文書では松葉谷草庵（本國寺）は建長五年（1253）に創られ、貞和元年・興國六年（1345）四世日静が京都六条に移したとある。宝永年間（1704～1710）頃から松葉谷草庵の旧跡をめぐって妙法寺と長勝寺が争い、天明七年（1787）妙法寺が幕府から認められている。だが、寛政四年（1792）妙法寺、長勝寺とも松葉谷草庵の旧跡と呼称することを認められた。のちに安国論寺が加わり、現在まで決着していない。
- 立正大学院史料研究会「妙法寺文書解題」『日蓮宗寺院史料目録-松葉ヶ谷・妙法寺文書-』 妙法寺 1971年
20. 『鎌倉-史蹟めぐり会記録-』（鎌倉文化研究会 1972年）第18回の項参照。  
この頃から「伝三善邸址」に決まってしまったようである。
21. 註10aで貴氏が述べているように、「新編鎌倉志」以降の近世の諸書には邸の場所を記述したものはない。註20文献第17回の項に「駿迎堂トンネルを降り絹張山下に到り、北条時政名越山荘と思われる屋敷址を見出す。」との記述があり、この頃から「伝北条時政邸址」に決まってしまったようである。
22. 現在まで二回（1935年、1986～87年）発掘調査が行われている。  
「第29回 名越山王堂跡発掘・志一稿荷」『鎌倉-史蹟めぐり会記録-』 鎌倉文化研究会 1972年  
齋木秀雄『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団 1990年

#### 参考文献

- 『吾妻鏡』新訂増補国史大系 吉川弘文館 1933年  
貴達人・川副武胤編『鎌倉魔寺事典』有隣堂 1980年  
『日本歴史地名大系14 神奈川県の地名』平凡社 1984年

#### 一覧表出典

- a. 田代郁夫ほか「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（第1分冊） 鎌倉市教育委員会 1995年  
b. 渋見一夫ほか「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第2分冊） 鎌倉市教育委員会 2000年  
c. 萩川英政「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11（第1分冊） 鎌倉市教育委員会 1995年  
d. 註8b文献  
e. 福田誠「米町遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5 鎌倉市教育委員会 1989年  
f. 福田誠「米町遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16（第2分冊） 鎌倉市教育委員会 2000年  
g. 宗臺富貴子ほか「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14（第1分冊） 鎌倉市教育委員会 1998年  
h. 玉林美男「名越ヶ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2 鎌倉市教育委員会 1986年  
i. 齋木秀雄『名越・山王堂跡発掘調査報告書』名越・山王堂遺跡発掘調査団 1999年  
j. 鈴木庸一郎ほか『鎌倉城（大町3丁目）所在やぐら』（財）かながわ考古学財团 2000年

## 第2章 調査の経過

平成12年5月に鎌倉市教育委員会による試掘調査の後、平成12年8月1日から発掘調査が行われた。調査区は掘削発生土の場内処理の関係上、一部狭めた。調査は試掘調査の結果から、地表下約140cmまでを重機で除去したのち、ベルトコンベアを使用せず、すべて人力で行った。調査面積は約64m<sup>2</sup>。以下、調査の過程を述べる。

8月1日	表土掘削	30日	護岸木組2撮影
3日	調査開始	9月1日	護岸木組3検出作業
9日	護岸泥岩検出作業	6日	1面下遺構検出作業
11日	グリッド設定	9日	中世基盤層上面遺構(護岸木組4) 検出作業
14日	泥岩石積(護岸)平面実測	12日	中世基盤層上面遺構平面実測
17日	ラジコンヘリによる1面全景写真撮影	14日	中世基盤層上面遺構全景写真撮影
19日	護岸木組1検出作業	15日	調査区壁土層堆積図作成
22日	護岸木組1撮影、平面実測	19日	古代層掘り上げ
23日	護岸木組2検出作業	21日	撤収
29日	護岸木組2平面実測		

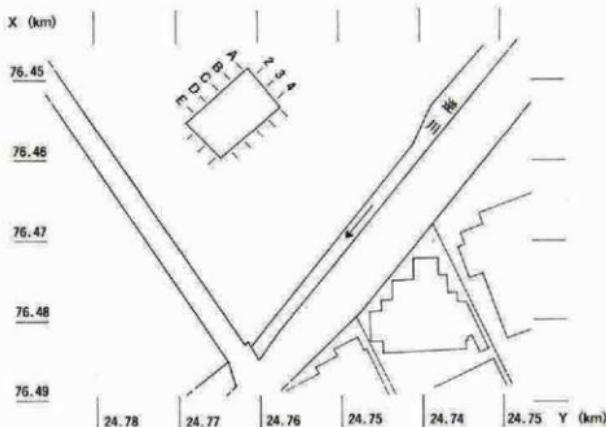


図3 グリッド設定図

## 第3章 発見された遺構と遺物

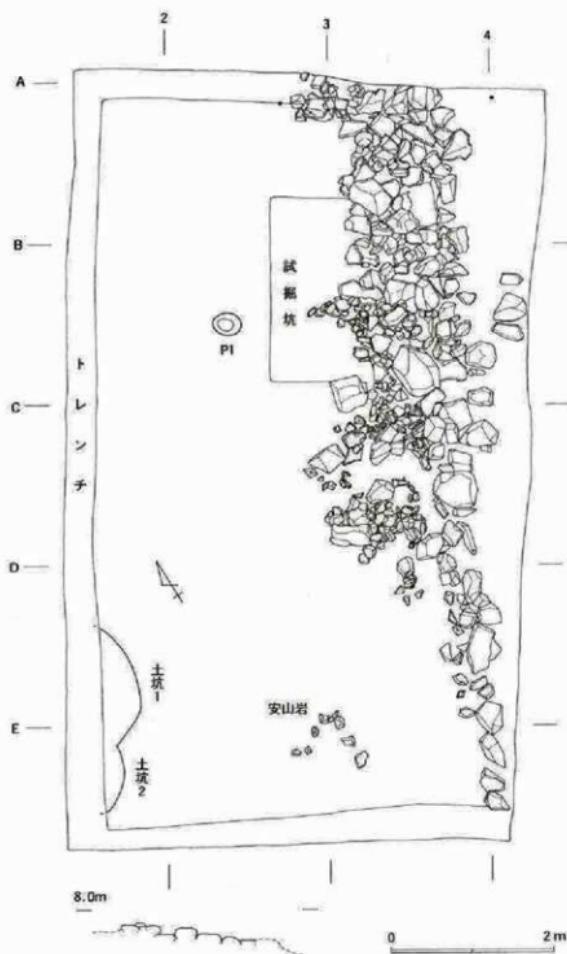


図4 1面遺構図（河川護岸石積1）

### 1面上出土遺物（図5-1～6）

1～3はかわらけで、1は手づくね成形。2・3はロクロ成形。4・5は常滑窯I類鉢、6は「すり常滑」で内外面および割れ口に一部が磨滅している。遺物は新旧混じっており、1面の時期を判定するには難

### 第1節 1面の遺構

表土を除去すると、西から東に傾斜していた。調査区西は地表下約60cm、東で地表下約120cmを測る。1面西側は上面を削平されており、発見された遺構は河川護岸石積、土坑2基、柱穴1口のみである。なお、河川護岸石積は第2節で触ることにする。

#### 土坑1（図4）

1-D・Eグリッドに位置する。土坑2を切る。南北246cm以上を測る。調査区壁際のため全容は不明である。

遺物はかわらけ20点（手づくね2、ロクロ9、成形不明9）、常滑窯1点、平瓦（凸面綱目）1点、チョウセンハマグリ1点、獸骨2点が出土しているが、図示し得るものはない。

#### 土坑2（図4）

1-Eグリッドに位置する。土坑1に切られる。調査区壁際のため全容は不明である。遺物はかわらけ11点（手づくね2、ロクロ6、成形不明3）が出土しているが、図示し得るものはない。

しい。

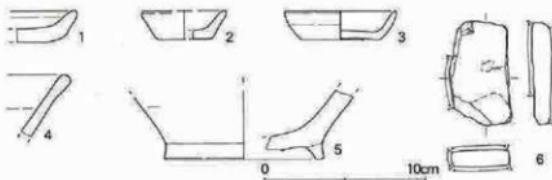


図5 1面出土遺物

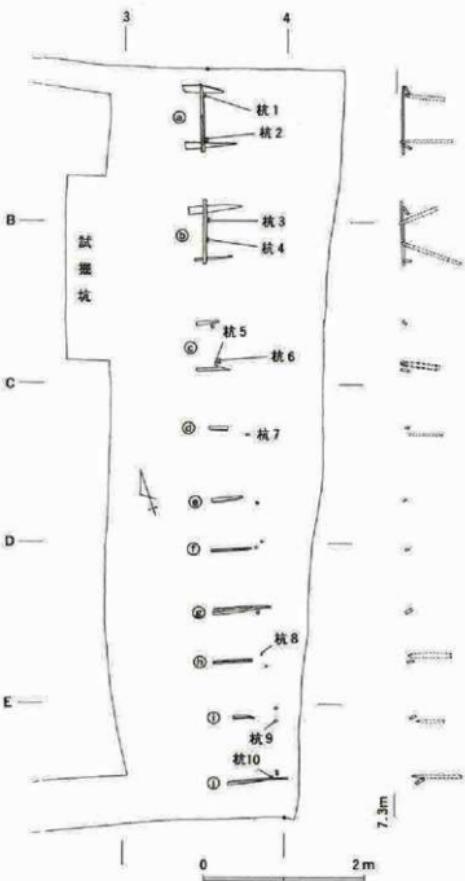


図6 河川護岸木組1

## 第2節 河川護岸関連遺構

### 護岸石積1(図4)

調査区東半分を占める。主軸方位はN-24°-E前後。石積は西から東にかけて傾斜し、東西高低差は約40cmを測る。石積の東面はほぼ整えられている。石積東面の南北高低差は約15cmでほとんど差は無いと言える。石材は安山岩のものが1点含まれるが、それ以外は周辺の山で採れる泥岩である。大きさは10cm前後のものから70・大の大型のものまであった。

この石積は逆川の旧護岸に使われたものと考えられる。なお、この石積の西には破碎泥岩を使用した地業部分が見受けられたが、さらにその西側は削平されていた。

図11-7~11はかわらけで、7はコースター状をした手づくね成形、8~11はロクロ成形。12・13は常滑窯製品で、12は・類鉢、13は甕。

### 護岸木組1(図6・表2)

護岸石積1を除くと、木組1を発見した。主軸方位はN-18°-E前後。地下水位より高い位置にあるためか、東もしくは南に行くにしたがって部材の腐食が進んでいた。残存していた部材の

木組 1	部材	長さ	高さ	厚さ (mm)	欠込み 幅	欠込み 深さ	備考	木組 1		長さ	高さ	厚さ (mm)	欠込み 幅	欠込み 深さ	備考
								部材	長さ						
a	東西(北)	147	13	3	—	—	c	66	—	2.8×5.2	—	—	—	—	—
	東西(南)	150	11.8	3	—	—	d	東西	120	[14]	3.2	—	—	—	—
b	南北	68	2	—	—	—	e	67	41	—	3.5×2.1	—	—	—	—
	東西	10.3	—	3.1×6.0	—	—	f	東西	[40]	[13.5]	1.9	—	—	—	—
	南北	64.4	—	3.7×3.9	—	—	g	東西	[50]	[14]	2	—	—	—	—
	東西(北)	267	18	3	—	—	h	東西	[40]	[14.1]	2.3	—	—	—	—
	東西(南)	140	9	3	—	—	i	東西	[22]	[15]	2.1	—	—	—	—
b	南北	30	3	3	—	—	j	南北	32.1	—	2.7×6.1	—	—	—	—
	東西	50	—	3.0×4.1	—	—	k	東西	[22]	[16]	2.7	—	—	—	—
	南北	76	—	3.8×6.8	—	—	l	南北	34.6	—	4.4×3.2	—	—	—	—
	東西(北)	130	[6]	2.4	—	—	m	南北	[50]	[11]	3	—	—	—	—
	東西(南)	132	[10]	2.8	—	—	n	南北	[68]	[11]	3	—	—	—	—
	南北	13.5	—	3.1×5.6	—	—	o	南北	[68]	[11]	3	—	—	—	—

表2は表  
有

表2 本組1部材計測表

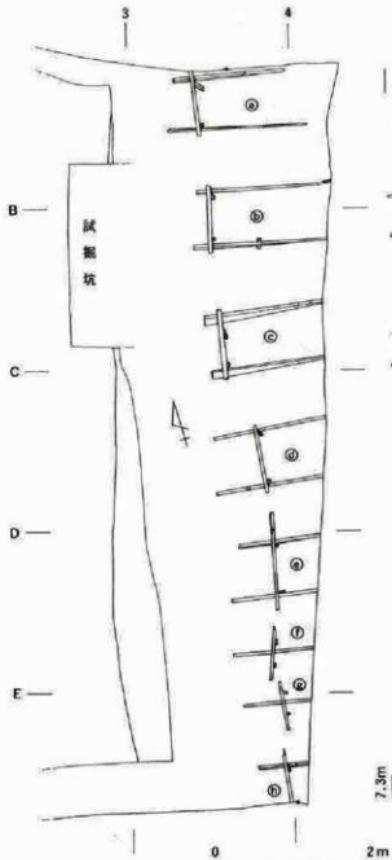


図7 河川護岸木組2

表面も腐食が進んでいるものが多く、工具による加工痕の確認はできなかった。

築造時の構造がわかるのはa~eである(cは南北方向の部材がないが、おそらく同構造と思われる)。河川流路に向かって直行するように二枚の横板(控え材)を据え、この板に切れ込みを設け、これに直交する板を欠合、内側に杭を2ヶ所打っているというものである(図10のタイプI)。なお、d~jの構造は不明である。

図11~14~16はかわらけで、14~15は手づくね成形、16はロクロ成形。17は碗型の土器。古代の可能性もあり。

#### 護岸木組2(図7・表3)

木組1を除去すると10cm下で木組2を見た。主軸方位はN-13°-E前後で、木組1とほぼ同じである。

部材の残りは比較的良好で、工具による加工痕が顕著に残っていた。部材の構造には二つのタイプが認められた。前述のタイプIと、河川流路に向かって直交するよう1枚の横板(控え材)を据え、板を渡し、杭を2ヶ所打っているタイプIIである(なお、両タイプとも東西の板材を西側に傾かせている)。a~e、hがタイプI、f~gがタイプIIとなる。

構造とは別に、南北方向の部材の位置を見ると、a~cとd~hとで違うことがわか

木組 2	部材	長さ	高さ	厚さ (cm)	次込み 幅	次込み 深さ	備考	木組 2	部材	長さ	高さ	厚さ (cm)	次込み 幅	次込み 深さ	備考
a	東面 (北)	119	12	3.4	4.5	3.8		b	東面 (北)	41	—	4.5×4	—	—	
a	東面 (南)	112	11.6	2.5	5.3	4.9		b	東面 (南)	36	—	3.5×5	—	—	
a	南北	31	—	—	—	—		c	東西 (北)	102	19	3.2	—	—	
a	杭 (E)	37	—	4.0	5.0	—		c	東西 (南)	110	12	3.9	—	—	
a	杭 (G)	32	—	2.5	5.0	—		d	南北	128.6	5.2	3.8	—	—	
a	南北 (E)	122	12.4	3	4	4.2		d	杭 (E)	66	—	3.5×3	—	—	
a	東西 (E)	116	12.1	3	4.9	2.5		d	杭 (南)	47	—	3×3	—	—	
b	南北	91.8	3.8	5.5	—	—		e	東西	160	18.9	2.0	2.2	3.6	
b	杭 (E)	70	—	4.5×3.5	—	—		e	南北	67.2	2.8	4	—	—	軸用材
b	杭 (G)	63	—	2.0×6.0	—	—		e	杭 (E)	42	—	3.8×2	—	—	
b	杭 (G)	52	—	3.0×5.0	—	—		e	杭 (G)	43.3	—	3.1×3.5	—	—	
b	南北 (E)	116	13.2	3.2	8	2		f	東西	173	11.8	3	3.4	3	
b	東西 (E)	110	12	3.2	3.1	3.5		f	南北	63.5	2.4	3	—	—	軸用材
b	南北	65.7	2.3	4	—	—		f	杭 (E)	65.0	—	2.4×4.1	—	—	
b	杭 (E)	60	—	4.0×3	—	—		f	杭 (G)	63	—	3.5×3.9	—	—	
b	杭 (G)	72	—	3.0×5.0	—	—		f	東西 (E)	160	11.5	3	11.2	3.2	
b	南北 (E)	110	10.9	3.7	1.6	2.5		f	南北	66	4.2	3.2	—	—	
c	東西 (E)	114	10	3.2	4.1	4	次込み幅 7mmあり	f	南北	60	—	3.5×4.9	—	—	
c	南北	91	3.0	6.7	—	—		f	杭 (E)	59	—	3.5×4.9	—	—	

表3 木組2部材計測表

る。だが、木組2が含まれる土層は単一層と認められ、分けられなかった。これらのことから、同時期に施工したのは間違いないと思われるが、これが施工者の違いからくるものなのかは不明と言わざるをえない。

木組2が包含されていた土の中からは、多量の遺物とともに、部材の切端が多く出土した（コンテナ箱1箱分（内寸54×34×15cm））。これは、現地で板材の寸法調整を行い、端材を廃棄したためであろう。なお、f・gの南北方向の部材は杭に使用したものを転用したと考えられ、片端は細く削られている。

控え材は計測のため引き抜いたが、いずれも先端（東端）が腐食しており、実際の長さは不明である。

図11-18～26はかわらけで、18～25は手づくね成形、26はロクロ成形。27は常滑窯窓の口縁部。28は凸面縄目叩きの平瓦。29は曲物の底板と考えられる。30は肩骨。31は用途不明。中央に四角い孔があり、木槌状を呈するが、打痕はない。一部に格子状の刻みあり。

#### 護岸木組3（図8・表4）

4ラインで木組3を発見したが、調査区東際で発見されたため、裏込め部にあたる木組西側を先に掘り上げた。木組は調査区内において4枚の横板（土留め）と2つの角柱（杭）を発見した。この板を留める角柱が横板bとcとの縫ぎ目、横板cの中間にあたりに配されていた。角柱eとfとの芯距離は110cmを測る。なお、他の縫ぎ目のところに杭を抜いた痕跡は湧水等のため確認できなかった。

これとは別に3-Eグリッド付近で、頂部が焼けた角柱gを発見した。この角柱の北では、片面が炭化した薄い板（厚さ0.5cm前後）が木組3とほぼ平行に倒れている状態で発見された。なお、付近から出土した木製品や木片にも一部炭化しているものが認められた。

#### 護岸木組3 東出土遺物（図12-32～42）

32～38はかわらけで、32・35～38は手づくね成形、33・34はロクロ成形。39・40は常滑窯窓。41は瓦質鉢。全体的に同一工具によるハケ目調整が行われている。体部外面は縦位、体部内面は横位。体部内面にはハケ目調整工具（5条の平行沈線）によって蛇行した文様を描き出している。なお、口縁内外面に黒漆が付着している。42は釘。

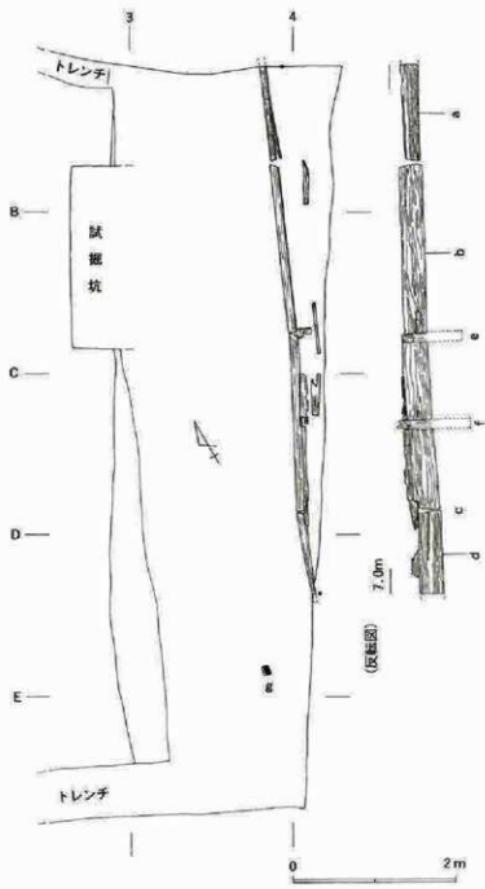


図8 河川護岸木組3

木組3	高さ	高さ	厚さ(幅)	次込み 板	次込み 板	備考
a [110]	20.1	1.4	—	—	—	
b 297.5	26	2	—	—	—	
c 218.1	31.2	2.1	—	—	—	
d [102]	26	2	—	—	—	
e 74.3	—	12.1×16.5	—	—	—	
f 98.3	—	11.7×9.4	—	—	—	

括弧は  
我存

表4 木組3部材計測表

#### 護岸木組3西出土遺物 (図13-43~51)

43~48はかわらけで43・47・48は手づくね成形、44~48はロクロ成形。49はロクロ成形のかわらけ質仏花瓶の底部と考えられる。50は折敷。51は羽子板。

#### 護岸木組3下出土遺物 (図13-52~72、図14-73~89、図15-90~105)

52~72はかわらけ。52~56、64~68は手づくね成形。57~63、69~72はロクロ成形。手づくね成形は厚手のものが大半を占めるが、口縁の面取りを行っているものは少ない。ロクロ成形は口縁が外反するものがほとんどである。73は青磁劃花文碗の口縁部。74は猩美窯鉢の口縁部。75~77は常滑窯製品で、75・76は甕、77はI類鉢、78はII類鉢。79は瓦器碗。80は瓦器質黒縁碗。81・82は瓦で、81は平瓦、82は丸瓦。83は石鍋。84はチョウセシハマグリに黒漆が付着している<sup>(11)</sup>。内面にはかなりの厚みで付着しており、パレットのような使用用途が考えられる。なお、外面にも一部黒漆が付着している。85は刀子。86・87は刀子の柄で、穿孔は無い。88は扇骨。89は連歛下駄。90~93は草履の芯。94は用途不明である。95は曲物で、ほぼ完全な形で出土した。96は黒漆塗りの木箱で、底板と側板が1面残る。どのようなものを納めたのかは不明である。97は用途不明の棒状製品。箸のように両端を尖らせている。98~101は箸。102は折敷。103は笠塔婆。上部を圭頭状に作りだし、梵字のキリーク(阿弥陀)を墨書きした痕跡がある。キリークの下にも墨書きがあるようにも見えるが、不明である。104は棒状の木製品で、箸のように両端を尖らせている。105はヘラ状木製品。

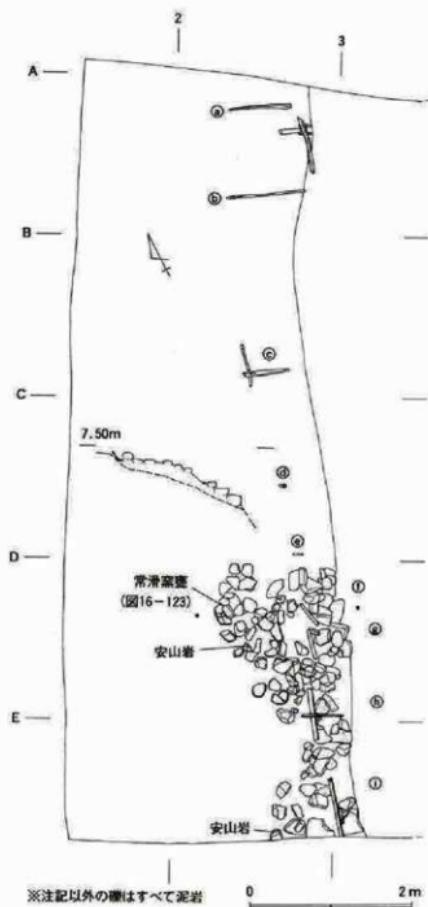


図9 河川護岸石積2・木組4

部材の軸線等から、大まかにa~i(木組4A)とj(木組4B)とに二分できるが、肉眼での堆積土の分層は困難であったため新旧は不明である。そこで、これらを木組4として一括で提示する。地下水位の関係からか北側の木組の遺存状況は良くなかった。f~iは後述する護岸石積2の泥岩下に潜り込むものがあることから、木組4と護岸2は同時期に造成されたものと考えられる。

図16-106~117はかわらけ。106~108、110~115は手づくね成形。109、116、117はロクロ成形。手づくね成形のものは、厚手で口縁端部を面取りしてあるものがほとんどである。118は常滑窯I類鉢。

#### 護岸石積2(図9)

Dライン以南で発見された。中世基盤層(白色砂)の上に貝殻粒を多く混じる暗褐色土があり、その土の中に泥岩塊が疎に配されていた。石積は安山岩2個が入っているほかはすべて泥岩である。泥岩は貝(ボーリングシェル)によって穿孔されたものが半数を占めている。付近の海岸から運び込んだのであろうか。岩塊は20~30cm大のものがほとんどである。前述のとおり、木組4と同時期に造成したと考えられる。

図16-119~122はかわらけ。119・120はロクロ成形の小型かわらけ。121・122は手づくね成形の大型かわらけ。123は常滑窯窓の底部。図9に見るとおり、泥岩(石

木組4	部材	長さ	高さ	幅	欠込み幅	欠込み深さ	備考	木組4	部材	長さ	高さ	幅	欠込み幅	欠込み深さ	備考
a 東西	[56]	7.9	2.3	—	—	—		h 東西	51	2.5	11.5	—	—	—	
b 東西	[93.6]	12.2	1.5	—	—	—		杭(北)	41	—	2.3×5.5	—	—	—	
c 南北	[62.7]	4	1.5	—	—	—		杭(南)	34	—	2.9×3.8	—	—	—	
d 縦	[57.8]	2	7.5	—	—	—		南北	[85.7]	3.6	4	—	—	—	
e 縦	19	—	2×2	—	—	—	i 杭(北)	48.7	—	3.4×4.5	—	—	—		
f 南北	34.6	—	1.5×1.6	—	—	—	杭(南)	45	—	5.4×2	—	—	—		
g 南北	34.3	2.1	4.5	—	—	—	南北	[73]	2.2	7	—	—	—		
h 縦	36.9	3	5.4	—	—	—	j 東西	[34]	4.1	12	—	—	—		
h 南北	40.3	—	4.5×2.6	—	—	—	杭(北)	51	—	7.5×3.5	—	—	—		
h	南北	61.5	2.7	5.8	3.8	6.2	杭(南)	59.6	—	2.9×6.3	—	—	—	新規は残存	

表5 木組4部材計測表

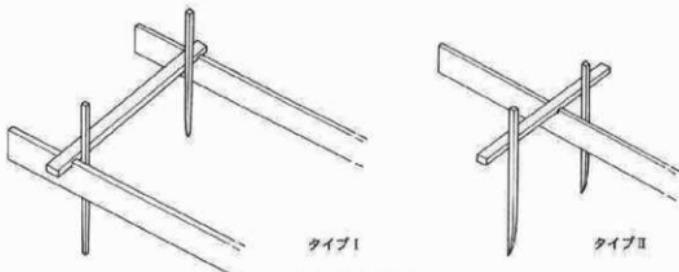


図10 木組模式図

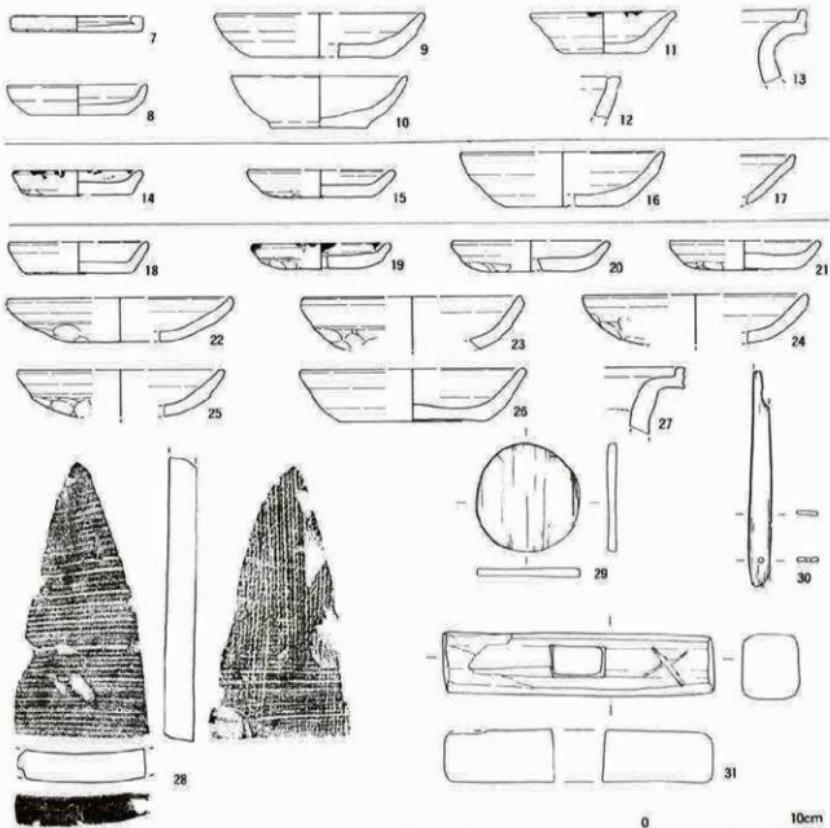


図11 河川縁岸層出土遺物 (1)

0 10cm

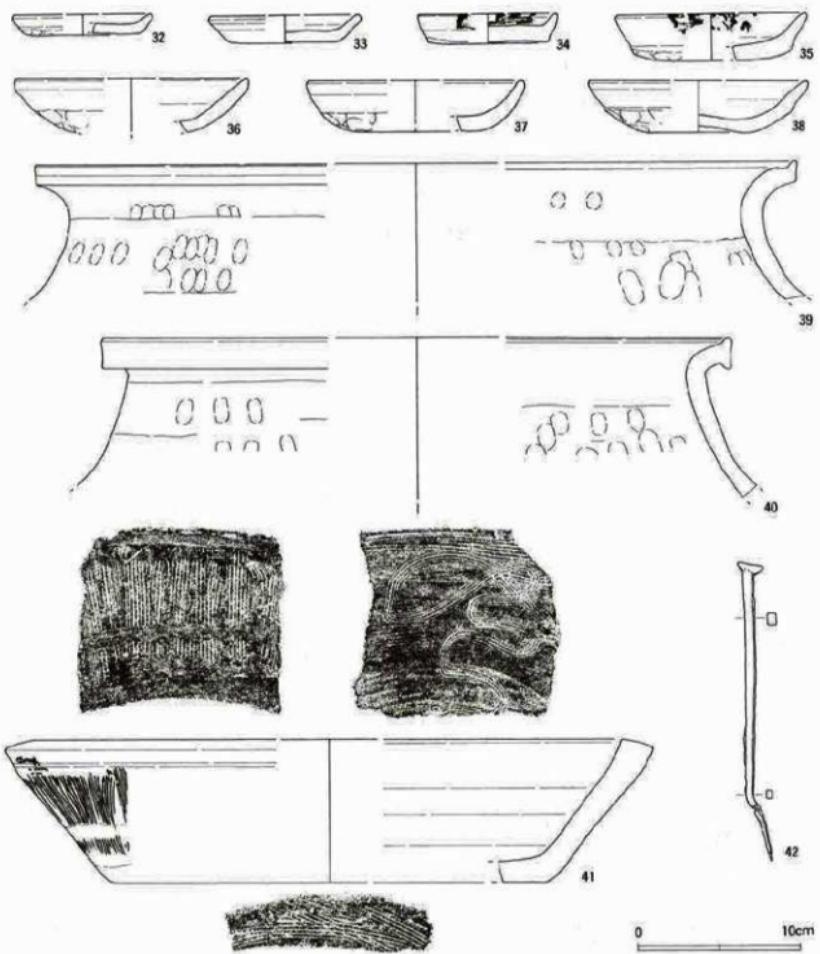


図12 河川護岸層出土遺物（2）

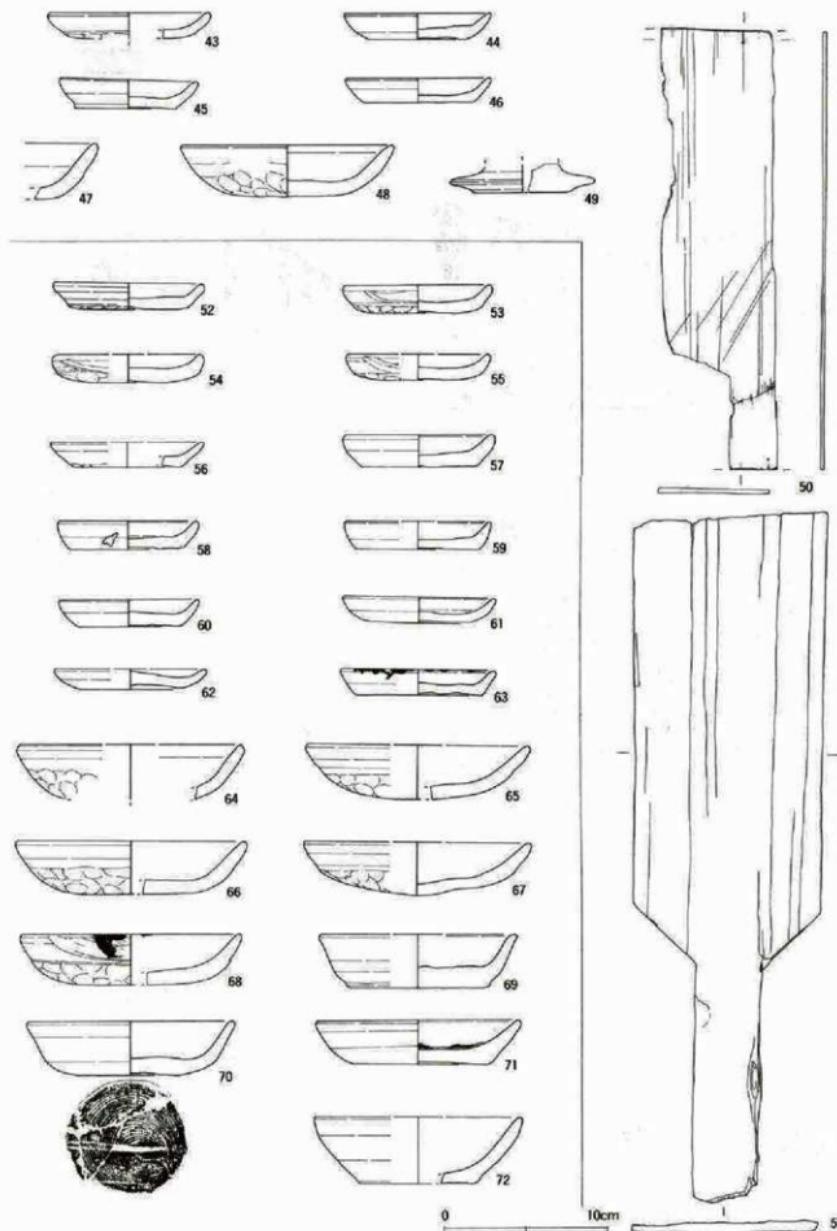


圖13 河川護岸層出土遺物（3）

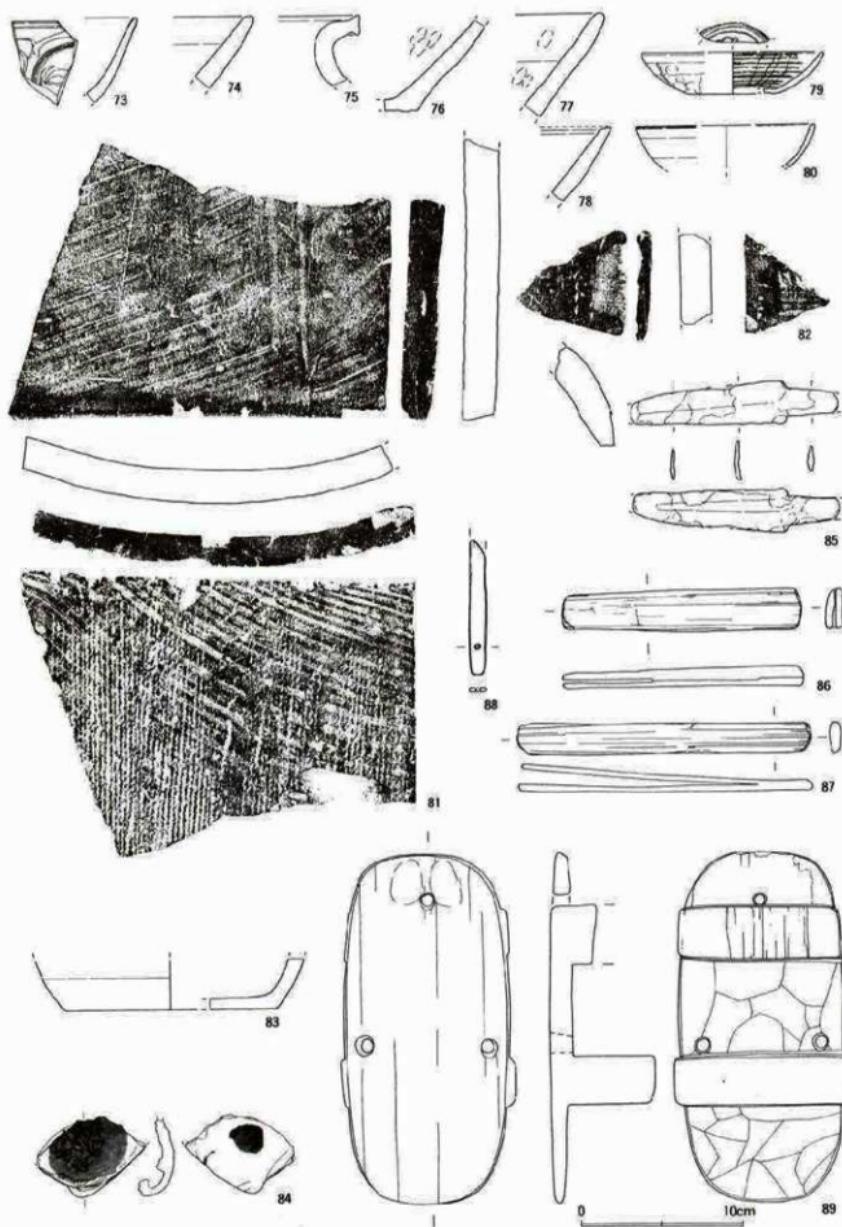


圖14 河川護岸層出土遺物（4）

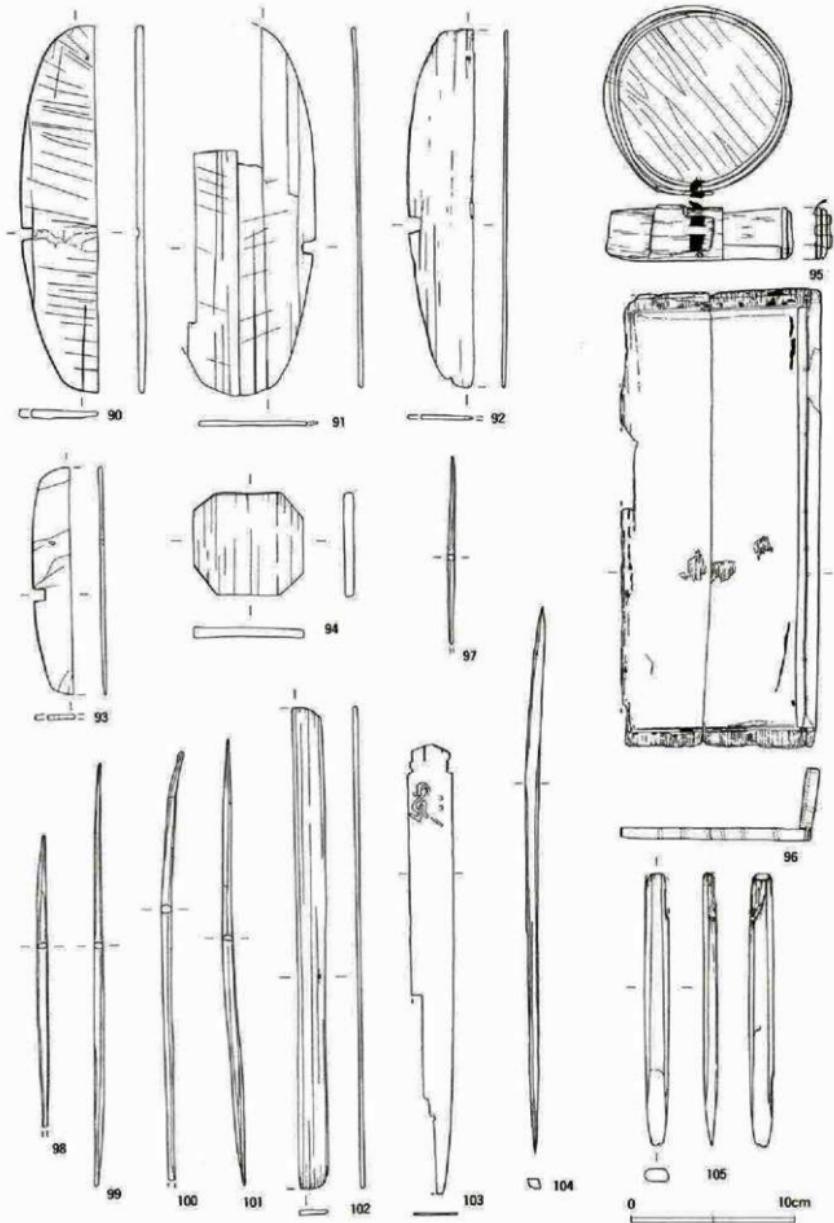


图15 河川護岸層出土遺物（5）

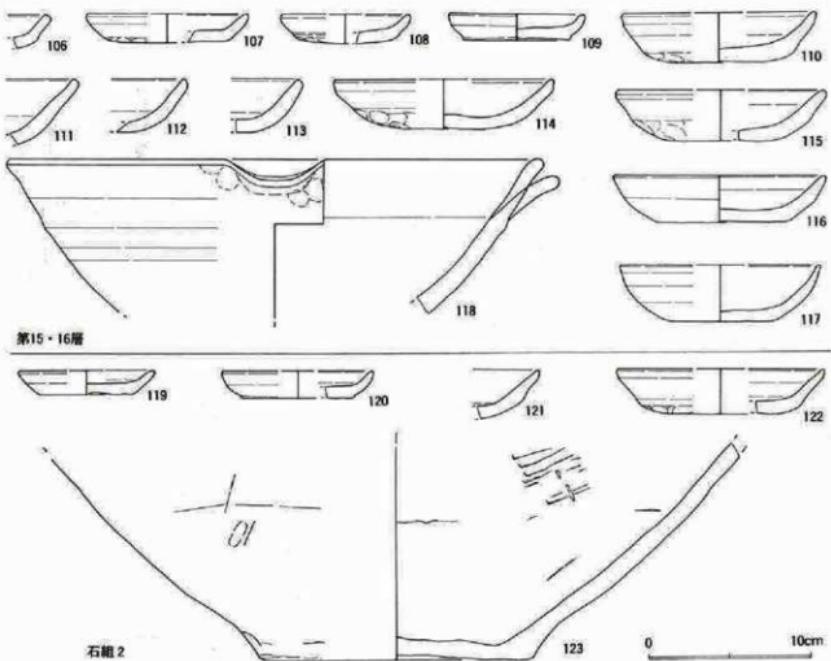


図16 河川護岸層出土遺物（6）

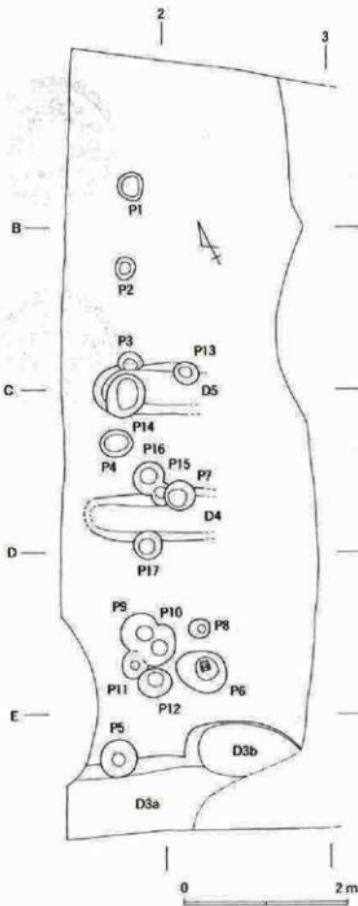


図17 2面遺構図

積2) の下に据えられていた。

調査区東半分は掘削深度規制のため掘り下げることができなかった。調査区北東角をボーリング棒(1m)で突き刺すと泥岩のような固い物に当たり、調査区南東(地表下230cm)ではボーリング棒で突き刺しても脆弱な土層が堆積しているようで止まらなかった。中世基盤層(白色砂?)まではかなり深いようで、逆川の流路にあたるかもしれない。

### 第3節 2面の遺構

中世基盤層上面で発見された遺構群を2面として提示する(図17)。土坑4基と柱穴17口が発見された。遺構の個別の計測値は表6にまとめて提示した。土坑4・5は東西に長く、同一の性格をもつものと考えられる。覆土には木の痕跡は無かったが、護岸木組に関係があるかもしれない。柱穴は同一の建物もしくは列を見出すことはできなかった。

遺構内から遺物が微細な破片がわずかに出土している。

130は土坑4出土の手づくね成形のかわらけ。131はP12出土の手づくね成形のかわらけ。132はP7出土の銅錢で、北宋1038年初鋸の皇宋通寶。

#### 2面上出土遺物(図18-133~141)

133~141は手づくね成形のかわらけ。137・138は青磁で、137は劃花文碗、138は皿。139は涅美窯窓の口縁部。140は黒縁碗。141は銅錢で、北宋1079年初鋸の元豐通寶。

単位はcm	最大径=上場最大径 長径=上場長軸長さ 短径=上場短軸長さ 深さ=確認面からの深さ				長径=上場長軸長さ 短径=上場短軸長さ 深さ=確認面からの深さ							
	2面				1面							
	P1	32	22		P10	54	17		D1	125以上	—	80以上
	P2	28	19		P11	32?	13		D2	—	—	—
2面	P3	30?	29		P12	42	12		D3a	170以上	90以上	16
	P4	38	7		P13	28	7		D3b	140以上	50以上	43
	P5	46	41		P14	54	37		D4	164以上	64	26
	P6	62	30	有	P15	28	24		D5	136以上	62	28
	P7	36	23		P16	38	21					
	P8	24	12		P17	34	52					
	P9	48	29									

表6 柱穴・土坑計測表

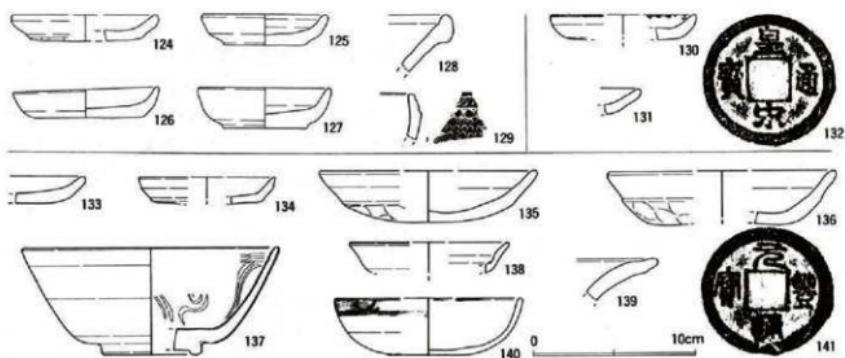


図18 2面出土遺物

#### 第4節 中世以前

「落ち込み」(図19)

調査区北西の1・2-A・Bグリッドに位置する。検討の結果、明確な遺構とは捉えず、「落ち込み」という名称を付した。覆土は黄褐色砂で黒色の粘土ブロックが入る。遺物は黄褐色砂中にも含まれるが、黒色の粘土ブロック中に多くの遺物が混入していた。出土した遺物のほとんどは磨滅していなかった。

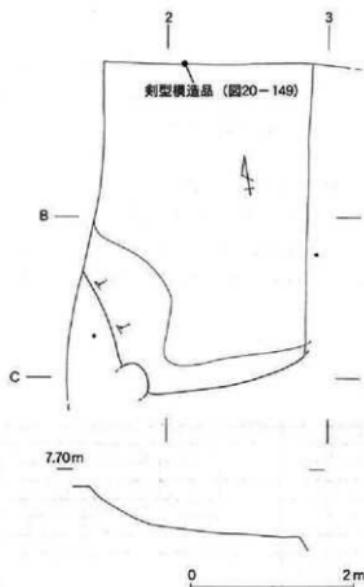


図19 中世以前「落ち込み」

#### 中世以前「落ち込み」出土遺物 (図20)

146・147は土師器の壺。147は口縁内側に赤彩が施されている。142～145は縄文土器の壺。143は二ヶ所に抉り込みがあり、土器片縫と考えられる。144は外面に刺突文が施されている。142～144は加曾利E式（縄文時代中期後葉）である。148は形状から石器として扱えた。部分的に磨滅している。149は剣型模造品。滑石製で一ヶ所穿孔がある。鎌倉市内では台山（藤原治）遺跡、米町遺跡（大町二丁目2338-1地点）で出土している<sup>(32)</sup>。150は砥石とした。磨滅した2面が残存しているが、擦痕がほとんど無いため砥石として使用されたかは不明である。

#### 第5節 その他

中世層出土の遺物

151・152は縄文土器の壺。153は土師器壺で、内外面全体に赤彩が施されている。154は須恵器の壺の底部で、高台は貼付である。焼成は軟質で、赤橙色を呈する。

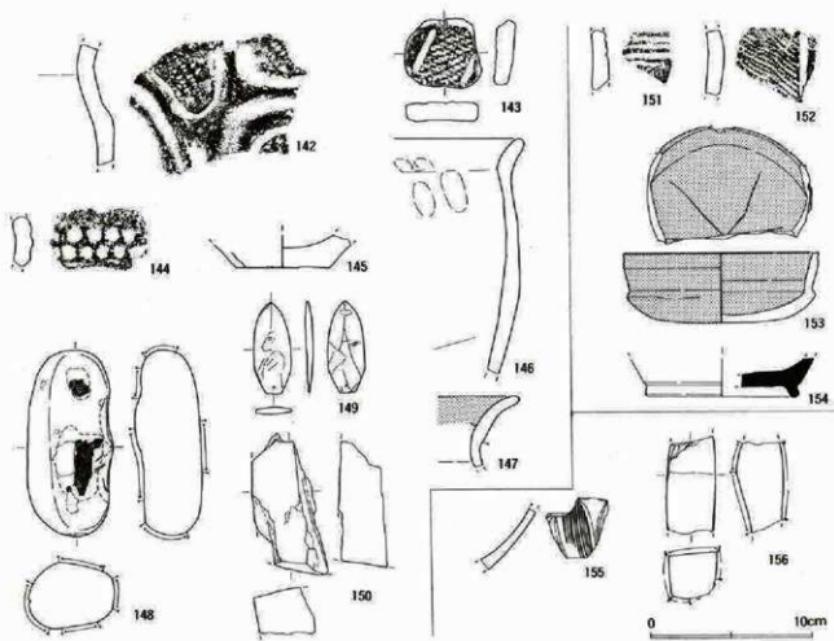


図20 中世以前遺物・表記遺物

#### 表記遺物

出土層位が不明なものをここで取り上げる。155は櫛目運井文碗の腹部破片。156は砥石で上野産の中砥。

#### 注

1. 練倉市内では千葉地遺跡（今小路西遺跡）でハマグリ・アカニシ、蘿屋敷東遺跡（若宮大路周辺遺跡群）でハマグリに漆が付着しているものが発見されている。  
手塚直樹ほか『千葉地遺跡』 千葉地遺跡発掘調査団 1982年  
手塚直樹、河野眞知郎『蘿屋敷東遺跡』 江ノ電練倉ビル発掘調査団 1983年
2. 台山遺跡27号住居址内から鏡型模造品、勾玉型模造品（ともに滑石製）と伴って出土している。  
手塚直樹ほか『台山藤源治遺跡』 台山藤源治遺跡発掘調査団 1985年  
宮田真ほか『米町遺跡発掘調査報告』 米町遺跡発掘調査団 1999年

## 第4章　まとめ

名越ヶ谷開口部に位置する本調査地点では、谷中央を流れる逆川の中世前期の護岸施設が発見された。本章ではこの護岸施設に関することを若干述べることとする。

### ○護岸木組の変遷過程

木組4A+石積2→木組4B?→木組3→木組2→木組1+石積1

中世基盤層を削り、木組4を設置している。調査区南（Dグリッド以南）は中世基盤層が出てない部分に泥岩を積み（石積2）、木組4を設置している。木組4は覆土の判別が出来なかったが、ほかの木組控え材（木組1、2）とあわせて考えると基本的に西から東に移動しているようなので、木組4Bよりも木組4Aが古いと考えた。木組4包含層には若干の遺物が含まれており、13世紀前期と考えられる。

木組4包含層の東側を削り、木組3が設置される。木組3は横板と角杭だけの検出であった。おそらく川そのものに接する側板（土留め）と考えられるが、これに付随する控え材は発見されていない。また、横板の控え材が発見されておらず、構造も不明である。木組2を包含する層に切られていたため、横板が何枚積まれていたかは不明である。

木組3包含層を削って、木組2が設置される。前述のように、タイプI・IIという2通りの構造がある。木組3・2は、包含層から出土した遺物から13世紀中葉と考えられよう。

木組2包含層を削って、木組1が設置され、その上に泥岩塊を積む（石積1）。包含層から出土する遺物は少なく、時期判定が難しいが、木組2とそれほど変わらない時期と考えたい。

木組3の下にはさらに落ち込みがある。堆積状況から木組4より新しく、木組3より古いと考えられる。第15層は水磨した泥岩を含む粗砂層であり、川の堆積土と考えられるが、第16層が破碎泥岩層のため、河道と積極的に判定することはできない。第15層から多くの遺物が出土し、13世紀前期と考えられる。

### ○鎌倉市内の護岸木組控え材発見例

鎌倉においてもしくは河川の護岸木組控え材の発見例は以下のとおりである（平成13年10月現在、番号は図1の番号と一致する）。

河川・・・・①千葉地東遺跡（若宮大路周辺遺跡群）<sup>(11)</sup>

②a 今小路西遺跡<sup>(12)</sup>

③若宮大路周辺遺跡群<sup>(13)</sup>

道路側溝・・・④北条小町邸跡<sup>(14)</sup>

⑤北条泰時・時頼邸跡（北条小町邸跡）<sup>(15)</sup>

屋敷溝・・・⑥b 今小路西遺跡<sup>(16)</sup>

⑦若宮大路周辺遺跡群<sup>(17)</sup>

全地点の控え材の構造は大小の差を除けば、構造的にタイプIIとほぼ同構造である<sup>(18)</sup>。なお、①・②b・⑥点では溝の護岸木組側板と控え材がセットで発見されている。①・⑥は、護岸木組はいずれも網代状に組み合わせた柵状のものを杭で支えるものである。②bは溝底に角柱を打ち込んで羽目板を固定し、柱の上部にホゾ穴を空け外側に控えをとっている。

タイプI、IIどちらにも共通して言えることは、直行する部材が内側から外側に傾斜するようように配置しているということである。

### ○今後の課題

- ・当時、逆川の護岸工事がどの程度まで（上流から滑川との合流点）施されていたのか。
- ・木組控え材の構造の違いは何に起因するのか。

- ・河川制御の把握→逆川およびその両岸の発見。
- ・河川流路の把握<sup>(39)</sup>

現在まで行われた発掘調査の再評価・再分析や、今後の基礎資料の増加によって、中世都市鎌倉の土木遺構の一端が明らかにされるであろう。

#### 註

1. 13世紀第2四半期～14世紀第3四半期と推定されている。

千葉地東遺跡では古代の河川流路を真っ直ぐにしている。

服部実喜・宍戸信吾ほか『千葉地東遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986年

2. 中世後期河川。

宮田真ほか『今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地・御成町625番2地点）』今小路西遺跡発掘調査団  
鎌倉市教育委員会 1993年

3. 扇ヶ谷川旧流路。木組と石積がある。木組はタイプ・に近いが控え板に穴をあけ、そこに直行する角材をはめ込んでいる。

馬淵和雄「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』 鎌倉市教育委員会 1990年

4. 若宮大路東側溝。タイプ・と同様である。

森孝子・堀川浩通「北条小町御跡の調査」『第10回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』 鎌倉考古学研究所  
2000年

5. タイプ・と同様である。

馬淵和雄『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地点発掘調査報告書』 北条北条泰時・時頼邸跡発掘調査団  
編 鎌倉市教育委員会 1985年

6. 溝12北岸。

7. 第4面構7（13世紀後半）では、本地点のタイプ・と同一の構造のものとともに、控え梁にホゾ穴を空け、杭を通して打ち込んでいるタイプのものが併存している。

小林重子「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16（第1分冊）』 鎌倉市教育委員会 2000年

8. 溝もしくは河川に対して直行する部材は、板ではなく角材である。

9. 本地点調査時と同時に、本地点南（図2-2）で調査が行われ、本地点とはほぼ同じラインで逆川へ向かう落ち込みが確認

されている。現在、逆川の流路は調査地の北で鍵の字状に曲がっているが（写真図版1参照）、中世期には本地点付近

の流路はほぼ真っ直ぐ南下していたのかもしれない。

#### 参考文献

馬淵和雄「護岸と橋」『よみがえる中世3 武士の都鎌倉』平凡社 1989年

宗臺秀明「中世都市と排水施設」『日本考古学 第3号』 日本考古学協会 1996年

北壁

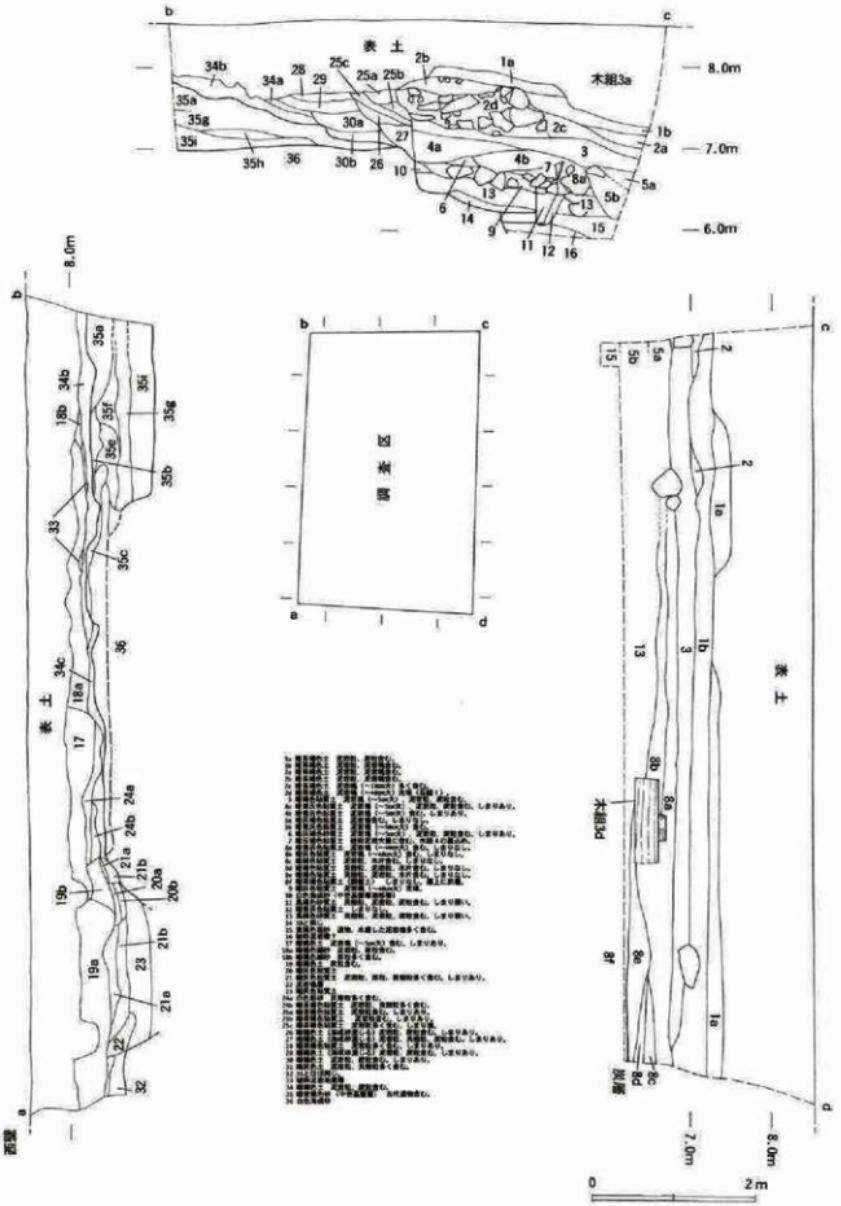


図21 調査区壁土層堆積図

因版番号	番号	種別	計測値(単位はcm・括弧は復元値)	観察事項
図5	1	かわらけ	器高1.9	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：25%
	2	かわらけ	器高1.8	成形：ロクロ 外底：スノコ底 不透明 色調：褐色 残存率：30%
	3	かわらけ	口径(6.9) 器高(4.9) 器深1.8	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：灰褐色 残存率：70%
	4	常滑窯 1型脚	—	色調：灰白色 残存率：?
	5	常滑窯 1型脚	高台径(16.0)	色調：灰白色 残存率：?
	6	「ちち常滑」	径6.5 最大幅3.6 厚1.1	備考：常滑窯の脚部を軽く、両面に削り口一部削除。
図11	7	かわらけ	口径(6.0) 器高1.0	成形：手づくね 色調：褐色 残存率：10%
	8	かわらけ	口径(6.6) 器高1.8	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：褐色 残存率：40%
	9	かわらけ	口径(6.8) 底径(6.5) 器高1.7	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：褐色 残存率：25%
	10	かわらけ	口径(10.0) 底径(6.0) 器高3.2	成形：ロクロ 外底：スノコ底 不透明 色調：褐色 残存率：20%
	11	かわらけ	口径9.0 底径5.0 器高2.6	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：灰褐色 残存率：90% 備考：口縁付ける→明具
	12	常滑窯 1型脚	—	色調：灰褐色 残存率：?
	13	常滑窯 2型	—	色調：灰褐色 残存率：?
	14	かわらけ	口径(7.7) 器高1.6	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：10%
	15	かわらけ	口径(8.8) 器高1.7	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：40%
	16	かわらけ	口径(12.0) 底径(6.0) 器高3.4	成形：ロクロ 外底：スノコ底 不透明 色調：褐色 残存率：20%
	17	土器	—	色調：灰褐色 残存率：10% 備考：古くの河原地出
	18	かわらけ	口径(9.3) 器高2.0	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：25%
	19	かわらけ	口径(9.3) 器高1.6	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：40% 備考：口縁付ける→明具
	20	かわらけ	口径(9.4) 器高1.9	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：40%
	21	かわらけ	口径(9.1) 器高1.8	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：60%
	22	かわらけ	口径(13.6)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：30%
	23	かわらけ	口径(13.3)	成形：手づくね 色調：褐色 残存率：15%
	24	かわらけ	口径(13.6)	成形：手づくね 色調：褐色 残存率：15%
	25	かわらけ	口径(13.5) 底径(9.1) 器高3.3 シノコ 底板1.1前後	成形：ロクロ 色調：褐色 残存率：50%
図12	26	常滑窯 2型	—	色調：物干=赤茶褐色、器表=粉褐色 残存率：?
	27	平足	残存長17.6 残存幅7.8 厚1.8	西面：物干即きの風、一部模様の剥れ。縫合部のナダ、端面：レタケ入り 色調：灰褐色 残存率：?
	28	木製品 曲物 (底板)	径6.7 厚0.5 礼拝室1.孔径0.15	断面：? 成形：彫刻式対角線式に二ヶ所穿孔 備考：平面部は正円ではない
	29	木製品 純金	残存長13.4 最大幅1.4 厚0.3 孔径0.3	断面：? 備考：中央に凹角い丸があり、木橋を突するが、両端部壊れ無し。一部に落子の跡みあり。
	30	木製品 用途不明	長16.8 幅5.9 厚3.5 为孔3.2X1.9	断面：? 備考：中央に凹角い丸があり、木橋を突するが、両端部壊れ無し。一部に落子の跡みあり。
	31	木製品 用途不明	—	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：10%
	32	かわらけ	口径(8.3) 器高(1.9)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：10%
	33	かわらけ	口径(11.0) 底径(6.7) 器高1.7 シノコ 底板0.6前後	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：褐色 残存率：60%
	34	かわらけ	口径(6.4) 底径(7.3) 器高1.9 シノコ 底板0.6前後	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：灰褐色 残存率：60% 備考：口縁付ける→明具
	35	かわらけ	口径(11.5) 器高(1.9)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20% 備考：口縁付ける→明具
図13	36	かわらけ	口径(11.2)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20%
	37	かわらけ	口径(12.1) 器高(5.2)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20%
	38	かわらけ	口径(12.3) 器高3.2	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：30%
	39	常滑窯 2型	口径(16.7)	色調：物干=茶褐色、器表=茶褐色 残存率：?
	40	常滑窯 2型	口径(28.4)	色調：物干=茶褐色 残存率：?
	41	瓦器 舟	口径(40.0) 底径(25.0) 器高8.9	成形：体外表面観察のハケ目調整。体部内面横位置のハケ目溝挖削、ハケ目溝挖削（5条の直線状溝）による実行した舟形。外底部ハケ目調整。色調：灰褐色 残存率：10% 備考：口縁内外面黒漆付着
	42	鉄製品 舟	長18.7 幅0.5 厚0.7	残存率：? はび起剥離
	43	かわらけ	口径(8.8)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：40%
	44	かわらけ	口径(19.0) 底径(6.0) 器高1.6	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：褐色 残存率：50%
	45	かわらけ	口径3.3 底径2.2 器高1.8	成形：ロクロ 色調：灰褐色 残存率：40%
	46	かわらけ	口径(8.8) 底径(6.0) 器高1.5	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：褐色 残存率：50%
	47	かわらけ	器高3.5	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：50%
	48	かわらけ	器高1.7	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：50%
	49	かわらけ質 鳥文板	外底径(6.0) 底盤最大径(9.8)	成形：ロクロ 外底：スノコ底 色調：褐色 残存率：?
	50	木製品 斧	長26.9 幅1.7 厚0.3	樹種：? 残存率：20%
	51	木製品 羽子板	厚0.7	樹種：? 残存率：口縁起剥離
	52	かわらけ	口径6.9 器高1.7	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：80%
	53	かわらけ	口径6.6 器高1.8	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：80%
	54	かわらけ	口径(6.6) 器高1.7	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：40%
	55	かわらけ	口径(5.3) 器高1.6	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：50%

表7 遺物觀察表(1)

回収番号	番号	種別	計測値(単位はcm・高強は度数)	遺物事項
図13	56	かわらけ	口径(9.2) 器高1.6	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 40%
	57	かわらけ	口径9.9 底径7.9 器高2.0	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 60%
	58	かわらけ	口径8.3 底径7.9 器高1.7	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 90% 備考: 膜土にかわらけ片頭出し
	59	かわらけ	口径(8.7) 底径(7.4) 器高1.7	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 50%
	60	かわらけ	口径8.4 底径6.4 器高1.7	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 80%
	61	かわらけ	口径8.2 底径6.7 器高1.6	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 70%
	62	かわらけ	口径(9.1) 底径(6.5) 器高1.3	成形: ロクロ 外底: S/コ釉不明度 色調: 灰褐色 残存率: 70%
	63	かわらけ	口径9.2 底径7.8 器高1.6	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 80% 備考: 口縁付付着一部凹凸
	64	かわらけ	口径(13.5)	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 30%
	65	かわらけ	口径(13.5) 器高3.5	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 40%
図14	66	かわらけ	口径13.6 器高3.3	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 50%
	67	かわらけ	口径(13.6) 器高3.3	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 40%
	68	かわらけ	口径13.2 器高3.1	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 60%
	69	かわらけ	口径12.8 底径8.6 器高3.3	成形: ロクロ 外底: S/コ釉不明度 色調: 灰褐色 残存率: 40%
	70	かわらけ	口径13.4 高径6.4 器高3.3	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 90%
	71	かわらけ	口径12.2 底径8.3 器高2.7	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 50% 備考: 口面(内外)に埋付付
	72	かわらけ	口径(12.5) 底径(7.0) 器高4.1	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 不明度 色調: 灰褐色 残存率: 15%
	73	青磁 刻文施	—	水牛地、刻文施、動かし: 淡黄褐色 色調: 黄褐色 残存率: 10%以下
	74	青磁 斧	—	色調: 灰褐色 残存率: ?
	75	常滑窯 麦	—	色調: 白土+系褐色、器表+灰褐色 残存率: ?
図15	76	常滑窯 麦	—	色調: 系褐色 残存率: ?
	77	常滑窯 丸鉢	—	色調: 灰褐色 残存率: ?
	78	常滑窯 丸鉢	—	色調: 白土+系褐色 残存率: ?
	79	瓦器 面	口径(11.0) 底径(5.3) 器高2.6	研究: 内面=織目多孔隙、内底面=菊花文 残存率: 20%
	80	瓦器 黒織目	口径(10.9)	产地: 産地前? 動かし: 白土 残存率: ?
	81	平瓦	残存長17.4 残存幅22.8 厚2.1	古面: 織目叩きの後、斜面の素切り、部分的に継ぎのナヂ。曲面: 斜面の素切り後、部分的に継ぎのナヂ。端面: ヘラケズリ 色調: 灰色 残存率: ?
	82	丸瓦	残存長5.6 厚2.5	古面: 織目叩き後、継ぎのナヂ。曲面: 有目痕、部分的に継ぎのナヂ。側面: ヘラケズリ 色調: 灰色 残存率: ?
	83	石磚	底径(13.0)	石材: 渡石 残存率: ?
	84	漆付着具	残存高4.9 残存長6.7 逆幅1.9	種類: チョウセヒンハグダリ 漆: 黒 漆行者: 内面全体と外面部一部 残存率: 90% 備考: 漆塗り時のパレット的な使用か? 残存率: 60% 備考: 漆行者: 漆塗りの際のナヂ
	85	鉄製品 刀子	刀部(刃存長5.5 最大幅2.6) 板部(刃存長3.2 最大幅1.2)	刃存率: ?
図16	86	木製品 刀子柄	長14.8 細人幅2.6 厚1.2	柄櫛: ? 程存率: 完形 備考: 全体曲面が直角で、鋸歯無し。
	87	木製品 刀子柄	長18.1 最大幅1.9 孔径0.7	柄櫛: ? 程存率: 完形 備考: 全体曲面が直角で、鋸歯無し。
	88	木製品 柄	残存長8.4 最大幅0.6 厚0.3 孔径0.3	柄櫛: ? 程存率: ?
	89	木製品 下駄	長21.5 幅0.2 高6.5	柄櫛: ? 型式: 旗脚 成形: 表面丁寧なケズリ出し 残存率: 80% 備考: 極度に荒い足見。
	90	木製品 菊麗花	長22.6 最大幅(9.4) 最大厚0.6	柄櫛: ? 程存率: 60% 備考: 表面綺麗な仕上げ、傷痕あり。
	91	木製品 菊麗花	長20.2 最大幅(7.3) 最大厚0.3	柄櫛: ? 程存率: 60%
	92	木製品 菊麗花	長22.6 最大幅(9.0) 厚0.25	柄櫛: ? 程存率: 50%
	93	木製品 菊麗花	長14.0 厚0.3	柄櫛: ? 程存率: 40% 備考: 予供用
	94	木製品 用途不明	長6.4×0.6 最大幅2.6 厚0.2	柄櫛: ? 程存率: ? 完形? 備考: 平面八角形、中央丸孔無し。
	95	木製品 曲物	程11.3 (外)、10.3 (内) 器高6.2 備板厚0.9	柄櫛: ? 程存率: ? (ほぼ完形) 備考: 檻止め→桜皮 底板釘止目ヶ所
図17	96	木製品 箱	長56.5 幅23.4 高9.0 底板厚1.4 備板厚1.6	柄櫛: ? 成形: 内面のみ黒漆塗。残存率: 60% 備考: 木釘、鉄釘残る
	97	木製品 用途不明	残存長11.6 幅0.37 厚0.4	柄櫛: ? 程存率: ? ほぼ完形
	98	木製品 箱	残存長18.0 幅0.37 厚0.6	柄櫛: ? 程存率: ? ほぼ完形
	99	木製品 箱	長26.0 幅0.47 厚0.6	柄櫛: ? 程存率: ? 完形
	100	木製品 箱	残存長26.1 幅0.57 厚0.7	柄櫛: ? 程存率: ? ほぼ完形
	101	木製品 箱	長27.5 幅0.47 厚0.7	柄櫛: ? 程存率: ? 完形
	102	木製品 手鏡	長29.7 幅0.3	柄櫛: ? 程存率: ? 10%以下 備考: 鏡孔1ヶ所以上
	103	木製品 雪塗漆	長27.7 最大幅2.7 厚0.12	柄櫛: ? 程存率: 80% 備考: 上部主頭状、キーリック(阿波物)を墨書き
	104	木製品 用途不明	長33.8 幅0.6	柄櫛: ? 程存率: ? ほぼ完形?
	105	木製品 用途不明	残存長16.7 最大幅1.5 厚0.85	柄櫛: ? 程存率: ? 備考: ヘラ?
図18	106	かわらけ	—	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 30%
	107	かわらけ	口径9.7 器高1.8	成形: 手づくね 合西: 麦色 残存率: 40%
	108	かわらけ	口径(7.8) 器高(1.8)	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 20%
	109	かわらけ	口径9.7 底径6.6 器高1.7 スノコ底幅0.7	成形: ロクロ 外底: S/コ釉 色調: 灰褐色 残存率: 90%
	110	かわらけ	口径(11.7) 器高3.1	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 30%
	111	かわらけ	—	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 15%
	112	かわらけ	—	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 15%
	113	かわらけ	—	成形: 手づくね 色調: 灰褐色 残存率: 15%

表8 遺物観察表(2)

国歴番号	番号	種別	計測値(単位はcm・括弧は復元値)	観察事項
国歴16	114	かわらけ	口径(13.3) 器高3.1	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：40%
	115	かわらけ	口径(12.6) 器高3.2	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：30%
	116	かわらけ	口径12.9 底径5.2 高さ3.9 ソノコ底幅0.7mm後	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 色調：褐色 残存率：90%
	117	かわらけ	口径(12.1) 底径(6.4) 器高3.5	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 (不明瞭) 色調：灰褐色 残存率：30%
	118	常滑窯 1振鉢	口径(32.7)	色調：灰褐色 残存率：20%?
	119	かわらけ	口径(6.8) 底径(6.8) 器高1.7 ソノコ底幅0.8mm L.4	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 色調：褐色 残存率：25%
	120	かわらけ	口径(6.1) 底径(6.8) 器高1.7 ソノコ底幅0.4mm前	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 色調：灰褐色 残存率：25%
	121	かわらけ	—	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：10%
	122	かわらけ	口径(12.6) 器高2.8	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20%
	123	常滑窯 2振鉢	(17.0)	色調：灰褐色 残存率：?
国歴18	124	かわらけ	口径(10.6) 底径8.0 器高1.6	成形：手づくね 色調：肌色 残存率：30%
	125	かわらけ	口径7.6 底径5.0 器高1.9	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 色調：灰褐色 残存率：ほぼ完形
	126	かわらけ	口径9.0 底径7.0 器高1.7	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 色調：褐色 残存率：70%
	127	かわらけ	口径(8.0) 底径(5.0) 器高2.5	成形：ロタロ 外底：ソノコ底 色調：灰色 残存率：60% 備考：口縁付一灯明昌
	128	魚住窯 茶	—	色調：灰褐色 残存率：?
	129	瓦器窯 香炉	—	色調：灰褐色。器蓋＝灰褐色。ミガキ：ロ緑結部 文様：外面部に模様の兔足3本。そのあと唐文を施す付け 磁火文を施す付け 残存率：?
	130	かわらけ	口径(6.8)	成形：手づくね 色調：褐色 残存率：20% 備考：ロ緑煤付一灯明昌
	131	かわらけ	—	成形：手づくね 色調：褐色 残存率：20%?
	132	御鉢 早末酒漬	—	初期形：南北朝1038年。書体：楷書 残存率：完形
	133	かわらけ	器高1.7	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20%
	134	かわらけ	口径(6.2)	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20%
	135	かわらけ	口径(13.3) 器高3.2	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：20%
	136	かわらけ	口径(13.5) 器高3.4	成形：手づくね 色調：灰褐色 残存率：25%
	137	青磁 菊花文瓶	口径(16.5) 底径(6.2) 器高6.7	生産地：龍窑窯 耐土：灰白色 織糸：灰緑色・半透明 残存率：20%
	138	青磁 目	口径(9.7)	生産地：同安系窯 耐土：灰褐色 織糸：灰褐色・透明 残存率：90%
	139	青美磁 魚	—	色調：灰褐色 残存率：?
	140	瓦器窯 黒釉碗	口径(11.3) 底径(5.3) 器高3.6	生産地：備前？ 成形：外底面へラクスラ 耐土：白色 残存率：50%
	141	御鉢 元豐酒漬	—	初期形：南北朝1029年。書体：篆書 残存率：完形
国歴20	142	満文土器 甕	—	型式：加賀舟形式（萬文中期後期） 成形：外面に二本の曲筋の毫毛と技術に沿った洗刷によって模写が施される。 区画内に横文。 色調：青褐色 残存率：?
	143	満文土器 (土器片付)	—	型式：加賀舟形式（萬文中期後期） 成形：外面に斜筋の毫毛と横筋の洗刷。 色調：茶褐色 残存率：? 備考：胸部破片を転用し、二ヶ所に抉り込み。
	144	満文土器 甕	—	型式：加賀舟形式（萬文中期後期） 成形：外面（口縁部） 横筋に「翁の舟」の押出し文。 色調：灰褐色 残存率：?
	145	満文土器 甕	器高(5.6)	型式：? 色調：茶褐色 残存率：?
	146	土師器 短颈甕	—	成形：口縁部外面とも横ナギ。 胸部外面ナギ 耐土：金青釉多く含む 色調：灰褐色 残存率：?
	147	土師器 長颈甕	—	成形：口縁部内外面とも横ナギ。 口縁？ 腹部内外赤彩 色調：灰褐色 残存率：?
	148	石器	長11.6 幅5.3 最大厚4.2	石材：? 残存率：? 完形。 備考：部分的に磨滅しているが、石器でない可能性あり。
	149	削形織造品	長6.7 最大幅2.3 最大厚0.45 孔径0.1	石材：滑石（灰褐色） 残存率：ほぼ完形（お隠れあり） 備考：両面に擦痕。 石器時代
	150	砾石？	残存長6.2 残存幅3.5 残存厚2.8	石材：? 積層岩？ 残存率：? 備考：? 画面残存。 厚減。 粒度はほとんど無く、砾石でない可能性あり。
	151	満文土器	—	型式：? 色調：灰褐色 残存率：?
	152	満文土器	—	型式：加賀舟形式（萬文中期後期） 成形：外底（網目）に斜筋の毫毛と横筋と棒状工具による模写の波紋区画 色調：灰褐色 残存率：?
	153	土師器 坎	口径(12.0) 器高4.3	成形：外底點々ケリ。 器表全赤茶。 内底面に斜筋状 残存率：40%
	154	須恵器 瓢	高台形(9.2)	成形：高台點々付け 色調：灰褐色 残存率：? 備考：耐土較良、内底黒減→可能性の可能性。
	155	青磁 櫻絞蓋井文瓶	—	生産地：龍窑窯 色調：耐土：灰白色、織糸：灰褐色・半透明 残存率：?
	156	砾石 中底	残存長5.9 幅3.6 厚2.9	壳地：上野 残存率：?

表9 遺物観察表(3)

かからげ	船載陶器	回転陶器	土器・土製品	瓦類	焼鉢	金属製品	石製品	骨製品	木製品	漆器類	總破片数
2927	33	214	11	7	2	7	3	0	725	7	3636
73.7	0.9	5.6	0.3	0.2	0	0.2	0	0	18.9	0.2	100%

表10 中世遺物總破片点数

## 付編1 名越ヶ谷遺跡の花粉化石

鈴木 茂 (バレオ・ラボ)

名越ヶ谷遺跡の大町三丁目1826番9地点において行われた発掘調査で、13世紀中頃の河川跡が検出されている。この河川跡からは護岸に伴う土留め板や杭材、遺構構築材などの加工木材が出土しており、土丹密集層や有機質に富んだ粘土層などで埋積されている。以下には、この河川跡埋積層より採取された土壤試料について行った花粉分析の結果を示し、当時の遺跡周辺における植生を検討した。なお上記した加工木材については別節にて樹種同定が行われている。

### 1. 試料

試料は、調査区北壁断面より採取された13試料である。以下に各試料について簡単に記すが、各層の詳しい記載については別章を参照されたい。試料1（3層）は暗褐色の砂質粘土で、土丹片が多く入り、カワラケ片や炭片も認められる。この上位2d層は土丹の密集層（石積1）で、基質は黒褐色の砂質シルトである。試料2は暗青灰色の砂質粘土で、土丹片が散在している。この下位の7層は木組4の裏込め土で、土相は土丹片を多く含む暗灰褐色の砂質粘土である。さらに下位の9層は土丹の密集層である。試料3, 4（11層）は土坑状に落ち込んだ部分を埋めている黒色の砂質粘土で、土丹片が点在している。また最下部にはスギの板材（3 A 3 B 直交：KAN2126）が認められる。試料5, 8, 10（13層）は黒褐色の砂質粘土～粘土質砂で、貝殻小片が混じり、かわらけ片や土丹片も認められる。また、試料8付近からは板材も検出され、有機質な部分（褐色が強い）も認められる。その下位の14層は貝殻小片を多量に含む黄灰色砂である。試料6, 9, 11（15層）も貝殻小片を多量に含む粘土混じりの黄灰色砂（試料11）で、黒褐色泥炭を火炎状に含み（試料6, 9）、ウリ類の種子が認められる。最下部の16層は土丹小片（10mm前後主体）を多量に含む砂レキ層である。その他、土坑状に落ち込んだ部分を11層とともに埋めている12層の試料7（板などで11層と境されていた？）は暗青灰色の粘性の高い粘土で、土丹片が混入している。また試料12, 13（5b層）は暗青灰色の粘土で、土丹の小片が散在している。

これらのうち15, 16層が河川堆積物もしくは河川護岸層、他が河川護岸層ではないかと考えられている。また時代的には15層試料である6, 9, 11が今回の採取試料では最も古く、次いで13層の試料5, 8, 10が古いと考えられる。これら13, 15層を掘り込んで護岸がなされ、その部分を埋めている11, 12層（試料3, 4, 7）が次に新しく、出土遺物などから13世紀中頃

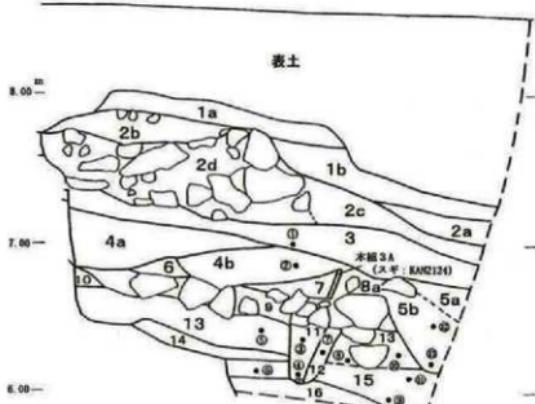


図1 試料採取地点付近の土層断面図（調査区北壁）  
と試料採取層準（○数字）

表1 産出花粉化石一覧表

科名	学名	年名												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
裸子														
マツ科	<i>Podocearpus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ科	<i>Abies</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ガガマ科	<i>Taxus</i>	2	-	2	3	1	-	-	-	1	1	1	1	3
トウヒ科	<i>Picea</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属植物科	<i>Pinus</i> subgen. <i>Rapiclypea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属植物科	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	2	5	1	5	5	1	7	8	-	2	1	5	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1
コウヤマキ科	<i>Sequoiadipitya</i>	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
スギ	<i>Cryptomeria Japonica</i> D. Don	4	7	11	9	5	2	2	1	3	3	3	7	11
イチイ科-イヌガタ科-ヒノキ科	T. - C.	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	1	5	-
ツツジ科-ムカシクサ科	<i>Prunus</i> - <i>Juglans</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タマシデ科-アザダ科	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
カバノキ科	<i>Betula</i>	-	2	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ科	<i>Alnus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イヌノキ科	<i>Fagus Japonica</i> Maxim.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	1	2	1	5	5	1	1	1	-	2	6	2	-
コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	1	7	1	5	5	2	1	1	2	4	7	1
タリ科	<i>Castanea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シノノキ科-マテバシイ科	<i>Castanopsis</i> - <i>Passia</i>	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-
ニレ属-カキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	1	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Phaneranthus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シキム属	<i>Ilicium</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガエズ科	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブナ科	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブトウ属	<i>Anemone</i>	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ属	<i>Araliaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本														
ガマ属	<i>Trapa</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	1	-	-
サンショウモガタ属	<i>Alliaria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	78	82	556	182	81	329	38	93	163	268	162	94	75
カキツブリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	6	12	13	16	4	13	7	16	9	4	11	11	6
ワクサ属	<i>Commelinaceae</i>	-	-	-	1	-	2	-	-	1	-	-	-	-
イボクサ属	<i>Anellena</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	<i>Liliaceae</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
クワ科	<i>Noraceae</i>	-	5	2	1	-	3	48	2	2	9	2	10	-
シダ科	<i>Polygonum</i> sect. <i>Arvicularia</i>	2	2	1	1	15	-	2	-	1	4	2	1	-
シダエクダゲ科	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
イタドリ科	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ科	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	29	47	219	82	83	24	60	39	17	637	43	58	26
スズラン科	<i>Pitcairnaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナシ科	<i>Carica</i> - <i>Malvaceae</i>	2	1	-	4	1	12	4	1	2	4	6	2	-
カラマツ科	<i>Thalictroidae</i>	-	-	-	5	-	15	-	1	4	1	2	1	-
色キンボウケ科	<i>other Ranunculaceae</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タクニギサ属	<i>Mcloskya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アラナ科	<i>Cruciferae</i>	16	12	5	6	6	3	11	7	6	13	15	18	8
リモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
他のモロコシ科	<i>other Rosaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-
ノブタ科	<i>Lychnophyllaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のマメ科	<i>other Leguminosae</i>	1	3	4	-	10	1	-	2	-	1	1	-	-
エキグサ属正似種	<i>ef. Acetalia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	<i>Euphorbiaceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アノトウガ科	<i>Hederastraceae</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
アノトウガ科	<i>Umbelliferae</i>	2	3	1	5	3	5	-	1	2	1	1	-	-
ラクタ科	<i>Lacistema</i>	-	-	-	1	1	2	1	-	1	-	-	-	-
オオバコ科	<i>Solanae</i>	-	-	-	1	-	3	-	-	1	-	1	2	-
アカネモチエムグラ属	<i>Plantago</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Rotua</i> - <i>Gilia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	<i>Patrinia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨリヅキ属	<i>Adenophora</i> - <i>Compositae</i>	45	13	36	90	23	173	20	36	157	22	115	15	14
ヨリヅキ属	<i>Other Umbelliferae</i>	-	2	7	2	10	6	10	20	2	2	3	2	5
ヨリヅキ属	<i>Liguliflorae</i>	8	10	4	8	1	3	3	7	4	3	3	3	3
シダ植物														
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	1	2	2	1	-	-	-	-	-	1	4	1	1
单子叶植物	<i>Momordica</i> spore	4	7	3	6	4	20	4	8	2	1	7	11	7
三被子植物	<i>Trilete spore</i>	2	4	1	3	1	2	2	3	-	4	3	3	3
裸子	<i>Ascaris</i>	37	31	18	29	23	2	16	23	21	5	14	28	29
裸子	<i>Trichuris</i>	171	69	34	96	91	15	111	81	118	30	87	207	164
肝吸虫	<i>Clonorchis</i>	1	1	1	3	4	1	6	3	1	2	1	1	1
肝吸虫	<i>Metagonimus</i>	-	1	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-
被子植物	<i>Anemone</i> pollen	19	22	26	31	20	15	21	28	10	22	24	46	15
被子植物	<i>Monocotyl pollen</i>	190	194	844	228	811	207	208	490	962	383	227	150	-
シダ植物	<i>Spores</i>	7	13	5	9	6	32	10	5	2	15	25	111	-
花粉-孢子總数	Total Pollen & Spores	216	226	878	461	263	652	234	244	420	986	422	286	176
不明花粉	Unknown pollen	8	8	3	10	3	6	5	9	3	5	6	4	5

T. - C. は Taxaceae-Cephaelitaceae-Cupressaceaeを示す

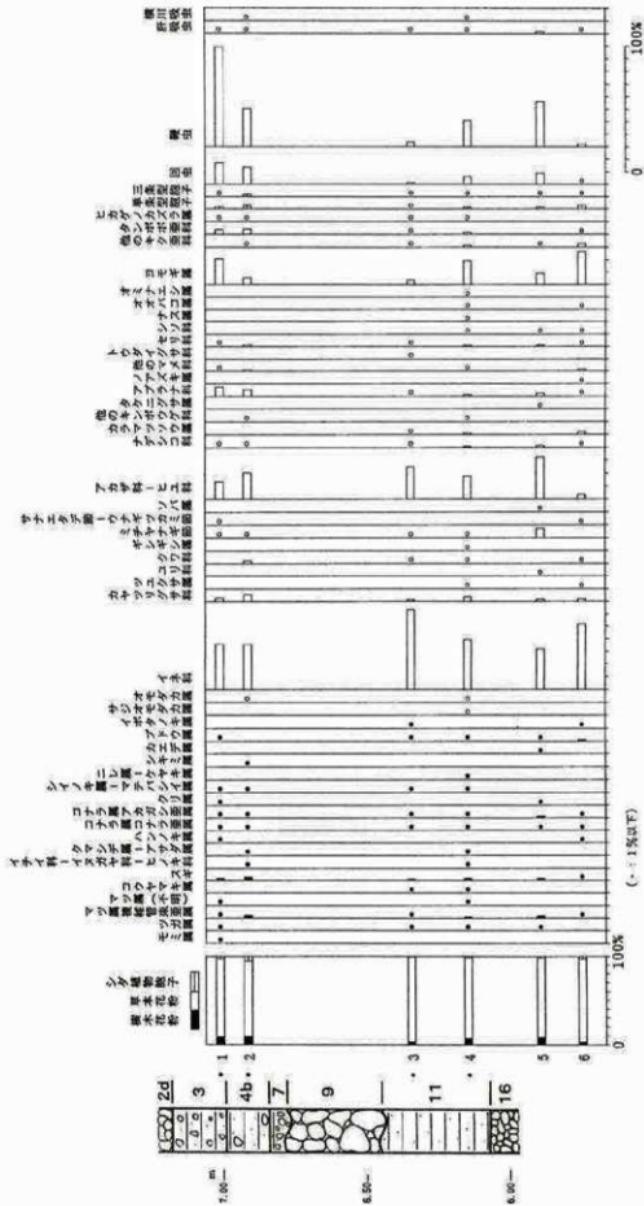


図2 横濱区北野試料の花粉化石分布図（その1）  
(出現率は全花粉・孢子総数として百分率で算出した。)

四百五

卷之三

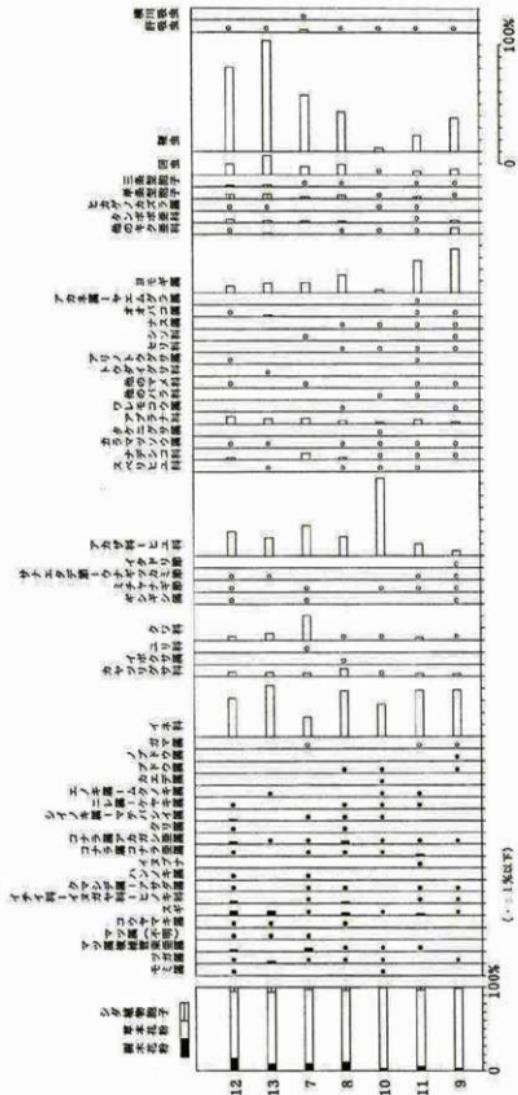


図3 調査区北壁試料の花粉化石分布図（その2）  
（出現率は全花粉・孢子総数を基準として百分率で算出した）

と考えられている。これを埋めて次の時期の護岸がなされたと推測され、試料2が次に新しく、さらに試料13, 12となり、これらを覆っている3層の試料1が時代的には最も新しい試料になると土層断面からは判断される。

## 2. 分析方法

上記した13試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～5g）を連沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mmの筋にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え達心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

## 3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉27、草本花粉38、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計68である。またこれらに加えて4分類群の寄生虫卵が観察された。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表1に、それらの分布を図2（その1）、図3（その2）に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示しており、「1. 試料」で示した時代順にそって試料は並べてある（上位が新しい）。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検査の結果、樹木花粉の占める割合は非常に低く、最も高い試料12で約16%、多くは10%前後である。この少ない樹木花粉のなかではスギが目立って検出されており、全試料で観察され、多くの試料で1%を越えている。コナラ属アカガシ亜属も全試料から得られており、マツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）もほぼ全試料から検出されている。その他、ツガ属、コナラ属コナラ亜属、ブドウ属など多くの試料で観察されている。

草本類ではイネ科が最も多く、出現率は多くの試料で30%以上を示しており、試料3では60%を越えている。次いでアザゼル科ヒユ科が多く、試料10では約65%を示すなど中・上部で多い傾向がみられる。反対にヨモギ属はおおまかではあるが下部で多い傾向を示している。その他ではアブラナ科多くの試料で1%を越えており、わずかではあるが上部で多くなる傾向がみられる。またクワ科多くの試料より得られ、試料7では突出した出現率約20%を示している。

上記花粉化石とともに寄生虫卵も多く観察され、試料13では花粉化石より多い個数が得られているなど全試料から検出されている。の中では鞭虫卵が最も多く、全体としては上部で多くなる傾向がみられる。回虫卵も全試料から得られており、わずかではあるが鞭虫卵と同様の産出傾向が認められる。その他、肝吸虫卵や横川吸虫卵が少量観察されている。

## 4. 遺跡周辺の古植生

各試料の時代についてはおおよそ13世紀中頃を中心としてその前後頃と推測される。この頃の鎌倉においては、それまでのスギ林やアカガシ亜属を中心とした照葉樹林からニヨウマツ類の二次林へと交代する時期（鈴木 1999）にあたる。今回の分析においても少ないなかスギやアカガシ亜属、ニヨウマツ類がやや目立って検出されており、森林要素が交代するまさにその時期を示していると思われる。ま

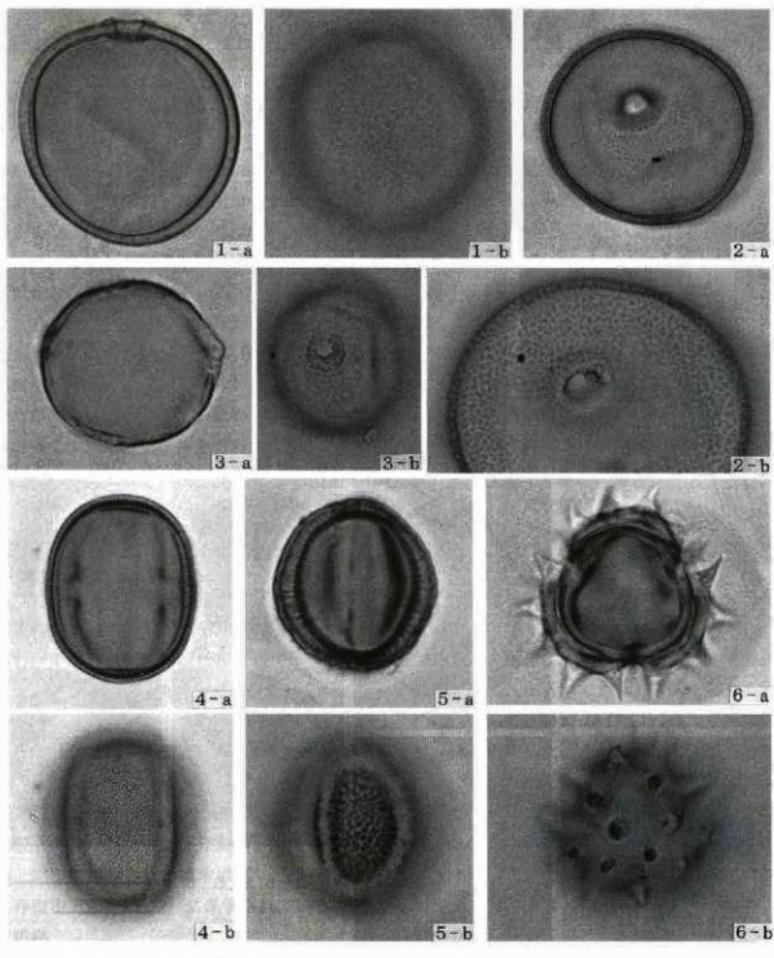
た、草本類に比べ樹木類の産出個数は非常に少なく、遺跡周辺ではすでに樹木類は少なくなっていたことも推測されるが、これについてはさらに検討が必要であろう。

本遺跡堆積層においては護岸によるカクランが顕著であるものの、下部試料である試料6, 9, 11(15層)ではその影響は少ないと土層図から判断される。これら3試料においてはイネ科とヨモギ属が多く、土手部にはこれらに加えカヤツリグサ科、ギシギシ属、ミチャナギ節、イタドリ節、スペリヒュ科、カラマツソウ属、オオバコ属、キク亜科、タンポポ亜科などの雑草類が多く生育していたと思われる。その後護岸の構築などでヨモギ属は生育地を狭められたことが予想され、アザ科-ヒユ科が河川周辺で多く見られるようになったと推測される。一方、寄生虫卵も多く検出されていることから、アザ科-ヒユ科の植物が薬として利用されたことによりその花粉が多く供給されるようになったことも考えられる。本遺跡では検出されなかったが薬として利用されたことが予想されるベニバナ属の花粉が1個体のみであるが同じ名越ヶ谷遺跡の大町四丁目1888番地点試料で得られており、寄生虫卵も多く観察されている(鈴木 2000)。このようにアザ科-ヒユ科も駆虫剤として利用されていたことも考えられ、これについてはさらに検討が必要であろう。

以上のように、名越ヶ谷遺跡より検出された河川の周辺では雑草類が多く生育しており、寄生虫卵が多く検出されていることからかなり汚れた環境であったと推測されよう。

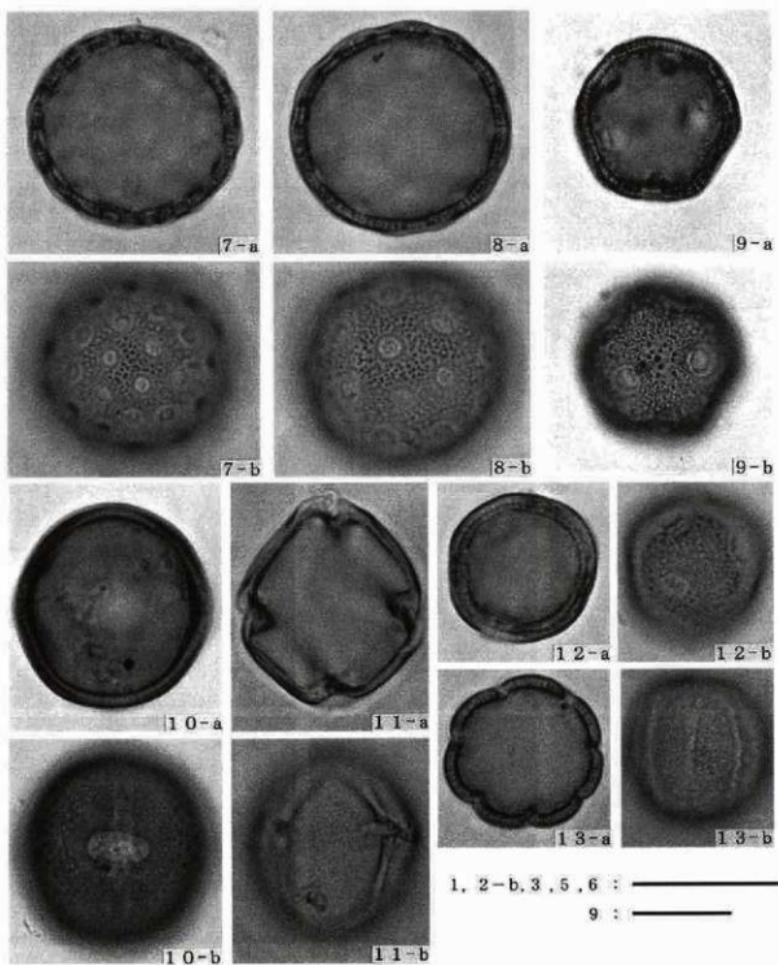
#### 引用文献

- 鈴木 茂 (1999) 神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊. 国立歴史民俗博物館研究報告 第81集, p. 131-139.
- 鈴木 茂・藤根 久・松葉礼子 (2000) 名越ヶ谷遺跡の花粉化石. 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1 6 平成11年度発掘調査報告 (第2分冊), 鎌倉市教育委員会, p. 274-282.



図版1 名越ヶ谷遺跡の花粉化石 (scale bar : 20  $\mu$ m)

- 1 : イネ科 PLC.SS 3075 No. 6
- 2 : イネ科 PLC.SS 3066 No. 3
- 3 : クワ科 PLC.SS 3076 No. 7
- 4 : ミチヤナギ節 PLC.SS 3071 No. 5
- 5 : ヨモギ属 PLC.SS 3068 No. 4
- 6 : 他のキク亜科 (ヨモギ属を除く) PLC.SS 3074 No. 6

図版2 名越ヶ谷遺跡の花粉化石 (scale bar : 20  $\mu$ m)

- 7 : アカザ科-ヒュ科 PLC.SS 3072 No. 6  
 8 : アカザ科-ヒュ科 PLC.SS 3067 No. 3  
 9 : ナデシコ科 PLC.SS 3069 No. 4  
 10 : マメ科 PLC.SS 3070 No. 6  
 11 : ナス属 PLC.SS 3077 No. 11  
 12 : カラマツソウ属 PLC.SS 3073 No. 6  
 13 : アカネ属-ヤエムグラ属 PLC.SS 3078 No. 11

## 付編2. 名越ヶ谷遺跡出土木材の樹種同定

松葉礼子（バレオ・ラボ）

### I. はじめに

神奈川県鎌倉市大町三丁目1826番9にある名越ヶ谷遺跡から出土した土留め関連の遺構構築材の樹種を同定した。時期は最下部の河川の土留め用材が13世紀中頃である。中世の鎌倉市内で遺構構築材の樹種同定を行った結果に北条小町邸跡がある（松葉, 2000）。この結果からスギとヒノキの2樹種のみが利用されていたことが確認され、スギが8割弱に対してヒノキが2割強の割合を占めていたことが分かった。一括試料として検出されている木片もスギが8割以上を占めており、スギが利用木材の大部分を占めていたことが確認され、ヒノキもある程度の割合で含まれていることが分かった。のことから、周辺の植生としてのスギが減少しても（鈴木・吉川, 1993）木材は一貫してスギを利用し、周囲の木本植生と利用樹種が一致しないことが分かった。スギが多い結果は佐助ヶ谷遺跡（藤根, 1993）で既に報告されていたが、同定された試料が曲物、漆器などの製品であったため樹種選択がされた結果とも捉えられる製品が多く、利用樹種全体を明らかにするためには大型の建築材や廃棄された木材の樹種も調べる必要があったためである。名越ヶ谷遺跡では河川の土留めなどが出土している。土留めのような埋設する製品にどのような樹種を利用していたのか把握するため、木製品の樹種を同定した。

### II. 試料と方法

同定した試料は合計46点であった。これらの遺物は最上部の杭材1点（標本番号KAN2169）と中層の遺構構築材と杭36点（遺物番号No.1～21, <2-1～15>、最下部の河川の土留め板杭列9点（遺物番号3A～3D）である。中層の遺構構築材は板目板で厚さ1.5cm前後、中央に切り欠きがある形状をしている製品が多い。同じく中層の杭は丸木ではなく、細板状の製品で両端が細く加工されている。同じく板目の製品が多い。最下層の河川の土留め用材の杭は角材で、土留め板は同じく板目であった。

同定には、現場にて木製品から鋸や鑿を用いて木材ブロックを採取した。そのブロック試料から片刃剃刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の3方向作成した。これらの切片はガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定はこれらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本との比較して行った。主要な分類群を代表する標本については写真図版に示し、同定根拠は後述する。

なお、同定に用いられた標本はプレバラート番号（KAN2124～2169）を付しバレオ・ラボ株式会社（埼玉県戸田市下前1-13-22）に保管されている。

#### 同定根拠

##### 1. スギ *Cryptomerica japonica* (L.fil.) D.Don Taxodiaceae 写真図版1a～1c:KAN2138

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、成長輪界は明瞭。晩材部の量は多い。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は大型のスギ型で通常1分野あたり2個ある。

### III. 結果と考察

同定した結果スギ1種のみが確認された（表1）。杭や板、層位などでも違いは無く、いずれもスギが利用されており、名越ヶ谷遺跡では全くヒノキは確認されなかった。ヒノキが出土することが稀な事例であるのかどうかは、現在のところ類例が少ないので判断できない。土留め用材は出土位置がことなる

附録2表1 名越ヶ谷遺跡出土木材の樹種同定試料と結果

KAN NO.	樹種	遺物	位置	遺物番号	KAN NO.	樹種	遺物	位置	遺物番号
KAN 2124	スギ	土留め板	最下部	3A	KAN 2147	スギ	遺構構築材	中部	No. 15
KAN 2125	スギ	土留め板	最下部	3A 下	KAN 2148	スギ	遺構構築材	中部	No. 16
KAN 2126	スギ	土留め板	最下部	3A, 3B 直交	KAN 2149	スギ	遺構構築材	中部	No. 17
KAN 2127	スギ	土留め板	最下部	3B	KAN 2150	スギ	遺構構築材	中部	No. 18
KAN 2128	スギ	杭	最下部	3B 杭	KAN 2151	スギ	遺構構築材	中部	No. 19
KAN 2129	スギ	土留め板	最下部	3C 上	KAN 2152	スギ	遺構構築材	中部	No. 20
KAN 2130	スギ	土留め板	最下部	3C	KAN 2153	スギ	遺構構築材	中部	No. 21
KAN 2131	スギ	杭	最下部	3C 杭	KAN 2154	スギ	杭	中部	<2-1
KAN 2132	スギ	杭	最下部	3D	KAN 2155	スギ	杭	中部	<2-2
KAN 2133	スギ	遺構構築材	中部	No. 1	KAN 2156	スギ	杭	中部	<2-3
KAN 2134	スギ	遺構構築材	中部	No. 2	KAN 2157	スギ	杭	中部	<2-4
KAN 2135	スギ	遺構構築材	中部	No. 3	KAN 2158	スギ	杭	中部	<2-5
KAN 2136	スギ	遺構構築材	中部	No. 4	KAN 2159	スギ	杭	中部	<2-6
KAN 2137	スギ	遺構構築材	中部	No. 5	KAN 2160	スギ	杭	中部	<2-7
KAN 2138	スギ	遺構構築材	中部	No. 6	KAN 2161	スギ	杭	中部	<2-8
KAN 2139	スギ	遺構構築材	中部	No. 7	KAN 2162	スギ	杭	中部	<2-9
KAN 2140	スギ	遺構構築材	中部	No. 8	KAN 2163	スギ	杭	中部	<2-10
KAN 2141	スギ	遺構構築材	中部	No. 9	KAN 2164	スギ	杭	中部	<2-11
KAN 2142	スギ	遺構構築材	中部	No. 10	KAN 2165	スギ	杭	中部	<2-12
KAN 2143	スギ	遺構構築材	中部	No. 11	KAN 2166	スギ	杭	中部	<2-13
KAN 2144	スギ	遺構構築材	中部	No. 12	KAN 2167	スギ	杭	中部	<2-14
KAN 2145	スギ	遺構構築材	中部	No. 13	KAN 2168	スギ	杭	中部	<2-15
KAN 2146	スギ	遺構構築材	中部	No. 14	KAN 2169	スギ	遺構構築材	最上部	

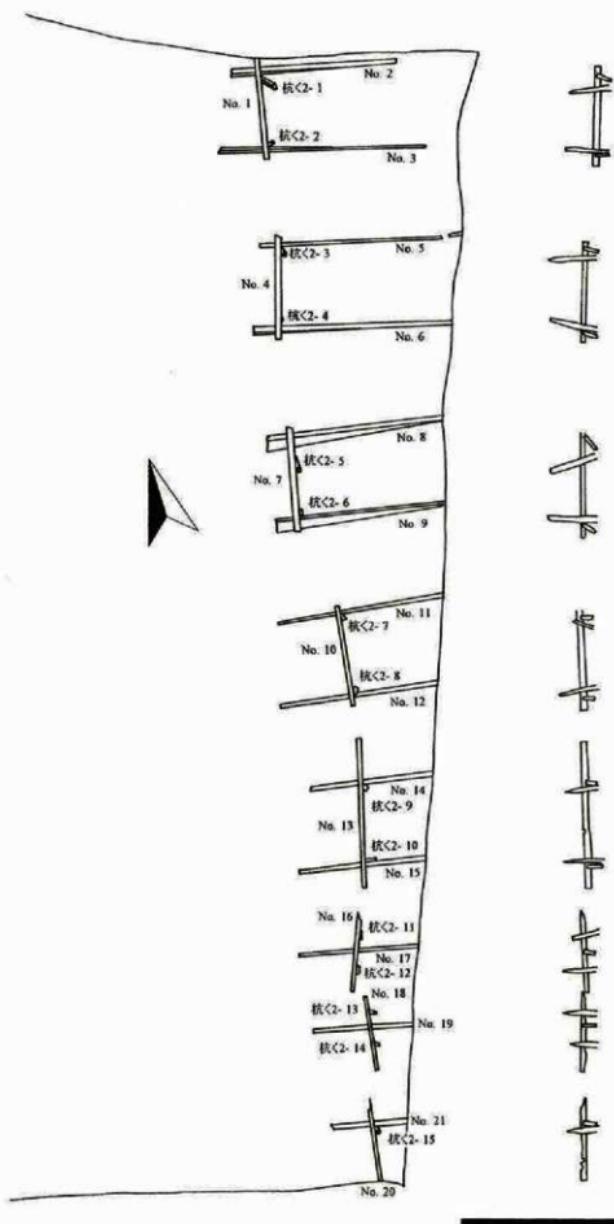
ことから時期が異なることが予想されるが、継続してスギが利用されている。杭は針葉樹が優占する遺跡でも広葉樹の製品が含まれていることが多い遺物であるが、遺物の形状が細板状や角材であることもスギが利用されたと考えられる。

#### 引用文献

- 藤根 久. 1993. 佐助ヶ谷遺跡出土木製品の樹種同定、「佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書 第2分冊」, 389-396. 佐助ヶ谷遺跡調査団.
- 松葉礼子. 2000. 北条小町邸跡で出土した土留め用材・木製品破片の樹種同定、「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）発掘調査報告書」(北条小町邸発掘調査団 宮田事務所編). 北条小町邸発掘調査団, 137-149.
- 鈴木 茂・吉川昌伸. 1994. 鎌倉市永福寺跡における鎌倉時代の植生変遷. 植生史研究, 2:45-51.

附圖2 圖版1 最下層河川土留め用材出土状況





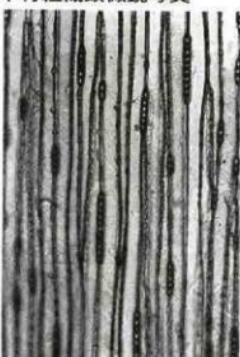
附圖2 図2 中部遺構構築材と杭出土状況

図版1 名越ヶ谷遺跡出土木材組織顕微鏡写真

Bar: [Scale Bar]



1 a スギ bar:1mm KAN 2138



1 b 同 bar:0.4mm



1 c 同 bar:0.1mm



図版 1

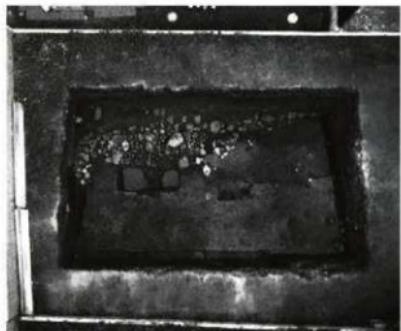


◀調査地点周辺空撮（上空・西から）  
写真上方は松葉ヶ谷である。

調査地点周辺空撮（上空から）▶  
逆川が北（写真上方）で屈曲しているのがわかる。



◀1面全景（上空から）



図版 2



▲護岸石組1（北から）

▼護岸木組1（北から）



◀護岸石組1（断面）  
と木組1（南から）



図版 3

◀護岸木組 2 (北から)



同上 (南から) ▶



◀護岸木組 2 b  
(東から)

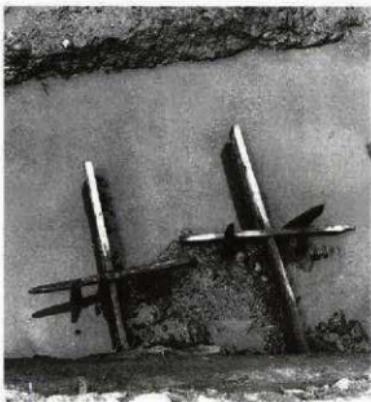


図版 4



◀護岸木組 2 b  
沈下防止材差し込み  
状況（南から）

護岸木組 2 f + g (東から) ▶



◀護岸木組 3 (北から)



図版 5



◀護岸石組 2  
および木組 4  
(北から)

同上 (東から) ▶



◀漆塗箱 (図15-96)  
出土状況 (北から)



図版 6



▲ 2面（北から）



42



84



70



39



41

いまこうじにしあいせき  
今小路西遺跡 (No. 201)

由比ガ浜一丁目183番1 地点

## 例　　言

1. 本報文は、今小路西遺跡（神奈川県遺跡台帳No.201）内、鎌倉市由比ガ浜一丁目183番1地点に於ける店舗併用個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成12年8月17日から同年8月31日まで実施した。調査対象面積は約40m<sup>2</sup>。
3. 調査及び整理作業の体制は以下の通り。  
調査員 沢見 一夫 山上 玉恵 渡邊 美佐子  
調査補助員 田畠 衣理 幾島 審  
作業員 照井 三喜 中須 洋二 萩野 卓也
4. 本報文に關わる整理作業は調査員・調査補助員が分担して行ない、沢見が執筆・編集した。尚、遺物原稿は山上・渡邊・田畠が実測の際に記した観察記録を基にしている。又、本報に使用した写真は、遺構を沢見が、遺物を田畠が撮影した。
5. 出土遺物の内、舶載陶磁器は手塚直樹氏（青山学院大学）、瀬戸窯製品等は宗基富貴子氏（鎌倉考古学研究所）に御教示を賜った。
6. 現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。  
(社)鎌倉市シルバー人材センター 鎌倉考古学研究所 東国歴史考古学研究所 高松建設株式会社
7. 本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

## 目　　次 本文目次

第1章 環境と立地 .....	55
第2章 調査の概要 .....	56
第3章 遺構と遺物 .....	59
第4章 調査成果 .....	67

## 挿図・表目次

図1 今小路西遺跡の範囲と調査地点 .....	55	図8 遺構外出土遺物 .....	66
図2 遺構全測図と堆積土層模式図 .....	56	図9 常滑窯押印文拓影 .....	66
図3 溝1、同出土遺物 .....	59	図10 周辺の調査地点模式土層図 .....	67
図4 建物1・土壤1、建物2・3、 同 出土遺物 .....	60	表1 出土遺物計測表(1) .....	70
図5 建物4・5、同 出土遺物 .....	62	表2 出土遺物計測表(2) .....	71
図6 建物6、同 出土遺物 .....	64	表3 出土遺物破片数表 .....	71
図7 ピット群、同 出土遺物 .....	65		

## 写真図版目次

図版1 溝1・2 (南から) .....	73	柱穴群 (東から)	
建物4 (西から)		土壤2・3・4 (東から)	
建物6 (北から)		図版2 出土遺物 .....	74

# 第1章 環境と立地

今小路西遺跡(神奈川県遺跡台帳No. 201)は、JR鎌倉駅の東方約20m付近の現車道に沿った南北約122m×東西約30m、扇ヶ谷から現六地蔵交差点に至る南北に広い範囲が呼称されている。西は無量寺ヶ谷と佐助ヶ谷を形成する丘陵に限られ、この丘陵の南端を廻り込む様に佐助川が裁許橋を経て東に流下し、やがて滑川に合流する。調査地点は遺跡地内の南東端で現六地蔵交差点に面し、若宮大路周辺遺跡群(No.242)、下馬周辺遺跡(No.200)、長谷小路周辺遺跡(No.236)と接している。

今小路は、『新編鎌倉志』では寿福寺門前から南とあり、『快元僧都記』天文8(1539)年10月の条に「扇ヶ谷の今小路」とある。何れも具体的とは言えないものの、武藏大路や他の大路・小路或は現況の道筋等から、寿福寺門前から六地蔵へと抜ける道を若宮大路東側に平行する小町大路に対応させるべく今小(大)路としている。

本遺跡地内ではこれまでに8個所で調査が実施され、地点28では両側側溝を伴う道路が、I次～V次に亘る地点29・33の調査では武家屋敷とその東前面に拡がる道路で区画された町屋域と倉庫群が、下層からは鎌倉郡衙に比定される遺構群が発見されている。北方の地点30では今小路側溝と考えられる木組の溝と町屋風の建物が、地点32では溝状土壌で区画された土地利用が把握され、井戸内から私鑄鉄や鏡の鋳型が発見されている。地点33では地点29・31の遺構群が上層・下層共に南へと拡がる様相が確認され、旧佐助川流路も発見された。

本調査地点は、かつて飢渴烟と呼ばれる鎌倉時代の刑場跡と伝えられる地を弔う為に祀られた六地蔵に接近する。これまでの付近の調査成果から人骨が多量に出土したのは、地点22で宝永4(1707)年の富士山の降灰層より新しい土壌墓群が、やや南西に離れた地点37で遺構覆土最上層に頭蓋骨の集積が発見された以外にはない。本遺跡地内の発掘調査・確認調査の成果等からは、本地点付近は砂丘上に立地し付近には鎌倉期の幹線道路が通り、墓域よりも町屋的な職能人の活動域であったと考えられる。



図1 今小路西遺跡の範囲と調査地点  
— 55 —

## 第2章 調査の概要

### 調査経緯から結果に至る概要

本調査は店舗併用住宅建設の事前相談を受け、確認調査と諸協議を経て建物基礎構造に因り埋蔵文化財への影響を避けられない範囲と深さを対象として実施された。調査対象面積は約40m<sup>2</sup>であるが、表土掘削の際に既存埋設物が確認された範囲を調査に伴う残土置場として調査区外と見なした為、実際の調査面積は35.5m<sup>2</sup>程度である。調査では近世以降の堆積土を重機に依って除去後、概ね現地表下約70cm(海拔7.6m前後)の砂層上(図2の2層)で遺構確認を行ったが、規定深度と湧水のために下層の遺構群の完掘と堆積土の観察は行い得なかった。調査の結果、調査地点東側現車道とほぼ並行する南北方向の溝状遺構、これとほぼ同じ軸方位の方形堅穴建物6軒、土丹地業、ピット群、土壙を発見した(図2)。全ての記録保存終了後に関係各方面に調査終了の旨連絡し、出土遺物と器材等を撤収し調査終了とした。

### 調査の方法(図2)

調査に際し、敷地境界を囲む方眼を調査範囲の形状に合わせて任意に設定した。図2にはグリッド配置及び遺構全測図と堆積土層模式図を示した。グリッドは2m方眼とし、南西隅をA-0として東西南北に算用数字を、南北方向にアルファベットを付した。グリッド杭C-6に国土座標値(X:-76276 Y:-25797)を机上で求めた。算出方法及び付近調査地点のグリッド配置は、本誌第1分冊所収の3. 下馬周辺遺跡(由比ガ浜二丁目106番6外地点)第2章を参照されたい。

### 堆積土層(図2)

本調査地点の堆積土は、近世以降の堆積土を除去後に中世遺物・土丹粒・炭化物粒を内包する黄灰色の砂層が遺構部分を除いて調査区全域に確認された。確認調査時の断面観察から、黒色砂粒が不規則に混入する間層があり(図2の3層)中世期の遺構が2時期に分れることが判断されたが、下層の遺構は土壙3基を部分的に確認したに留まった。付近の基盤層である混入物を含まない砂層は溝と方形堅穴の掘り方断面で確認している。

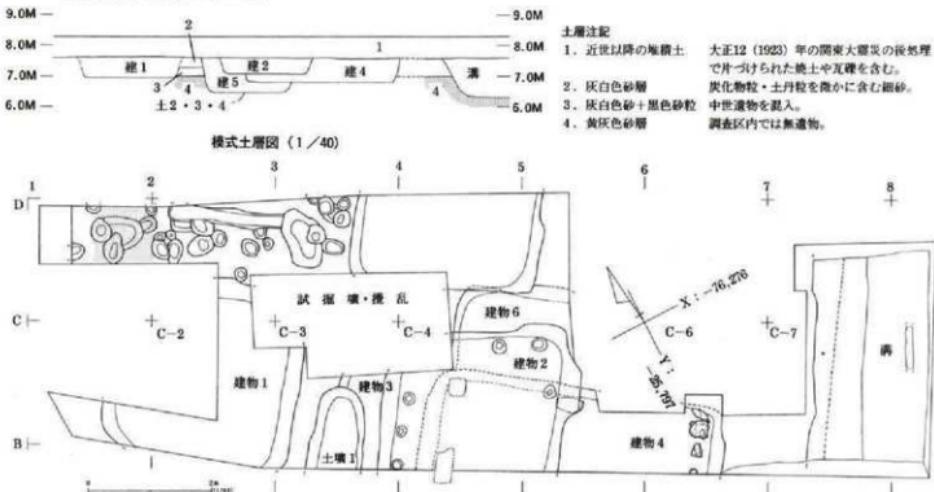


図2 遺構全測図と堆積土層模式図

## 【調査地点及び報告書】(本報文に共通する)

下馬周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.200)

- 地点1. 由比ガ浜二丁目2番2地点 1988年調査。未報告。
- 地点2. 由比ガ浜二丁目1011番1地点 1989年調査。『下馬周辺遺跡発掘調査報告書 一鍾倉女学院地点一』1998年3月 下馬周辺遺跡発掘調査団
- 地点3. 由比ガ浜二丁目27番9地点 1989年調査。未報告。
- 地点4. 由比ガ浜二丁目18番12地点 1990年調査。『下馬周辺遺跡 東京電力鍾倉営業所改築に係る発掘調査報告書』1992年3月 下馬周辺遺跡発掘調査団
- 地点5. 由比ガ浜二丁目2番10地点 1990年調査。未報告。
- 地点6. 由比ガ浜二丁目107番1地点 1995年調査。『下馬周辺遺跡(No.200)(由比ガ浜二丁目107番1地点)』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第2分冊)』1997年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点7. 由比ガ浜二丁目2番12地点 1998年調査。『下馬周辺遺跡発掘調査報告書4 一由比ヶ浜二丁目2番12地点』1998年9月 下馬周辺遺跡発掘調査団
- 地点8. 由比ガ浜二丁目110番5地点 1999年調査。『下馬周辺遺跡(No.200) 由比ガ浜二丁目110番5地点』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成11年度発掘調査報告(第1分冊)』2001年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点9. 由比ガ浜二丁目106番6、7外地点 2000年6~8月調査。本誌第1分冊所収。
- 地点10. 由比ヶ浜二丁目2番6、33地点 2001年調査。未報告。
- 地点A. 2000年確認調査。筆者実見。

若宮大路周辺遺跡群(神奈川県遺跡台帳No.242)

- 地点11. 御成町12番18地点 1984年調査。『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10 千葉地東遺跡 鍾倉県税事務所建設工事にともなう鍾倉市御成町遺跡の調査』1986年2月 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 地点12. 御成町228番2・130番1地点 1985年調査。『御成町228番2他地点遺跡 片岡ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年12月 千葉地東遺跡発掘調査団
- 地点13. 由比ガ浜一丁目128番7地点 1986年調査。『若宮大路周辺遺跡群(由比ガ浜一丁目128番7地点)』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4 昭和62年度発掘調査報告』1988年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点14. 由比ガ浜一丁目118番8地点 1987年調査。『若宮大路周辺遺跡群 由比ヶ浜一丁目123番5外地点』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』1995年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点15. 由比ガ浜一丁目117番1地点 1988年調査。『由比ガ浜1-117-1地点遺跡 一若宮大路周辺遺跡群・堀口ビル建設に伴う緊急発掘調査報告書一』1991年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点16. 地点17. 地点18. 御成町778番1地点 1988年調査(未報告)。
- 御成町727番地点 1990年調査(未報告)。
- 御成町868番地点 1990年調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 鍾倉駅西口自転車駐車場及び(仮称)鍾倉市在宅福祉サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書 一鍾倉市御成町868番地点一』1993年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団/鍾倉市教育委員会
- 地点19. 小町一丁目1028番1地点 1990年調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 一小町一丁目1028番1地点一』1997年3月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点20. 御成町872番14地点 1991年調査。『若宮大路周辺遺跡群(No.242)(御成町872番14)』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度発掘調査報告』1992年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点21. 由比ガ浜一丁目120番6地点 1991年調査(未報告)。
- 地点22. 由比ガ浜一丁目121番5地点 1993-94調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書(由比ヶ浜一丁目121番5地点)』1995年5月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点23. 由比ガ浜一丁目123番5地点 1994年調査。『若宮大路周辺遺跡群 由比ヶ浜一丁目123番5外地点』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告(第1分冊)』1995年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点24. 由比ガ浜一丁目118番7地点 1996年調査。『若宮大路周辺遺跡群 由比ガ浜一丁目118番7地点』『鍾倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第2分冊)』1997年3月 鍾倉市教育委員会
- 地点25. 御成町884番6地点 1997年調査。『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』1999年6月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

- 地点26. 御成町788番3地点 1995年調査。「若宮大路周辺遺跡群(№242)(御成町788番3外地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告』 1997年3月 鎌倉市教育委員会  
『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 御成町788番3地点』 1997年3月 若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点27. 御成町786番1地点 1999年調査。 「若宮大路周辺遺跡群の調査」『第10回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 2000年8月 鎌倉考古学研究所
- 地点B. 2000年確認調査。筆者実見。
- 地点C. 1996年確認調査。筆者実見。
- 地点D. 1996年確認調査。筆者実見。
- 今小路西遺跡(神奈川県遭跡台帳№201)**
- 地点28. 御成町15番5地点 1980年調査。『千葉地遺跡 鎌倉市御成町15-5番所在 中世市街地遺跡の発掘調査』 1983年3月 千葉地遺跡発掘調査団
- 地点29. 御成町625番3地点 1984-85年調査。『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』 1990年1月 今小路西遺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会
- 地点30. 犀ヶ谷一丁目131番1地点 1987年調査。 「今小路西遺跡(犀ヶ谷一丁目131番1地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』 1989年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点31. 御成町625番2地点 1988-89年調査。『今小路西遺跡発掘調査報告書 社会福祉センター用地・御成町625番2地点』 1993年7月 今小路西遺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会
- 地点32. 由比ガ浜一丁目213番3地点 1991年調査。『今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目213番3地点』 1993年7月 今小路西遺跡発掘調査団
- 地点33. 御成町625番3地点 1991-92年調査。『今小路西遺跡(御成小学校内)第5次発掘調査概報』 1993年8月 今小路西遺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会
- 地点34. 由比ガ浜一丁目148番1地点 2000年7月調査。 本誌第1分冊所収。
- 地点35. 由比ガ浜一丁目183番1地点 本稿調査地点。
- 地点36. 由比ガ浜一丁目148番5地点 2001年調査。 2002年度報告。
- 長谷小路周辺遺跡(神奈川県遭跡台帳№236)**
- 地点37. 由比ガ浜三丁目223番11地点 1989年調査(未報告)。
- 地点38. 由比ガ浜三丁目228-229番地點 1991年調査。 「長谷小路周辺遺跡(由比ガ浜三丁目229番外)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第2分冊)』 1993年3月 鎌倉市教育委員会  
『長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目258番1地点(№236) 一中世都市外縁部市街地における町割りの調査』 1995年 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点39. 由比ガ浜三丁目228番2地点 1996年調査。 「長谷小路周辺遺跡(№236) 由比ガ浜三丁目228番2の一部外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)』 1998年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点40. 由比ガ浜三丁目1262番2外地点 1998年調査(未報告)。
- 地点41. 由比ガ浜三丁目1262番6外地点 1999年調査。 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一鎌倉市由比ガ浜三丁目1262番6外地点(№236)』 2000年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 国指定史跡 若宮大路遺跡**
- 地点42. 『国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書・V 一主要地方道横浜鎌倉線史跡若宮大路修景計画に伴う遺跡発掘調査』 1991年3月 史跡若宮大路遺跡発掘調査団  
42-1 第2次調査トレンチA 42-2 第2次調査トレンチB 42-3 第2次調査トレンチD
- 材木座町屋遺跡(神奈川県遭跡台帳№261)**
- 地点43. 材木座一丁目910番地点 2000年調査。 『材木座町屋遺跡発掘調査報告書 鎌倉市材木座1丁目910番地点』 2001年9月 材木座町屋遺跡発掘調査団
- 地点F. 2000年確認調査。筆者実見。
- 地点G. 2000年確認調査。

- 註 ① 調査地点及び刊行報告書は2001年9月末日現在。未報告の地点は各調査担当者のご教示に依る。  
 ② 調査地点№は今小路西遺跡と下馬周辺遺跡は全調査地点、他の4遺跡と確認調査地点は報文中で触れたものを各遺跡ごとに調査年順に付している。何れも渡邊美佐子協力の基筆者調べに拠る。  
 ③ 地点№と報告書名は本報文及び本誌第1分冊所収「下馬周辺遺跡・由比ガ浜一丁目106番6、7地点」報文に共通する。但、地点3・19・40・41・43・F・Gは本報文図1の範囲外。

### 第3章 遺構と遺物

調査では第2章で述べた灰白色～白黄色砂層上で遺構確認を行った。発見した遺構は溝1条(2時期)、建物址6軒、土丹地業、ピット群である。以下、発見した遺構と出土遺物について触れる。遺構は調査深度規制に従い、大まかにグリッド3ラインより東と5～7ラインの間は下層の遺構の調査は行っていない。出土遺物について瀬戸窯製品・常滑窯製品・火鉢類・錢に関して参考にした文献、及び図示した遺物の計測値と各遺構・層位からの出土点数表1～3は、報文末に記した。

#### 溝(図3)

調査区の東端で軸方位N-41° 40' -Eの南北方向に発見された。新旧2時期と視られ、溝1・溝2とした。底面は付近で中世地山とされる白黄色砂層。溝1の西壁際に杭が、溝2の底面には炭化した木材片が辛うじて遺存していたが、溝の構造や機能については発見範囲からは不明。堆積土や遺構断面の観察からは、地点30で発見されている様な断面箱掘りで木組構造の溝とは性格が異なると思われる。

#### 溝1出土遺物(図3-1～4)

1・2は糸切り底のかわらけ。1は器表灰褐色、2は橙色で焼成は良好。3は龍泉窯系青磁盤。胎土は灰白色で気泡があり、釉調は緑青色。4は常滑窯片口鉢I類で、夾雜物の多い胎土。

#### 溝2出土遺物(図3-5～14)

5～9は糸切り底のかわらけ。器表橙色系で、焼成は良好。10は常滑窯甕。5型式。11・12は龍泉窯系の青磁。11は蓮弁文碗、釉は灰緑色。12は無文鉢、釉は透明感のある灰緑色。13は尾張型の山茶碗。内面少量ながら自然釉が残り、摩滅した使用痕は観られない。14は土器質浅鉢形火鉢でI.C類。胎土に軟礫を含み焼成は良好で硬め、口縁下に内面から穿孔されて貫通し、内面上位には被熱痕。

溝内からは多くの遺物が出土しており、図化し得なかったものでは、かわらけは法量中型が溝1・溝2共に観られ、溝1からは体部が開き気味に立上がるものが含まれるが、やや厚手になり外反傾向のものは含まれない。瀬戸窯製品は中期までであり、常滑窯の製品は甕の口縁部で観れば8型式以降のものは含まれず、片口鉢はII類の方が多く、火鉢類にはIII類も含まれる。

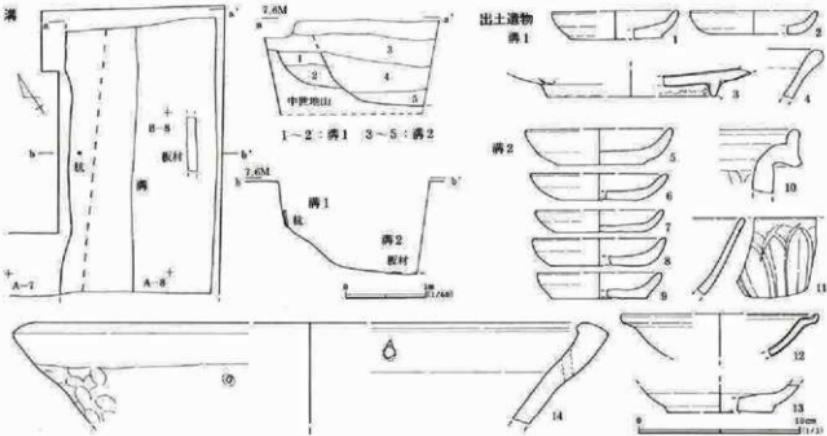


図3 溝、同 出土遺物

### 建物1(図4-1・1~9)

調査区の南側で発見された方形堅穴建物。覆土は茶褐色砂層で、人為的に埋め戻される。確認レベルは海拔7.52m、検出規模は南北2.88m×東西3.12m、遺存する壁高0.56m、造構底面のレベルは海拔7.00m前後、軸方位はN-42° 50' -E。想定される全体規模は3m強の正方形であろう。構造は不明、機能については出土遺物から観ても特定し得ない。

### 出土遺物(図4-1・1~9)

1~6は糸切り底のかわらけ。器表1は灰褐色、他は橙色系で何れも焼成は良好。7~8は白磁口元皿。何れも胎土灰白色、乳白色の釉が極薄く外底面まで施釉される。9は尾張型の山茶碗。建物1の出土遺物は少なく、かわらけは図示したもので出土傾向を反映し、常滑窯窯は6~7型式である。

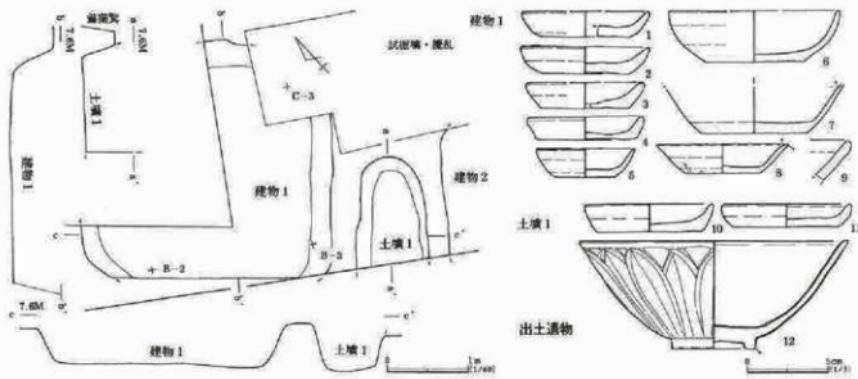


図4-1 建物1・土壤1、同出土遺物

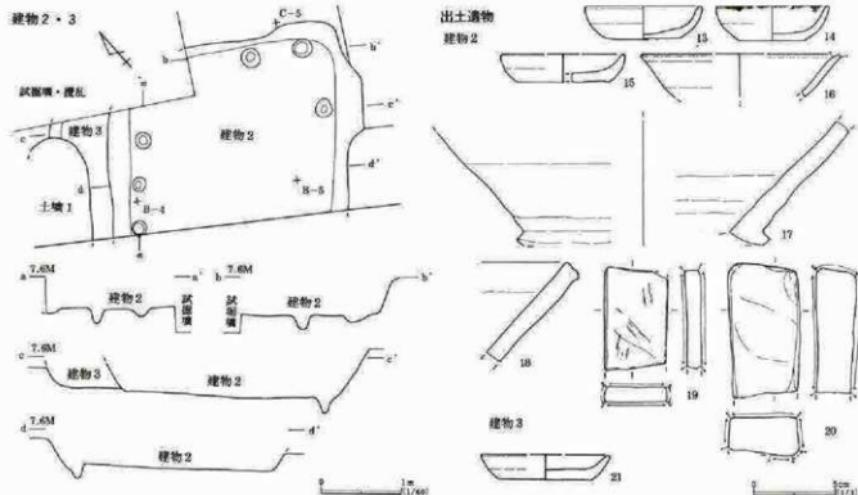


図4-2 建物2・3、同出土遺物

### 土壤 1(図 4-1)

調査区の南端、建物 1 の東側で発見された。建物 3 の上層に掘り込まれ、覆土は茶褐色砂層。検出規模は南北 1.36m × 東西 0.88m、深さ 0.60m。浜地で発見例の多い、区画や地割を示唆する溝状土壤であろう。

### 出土遺物(図 4-1・10~12)

10・11は糸切り底のかわらけ。10は器表灰褐色、11は灰橙色で共に焼成は良好。12は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。釉は透明感のある草緑色で、高台脇まで掛けられる。図化した以外の出土遺物では、かわらけは10・11の様な器形は寧ろ少なく、法量中型を含み胎土精良なものが殆どである。

### 建物 2(図 4-2)

調査区の南側で発見された方形堅穴建物。覆土は炭混じりの茶褐色砂層～暗茶褐色砂層で、人為的に埋め戻される。確認レベルは海拔 7.6m、検出規模は南北 2.40m × 東西 3.18m、遺存する壁高 0.62m、造構底面のレベルは海拔 7.1m 前後、軸方位は N-42° 40' - E。不規則な配置ながらも底面からは深さ 10~20cm のヒットが 6 口発見され、柱材や杭で壁板と上屋の支えとする木材構造であろう。鎌倉市内の類似検出例から観ると、この類はほぼ正方形で入口施設状の張出し部分を伴うものが多く、住居様の機能が指摘される。想定される全体規模は 3m 強の正方形であろうか。

### 出土遺物(図 4-2・13~20)

13~15は糸切り底のかわらけ。器表橙色系で焼成は良好。16は白磁口元皿。胎土は砂粒を微かに含み灰白色、釉は透明感のある灰白色。17・18の常滑窯片口鉢 II 類は、接合はしないが同一個体の可能性がある。7 型式か。19は鳴滝産の仕上砥で、小口と両側面には生産地加工痕が遺存する。表裏 2 面の砥面は平滑で、直刃の研ぎに使用か。20は天草産の中砥で、小口は生産地加工痕が遺存する。総面使用で砥面はやや歪み、曲刃の研ぎに使用され、一角には何かではつた様な消費地加工痕が観られる。

建物 2 の埋土に混ざって多量に出土した遺物は、かわらけは法量中型で胎土精良なものを含むが、大型品に体部が開き気味になりかけているものが含まれる。瀬戸窯製品は瓶子類片や折線深皿胴部片が出土し何れも中期の製品。常滑窯製品は甕の口縁部片で観ると、6 b ~ 7 型式で 8 型式のものは含まれない。又、食物残渣の貝類(アカニシ・チョウセンハマグリ・バイ他)や魚獣骨類も多く出土している。

### 建物 3(図 4-2)

土壤 1 と建物 2 及び試掘壙に因りその殆どを失うが、壁の立上がりと平坦な底面から方形堅穴建物と判断した。覆土は暗茶褐色砂層。確認レベルは海拔 7.46m、検出規模は南北 1.56m × 東西 0.71m、遺存する壁高 0.24m、造構底面のレベル海拔 7.2m 前後。軸方位や構造・機能は不明。

### 出土遺物(図 4-2・21)

21は糸切り底のかわらけ。器表灰褐色で焼成は良好。

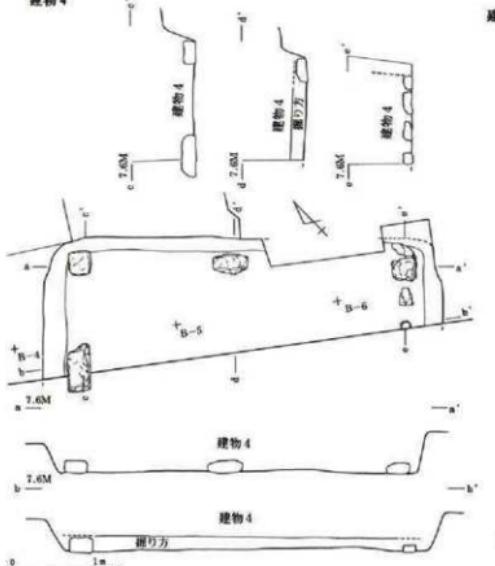
### 建物 4(図 5)

調査区のほぼ中央南端に発見された方形堅穴建物。覆土は炭化物を多く含む暗茶褐色砂層で、建物 2 に因り覆土の大半を失う。確認レベルは海拔 7.32m、検出規模は南北 1.66m × 東西 4.94m、遺存する壁高 0.54m、造構底面のレベルは海拔 6.86m、軸方位は N-42° 00' - E。掘り方底面上壁直下の要所に配した礎石上に、柱を建てる枘穴の空いた角材を敷き束柱で壁板の支えとする木材構造であろう。建物 4 にはやや不正形で再利用かと思われる様な鎌倉石が使用されているが、鎌倉石の位置から上屋の支えとする柱が建つのかもしれない。鎌倉石上面のレベルは海拔 7.00m ではほぼ一定し、同レベルで堆積土がやや硬化した様な粘質土に変ることから、床板が敷かれていたのであろう。市内の類似検出例から観ると、この類は平面正方形で掘り込み壁は深く、床面を強化した上に広い空間を内部に確保できることから倉庫様の機能が指摘されている。想定される全体規模は 5m 強の正方形であろうか。

### 出土遺物(図5-1~14)

1~5はかわらけ。1は手捏ね成形で器表灰褐色、焼成は良好。2~5は糸切り底で器表灰橙色、焼成は良好。3は灯明皿で、器表内面は荒れて剥離する。6は白磁口元皿。胎土は灰白色で堅致、釉は透明感のある白色系。7は龍泉窯系青磁折腰鉢。胎土は赤褐色で堅致、釉は透明感のある灰青緑色。8は瀬戸窯灰釉卸皿。前IV期の製品。胎土は黄灰色乃至明灰色で、白色微石乃至微粒が多めに混じる弱粘質

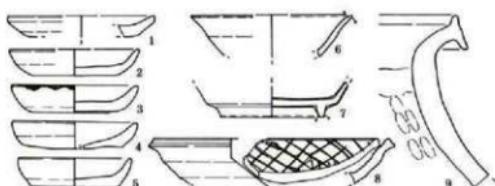
建物4



建物5



建物4



建物5出土遺物



図5 建物4・5、同出土遺物

緻密土。体部内面の格子文は図上右上方から左下方に刻まれた後に、左上方から右下方に重ねて刻まれる。使用に因る摩滅は観察されず、微かに残る片口は小さめ。9・10は常滑窯の甕。胎土は共に夾雜物が多い。5～6型式か。11は土器質浅鉢形火鉢ⅠC類。胎土は軟疊を微かに含み、焼成は良好。器表内面は口縁直下まで横ナデ、外面体部は指頭痕が残り底部脇はヘラ調整。口縁下に焼成前に内面から穿孔され貫通する。12の石製品は天草産の中砥。平滑に4面を使用しているが、仕上砥の代用として使用できる様な石目ではない。13・14は金属製品で、13は鉄釘、14は鉄製の刀子。建物4は建物2に因り上層の覆土が殆ど失われていることもあり、小破片を含めれば鎌倉石上面レベルより下位からの出土点数の方が多いが、下層出土で図化し得たのは3と5の2点のみである。又、出土した遺物の殆どはかわらけ片と常滑窯製品胴部片で、それ以外の出土遺物は土器質浅鉢形火鉢ⅠB類が1点、中期と思われる瀬戸窯小破片が2点、錆の酷い釘状の金属製品が数点と貝・獸骨類だけであった。

#### 建物5(図5)

調査区のほぼ中央北端に発見された方形竪穴建物。覆土は茶褐色～暗黄灰色砂屑。確認レベルは海拔7.39m、検出規模は遺構南壁を攤乱際と想定して南北1.62m×東西3.07m、遺存する壁高0.44m、遺構底面のレベルは部分的に掘り過ぎてはいるが海拔6.85m前後、軸方位はN-41° 00' -E。検出中または完掘後も構造に係わる部材や痕跡は一切発見されていない。建物廃棄時に利用できる部材は抜き採られたものか、構造や機能については不明。

#### 出土遺物(図5-13~20)

15～22はかわらけで、全て糸切り底。15～19は小型、20～22は大型、法量中型の破片も出土しているが図化し得ていない。15は器表灰褐色、他は橙色系。23・24は龍泉窯系の青磁。23は蓮弁文鉢、胎土は灰白色で、灰緑色の釉は高台接地面を除き施釉される。24は蓮弁文碗、胎土は灰色でやや粗く、淡緑色の釉。25は瀬戸窯灰釉鉢。前III期の製品。胎土は灰褐色で気孔があり、微石粒を含むが軟質。淡黄灰色の釉は刷毛塗り。接合はしないが建物6出土図6-9と同一個体と思われる。26・27は常滑窯の製品。26は甕で5型式。外面頸部下に条線状の線刻がある。27は鉢。胎土は妙雜物を多く含み気孔がある。外面口縁付近には降灰。建物5からは多くの遺物が出土しているが、殆どが埋土と共に移動してきたものらしく、遺物種も豊富だがそれぞれの年代にも幅がある。かわらけは手捏ね成形は少ないものの、法量中型や大型品では所謂薄手丸深から体部が薄くなり開き気味になるタイプまで含まれ、瀬戸窯製品は極少なく、舶載品は図示した2点を含めて12点出土している。常滑窯は甕は5～7型式、片口鉢は殆どがII類であり、火鉢類はI類とIII類が混在する。

#### 建物6(図6)

調査区のほぼ中央南側、建物2と4の下位に発見された方形竪穴建物。覆土は茶褐色～暗黄灰色砂屑。確認レベルは海拔6.9m、検出規模は遺構南壁を調査区際と想定すれば南北3.15m×東西2.28m、遺存する壁高0.48m、遺構底面のレベルは部分的に掘り過ぎてはいるが海拔6.5m前後、軸方位はN-41° 20' -E。本調査で発見された建物の内重複関係では最も古く確認レベルも低いが、建物1～5と同様に図2の2層からの掘り込みと思われる。調査規定深度が深い部分だけ遺構底面まで完掘している。調査区南壁寄りに建物と同軸方向で、根太様の木材が幸うじて遺存していたが構造に係わるものかは不明。出土遺物からも建物の機能や性格は見いだせない。

#### 出土遺物(図6-1～15)

1～4は糸切り底のかわらけ。器表灰橙色で焼成は良好。建物6から出土したかわらけは小破片ばかりで迂闊なことは言い難いが、小型品は図示した様な器高の低いものが多く、法量それと分る中型品は目に付かず、大型品と同様に体部は薄手とは言えない。手捏ね成形のものは摩耗した小破片4点のみである。

5～8は龍泉窯系青磁。5～7は蓮弁文鉢。何れも胎土は灰白色で緻密、釉調は青緑色でやや厚く施釉され、二次焼成で器表は荒れている。7は双魚文が僅かに残る。8は盤。胎土は灰白色で気泡がありやや軟質、釉調は灰緑色。9は瀬戸窯灰釉卸皿で、接合はないが建物5出土の図5～25と同一個体であろう。前Ⅲ期の製品。10～13は常滑窯の甕。建物6からは100余片の常滑窯製品が出土しているが、甕の口縁形態は13の様なものはほぼこれ1点であり、他は概ね図示した10～12の如く5～6型式である。14は常滑窯の片口鉢I類。片口鉢はII類の方が多いがI類も一定量を占めている。15の骨角製品は、切離した後の鹿角。他に図化していない遺物は舶載品が19点、渥美窯が壺底部片を含めて4点、火鉢類は土器質浅鉢型IC類が2点等である。

#### 土壤2・3・4(図6)

建物2・3の下層で発見され、3基とも建物6より古く、土壤4が土壤2・3より古い。掘込み層位は間層(図2～3層)より下で、建物群や構造より層位的にも古い遺構群。覆土は暗黄灰色乃至黄茶褐色の砂層。湧水が激しく、平面プラン検出後にまとめて掘り上げ、土層断面から新旧関係と土壤4の下場を土層断面dで確認した。

#### 出土遺物(図6 16～22)

16～18はかわらけ。16の器表は灰褐色、他はオレンジ系。何れも胎土がやや砂っぽいが焼成は良好。19・20は常滑窯の甕。6型式。21は瓦器碗。胎土は灰白色で器表は黒色処理され、内面は磨かれた後に縦位と細かい横位の暗文、外面上位は横位の暗文、下位は指痕痕が残る。22は鳴滝産の仕上砥。両側面には生産地鰐痕が残る。図化し得ない遺物は、かわらけは図示したものと胎土・器形は大差なく、常滑窯の甕は5～6型式、他に器種不明白磁片、渥美窯壺片、鉄釘が出土している。

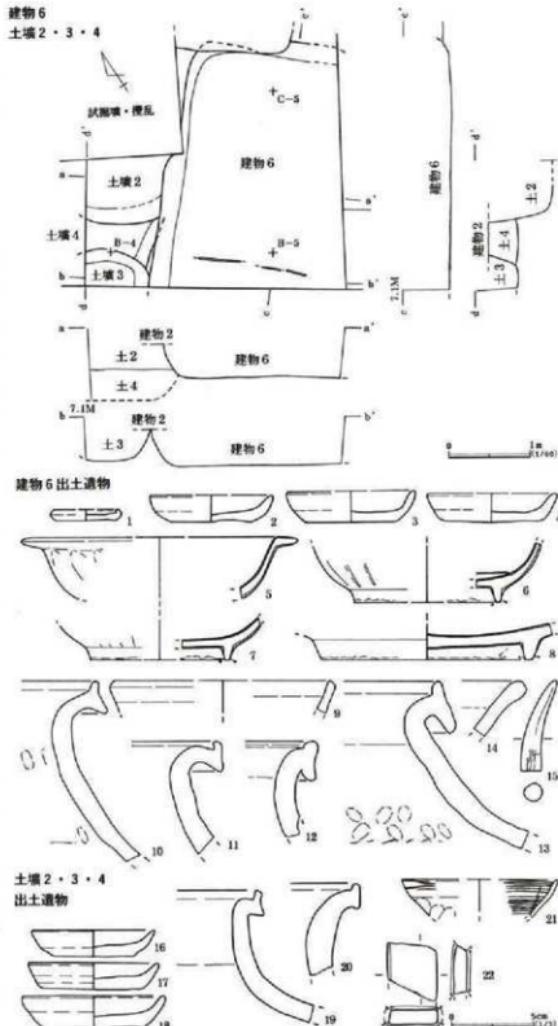


図6 建物6、同出土遺物

## 柱穴群

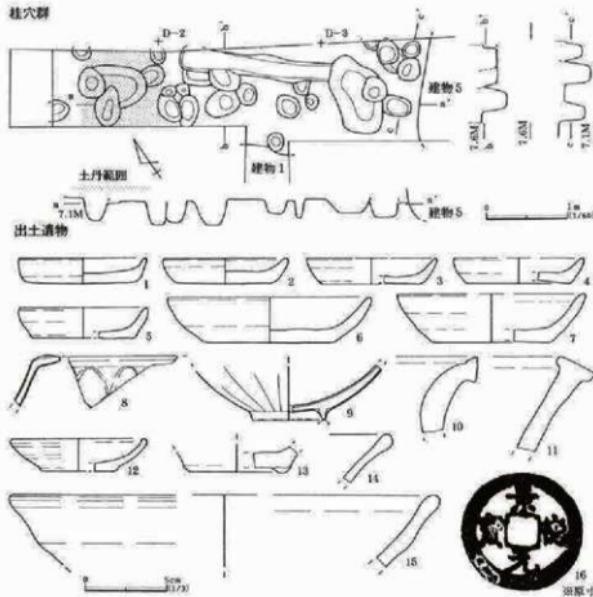


図7 ピット群、同出土遺物

## 出土遺物(図7-1~16)

1~7はかわらけ。1~5は小型品。何れも器表灰褐色で、焼成は良好。6~7は大型品。6は器表褐色、7は橙色で何れも焼成は良好。8・9は龍泉窯系青磁。8は蓮弁文鉢、胎土は灰白色で精緻、暗緑色の釉がやや厚く施釉される。9は蓮弁文碗。胎土は淡褐色でやや軟質、褐色味に渋った釉は高台接地面を除きやや厚く施釉される。10は常滑窯の甕。5型式。11は土器質浅鉢形火鉢I C類。内面は横位のナデ調整、外面は指頭痕が遺る。12は東遠系山皿。胎土は暗灰色乃至灰褐色、器表灰黒色で口唇部に降灰が遺るが、内底面はやや摩滅している。13は尾張型山茶碗。5~6型式。胎土は暗灰色、微かに粉穀痕の観られる高台は貼付け、器表内面は二次焼成に因り赤褐色に変色し摩滅している。14・15は常滑窯片口鉢1類。何れも胎土は灰白色で灰雜物を多く含み粗い。16は北宋の銅錢で景祐元寶。1004年初鋤の楷書。図7に示した範囲の遺物は、遺構毎の採り上げを怠り層位・及び出土遺物の年代的な混在が多いままに図示してしまった。図化していない他の出土遺物は、かわらけは手捏ねが数破片混じる程度で図示した1・5より古手のものは見あたらず、胎土精良で薄手丸深以降のタイプは混じらない。手捏ね成形の白かわらけ片が1点出土している。舶載品は數破片、瀬戸は出土せず、常滑窯甕は5~6型式である。火鉢類はI B類が1点出土している。

## 遺構外出土遺物(図8-1~24)

確認調査の際に出土した遺物や、表土掘削中或は調査中に不手際に因り帰属が分らなくなってしまったものをここに含めた。1~9はかわらけ。概ね器表橙色系で、焼成は良好。7は口唇部を指で押し出す様にして片口を2箇所造り出す。10~12は龍泉窯系の青磁。10は蓮弁文皿、胎土灰白色、釉は暗緑色で不透明。11・12は蓮弁文碗。何れも胎土は暗灰色で、気泡があり軟質、釉は灰緑色。13は白磁の皿。

## ピット群(図7)

調査区北西端の一角は、海拔約7.5mで図2-3層・4層が確認調査断面から観察されていた。グリッドD-2より東で幅約1mの範囲に、細粒の土丹面が発見されたが性格は不明であり、他に遺構は発見されなかった。図7には土丹層除去後調査規定深度に達したこともあり、掘り上げた遺構群を図示した。大まかにグリッドD-3より西では図2-3層、東では同4層上面である。発見された遺構は、ピット、小土壙、溝状遺構である。これらは既に触れた溝や建物の軸方向とは会わず、規則的な配置も認められない。

胎土は灰白色、釉は不透明な白色系で気孔がある。14は尾張型の山茶碗。胎土は灰褐色、器表はやや荒れており口唇付近には自然釉に

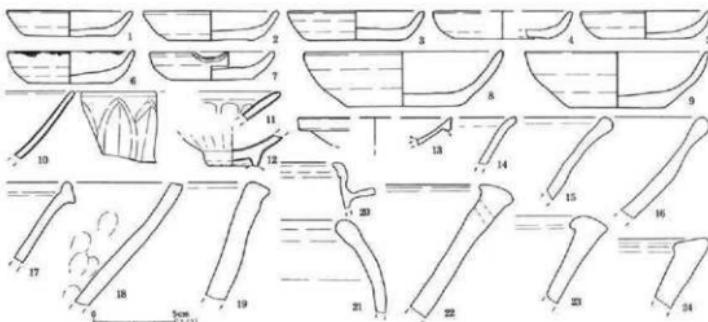
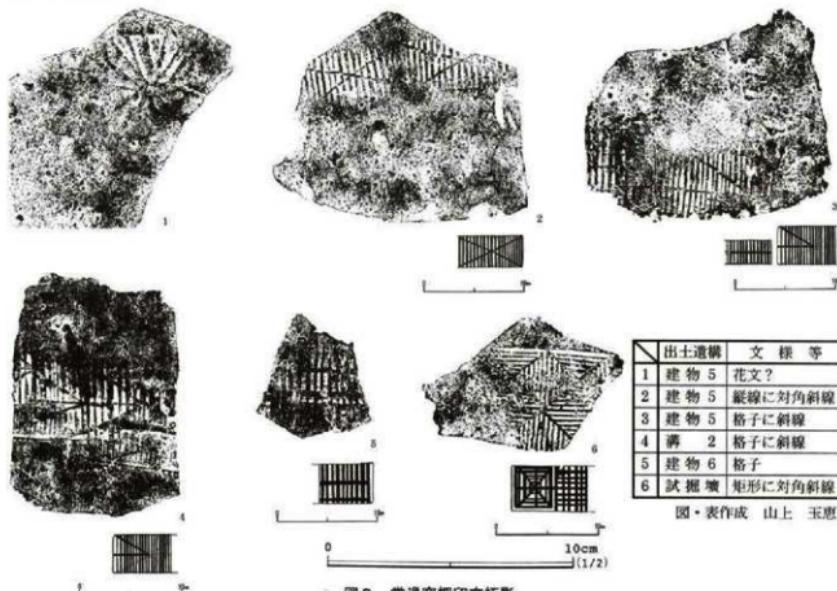


図8 遺構外出土遺物

因るものか黒ずむ部分がある。15・16・18・19は常滑窯片口鉢。15・16はI類、18・19はII類。17は魚住窯の捏鉢。内面は口縁直下まで摩滅している。20は鍔釜型土鍋。胎土は粉質で輝粒が混じる。鍔の下方に煤が付着する。21～24は火鉢類。21は胎土は瓦器質だが黒色処理されず、焼成はあまり良くない。内面は横位のナデ、外面は器表が荒れているが口唇部と胴部中位は磨かれている。小片の為図示した傾きには不安がある。胎土・調整・器形を細目するとこれまでの分類には当て嵌めかねる。22・23は浅鉢型 I C類。内面と外部口縁下は横位のナデ、胴部は縦方向の刷毛目。図9には遺構内及び確認調査の際に出土した、常滑窯の甕に捺された押印文拓影を縮尺1/2で示した。何れも肩部下位から胴部中位で、個体の傾きに併せ上方を天にしている。



出土遺構	文様等
1 建物5	花文?
2 建物5	縦線に対角斜線
3 建物5	格子に斜線
4 潟 2	格子に斜線
5 建物6	格子
6 試掘壙	矩形に対角斜線

図9 表作成 山上 玉恵

図9 常滑窯押印文拓影

# 第4章 調査成果

## 1. 遺構の変遷と年代観

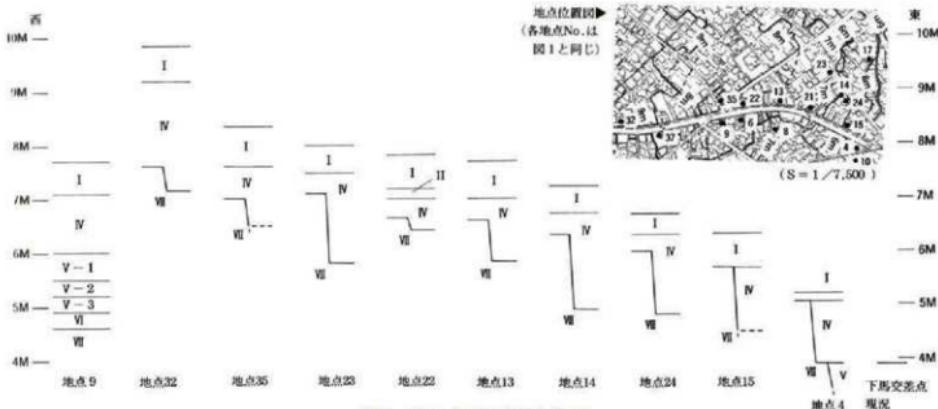
本調査では現西側車道とほぼ平行する溝と、この溝に軸方向をほぼ同じくした建物址を6基発見した。建物2～6はそれぞれ重複関係にあり同時期には存在し得ないが、倉庫状の建物4の後に住居の可能性もある建物2が建てられている。これら建物2か4と同時期の存在を想定し得、地割を示唆する溝状の土壙1の西には建物1がありその北側には建物は構築されていない。建物2か4と建物1が並立する確証は心許ないがその時期には建物5は埋没しており、調査区北東端土丹地業より東に建物のない空閑地が想定されようか。年代は報文中出土遺物の稿で大まかに述べた出土遺物の様相から、建物が隆盛する以前の土壙2～4や、建物5に先行する北東端柱穴群の出土遺物から、13世紀後半には生活の痕跡は窺える。その後13世紀後葉頃～14世紀前葉には建物の興廢が活発になり、出土遺物から観ると14世紀の中頃に調査範囲内で発見された遺構は機能を失っている。中世以前と地点22で発見された近世期の遺構と遺物は、本調査地点では顕著には把握されなかった。

## 2. 調査地点周辺の成果から

本調査地点から下馬四ヶ角に至る道筋周辺で、これまでに調査された約20箇所の成果から、遺構や出土遺物の様相及び年代観に共通点も観られる。又、第1章でも触れた様に、文献からは中世鎌倉の基軸となる幹線道路が付近を通ることや、小河川が下馬四ヶ角周辺で滑川と合流するであろうことも推定されている。本稿では周辺の堆積土層や遺構の軸方向から旧地形について考えてみる。以下の文章中で数値は海拔高度(m)を表し、各調査地点No.は本報文第1章及び本誌第1分冊所収「下馬周辺遺跡 由比ガ浜二丁目106番6、7地点」報文第1章図1・2と、土層番号I～VIIは同上報文第1章図3とそれぞれ共通する。併せて参照されたい。

図10には本調査地点(地点35)と周辺の調査地点の堆積土層を模式的に示した。土層は現況地表レベルから中世基盤層と考えられる砂層までを、確認された最高位と中世遺構底面での最低位で示している。

I層は近世以降の堆積土で、本調査地点を始め1923(大正12)年の関東大震災の後片付け層から江戸中期の遺物も内包する。III層は方形堅穴建物等中世遺構覆土で概ね砂層乃至砂質土。V層は湿地性の堆積



土、VI層は有機物腐食土層、VII層は灰雜物を含まない細粒砂。V・VI層は地点6・8・9に顕著で地点13～15・22・24では殆ど観察されない。

地点13～15・22・24・35は、上本(2000)に拠ると弥生期には既に成立し西から延びる砂丘の東南端上にあり、地点15を除いて現地表・VII層上面共に7m以上で、遺構の主体は方形堅穴建物である。この砂丘の北縁では調査例が少ないと、地点31では中世・古代共に地点33の遺構群が南へと延びることを確認、又、佐助川旧流路を発見している。地点34でも中世・古代の生活址を、地点36では土丹混じりの客土で生活面を構築し数時期に亘る生活址を発見している。地点Bは現地表下2m以上が近世以降の盛土を除いて湿地或は河川の影響下にあり、地点17は河川覆土または氾濫原と考えられる堆積土である。地点31・34・36では最高位6.5m前後で土壤化した中世以前の砂層を確認しているが、地点B・17では中世砂層VIIも未確認である。以上のことから佐助ヶ谷に源を発し谷戸内を南下した佐助川は、前記砂丘を越えられずに御成山裾を廻る様に東へと向きを変え、地点31付近を経て地形の下がるままに流下し地点E辺りに至る。大河内(1997)が指摘する通り現流路とそう変わらず、もう少し言及すれば、現地表等高線(地点9報文図1・2)から観ると現流路より南、又、地点23と34の北側現車道より北であろう。

地点E辺りでは、無量寺ヶ谷に源を発し地点11・12・16に発見された河川、大河内(1997)のいう(仮称)御成川が合流する可能性がある。地点27では流下した延長が発見され、調査区内で大きく東に向きを変えている。以下、その先の流路は筆者の半ば強引な推定になるが、地点16で木組の方形堅穴建物が発見されておりこれより南は流下し難く、地点16と地点Cを結ぶ道筋に沿う様に地点C辺りに至ると考える。確認調査地点C～Eでは、概ね現地表下2mまで掘り下げても中世砂層VIIは疎かIII層に該当する堆積土も観察されず、全て大型土丹層で一気に埋立てられており御成川の影響と考えている。材木座町屋遺跡内で行われた確認調査では、旧流路が現況に付け変えられる以前の滑川流路や氾濫原には、大型土丹層で2m以上一気に埋立てた例が多い。地点C辺りからは地点18より西との間の現況でも4m前後と低い一帯を流下し、地点25では現地表ほぼ直下に中世の遺構と遺物が内包されて下層のVII層と思われる砂層の堆積に遮られ東へと流下できずに、地点Dを経て地点Eに至るのではないか。

地点Eからどう流下するかは、地点1・5・7・20・25・42-1で発見されている南北方向の河川との関係もあり本稿では保留し、興味深い点だけを述べるに留める。地点4報告書では調査区東端に河道の可能性を指摘しており、地点10の調査では、調査区の南端で下馬周辺遺跡南縁に横たわる砂丘(地点9報文第2章参照)の北縁らしき砂層を確認し、調査区の北端下層では湿地状の堆積土を観察している。地点15が砂丘東端に位置する為各層のレベルが低いとすれば、地点Eから砂丘の裾野を廻り込む様に南下し地点4又は地点10の北で東へと向きを変え、やがて滑川に至るとも考えられよう。一方、『鎌倉市史』に拠れば佐助川は大町大路を横切らずに下馬四ッ角の北方で若宮大路を横切り滑川に合流し、下の下馬橋と琵琶橋は別のものとしている。地点1・5・7の反対側の歩道上には、現在でも以前の橋の位置を示すという石柱が残されており、地点Eから西の付近の現家並に流路方向の名残を観るのは穿ちすぎであろうか。

大町大路・今大(小)路と中世鎌倉の基軸となっていたであろう幹線道路が、図13の周辺どこかを通ると推定されながら、未だにそれほどの規模の道路は発見されていない。既に多くの指摘がある様に若宮大路を中心とした鎌倉の中核域は兎も角、そこから空間的に距離を置いた地域では自然地形を大きくは無視することなく道路を通し街割が為されていたであろう。地点13～15・22・24・35の方形堅穴建物の軸方向は、概ねN=20～40° Eを測る。砂丘の起伏や時期に依る佐助川の蛇行も考えられ、この数値の評価は多々あろうが、これまでに述べた佐助川の旧流路延いては若宮大路以西の大町大路、或は他の調査地点の遺構軸方向と御成川流路から今大(小)路の軸方向を類推する一助にはなろうと考えている。今後の確認調査を含めた調査成果に期待したい。

【引用・参考文献】(本報文に共通する)

- 鎌倉市史編纂委員会編 1959年 『鎌倉市史 総説編』 吉川弘文館  
白井永二 1976年 『鎌倉事典』 東京堂出版  
上本進二 2000年3月 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『東国歴史考古学研究所調査研究報告 第26集 神奈川県逗子市桜新戸遺跡発掘調査報告書』 227~246頁  
鈴木茂他 1997年3月 「下馬周辺遺跡の花粉化石」 「下馬周辺遺跡(No.200) 由比ガ浜二丁目107番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告(第2分冊)』 180~196頁  
大河内勉 1997年3月 「V. 中世鎌倉の河川について」 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 小町一丁目1028番1地点』  
若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 10~22頁  
藤沢良祐 1994年 「山茶碗研究の現状と課題」 『研究紀要』第3輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター  
中野晴久 1997年 「中世瀬戸窯の動態」 『研究紀要』 第5輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター  
1992年 「中世知多古窯址群の押印文 一ミクロ流通史のための予備的研究一」 『知多半島の歴史と現在No.4』  
日本福祉大学知多半島総合研究所  
1994年 「赤羽・中野 一生涯地における編年についてー」『中世常滑焼をおって』シンポジウム資料集  
日本福祉大学知多半島総合研究所  
河野眞知郎 1993年 「中世鎌倉火鉢考 一東国との関連においてー」『考古論叢 神奈川』第2集 神奈川県考古学会  
永井久美男 1996年 「日本出土銭総覧」 兵庫県埋蔵銭調査会

表1 出土遺物計測表（1）

通 路 名 No.	規 格 No.	道 物 名	計 測 値			単 位 (cm) 原元 規格 別体-既存部	通 路 名 No.	道 物 名	計 測 値			単 位 (cm) 原元 規格 別体-既存部					
			口 徑	底 徑	器 高				口 徑	底 徑	器 高						
溝1	3	土 器 頭	口径 (7.8)	底径 (5.8)	器高 1.8	建物2	4-2	金 瓶 頭	口径 (15.7)	底径 (15.7)			金 瓶 頭				
		土 器 頭	口径 (7.8)	底径 (5.0)	器高 1.5			金 瓶 頭	口径 (15.7)	底径 (15.7)							
		青 瓷 頭	底径 (10.6)					石 花 瓶	口径 (15.7)	長さ 8.4			青 瓷 頭				
		青 瓷 頭	底径 (1.8)					石 花 瓶	口径 (15.7)	幅 3.9 厚さ 1.0							
溝2	3	土 器 頭	口径 (8.9)	底径 (5.3)	器高 1.8	建物3	4-2	伊 予 瓶	口径 (15.7)	長さ 8.6			伊 予 瓶				
		土 器 頭	口径 (8.4)	底径 (4.7)	器高 1.7			伊 予 瓶	口径 (15.7)	幅 4.3 厚さ 2.5							
		土 器 頭	口径 (7.7)	底径 (5.6)	器高 1.4			土 器 頭	口径 (15.7)	長さ 8.6							
		土 器 頭	口径 (8.1)	底径 (6.2)	器高 1.7			土 器 頭	口径 (15.7)	幅 3.9 厚さ 1.0							
		土 器 頭	口径 (7.6)	底径 (5.9)	器高 1.6			土 器 頭	口径 (15.7)	長さ 8.6							
		常 滅 雪	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	幅 4.3 厚さ 2.5							
		青 瓷 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	長さ 8.6							
		青 瓷 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	幅 3.9 厚さ 1.0							
		青 瓷 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	長さ 8.6							
		土 器 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	幅 3.9 厚さ 1.0							
		土 器 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	長さ 8.6							
		土 器 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	幅 4.3 厚さ 2.5							
		土 器 頭	底径 (1.8)					土 器 頭	口径 (15.7)	長さ 8.6							
建物1	4-1	土 器 頭	口径 (7.8)	底径 (5.3)	器高 1.6	建物4	5	土 器 頭	口径 (8.9)	底径 (8.9)			土 器 頭				
		土 器 頭	口径 (7.9)	底径 5.4	器高 1.7			土 器 頭	口径 (7.9)	底径 (5.0)							
		土 器 頭	口径 (7.2)	底径 (5.0)	器高 1.6			土 器 頭	口径 7.8	底径 5.2 器高 1.7							
		土 器 頭	口径 6.9	底径 5.4	器高 1.5			土 器 頭	口径 7.5	底径 6.1 器高 1.7							
		土 器 頭	口径 6.0	底径 3.8	器高 1.8			土 器 頭	口径 (7.0)	底径 (5.4)							
		土 器 頭	口径 (14.5)	底径 5.1	器高 3.2			土 器 頭	口径 (9.8)	底径 (6.4)							
		中 国 盆	底径 (6.4)					土 器 頭	口径 (12.1)	底径 15.2							
		白 磁 口 元 盆	口径 (8.1)					土 器 頭	口径 (12.4)	底径 7.6 器高 2.2							
		白 磁 口 元 盆	底径 (4.6)					土 器 頭	口径 (12.4)	底径 7.6 器高 2.2							
		白 磁 口 元 盆	底径 (4.6)					土 器 頭	口径 (12.4)	底径 7.6 器高 2.2							
土壤1	4-1	土 器 頭	口径 (7.8)	底径 (6.4)	器高 1.7	建物5	5	土 器 頭	口径 7.6	底径 5.3 器高 1.6			土 器 頭				
		土 器 頭	口径 (7.8)	底径 (6.4)	器高 1.4			土 器 頭	口径 (7.5)	底径 (5.8) 器高 1.6							
		青 瓷 頭	口径 (16.6)	底径 5.2	器高 6.7			土 器 頭	口径 7.4	底径 4.9 器高 1.8							
建物2	4-2	土 器 頭	口径 7.1	底径 4.6	器高 2.1			土 器 頭	口径 7.2	底径 4.7 器高 1.8			土 器 頭				
		土 器 頭	口径 (6.8)	底径 (4.0)	器高 2.2			土 器 頭	口径 6.0	底径 (5.6) 器高 1.8							
		土 器 頭	口径 (7.5)	底径 (5.6)	器高 1.8			土 器 頭	口径 12.1	底径 7.3 器高 3.4							
		白 磁 口 元 盆	口径 (12.2)					土 器 頭	口径 12.4	底径 7.6 器高 2.2							
		白 磁 口 元 盆	底径 (5.6)					土 器 頭	口径 12.4	底径 7.7 器高 3.1							
土壤2	4-2	土 器 頭	口径 7.1	底径 4.6	器高 2.1	建物3	5	土 器 頭	口径 12.4	底径 (10.1) 器高 4.0			土 器 頭				
		土 器 頭	口径 (6.8)	底径 (4.0)	器高 2.2			土 器 頭	口径 16.6	底径 (14.4)							
		土 器 頭	口径 (7.5)	底径 (5.6)	器高 1.8			土 器 頭	口径 14.4	底径 (12.2)							
		白 磁 口 元 盆	口径 (12.2)					土 器 頭	口径 14.4	底径 (12.2)							
		白 磁 口 元 盆	底径 (12.2)					土 器 頭	口径 14.4	底径 (12.2)							

表2 出土遺物計測表(2)

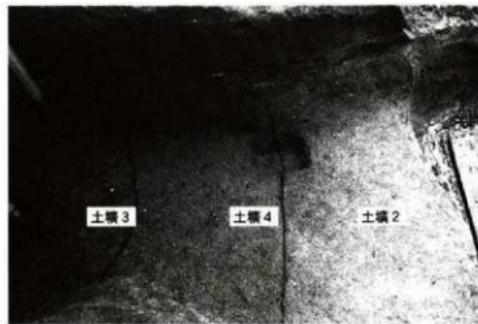
遺物種	遺物No.	遺物名	計測値	単位(cm) = 厚元幅 剖面 - 残存部	遺物種	遺物No.	遺物名	計測値	単位(cm) = 厚元幅 剖面 - 残存部		
建物5	5	常滑窯			ピット群	9	鐵、瓦、瓦 青磁、青白磁	底径(4.5)			
	26	常滑窯				10	常滑窯				
建物6	27	常滑窯				11	土器、器 火鉢、火鉢				
	1	土器、器 火鉢、火鉢	口径(3.9)	底径(3.6)		12	常滑窯	口径(8.2)	底径(4.6)		
	2	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.5)	底径(5.0)		13	常滑窯		器高(2.0)		
	3	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.8)	底径(5.8)		14	常滑窯 片口鋸		底径(7.4)		
	4	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.8)	底径(5.7)		15	常滑窯 片口鋸	口径(26.0)			
	5	陶器、漆器、青磁、通井文瓶	口径 17.0			16	金剛製品 金剛製品	景祐元寶 初年 1004年	幣書		
	6	陶器、漆器、青磁、通井文瓶	底径(9.0)								
	7	陶器、漆器、青磁、反井文瓶	底径(8.5)								
	8	陶器、漆器、青磁、反井文瓶	底径(13.0)								
	9	灰陶、戸鉢、窓蓋	口径(13.2)								
	10	常滑窯									
	11	常滑窯									
	12	常滑窯									
	13	常滑窯									
	14	常滑窯									
	15	常滑窯 片口鋸、通井文瓶	長さ 5.7	径 0.5~1.3							
土壤	6	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.4)	底径(5.0)	器高 1.6	追査外	1	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.8)	底径(5.1)	器高 1.6
	16	土器、器 火鉢、火鉢	口径 8.0	底径 6.2	器高 1.6		2	土器、器 火鉢、火鉢	口径(8.4)	底径(5.4)	器高 1.6
	17	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.8)	底径(6.2)	器高 2.0		3	土器、器 火鉢、火鉢	口径(8.4)	底径(5.7)	器高 1.8
	18	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.8)	底径(6.2)	器高 2.0		4	土器、器 火鉢、火鉢	口径(8.4)	底径(6.0)	器高 1.7
	19	常滑窯					5	土器、器 火鉢、火鉢	口径(8.0)	底径(5.0)	器高 1.7
	20	常滑窯					6	土器、器 火鉢、火鉢	口径 7.8	底径 5.2	器高 2.0
	21	土器、器 火鉢、火鉢	口径(9.6)				7	土器、器 火鉢、火鉢	口径 7.6	底径 5.1	器高 1.7
ピット群	7	石器、器 火鉢、火鉢	長さ 2.9	幅 3.0	厚さ 1.9		8	土器、器 火鉢、火鉢	口径 12.2	底径 6.8	器高 2.4
	1	土器、器 火鉢、火鉢	口径 7.8	底径 6.8	器高 1.6		9	土器、器 火鉢、火鉢	口径(11.4)	底径(6.0)	器高 3.4
	2	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.6)	底径(5.5)	器高 1.6		10	常滑窯 青磁、青白磁			
	3	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.9)	底径(6.0)	器高 1.6		11	常滑窯 青磁、青白磁			
	4	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.9)	底径(6.5)	器高 1.6		12	常滑窯 青磁、青白磁			底径 3.0
	5	土器、器 火鉢、火鉢	口径(7.8)	底径(6.4)	器高 1.9		13	中白磁 白磁	口径(9.4)		
	6	土器、器 火鉢、火鉢	口径(12.4)	底径(8.0)	器高 1.8		14	尾山茶碗 尾山茶碗			
	7	土器、器 火鉢、火鉢	口径(11.6)	底径(7.2)	器高 3.0		15	常滑窯 片口鋸			
追査内	8	陶器、漆器、青磁、通井文瓶					16	常滑窯 片口鋸			

表3 出土遺物破片数表

遺物種 出土地點	破片数					国内産諸窯・製品類						
	かわらけ	舶載陶磁器類	國內産諸窯	その他	火鉢	内	内	内	内	内		
未切り	手捏ね	青磁	白磁	青白磁	その他	壇戸窯	常滑窯	深美窯	その他	火鉢		
追査内	1,472	50	54	15	7	1	17	589	14	9	20	2
追査外	203	6	9	2	0	0	4	100	0	3	8	0
計	1,675	56	63	17	7	1	21	689	14	12	28	2
%	59.3%	2.0%	2.2%	0.6%	0.2%	0.0%	0.7%	24.4%	0.5%	0.4%	1.0%	0.1%
遺物種 出土地點	土器類	土器品	石器品	金属製品	木製品	骨製品	中世以前	自然遺物	その他	計	%	備考
追査内	3	0	13	35	1	1	5	142	1	2,451	86.8%	
追査外	3	1	1	5	0	0	1	26	0	372	13.2%	
計	6	1	14	40	1	1	6	168	1	2,823		
%	0.2%	0.0%	0.5%	1.4%	0.0%	0.0%	0.2%	6.0%	0.0%	100%		



図版 1



図版2



出土遺物

すいどうやま  
水道山遺跡 (No. 20)

台四丁目1169番1地点

## 例　　言

1. 本書は鎌倉市台四丁目1169番1に所在する水道山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前の記録保存調査として実施したものである。
3. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成12年9月4日～10月20日にかけて実施した。調査面積は105m<sup>2</sup>である。
4. 本書の編集は若松美智子が担当した。実測・トレスは誰 実・鈴木啓介・八重畠ちか子・石元道子・伊丹まどか・小川さやか、遺構・遺物写真は若松が撮影した。

執筆は第1章～第3章第1・2節・第5章を若松美智子、第3章第3節・第3章第2・3節石器を鈴木啓介、第5章を八重畠ちか子が担当した。

尚、第4章自然科学分析「鎌倉市水道山遺跡のテフラ分析」は上本進二（神奈川県立七里ガ浜高校）氏より玉稿を賜った。

調査体制は以下の通りである。

調査主体 鎌倉市教育委員会

主任調査員 若松美智子

調査員 岩崎卓治、太田美知子、松原康子、渡邊美佐子

作業員 大戸迫猛、叶多圭三、柴崎英輔、田沢巖、照井三喜、中須洋二、西川昭彦、渡辺輝彦（鎌倉市シルバーパートナーズ）

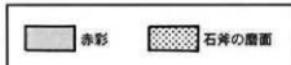
発掘調査及び出土品整理にあたっては、次の諸氏・諸機関から御協力・御指導を賜った。記して謝意を表したい（敬称略・順不同）。

小林謙一（国立歴史民俗博物館 総合研究大学院）・鈴木 源（法政大学大学院）・馬渕和雄（鎌倉考古学研究所）・松島義章（神奈川県立生命の星地球博物館）・野内秀明（横須賀市教育委員会）・中村賢太郎・前田和昭（横須賀考古学会）

5. 本書にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括して鎌倉市教育委員会にて保管する。

## 凡　　例

- (1) 遺構実測図の高さは海拔高度を示す。
- (2) 方位は国家座標に基づく。
- (3) 遺構・遺物挿図の縮尺は図に示すとおりである。
- (4) 石器のトレスは外形線がロットリング、稜線をGペン、リングフィッシャー・ドットは丸ペンで表示した。
- (5) 遺物挿図のスクリーントーンによる指示は以下のとおりである。



## 目 次

例 言 .....	76
凡 例 .....	76
第1章 遺跡の位置と諸環境 .....	79
第2章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯と経過 .....	81
第2節 基本層序 .....	82
第3章 検出された遺物	
第1節 平安時代 .....	85
第2節 古墳時代～弥生時代 .....	85
第3節 繩文時代 .....	107
第4章 自然科学分析 .....	128
第5章 まとめ .....	130

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 .....	79	第14図 出土遺物（9） .....	97
第2図 調査区位置図 .....	80	第15図 出土遺物（10） .....	99
第3図 調査区図 .....	81	第16図 出土遺物（11） .....	100
第4図 調査区南壁セクション図 .....	82	第17図 出土遺物（12） .....	101
第5図 遺物出土状況図 .....	83	第18図 出土遺物（13） .....	102
第6図 出土遺物（1） .....	86	第19図 出土遺物（14） .....	103
第7図 出土遺物（2） .....	88	第20図 出土遺物（15） .....	104
第8図 出土遺物（3） .....	90	第21図 出土遺物（16） .....	105
第9図 出土遺物（4） .....	91	第22図 繩文土器拓影図（1） 第1群土器 .....	107
第10図 出土遺物（5） .....	92	第23図 繩文土器拓影図（2） .....	
第11図 出土遺物（6） .....	93	第2・3群土器 .....	109
第12図 出土遺物（7） .....	95	第24図 石器実測図 .....	113
第13図 出土遺物（8） .....	96	第25図 サンプリング位置 .....	128

## 表 目 次

第1表 出土遺物観察表（1） .....	114	第5表 調査区南壁セクションの テフラ分析結果 .....	128
第2表 出土遺物観察表（2） .....	125	第6表 南北中央ベルトセクションの テフラ分析結果 .....	129
第3表 出土遺物観察表（3） .....	125		
第4表 出土遺物観察表（4） .....	127		

## 図版目次

図版1	調査地風景 調査区全景	133
図版2	トレンチ全景 トレンチ近景	134
図版3	上層遺物出土状況 2・3・4 トレンチ遺物出土状況 調査風景	135
図版4	出土遺物 1	136
図版5	出土遺物 2	137
図版6	出土遺物 3	138
図版7	出土遺物 4	139
図版8	出土遺物 5	140
図版9	出土遺物 6	141
図版10	出土遺物 7	142
図版11	出土遺物 8	143

# 第1章 遺跡の位置と諸環境

調査地は鎌倉市台四丁目1169番1に所在し、湘南モノレール江ノ島線富士見町駅の南方350mに位置する。地形的に見ると、市域北西部は多摩丘陵間を南流し柏尾川と合流する柏尾川を中心として沖積低地が形成されている。遺跡はこの沖積低地に向かって張り出した通称「水道山」から伸びる丘陵支脈の裾部にあたる。すでにこの丘陵部付近は現在宅地化され、旧地形を窺うことができないまでに変貌している。標高は18.2mである。

水道山遺跡は早くから遺物散布地として知られている。『鎌倉市史』によると、水道山が宅地開発される際には、弥生時代中期後半から古墳時代にかけての壺・高杯などの土器片が採集されている（赤星1967）。水道山遺跡における調査はこれまでに2ヶ所において実施されている。ここではこれらの調査を含めた周辺の遺跡について概観したい。

先ず本遺跡における調査事例をみていくと、調査地の南側に隣接する地点である山崎水道山戸ヶ崎遺跡（1）においては三井東庄戸ヶ崎寮の改築に伴い、昭和55年に3次にわたる調査が行われている。第1・2次調査では弥生時代～古墳時代にかけての竪穴住居址32軒が検出されている。これらの弥生時代末～古墳時代初頭の住居址からは銅環が2点出土し、その他に弥生時代後期の住居址からは鉄器が出土している（斎木1980）。第3次調査では古墳時代中期～後期にかけての4軒以上と見られる竪穴住居址を検出されている。又住居址覆土からは若干の縄文土器が出土している（斎木1981）。他には調査地から南東方向400mに位置する丘陵頂上部において平成7年に調査が行われている（2）。この調査では平安時代後期の竪穴住居址12軒が検出されている（松山1997）。以上のようにこれまでの調査から遺跡地は弥生時代から古墳時代及び平安時代にかけての集落址であることが判明している。

次に周辺の遺跡についてみていくと、天神山城遺跡（3）（山崎字宮廻760番地点）では共同住宅建設



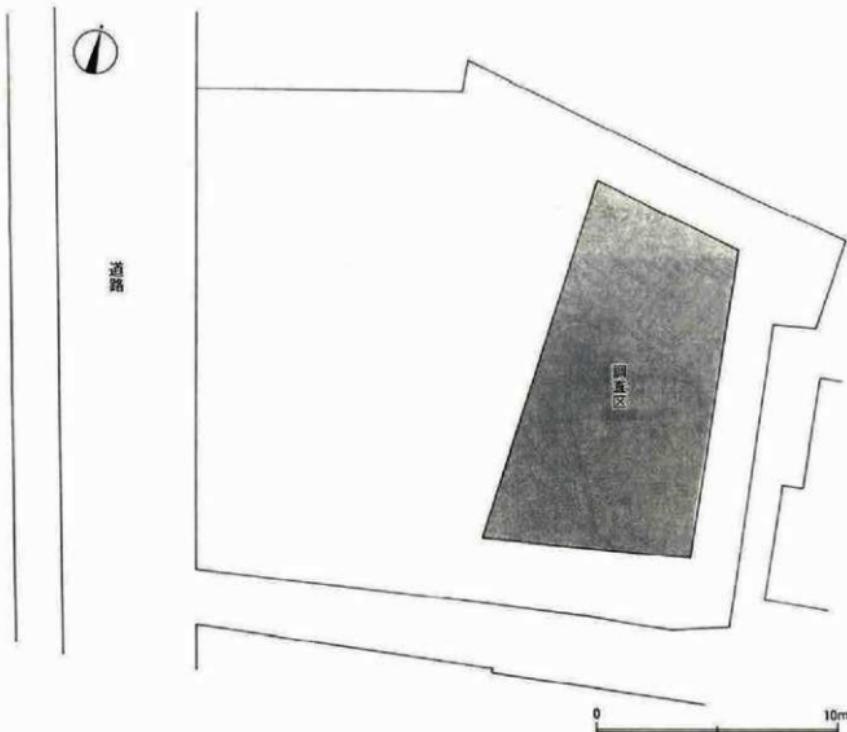
第1図 調査位置図 (1 : 10000)

に伴い、平成7年に調査が行われている。調査地は標高13~17mの小支谷に立地する。検出された遺構は奈良時代の竪穴住居址4軒、古墳時代後期の竪穴住居址2軒である。又山裾近くにおいて古墳時代前期の土器集中3ヵ所が検出されている（松山1997）。

倉久保遺跡（4）（山崎字清水塚1550番地1外地点）においては平成6年に宅地造成に伴い調査が行われた。調査地は標高25~30mに位置し、古墳時代前期・奈良時代の竪穴住居址5軒が検出されている。（総1996）

#### 〈引用文献〉

- 赤星直忠 1967『鎌倉市史』考古編（再版）鎌倉市  
齐木秀雄 1980「山崎・水道山戸ヶ崎遺跡」『鎌倉考古3』鎌倉考古学研究所  
齐木秀雄 1981「鎌倉市内の発掘調査速報 山崎水道山戸ヶ崎遺跡」『鎌倉考古5』鎌倉考古学研究所  
椎 実 1996「倉久保遺跡（No.226）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会  
松山敬一郎 1997「天神山城（No.384）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会



第2図 調査区位置図 (1:200)

## 第2章 調査の概要

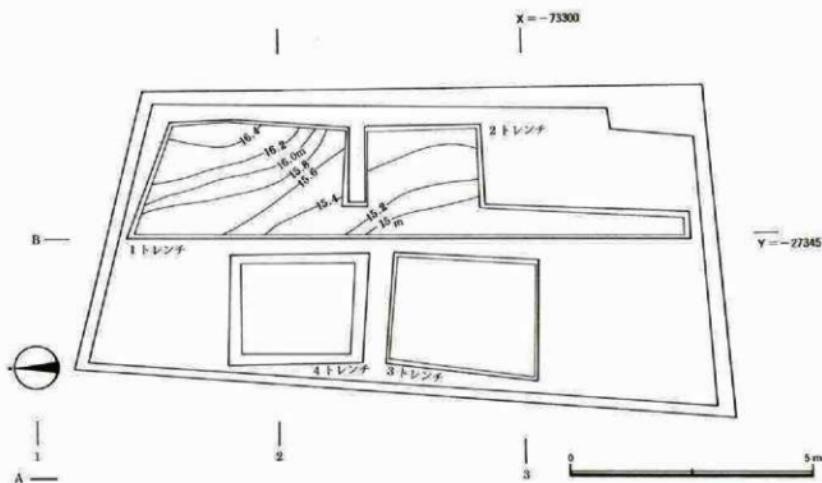
### 第1節 調査に至る経緯と経過

今回の調査は個人住宅の建設に伴い、調査地が水道山遺跡として登録されている埋蔵文化財包蔵地のため鎌倉市教育委員会文化財課により平成12年7月17日～19日に確認調査が行われた。この結果、埋蔵文化財調査の必要が認められたため、国庫補助事業埋蔵文化財調査を行うこととなった。

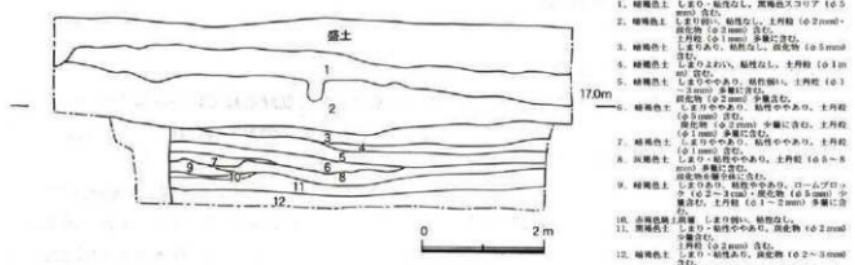
発掘調査は平成12年9月4日～10月20日までの約1ヶ月半行った。調査対象地は個人住宅建設部分で、調査面積は105m<sup>2</sup>である。調査区は国家座標に基づき5mグリッドを設定して行った。また、調査終了時の掘削深度が2m以上になると考えられること、湧水があったことなどから、排水溝を周囲に設けると共に、中段に大走りを設けた。

発掘調査はまず盛土と近世以降の耕作土と思われる暗褐色土層の掘削作業から開始した。確認調査により1mほどの厚さが考えられたため、重機により行った。

重機による掘削作業後、本格的な発掘調査を開始した。人力による精査作業を行い遺構の確認作業を行った。この段階において遺構が検出されなかったため、層毎に掘下げ・精査作業を行い遺構の検出に努めた。掘下げ作業中に多くの遺物が見られたため、出来る限り出土位置を記録することとした。この結果、弥生時代から古墳時代にかけての、厚さ1m以上の極めて濃密な遺物包含層が検出された。調査は安全面から、地表面からの掘削深度が2mまでを全面調査とし、それ以下をトレンチ調査とした。



第3図 調査区図 (1 : 100)

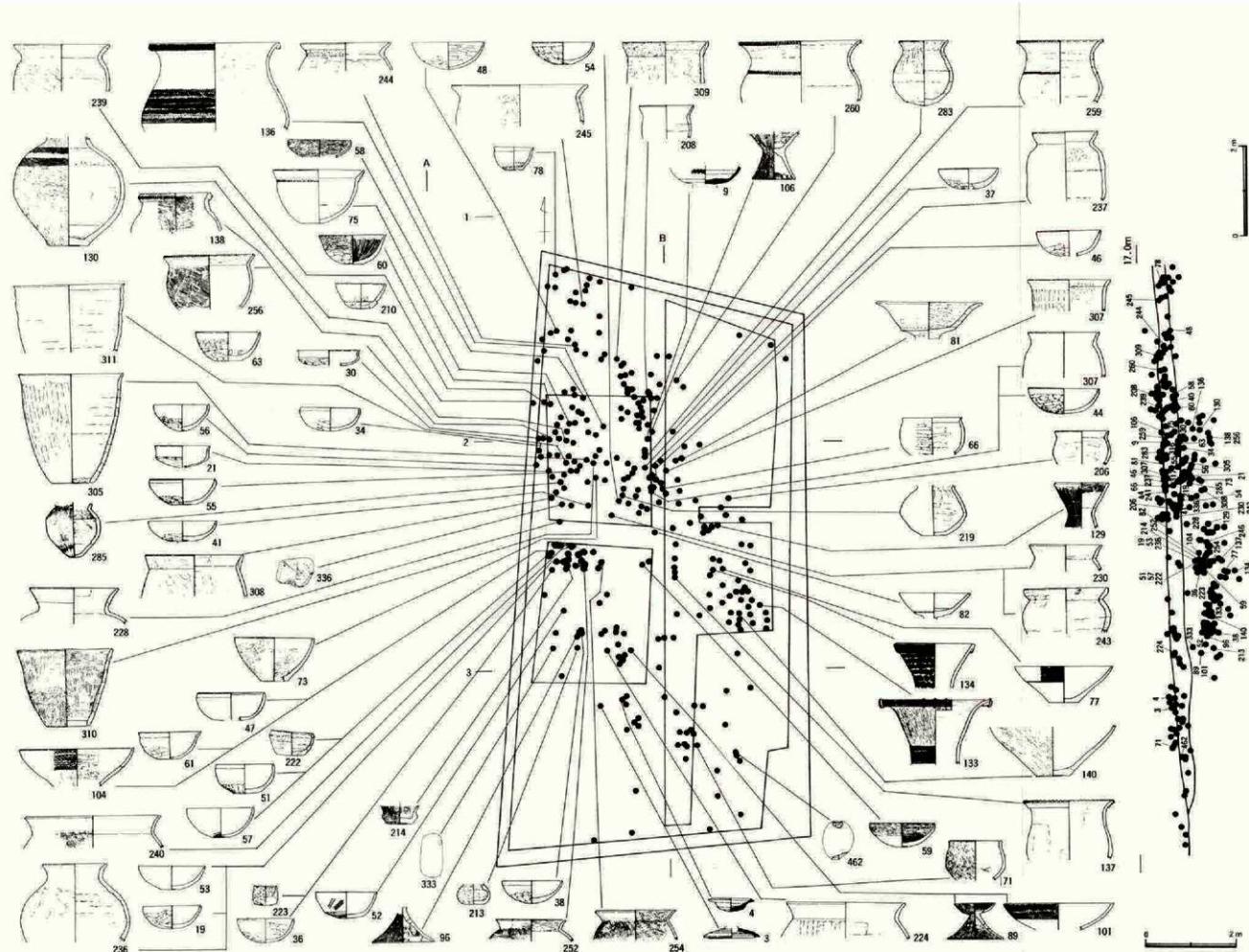


第4図 調査区南壁セクション図 (1 : 80)

## 第2節 基本層序

調査対象地は現在盛り土により平坦であるが、本来は北東から南西方向の傾斜地であったと考えられる。北東隅では標高15.8~16.4mにかけて岩盤を検出した。

本調査地点の基本層序は、地表面から盛土・1~12層に区分した。1層は暗褐色土である。近世以降の耕作土と考えられる。層中にはほぼ一次堆積の宝永スコリアを含む。2層は暗褐色土である。3~7層は暗褐色土である。8層は灰褐色土である。層中に炭化物を含む。9層は暗褐色土である。10層は焼土・炭層である。11層は黒褐色土である。12層は暗褐色土である。3~12層は縄文時代から古墳時代の遺物包含層である。調査では3・4層を上層、5~7層を中層、8~12層を下層として遺物の取り上げ記録を行った。



第5図 遺物出土状況図

# 第3章 検出された遺物

調査では平安時代・古墳時代後期～縄文時代の遺物が出土したが、遺構は検出しえなかった。遺物の出土状況（第5図）を見ると上層ではB-1グリッド付近に遺物の集中箇所が見られた。下層はB-1グリッドの岩盤を検出した部分を除き各トレンチ共に遺物が出土した。これらの遺物は層位的に捉えることはできず、混在した。但しあおまかに見ると上層から下層へと古墳時代から弥生時代後期への土器の割合が増えてくるが、同一層から他時期の土器が出土する状況であった。そのためここでは出土遺物を時代毎、種別毎に記述していきたい。

## 第1節 平安時代

灰釉陶器は1点のみで、底部の残存資料である。第6図-1の碗高台部は低く、内側して開き気味である。底部外面はヘラケズリをおこなう。灰釉は浸け掛けである。O-53号窯式期、10世紀後半と見られる。

## 第2節 古墳時代～弥生時代

### 1. 土器（第6～18図1～319、第1表、図版4～8）

#### 須恵器（第6図2～14）

2・3は壺蓋である。2は擬宝珠状の鉢を有する。3は天井部が欠損しているが2と同じく鉢を有するものである。2・3のいずれも口縁部内面にかえりを有し、かえりは先端が口端部から突出する。7世紀第4四半期とみられる。

4～7は壺身である。4はたちあがりは低く、受部の上面に1条の凹線を施す。底部中央はやや尖っているのが特徴である。5はたちあがりは非常に低く、内傾する。受部に4と同じく1条の凹線を施す。6は4・5に比べ口径が大きい。受部は上向きで、たちあがりは低い。4～6は7世紀第3四半期と見られる。7はたちあがりが高く、ほぼ垂直である。たちあがりの端部は内面に内傾する。底部外面はヘラケズリ調整である。陶色での須恵器型式からみると、TK23型式の特徴をもつ。

8・9は高杯である。9は体部に櫛描き波状文を施す。8・9いずれも脚部に長方形の透かしを3方に配置する。TK208～23型式の特徴をもつ。

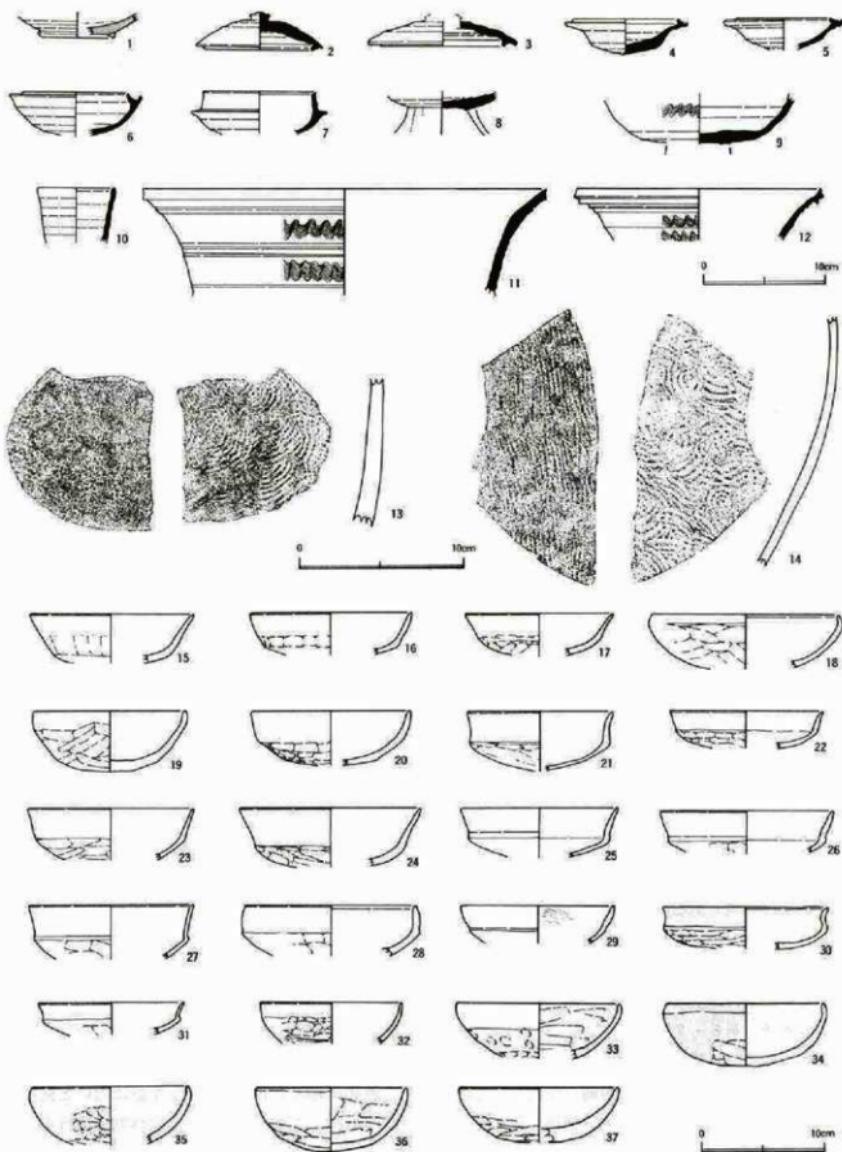
10は長頸壺である。

11～14は甕である。11は大型甕である。口縁部端面は上下にのび、稜をつくる。端部近くに凸帯を巡らし、2段の櫛描き波状文を施す。TK208型式の特徴をもつ。12は中型甕である。口縁端面の直下に凸帯を貼付し、口端部を複雑に見せている。断面三角形の凸帯を巡らし、その下に2段の櫛描き波状文を施す。TK23型式の特徴をもつ。13・14は甕胴部である。

#### 土師器壺（第6・7図15～52）

15～29は口縁部がヨコナデ、体部～底部がヘラケズリで整形した壺である。15・16は体部に横方向のヘラケズリを施す。口縁部が弱く外反もしくは外傾し、底部は丸味を帯びているが平底に近いと見られる。15・16はやや新しい時期の様相が窺える。17は口縁部が弱く外反し、口縁部と底体部の境は不明瞭で丸底である。18・19は半球状の体部から口縁部が短く立ち上がる。18・19共に赤彩を施していないが、器形は32～52に相似する。

20～29は須恵器壺蓋を模倣した形態の壺である。20・21は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。20は口縁



第6図 出土遺物（1）

部と底体部の境の稜は不明瞭である。21は底部尖底氣味である。22は口径が大きく、口縁部の立ち上がりは短く、偏平な丸底である。23・24は口縁部が外反し、20にくらべると口縁部と底体部の境がやや明瞭である。25～27は口縁部のヨコナデと体部のケズリ部分とが明瞭な段になる。28・29は口縁部がやや短く内彎し立ち上がる。

30・31は外面口縁部と内面全体に赤彩を施し、口縁部はS字状に屈曲する形態をもつ「比企型」と呼ばれる坏である。30は口縁部と底体部の境は弱い屈曲をもつ。31は底体部と口縁部の境が稜線をもって屈曲する。15～31は古墳時代後期後半と考えられる。

32～52は主に器面上には赤彩を施し、底部から口縁部が半球状になる坏である。33～35は口唇部がやや内彎して立ち上がる。36～38は口唇部がほぼ垂直に立ち上がる。39～43は器形は偏平な丸底で、口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。39は内面に放射状の細かいヘラミガキを施す。45・48は口縁部が外傾しながらたちあがり、底部中央がやや尖っている。44・49・50は体部全体にヘラケズリ調整をおこなう。49は内面に放射状のヘラミガキを施す。51は体部下半に横方向のヘラケズリ調整をおこなう。52は体部の一部にヘラミガキをおこなう。32～52は古墳時代後期前半に位置づけられる。

#### 椀（第7図53～64）

53～57は口径に比べ底部が小さく平底であり、蘊みをもつ椀である。内外面共に赤彩を施す。53は器形は偏平で、内外面共にナデ調整である。55～57は底部から口縁部が半球状で、口径が全体に小さく、器高が高い。55・56は体部下半にヘラケズリ調整をおこなう。

58・59は器形は偏平で、口縁部が内彎して立ち上がる。58は内外面に細かい横ミガキを施し、外面口縁部・内面全体を赤彩する。59は内面は上半が横ミガキ、下半は放射状のミガキをおこない、内外面共に赤彩を施す。60は口唇部が外反し口縁部から体部上半はミガキをおこない、その部分に赤彩を施す。61は口唇部が外反し、口唇部内面は面取りする。62は口唇部が外反し内面に放射状のヘラミガキを施す。53～64は古墳時代中期後半と考えられる。

#### 鉢（第7・8図65～77）

65～68は口唇部が短く外反し、口唇部内面は面取りする。いずれもヘラケズリ又はヘラナデ調整をおこなう。66・67は内外面全体に赤彩を施す。65～68は古墳時代中期後半と考えられる。

69・70は口縁部が大きく内彎し、器形は球状である。69は内外面に赤彩を施す。69・70は古墳時代中期前半と考えられる。

71・72は口縁部が短く緩やかに外反し、口唇部を面取りする。内外面共にミガキ調整をおこなう。73は底部から口縁部にやや湾曲しながら開き、口唇部を面取りする。71～74は古墳時代前期と考えられる。

75は折返口縁部が外反し、内面は面取りする。折返口縁部下端にキザミを施す。76は折返口縁で内外面に細かい横ミガキを施す。75・76は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

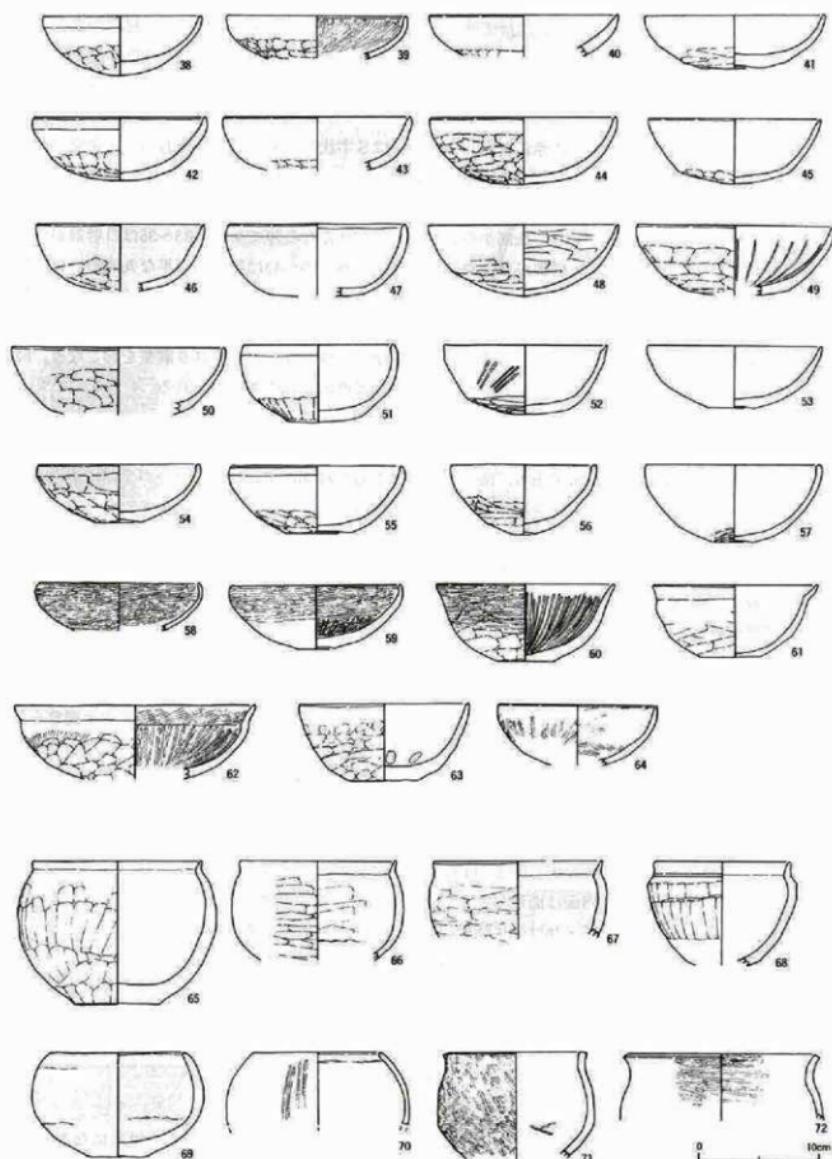
77は底部から口縁部にはほぼ直線に広がり、口縁部は幅広の文様帶をもつ。文様帶は下端を沈線区画した羽状繩文を施す。体部には赤彩を施す。

107・108は鉢口縁部である。107は口縁部が内彎し、羽状繩文の下端に繩文原体による圧痕状のキザミを施し、口縁部に穿孔をする。108は羽状繩文を施文後その上から櫛状工具によるキザミを施し、2ヶ所以上の穿孔をする。77・107・108は弥生時代後期後半と考えられる。

#### 小型鉢（第8図78・79）

78は口縁部が短くやや外反氣味で、内面は面取りされている。底部はドーナツ状に上げ底になる。78・79は古墳時代前期と考えていいだろう。

#### 高坏（第8・9図80～88・92～106・109～121）



第7図 出土遺物(2)

80は坏部は上部に段を有し、口縁部が外反しながらのびる。

81・82は高坏坏部である。81は坏部下端に段をもち、口縁部が外反し開く形態である。82は坏部下端に稜を有し、坏部から口縁部に直線的に開く。

83～88・94～99は高坏脚部である。83は短い柱状部から裾部へ広がり、柱状部に縦位のヘラケズリ調整をおこなう。83は84～88に比べて新しい様相が窺える。84は裾部に凸帯状の段をもち、柱状部はミガキを施す。85～88はいずれも外面に赤彩が施され、裾部に段をもつ。それぞれに裾部の形態がやや異なり、85は裾部が反り返り、87・88は稜をもつ。80～88は古墳時代中期後半と見られる。

98は脚部がやや柱状化してきており、穿孔はない。94～97に比べるとやや新しい様相が見られる。98は古墳時代前期と見られる。

94～97はいずれも外面はミガキを施し、脚部に3ヶ所の穿孔をおこなう。94は非常に細かく丁寧なミガキである。それぞれの脚部の形態をみると、94・95はラッパ状に開く形態、96・97はハの字状に開く形態である。94～97は弥生時代後期終末～古墳時代前期と見られる。

92・93は高坏脚部である。92は、脚部はミガキ調整後に、接合部近くに櫛描横線文を施す。東海系の影響を受けた高坏と考えられる。時期は弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

93は脚部に櫛描横線文を施す。三河・西遠江系の影響を受けた高坏と考えられる。93は弥生時代後期中葉と考えられる。

100は高坏の資料の中で唯一完形に図化し得た。坏部はやや浅く、口縁部は折返口縁である。脚部接合部に凸帯を巡らし、脚端部は折返し状である。

101は坏部が浅く、やや内彎気味に開き、口縁部は單口縁で羽状繩文の下端を沈線区画する。100・102～104・109～112・114～116は口縁部に繩文帯を施し、下端にキザミを施す高坏である。口縁部下端に施すキザミには施工具と方法に違いが見られる。103・110・114・116はヘラ状工具である。114は雑な施工である。109・112は櫛状工具、111・115・117は棒状工具によるものである。117は細かいキザミ、111は粗雑で不揃いなキザミである。102・104は繩文原体によるキザミである。102は繩文原体により圧痕状である。

102・103・109～112・115・116は口縁部がやや内彎し、折返口縁である。103は101に比べて坏部が深く、特に幅の広い文様帶をもつ折返口縁である。104・120・121は幅の広い折返口縁にS字結節文を施し、下端にキザミを施す。それぞれキザミをおこなう施工具が異なり、104は繩文原体、120はヘラ状工具、121は櫛状工具によるものである。120はキザミの間隔が細かい。118・119は口縁部から坏部に羽状繩文を施す。119は幅の狭い折返口縁である。

105・106は高坏脚部である。105は100と同じく脚部接合部に凸帯を巡らし、脚部端部は折り返しである。106は坏部が直線的にのび、脚部はハの字状に開く。100～106・109～121は弥生時代後期後半とみられる。

#### 小型器台（第8図89）

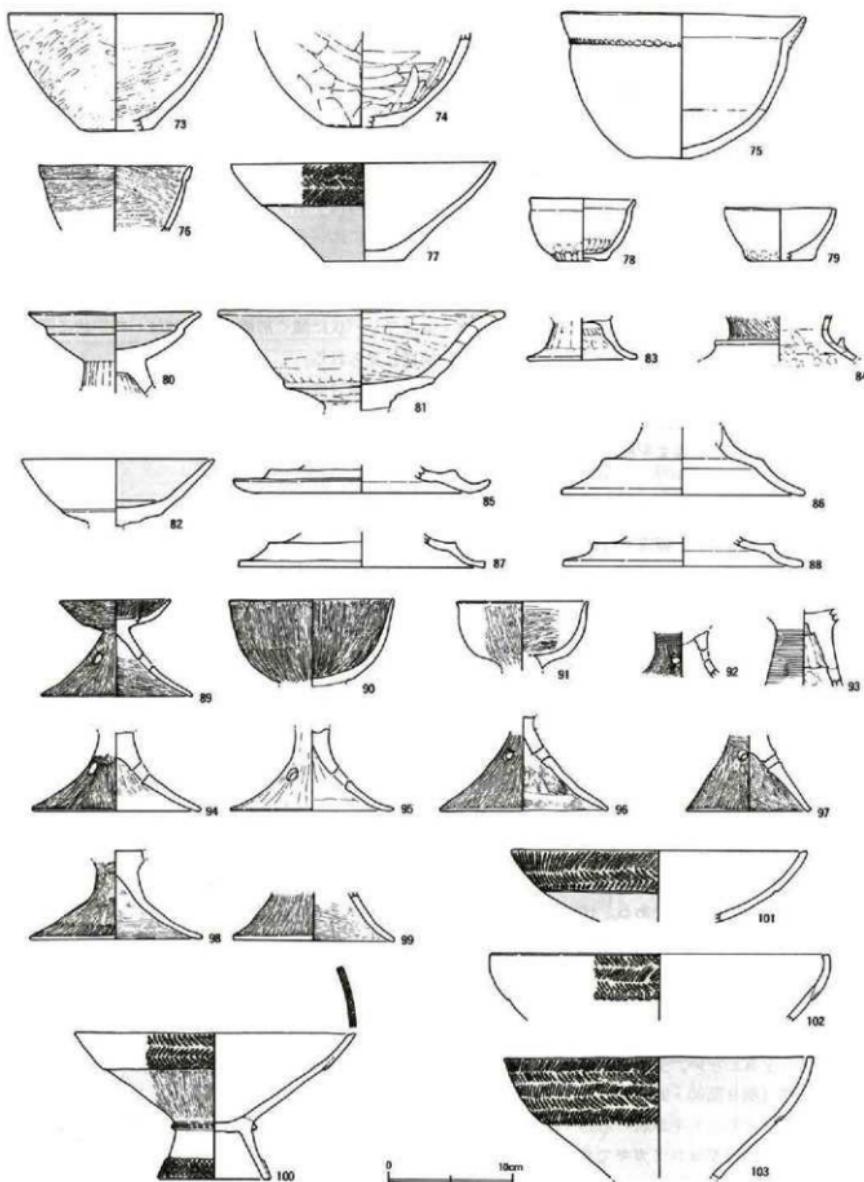
89は器受部が弱い稜をもち直線的に開く。脚部はハの字状に開き、3ヶ所に穿孔する。器受部底部には貫通孔を有しない。受部・脚部共に入念なミガキを施す。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる。

#### 小型高坏（第8図90・91）

90・91はどうちらも半球状の形態で、91は口唇部がやや外反する。それぞれ内外面共にミガキ調整を行うが、91は内面がヨコミガキである。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる。

#### 壺（第10図122～204）

122は口縁部下部に断面台形状の凸帯をもつ壺である。古墳時代中期～後期と考えられる。



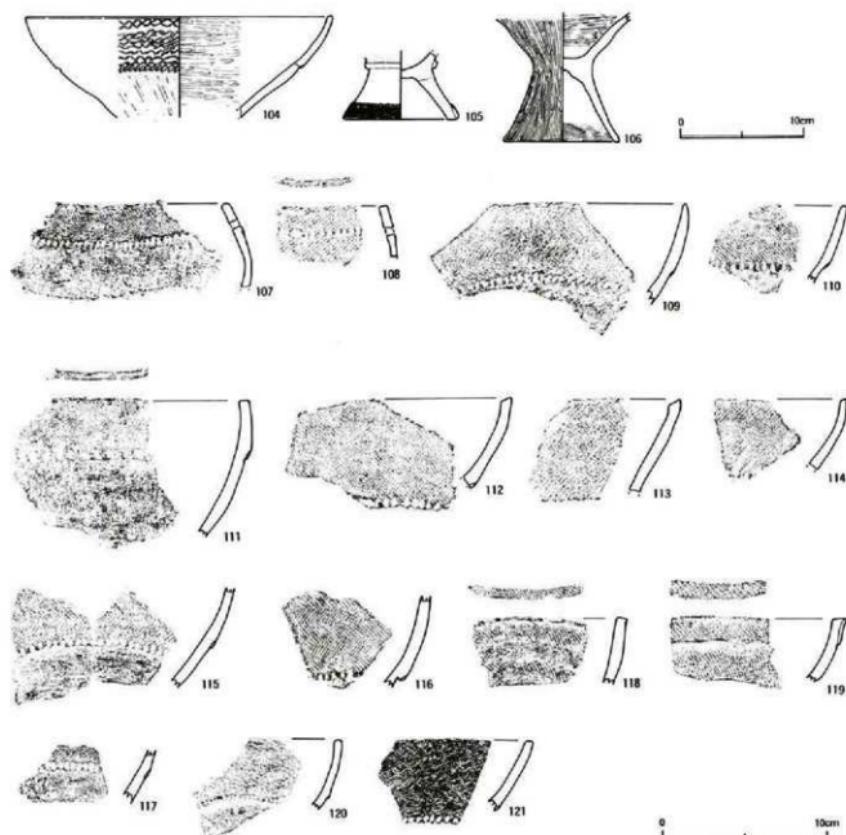
第8図 出土遺物(3)

123・124は折返口縁の壺で、口縁部に内外面ともにミガキを施す。125・126は単口縁の壺で、口縁部内外面ともにミガキを施す。125は口縁部が直線的にひらき、126は大きくラッパ状に広がる。130は胴部中位に最大径があり、肩部に棒状工具による2段の格子文を施す。123～126・130は古墳時代前期と考えられる。

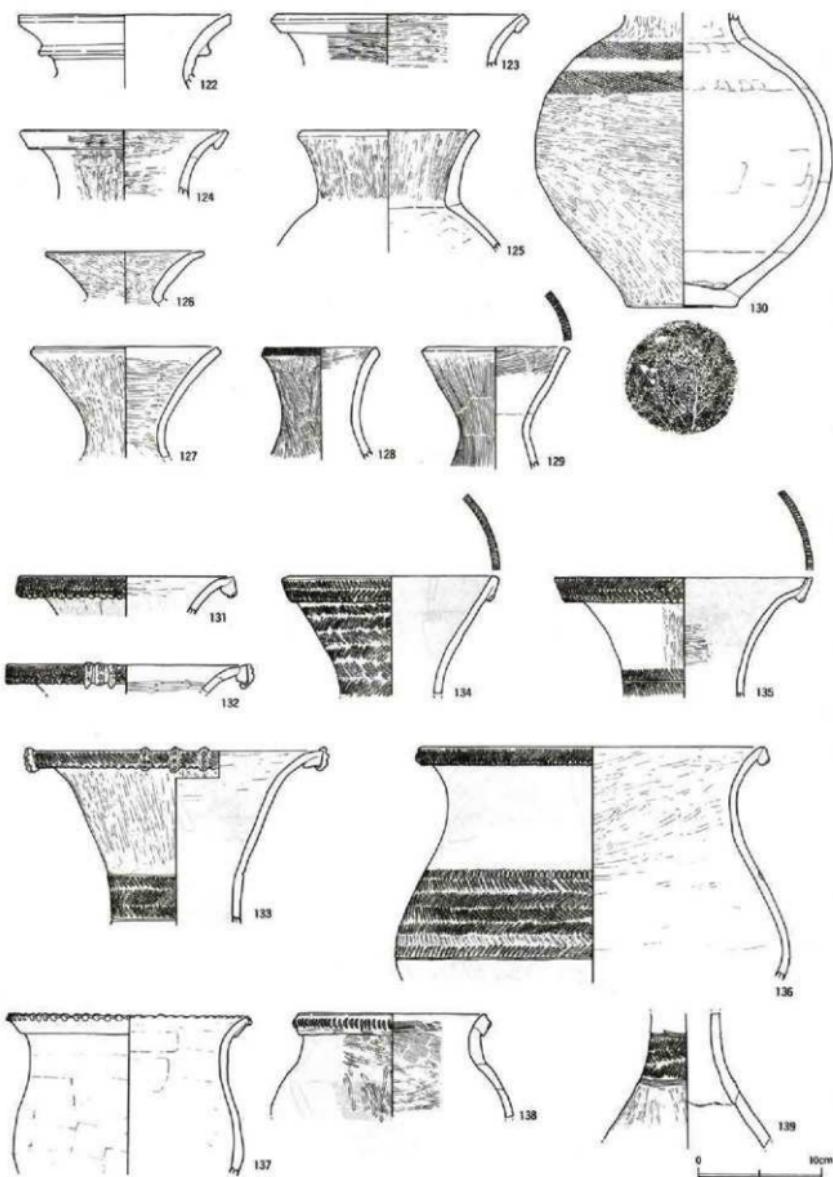
160は複合口縁部が頸部から口縁部の開きに沿って立ち上がる。複合部に文様帶をもたず、下端に棒状工具によるキザミを施すのみである。174は複合口縁部に縦位に沈線を施す。胎土は粉質である。160・174は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

127は口縁部がラッパ状に大きく広がる単口縁の壺である。内外面ともにミガキ調整を施す。弥生時代後期後半とみられる。

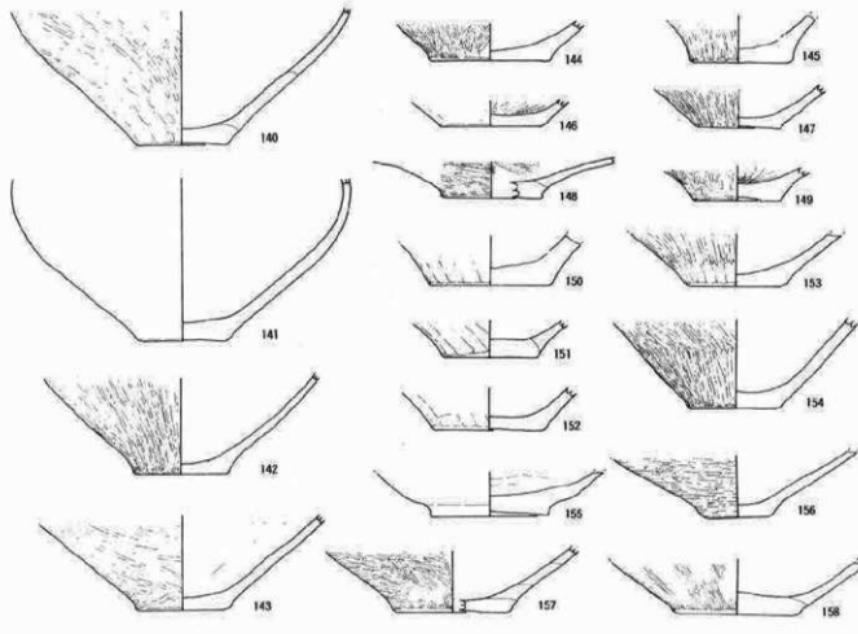
131～133・135・161～166・171～173・175～181は複合口縁部をもつ壺である。このうち131～133・



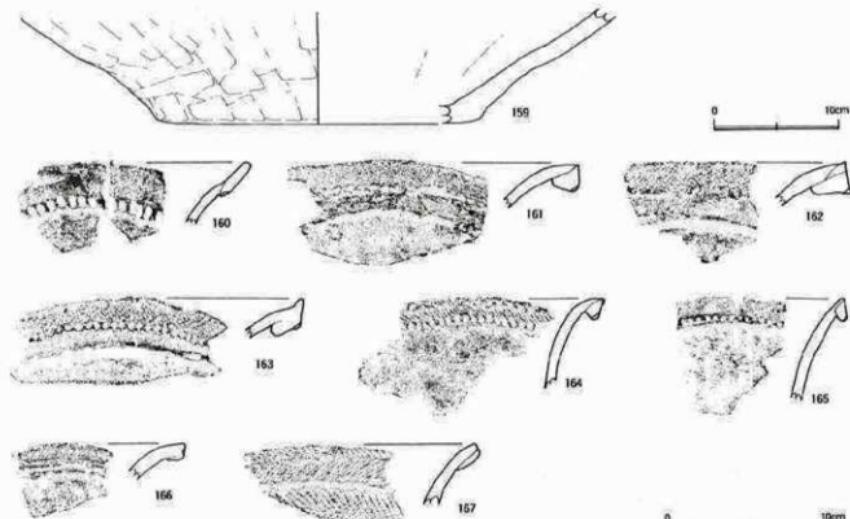
第9図 出土遺物（4）



第10圖 出土遺物（5）



0 10cm



0 10cm

第11図 出土遺物 (6)

161～166・171～173は口縁形態としては幅狭複合口縁である。

131・133・161～166は口縁端部外側、132は口縁部に粘土帯を貼付しており、複合口縁部の手法に若干の違いがみられる。131～133・161～165は複合口縁部に単斜繩文又は羽状繩文を施し、下端にキザミをおこなう。それぞれの土器はキザミを施す工具が異なる。131・171～173はヘラ状工具、133・162～164は繩文原体、161・165は棒状工具を用いていると考えられる。

132・133は複合口縁部に3本1単位の棒状浮文を貼付する。棒状浮文には2～3ヶ所のキザミを施す。133の文様帶は上下沈線区画の羽状繩文を頭部径が最小になる位置に施す。171～173は複合口縁部に刺突を施す直径1cm程の円形浮文を貼付する。131～133・161～166は弥生時代後期後半と考えられ、171～173は弥生時代後期後半の中でも古相と考えられる。

135・175～181はいわゆる幅広複合口縁である。135は複合口縁部が頭部から口縁部の開きにやや沿う形で接合されているため、やや開き気味に立ち上がっている。文様帶は頭部径が最小になる位置にあり、単斜繩文の中央に沈線を施し、2段の文様帶のようにしている。177は135と同じ様に複合口縁部はやや開き気味に立ちあがる。175・176・179～181は複合口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。

135・175・176・178・179は複合口縁部に羽状繩文を施し、下端にキザミを施す。キザミの施文原体は135・175・180は棒状工具、176・178・181はヘラ状工具、179は繩文原体によるものがみられる。

175～177・179は複合口縁部に2又は3本1単位の棒状浮文を貼付する。179・180は複合口縁部に山形文様を施す。179は羽状繩文上に山形文を施す。180は179より複雑な文様を施し、山形文に区画された中に刺突をおこなう。181は複合口縁部に5本単位の櫛描波状文を施した後、4本の縦位の沈線を施し、下端には沈線を施した同じ工具と考えられる工具によりキザミをおこなう。

134・167～170は折返口縁部から頭部全体に羽状繩文を施す蓋である。134・169・170は折返口縁部下端にキザミを施す。それぞれ134・170は繩文原体、169は櫛状工具によるキザミである。

182～193・195～204は胴部片である。182・184～187は山形文で区画した羽状繩文又は単斜繩文を施す。182・185は山形文と上下沈線区画した羽状繩文帶とを組み合わせる。183は182・184～181と同じく山形文を施すが、山形文区画外の繩文のナデ消しを行っていない。

188～191・195～197は沈線区画した繩文をもつものである。192は区画していない羽状繩文帶を施す。198・199は頭部に円形浮文を貼付する。198はS字結節文で区画した単斜繩文、199は網目状撚糸文である。200・202はS字結節文を施す。且つ200は上下を沈線区画する。201・203は網目状撚糸文を施す。且つ201は山形文に区画する。134・135・175～193・195～203は弥生時代後期後半と見られる。

204は壺肩部で櫛描直線文・連弧文・直線文を施す。焼成は非常に良く、胎土は精緻で、色調は褐色である。文様構成から遠江系と考えられる。弥生時代後期と考えられる。

128・129は壺口縁～頭部である。それぞれ口唇部に単斜繩文を施し、口縁～頭部はハケメ調整をおこなう。139は壺頭部である。頭部下間に上下沈線区画の羽状繩文を施す。128・129・139は弥生時代中期後葉と考えられる。

136～138・194は広口壺である。136はいわゆる幅狭複合口縁部である。文様帶は上端がキザミ・下端は沈線により区画した羽状繩文を頭部下半から胴部最大径にかけて施文する。194は136と同じ文様帶をもつ。136・194は弥生時代後期中葉と見られる。

137は調整からは壺とも考えられるが広口壺とした。口唇部にキザミを施し、頭部の屈曲はゆるやかである。弥生時代後期と見られる。138は折返口縁部の中央部にハケ状工具によるキザミを施す。138は弥生時代後期後半と見られる。

140～159は壺底部である。140・142～149・153～157はミガキ調整である。143・153～156はミガキ調

161～165・171～173は口縁形態としては幅狭複合口縁である。

131・133・161～166は口縁部外側、132は口縁部に粘土帶を貼付しており、複合口縁部の手法に若干の違いがみられる。131～133・161～165は複合口縁部に単斜繩文又は羽状繩文を施し、下端にキザミをおこなう。それぞれの土器はキザミを施文する工具が異なる。131・171～173はヘラ状工具、133・162～164は繩文原体、161・165は棒状工具を用いていると考えられる。

132・133は複合口縁部に3本1単位の棒状浮文を貼付する。棒状浮文には2～3ヶ所のキザミを施す。133の文様帶は上下沈線区画の羽状繩文を頸部径が最小になる位置に施す。171～173は複合口縁部に刺突を施す直径1cm程の円形浮文を貼付する。131～133・161～166は弥生時代後期後半と考えられ、171～173は弥生時代後期後半の中でも古相と考えられる。

135・175～181はいわゆる幅広複合口縁である。135は複合口縁部が頸部から口縁部の開きにやや沿う形で接合されているため、やや開き気味に立ち上がっている。文様帶は頸部径が最小になる位置にあり、単斜繩文の中央に沈線を施し、2段の文様帶のようにしている。177は135と同じ様に複合口縁部はやや開き気味に立ちあがる。175・176・179～181は複合口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。

135・175・176・178・179は複合口縁部に羽状繩文を施文し、下端にキザミを施す。キザミの施文原体は135・175・180は棒状工具、176・178・181はヘラ状工具、179は繩文原体によるものがみられる。

175～177・179は複合口縁部に2又は3本1単位の棒状浮文を貼付する。179・180は複合口縁部に山形文様を施文する。179は羽状繩文上に山形文を施す。180は179より複雑な文様を施し、山形文に区画された中に刺突をおこなう。181は複合口縁部に5本単位の櫛描波状文を施文した後、4本の縦位の沈線を施文し、下端には沈線を施文した同じ工具と考えられる工具によりキザミをおこなう。

134・167～170は折返口縁部から頸部全体に羽状繩文を施す壺である。134・169・170は折返口縁部下端にキザミを施す。それぞれ134・170は繩文原体、169は櫛状工具によるキザミである。

182～193・195～204は胴部片である。182・184～187は山形文で区画した羽状繩文又は単斜繩文を施す。182・185は山形文と上下沈線区画した羽状繩文帶とを組み合わせる。183は182・184～181と同じく山形文を施文するが、山形文区画外の繩文のナデ消しを行っていない。

188～191・195～197は沈線区画した繩文をもつものである。192は区画していない羽状繩文帯を施す。198・199は頸部に円形浮文を貼付する。198はS字結節文で区画した単斜繩文、199は網目状撚糸文である。200・201はS字結節文を施す。且つ200は上下を沈線区画する。201・203は網目状撚糸文を施す。且つ201は山形文に区画する。134・135・175～193・195～203は弥生時代後期後半と見られる。

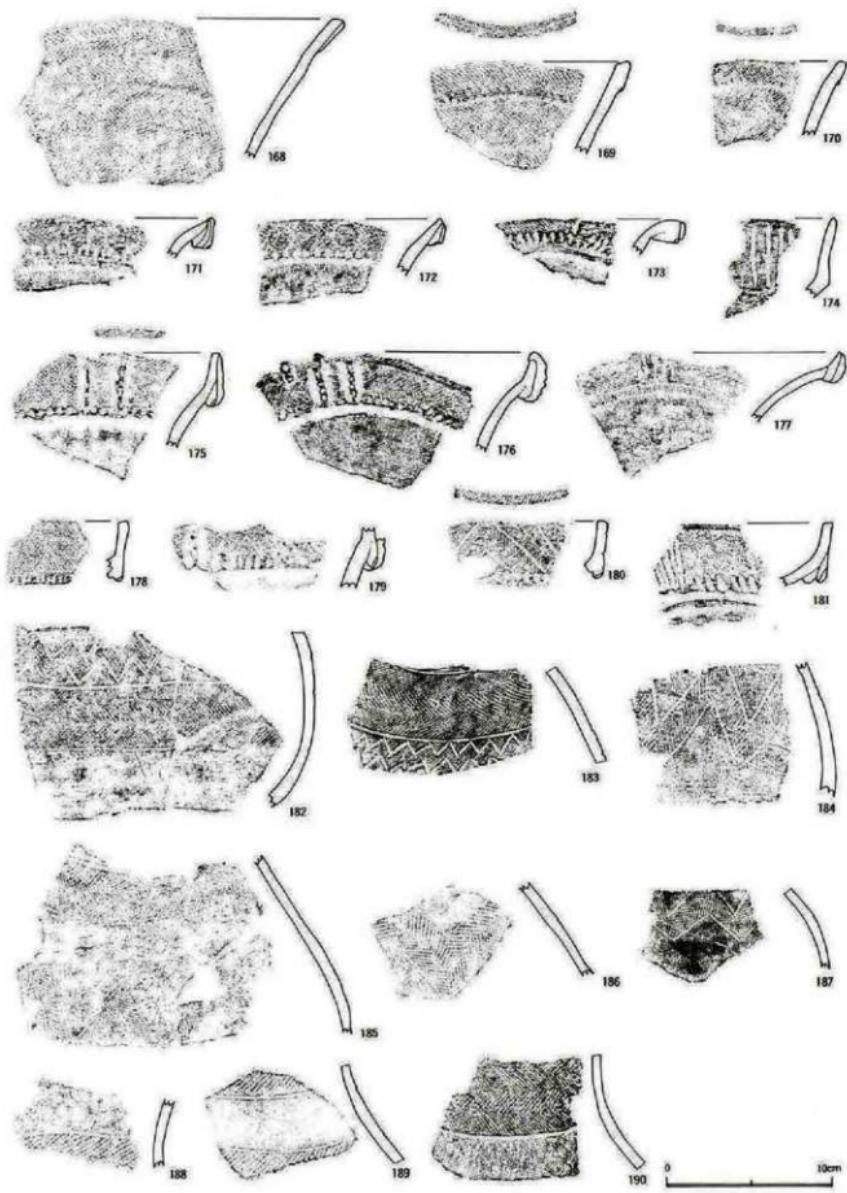
204は壺肩部で櫛描直線文・連弧文・直線文を施す。焼成は非常に良く、胎土は精緻で、色調は褐色である。文様構成から達江系と考えられる。弥生時代後期と考えられる。

128・129は壺口縁～頸部である。それぞれ口唇部に単斜繩文を施し、口縁～頸部はハケメ調整をおこなう。139は壺頸部である。頸部下半に上下沈線区画の羽状繩文を施す。128・129・139は弥生時代中期後葉と考えられる。

136～138・194は広口壺である。136はいわゆる幅狭複合口縁部である。文様帶は上端がキザミ・下端は沈線により区画した羽状繩文を頸部下半から胴部最大径にかけて施文する。194は136と同じ文様帶をもつ。136・194は弥生時代後期中葉と見られる。

137は調整からは壺とも考えられるが広口壺とした。口唇部にキザミを施し、頸部の屈曲はゆるやかである。弥生時代後期と見られる。138は折返口縁部の中央部にハケ状工具によるキザミを施す。138は弥生時代後期後半と見られる。

140～159は壺底部である。140・142～149・153～157はミガキ調整である。143・153～156はミガキ調



第12図 出土遺物（7）

整の後に胴部の一部に赤彩を施す。150～152・155・159はナデ調整である。158はハケメ調整後に一部ナデをおこなう。140～159は弥生時代後期～古墳時代中期と見られる。

#### 小型壺（第14図205～209・211～213・216～221）

205は張りのある胴部から、口縁部が短く直立する小型壺である。219は胴部最大径を中位に有し、やや算盤玉状の器形である。205・219は古墳時代中期と考えられる。

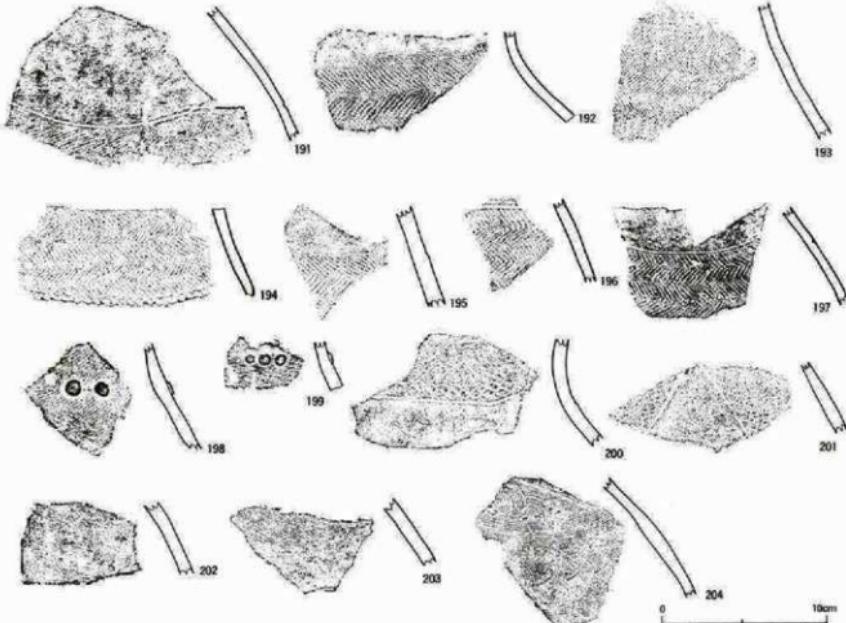
206～209は胴部に張りがなく、頸部から口縁部にくの字状に立ち上がる。このうち207～209は内外面共に赤彩を施す。213は球状の胴部に平底をもつ。胴部はヘラケズリ調整をおこなう。206～209・213は弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

211は胴部中位にふくらみをもち、口縁部はやや内側気味にひろがる。赤彩は胴部の内外面に施し、口縁部には施していない。212は胴部下半に最大径をもち、口縁部はゆるやかにやや広がる。文様は施していないが、器形には東遠江・駿河系の影響がみられる。211・212は弥生時代後期とみられる。

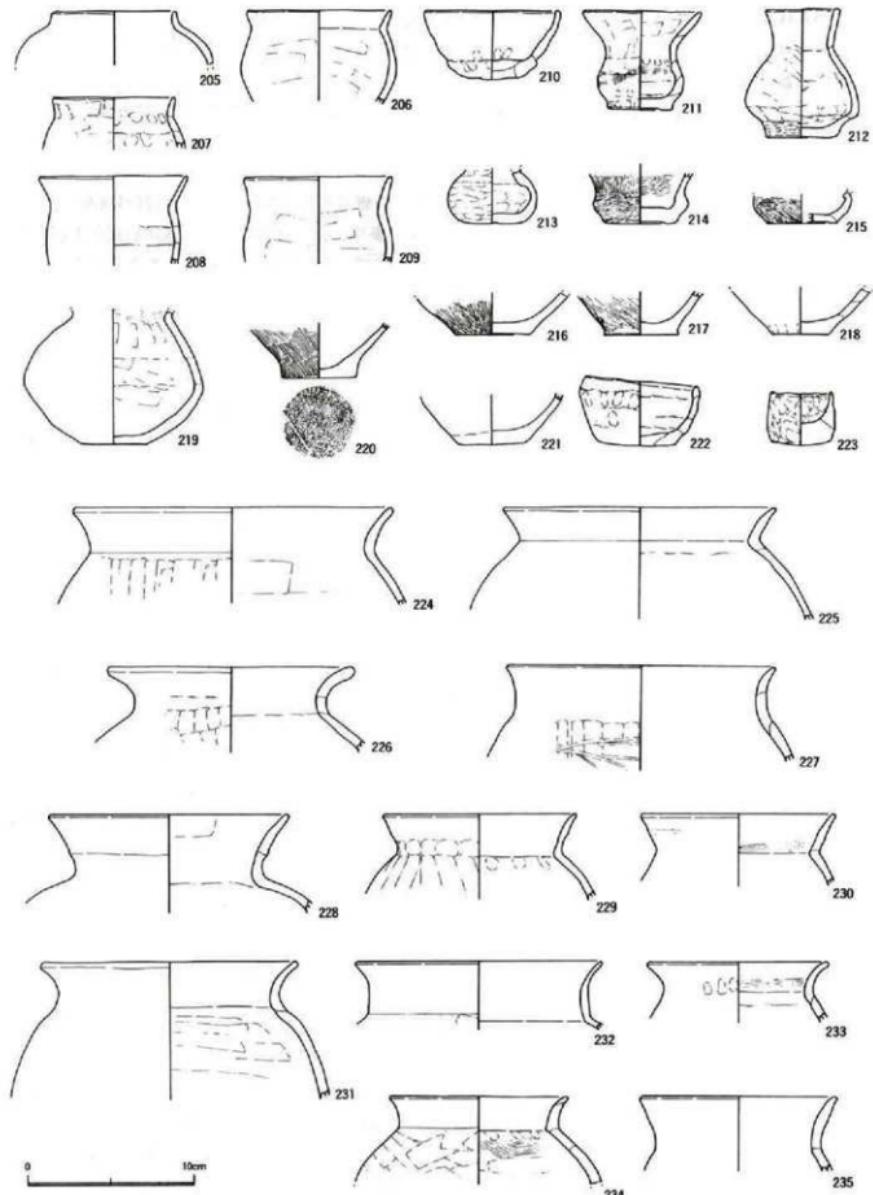
216～218・220・221は底部である。216・217はミガキ調整である。220はハケメ調整である。218・221はナデ調整である。218は内面に赤彩を施す。216～218・220・221は弥生時代末～古墳時代前期と考えられる。

#### 壺（第14図210・214・215）

210は丸底の壺である。底部と体部の境に粘土紐痕による段を残す。指押え調整を主とし全体に雑なつくりである。214は平底の壺である。器形に対し胴部が小さく、口縁部が伸びていると見られる。底部はドーナツ状の上げ底である。調整は胴部が横ミガキに対して、口縁部は縦ミガキを施す。215は胴



第13図 出土遺物（8）



第14図 出土遺物（9）

部のみ残存しているがおそらく器形は214と同様の平底壺と考えられる。214に比べて精製されたつくりで、ミガキ調整も細かく丁寧である。210・214・215は弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

#### 手捏土器（第14図222・223）

222は楕形を模した手捏土器である。内外面に赤彩を施す。223はいわゆるミニチュア土器で、楕形を模している。

#### 甕（第14～17図224～282・287～304）

224・226・227・229は外面が縦方向のヘラケズリ調整の甕である。224・229は口縁部が屈曲し、胴部の張りは弱い。226は口縁部が大きく外反し、胴部にやや張りをもつ。227はほぼ口縁部が直立する。228は口縁部中位に弱い稜を持ち、胴部の張りが強い。224・226～229は古墳時代後期と考えられる。

225・230・233・234・235～245は外面ナデ調整の甕である。236～245は224～235の甕に比べると全体のせいけいや調整が整っていない。225・230・231・233～235は胴部の張りが弱い。225・230・231・233～235は古墳時代中期～後期と考えられる。

236は球状の胴部から口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部付近で外反する。237～239はなで肩の肩部から頸部は「く」の字に屈曲し、口唇部付近からやや内彎する。240・241・245はややなで肩の胴部から口縁部にくの字に屈曲する。240は口縁部と頸部接合部に輪積痕を残す。236～241・245は古墳時代中期と考えられる。

242・243はなで肩の胴部から口縁部は内彎してたちあがる。古墳時代前期～中期と考えられるのではないだろうか。

244は頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は2段の輪積痕を残す。頸部付近は指押え、口縁部はナデ調整である。古墳時代前期と考えられる。

246～255・287はハケメ調整の甕である。頸部は「く」の字に屈曲する。口縁部調整を見ていくと、248はハケメ調整のみである。249はハケメ調整後、口唇部付近のみ横ナデをおこなう。252・253はハケメ調整後口縁部上半に横ナデをおこなう。252は胴部に幅の広い縦ハケメ調整ののち、頸部のやや下がった位置に横ハケメ調整をおこなう。S字状口縁甕を意識したものであろうか。250・251・254・287はハケメ調整後口縁部全体に横ナデをおこなう。247・255は口縁部は横ナデ調整である。このうち249・248・254・255は口唇部に面取りをおこなう。246～255・287は古墳時代前期と考えられる。

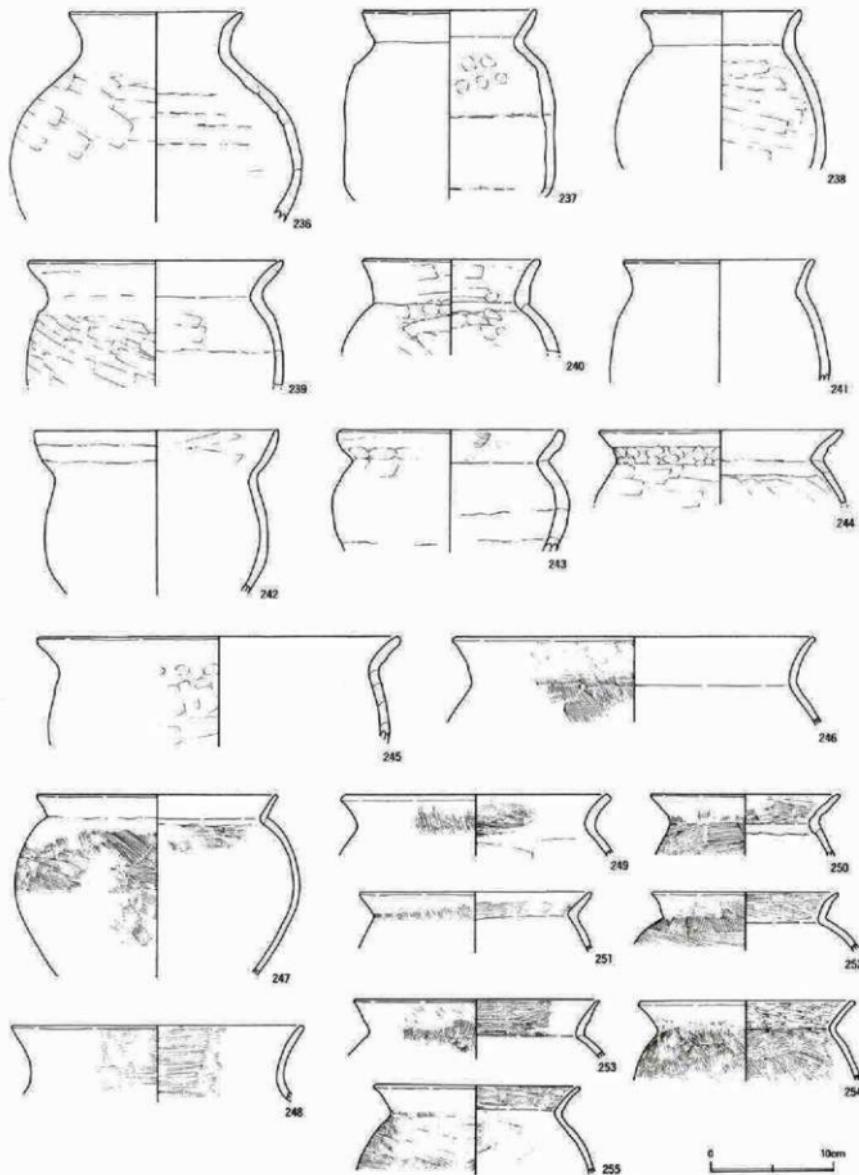
256・257・288・289は口唇部にキザミを施し、ハケメ調整の甕である。いずれも口唇部は面取り後キザミをおこなう。289は口縁部ハケメ調整をおこない、その他はハケメ調整後横ナデをおこなう。256・257は胴部上半の張りが弱い。256・257・288・289は弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

258は口縁部はハケメ調整の後ナデ、胴部はナデである。弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

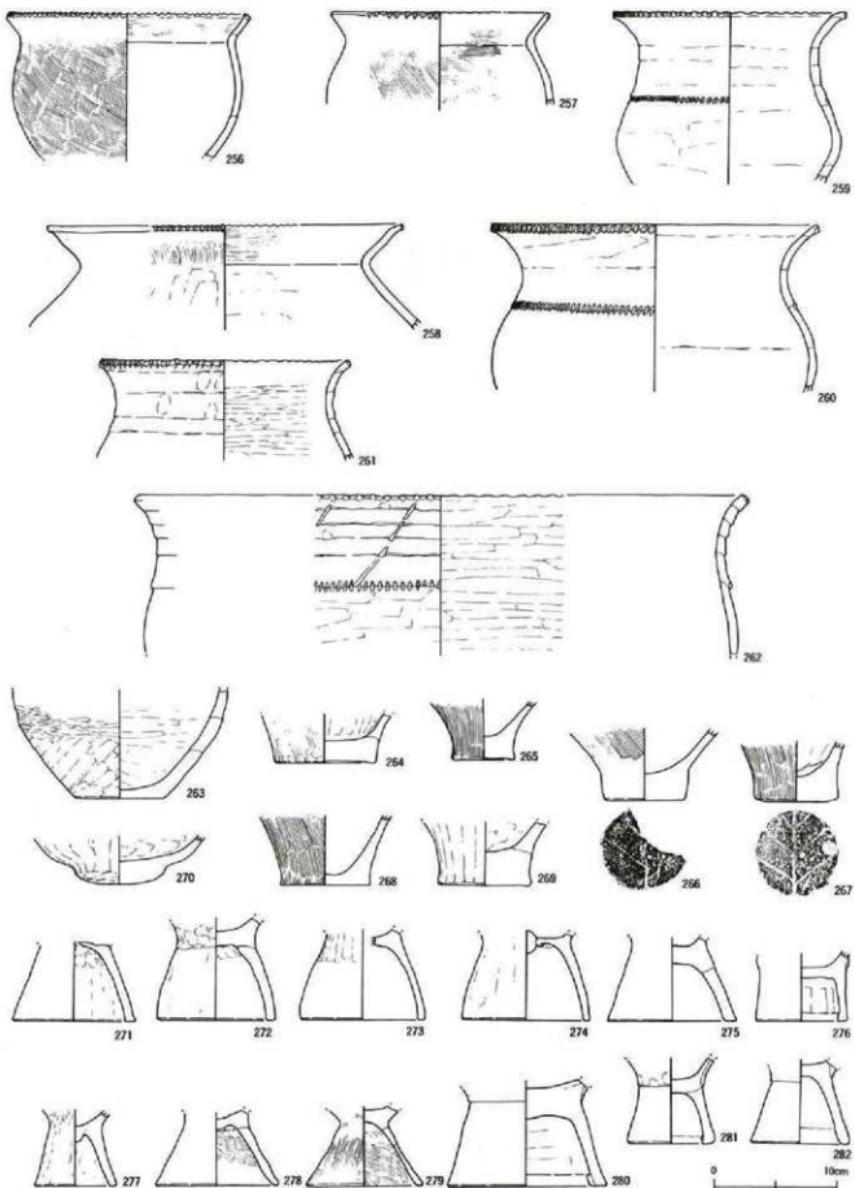
301はS字状口縁甕胴部である。胎土には金雲母が含まれ、色調は灰黄色である。器厚は薄く、撥入品の可能性が考えられる。弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

259・260・295・296は口唇部にキザミ又は交互押捺を施し、胴部中位に輪積痕を段部として残し、キザミ調整をおこなう甕である。259・296は胴部の張りが弱く、頸部から胴部上半にかけて輪積痕がやや残る。口唇部は棒状工具による交互押捺を施す。260は259に比べ胴部の張りが強く、頸部から胴部上半にかけての輪積痕もほとんど残らない。キザミを行う施文具は繩文原体とみられる。295は胴部の張りが弱く、棒状工具によりキザミをおこなう。259・260・295・296は弥生時代後期後半と考えられる。

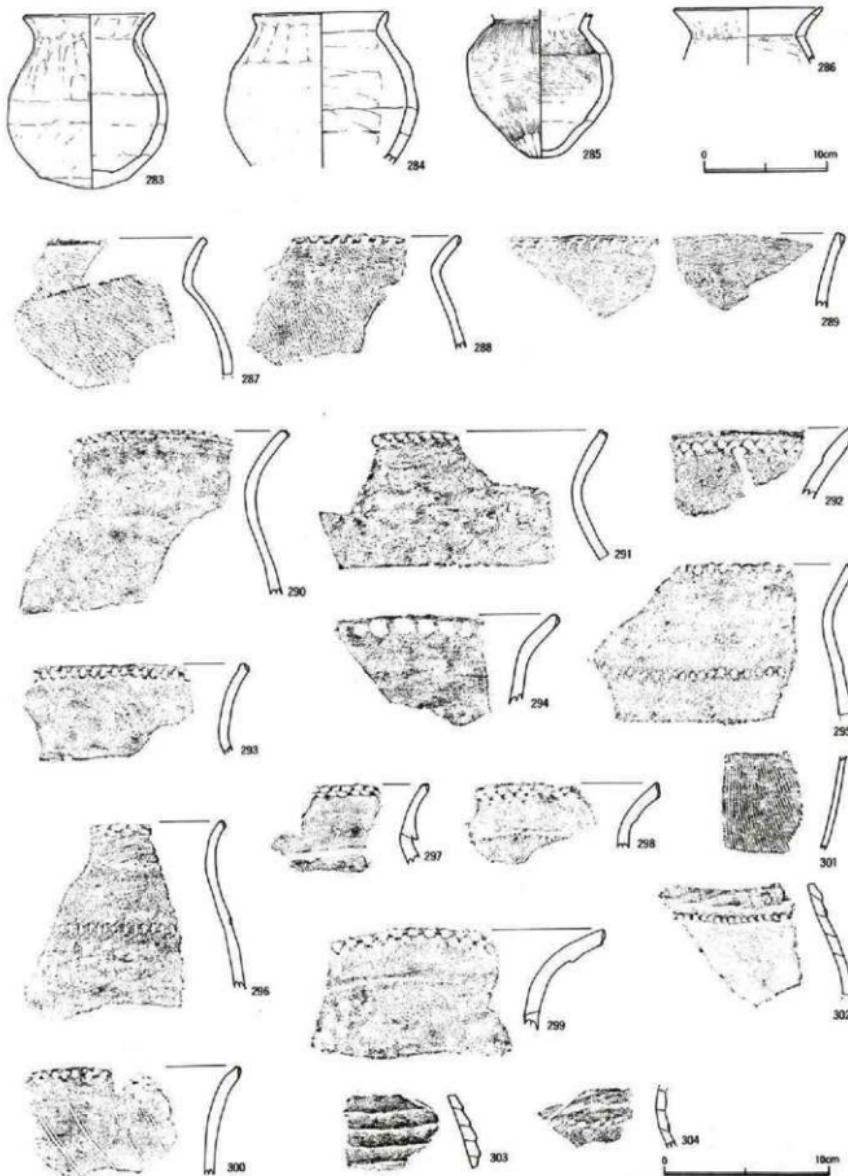
290～293は口唇部に棒状工具によるキザミ又は交互押捺をおこない、ナデ調整の甕である。290は頸部に1段の輪積痕を残す。291は口唇部に内面から押捺を施し、所々外側からの押捺を行うために交互押捺のような部分が見られる。292は口唇端部をつまみあげ、口縁部にキザミを施す。口縁部内面に折



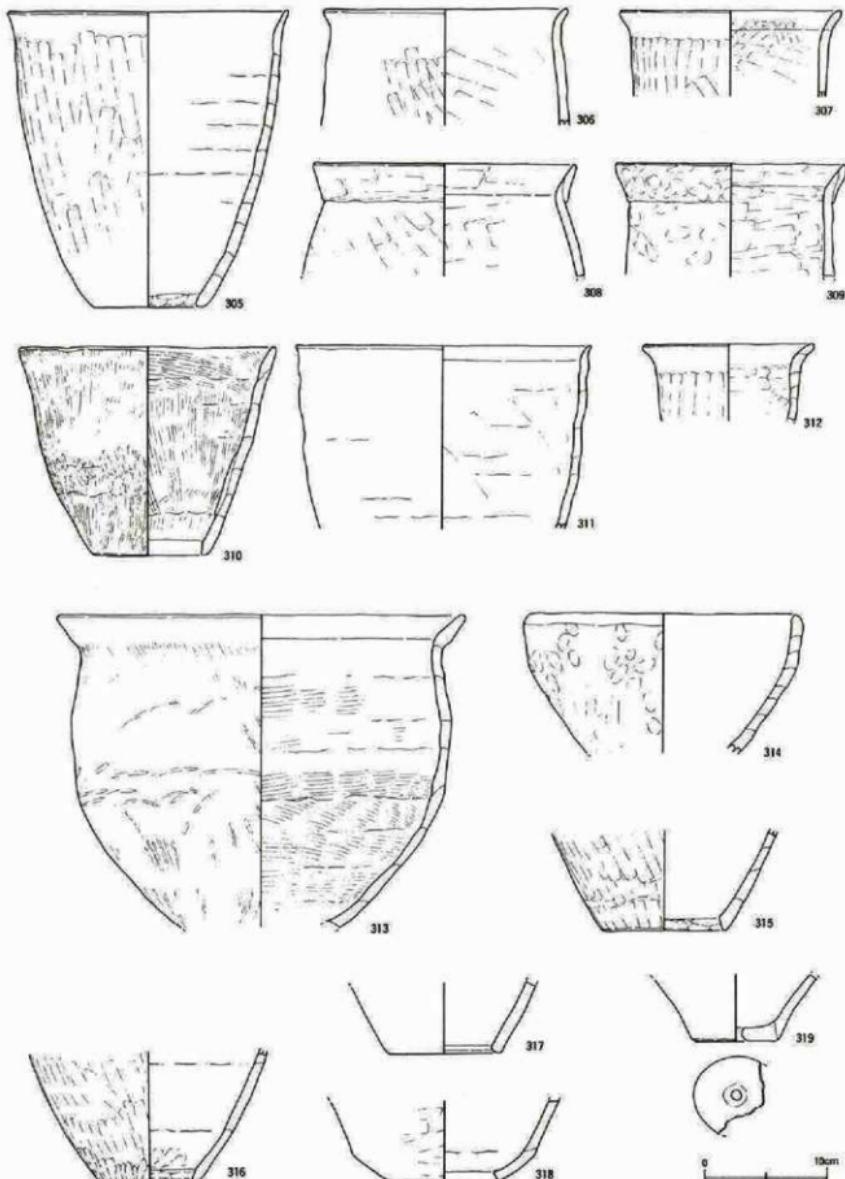
第15図 出土遺物 (10)



第16図 出土遺物 (11)



第17圖 出土遺物 (12)



第18図 出土遺物 (13)

り返しが見られる。290～293は弥生時代後期後半である。

297～299は口唇部に棒状工具による交互押捺又はキザミを施し、口縁部下にはっきりとした輪積痕をもつ、ナデ調整壺である。弥生時代後期と考えられる。

261・262・302～304は輪積痕をのこすナデ調整壺である。261は頸部の屈曲は緩やかで、口縁部～頸部に4段の輪積痕を残す。262は頸部の屈曲は緩やかで、口縁部～頸部に5段の輪積痕を残し、最下段の輪積痕上にキザミを施し、斜位にヘラ状工具により沈線を施す。301・302も同じく最下段の輪積痕上にキザミをおこなう。261・262・302～304は弥生時代後期中葉と考えられる。

294は口唇部に弱い指頭ひねりをおこなう。300は口唇部に棒状工具によるキザミをおこなう。胴部はハケメの後に羽状文を施す。249・300は弥生時代中期後半と考えられる。

263～269は平底壺底部である。263は胴部に膨らみをもち、胴部中位にミガキをおこなう。263は古墳時代中期と考えられる。

264～269は底部から胴部へと直線的に立ち上がる壺である。264はハケメ調整後ナデをおこなう。269はハラナデ調整である。その他はハケメ調整である。264～269は弥生時代中期後半と考えられる。

270は丸底気味な壺底部である。時期は不明である。

271～282は台付壺脚部である。271～274はやや内彎気味に脚部が広がる。ナデ調整である。275・277～282はハの字状に広がる台付壺である。275・280～282はナデ調整である。そのうち280～282は胴部との接合部に突帯を貼り付ける。277～279はハケメ調整である。271～282は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。

#### 小型壺（第17図283～286）

283～286は小型壺である。283は頸部は「く」の字に屈曲し、底部は尖底である。胴部上半は縦方向のヘラナデ、胴部下半～

底部は不定方向のヘラナ

デである。284は器形・

調整共に283にほぼ同様

であるが、口縁部の立ち

上がりが短い。285は胴

部上半に最大径をもち、

底部は尖底ぎみである。

286は頸部は「く」の字

に屈曲する。283～286は

古墳時代前期と考えられ

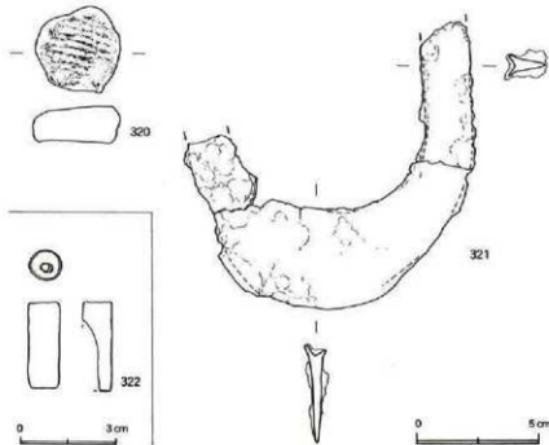
る。

#### 瓶（第18図305～319）

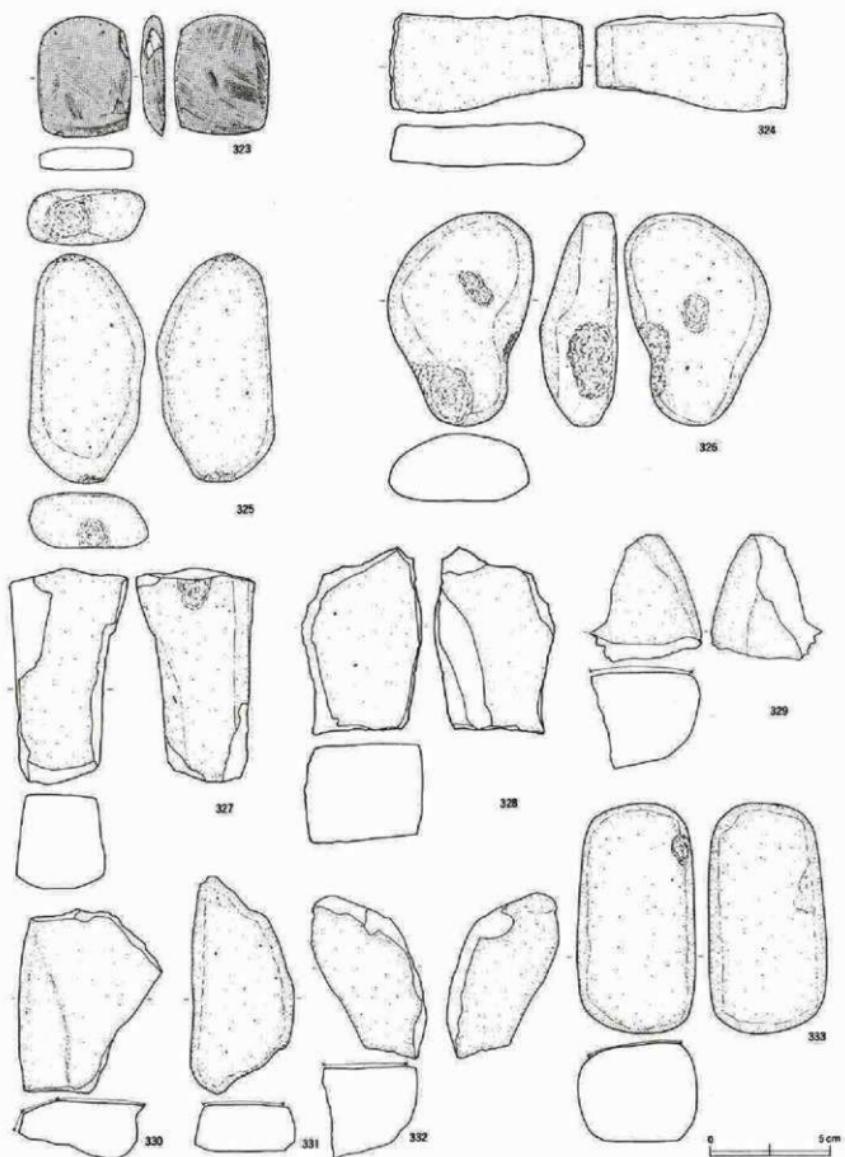
305～319は瓶である。

瓶は共通して胎土が粉質で、全体に調整が難であるため、輪積痕を残すものが多い。

307・312は口縁部は外反し、胴部は縦方向のヘ



第19図 出土遺物 (14)



第20図 出土遺物 (15)

ラケズリ調整をおこなう。312は小型の瓶である。307・312は古墳時代後期後半と考えられる。

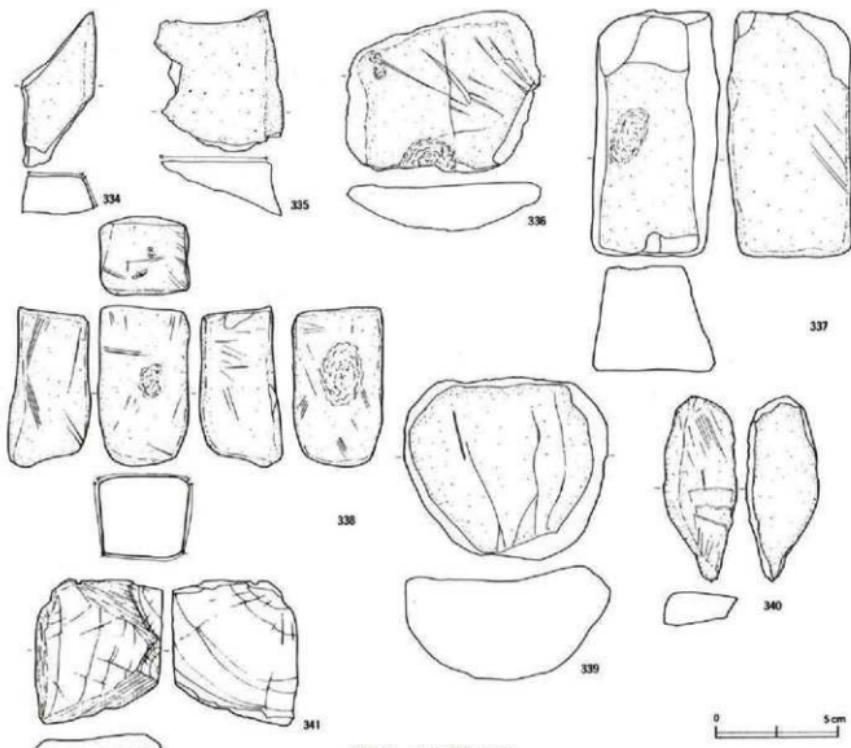
305・306は口縁部がやや外反し、307・312に比べると不規則なヘラケズリ調整をおこなう。305は底部筒抜けである。308・309は口縁部は折り返しである。308はヘラナデ調整、309は指押えによる雑な調整である。305・306・308・309は古墳時代後期前半と考えられる。

315～317は底部筒抜けの瓶である。315～317は器形が底部から胴部へと広がる。それぞれの胴部調整は315はヘラケズリのようなヘラナデ、317はナデ、316はヘラケズリである。315～317は古墳時代後期と考えられる。

311は口縁部が短くわずかに外反する。313は口縁部は外反し、やや球胴化した瓶である。壺とも考えられるが胎土・調整から瓶と考える。311・313は古墳時代中期～後期と考えられる。

310は小型の瓶である。器形は胴部から口縁部にはぼ直線的に広がる。調整は雑なハケメである。底部は筒抜けである。314は器形は砲弾形になると見られる。調整は雑なナデの後に指押えをおこなう。318は底部付近で屈曲する器形である。310・314・318は古墳時代中期後半と考えられる。

319は底部が単孔で、器形はおそらく断面三角形になると見られる。古墳時代中期前半とみられる。



第21図 出土遺物 (16)

## 2. 土製品（第19図320、第1表）

320は土製円盤である。

## 3. 鉄製品（第19図321、第1表、図版6）

321はU字形の鍼先である。木質部の挿入部分は明瞭なY字形である。

## 4. 石製模造品（第19図322、第1表）

322は管玉である。

## 5. 石器（第20図323～341、第2表、図版9）

本遺跡における弥生時代以降のものと思われる石器は19点を数える。器種は磨製石斧・磨石・敲石・凹石・砥石である。最も数量的に多い砥石は使用痕跡・磨面の形成状態によって3分類が可能である。

323は小形磨製石斧である。表裏面・両側縁ともに丁寧な研磨が施され、刃部は表面のみに横位方向の研磨が施されている。

324は磨石である。欠損しているが、両面ともに磨面が観察される。形状から想定すると、石皿とも捉えられるものであるが、磨面の様相から砥石として利用された可能性も否定できない。

325は敲石である。長楕円状のやや扁平な礫を利用したもので、上下の縁辺に敲打痕が認められる。

326・327は凹石である。326は礫の表裏面にやや浅めの凹みが認められ、また左下部と右側縁～裏面左側縁にも敲打痕が観察される。327は欠損品であるが、棒状礫を素材としているものと思われる。両面に加工は認められないが裏面のみにやや浅めの凹みが観察される。

328～341は砥石である。328～335については磨面のみが観察されるもの、336～338磨面・使用によるものと思われる線状痕・凹みが認められるもの、339・340・341は磨面・線状痕が認められるものである。328～335には331・333以外は欠損品である。使用面については330と334が表面と側縁の使用が観察される以外はすべて表面のみ（335は裏面が剥落しているために不明）の使用であると思われる。336～338については338のみが完形である。336は左上から右下に向けての明瞭な線状痕が観察され、中央部と推定される部分には浅い凹みが観察される。337は表面に凹みが観察され、裏面に右下から左上に向けてやや不明瞭ながら僅かに線状痕が観察される。338は表面・裏面ともに浅い凹みが観察され、ほぼ全面にかけて磨面・線状痕が認められる。339～341は磨面・線状痕が観察されるが、18は表面に縦位方向の線状痕が認められるほかに「ケズリ痕」のような研磨痕がある。341は剥片を素材にしたもので、表面は横方向、裏面は右上方向からの主要剥離面が観察される。そして表面の縁辺ないしは縁辺～主要剥離面にかけて磨面が認められる。

### 第3節 繩文時代

#### 1. 土器 (第22・23図、第3表、図版9・10)

当遺跡において縄文時代における遺物は、包含層中の上層から下層にかけて出土した。時期としては縄文時代中期から後期に包括できるものであった。遺物点数は数十点にのぼり、図示できるものをここに示し、分類した。

##### 第1群土器 中期前葉～末葉の土器を一括した。(第22図)

##### 第1類土器 中期前葉の土器 (402)

402は縦位に隆帯を持ち、その一方の側辺に半截竹管状工具による沈線が同方向に施される。隆帯の突端は鋭角で、断面は三角形状を呈する。胎土に金雲母を多く含んでいる。

##### 第2類土器 中期後葉の土器

###### 1種 重弧文の間に条線を充填するもの (403)

403は口縁部破片である。外面は半截竹管状工具による重弧文を描出した後に、その間を櫛齒状工具による条線を充填している。口唇部直下には右斜方向に短沈線を持つ。さらに口唇部は内面に肥厚し内傾する。口唇部上に左斜方向に短沈線を施している。

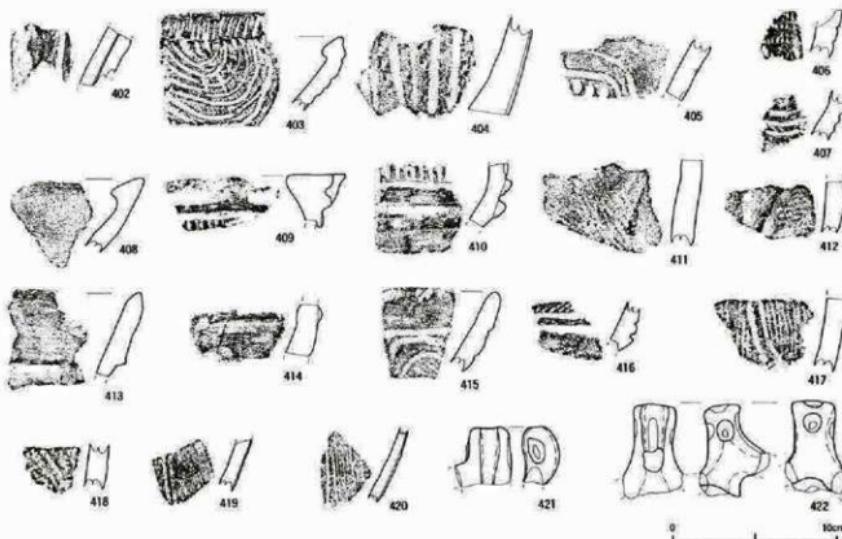
###### 2種 沈線を主体とするもの

###### a 地文に縄文を持つもの (404)

404は底部に近い部位の胴部破片である。縄文(単節LR)を地文とし、縦方向に5条以上の太沈線が施されている。器厚は厚く、雲母を多く含む胎土である。

###### b 沈線による区画内に刺突を持つもの (405, 406)

405は2重の沈線の区画内に列点文を施すものである。406は縦方向に走る沈線と櫛齒状工具に



第22図 縄文土器拓影図(1) 第1群土器

よるものと思われる3列以上の刺突列を持つ。

c 沈線のみのもの (407)

407は半截竹管状工具による重弧文を描出する胴部破片である。

3種 2類に伴うと思われる無文の土器 (408)

408は口縁部破片で403と同様に口唇部が内側に肥厚するものである。403に比べると口唇部の内傾はやや浅く、下部の処理は粗雑である。

第3類土器 中期後葉～末葉の土器

1種 隆帯区画を主体とするもの

a 隆帯と沈線により文様が構成されているもの (409, 410)

409は口縁部破片で口唇部断面が2.5cmを測る。口唇部は無文で、口縁部には2条の沈線が施され、その下部には縦位に刻みがある。口唇部直下には突起があり、上段の沈線を一時区切る。410は隆帯2条とその上部に沈線を横位に施し、その区画内に櫛齒状条線を充填させる。

それぞれの隆帯の下方には細沈線が1条ずつ施されている。

b 隆帯による区画内を縄文で充填するもの (411, 412)

411、412は曲線の低隆帯の区画内外に縄文を充填させるものである。またその縄文を磨り消している痕跡が認められる。

c 隆帯のみで構成されるもの (413, 414)

413は口縁部破片で、低隆帯が横位に施される。欠損により不明瞭であるが、その隆帯と直角に隆帯が施され、鉤状の区画を構成しているものと思われる。414は胴部破片で、隆帯が1条のみの施文である。

2種 沈線を主文様とし、沈線による区画内を縄文で充填しているもの (415～417)

415は口縁部破片で口縁部を横位の沈線で区画し、その下部に2条の沈線による曲線文を施し、その中を磨消縄文で充填しているものである。416は2条の沈線と2条の隆帯を交互に施文し、その上部に縄文を施している。417は胴部破片であるが415と同様の2条の沈線による曲線文を描出しているものである。そしてその区画内外を縄文で充填している。

第4類土器 2・3類に伴うと思われる縄文施文の胴部破片 (418)

418は器厚、胎土等から2・3類に伴うものとした。縄文原体は単節RLと思われる。

第5類土器 2・3類に伴うと思われる条線施文の胴部破片 (419, 420)

419は半截竹管状工具による細い条線が施されるものである。420は櫛齒状工具による押捺の浅い条線が破片全面に施されている。

第6類土器 2・3類に伴うと思われる把手部分 (421, 422)

421はいわゆる両耳形を呈する浅鉢または深鉢の把手である。断面形は環状を呈している。平面は中央に浅い凹みをめぐらせるものである。422は口縁から直立すると思われる把手で、側面4面と上面からなる丸みのある直方体状である。欠損により不明であるが、側面の一方からさらに横状の把手を成すと思われる突起が認められる。その突起に沿って凹みを施文し、他の側面と上面3面には円形の刺突を施している。

第2群土器 後期前葉～後葉の土器を一括した。(第23図)

第1類土器 沈線を主文様とするもの

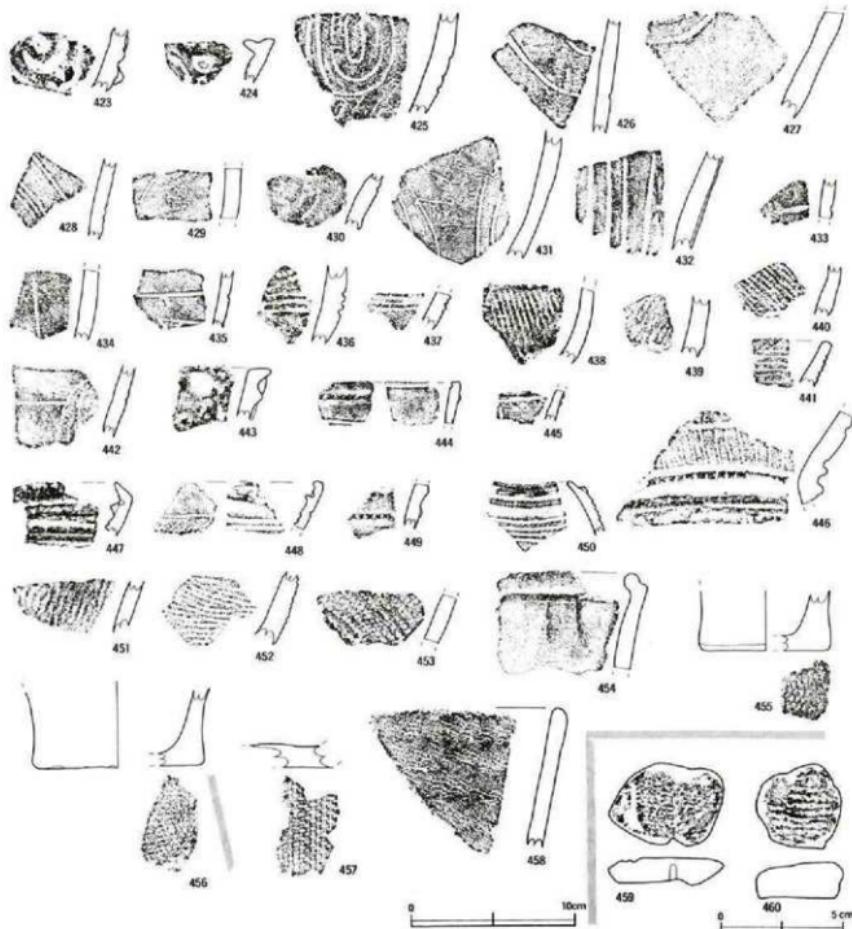
1種 曲線状のモチーフを持つもの

a 沈線のみのもの (423～430)

423はJ字状の沈線を施す脛部破片である。J字状の下方には小突起が見られ、その中を棒状工具で刺突している。424は内屈する口唇部を持つが、剥落のため不明瞭である。外面は無文で、内面に円と弧状に沈線が施されている。425は脣部破片で、3条以上のU字状沈線が施され、その下部に斜位の沈線が認められる。426~430は1条以上の沈線による曲線文を持つ脣部破片である。426・427は棒状工具による、やや押捺の強い沈線が施されるが、他は浅くやや不明瞭な沈線を持つ。

b 沈線による区画内に磨消繩文が施されるもの (431)

2条1単位の沈線が曲線的に施され、その間に浅く不明瞭な磨消繩文を一部に施す脣部破片で



第23図 繩文土器拓影図(2) 第2・3群土器

ある。縄文原体は単節RLと思われる。

## 2種 直線状のモチーフを持つもの

### a 沈線のみのもの (432~434)

432は断面が12mmを測り、やや厚みのある胴部破片で、縦位に押捺の深い沈線が4条施されている。433, 434は浅い沈線が1条横位または縦位に刻まれるものである。

### b 沈線による区画内に磨消繩文が施されるもの (435)

435は胴部破片であり、横位に走る直線状の沈線が1条と、鉤状に屈曲する沈線が1条施され、その区画内外に細かい磨消繩文(単節LR)が施される。

### c 沈線による区画内に縄文が施されるもの (436~440)

436・437は3条の沈線が施し、その上部、あるいは下部に調文を施すものである。436は単節RL、437は無節RLと思われる。438~440は胴部の小破片である。沈線と縄文の施文がなされる。439はLR、他は単節LRの原体である。

### d 地文に縄文を持ち、横位の沈線が施されるもの (441)

441は口縁部破片であり、地文に縄文(単節LR)を施し、その後に5条以上の横位沈線を施文している。

## 3種 直線と曲線のモチーフを持つもの (442)

442は2条の弧を描く沈線と横位にのびる直線状の沈線でモチーフが構成されるものである。弧を描く沈線は太さや押捺の強さが一定していない。

## 第2類土器 円孔文が施されるもの (443)

443は口縁部破片で口唇部直下に直径1.5cmを測る円孔文が施文され、その下部に垂下する隆帯を持つ。胎土は白色粒子が多く含まれ、約4mmの小石も見受けられる。

## 第3類土器 隆帯を主様とするもの

### a 隆帯上に刺突を持ち、沈線が施されているもの (444~446)

444は口縁部破片で口唇部直下の内面に沈線が横位に1条施されている。外面には刺突を持つ隆帯が横位に1条施され、その下部に隆帯と平行に沈線が1条施文される。445は胴部の小破片であるが横位に沈線と隆帯を隣接して施し、隆帶上には刺突を持つ。また隆帯を上限とし、そこから垂下するように沈線が2条施される。2条のうち一方はやや深く押捺され、一方は浅いものである。446は外反する頭部から口縁部にかけての破片である。横位には沈線と2条の隆帯が施され、その間に縦位の条線文で充填させる。上段の隆帯には条線文とほぼ同じ間隔で刺突が施されている。

### b 隆帯上に円形刺突を持つもの (447, 448)

447は内屈する口唇部を持ち、突端は小波状を成している。内面に断面が三角形を呈する隆帯を持ち、その上部には円形の刺突が並ぶ。隆帯の下方には細沈線が横位に施され、その区画に沿って刻みが斜位に施されている。448も口縁部破片である。口唇部はやや内屈しているが、小波状は持たない。内面には丸みを帯びた隆帯が横位に施され、447同様隆帯の上面に円形の刺突が並ぶ。また隆帯の下方には2条以上の沈線が間隔を持たずめぐらされている。外面には横位に細沈線が施され、その区画下に単節LRの磨消繩文が施文されている。

### c 隆帯上に刺突を持ち、縄文が施されているもの (449)

449は胴部破片で丸みを帯びた隆帯を1条横位に施し、隆帯上に刺突を等間隔に施文する。隆帯の下方には細沈線が1条めぐり、その区画下に磨消繩文が施文されている。

#### d 隆帶上に縄文をもつもの (450)

450は口縁部破片で、口唇部には斜位に刻みを持つ。外面には隆帶が施され、隆帶上には口唇部に施した刻みと同様の工具による刻みが斜位に施されている。隆帶の下方には横位の沈線が4条めぐり、その間には細かい縄文が施されている。縄文原体は単節LRと思われる。

#### 第4類土器 1～3類に伴うと思われる縄文施文の脣部破片 (451～453)

451・453は磨滅により縄文原体はやや不明瞭であるが451が単節LR、453が単節LRと思われる。452は無節1である。

#### 第5類土器 1～3類に伴うと思われる無文の口縁部破片 (454)

454は器形はやや外反し、口唇部が内傾するものである。口唇部と口縁部の境界に段差を持つ。

#### 第6類土器 1～3類に伴うと思われる底部破片 (455～457)

455は無文の底部であるが、底面には不明瞭ではあるが縄文（単節LR）が押捺されている。456は無文の底部で底面には網代痕が認められる。1本越え、2本潜り、1本送りの編物痕である。457は底面のみの残存であるがやはり網代痕が認められる。1本越え、2本潜り、1本送りの編物痕と見られる。

#### 第3群土器 撫糸文が施文される土器 (第23図458)

458は口縁部破片であり撫糸文が施文されている。原体は不明であるが、4単位以上の施文である。この全器の型式・時期は不明である。

### 2. 土製品 (第23図、第3表、図版10)

#### 第1類 土器片錐 (459)

459は口縁部破片を土器片錐として転用したものである。片側には糸掛部の切り込みがはっきりと認められるが、もう一方は剥落により不明である。外面は口唇部直下より無節1による縄文が施され、それを区画するように横位に沈線が施文されている。口唇部は内側にふくらみを見せる形状である。計測値は器長が4.7cm、器幅が3.2cm、重量17.9gを測る。

#### 第2類 土製円盤 (460)

460は外面に縄文を持つ土製円盤である。縄文原体は無節rと思われる。形状は不整円を呈し、周縁には摩滅が認められ、3方にわずかながらの凹みが見られる。遺存径が34～36mm、最大厚は1.5cm、重量は23.0gを測る。

### 3. 石器 (第24図461～465、第4表、図版11)

本遺跡において縄文時代のものと思われる石器は5点を数える。器種は打製石斧・磨製石斧・石錐・回石・石皿である。以下それらの詳細について述べていくこととする。

461は打製石斧である。基部は欠損しているが、おそらく楔形を呈するものと想定される。表面には横方向からの大きな主要剥離面を残存させ、両側縁・刃部に二次加工が施されている。裏面にもやはり横方向からの主要剥離面が認められ、両側縁・刃部に二次加工が施されているが、刃部付近に部分的に磨面が観察される。磨面の状況や剥離面の状況を鑑みると、裏面に入念な二次加工が施されているものと考えられる。

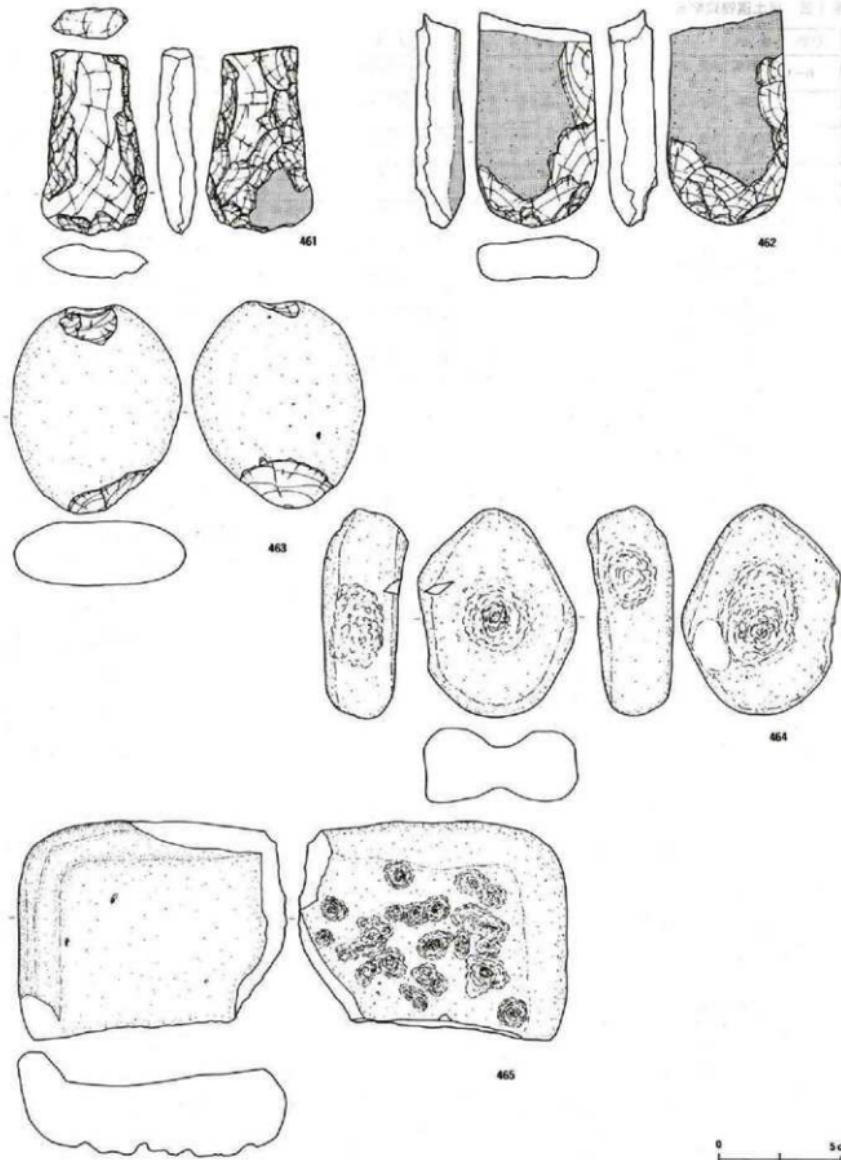
462は磨製石斧である。基部は欠損しているが、ほぼ長方形を呈しているものと想定される。表裏面ともに磨面が観察されて形態の調整が施されているが、刃部や側縁には調整を目的としている剥離面が観察される。しかしながら完全には刃部の作出が為されていないため、未製品である可能性も否定でき

ない。

463は石錘である。楕円形の礫を素材とし、その素材の形状を生かして製作したものと思われ、表裏面ともに上下に切り込みを入れた剥離面が観察される。表面の上下の切り込みは2~3回の加熱によって作出されている。

464は凹石である。表裏面・両側縁に凹みが観察され、表裏面の凹みはかなり深いものである。また石器の表裏面と両側縁に渡って部分的に擦痕が観察される。特に表面は研磨が進んでいるものと考えられ、凹みのあたりをピークとして全体的に緩やかに凹んでいるものと思われる。

465は石皿である。欠損しているが、隅丸方形状を呈するものと想定される。表面は縁辺部分がかなり肥厚しており、使用面はかなり凹んでいる。使用面には擦痕が観察される。裏面は21個の凹みが観察される。



第24図 石器実測図

第1表 出土遺物観察表(1)

回数	種別	観察内容
6-1	灰褐色器 破	法量 器高(2.1) 底径(6.0) せいせいい ロクロ成形 外面一面黒頭輪ヘラケズリ-骨付高台 脱土 密 燃成 良好 色調 灰白色 出土位置 A-2グリッド北側上層
2	須恵器 环	法量 口径(10.4) 器高(3.2) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 脱土 精微 白色粒 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-3グリッド南側中層
3	須恵器 环	法量 口径(12.4) 器高(2.0) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 脱土 精微 淡灰色微粒子微量 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-2グリッド南側上層
4	須恵器 环	法量 口径(8.2) 器高(2.9) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 底部未調査 脱土 精微 白色微粒子 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-3グリッド北側上層
5	須恵器 环	法量 口径(8.0) 器高(2.6) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 底部未調査 脱土 精微 灰白色微粒子微量 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-2グリッド南側上層
6	須恵器 环	法量 口径(8.1) 器高(3.5) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 底部未面ヘラケズリ 脱土 精微 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-1グリッド南側上層
7	須恵器 环	法量 口径(8.3) 器高(3.5) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 底部未面ヘラケズリ 脱土 精微 燃成 良好 色調 黄灰色 出土位置 A-1グリッド南側中層
8	須恵器 环	法量 器高(1.0) せいせいい 内外面一面輪ナデ 环頭輪輪ヘラケズリ 脱土 精微 灰白色微粒子 長石 石英 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-2グリッド南側下層
9	須恵器 环	法量 器高(4.2) せいせいい 内外面一面輪ナデ 外面一9本單位の環頭輪波状文 环頭輪輪ヘラケズリ 脱土 精微 小石少量 燃成 良好 色調 灰色 備考 3方向に透し 出土位置 A-1グリッド南側上層
10	須恵器 長腰鏡	法量 口径(6.4) 器高(4.5) せいせいい ロクロ成形 内外面一面輪ナデ 脱土 密 燃成 良好 色調 灰黄色 出土位置 A-1・2グリッド北側下層
11	須恵器 鏡	法量 口径(3.3) 器高(9.6) せいせいい 内外面一面輪ナデ 2段の波状文 脱土 精微 燃成 良好 色調 黑色 出土位置 B-1グリッド北側上層
12	須恵器 鏡	法量 口径(3.0) 器高(4.3) せいせいい 内外面一面輪ナデ 網目波状文 脱土 精微 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-1・2グリッド北側中層
13	須恵器 鏡	せいせいい 外面一面ナデ 内面一面円状の当て其底 脱土 密 白色微粒子 燃成 良好 色調 黄灰色 出土位置 A-3グリッド南側中層
14	須恵器 鏡	せいせいい 外面一面平行引き 内面一面円状の當て其底 脱土 密 白色粒子少量 燃成 良好 色調 灰色 出土位置 A-1グリッド北側上層
15	土師器 环	法量 口径(11.8) 器高(4.0) せいせいい 外面一口縁部横ナデ? 体部ヘラケズリ? (既述に上り調査不可観) 内面一ナデ? 崩壊により調査不可観) 脱土 粉質 燃成 やや不良 色調 棕色 出土位置 A-3グリッド南側上層
16	土師器 环	法量 口径(13.4) 器高(3.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 砂粒 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-1グリッド北側上層
17	土師器 环	法量 口径(12.0) 器高(3.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 粉質精良土 白色粘土状物質微量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-3グリッド北側上層
18	土師器 环	法量 口径(15.2) 器高(4.5) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 精微 黑色微粒子 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド南側上層
19	土師器 环	法量 口径12.4 器高(5.0) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデヘラナデ 脱土 白色微粒子 小石 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 下層 A-2グリッド北側下層
20	土師器 环	法量 口径13.0 器高(4.5) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 砂質 燃成 良好 色調 にら せきせき 出土位置 B-2グリッド北側上層
21	土師器 环	法量 口径(11.8) 器高(4.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 密 燃成 良好 色調 粉質 多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド北側中層
22	土師器 环	法量 口径(12.6) 器高(3.2) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一摩擦により調査不可観 脱土 粉質 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド北側中層
23	土師器 环	法量 口径(13.6) 器高(4.2) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 密 微砂粒少量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド南側中層
24	土師器 环	法量 口径(15.0) 器高(4.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 精微 粉質 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド南側下層
25	土師器 环	法量 口径(13.0) 器高(4.0) せいせいい 内外面一面表面により調査不可観 脱土 粉質 小石 燃成 良好 色調 明黄色 出土位置 A-1グリッド南側中層
26	土師器 环	法量 口径(14.2) 器高(3.5) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 密 少量 燃成 良好 色調 明黄色 出土位置 A-3グリッド南側中層
27	土師器 环	法量 口径(13.4) 器高(4.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 白色微粒子 燃成 良好 色調 にら 黄褐色 出土位置 A-1グリッド南側中層
28	土師器 环	法量 口径(13.8) 器高(4.2) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 やや密 白色微粒子・白色粘土状物質少量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド北側下層
29	土師器 环	法量 口径(12.6) 器高(3.1) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ一部ヘケメ 底部ナデ? (既述に上り調査不可観) 白色微粒子 黑色微粒子 燃成 良好 色調 明黄色 棕色 出土位置 A-3グリッド北側中層
30	土師器 环	法量 口径(13.6) 器高(3.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ 底部ナデ 脱土 黑色微粒子微量 燃成 良好 色調 にら せきせき 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ-赤彩 体部ヘラケズリ-赤彩 体部ヘラケズリ-赤彩 出土位置 A-1グリッド南側上層
31	土師器 环	法量 口径(12.0) 器高(3.6) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ-赤彩 体部ヘラケズリ-赤彩 体部ヘラケズリ-赤彩 底部ナデ-赤彩 脱土 白色微粒子少量 燃成 良好 色調 にら せきせき 出土位置 A-3グリッド南側中層
32	土師器 环	法量 口径(11.8) 器高(3.4) せいせいい 外面一口縁部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縁部横ナデ-底部ナデ-赤彩? 脱土 白色粘土状物質 灰白色微粒子微量 燃成 良好 色調 にら 棕色 出土位置 A-2グリッド南側上層

試験No.	種別	観察内容
6-33	土師器 坏	法量 口径(13.0) 高さ(4.6) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部指印え、底部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 白色粘土物質少量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-3グリッド北側中層
34	土師器 坏	法量 口径(12.6) 高さ(5.1) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部ナデ・底部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 砂質 白色粘土物質少量 燃成 良好 色調 赤褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
35	土師器 坏	法量 口径(12.8) 高さ(4.7) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部ナデ・底部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 密白色粘土物質微量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド南側下層
36	土師器 坏	法量 口径(12.4) 高さ(5.2) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部ナデ・体部下半へ底部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 やや赤褐色 白色粘土物質多量 燃成 良好 色調 赤褐色 出土位置 A-2グリッド下層
37	土師器 坏	法量 口径(12.6) 高さ(5.0) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部ナデー底部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 白色粘土物質微量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
7-38	土師器 坏	法量 口径(13.4) 高さ(5.0) せいかい 外面一口ナデー口縁部横ナデ 体部下へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 周辺部により調整不規則 脱土 砂質 白色粘土や多量 燃成 良好 色調 赤褐色 出土位置 A-2グリッド南側下層
39	土師器 坏	法量 口径(14.5) 高さ(3.6) せいかい 外面一口ナデー体部へラケズリー 内面ミガキ 脱土 白色粘土物質多量 燃成 良好 色調 桜
40	土師器 坏	法量 口径(15.0) 高さ(3.4) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部下半へラケズリー赤彩 (周辺部により調整不規則) 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 粉質 白色粘土物質 砂粒 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド南側下層 備考 燃成後被破
41	土師器 坏	法量 口径(14.8) 高さ(4.4) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部下半部等へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 黑色粒 白色粘土物質少量 燃成 良好 色調 桜 出土位置 A-2グリッド中層
42	土師器 坏	法量 口径(14.0) 高さ(5.3) せいかい 内面一口縁部横ナデ・体部外面へラケズリー外面部赤彩 脱土 密 白色粘土物質微量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
43	土師器 坏	法量 口径(15.2) 高さ(4.5) せいかい 外面一口縁部横ナデ 体部へラケズリー 内面一ナデー赤彩 脱土 密 白色粘土物質微量 燃成 良好 色調 桜 出土位置 A-2グリッド北側中層
44	土師器 坏	法量 口径(15.4) 高さ(6.7) せいかい 外面一口縁部横ナデ 体部へラケズリー赤彩 内面一ナデー口縁部横ナデー赤彩 脱土 粉質 白色粘土物質 黑色粒や多量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
45	土師器 坏	法量 口径(14.2) 高さ(5.6) せいかい 外面一口ナデー体部へラケズリー赤彩 内面一ナデー赤彩 脱土 やや褐色多量 白色粘土物質少量 白色粒 良好 色調 桜 にぬ 黄褐色 出土位置 A-1グリッド南側中層
46	土師器 坏	法量 口径(13.0) 高さ(5.6) せいかい 外面一口縁部横ナデ 体部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 粉質 黑色砂渺少量 燃成 良好 色調 桜 出土位置 A-2グリッド北側上層
47	土師器 坏	法量 口径(14.0) 高さ(6.1) せいかい 外面一面端部により調整不規則 赤彩がけに残る 脱土 やや粗 小石 白色粘土物質・實物微細 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層
48	土師器 坏	法量 口径(15.6) 高さ(5.8) せいかい 外面へラナデー口縁部横ナデー赤彩 内面へラナデー赤彩 脱土 砂質 白色粘土物質 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-1グリッド下層
49	土師器 坏	法量 口径(16.0) 高さ(5.8) せいかい 外面一口縁部横ナデ 体部へラケズリー赤彩 内面一ナデーミガキ 脱土 密 白色粘土物質灰白色微細少量 燃成 良好 色調 桜 出土位置 A-1グリッド南側上層
50	土師器 坏	法量 口径(19.6) 高さ(5.5) せいかい 外面一口ナデー体部下へラケズリー赤彩 内面一赤彩 脱土 粉質 燃成 良好 色調 赤褐色 出土位置 A-3グリッド北側3トレーン下層
51	土師器 坏	法量 口径(12.4) 高さ(5.5) せいかい 外面一口縁部横ナデ・体部上半ナデ・下半へラケズリー赤彩? (周辺部により調整不規則輪郭残る) 内面一口縁部横ナデ・体部ナデー赤彩 脱土 砂質 黑色粒 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層
52	土師器 坏	法量 口径(13.6) 高さ(5.8) せいかい 外面一口ナデーミガキへ赤彩 (周辺部により調整不規則) 脱土 黑色粒 白色粘土物質多量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層
53	焼?	法量 口径(14.4) 高さ(5.2) 底径(3.2) 調整・文様 外面一口ナデー赤彩 脱土 やや赤褐色 白色粘土物質 燃成 やや不良 色調 明赤褐色 出土位置 A-2グリッド下層
54	焼	法量 口径(13.2) 高さ(4.9) 底径(3.1) 調整・文様 外面一口縁部横ナデー赤彩 体部へラケズリー上半赤彩 下半出刃部により調整不規則 内面一ナデー赤彩 脱土 粉質 白色粘土物質 黑色砂渺 角閃石少粒 燃成 良好 色調 桜へ赤褐色 出土位置 A-2グリッド上層
55	焼	法量 口径(14.2) 高さ(5.6) 底径(5.6) 調整・文様 外面一口ナデー体部下半へラケズリー-底部近へラナデー赤彩 内面へラナデー赤彩 脱土 小石 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
56	焼	法量 口径(12.0) 高さ(5.8) 底径(2.0) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ・体部上半ナデ・下半へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ・底体部ナデー赤彩 脱土 砂質 白色粘土少粒 燃成 良好 色調 赤褐色 赤褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
57	焼	法量 口径(14.6) 高さ(5.5) 底径(3.1) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ・体部上半ナデ・下半へラケズリーミガキへ赤彩 (周辺部により調整不規則) 内面一ナデー赤彩 脱土 砂質 白色粘土物質 燃成 良好 色調 桜 出土位置 A-2グリッド下層
58	焼	法量 口径(13.0) 高さ(4.0) 底径(1.6) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ・体部上半ナデ・下半へラケズリーミガキへ赤彩 脱土 砂質 白色粘土多量 燃成 良好 色調 にぬ 黄褐色 出土位置 A-1南側グリッド上層
59	焼	法量 口径(14.0) 高さ(5.3) 底径(3.2) 調整・文様 外面へミガキへ赤彩 (体部下半は崩壊により調整不規則) 内面一ミガキへ赤彩 脱土 密 白色粘土物質 燃成 良好 色調 赤褐色 出土位置 A-2グリッド上層
60	焼	法量 口径(14.6) 高さ(4.6) 底径(1.6) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ・体部上半横ミガキへ赤彩 体部下半へ底部へラケズリー 内面ミガキへ赤彩 脱土 やや赤褐色 白色粘土多量 燃成 やや不良 色調 明赤褐色 出土位置 A-1グリッド下層
61	焼	法量 口径(15.6) 高さ(5.6) 底径(4.1) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ・体部上半部へラケズリー赤彩 内面一口縁部横ナデ 体部ナデー赤彩 脱土 やや赤褐色 白色粘土多量 燃成 やや不良 色調 明赤褐色 出土位置 A-2グリッド下層
62	焼	法量 口径(20.0) 高さ(6.2) 調整・文様 外面へカメー口縁部横ナデ・体部へラケズリー赤彩? 内面一口縁部ハカメー横ナデ・体部ナデミガキへ赤彩 脱土 やや粉質 角閃石少粒 燃成 良好 色調 桜へ赤褐色 出土位置 A-1グリッド南側中層

回数	種別	観察内容
7-63	杭	法量 口径(13.8) 高さ6.4 底径(5.0) 調整・文様 外面一口縫部横ナデ 体部ヘラケズリ(一部剥離状)赤色 内面一口縫部横ナデ・以下ナデ・赤彩 地土 やや密 白色針状物質 黒色微細 燃成 やや不良 色調 暗・黒色 出土位置 A-1グリッド南側上層
64	杭	法量 口径(12.8) 高さ(5.1) 調整・文様 外面一口縫部横ナデ 体部ヘラケメ→ヘラナデ・赤彩 内面一ハケメ→ヘラナデ・赤彩 地土 密 白色針状物質少量 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 B-1グリッド南側下層・北側下層
65	鉢	法量 口径(14.0) 高さ(2.0) 底径(7.0) 調整・文様 外面一ハラナデ一口縫部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一ハラナデ一口縫部横ナデ 地土 やや粗 彩色多量 燃成 良好 色調 暗褐色・暗褐色 出土位置 B-1グリッド
66	鉢	法量 口径(12.6) 高さ(8.3) 調整・文様 外面一口縫部横ナデ 体部ヘラケズリ・赤彩 内面一口縫部横ナデ・体部ヘラナデ・赤彩 地土 の付質 白色針状物質 黑色微細 燃成 良好 色調 赤褐・暗褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
67	鉢	法量 口径(14.0) 高さ(6.4) 調整・文様 外面一口縫部横ナデ 体部ヘラケズリ・赤彩 内面一口縫部横ナデ・体部ナデ・赤彩 地土 砂質 白色針状物質少量 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
68	鉢	法量 口径(11.0) 高さ(6.6) 調整・文様 外面一口縫部横ナデ 体部ヘラケズリ 内面一口縫部横ナデ 体部ナデ 地土 白色針状物質少量 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 A-1グリッド北側上層
69	鉢	法量 口径(11.2) 高さ(8.2) 底径(4.8) 調整・文様 内外面一ナデ・赤彩 (全斜に剥離現象) 地土 密 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 B-2グリッド北側上層
70	鉢	法量 口径(10.4) 高さ(6.1) 調整・文様 外面一概ミガキ? 内面一ナデ 地土 密 角閃石 砂粒 多量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 B-1グリッド南側上層
71	鉢	法量 口径(11.8) 高さ(8.9) 調整・文様 外面一口縫部ヘラナデ 脊部ヘラケメ→いミガキ 内面一口縫部ヘラナデ 脊部ヘラケメ→や丁寧なミガキ 地土 やや密 粗粒較多量 燃成 やや不良 色調 暗・にら・暗褐色 出土位置 B-3グリッド上層
72	鉢	法量 口径(15.4) 高さ(5.5) 調整・文様 外面一ハケメ→丁寧なミガキ 地土 やや密 白色針状物質微量 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 A-1グリッド南側下層
8-73	鉢	法量 口径(17.2) 高さ(6.6) 調整・文様 外面一ミガキナデ? 口縫部剥離現象(6.0) 内面一ミガキナデ? 地土 やや粗 有機物質や多量 白色針状物質少量 燃成 やや不良 色調 暗・にら・褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
74	鉢	法量 高さ(7.6) 底径(6.4) 調整・文様 外面一ヘラケズリ 底部ヘラケズリ 内面一ヘラナデ 地土 密 燃成 良好 色調 にら・黄褐色・暗褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
75	鉢	法量 口径(10.5) 高さ(11.1) 底径(6.0) 調整・文様 外面一折返口縫部ナデ・一ロウ部唇部近縫ナデ 脊部無ナデ 内面一ナデ 地土 白色微細 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 A-1グリッド北側中層
76	鉢	法量 口径(12.4) 高さ(6.3) 調整・文様 外面一ナデ・横ミガキ 内面一ミガキ 地土 密 黒色微細 燃成 良好 色調 黄褐色・にら・暗褐色 出土位置 A-3グリッド北側トレンチ下層
77	鉢	法量 口径(21.0) 高さ(8.0) 底径(6.6) 調整・文様 外面一口縫部剥離現象? (薄削により調整不順則) 口縫部下端を比較的削りした剥離現象(8.0) 地土ナデ? 以下はミガキ? 一部赤彩(薄削により調整不順則) 底部ナデ 内面一ミガキ?→赤彩? 地土 やや粗 粗粒多量 燃成 良好 色調 一様・明赤褐色 出土位置 B-2グリッド下層
78	小型鉢	法量 口径(8.6) 器高(3.0) 底径(6.2) 調整・文様 外面一ナデ→口縫部横ナデ・底部剥離一剖離剥げ→ヘラケズリ 内面一ヘラナデ一口縫部剥離ナデ (薄削により調整不順則) 地土 白色微細 燃成 良好 色調 にら・褐色 出土位置 A-1グリッド北側上層
79	小型鉢	法量 口径(8.8) 器高(3.3) 底径(5.2) 調整・文様 外面一ナデ→ミガキ? (薄削により調整不順則) 地土 黑色微細多量 灰白色微粒子少量 燃成 良好 色調 にら・褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
80	高环	法量 口径14.0 器高(6.0) 調整・文様 外面一ナデ?・赤彩 脊部ヘラケズリ (薄削により調整不順則) 内面一ナデ・赤彩 地土 粉質 白色微細多量 燃成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 A-1グリッド北側上層
81	高环	法量 口径21.0 器高(9.0) 調整・文様 外面一ナデ→ヘラナデ・赤彩 内面一ヘラナデ・赤彩 地土 粉質 白色針状物質 黑色微細多量 燃成 良好 色調 暗褐色 出土位置 B-2グリッド北側上層
82	高环	法量 口径(15.2) 高さ(6.7) 調整・文様 外面一ナデ?・赤彩? (薄削により調整不順則) 地土 白色微細 燃成 良好 色調 白色粒多量 燃成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 A-2グリッド下層
83	高环	法量 高さ(3.0) 周径(9.0) 調整・文様 外面一ヘラケズリ 脊部ヨコナデ 内面一指揮え一剖離横ナデ 地土 粉質 黑色微細 燃成 良好 色調 一様・次第黄褐色 出土位置 A-3グリッド北側中層
84	高环	法量 高さ(3.4) 調整・文様 外面一横ミガキ→一部ヘラケメ→ミガキ 内面一ナデ→一部指揮え 剥離横ナデ 地土 砂粒やや多量 燃成 良好 色調 暗褐色 出土位置 A-3グリッド北側中層
85	高环	法量 高さ(2.2) 周径(20.8) 調整・文様 外面一ナデ・赤彩 内面一ナデ 地土 やや密 角閃石 砂粒 燃成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 A-1グリッド上層
86	高环	法量 高さ(5.6) 周径(20.0) 調整・文様 外面一ナデ・赤彩 内面一ナデ 地土 白色針状物質少量 燃成 良好 色調 にら・褐色 出土位置 B-1トレンチ南側
87	高环	法量 高さ(2.8) 周径(20.0) 調整・文様 外面一ナデ・赤彩 内面一ナデ 地土 白色微細多量 燃成 良好 色調 市褐色 出土位置 A-1グリッド下層
88	高环	法量 高さ(2.2) 周径(19.6) 調整・文様 外面一ナデ・赤彩 内面一ナデ 地土 やや密 角閃石 砂粒 燃成 良好 色調 にら・赤褐色 出土位置 A-1グリッド下層
89	小型器台	法量 口径8.8 器高(8.2) 周径(12.4) 調整・文様 外面一帯縫横ミガキ?・赤彩 脊部剥離ミガキ?・赤彩 内面一帯剥離ミガキ?・赤彩 帯縫横ナケメ 地土 黑色粒多量 白色粒 色調 带縫 黑色微細 燃成 良好 色調 にら・褐色 出土位置 A-2グリッド南側下層
90	小型高环	法量 口径(13.0) 高さ(5.8) 調整・文様 内外面一ハケメ→ミガキ?・赤彩 地土 砂粒 燃成 良好 色調 暗・赤褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
91	小型高环	法量 口径(10.4) 高さ(5.5) 調整・文様 内外面一ミガキ 地土 やや密 燃成 良好 色調 にら・暗褐色 出土位置 A-1・2グリッド北側上層
92	高环	法量 高さ(6.2) 調整・文様 外面一ハケメ 内面一帯縫内底面ヘラナデ? 脊部ヘラ調整 一部剥離現象 地土 密 白色粒子やや多量 燃成 良好 色調 純色 出土位置 A-1グリッド北側上層
93	高环	法量 高さ(6.2) 調整・文様 外面一ハケメ 内面一帯縫内底面ヘラナデ? 脊部ヘラ調整 一部剥離現象 地土 密 白色粒子やや多量 燃成 良好 色調 純色 出土位置 A-1グリッド北側上層

図版No.	種別	観察内容									
		法量	器高	口径	脚径	脚深	脚厚	脚部横幅	脚部縦幅	脚部斜面	脚部底面
8-94	高杯	法量 器高(6.5) 脚径(3.6) 調整・文様 外面-ミガキ 内面-ハケメ-ヘナダ	胎土 黒色微砂 砂粒や多量 燃成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 B-1グリッドトレンチ最下層 備考 3方向の穿孔								
95	高杯	法量 器高(6.7) 脚径(3.6) 調整・文様 外面-ミガキ-赤彩?	内面-ヘナダ	脚部横ナブ	胎土 密	燃成 良好 色調	白色				
96	高杯	法量 器高(7.8) 脚径(3.6) 調整・文様 外面-ミガキ 内面-ハケメ-指印え	脚部-ヘナダ	胎土 白色粒	白色斜状物質	燃成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 A-2グリッド南側上層 備考 3方向の穿孔					
97	高杯	法量 器高(6.3) 脚径(10.1) 調整・文様 外面-ハケメ-ミガキ 内面-ハケメ	胎土 やや粗	白色斜状物質少量	燃成 良好 色調	白色					
98	高杯	法量 器高(6.4) 脚径(4.0) 調整・文様 外面-ミガキ 内面-ハケメ-ヘナダ	胎土 白色斜状物質少量	白色微粒	燃成 良好 色調	白色					
99	高杯	法量 器高(4.0) 脚径(13.0) 調整・文様 外面-ナブ-ミガキ-赤彩 内面-ハケメ-部ナブ	胎土 白色斜状物質少量	白色粒	燃成 良好 色調	白色					
100	高杯	法量 口径(22.8) 脚高(0.0) 脚径(8.0) 調整・文様 外面-口唇部半周斜面(0.0)・口縁部斜面(0.0)・口縫部斜面(0.0)→下端にへラ状工具によるキザミ 坏部下半ミガキ-赤彩 接合部尖端斜面へラ状工具によるキザミ 脚部カブ-脚部半周斜面(0.0)→上端にへラ状工具によるキザミ 脚部-脚部ミガキ?-赤彩? (脚部により調整不可観) 備考ナブ 胎土 密 黑色粒多量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 A-3グリッド北側下層									
101	高杯	法量 口径(24.0) 高高(6.8) 調整・文様 外面-口縁部下端尤頭部(0.0)の羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR 坏部下半ナブ-赤彩 内面-ナブ	胎土 黑色粒多量 燃成 良好 色調	白色							
102	高杯	法量 口径(27.4) 高高(5.6) 調整・文様 外面-口唇部-ヘナダ 口縁部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR→下端にキザミ 坏部下半-ヘナダ	胎土 やや粗	燃成 良好 色調	白色	内面-ヘナダ	白色				
103	高杯	法量 口径(25.0) 高高(5.9) 調整・文様 外面-口縁部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR→下端にへラ状工具によるキザミ 坏部下端ミガキ-赤彩 内面-ミガキ-赤彩 胎土 やや密 砂粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色						
9-104	高杯	法量 口径(22.5) 高高(8.3) 調整・文様 外面-口縁部9~12段のS字状斜面-下端同じく施工具によるキザミ 無文部ミガキ?-赤彩 内面-ミガキ?-赤彩?	胎土	やや密	燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色			
105	高杯	法量 器高(5.5) 脚径(6.7) 調整・文様 外面-体部ナブ-赤彩 脚部カブ-脚部半周斜面(0.0)→上端にキザミ 内面-ナブ-赤彩	胎土 黑色粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色					
106	高杯	法量 高高(10.5) 脚径(0.0) 調整・文様 外面-ハケメ-ミガキ-赤彩 内面-一部部ミガキ-赤彩 坏部ナブ-一部部-ハケメ	胎土 和白色粒多量 燃成 良好 色調	褐色		出土位置	A-1グリッド内周上層				
107	鉢	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR→下端に純文部によるキザミ-無文部ナブ-ミガキ-赤彩?	胎土 黑褐色粒	白色斜状物質	燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色			
108	鉢	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-一部斜工具によるキザミ-穿孔 口唇部斜面(0.0) 内面-ナブ	胎土 黑色粒多量 燃成 良好 色調	白色	出土位置	B-2グリッド1周側下層					
109	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-一部斜工具によるキザミ-坏部ナブ?	胎土 白色微粒	黑色粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色				
110	高杯	調整・文様 外面-口縁部斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-下端にへラ状工具によるキザミ 無文部ミガキ-赤彩 内面-ミガキ-赤彩	胎土 黑色粒	砂粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色				
111	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)→下端に斜工具によるキザミ 坏部ナブ-内面-ナブ-赤彩	胎土 黑色粒	砂粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色				
112	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR→下端に斜工具によるキザミ-1周斜面(0.0)	胎土 白色微粒	黑色粒	燃成 良好 色調	灰褐色	内面-ナブ	白色			
113	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR 内面-ナブ-赤彩 胎土 黑色粒多量 燃成 良好 色調	胎土 黑色粒	砂粒多量	燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色			
114	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR-下端にへラ状工具によるキザミ-内面-ミガキ?-赤彩?	胎土 黑色粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色					
115	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR-下端に斜工具によるキザミ-無文部ミガキ-赤彩 内面-ミガキ-赤彩	胎土 密	燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色				
116	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR-下端にへラ状工具によるキザミ-付加焼成? 内面-ナブ-ミガキ-赤彩 胎土 黑色微粒	胎土 黄色粒	燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色				
117	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR-LR-下端にキザミ-無文部ナブ? 内面-ミガキ?-赤彩?	胎土 黑色粒多量 燃成 良好 色調	白色	内面-ナブ	白色					
118	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・LR-LR-LR-LR-LR-LR-1周斜面(0.0) 内面-ナブ	胎土 密	燃成 良好 色調	白色	出土位置	B-2グリッド1周側中層				
119	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0)・口唇部斜面(0.0) 口唇部斜面(0.0) 坏部3段以上の斜面(0.0) 内面-ナブ-赤彩 胎土 密 燃成 良好 色調	胎土 黑色粒	砂粒多量	燃成 良好 色調	灰褐色	出土位置	B-3グリッド北側上層			
120	高杯	調整・文様 外面-口縁部斜面(0.0) S字形斜面-下端に斜工具によるキザミ-内面-ミガキ 胎土 黑色微粒	胎土 やや粗	砂粒多量 燃成 良好 色調	灰黄色	出土位置	B-3グリッドトレンチ中-下層				
121	高杯	調整・文様 外面-一部羽状斜面(0.0) S字形斜面-下端に斜工具によるキザミ-内面-ミガキ 胎土 黑色微粒	胎土 白色粒	燃成 良好 色調	白色	出土位置	A-2グリッド3トレンチ最下層				
10-122	壺	法量 口径(17.2) 高高(5.2) 調整・文様 外面-口縁部斜面取り 羽状斜面(0.0) ナブ 内面-ナブ	胎土 黑色微粒	砂粒多量 小石少量 燃成 良好 色調	褐色	出土位置	A-2グリッド南側上層				

回収No.	種別	観察内容
10-123	壺	法蓋 口径(20.0) 深高(4.2) 調整・文様 外面一口部斜面取り 斜面部ハケーナデ 斜面部ミガキ 内面一ナデー横ミガキ 脱土 砂粒 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 A-1グリッド北側下層
124	壺	法蓋 口径(16.0) 深高(5.7) 調整・文様 内外面一ハケーメミガキ 脱土 密 白色斜状物質多量 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
125	壺	法蓋 口径(14.2) 深高(9.6) 調整・文様 内外面一ナデー口部斜面ナデ 口部斜面ハケーメ報ミガキ 脱土 ハラナデ 脱土 倍粒多量 燃成 良好 色調 桐色 出土位置 A-3グリッド3トレンジ最下層
126	壺	法蓋 口径(12.6) 深高(3.8) 調整・文様 外面一ハケーメミガキ 内面一ナデーミガキ 脱土 密 白色斜状物質少量 燃成 良好 色調 明褐色 出土位置 A-2グリッド3トレンジ下層
127	壺	法蓋 口径(15.0) 深高(9.0) 調整・文様 外面一口明暗斜面入り一赤鉛 口部斜面ミガキ 内面一口部斜面ナデ ポヘ明暗斜面ミガキ 斜面部ハラナデ 脱土 密 砂粒多量 燃成 良好 色調 桐色→明赤褐色 出土位置 3トレンジ北側下層 備考 燃成後破壊
128	壺	法蓋 口径(9.0) 深高(8.8) 調整・文様 外面一口部斜面取り一界縫織文 LR 口部斜面ハケメ 内面一口部斜面ハケメ 斜面部ナデ 脱土 砂粒 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 B-3グリッド1中層
129	壺	法蓋 口径(11.0) 器高(6.5) 調整・文様 外面一眼ハケメ口部斜面ナデ 口部斜面織文 LR 内面一眼部斜面ハケメ一頭部ナデ 脱土 白色 灰色斜状物質 黒色粒や多量 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 B-2グリッド1中層
130	壺	法蓋 深高(24.2) 底径(9.1) 調整・文様 外面一頭部ハラナデ一頭ミガキ 斜面部上部に側面凹凸による2段の格子文一ナデにより仄面シット下部2段ミガキ 内面一ハラナデ一部斜面取 斜土 密 燃成 良好 色調 桐色→灰褐色 出土位置 A-1グリッド3トレンジ下層 備考 底部木痕
131	壺	法蓋 口径(17.2) 器高(3.2) 調整・文様 外面一複合部斜面織文 LR-LR 一下端はテラ状工具による交差刮削 斜面部ミガキ? 斜面部(側面)により不規則 内面一ミガキ一赤鉛 (側面)により調整不規則 脱土 やや粗 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-2グリッド1中層
132	壺	法蓋 口径(19.0) 深高(2.3) 調整・文様 外面一複合部斜面織文(LR-LR)→3本横の棒状浮き丸付→下端に川に上るカザミ 斜面部ハラナデ 内面一ナデー横面ミガキ 脱土 砂粒・角内に微量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 B-1-2グリッド北側上層
133	壺	法蓋 口径(24.2) 深高(14.5) 調整・文様 外面一複合部斜面織文 LR→3本横の棒状浮き丸付→下端に横文居原陶によるカザミ 斜面部下端横の棒状浮きミガキ LR-LR-LR 無文部ミガキ一赤鉛 内面一ミガキ一赤鉛 脱土 やや密 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-2グリッド1中層
134	壺	法蓋 口径(16.0) 深高(8.8) 調整・文様 外面一口部斜面織文 LR 反復部斜面織文 LR-LR 一下端に横文居原陶によるカザミ 斜面部6段以上横文居原陶文 LR-LR-LR-LR 内面一ミガキ一赤鉛 (側面)により調整不規則 脱土 やや粗 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-2グリッド下層
135	壺	法蓋 口径(21.0) 深高(9.6) 調整・文様 外面一口部斜面織文 LR 反復部2段の羽目文織文 LR-LR 一下端に棒状工具によるキザミ 斜面部ミガキ?一赤鉛? (側面)により調整不規則 下端に斜面織文 LR-LR-1段式横 反復部内面一ミガキ?一赤鉛 (側面)により調整不規則 脱土 やや粗 黑色粒多量 燃成 良好 色調 明褐色 出土位置 B-1グリッド3トレンジ最下層
136	広口壺	法蓋 口径(27.6) 器高(19.3) 調整・文様 外面一複合部斜面織文 LR→1下端へテラ状工具によるキザミ 斜面部下端丸窓部の6段の羽目文織文 LR-LR-LR-LR-LR-LR 上端斜面取 斜面ミガキ 無文部赤鉛 (側面)により調整不規則 内面一ハラナデ一部ミガキ 脱土 やや密 燃成 相粒多量 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-1グリッド3トレンジ下層
137	広口壺	法蓋 口径(19.2) 器高(13.2) 調整・文様 外面一ハラナデ一球形折返し一球形面に交叉刮削 内面一ハラナデ 脱土 やや粗 燃成 良好 色調 灰色→灰褐色 出土位置 B-2グリッド下層
138	広口壺	法蓋 口径(15.2) 器高(8.5) 調整・文様 外面一複合部ハケメ一ナデー一赤鉛 斜面部ハケメ一ミガキ 脱土 やや密 白色粒子や多量 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 A-1グリッド3トレンジ下層
139	壺	法蓋 器高(10.2) 調整・文様 外面一ハケメ一下2本の斜面凹凸の羽目文織文 LR-LR-LR-1無文部ミガキ? 内面一ハラナデ? 脱土 やや粗 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-2グリッド北側上層
11-140	壺	法蓋 深高(11.1) 底径(7.6) 調整・文様 外面一ハラナデミガキ? 内面一ハラナデ? 刻離により不明 脱土 やや粗 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-1-2グリッド下層
141	壺	法蓋 器高(13.3) 底径(9.6) 調整・文様 内面一大部分剥離しており調整不規則 脱土 やや粗 相粒多量 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-1グリッド下層
142	壺	法蓋 深高(7.7) 底径(7.4) 調整・文様 外面一眼ミガキ 内面一ハラナデ 脱土 砂粒多量 燃成 良好 色調 開底へにぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
143	壺	法蓋 器高(7.7) 底径(7.6) 調整・文様 外面一眼ミガキ一ナデー赤鉛 内面一ハラナデ一ナデ 脱土 やや粗 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-2グリッド下層
144	壺	法蓋 器高(2.9) 底径(10.0) 調整・文様 外面一ハケメ一ハラナデ一眼ミガキ 内面一ナデー 脱土 やや粗 砂粒やや多量 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 A-2グリッド3トレンジ下層
145	壺	法蓋 器高(3.2) 底径(7.0) 調整・文様 外面一眼ミガキ 内面一ナデー(剥離) 脱土 やや粗 快排物多量 燃成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 B-1グリッド3トレンジ1トレンジ最下層
146	壺	法蓋 器高(3.2) 底径(2.2) 調整・文様 外面一ナデー一ミガキ 逃げナデー 脱土 やや粗 快排物多量 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
147	壺	法蓋 器高(7.6) 底径(5.6) 調整・文様 外面一ナデー一ミガキ 逃げナデー 内面一ナデー 脱土 黑色粒非常に多量 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 A-2グリッド下層
148	壺	法蓋 器高(3.0) 底径(2.2) 調整・文様 外面一ハケメミガキ 内面一ナデー一ミガキ 脱土 黑色粒少量 燃成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド3トレンジ下層
149	壺	法蓋 器高(2.4) 底径(7.2) 調整・文様 外面一ハケメ一眼の觀ミガキ 内面一ハラナデ 底部ハケメ 脱土 微細粒微量 燃成 良好 色調 にぬい褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層 備考 ドーナツ状底部

図版No.	種別	観察内容											
		法量	器高(3.4)	底径(9.8)	調整・文様	外一面へラナデ	内面一面側面に上り不明	胎土	砂粒や多量	砂質土	焼成	良好	
11-150	壺	法量	器高(2.7)	底径(7.8)	調整・文様	外一面へケメーヘラナデ	内面へラナデ	胎土	砂粒多量	黑色微砂	焼成	やや不良	
		器高(0.0)	底径(9.0)	調整・文様	外一面へハメーヘラナデ	内面へラナデ	胎土	白色粗粒物質	黑色微砂	焼成	やや不良		
151	壺	法量	器高(3.0)	底径(9.0)	調整・文様	外一面へハメーヘラナデ	内面へラナデ	胎土	砂粒多量	黑色微砂	焼成	良好	
152	壺	法量	器高(4.2)	底径(7.4)	調整・文様	外一面へラナデ	内面一面側面に上り不明	胎土	やや粗	砂粒多量	焼成	良好	
153	壺	法量	器高(7.6)	底径(6.6)	調整・文様	外一面へラナデ	内面一面側面に上り不明	胎土	やや粗	白色粒非常に多量	焼成	良好	
154	壺	法量	器高(7.6)	底径(7.6)	調整・文様	外一面へミガキ一側部上半のみ赤彩	内面一面ナデ	胎土	やや粗	白色粒非常に多量	焼成	良好	
		明褐色地	出土位置	B-2グリッド北側上層									
155	壺	法量	器高(3.5)	底径(9.5)	調整・文様	外一面へラナデ	胎土	やや粗	黑色微砂	白色粒子	少量	焼成	良好
		底径(5.0)	底径(9.0)	調整・文様	外一面へ横ミガキ一側部中位赤彩	底部ナデ	内面へラナデ	胎土	密	黑色微砂	焼成	良好	
156	壺	法量	器高(5.0)	底径(9.0)	調整・文様	外一面へ横ミガキ一側部中位赤彩	底部ナデ	胎土	密	黑色微砂	焼成	良好	
157	壺	法量	器高(5.0)	底径(9.0)	調整・文様	外一面へケメーミガキ	内面一面ナデ	胎土	角閃石	砂粒粗	やや多量	焼成	良好
		黄褐色地	出土位置	A-1グリッド北側上層									
158	壺	法量	器高(4.2)	底径(9.6)	調整・文様	外一面へケメーナデ	内面一面ナデ?	胎土	粗	砂粒多量	焼成	やや不良	
		色	出土位置	A-1グリッド北側上層									
159	壺	法量	器高(6.3)	底径(9.5)	調整・文様	外一面へラナデ	胎土	やや密	小石	粗砂粒多量	焼成	良好	
		色	出土位置	A-1グリッド北側上層									
160	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅲ)	一下端に棒状工具によるキザミ	頭部ナデ-縦ミガキ	内面一面ナデ-横ミガキ	胎土	密	砂粒	焼成	良好		
		地	出土位置	A-2グリッド北側下層									
161	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅲ)	一下端に棒状工具によるキザミ	頭部ナデ	内面一面ナデ	胎土	黑色粒多量	焼成	良好	色調		
		地	出土位置	A-2グリッド北側下層									
162	壺	調整・文様	外一面羽状縫文(Ⅳ・Ⅴ)	一下端にキザミ	頭部ナデ-赤彩	内面一面ナデ-赤彩	胎土	密	黑色粒	焼成	良好		
		地	出土位置	A-2グリッド北側下層									
163	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅲ)	一下端に棒状工具によるキザミ	以下ナデ-赤彩	内面一面側面に上り調整不規則	胎土	黑色粒	焼成	良好	色調		
		地	出土位置	B-2グリッド北側中層									
164	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅲ)	一下端に棒状工具によるキザミ	頭部ナデ-赤彩	内面一面ミガキ-赤彩	胎土	黑色粒	焼成	良好	色調		
		地	出土位置	B-2グリッド下層									
165	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅲ)	一下端に棒状工具によるキザミ	頭部ミガキ-赤彩	内面一面ミガキ-赤彩	胎土	砂粒多量	焼成	良好	色調		
		地	出土位置	A-2グリッド北側下層									
166	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅲ)	一側突	頭部ナデ-赤彩	内面一面ナデ	胎土	黑色粒	焼成	良好	色調		
		地	出土位置	A-2グリッド北側下層									
167	壺	調整・文様	外一面口縫部斜面縫文(Ⅹ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	内面一面ミガキ?→赤彩	(準赤)により調整不規則	胎土	浮游多量	燒成	やや良好	色調	
		地	出土位置	A-2グリッド最下層									
12-168	壺	調整・文様	外一面単純縫文(Ⅰ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	内面一面ミガキ?→赤彩	(準赤)により調整不規則	胎土	浮游多量	燒成	やや良好	色調	
		地	出土位置	B-3グリッド2トレンチ中層									
169	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	一下端に棒状工具によるキザミ	内面一面ナデ	胎土	黑色粒多量	焼成	良好	色調	灰褐色地		
		地	出土位置	B-2グリッド2トレンチ下層									
170	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	一下端に棒状工具によるキザミ	口縫部斜面縫文(Ⅹ・Ⅸ・Ⅷ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	内面一面ミガキ?→赤彩	胎土	黑色粒	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	A-1・2グリッド北側下層									
171	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	羽状縫文(Ⅺ・Ⅻ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ・Ⅸ・Ⅷ)	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	内面一面ミガキ?→赤彩	胎土	黑色粒多量	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	B-2グリッド北側中層									
172	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	一側突	口縫部斜面縫文(Ⅹ)	内面一面ミガキ?→赤彩	(準赤)により調整不規則	胎土	相間多量	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	B-2グリッド北側中層									
173	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	一下端に二ラ形状工具によるキザミ-単純浮文層	頭部ミガキ-赤彩	内面一面ミガキ?→赤彩	(準赤)により調整不規則	胎土	相間多量	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	A-2グリッド最下層									
174	壺	調整・文様	外一面ハメーハ状工具による横状縫	内面一面ナデ-ハメ	胎土	粉質	焼成	良好	色調	明黄色地			
		地	出土位置	B-3グリッド上層									
175	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ・Ⅸ・Ⅷ)	一下端に棒状工具によるキザミ→2本側位の神社浮文層	頭部ナデ?	内面一面	褐色	より不規則	胎土	黑色粒多量	焼成	良好	
		地	出土位置	A-2グリッド最下層									
176	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ・Ⅷ)	→下端にキザミ→3本側位の神社浮文層	頭部ナデ?	(準赤)により調整不規則	内面一面ミガキ?→赤彩?	(準赤)により調整不規則	胎土	砂粒多量	焼成	良好	
		地	出土位置	A-2グリッド最下層									
177	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ・Ⅷ)	一側突→2本側位の神社浮文層	頭部ナデ-赤彩	内面一面ナデ?→赤彩?	(準赤)により調整不規則	胎土	黑色粒多量	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	A-1グリッド北側上層									
178	壺	調整・文様	外一面羽状縫文(Ⅹ・Ⅸ・Ⅷ)	一下端に二ラ形状工具によるキザミ	内面一面ナデ-赤彩	胎土	黑色粒	焼成	良好	色調	明褐色		
		地	出土位置	B-2グリッド北側下層									
179	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	一側突→2本側位の神社浮文層	頭部ミガキ-赤彩?	内面一面ミガキ?→赤彩?	(準赤)により調整不規則	胎土	黑色粒多量	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	A-1グリッド北側中層									
180	壺	調整・文様	外一面複合部斜面縫文(Ⅹ)	一側突→2本側位の神社浮文層	頭部ミガキ-赤彩?	内面一面ミガキ?→赤彩?	(準赤)により調整不規則	胎土	砂粒多量	焼成	良好	色調	
		地	出土位置	A-2グリッド3トレンチ下層									

図版No.	種別	観察内容
12-181	壺	調整・文様 外面一複合部 5本脚の羽根彫伏文→4本単位とする部位の対線一下部にへラ状工具によるキザミ 内面一ナデ? 肥土 黒色 砂粒多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド下層
182	壺	調整・文様 外面一山形文区画の羽根彫文(左)・上下沈継区画の羽根彫文(右)・2段の羽根彫文(左)→ラ描きによる2段の山形文 無文部ミガキ赤彩 内面一ナデ 肥土 黑色 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 B-1グリッド削除下層
183	壺	調整・文様 外面一複合部の羽根彫文(左)・2段の羽根彫文(右)→ラ描きによる2段の山形文 無文部ミガキ赤彩 内面一ナデ 肥土 黑色 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド3トレシナ最下層
184	壺	調整・文様 外面一山形文区画の羽根彫文(左) 無文部ミガキ? 内面一摩痕により不明 肥土 やや粗 砂粒多量 燃成 やや不良 色調 黄褐色 出土位置 A-1グリッド上層
185	壺	調整・文様 外面一上・下沈継区画の羽根彫文(左)・山形文区画の羽根彫文(右) 無文部ナデ赤彩? 内面一ナデ 肥土 小石 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 下層 B-2グリッド下層
186	壺	調整・文様 外面一山形文区画の羽根彫文(左) 肥土 白色粒多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 C-3グリッド中削除土層 (付近)
187	壺	調整・文様 外面一複合山形文区画の羽根彫文(左) 無文部ミガキ 内面一ナデ 肥土 黑色粒 白色粒 黄色粒 燃成 良好 色調 明褐色 出土位置 A-2グリッド3トレシナ最下層
188	壺	調整・文様 外面一複合部の羽根彫文(左)・(左・右) 無文部ナデ赤彩 内面一ナデ 肥土 黑色粒 白色粒多量 燃成 良好 色調 咸褐色 出土位置 B-2グリッド下層
189	壺	調整・文様 外面一2段沈継区画の羽根彫文(左) 無文部ナデ赤彩 内面一摩痕により不明 肥土 粗 黑色粒多量 白色粒少量 黄色粒 少量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 B-3グリッド削除上層
190	壺	調整・文様 外面一複合部の羽根彫文(左)・(左・右・左) 無文部ナデ? 赤彩? 内面一ナデ? 肥土 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-1グリッド上層
13-191	壺	調整・文様 外面一複合部の羽根彫文(左) 無文部ミガキ 内面一ナデ 肥土 小石 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 B-2グリッド削除上層
192	壺	調整・文様 外面一羽根彫文(左)・(右) 無文部ヘナデ 内面一ヘナデ赤彩 肥土 密 黑色粒や多量 黑色粒や多量 黄褐色 少量 黄褐色付物質微量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-2グリッド削除上層2トレシナ
193	壺	調整・文様 外面一羽根彫文(左)・(左・右)・(左・右・左) 内面一ミガキ? 赤彩? 肥土 黑色粒 黄褐色多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド最下層
194	広口壺	調整・文様 外面一羽根彫文(左)・(左・右)・(左・右)→1脚状工具によるキザミ 内面一摩痕により調整不正確 肥土 黑色粒多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-1グリッド2脚削除下層
195	壺	調整・文様 外面一複合山形文区画の羽根彫文(左) 無文部ナデ赤彩 内面一ナデ 肥土 密 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド削除中層
196	壺	調整・文様 外面一複合山形文区画の羽根彫文(左)・(左・右)・(左・右) 内面一ナデ 肥土 黑色粒 燃成 良好 色調 明褐色 出土位置 A-1 グリッド北側中層
197	壺	調整・文様 外面一上部沈継区画の羽根彫文(左)・(左)・(左)・(左) 中層 無文部ミガキ 内面一ヘナデ 肥土 密 黑色粒 黑色粒多量 白色粒 黄 色粒 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド3トレシナ最下層
198	壺	調整・文様 外面一S字彫刻文区画の羽根彫文(左)→2脚側面の山形文区画 内面一ヘナデ 肥土 黑色粒多量 白色粒付物質や多量 少量 黄褐色 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 B-3グリッド北側上層
199	壺	調整・文様 外面一網状状彫文→3個単位の円錐彫刻點點 無文部ミガキ赤彩 内面一ナデ 肥土 黑色粒多量 白色粒少量 燃成 良 好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド削除下層
200	壺	調整・文様 外面一上・下沈継区画の羽根彫文(左)・(左)・(左)・(左) 中層 無文部ミガキ赤彩 内面一ナデ? (摩痕により調整不可観) 肥土 黄褐色多量 燃成 良 好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
201	壺	調整・文様 外面一山形文区画の羽根彫伏文 無文部ナデ? 赤彩 内面一ナデ 肥土 密 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド最下層
202	壺	調整・文様 外面一S字彫刻文 無文部ナデ赤彩 内面一ナデ 肥土 密 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド 北側中層
203	壺	調整・文様 外面一網状状彫文 無文部ミガキ赤彩 内面一ナデ? (摩痕により調整不可観) 肥土 黄褐色多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-1グリッド上層
204	壺	調整・文様 外面一2段の以上3本単位の羽根彫弧文・直線文 内面一ナデ 肥土 白色粒 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
14-205	小型壺	法量 口径(9.8) 磨高(4.3) 調整・文様 外面一ナデ 内面一ナデ 肥土 小石付物質 黑色粒微量 燃成 やや不良 色調 褐色 出土位置 A-2グリッド削除上層
206	小型壺	法量 口径(14.0) 磨高(7.7) 調整・文様 外面一ハケメー縁なしヘナデ 内面一ヘナデ 肥土 角閃石 白色粒多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-2グリッド中層付近
207	小型壺	法量 口径(9.6) 磨高(4.2) 調整・文様 外面一外面部ハコ彫刻模ナデ 剥離部ヘナデ 赤彩 内面一部に剥離痕・輪郭痕残る 肥土 密 白色粒付物質微量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-1・2グリッド北側下層
208	小型壺	法量 口径(11.8) 磨高(7.0) 調整・文様 外面一赤彩 肥土 やや粗 白色粒付物質少量 黑色粒微量 燃成 良好 色調 にぶい 褐色 出土位置 A-1グリッド上層
209	小型壺	法量 口径(11.8) 磨高(7.0) 調整・文様 外面一白線模様ヘナデ 脱離部ヘナデ 赤彩 肥土 白色粒付物質 黑色粒少々 小石 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
210	壺	法量 口径(9.8) 磨高(5.9) 調整・文様 外面一脱離部ヘナデ 脱離部上ハケメー縁なしヘナデ 脱離部下半一部剥離えーナデ 赤彩 内面一部縦線ヘナデ 刻痕一部ハケメー縁なしヘナデ 脱離部上ハケメー縁なしヘナデ 脱離部下半一部剥離えーナデ 肥土 白色粒付物質少く少量 黄褐色 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド削除中層
211	小型壺	法量 口径(9.8) 磨高(5.9) 調整・文様 外面一白線模様ヘナデ 刻痕一部ハケメー縁なしヘナデ 脱離部上ハケメー縁なしヘナデ 脱離部下半一部剥離えーナデ 赤彩 内面一部縦線ヘナデ 刻痕一部ハケメー縁なしヘナデ 脱離部上ハケメー縁なしヘナデ 脱離部下半一部剥離えーナデ 肥土 白色粒付物質少く少量 黄褐色 黑褐色 出土位置 B-1グリッド1トレシナ最下層

回収No.		種別	総 査 内 容
14-212	小型壺	法量	口径(6.0) 深高(10.0) 底径(5.8) 調整・文様 外面一ミガキ・赤芯? 此部へラナデ 内面一指による調整 脚部赤芯 脚部下部に 輪郭線 色土 粗 砂質多量 燃成 良好 色調 黒黄褐~にぶい黄褐色 出土位置 B-2グリッド2トレンジ最下層
213	小型壺	法量	高(5.0) 底径(5.0) 調整・文様 外面へラケズリ 内面一指ナデ 色土 細 白色針状物質微量 構成 良好 色調 にぶい褐色 土 黑褐色多量 白色粒 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層
214	壺	法量	器高(4.2) 底径(5.8) 調整・文様 外面一口縁部模ミガキ 脚部模ミガキ 底部ミガキ 内面一口縁部 横ミガキ 脚部へ底部 ナデ 色土 黑褐色多量 白色粒 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層
215	壺	法量	器高(2.3) 底径(5.6) 調整・文様 外面へケメー丁寧なミガキ 武部丁寧なミガキ 内面一ミガキ 色土 やや粗 白色粒多量 燒成 良好 色調 黑~にぶい褐色 出土位置 B-2グリッド南側上層
216	小型壺	法量	器高(3.0) 底径(4.6) 調整・文様 外面一張ミガキ 内面へラナデ 色土 角閃石・黒色微砂や多量 燃成 良好 色調 黃~ にぶい褐色 出土位置 B-3グリッド上層
217	小型壺	法量	器高(3.3) 底径(5.3) 調整・文様 外面一ミガキ 内面一ナデ 色土 黑褐色多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位 置 B-2グリッド下層
218	小型壺	法量	器高(3.4) 底径(5.6) 調整・文様 外面へラナデ 内面一ナデ+赤彩 色土 砂質土 黑色微砂 角閃石 多量 構成 良好 色調 褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
219	小型壺	法量	器高(1.7) 底径(4.6) 調整・文様 外面へナーナデ (脚部により調整不可解) 内面一頭脚模ハケメーナデ 脚部へラナデ 脚部側残 る 色土 やや粗 白色粒多量 燃成 良好 色調 橙~褐色天目 出土位置 上層 A-2グリッド上層
220	小型壺	法量	底径(5.8) 器高(4.3) 調整・文様 外面へハケメ 内面へナデ 底部近鉄ハケメ 色土 角閃石少量 燃成 良好 色調 橙色 出 土位置 B-1グリッド北側上層 備考 武部丁寧底
221	小型壺	法量	器高(1.1) 底径(5.4) 調整・文様 内外面一ナデ 色土 やや粗質 白色粒 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド 下層 備考 外面の直線付近に埋付着
222	手握土器	法量	口径(8.8) 深高(5.2) 底径(5.0) 調整・文様 手捏成形 外面へ赤芯 色土 粗 燃成 やや不良 色調 にぶい黄~にぶい褐色 出士位置 A-2グリッド下層 備考 植物在全周に網状に残る
223	手握土器	法量	口径(5.0) 深高(4.6) 調整・文様 手捏成形 外面へラケズリ 底部ナデ 色土 砂質精良土 黑色微砂微量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド下層
224	壺	法量	口径(25.8) 深高(7.7) 調整・文様 外面へハケメ一口縁部模ナデ 脚部へラケズリ 内面一口縁部模ナデ 脚部へラナデ 色土 微粒化 小赤褐色粒子 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド南側上層
225	壺	法量	口径(22.0) 深高(6.0) 調整・文様 外面へナーノ縁部模ナデ 内面一口縁部模ナデ 脚部ナデ 脚部ナデ 色土 やや粗 白色沙 粒多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド南側下層
226	壺	法量	口径(19.6) 深高(6.2) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ 脚部へラケズリ 内面一口縁部模ナデ 脚部ナデ 色土 やや粗 白 色沙粒多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド南側中層
227	壺	法量	口径(21.4) 深高(7.5) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ 脚部へラケズリ+相手 模ミガキ 内面一口縁部模ナデ 脚部ナデ 色土 白色沙粒状物質 黑色微砂 燃成 良好 色調 相手 出土位置 A-3グリッド北側中層
228	壺	法量	口径(19.0) 深高(8.0) 調整・文様 内外面へ横筋のため調整不可解 口縁部模ナデ+相手+模ミガキへラナデ 色土 やや粗 燃成 良 好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド南側中層
229	壺	法量	口径(15.4) 深高(6.6) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ+上端模ナデ 脚部へラケズリ 内面一口縁部模ナデ 脚部ナデ 色土 黑色粒 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド南側中層
230	壺	法量	口径(15.7) 深高(5.4) 調整・文様 内外面へ口縁部模ナデ 脚部ナデ 色土 角閃石多量 燃成 良好 色調 粗色 出土位置 A-2グリッド中層
231	壺	法量	口径(20.6) 深高(11.0) 調整・文様 外面へナーノ口縁部模ナデ 内面一口縁部模ナデ 脚部へラナデ 色土 やや粗 白色微 砂 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 B-1グリッド南側上層 備考 内面頭頂部に炭化物附着
232	壺	法量	口径(20.0) 深高(5.0) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ? 脚部へラケズリ? (脚部により調整不可解) 内面へ口縁部模ナデ 脚部ナデ 色土 黑褐色 燃成 やや不良 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド北側中層
233	壺	法量	口径(14.5) 深高(4.5) 調整・文様 外面へ頭頂部押えへ口縁部模ナデ 脚部ナデ 内面へ口縁部模ナデ 脚部ナデ 色土 角閃 石多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド南側中層
234	壺	法量	口径(14.2) 深高(7.0) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ 脚部へラナデ 内面へ口縁部模ナデ 脚部ナデ や や粗 黑褐色 灰白色砂粒子 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-3グリッド北側中層
235	壺	法量	口径(15.4) 深高(6.1) 調整・文様 内外面へ横ナデ 色土 やや粗 白色粒子少量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A -2グリッド北側中層
15-236	壺?	法量	口径(14.0) 深高(17.0) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ 脚部上半へラナデ 脚部下半難なナデ 内面へ口縁部模ナデ 脚部ナ デ 色土 小石 白色粒 黑褐色多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
237	壺	法量	口径(14.0) 深高(16.0) 調整・文様 外面へナーノ口縁部模ナデ 内面へナーノ脚部一部押え 脚部ナデ 色土 小石 黑 褐色 白色粒多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
238	壺	法量	口径(3.0) 深高(13.0) 調整・文様 外面へナーノ口縁部模ナデ 内面へラナデ+口縁部模ナデ 色土 精 砂質多量 燃成 良 好 色調 黑褐色~黑色 出土位置 A-2グリッド北側中層
239	壺	法量	口径(20.5) 深高(10.3) 調整・文様 外面へ口縁部模ナデ(脚部は+ナデに残存) 脚部へラナデ 内面へ口縁部模ナデ 脚部ナデ +ヘラナデ 色土 角閃石 黑褐色多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド南側中層
240	壺	法量	口径(14.2) 深高(8.6) 調整・文様 内外面へラナデ 一部押さえ 色土 精 小石多量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出 土位置 A-2グリッド北側中層
241	壺	法量	口径(15.4) 深高(10.0) 調整・文様 内外面へナーノ (脚部により調整不可解) 色土 精 小石多量非常に多量 小石 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層
242	壺	法量	口径(20.0) 深高(13.5) 調整・文様 外面へナーノ+脚部下部ケズリ+口縁部模ナデ 内面へ口縁部へラナデ 脚部ナデ 色土 小石 白色针状物質少量 燃成 良好 色調 にぶい褐色 出土位置 日-1グリッド南側

図版No.	種別	観察内容
15-243	要	法量 口径(17.6) 器高(9.9) 調整・文様 外面一ハケメヘーラナデ 内面一口縁部ハケメヘーラナデ 脚部ヘラナデ 脱土 やや粗 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド下層
244	要	法量 口径(19.0) 器高(6.0) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ 脚部横ナデ(輪削痕2段) 脚部ヘラナデ 内面一口縁部横ナデ 脚部ヘラナデ 脱土 白色糾状物質 角閃石 黑色微細鉄質 燃成 良好 色調 黑褐色 出土位置 A-1グリッド上層
245	要	法量 口径(29.4) 踏高(8.7) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ(輪削痕少) 脚部ヘラナデ 内面一ナデ 脱土 白色糾状物質 角閃石 黑色微細鉄質 燃成 良好 色調 黑褐色 出土位置 A-1グリッド上層
246	要	法量 口径(31.8) 器高(7.2) 調整・文様 外面一ハケメヘーロ縁部横ナデ 内面一口縁部横ナデ 脚部ヘラナデ 脱土 やや粗 相砂粒 燃成 良好 色調 黄褐色～にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド下層
247	要	法量 口径(6) 器高(14.9) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ 脚部ハケメー一部ヘラナデ 内面一口縁部横ナデ 脱土 やハナデ 脱土 黄褐色 少量 黑色微細 少量 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 B-2グリッド北側最上層
248	要	法量 口径(23.0) 踏高(5.6) 調整・文様 外面一ハケメヘーロ縁部横ナデ 脱土 白色糾状物質 黑色微細 小石 燃成 良好 色調 黄褐色～にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド南側下層
249	要	法量 口径(21.0) 器高(5.0) 調整・文様 外面一口縁部横ナデ 脚部横ナデ(輪削痕) 内面一口縁部横ナデ 脚部ヘラナデ 脱土 黄褐色 少量 燃成 良好 色調 明る褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
250	要	法量 口径(15.4) 器高(5.0) 調整・文様 外面一口縁部横ナデハケメ 脚部横ナデ 内面一口縁部横ナデヘケメ 横ナデ 脚部ナデ 脱土 白色糾状物質少量 黑色微 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド下層
251	要	法量 口径(18.7) 器高(4.7) 調整・文様 外面一口縁部横ナデヘケメー横ナデ 脚部ナデ 脱土 角閃石 白色糾状物質少量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド北側中層
252	要	法量 口径(15.0) 器高(4.3) 調整・文様 外面一口縁部横ナデヘケメー横ナデ 脚部横ナデヘケメ 内面一口縁部横ナデ 脱土 白色糾 燃成 良好 色調 黑褐色 出土位置 A-2グリッド下層
253	要	法量 口径(20.0) 器高(4.6) 調整・文様 外面一ハケメヘーロ縁部横ナデ 内面一口縁部横ナデ 脚部ナデ 脱土 黑色微細 白色少 量 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 B-2グリッド北側最上層
254	要	法量 口径(17.6) 器高(6.5) 調整・文様 外面一ハケメヘーロ縁部横ナデ 脚部横ナデ にぬる褐色ヘケメ 脚部横ナデヘケメ 内面一ハケメー口縁部横ナデガキ 脱土 白色粒 多量 黑色粒 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層
255	要	法量 口径(16.0) 器高(7.1) 調整・文様 外面一ハケメヘーロ縁部横ナデ ハナデ 脚部横ナデヘケメー一部横ナデ 脱土 白色糾状物質 少量 黑色微 燃成 良好 色調 黄褐色～黒褐色 出土位置 A-2グリッド3トレード最下層
16-266	要	法量 口径(19.2) 器高(11.8) 調整・文様 外面一ハケメー口縁部横ナデヘケメー脱土 鋼筋棒少 量 黑色微細多量 燃成 やや不良 色調 にぬる褐色～黒褐色 出土位置 A-1グリッド南側下層 備考 脚部下部に錆斑有り 二次焼成を受ける
257	要	法量 口径(18.0) 器高(7.5) 調整・文様 外面一ハケメー口縁部横ナデー口縁部斜状工具によるギザミ 内面一ハケメーー脱土 やや粗 破片多量 にぬる褐色 出土位置 A-1グリッド北側中層
258	要	法量 口径(11.5) 器高(8.2) 調整・文様 外面一口縁部横ナデヘケメーー脱土 鋼筋棒少 量 黑色微細多量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 A-2グリッド最下層
259	要	法量 口径(19.0) 器高(14.2) 調整・文様 外面一口縁部斜状工具によるギザミ 内面一ハケメーー脱土 鋼筋棒少 量 黑色微細多量 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 B-1グリッド南側下層 備考 脚部下部に錆斑有り
260	要	法量 口径(26.4) 器高(13.5) 調整・文様 外面一口縁部取り一輪文瓶体によるギザミ 脚部半1段の輪削痕～ヘラナデー同上工具によるギザミ 内面一ヘラナデ 脱土 やや粗 相砂粒多量 燃成 良好 色調 にぬる褐色～黒褐色 出土位置 B-1グリッド上層
261	要	法量 口径(8.0) 器高(8.0) 調整・文様 外面一口縁部取り一輪文瓶体によるギザミ(輪削痕) 脚部ナデ 4段の輪削痕 内面一口縁部横ナデ 脚部横ナデヘケメーー脱土 ガキ 脱土 やや粗 破片多量 燃成 やや不良 色調 にぬる褐色 出土位置 B-1グリッド1トレード最下層
262	要	法量 口径(9.0) 器高(13.0) 調整・文様 外面一口縁部取り一輪文瓶体によるギザミ 脚部半1段の輪削痕～軽く横ナデー下端に斜状其先端によるギザミ(突起)ヘーラナデ状具によるギザミ(突起) 脚部ヘナデ 内面一ナデ ヘラナデ 脱土 斜面質土 黑色微細 角閃石 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-1グリッド南側下層
263	要	法量 器高(8.7) 底部0.2 調整・文様 外面一ハケメーー脚部内切に鋸た模様ガキ 底部ナデ 内面一ヘラナデ 脱土 黑色微細 角閃石 少量 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド下層
264	要	法量 器高(3.9) 底部0.0 調整・文様 外面一ハケメーーナデ 底部附近は指揮え 底部ナデ 内面一ヘラナデ 脱土 やや粗 破片や多量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 A-1グリッド北側上層
265	要	法量 器高(4.6) 底径(5.0) 調整・文様 外面一ハケメ 内面一ナデ 脱土 黑色砂粒 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 B-2グリッド下層
266	要	法量 器高(5.8) 底径(8.6) 調整・文様 外面一ハケメーー脚部内ナデ 内面一ナデ 脱土 白色砂粒 黑色砂粒多量 燃成 良好 色調 黄褐色 出土位置 B-2グリッド下層 備考 底部木製底
267	要	法量 器高(4.9) 底径(6.6) 調整・文様 外面一ハケメーー部分的にナデ 内面一ヘラナデ? 脱土 やや密 白色糾状物質少量 燃成 良好 色調 にぬる褐色～黒褐色 出土位置 A-1グリッド南側中層 備考 底部木製底
268	要	法量 踏高(5.5) 底径(7.0) 調整・文様 外面一ハケメ 内面一ヘラナデ 脱土 黑色粒 白色粒多量 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド下層
269	要	法量 器高(5.0) 底径(7.4) 調整・文様 外面一ハケメーー内面一ナデ 内面一ヘラナデ 脱土 やや粗 角閃石 砂粒 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
270	要	法量 器高(3.7) 底径(7.4) 調整・文様 外面一輪なハケメリーナデ 内面一ヘラナデ 脱土 黑色微細 角閃石 砂粒 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 A-2グリッド上層
271	台付器	法量 器高(5.0) 底径(8.6) 調整・文様 外面一ナデ 内面一ナデ ヘラナデ 接合部指揮え 脱土 黑色微細 砂粒や多量 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 B-2グリッド南側上層
272	台付器	法量 器高(6.8) 底径(9.6) 調整・文様 外面一ナデ 脚部結合部指揮え 内面一ナデ 脚部結合部指揮え 脱土 黑色微細 角閃石多量 砂質土 燃成 良好 色調 にぬる褐色 出土位置 B-3グリッド南側上層

回数	種別	観察内容
16-273	台付型	法量 深高(7.0) 脚径10.2 調整・文様 内外面一ナデ 肥土 黒色粒多量 燃成 良好 色調 灰黄色 出土位置 A-1グリッド南側下層
274	台付型	法量 深高(6.9) 脚径10.2 調整・文様 外面一ヘラナデ 腹部横合板ナデ 内面一ナデ 肥土 砂粒多量 燃成 やや不良 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-3グリッド中層
275	台付型	法量 深高(6.6) 脚径10.4 調整・文様 外面一ナデ 内面一脚部へラナデ 腹部ナデ 肥土 やや粗い砂粒多量 燃成 良好 色調 灰黄色→暗灰色 出土位置 A-2グリッド3トレンチ最下層
276	台付型	法量 深高(5.7) 脚径10.4 調整・文様 外面一輪縫により調整不可判 内面一ナデ 肥土 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-1グリッド下層
277	台付型	法量 深高(5.8) 脚径10.6 調整・文様 外面一ナデ・ヘラナデ粗い紙ミガキ 内面一ナデ・ヘラナデ 肥土 砂粒多量 泥岩粒多量 角閃石 偏光 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-1グリッド1トレンチ最下層
278	台付型	法量 深高(5.8) 脚径10.8 調整・文様 外面一ハケメ 底部付近ナデ 内面一ハケメ 底部付近ナデ 肥土 白色粒状物質 黑色鉄砂 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-1グリッド北側上層
279	台付型	法量 深高(6.1) 脚径10.4 調整・文様 外面一ハケメ 内面一脚部ナデ 腹部ハケメ 肥土 やや粗い赤色鉄化粒子 黑色鉄砂 白色粒 少量 偏光 やや粗 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-3グリッド下層
280	台付型	法量 深高(6.0) 脚径10.6 調整・文様 外面一ナデ?後部に突起部付(脚部により調整不可判) 内面一全体ナデ 腹部ハラナデ? (脚部付により調整不可判) 肥土 やや粗 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 C-3グリッド中層
281	台付型	法量 深高(6.7) 脚径10.8 調整・文様 外面一ナデ? (脚部により不可) 制御接合部に突起部付 内面一ナデ? (脚部により不可) 肥土 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-2グリッド最下層2トレンチ加部部
282	台付型	法量 深高(6.8) 脚径10.0 調整・文様 内外面一ナデ 外面一横合板に突起部付 肥土 やや粗 砂粒多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-1グリッド下層
17-283	小型型	法量 口径10.4 深高14.2 底部3.7 調整・文様 外面一口縫接合部ナデ一部端上半へラナデ 脚部下半・底部へラナデ 内面一口縫接合部ナデ 脚部へラナデ 肥土 密 白色粒状物質 露出鉄粒 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側上層 備考 脚部中1/3付近に埋付
284	小型型	法量 口径(11.0) 深高(12.5) 調整・文様 外面一口縫接合部ナデ一部端へラナデ 内面一ヘラナデ 肥土 やや粗 小石 白色鉄粒多量 燃成 良好 色調 得→明褐色 出土位置 B-1グリッド北側上層
285	小型型	法量 深高(11.8) 底深2.9 調整・文様 外面一部端縫合部一ヘタハケメ 腹部上半横ハケメ→ハケメ・中央横ハケメ・下半横ハケメ 腹部周縫合部ハケメ→ラケズリ 内面一部端ハケメ→ナデ 腹部上半横ハケメ→ハケメ・中央横ハケメ・下半横ハケメ→ナデ 肥土 白色粒多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2グリッド下層 備考 腹部下部部分に煤着付
286	小型型	法量 口径(12.0) 深高(4.2) 調整・文様 外面一ハケメ一口縫接合部ナデ 脚部ナデ 内面一口縫接合部ナデ 脚部ハケメ→ヘラナデ 肥土 灰白色粒少子 小石少量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-1グリッド北側上層
287	型	調整・文様 外面一ハケメ一口縫接合部ナデ 内面一ヘラナデ一口縫接合部ナデ 肥土 やや密 白色粒状物質や多量 黑色粒少量 白色粒少量 偏光 良好 色調 黑褐→褐色 出土位置 A-2グリッド下層
288	型	調整・文様 外面一口縫接合部ハケメ→メド、脚部ハケメ 口唇部ハケ工具によるキザミ 内面一横ミガキ 肥土 砂粒 燃成 良好 色調 黑褐色 出土位置 B-3グリッド上層
289	型	調整・文様 外面一斜めハケメ一口縫接合部ハケ工具によるキザミ 内面一ナデ一口縫接合部ハケメ 肥土 霧雲 燃成 良好 色調 灰黄褐色 出土位置 B-2グリッド2トレンチ北側下層
290	型	調整・文様 外面一ナデ ロ型脚棒状工具による交互押印 脚部に1段の輪積痕 内面一ナデ 肥土 砂粒 燃成 良好 色調 灰黄褐色 出土位置 B-2グリッド南側下層
291	型	調整・文様 外面一ナデ→ロ型脚棒状工具によるキザミ 内面一ナデ 肥土 小石 黑色粒 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-1グリッド上層
292	型	調整・文様 外面一口脚部脚状工具によるキザミ 内面一ナデ 肥土 黑色粒多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-2グリッド北側中層
293	型	調整・文様 外面一口脚部脚状工具によるキザミ (内外面共に厚版により調整不可判) 内面一ナデ 肥土 小石 白色鉄粒 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド北側下層
294	型	調整・文様 外面一口脚部脚状工具により以下ナデ一部押印 内面一ナデ一部押印 肥土 白色粒状物質微量 燃成 良好 色調 黑褐色 出土位置 B-2グリッド3トレンチ下層
295	型	調整・文様 外面一ナデ→ロ型脚棒状工具によるキザミ 内面一ナデ 肥土 黑色粒多量 燃成 良好 色調 棕色 出土位置 B-1グリッド上層
296	型	調整・文様 外面一2段の輪積痕一帯脚棒中間に棒状工具によるキザミ→ロ型脚棒状工具によるキザミ 内面一ナデ 肥土 砂粒多量 燃成 良好 色調 黑褐色 出土位置 A-1グリッド上層
297	型	調整・文様 外面一1段以上の輪積痕ロ型脚棒状工具によるキザミ 内面一ナデ 肥土 砂粒多量 燃成 良好 色調 灰黄褐色→にぶい黄褐色 出土位置 A-1グリッド下層
298	型	調整・文様 外面一ナデ→ロ型脚棒状工具によるキザミ 内面一ナデ 肥土 黑色粒多量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 B-2グリッド2トレンチ最下層
299	型	調整・文様 外面一ロ型脚棒状工具によるキザミ 1段の輪積痕一ナデ 内面一ナデ 肥土 砂粒 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2南側下層
300	型	調整・文様 外面一横ハケメ→3本位の脚棒工具で押印 内面一ナデ 脚部棒状工具によるキザミ 内面一ヘラナデ 肥土 黑色粒 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
301	型	調整・文様 外面一ハケメ 内面一ナデ 肥土 金葉緑 燃成 良好 色調 灰黄色 出土位置 A-2グリッド北側上層
302	型	調整・文様 外面一2段以上の輪積痕→押印 内面一キザミ 以下ナデ 内面一ナデ 肥土 やや密黑色粒 白色粒少量 白色粒状物質少量 燃成 良好 色調 にぶい黄褐色 出土位置 A-2グリッド最下層

回収No.	種別	概要 内容
17-303	甕	調査・文様 外面一4段以上の輪郭陶一指押えナデ 内面一ナデへラナデ 胎土 灰黑色多量 白色微粒少量 焼成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド最下層
304	甕	調査・文様 外面一2段以上の輪郭陶一特状工具によるキザミ 内面一ナデ 胎土 砂粒多量 烧成 良好 色調 棕色 出土位置 A-3グリッド北側下層
18-305	甕	法量 口径(22.6) 高さ(4.2) 底径(9.0) 調査・文様 外面一口縁部横ナデ 腹部へラケズリ 内面一口縁部横ナデ 腹部ナデへラナデ(輪郭残る) 底部へラケズリにより面取り 胎土 白色針状物質 黒色鐵砂 棕色鐵化粒子 烧成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側中層
306	甕	法量 口径(20.0) 高さ(9.5) 調査・文様 内外面一跡なへラナデ 胎土 密 烧成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-1グリッド南側上層
307	甕	法量 口径(18.0) 高さ(7.0) 調査・文様 外面一口縁部横ナデ 腹部へラケズリ 内面一口縁部横ナデ 腹部へラナデ 胎土 粉質 白色針状物質 黑色鐵砂微量 烧成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-1グリッド北側上層
308	甕	法量 口径(21.0) 高さ(9.0) 調査・文様 内外面へラナデ 胎土 密 白色針状物質少量 烧成 やや不良 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド下層
309	甕	法量 口径(18.6) 高さ(9.1) 調査・文様 外面一口縁部横ナデへ指押え 腹部横による調整 内面へラナデ 胎土 密 烧成 やや不良 色調 にぬい橙へにぬい黄褐色 出土位置 A-1グリッド上層
310	甕	法量 口径(21.0) 高さ(17.0) 成型(9.3) 調査・文様 外面一粗いハケメ一跡なナデ 下部織なミガキ 内面一粗いハケメ 胎土 粉質 烧成 良好 色調 黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
311	甕	法量 口径(24.0) 高さ(15.0) 調査・文様 外面一粗いハケメへラナデへ口縁部横ナデ 内面へラナデへ口縁部横ナデ 轮郭の頸部に残る 胎土 白色针状物質少量 黑色鐵砂 烧成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド北側下層
312	甕	法量 口径(13.8) 高さ(5.2) 調査・文様 外面一口縁部横ナデ 腹部へラケズリ 内面一口縁部横ナデ 腹部へラナデ 胎土 精物質白色针状物質 破壊微量 烧成 良好 色調 棕色 出土位置 A-2グリッド南側上層
313	甕	法量 口径(23.0) 高さ(25.6) 調査・文様 外面へハケメへナデへ ほミガキ 内面へハケメへナデ 胎土 密 砂粒多量 烧成 良好 色調 にぬい褐へ黒褐色 出土位置 B-1グリッド南側
314	甕	法量 口径(21.6) 高さ(11.4) 調査・文様 外面一ナデへ指押え 内面一ナデ? (原因により調整不明的) 胎土 精物質白 白色针状物質 破壊微量 烧成 良好 色調 明赤褐色 出土位置 A-1グリッド南側中層
315	甕	法量 高さ(8.1) 底径(8.8) 調査・文様 外面へラナデ 内面へラナデ 底部へラケズリにより面取り 胎土 白色针状物質 灰白色鐵粒子 烧成 やや不良 色調 にぬい黄色 出土位置 A-2グリッド北側下層
316	甕	法量 高さ(10.6) 底径(7.7) 調査・文様 外面へラケズリ 内面へラナデ 底部附近へラケズリ 胎土 密 砂粒少量 烧成 良好 色調 黄褐色 出土位置 B-1グリッド南側上層
317	甕	法量 高さ(6.4) 底径(9.2) 調査・文様 外面一跡なナデ 内面一ナデ 胎土 砂質 白色针状物質少量 白色物質微量 烧成 良好 色調 灰黃褐色~褐色 出土位置 A-1グリッド上層
318	甕	法量 高さ(6.4) 底径(6.6) 調査・文様 外面へ跡なへラナデ 内面一ナデ 胎土 やや粗 砂粒多量 黑色鐵 烧成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 B-1グリッド南側上層
319	甕	法量 高さ(5.0) 底径(6.6) 調査・文様 外面一ナデ 内面一ナデ 胎土 やや粗 砂粒多量 烧成 良好 色調 棕褐色~褐色 出土位置 B-2グリッド下層 推考 破壊
19-320	土製円盤	調査・文様 特状工具による刃鋸・羽状跳文 (L・L)へ無文部ナデ 胎土 白色粒多量 黑色粒や多量 烧成 良好 色調 にぬい黄褐色 出土位置 A-2グリッド最下層
321	鉄製品 鏡先	最大幅0.1 最大厚0.9 重量88.5g 出土位置 A-2グリッド下層
322	管玉	直徑0.9 長さ3.2 重さ0.3 g 色調 周圍灰色 出土位置 A-2グリッド4トレチ最下層

第2表 出土遺物観察表(2)

回収No.	出土位置	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
20-323	B-3南上層	磨製石斧	50	39	9	40.8	玄武岩	
324	B-1南中層	磨石？	(41)	680	16	63.7	石英片岩	
325	A-1南中層	敲石	45	23	47	161.9	砂岩	
326	A-1南上層	圓石	90	59	33	215.5	砂岩	
327	A-2北上層	圓石	90	49	39	219.6	砂岩	
328	A-17北上層	鐵石	(78)	650	41	247.6	玄武岩	
329	B-2南中層	鐵石	(53)	(46)	40	77.3	砂岩	
330	A-1北中層	鐵石	77	69	23	108.5	砂岩	
331	B-2最下層	鐵石	69	47	38	149	褐色角礫岩	
332	A-1南中層	鐵石	91	43	20	116.2	砂岩	
333	A-2南中層	鐵石	97	50	41	369.8	玄武岩	
334	A-2北中層	鐵石	64	30	16	30.8	玄武岩	被熱有
335	B-2最下層	鐵石	58	53	25	68.6	砂岩	
336	A-2北中層	鐵石	(99)	120	30	436.6	基質質砂岩	
337	A-2北上層	鐵石	(110)	(57)	43	374.9	砂岩	
338	A-17北上層	鐵石	66	40	33	129.6	且質質岩	
339	B-1北最上層	鐵石	(75)	(86)	(46)	347	褐色質砂岩	
340	B-2南上層	鐵石	(76)	(30)	14	39.6	砂岩	
341	A-17北最上層	鐵石	69	52	8	31.2	且質質岩	

第3表 出土遺物観察表(3)

回収No.	出土位置	遺存部位	露厚(mm)	色調	文様	胎土	機械
22-402	B-3北上層	胴部	5~12	にぶい 黄	沈線、陰帶 (7.5YR5/4)	金雲母(多)、石英(少)、黑色粒(少)、白色粒(少)	良好
403	A-2北下層	口縁部	6~10	灰 黄	褐色、沈線	黑色粒(多)、石英(少)、角閃石(少)、白色粒(少)	良好
404	B-1底下層	胴部	10~15	にぶい 黄	褐色、太陰線 (7.5YR5/4)	白色粒(多)、角閃石(少)、雲母、白色針狀物質(少)	良好
405	B-1底下層	胴部	7~8	にぶい 黄	沈線、刺突 (5YR4/4)	黑色粒、白色粒(多)、赤色粒(少)	良好
406	A-2鉢中層	胴部	8~9	明 黄	沈線、刺突 (7.5YR5/4)	黑色粒(少)、白色粒、石英、	良好
407	A-2鉢下層	胴部	6~7	にぶい 黄	沈線 (10YR6/4)	黑色粒(多)、白色粒(少)、石英(少)	良好
408	B-1南上層	口縁部	5~10	にぶい 黄	無文 (10YR6/3)	黑色粒、白色粒(多)、石英(少)	良好
409	A-1北上層	口縁部	7~24	褐	灰 (10YR4/1)	白色粒(多)、角閃石(少)、雲母(少)	良好
410	B-3鉢中層	胴部	6~11	にぶい 黄	陰帶、沈線、斜線 (10YR6/4)	黑色粒(多)、白色粒(少)、金雲母(少)	良好
411	B-2底下層	胴部	8~9	褐	陰帶、磨削面文(LJ0 (10YR2/3)	黑色粒(少)、白色粒(多)、石英(多)、小石(Φ3mm)	良好
412	B-1南上層	胴部	6~8	にぶい 黄	陰帶、磨削面文(LJ0 (7.5YR5/4)	黑色粒、白色粒(多)	良好
413	A-2北下層	口縁部	5~9	にぶい 黄	陰帶 (7.5YR5/4)	黑色粒、白色粒(多)、石英(少)	良好
414	B-1南上層	胴部	9~10	にぶい 黄	陰帶 (10YR6/4)	黑色粒、白色粒	良好
415	B-2北上層	口縁部	7~8	灰 黄	沈線、磨削面文(LJ0 (10YR4/2)	黑色粒(少)、白色粒(多)、角閃石(少)	良好
416	A-2鉢中層	胴部	6~8	にぶい 黄	沈線、陰帶、圓文(LJ0 (10YR6/4)	黑色粒、白色粒(多)、角閃石(少)	良好
417	B-1南上層	胴部	8~9	にぶい 黄	沈線、圓文(LJ0 (10YR6/4)	角閃石(多)、白色粒(多)	良好
418	B-2S-L	胴部	7~8	褐	色 圓文(LJ0 (7.5YR4/3)	白色粒(多)、角閃石(少)	良好

図版No.	出土位置	遺存部位	器形(cm)	色調	文様	胎土	良好
22-419	B-3下層	腹部	8~9	褐色 (7.5YR4/1)	素面	黒色粒(多)、白色粒(少)、石英(少)	良好
420	B-3下層	腹部	5~18	灰 黄 (10YR5/2)	素面	黒色粒(多)、白色粒(少)	良好
421	A-2南中層	把手	—	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線	角閃石(多)、白色粒(多)	良好
422	B-2北中層	把手	—	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	円孔文	黒色粒(少)、白色粒(多)、石英(多)	良好
23-423	B-2南中層	腹部	6~9	に ぶ い 赤 横 (5YR5/4)	大吹き、小突起、網目	黒色粒(多)、白色粒(少)、石英(少)	良好
424	A-1北中層	口縁部?	5~11	に ぶ い 横 (7.5YR6/4)	沈線	黒色粒(多)、白色粒(少)、石英(少)、角閃石(少)	良好
425	B-1北上層	腹部	7~8	明 黄 横 (10YR7/5)	沈線	黒色粒(多)、角閃石、白色針状物質(少)、石英(少)	良好
426	B-2南中層	腹部	5~6	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線	白色粒(多)、角閃石(多)、白色針状物質(少)	良好
427	B-2南最下層	腹部	8~9	に ぶ い 赤 横 (5YR4/4)	沈線	黒色粒(多)、白色粒(多)、赤褐色粒(少)	良好
428	B-2北中層	腹部	5~6	褐陽 (2.5YR3/2)	沈線	黒色粒(少)、白色粒(少)、石英(多)	良好
429	B-2北中層	腹部	6~7	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線	白色粒(多)、角閃石(少)	良好
430	B-1北上層	腹部	4~7	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線	黒色粒(多)、白色粒、石英(多)、角閃石(少)	良好
431	B-2北中層	腹部	6~7	に ぶ い 黄 横 (10YR5/4)	沈線、磨削面(3处)	黒色粒(少)、白色粒(多)	良好
432	A-2最下層	腹部	7~9	に ぶ い 黄 横 (10YR5/4)	沈線	白色粒(多)、石英(多)、角閃石(少)	良好
433	B-3南中層	腹部	4~5	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線	黒色粒(少)、黑色微粒(少)、白色粒	良好
434	B-1南上層	腹部	6~7	に ぶ い 黄 横 (10YR5/4)	沈線	黒色微粒(少)、石英(多)	良好
435	B-3北中層	腹部	5~6	に ぶ い 黄 横 (10YR5/4)	沈線、磨削面(LR)	黒色粒、石英(多)、金雲母	良好
436	B-2南最下層	腹部	6~9	に ぶ い 横 (5YR5/4)	沈線、網文(LR)	黒色粒(多)、白色粒(多)	良好
437	B-3北上層	腹部	5~6	褐色 (7.5YR4/3)	沈線、網文(LR)	白色粒(多)、角閃石(少)	良好
438	A-2北下層	腹部	5~6	褐色 (10YR4/6)	沈線、網文(LR)	黒色粒、白色微粒、角閃石(少)	良好
439	A-2南下層	腹部	6~8	褐灰 (10YR4/1)	沈線、網文(LR)	黒色粒(少)、白色粒(多)、石英(少)	良好
440	A-2南中層	腹部	5~6	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線、網文(LR)	黒色粒、白色粒(多)、赤褐色粒	良好
441	B-1南上層	口縁部	4~7	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線、網文(LR)	黒色粒(多)、白色微粒(少)	良好
442	B-3北上層	腹部	5~6	に ぶ い 黄 横 (10YR5/4)	沈線	石英(多)、黑色粒、金雲母	良好
443	B-2下層	口縁部	6~9	に ぶ い 黄 横 (10YR5/4)	円孔文、陰唇	黒色粒、白色粒(多)、石英(多)、小石(少)(mm少)	良好
444	B-3北上層	口縁部	3~5	灰褐 (7.5YR4/2)	陰唇、刻免、沈線	黒色粒(少)、白色粒(多)、角閃石(少)	良好
445	B-2北中層	腹部	3~4	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	沈線、陰唇、網突	黒色粒(少)、白色粒(多)	良好
446	B-1南上層	腹部	6~10	に ぶ い 横 (7.5YR5/4)	陰唇、太吹き、条縞、刻み	黒色粒(少)、白色粒(多)、石英(少)	良好
447	A-2北下層	口縁部	4~8	灰 黄 横 (10YR5/2)	陰唇、刻免、沈線	白色粒(多)、角閃石(少)	良好

図版No.	出土位置	遺存部位	基準(m)	色調	文様	胎土	良好
23-448	A-1南上層	口縁部	4~5	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	沈線、陰帯、刻文、縄文LR0	黒色粒(少)、白色粒(多)、角閃石(少)	良好
449	B-3北中層	肩部	5~7	灰 黄 褐 (10YR4/2)	陰帯、刻文、縄文LR0	黒色粒(少)、白色粒(多)、角閃石(少)	良好
450	B-2西中層	口縁部	3~5	灰 黄 褐 (10YR4/2)	陰帯、沈線、刻文、縄文LR0	黒色粒、白色粒少	良好
451	3レ下層	肩部	5~6	黒褐色 (10YR3/1)	縄文LR0	黒色粒、白色粒(多)、角閃石(少)	良好
452	A-2北下層	肩部	5~6	褐 (10YR4/6)	縄文(無地)	黒色粒、白色粒少、角閃石(少)	良好
453	B-2北中層	肩部	6~7	にぶい 黄褐色 (10YR5/3)	縄文(LR0)	白色粒(多)、石英(少)、角閃石(少)	良好
454	B-2南中層	口縁部	5~6	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	無文	黒色粒(多)、石英	良好
455	A-2最下層	底部	6~13	褐 (7.5YR5/4)	縄文(LR0)	白色粒(多)、石英(多)、角閃石(少)	良好
456	B-1南上層	底部	5~12	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	網代模	黒色粒(多)、白色微粒(多)	良好
457	B-2南中層	底部	8~10	にぶい 黄褐色 (10YR5/4)	網代模	黒色粒(少)、白色粒(少)	良好
458	A-1南上層	口縁部	8~10	にぶい 棕 (7.5YR5/4)	撫魚文(單面印,?)	白色颗粒(多)、黑色粒(多)、白色針狀物質(少)	良好
459	A-2南下層	土製片縫	5~7	にぶい 褐 (7.5YR5/4)	縄文0、沈線、刻文	白色粒(多)、角閃石(多)	良好
460	A-1北上層	土製片縫	7~10	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	縄文(r)	黒色粒(多)、白色粒(多)、小石(少)	良好

第4表 出土遺物觀察表(4)

図版No.	出土位置	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
24-462	B-1南上層	打製石斧	769	43	16	60.5	ホルンブエルス	一部鋸面あり
463	A-2北上層	磨製石斧	989	49	20	141.8	緑色岩	
464	B-3上層	石鍬	86	70	26	231.6	砂岩	
465	B-1南上層	四G	85	65	35	187.8	凝灰質砂岩	
466	B-1南上層	石皿	125	163.5	64	1469	安山岩	

# 第4章 自然科学分析

## 鎌倉市水道山遺跡のテフラ分析

上本進二（神奈川県立七里ガ浜高等学校）

### 1. テフラ分析の方法

水道山遺跡は多摩丘陵の斜面中にあるが、現在は人工的な地形改変によって原地形が失われている。遺跡の土層には斜面上部から崩落した土器やロームブロックが堆積しているが、一次堆積のテフラも認められる。そこで、本遺跡の遺跡形成過程と遺跡形成時期を推定するため、下記の方法によりテフラ分析をおこなった。テフラ試料は、遺跡の南壁および中央のセクションベルト土層から採集し、試料に含まれるテフラから年代を推定した。テフラ分析は、上杉ほか（1995）と上本・上杉（1996）に基づいて同定を行った。

### 2. テフラ分析結果

#### 調査区南壁セクションのテフラ分析（第5表）

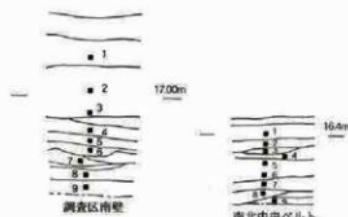
試料1は宝永スコリアを主体とし円磨土器片と円礫を若干含む。宝永スコリアは軽石と火山砂からなり、ほぼ一次堆積の宝永スコリアと思われる。

試料2はS-24-8で、神津島天上山から西暦838年に噴出した繊維状ガラス質軽石を含む。

試料3は円磨土器片を大量に含み、末風化のS-24-8のスコリアからなる。

試料4は円磨したS-24-7のスコリアが多いので、斜面上部からの二次堆積と思われる。試料5～8は古墳時代のスコリアであるS-24-6と思われる。

試料9は青灰色安山岩質岩片を含むなどS-24-4・5の特徴を示しているが、神津島838年の軽石に類似した給源不明の軽石を含んでいる。この軽石が神津島838年の軽石であれば、この層は二次堆積層と考えられる。



第25図 サンプリング位置 (1:80)

第5表 調査区南壁セクションのテフラ分析結果

試料No.	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	黒色玄武岩質火山砂 白灰色微細発泡軽石（宝永スコリア）円磨土器 牆面	S-25	AD1707
2	橄欖石多量 角閃石 円磨スコリア 海綿岩片 海綿発泡ガラス質皮膚牛糞状スコリア 円磨土器片	S-24-8	AD864～1083
3	円磨土器片 橄欖石多量 海綿岩片 円磨土器片 海綿発泡ガラス質皮膚牛糞状スコリア	S-24-8	AD864～1083
4	被熱橄欖石多量 薄皮鱗粒発泡牛糞状スコリア（円磨）角閃石 円磨土器片	S-24-7	AD781～848
5	輝緑岩片15mm 黒灰色軽物付石英結晶群 黒粒発泡牛糞状スコリア（円磨）	S-24-6	AD500～750
6	円磨土器片 黒灰色軽物付石英結晶群 石英付鱗粒スコリア 半透明石英 ファイバー状スコリア	S-24-6	AD500～750
7	石英付鱗粒スコリア多量 円磨土器片 赤色溶岩片 ゼリーガラス 橄欖石	S-24-6	AD500～750
8	石英付鱗粒スコリア多量 円磨土器片 黑灰色軽物付石英結晶群 赤色溶岩片 ゼリーガラス 橄欖石	S-24-6	AD500～750
9	石英質思色軽物付軽石（神津島838？） 赤色溶岩片 鱗粒牛糞状スコリア多量 バブルウォールガラス 橄欖石 円磨スコリア 青灰色安山岩片	S-24-4-5?	AD250～500?

第6表 南北中央ベルトセクションのテフラ分析結果

試料No	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
1	宝永スコリアなし 円磨土器片 ファイバー状海綿発泡スコリア 角閃石多量 赤・黒色溶岩片 鞍灰岩片 スポンジガラス	S-24-9	AD1511? 12~16世紀
2	針状結晶付白色軽石 楊櫻石 石英 ガーネット状風化スコリア 巨大石英 海綿発泡牛糞状スコリア	?	?
3	海綿発泡ガラス質皮膜牛糞状スコリア 板状石英 円磨土器片 巨大石英	?	?
4	海綿発泡ガラス質皮膜牛糞状スコリア多量 楊櫻石 石英 球形気泡玄武岩質溶岩片	S-24-8	AD864~1083
5	円磨土器片 鮎物付青灰色岩片 薄皮膜海綿発泡牛糞状スコリア	S-24-7	AD781~848
6	黒色鮎物付白色軽石 (FA?) バブルウォールガラス 塩化物 貝片 円磨土器 鞍灰岩片 楊櫻石	S-24-6-7 S-24-6主体	AD500~848
7	黒色鮎物付白色軽石 (FA?) バブルウォールガラス 塩化物 貝片 円磨土器多量 楊櫻石 薄皮膜海綿発泡牛糞状スコリア	S-24-6	AD500~750
8	黒色鮎物付白色軽石 (FA?) バブルウォールガラス 塩化物 貝片 円磨土器多量 楊櫻石 薄皮膜海綿発泡牛糞状スコリア	S-24-6	AD500~750
9	巨大石英 ゼリーガラス 球形気泡玄武岩質溶岩片 円磨土器片 薄皮膜海綿発泡牛糞状スコリア	S-24-6	AD500~750

## 南北中央ベルトセクションのテフラ分析（第6表）

試料1には宝永スコリアは含まれず、S-24-9と思われるスコリアが認められた。

試料2・3は円磨スコリアと円磨土器片が多く、二次堆積層と考えられる。

試料4はS-24-8のスコリアを主体とする。ほぼ9世紀中に噴出したテフラであろう。

試料5はS-24-7のスコリアを主体とする。ほぼ8世紀後半に噴出したテフラであろう。

試料6~9は古墳時代に噴出したS-24-6のスコリアを含んでいる。また、試料6~8には西暦500年頃棲名山二子山から噴出したと思われる軽石が含まれている。

## 引用文献

- 上杉 陽・池田京子・須田明子・柳沢唯佳・岡本真砂夫・鈴木 聰 (1995)「富士山北東麓の薦丸尾溶岩類」『関東の四紀19』関東第四紀研究会 p3-21
- 上本進二・上杉 陽 (1996)「神奈川県のテフラ層と遺跡層序—考古学のためのY-Na・S-Na分層マニュアル」『関東の四紀20』関東第四紀研究会 p3-24

## 第5章 まとめ

### 1. 古墳時代～弥生時代

今回の調査では遺構は検出されなかったが、縄文時代から平安時代までの遺物が出土した。特に弥生時代中期後葉から古墳時代にわたり豊富な遺物が出土した。

弥生時代中期後葉から古墳時代にかけての遺物量は各時期それぞれに一定の割合で出土しているのではなく、弥生時代後期後半に増大し、弥生時代末になると減少していく。そして再び古墳時代中期後半から遺物量が増え始め、古墳時代後期に増大するが、奈良時代に比定される土器は出土していない。このことを今回調査を行った地点にはほぼ隣接する戸ヶ崎水道山遺跡での調査の成果と比べて見ると、調査では弥生時代～古墳時代にかけての堅穴住居址30軒余りが検出されており、今回の調査で出土した土器の時期とほぼ合致する。このことから今回の調査での土器の出土傾向はおそらく集落の動向を表しているのではないかと考えられる。また調査地から南東の丘陵上に位置する台山藤原治遺跡では堅穴住居址が弥生時代中期後半2軒・弥生時代後期11軒検出されており、やはり弥生時代後期に住居址が増加する傾向にある。

次に出土した土器を見ていくと、弥生時代中期後葉は壺・甕、弥生時代後期では壺・甕・高坏・小型壺・小型甕、弥生時代末～古墳時代初頭は甕・壺・鉢・高坏・小型高坏・小型器台・壇、古墳前期では甕・壺・高坏・鉢、古墳時代中期では須恵器坏身・高坏・甕、土器器甕・壺・高坏・椀・瓶、古墳時代後期では須恵器坏蓋・坏身・土器器坏・甕・瓶が出土している。各時期をとおして器種構成に偏りは見られない。このようなことから調査地は祭祀等の行為による遺物集中ではなく、土器捨て場あるいは東側に位置する丘陵からの流れ込みと考えられる。

特に弥生時代後期の土器を見ていくと輪積痕を残す甕や高坏が器種の中で一定の量を占めるなど東京湾岸系が主流である。これは近隣の遺跡にも見られ、台山藤原治遺跡でも東京湾岸系の土器が主流である。又外来系の土器は東三河・西遠江の影響を受けていると考えられる高坏・壺が出土しているが数点であり、在地系の土器が主流である。

### 2. 縄文時代

当遺跡の縄文時代における遺構は検出されず、遺物はすべて包含層中からの出土である。また縄文土器の出土数は數十点と決して多くはないが、時期的には縄文時代中期前葉から後期中葉にわたる。また層位による明瞭な時期差は認められず、土器捨て場或いは、後背地からの流れ込みの様相を呈するものと思われる。本遺跡は「鎌倉市史考古編」にも記述があるとおり、以前より縄文前期から後期の遺物散布地として周知の遺跡であったが、今回の調査では前期とわかる遺物の出土は認められなかった。ここでは鎌倉市における当該期の調査事例と比較しながら、当遺跡において検出された遺物を概観していく。

今回の調査では、中期の土器破片が21点出土している。その中心となるのは曾利式、加曾利E式土器である。曾利式土器は比較的古手の様相を呈し、曾利II式のものが含まれる。管見ではこれまで鎌倉市域において曾利式土器が出土したという報告はなく、未発表の資料ではあるが、寺分藤原遺跡において包含層中から数点の出土が認められているのみである。加曾利E式については破片も特徴的なものが少なく判別は困難であるが、II式からIV式までほぼ均等に出土している。

縄文時代後期の土器破片は35点の出土があり、壠ノ内式期から加曾利B式期のものが多く認められた。しかし小破片で判別が困難なものの中に称名寺式土器が含まれている可能性も指摘しておく。壠ノ内式

においてはⅠ式・Ⅱ式を通じて出土しているが、加曾利B式になると比較的古手の浅鉢の口縁部などに限られる。加曾利B式以降の土器の出土が見られなくなるのはこの地域に共通してみられる特徴であり、当遺跡でもその例に違わないものである。底部については具体的な時期決定はできなかったが、底面に網代痕を持つもの他に、縄文が施文された痕跡を持つものも認められた。なお第23図の446と458の遺物に関しては時期・型式が特定できなかった。今後、弥生時代の土器である可能性も含めて検討する余地がある。土製品としては口縁部破片を転用した土器片錐が1点、胴部破片を転用した土製円盤が1点出土している。

鎌倉市における縄文時代の遺跡数は多いものではない。当時の古環境を見ても、縄文前期までは現在の標高15m～20m付近まで海岸線が達し、入江は内陸部深くに及んでいたと考えられている。この時期の住居址などが発掘された例はなく、遺物の散布地がいくつか認められるのみである。中・後期になると海退が急速に進み、それに伴って丘陵や台地に限って遺跡が形成されるようになる。本調査地の立地も南側に広がる舌状台地を後背地に持つため、台地上にはその時期、集落が営まれていた可能性は大きい。周辺にも当遺跡と同じような特徴を有する遺跡が存在する。手広八反目遺跡ではやはり遺構の検出は見られず、包含層中から加曾利E式、堀ノ内式土器の出土が認められている。また台山藤原治遺跡においても包含層中から、僅少ではあるが前期から後期の土器破片が出土している。いずれも台地上の後背地からの流れ込み、投げ込みとされ、本遺跡の特徴と近似している。一方遺構が検出された例としては関谷東正院遺跡、同島ノ神西遺跡があげられ、後期の所産とされる柄鏡型住居址が検出されている。東正院遺跡においては縄文時代早期からの土器の出土はあるが、両遺跡とも中心は加曾利E式、堀ノ内式、加曾利B式のものであり、当遺跡との関連が想定される。

鎌倉市域の縄文時代は前期の海進、中・後期の海退など地形が劇的に変化した時期であり、集落の形成、占地に適した環境ではなかったと思われる。中・後期になってある程度地形的に安定し、洪水など災害からの回避が可能になった丘陵上にいくつかの集落が営まれるようになったと考えられるが、後期後半以降には何らかの理由で途絶えている。なお、前期・中期の遺構は今のところ検出されていないが、過去に採取された土器片もある程度の数にのぼるため、今後の調査で発見されることを期待したい。

#### 参考文献

- 安藤広道 1990a 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理（上）」『古代文化』VOL. 42 財團法人古代學協會
- 安藤広道 1990b 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理（下）」『古代文化』VOL. 43 財團法人古代學協會
- 安藤広道 1996 「南関東地方（中期後半・後期）」『YAY!』弥生土器を語る会
- 上本進二 2000 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡（逗子市No. 100）』東国歴史考古学研究所第26集（仮称）医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団
- 忍沢成視 1992 『市原市山田橋亥の海道貝塚』 財團法人市原市文化財センター調査報告書第48集 日本石油株式会社・財團法人市原市文化財センター
- 忍沢成視 1995 『市原市能満上小貝塚』 財團法人市原市文化財センター調査報告書第55集 福山通運株式会社・武藏屋商事株式会社・財團法人市原市文化財センター
- 倉原和子・坂上克弘・山田光洋 2000 『大熊仲町遺跡』 湘北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書26  
(財)横浜市ふるさと歴史財團
- 小林達雄編集 1989 『縄文土器大観2 中期I』『縄文土器大観3 中期II』『縄文土器大観4 後期 晩期 縄縄文』小学館

- 小山裕之他 2000『神奈川県厚木市恩名仲原遺跡発掘調査報告書』恩名仲原遺跡発掘調査団
- 重久淳一他 1986『神奈川県横浜市緑区奈良町 奈良地区遺跡群I 発掘調査報告書 No.11地点 受地だいやま遺跡 上巻』 奈良地区遺跡調査団
- 鈴木保彦 1972『東正院遺跡調査報告書 神奈川県鎌倉市関谷所在の縄文時代遺跡について』神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査団
- 鈴木保彦・大上周三 1977『下北原遺跡 伊勢原市下北原所在の縄文時代配石遺構の調査』神奈川県黒埋蔵文化財調査報告14 神奈川県教育委員会
- 鈴木庸一郎他 2001『「古都鎌倉」を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
- 田辺昭三 1996『陶邑古窯址群I』平安考古クラブ
- 寺田兼方・澤田大多郎 1993『遠藤貝塚(西部217地点)』藤沢市西部開発事務局・藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団
- 手塚直樹他 1985『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団
- 永井正憲 1985『関谷島ノ神西遺跡発掘調査報告書』関谷島ノ神西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会発刊
- 西川修一 1994『神奈川西部(相模地域)の土器編年』『庄内式土器研究』VII 庄内式土器研究会
- 長谷川厚 1998『古墳時代中期土器分析への一覧点—神奈川県内の出土例の検討から』『神奈川考古』第34号
- 1999『神奈川県における古墳時代中期の土器について一変遷と画期の側面から—』『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 比田井克仁 1994『南関東における庄内式併行期の土器』『庄内式土器研究』VII 庄内式土器研究会
- 松尾宣方・永井正憲 1984『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広遺跡発掘調査団
- 松本 完 1993『南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性』『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』
- 野内秀明 1999『吉井城山 一神奈川県指定史跡「吉井貝塚を中心とした遺跡」史跡整備事業に伴う確認調査の記録—』 横須賀市文化財調査報告書第34集 横須賀市教育委員会
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会 示人社



調査地風景



調査区全景

図版2



トレンチ全景



トレンチ近景



上層遺物出土状況



2 トレンチ遺物出土状況



3 トレンチ遺物出土状況



4 トレンチ遺物出土状況

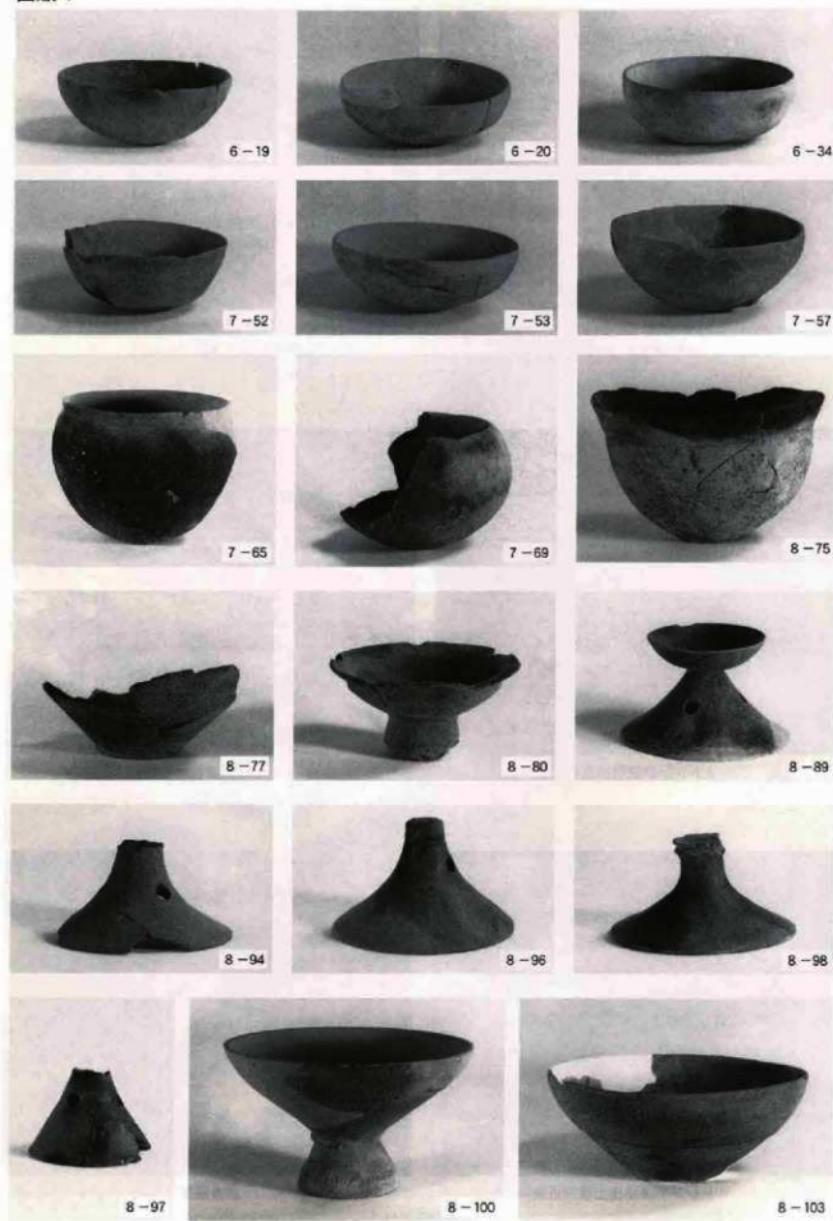


4 トレンチ遺物出土状況近景

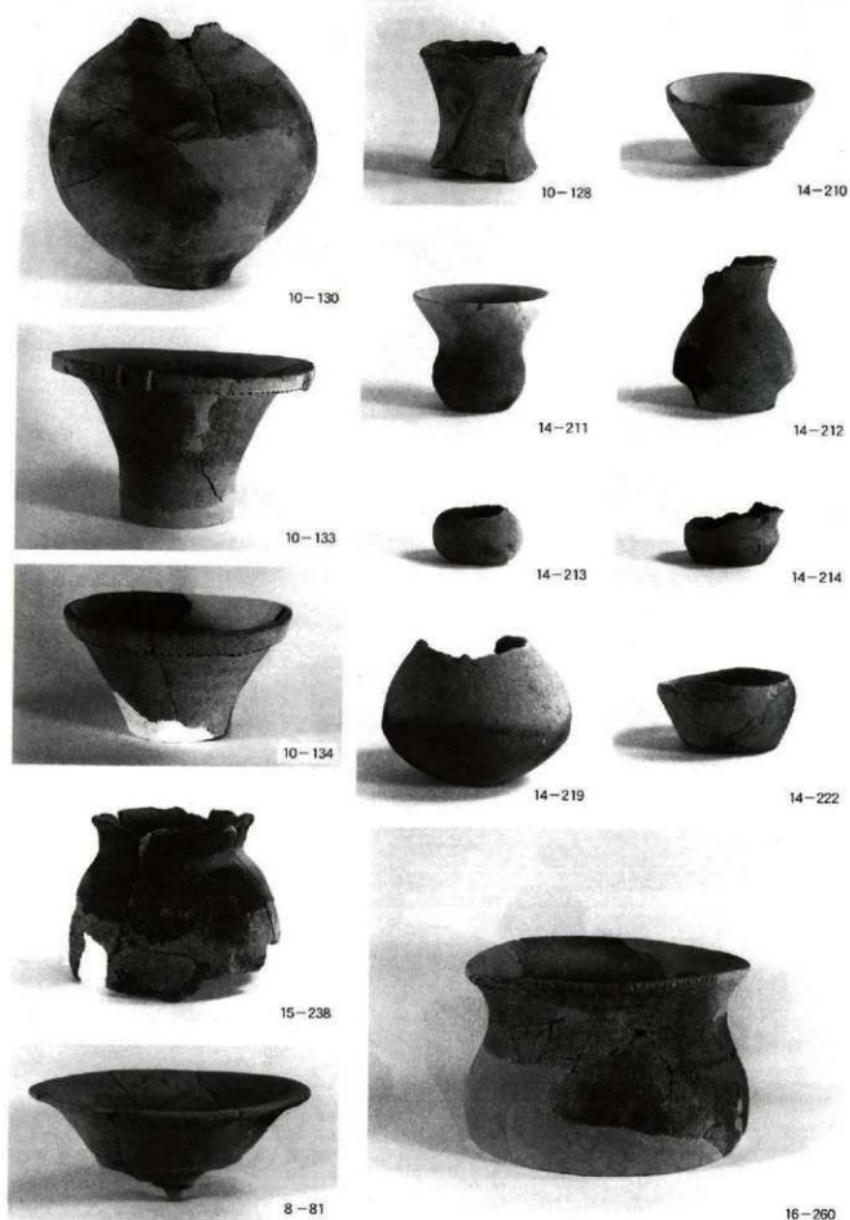


調査風景

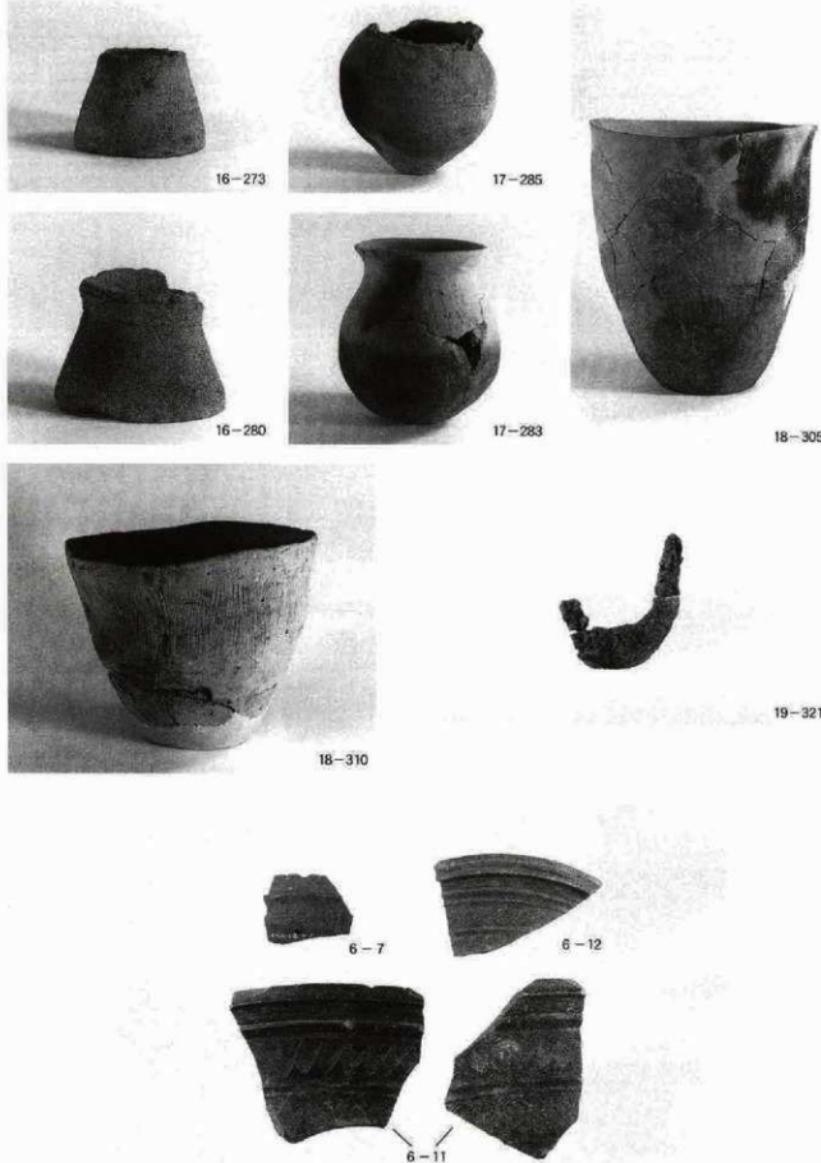
図版 4

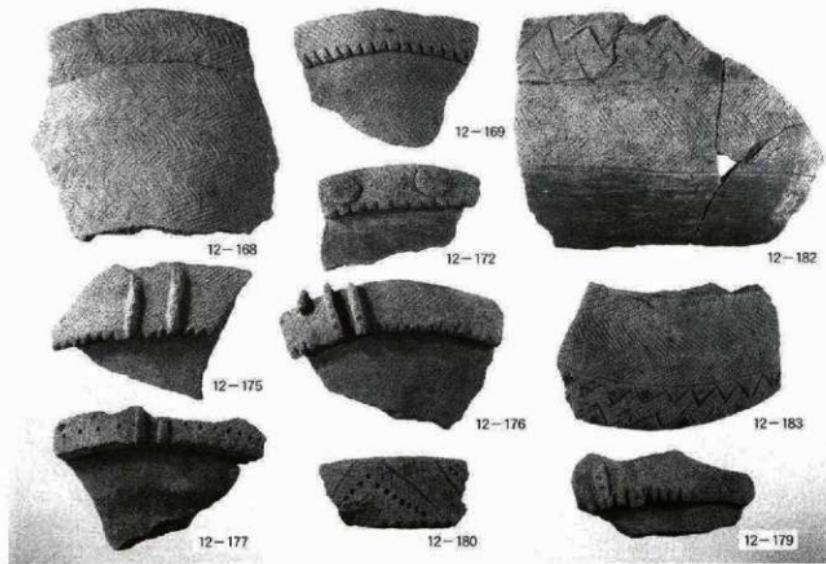
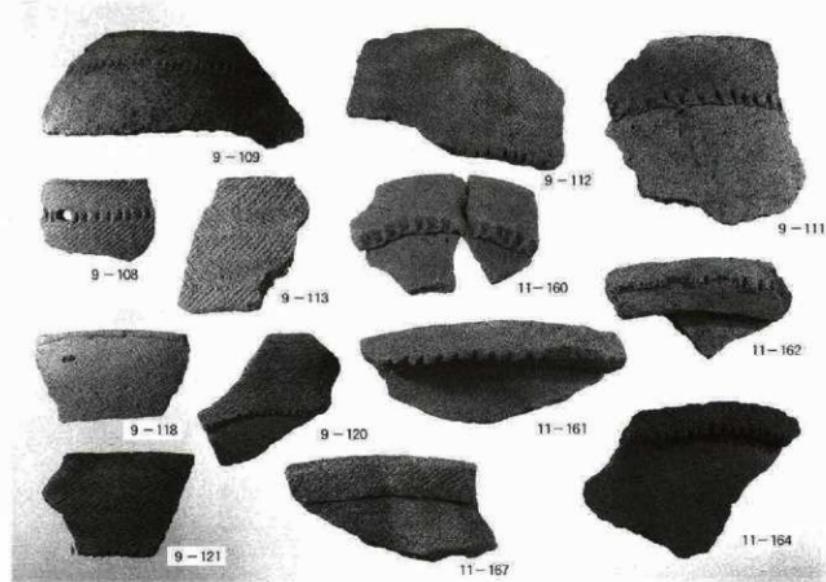


図版5

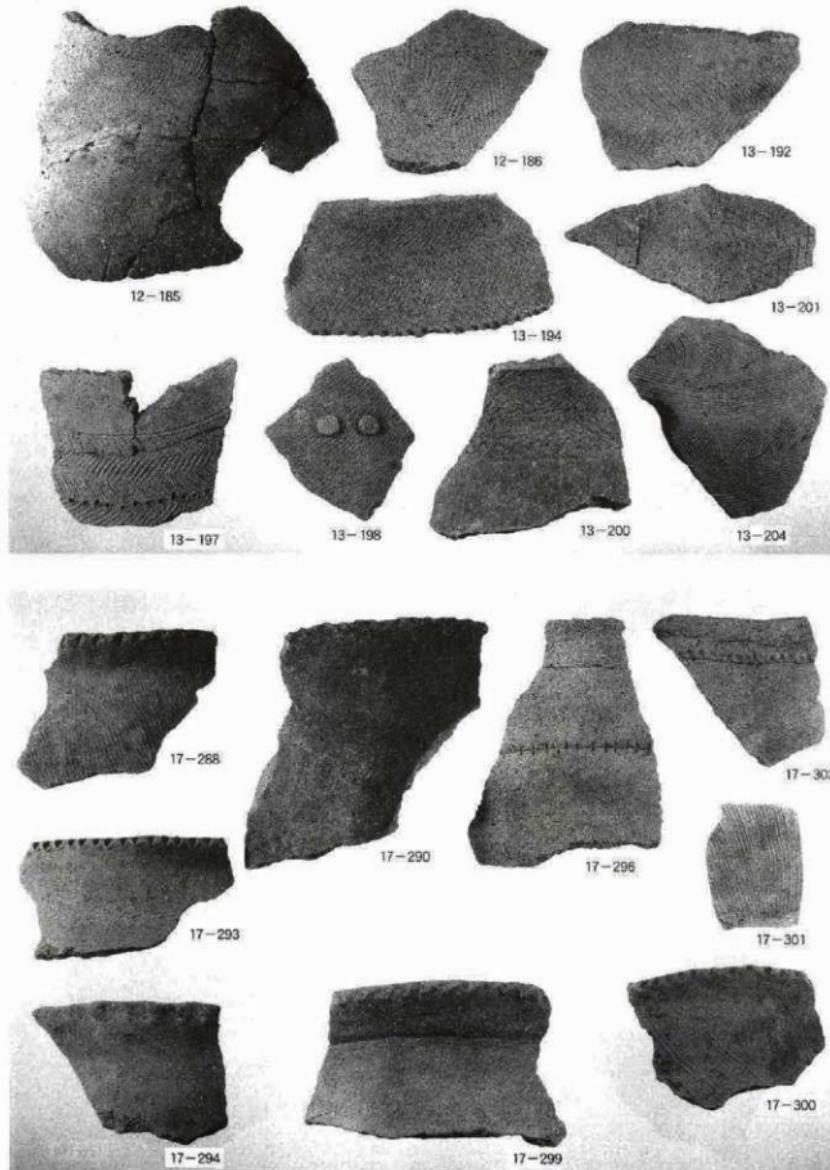


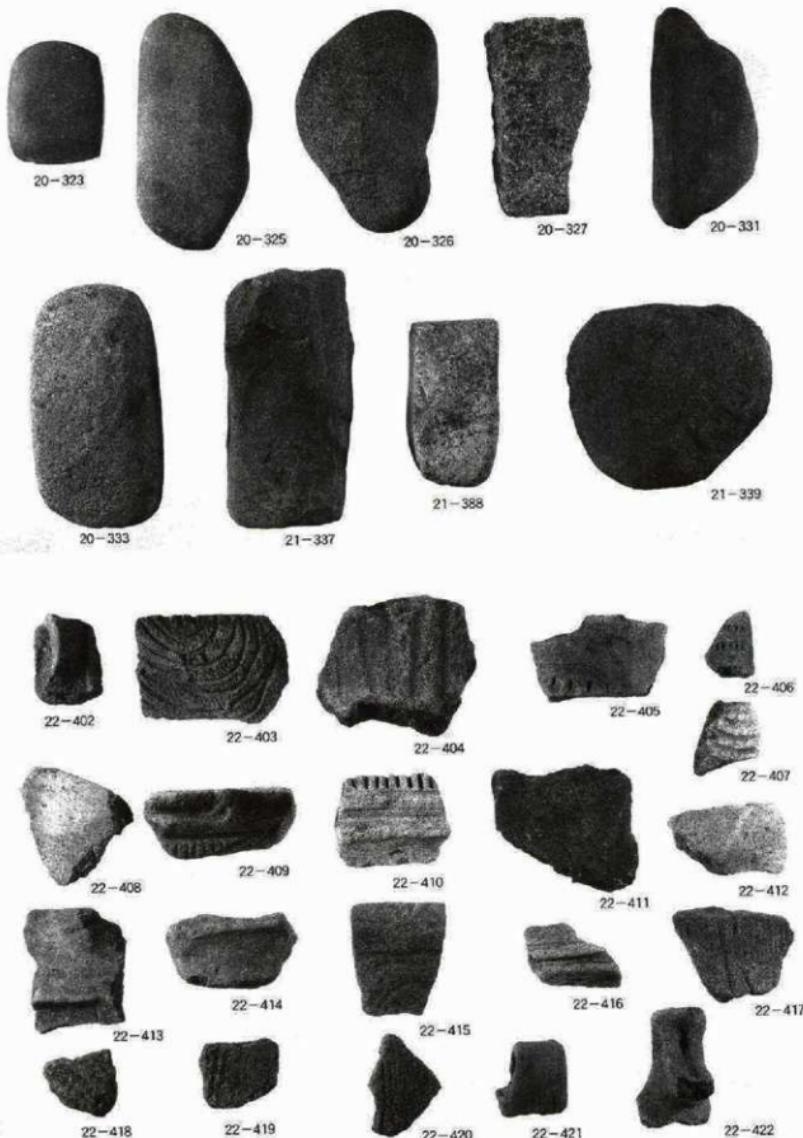
図版 6

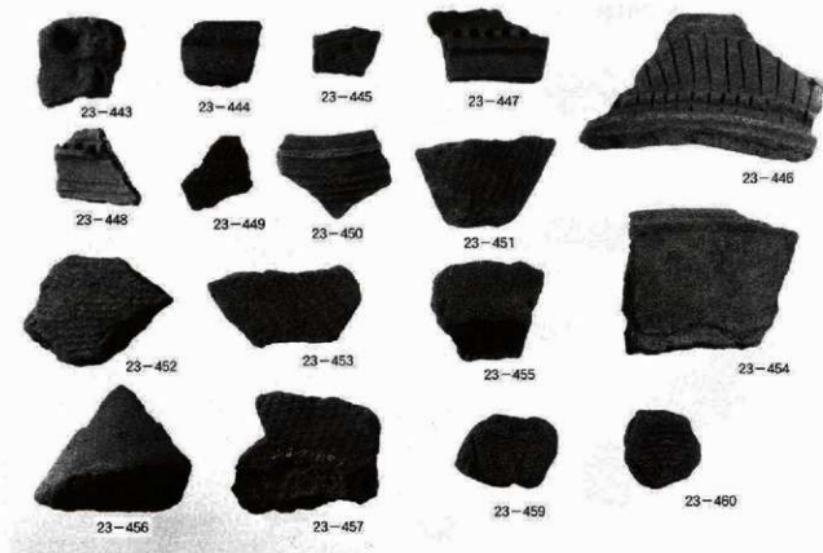
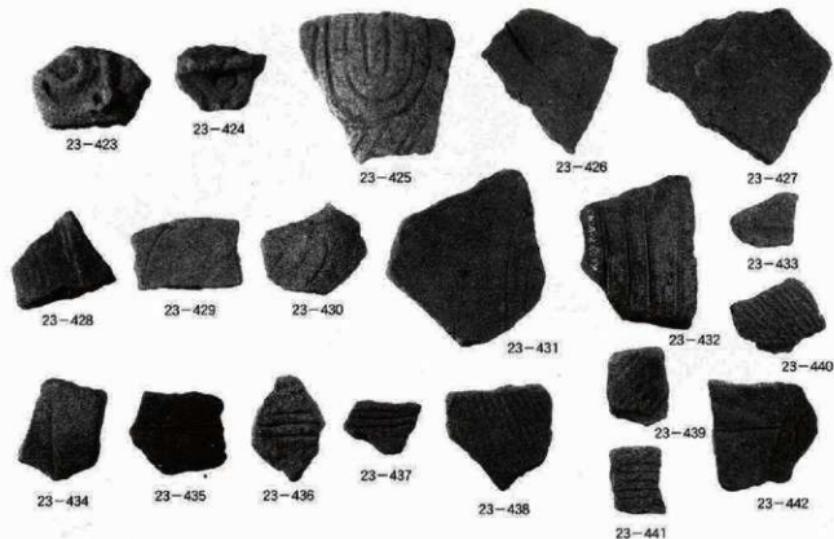


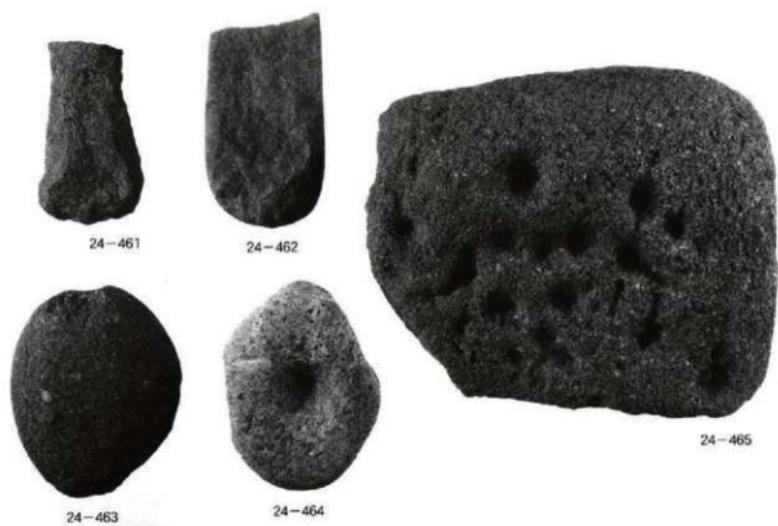


图版8











は　せ　こう　じ　しゅう　へん  
長谷小路周辺遺跡 (No. 236)

長谷一丁目205番12地点

## 例　　言

1. 本報文は、長谷小路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳No. 236）内、鎌倉市長谷一丁目205番12地点に於ける個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成12年10月10日から同年11月10日まで実施した。調査対象面積は約31.5m<sup>2</sup>。
3. 調査及び整理作業の体制は以下の通り。

調査員 沙見 一夫 山上 玉恵 渡邊 美佐子  
調査補助員 田畠 衣理  
作業員 安斎 三男 北島 清一 山崎 一男
4. 本報文に係る整理作業は山上・渡邊・田畠が分担して行った。原稿は沙見が第2章の1と2を、他を田畠が執筆し、沙見・田畠が編集した。また、本報に使用した写真は遺構を沙見・田畠が、遺物を田畠が撮影した。
5. 出土遺物の内、舶載陶磁器類は手塚直樹氏（青山学院大学）、瀬戸窯製品等は宗臺富貴子氏（鎌倉考古学研究所）に御教示を賜った。
6. 現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。（社）鎌倉市シルバー人材センター 東国歴史考古学研究所 鎌倉考古学研究所 露木建設
7. 本調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

# 目 次

## 本文目次

第1章 環境と立地	148
第2章 調査の概要	152
第3章 遺構と遺物	154
第4章 調査成果	162

## 挿図・表目次

図1 長谷小路周辺遺跡の範囲と調査地点	149	図10 遺構外出土遺物	160
図2 國土座標上の位置とグリッド配置	152	図11 中世包含層・表採・攪乱出土遺物	161
図3 堆積土層	153	図12 中世以前出土遺物	161
図4 遺構全測図	154	図13 長谷小路周辺遺跡地形概念図	163
図5 土壌2・3、ピット14と出土遺物	155		
図6 土壌10・11と出土遺物(1)	157	表1 土壌11出土遺物破片数表	164
図7 土壌11出土遺物(2)	158	表2 出土遺物法量表(1)	165
図8 土壌14・15と出土遺物	159	表3 出土遺物法量表(2)	166
図9 土壌16・23と出土遺物	160	表4 出土遺物破片数表	166

## 写真図版目次

図版1 I区全景①(南から)	167	図版2 北壁土層断面	168
I区全景②(南から)		西壁土層断面	
I区全景③(南から)		図版3 西壁中央基盤層落込み	169
II区全景(南から)		土壌11・14・15土層断面(北西から)	
		図版4 出土遺物	170

# 第1章 環境と立地

鎌倉は自然発生的要素を多分にもつた地であるが、この地が商業地域を構成し、都市を形成していくにあたっては本来の要因も大きく影響する。それは、鎌倉は要害の地であるとともに奈良時代の宝亀2年(771)まで古東海道の道筋であったことも一因であろう。古東海道は足柄山を越えて相模に入り、藤沢から鎌倉郡の片瀬・腰越・極楽寺坂・甘縄をへて、下の下馬橋(現在の下馬四ツ角)で若宮大路と交差していた。そして大町・名越を経由して逗子から横須賀走水に通じ、安房に至っている。この道筋が鎌倉時代、大町大路として中世鎌倉の要害である東の名越の切通し、西の極楽寺坂を結ぶ東西交通の要路としてその機能を継承している。また大町大路が若宮大路と交差する下の下馬橋は繁華の中心でもあり、大町大路に沿っては米町(または般町)・魚町など幕府から裁許を受けた商業地が存在する。また大町大路は寿福寺前から六地蔵へ南北方向に走る今小路が接するのを境にして、以西を大町大路から長谷小路と名を変えて呼称している。

本調査地点は、この長谷小路一帯を範囲とする長谷小路周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.236)の鎌倉市長谷一丁目205番12に所在する。調査地点から南側50m程で下馬四ツ角から長谷觀音・大仏方面へと東西に国道134号線が走り、かつての大町大路であったろうと考えられている。

調査地点西側一帯は、山麓に沿って東西に広がる甘縄と称される地域であり、古東海道の道筋でもあった。「吾妻鏡」にも甘縄の名を見出すことができる。名の由来となったと思われる甘縄神明社は、鎌倉幕府開府以前から鎮座するといわれている古い社で、「相州鎌倉郡神興山甘縄寺神明宮縁起略」によると、和銅3年(710)8月行基の創設とし、理染谷時忠が山上に神明宮、山下に円徳寺を建て、後に源頼義が相模守となって下向した時、平直方の女を娶り当社に祈って八幡太郎義家をこの地で生んだと伝える。また、甘縄神社は安達氏が守護にあたり、社殿近くには歴代安達氏の屋敷があつたと伝える。

甘縄神社周辺では3地点の調査が行われている。地点26は伝安達泰盛邸跡といわれ、木組の溝や堀などが、地点27は2時期の生活面に掘立柱建物や井戸、小規模な溝による区画などが発見されている。地点28においては広範囲にわたる堅固な地業や大小の掘立柱建物の存在により屋敷地の一角と思われる要素と、掘立柱建物の短期間における頻繁な建て替えや方形堅穴建築址の存在など町屋的な要素もあり、その性格は特定されていないが、甘縄神社に関連する遺構の発見はない。

調査地点南側に位置する由比ヶ浜とその背後に広がる砂丘地帯は、鎌倉時代において「前浜」と呼ばれ、西は稻瀬川、東は滑川を境としていたようである。本調査地点周辺(地点1~21)の様相では前浜地域は町中のような屋敷地は形成されず、方形堅穴建築址を中心とした遺構を発見し、道路による区画がなされていることもわかつてきた。遺物も鑄造・鍛冶関連品や骨角製品(未製品含む)が多く出土し、自由民である職能集団が活動していた地域であったと考えられる。また中世だけでなく古代の遺構・遺物の存在も明らかになりつつある。中世基盤層の下位には古代の遺物や堅穴住居址・伸展葬土壙墓が発見され、それらは砂丘の後背湿地に形成された腐植土と考えられている黒褐色弱粘質砂層(チョコレート色)に確認されている。また人骨・土壙墓等の検出により葬送の地としての性格は中世においても引き継がれている。

調査地点東側は笛ヶ谷という比較的大きな支谷が広がり、第4代執権北条經時はここに葬られており、経時の菩提所である道身院や長樂寺があったとされている。これまでに国道134号線近くでは2地点調査されている。地点24は中世基盤層下に堆積する黒褐色弱粘質砂層(チョコレート色)を部分的に確認し、地点25は仰臥伸展葬の葬位を持つ土壙墓を発見している。

(田畠)

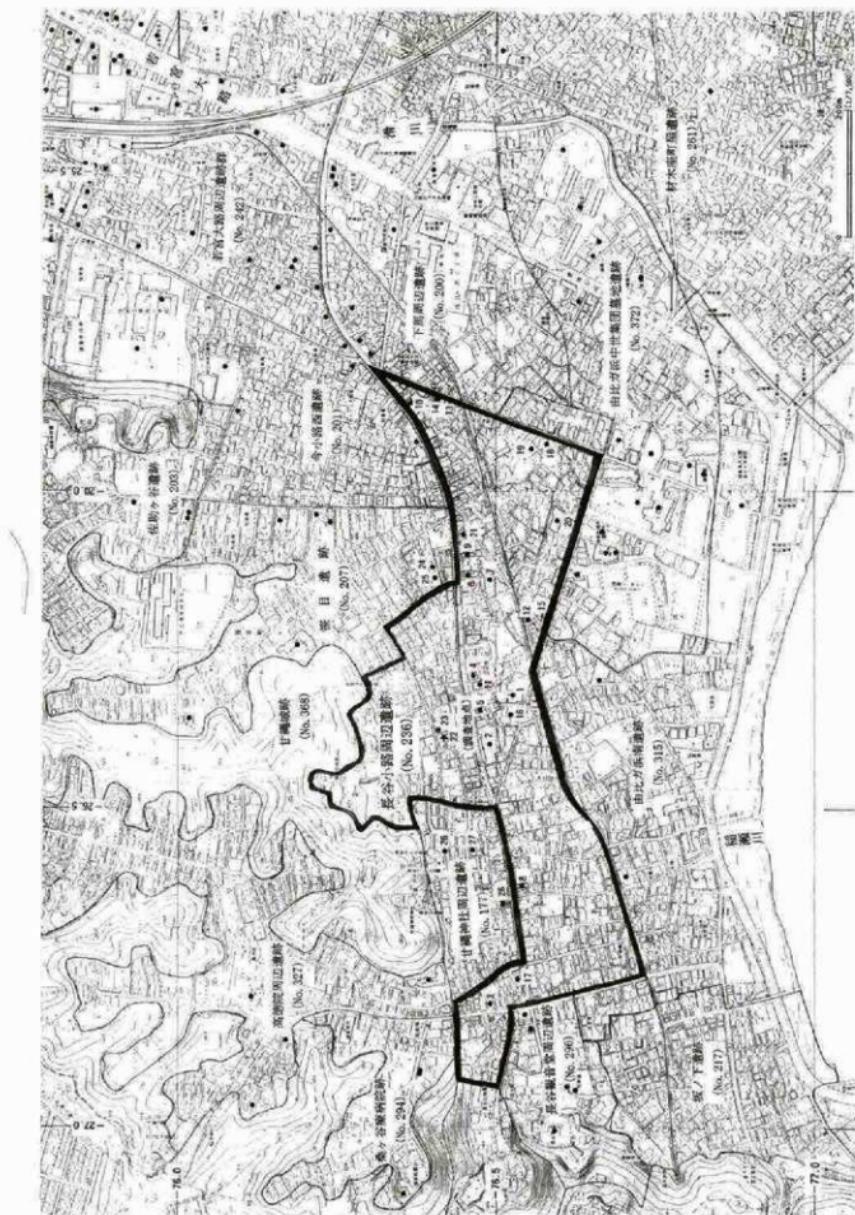


図1 長谷小路周辺遺跡の範囲と調査地点

### 【引用・参考文献】

- 高柳光寿「鎌倉市史 総説編」1959年 吉川弘文館  
高柳光寿・貫遂人他「鎌倉市史 社寺編」1959年 吉川弘文館  
貫遂人・川副武嵐「鎌倉廢寺事典」1980年 有斐堂  
白井永二「鎌倉事典」1976年 東京堂出版  
「吾妻鏡」「新訂増補国史大系(普及版)」1932年 吉川弘文館

### 【調査地点・報告書】

長谷小路周辺遺跡

- 地点1. 由比ヶ浜三丁目 1978-79年調査。未報告。
- 地点2. 由比ヶ浜三丁目202番2地点 1984-85年調査。「長谷小路南遺跡 鎌倉市由比ヶ浜三丁目202番2外所在遺跡の発掘調査報告書」1992年2月 長谷小路南遺跡発掘調査団
- 地点3. 長谷一丁目284番1地点 1987年調査。「長谷小路周辺遺跡(長谷一丁目284番1地点)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4 昭和62年度発掘調査報告] 1988年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点4. 由比ヶ浜三丁目194番25地点 1987年調査。「長谷小路周辺遺跡(由比ヶ浜三丁目194番25他地点)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告] 1989年3月 鎌倉市教育委員会  
「由比ヶ浜三丁目194番25外遺跡調査報告 長谷小路周辺遺跡群内、秋山ビル建設に伴う緊急発掘調査」1990年3月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点5. 由比ヶ浜三丁目199番1地点 1987年調査。「由比ヶ浜三丁目199番1地点遺跡調査報告 長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査」1990年7月 由比ヶ浜三丁目199番1地点所在遺跡発掘調査団
- 地点6. 由比ヶ浜三丁目258番8地点 1987-88年調査。「長谷小路周辺遺跡(由比ヶ浜三丁目258番8)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告] 1990年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点7. 由比ヶ浜三丁目258番1地点 1987-88年調査。「長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目258番1地点」1995年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点8. 長谷二丁目252番1地点 1988年調査。「長谷小路周辺遺跡(No.236)(長谷二丁目252番1地点)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告] 1991年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点9. 由比ヶ浜三丁目 1988年調査。未報告。
- 地点10. 由比ヶ浜三丁目223番11地点 1989年調査。未報告。
- 地点11. 由比ヶ浜三丁目194番24地点 1990年調査。「長谷小路周辺遺跡(No.236)(由比ヶ浜三丁目194番24地点)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告] 1991年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点12. 由比ヶ浜三丁目194番40地点 1990-91年調査。「長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 由比ヶ浜三丁目194番40地点」1997年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点13. 由比ヶ浜三丁目228-229番地点 1991年調査。「長谷小路周辺遺跡(由比ヶ浜三丁目229番外)(No.236)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告(第2分冊)] 1993年3月 鎌倉市教育委員会  
「長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目228-229番外(No.236) 中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査」1994年7月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点14. 由比ヶ浜三丁目228番2地点 1996年調査。「由比ヶ浜三丁目228番2の一部外地点」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告(第2分冊)] 1998年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点15. 由比ヶ浜三丁目1175番2地点 1993年調査。「長谷小路周辺遺跡(No.236)(由比ヶ浜三丁目1175番2外地点)」[鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 平成5年度発掘調査報告(第2分冊)] 1994年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点16. 由比ヶ浜三丁目2番200地点 1995年調査。「長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一由比ヶ浜三丁目2番200地点(No.236)」1997年9月 長谷小路周辺遺跡群発掘調査団
- 地点17. 長谷一丁目33番3地点 1998年調査。「長谷小路周辺遺跡(No.236) 長谷一丁目33番3外地点」[鎌倉市埋蔵

- 文化財緊急調査報告書15 平成10年度発掘調査報告(第2分冊) 1999年3月 鎌倉市教育委員会  
「長谷小路周辺遺跡13 長谷1-33-3地点発掘調査報告書」 1998年8月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点18. 由比ガ浜三丁目1262番2地点 1998年調査。未報告。
- 地点19. 由比ガ浜三丁目1262番6地点 1999年調査。 「長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 一鎌倉市由比ガ浜三丁目1262番6外地点(No.236)一」 2000年6月 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点20. 由比ガ浜三丁目1173番3地点 1999年調査。 「鎌倉遺跡調査会調査報告第21集 長谷小路周辺遺跡 第20地点発掘調査報告一」 2001年3月 鎌倉市長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 地点21. 由比ガ浜三丁目254番15地点 1999年調査。 「長谷小路周辺遺跡(No.236) 由比ガ浜三丁目254番15外2筆地点」 [鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第1分冊)] 2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点22. 長谷一丁目205番12地点 2000年調査。 本報文調査地点。
- 地点23. 長谷一丁目199番12-30地点 2001年調査。 未報告。

#### 笹目遺跡

- 地点24. 笹目町286番1外地点 1999年調査。 「笹目遺跡(No.207) 笹目町286番1外地点」 [鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)] 2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点25. 笹目町285番1外地点 1999年調査。 「笹目遺跡(No.207) 笹目町286番1外地点」 [鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告(第2分冊)] 2001年3月 鎌倉市教育委員会

#### 甘穂神社周辺遺跡

- 地点26. 長谷一丁目227番地点 1978年調査。 「伝安達泰盛邸跡」 [鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I] 1983年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点27. 長谷一丁目236番1地点 1990-91年調査。 未報告。
- 地点28. 長谷一丁目271番10地点 1992-93年調査。 「甘穂神社遺跡群発掘調査報告書 鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う緊急調査報告書 鎌倉市長谷一丁目271番10」 1995年7月 鎌倉市教育委員会

註

- ・調査地点及び刊行報告書は2001年9月末日現在。未報告の地点は各調査担当者のご教示による。
- ・調査地点No.は長谷小路周辺遺跡と甘穂神社周辺遺跡は全調査地点、笹目遺跡は報文中で触れたものを各遺跡ごとに調査年順に付している。何れも渡邊美佐子・汐見一夫協力の基準者調べ。

## 第2章 調査の概要

### 1. 調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用住宅建設の事前相談を受け、確認調査と諸協議を経て実施された。調査に伴う残土を敷地内で処理する必要から調査区は南北に二分し、北半をI区、南半をII区とした。又、東西の隣接する敷地から安全な後退距離を確保した為、調査対象面積はI・II区併せて約31.5m<sup>2</sup>である。

確認調査の結果から現地表下約100cmまでの近世以降の堆積土を重機に依って除去後に、海拔7.5m前後の中世砂層上面で遺構確認を行った。確認調査の結果から本地点の堆積土は砂層であり、下層からは湧水が予想される為、調査区壁の土留めを業者の協力を得て調査員と作業員で行った。

調査の結果、中世期の遺構は、土壙23基、ピット16口等、かわらけ他多量の出土遺物を、中世以前は遺構は把えられなかったが数点の遺物を発見した。記録保存等調査に係わる作業終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と器材等を撤収し調査終了とした。

### 2. 調査の方法(図2)

調査に際し、付近3級基準点No.53124(X:-76 406.065 Y:-26 383.051 海抜9.81m)及び4級基準点D217(X:-76 867.555 Y:-25 396.874)とD218(X:-76 906.562 Y:-25 461.652)を基に、光波測定器を用いて敷地を囲むグリッド方眼を調査範囲の形状に合わせて設定した。図2にはグリッド配置図を示した。調査区内グリッドは2m方眼とし、南西隅をA-0として東西方向に算用数字を、南北方向にアルファベットを付した。国土座標値はグリッド杭C-0(X:-76 407.100 Y:-26 393.050)とC-4(X:-76 414.400 Y:-26 393.050)の値を机上の計算で求めている。

(沙見)

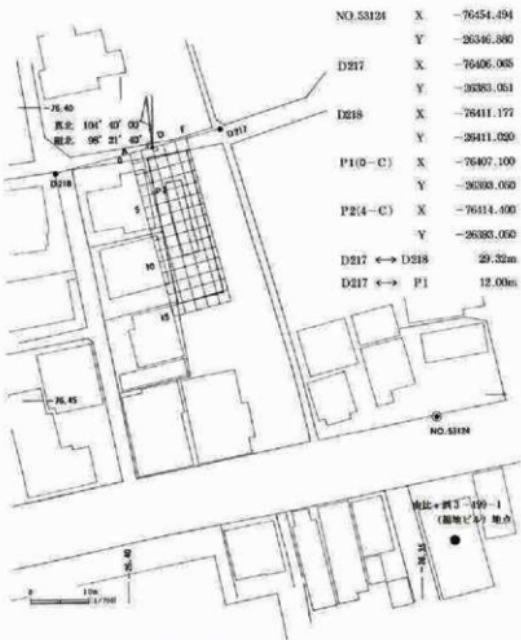


図2 國土座標上の位置とグリッド配置

### 3. 堆積土層(図3)

図3は調査区西壁及び北壁の堆積土層を示した。西壁は擾乱の関係でI区、II区通しての堆積土層の表現が不可能であったためII区(7~10グリッド)は、試掘・遺構等の堆積土層図を合成した。調査時には上層から順に3層を1面、11~12層を2面、24層上面を3面としたが、各面で確認できた遺構は11~12層の2面に帰属することから本報告では中世生活面を1枚としている。本調査地点の現況の地表面レ

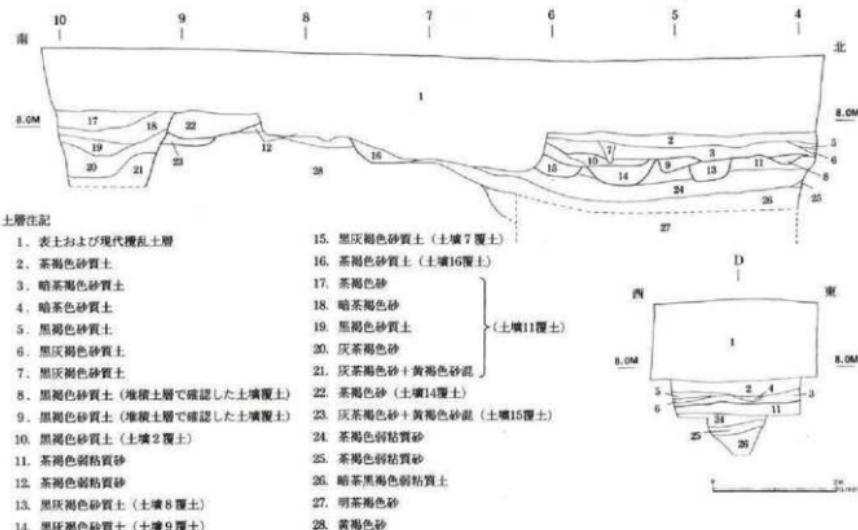


図3 堆積土層

ベルは北側で海拔9.3m、南側で海拔9.0mを測る。

1層は表土擾乱層。本調査地点において深いところでは現地表下約180cm下にまで達する。

2層は茶褐色砂質土層。近世陶器、ガラス、土丹、炭化物、かわらけ片等を含む近世遺物包含層。

3層は暗茶褐色砂質土層。土丹粒・土器粒・炭化物を含む中世遺物包含層。

11層は茶褐色弱粘質砂層。粘性はあるもの非常にしまりがよく、夾雜物はあまり含まない。II区で検出した12層と同一土層と考えられ、中世第1面とした。海拔は北側で7.4m、南側で8.1m前後を測り、南から北へと傾斜している。

28層は黄褐色砂層。本調査地点周辺では中世基盤層として把えられる土層で、無遺物層である。海岸砂丘からの飛砂による自然堆積と思われ、6～7グリッドを境に急激に南から北へと落ち込んでいる。

この落ち込みに堆積するのが24層～27層である。24層より下層の堆積をトレンチ調査により確認した結果、24・25層は茶褐色弱粘質砂層、26層は暗茶黑褐色弱粘質土層で、これらは湿地性の堆積土と考えられる。遺物は中世と古代が混在している。しかし長谷小路周辺遺跡の他調査地点で確認できるチョコレート色と言われる黒褐色弱粘質砂層とは異なり、「水辺に住む陸生の小虫の穴」と指摘されている小孔も見当たらなかった。

トレンチ最下層である27層の明茶褐色砂層は湧水による崩落のため全容は不明瞭であるが、古代遺物1点のみが出土している。このことから27層より下位に黒褐色弱粘質砂、あるいは古代層の存在の可能性も否定できない。

(田畠)

### 第3章 遺構と遺物

I-II区の境である調査区中央6~7グリッド付近で中世基盤層と考えられる黄褐色砂が急激に落ち込んでいる。落ち込みには砂丘の関係で湿地状の環境下と思われる層が重なり合っている。その上面の夾雜物をあまり含まないしまりのよい茶褐色弱粘質砂を中世の生活面と把えた。現地表から北側1.6m下(海拔7.4m)、南側1.2m下(海拔8.1m)と南から北へと傾斜している。北側I区は、ほぼ水平に40cm前後堆積しているが出土遺物は非常に少ない。南側II区では浜地的な様相を呈し面的な遺構の形成は成り立たないため、この面を構成する茶褐色弱粘質砂はわずかに残存するのみで、遺構全掘状況は中世基盤層である黄褐色砂が広がる。発見した遺構は土壌23基、ピット16口である。このうち実測可能な遺物が出土した遺構は個別に提示している。

また、個々の遺物は瀬戸・山茶碗に関しては藤澤(1994・1997)、常滑に関しては中野(1994)、火鉢に関しては河野(1993)を参考にしている。

#### 土壌2(図5)

調査区北側の5~6-Dグリッドに位置する。北側はピット9に切られ、西側は調査区外に広がる。平面は長楕円を呈し、長軸260cm、短軸は100cm以上、確認面からの深さ20cm(海拔7.2m)前後を測る。覆土は土丹・土器粒・炭化物が混じる黒褐色砂質土。南北軸方位はN-16°-Eを示す。

#### 出土遺物

1~3は小型系切り底のかわらけ。底径口径比が小さい器高の低い皿状を呈し、器壁はやや外反する。器表はいずれも橙色を呈する弱粉質土。2・3は表面剥離している。

4・5は常滑窯製品。4は片口鉢I類の底部片。胎土は砂粒子・白色小石粒・長石を含み、粘性に欠ける。器表・胎土共に灰褐色を

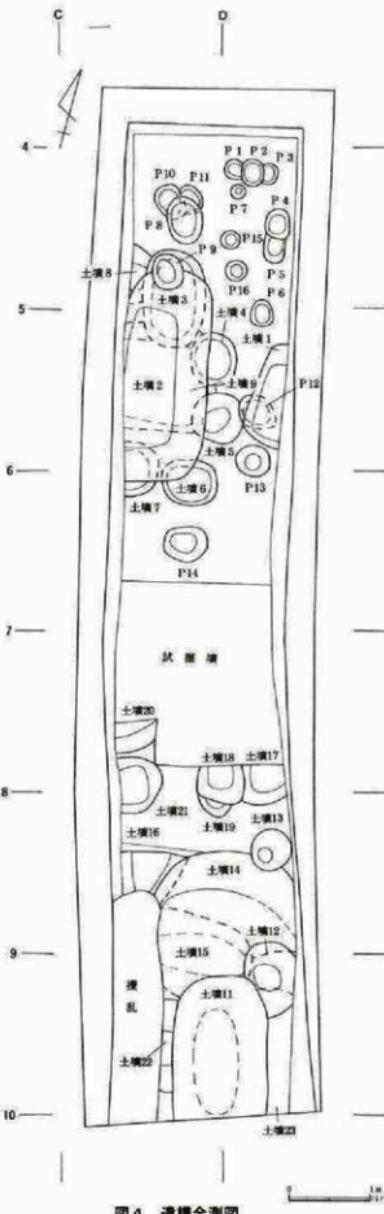


図4 遺構全測図

呈する。内面は使用により摩耗している。第6型式にあたるかと思われる。5は発肩部片の拓影。格子文の押印が捺される。

6は鉄製品、掛金の受け。棒状の鉄製品の先端を折り曲げて接続させ、受け穴の環状部分をつくる。  
7は銅錢。北宋時代の天聖元寶。初鑄年1023年の楷書。

#### ピット14(図5)

調査区北側の6～7-Dグリッドに位置する。上場径50cm前後の不整円形を呈し、確認面からの深さ15cm(海拔7.0m)前後を測る。覆土は土丹粒・土器粒・炭化物が混じる黒灰褐色砂質土。南北軸方位はN -19° -E。

#### 出土遺物

8～9は北宋時代の銅錢。8は景祐元寶で初鑄年1034年の楷書。9は皇宋通寶で初鑄年1039年の楷書。

#### 土壤3(図5)

調査区北側の5-Dグリッドに位置する。長軸120cm、短軸75cmの長楕円形を呈する。南側の上場は土壤2で失われているが、確認面からの深さは25cm(海拔6.95m)前後を測る。覆土は土丹粒・土器粒・炭化物が混じる黒灰褐色砂質土。南北軸方位はN -23° -Eを示す。

#### 出土遺物

10は北宋時代の銅錢。元豐通寶で初鑄年1076年の篆書。

#### 土壤10(図6)

表土掘削の際に上場を除去されてしまい、図示した範囲は推定で捉えた。調査区北側の9～10-D～Eグリッド内に位置し、遺物のほとんどが調査区東壁より出土していることから、主に調査区外に広がると思われる。

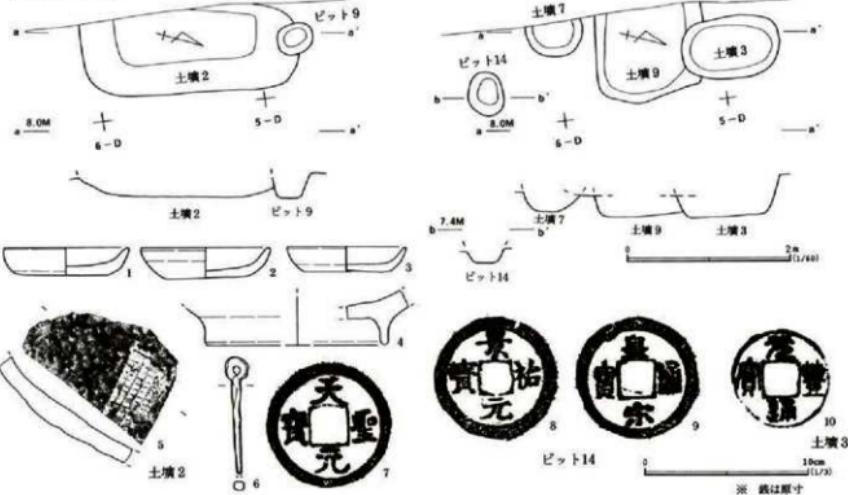


図5 土壌2・3、ピット14と出土遺物

### 出土遺物

1～14は糸切り底のかわらけ。1は内折れかわらけ。赤褐色を呈する弱粉質土。2～13は小型。2～8は器壁がやや薄いものも混じるが、器高の低い皿状を呈する。胎土は概ね肌色を呈する弱粉質土。9～13は器壁が薄い碗型を呈し、特に12・13は精良胎土の薄手丸深型に近い。胎土は赤褐色ないし橙色を呈する粉質土。14は大型で体部外面に稜を持たず、内湾する。胎土は肌色を呈する弱粉質土。

15は常滑窯斐桐部片の拓影。格子文の押印が捺される。

16は土器質浅鉢型火鉢。胎土は砂粒子を多く含み、やや軟質。器表は肌色、胎芯は灰黒色を呈する。内面は横～縦方向の細かいナデ、外面は口縁下まで横ナデ。胸部は表面がやや剥落しているものの指頭痕は顕著に残る。口縁下の穿孔は貫通しない。IB類の製品。

17は鉄釘。

### 土壤11(図6・7)

調査区北側の9～10-Dグリッドに位置する。南側は調査区外にひろがり、長軸175cm以上、短軸115cmの長楕円形を呈する。湧水のために完掘は不可能であったが、深さは確認できる範囲では125cm(海拔8.35m)以上を測る。南北軸方位はN-16°-Eを示す。出土遺物のほとんどをかわらけが占めており、図1-地点17(長谷一丁目33番3地点)で報告されている多量のかわらけが廃棄された土壤と同じ性格のものかと思われる。調査の際には、堆積土層の変化で上層・中層・下層と出土遺物を分類して採り上げたが(表1参照)、層位による年代にはほとんど差がなかったため土壤11からの出土遺物として図示している。

### 出土遺物

18～20は内折れかわらけで、橙色を呈する弱粉質土。21～43は小型。21～37は器高の低い皿状を呈し、体部外面に稜を持ち、やや内湾するものや直線的に開くものなどが混じる。胎土は概ね肌色ないし淡茶色を呈する弱粉質土。38～43は器壁が薄く碗型を呈する。なかには直線的に開くものや精良胎土の薄手丸深型に近いものも混じる。胎土は赤褐色ないし橙色を呈する粉質土。39は灯明皿として使用。44～47は中型。器壁は薄く、橙色ないし暗橙色を呈する粉質土。46以外は灯明皿として使用。48～60は大型。48～56体部外面に稜を持ち、やや内湾するものや直線的にひろがるものが混じる。概ね肌色を呈する弱粉質土。57～60は薄手丸深型で赤褐色ないし橙色を呈する粉質土。55は灯明皿として使用。61は復元径16.4cmの超大型品で、稜を持たず内湾する。胎土は橙色を呈する粉質土。

62～64は船載陶磁器諸製品。62は龍泉窯系青磁蓮弁文瓶の底部。黒色粒子を含んだ粘性の欠ける素地で焼成温度が低く肌色を呈する。釉調は不透明な茶色味がかかった青緑色で、高台脇まで掛けられる。13世紀中～14世紀前の製品。63は龍泉窯系青磁蓮弁文瓶の口縁部片。素地はほとんど混ざりのない粘性のある緻密な灰白色、釉調は暗緑色を呈する。13世紀中～14世紀前の製品。64は龍泉窯系青磁蓮弁文鉢の底部。素地は黒色粒子を含んだ粘性のある緻密な肌色。釉調は不透明な暗灰緑色を呈し、高台疊付を除いた外底面まで掛けられる。13世紀中～14世紀前の製品。

65～66は瀬戸窯諸製品。65は灰釉折縁深皿、胎土は粘性の欠けた淡黄白色土。淡灰緑色の釉を刷毛塗りで薄く施し、内面は二次焼成を受ける。中II～III期の製品。66は灰釉卸皿。胎土は粘性にやや欠けた淡黄味灰白色土で、施釉は薄い刷毛塗り。二次焼成を受けて黄土色に変色している。外底面はヘラ切り後、ヘラ削りを施す。卸目は内底面に設けた円周におさめられており、同様のものは北条泰時・時頼邸跡(雪ノ下一丁目371番-1地点)より出土している。前II期の製品。67は北部系の東濃型山茶碗。黒色砂粒子と白色細石を含んだ粘性のある緻密な白色土。第7型式の製品。

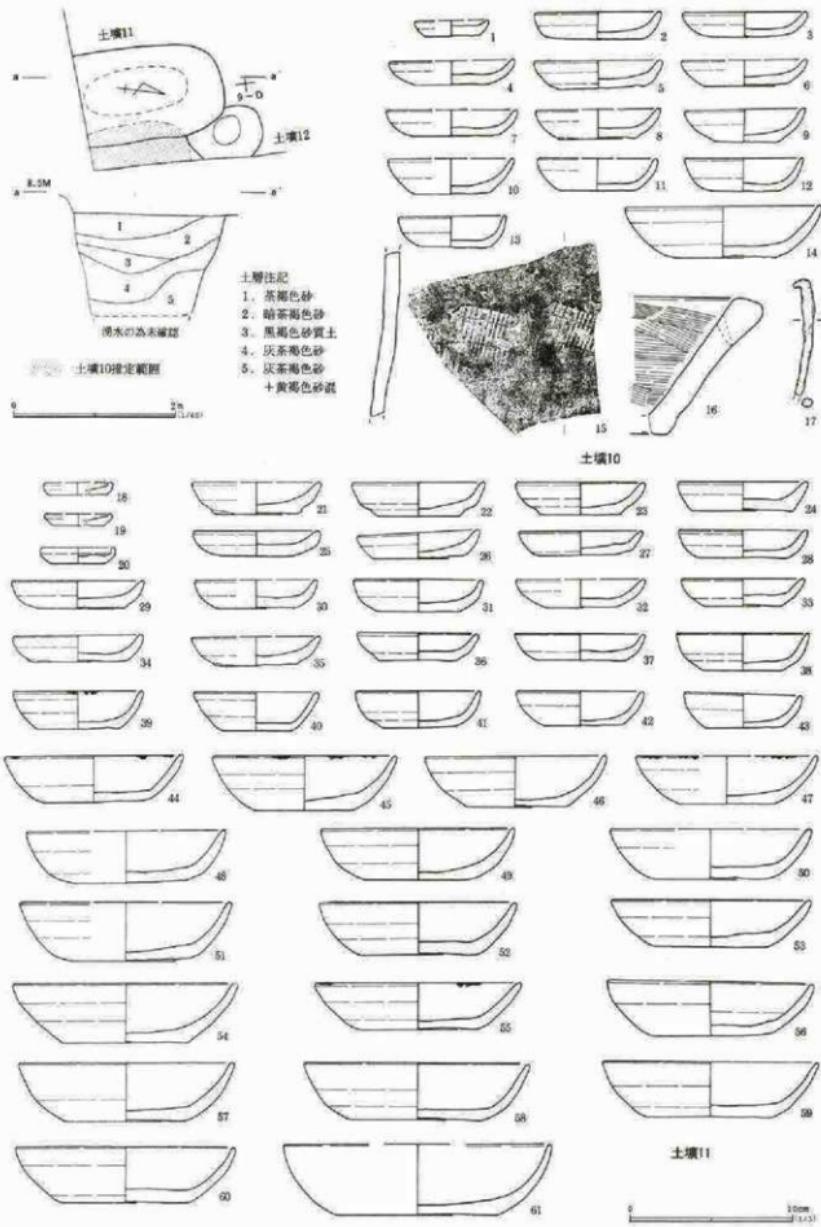


図6 土壌10・11と出土遺物(1)

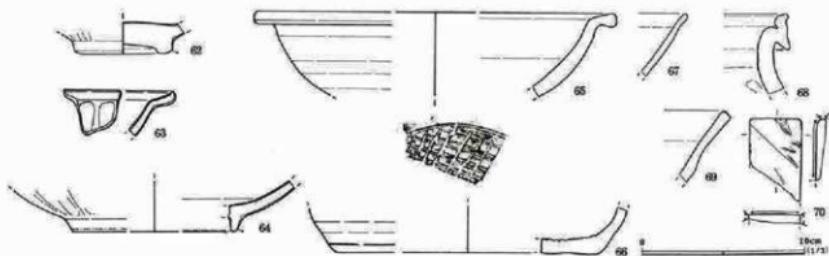


図7 土壌11出土遺物(2)

68～69は常滑窯諸製品。68は甕口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。胎土は白色小石粒・黒色砂粒子を多く含む灰茶色土、器表は茶褐色を呈する。口縁部内面には降灰がかかる。第6a～第6b型式の製品。69は片口鉢II類。胎土は砂粒子を多く含む黒灰色土。器表は暗茶色を呈する。

70は鳴滝産の仕上砥。裏面は剥離、両側面と小口は生産地加工痕が遺存する。

#### 土壤14(図8)

調査区南側の9-Dグリッドに位置する。土壤15上面を切り、北側は土壤11に切られ、東西は調査区外に広がる。正確な形状は不明だが、恐らく梢円を呈すると思われる。確認できる範囲の規模としては長軸150cm以上、短軸170cm以上、確認面からの深さは45cm(海拔7.8m)前後を測る。覆土は土丹粒・土器粒を含む茶褐色砂。南北軸方位はN-8°-Eを示す。

#### 出土遺物

1～5は小型、6は大型系切り底のかわらけ。1～4は体部外面に稜をもち、ゆっくり開きながら立ち上がるものと、やや内湾するものとが混じる。5・6は他と比べ器高が高く、側面觀碗型を呈する。1と5が橙色を呈する他は、概ね肌色ないし暗肌色の弱粉質土。

7は龍泉窯系青磁鑄連弁文碗の口縁部片。素地は黒色粒子を含むやや粘性の欠ける灰白色土、釉調は不透明な灰味青緑色を呈する。13世紀中～14世紀前の製品。8は青白磁瓶子の蓋。素地は黒色砂粒を含む粘性の欠けた淡灰色。釉調は不透明な灰白色で外面の口部脇まで掛けられる。13世紀中～後半の製品。

9は瀬戸窯折縁深皿の底部片。胎土は粘性にやや欠ける淡黄味灰白色土。釉調は淡灰緑色を刷毛塗りで薄く施している。内底部に沈線が施され、トチン痕も残る。中II期の製品。

10～11は常滑窯諸製品。10は甕胴部片の拓影。格子文の押印が捺される。11は片口鉢II類。胎土は砂粒子・白色粒を多く含む黒灰色土。器表は外面が暗橙色、内面が茶褐色を呈する。体部外面は木口状工具による縱方向の調整。内面はナデの後に指頭で調整をするが、内面下位は磨耗が激しいため指頭痕不明瞭。第7～第8型式の製品。

12は土器質浅鉢型火鉢。内面は横ナデ、外面体部指頭痕が施される。胎土は黒色砂粒子を含み、硬くしまる。口縁下に穿孔があるが、貫通しない。口縁内面に火熱を受けた痕が残る。IC類の製品。

13はかわらけ質の蓋。蓋のつまみの周囲の磨耗が激しい。

#### 土壤15(図8)

調査区南側の9-Dグリッドに位置する。東西南北を構造や機械的に切られるため、発見の段階では下層のみ確認できた。正確な形状は不明だが、恐らく長梢円を呈すると思われる。確認できる範囲の規模

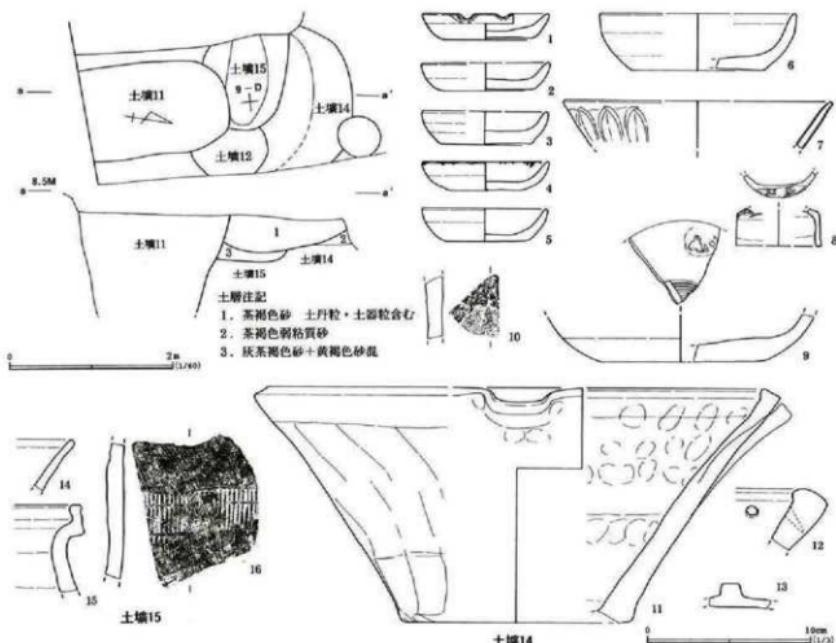


図8 土壌14・15と出土遺物

としては長軸110cm以上、短軸100cm、確認面からの深さは60cm(海拔7.7m)前後を測る。覆土は灰茶褐色砂に黄褐色砂が混じる。南北軸方位はN-4°-Eを示す。

#### 出土遺物

14は南部系の尾張型(常滑窯)山茶碗。胎土は黒色砂粒子と白色細石を含み、粘性の欠ける灰色土。

15~16は常滑窯諸製品。15は甕口縁部片。胎土は黒色・白色粒子を含む暗灰色土、器表は黒灰色を呈する。内面口縁部と外面に降灰がかかる。第6a型式の製品。16は甕腔部片の拓影。格子文の押印が捺される。

#### 土壌16(図9)

調査区南側の8~9-Dグリッドに位置する。土壌14や擾乱等に切られ、さらに調査区外にひろがるため正確な形状は不明。確認できる範囲の規模としては長軸70cm以上、短軸50cm以上、確認面からの深さは40cm(海拔7.7m)前後を測る。覆土は茶褐色砂質土。南北軸方位はN-9°-Eを示す。

#### 出土遺物

1は小型、2は大型の糸切り底のかわらけ。1は器高低く、体部外面に稜が内溝する。胎土は暗橙色の弱粉質土。2は口縁下に稜をもち、比較的直線的に立ち上がる。胎土は暗赤褐色の弱粉質土を呈し、内面剥離する。

### 土壤23(図9)

調査区南側の9~10-Dグリッドに位置し、南側の遺構群の中では一番古いと思われる。西側は土壤11に切られ、東側・南側は調査区外にひろがるため正確な形状は不明。確認できる範囲の規模としては、長軸200cm以上、短軸80cm以上、確認面からの深さは70cm(海拔6.95m)前後を測る。南北軸方位は平面形を確認できないため不明。

#### 出土遺物

3は小型糸切り底のかわらけ。体部外面に稜をもち、やや外反する。胎土は肌色の弱粉質土。

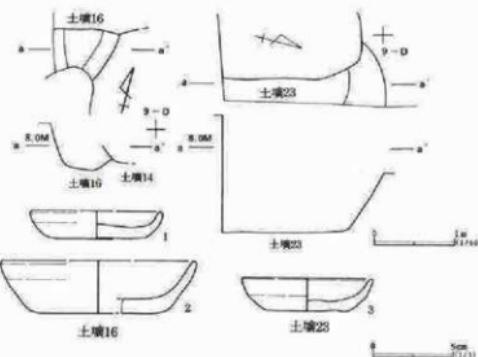


図9 土壌16・23と出土遺物

#### 遺構外出土遺物(図10)

1は大型糸切り底のかわらけ。体部外面に稜をもち、やや屈曲しながら内湾する。胎土は硬くしまる肌色の弱粉質土。

2は白磁口兀皿。接合は不可能であったが、復元すると器高3.5cm程となる。素地は黒色砂粒子を若干含む灰白色緻密土。釉は灰緑色を呈する。13世紀中~14世紀前の製品。

3は瀬戸窯小型の壺類。胎土は黒色砂粒子を若干含む粘性のある緻密な淡黄味灰白色土。釉調は淡灰緑色を漬け掛けする。中期の製品。

4は常滑窯甕口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。胎土は白色粒・黒色砂粒子を多く含む淡茶色土、器表は茶褐色を呈する。外面降灰による緑色の自然釉が厚く掛かる。第6a型式の製品。5は常滑窯甕胴部片の拓影。格子文の押印が捺される。6は常滑窯口鉢I類。砂粒子・白色小石粒を含む粘性のある胎土で、器表と共に淡茶色を呈する。外面胴下部削り痕が強く残る。第6型式の製品。

7は北宋時時代の銅錢、至道元寶で初鋤年995年の楷書。

#### 中世包含層・表探・擾乱出土遺物(図11)

1~5は中世遺物包含層出土遺物。1~2は小型、3は中型の糸切り底のかわらけ。1は底径口径比が小さくて器壁が厚く、直線的に立ち上がる。胎土は橙色を呈する弱粉質土。2は体部外面に稜をもたず、直線的に開く。胎土は肌色を呈する弱粉質土で、部分的に表面剥離する。3は器壁の薄い、いわゆる薄手丸深を呈する。胎土は焼成良好な橙色の粉質土。

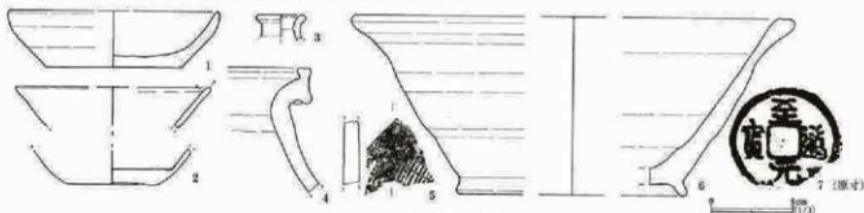


図10 遺構外出土遺物

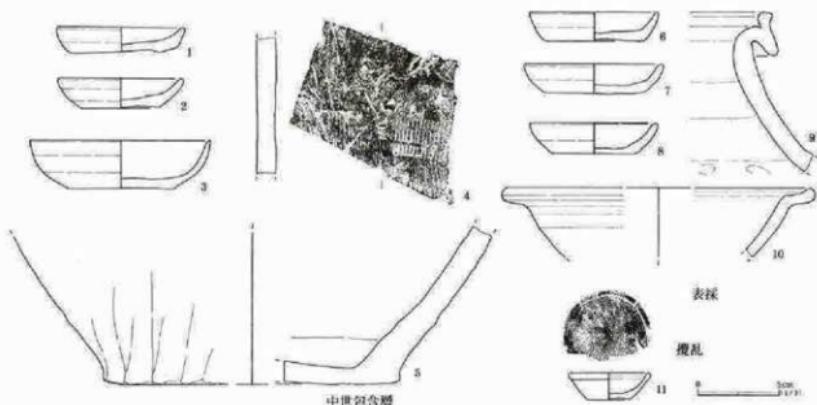


図11 中世包含層・表採・擾乱出土遺物

4・5は常滑窯の甕。4は甕胴部片の拓影。格子文の押印が捺される。5は甕底部。器表は茶褐色、胎土は長石・黒色粒子を含む灰褐色を呈する。体部外面下位は板ナデ(木口状工具)調整を施し、内面全体と外面一部に降灰が厚くかかる。

6～10は採集遺物。6～8は小型の糸切り底のかわらけ。6は底径口径比が小さく、直立的に立ち上がる。その他は体部外面に稜をもち、わずかに内湾する。いずれも胎土は肌色を呈する。

9は常滑窯甕口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。白色小石粒・黒色砂粒子を含む茶褐色の胎土、暗褐色の器表を呈し、内外面上部に降灰がかかる。第8型式の製品。

10は瀬戸窑折縁深皿。胎土は黒色砂粒子を若干含んだ粘性にやや欠ける淡灰白色土を呈する。灰緑色の釉を刷毛塗りし、口縁部は剥離する。内面は二次焼成を受ける。中II～III期の製品。

11は擾乱出土遺物。かわらけ質の摺鉢。細かい条線が何条も重なりあってい。

#### 中世以前出土遺物(図12)

1～3は壺。1は土師器の相模型。2も土師器の壺で口縁部に煤が付着する。3は産地不明の土師器で、底径に比べて器壁の広がりが大きい。底部は静止系切り。4は土師器台付甕の台部片。台部内面横位のハケ目、外縁位のヘラ削り。5は土師器相模型の長胴甕。全体的にナデ調整、胴部内面を中心として部分的にハケ目がみえる。6～7は須恵器の壺。共に底部は回転系切り無調整で、6は外底面に「×」のヘラ記号が見える。遺物の年代としては4のみ古墳時代、他は概ね8～9世紀代である。

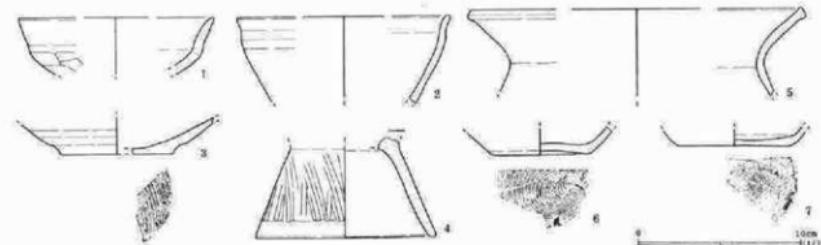


図12 中世以前出土遺物

## 第4章 調査成果

### ＜遺構＞

長谷小路周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No. 236)の調査は今回の本調査地点で22地点目となる。本調査地点南側に位置する由比ヶ浜とその背後に広がる砂丘地帯は、鎌倉時代において「前浜」と呼ばれ、西は稻瀬川、東は滑川を境としていたようである。今回の調査の中世基盤層である黄褐色砂の落ち込みの発見は「前浜」地域における砂丘の形成を考えるうえで大きな成果と思われる。過去の調査地点においては、現在の国道134号線沿いを境に南側地域に集中していたため、長谷小路周辺遺跡における東西方向の様相はある程度の理解は可能であったが、南北方向の関係は不明瞭であったことは否めない。そこで本調査地点を含めた22地点の調査をもとに長谷小路周辺遺跡の地形概念図を図13に示した。

この図を作成するにあたり、基本となったのが13世紀代の中世基盤層・黒褐色弱粘質砂層(ショコレート色)・中世以前の自然堆積層の3層の堆積である。東西方向においては国道134号線沿いの調査地点、南北方向においては本調査地点を含め、各調査地点の堆積土層と現況の道路の標高を比較した。その結果、中世基盤層の高低差は現況道路とほぼ同じであり、砂丘の形成は中世の段階において現在の様相がある程度確立していたのではないだろうか。南北方向においても道路に程近い地点15が一番高くなることから現況道路が砂丘の頂上で、本調査地点はその砂丘の裾野であったと思われる。そして本調査地点の北側には長楽寺谷やぐら群等のやぐらが存在する山がそびえるため、若干の山の稜線は変化していると思われるが、やぐらを形成した当時の地形を残しているといえる。

上本氏(2000)によれば古墳後期～奈良・平安においては4列の砂丘が存在し、砂丘間低地は飛砂や人為的埋立てによって縮小したとしている。本調査地点における中世基盤層の落ち込みは、背後の山の影響と砂丘の関係で砂丘間低地となったところに湿地状の堆積が積み重なったと考えられる。最近、本調査地点の隣である地点23において調査が行われた。中世基盤層の落ち込みは擾乱の影響で発見されなかつたが、土丹による地業がなされた生活面や東西方向の溝を発見している。溝の軸方向は、本調査地点においては4グリッド以北の調査区外にあたりこの溝の性格を把握することはできないが、土丹による地業など遺構の様相が異なることから土地利用に何らかの変化があったと思われる。今後、地点23の調査結果もふまえて改めて長谷小路周辺遺跡の地形と土地利用について考える必要があるといえる。

また、図1に示した範囲より東の現況地表面と中世基盤層からみた地理的環境については、本誌第1分冊所収「3. 下馬周辺遺跡 由比ヶ浜二丁目106番6、7地点」、同第2分冊所収「9. 今小路西遺跡 由比ヶ浜一丁目183番1地点」、同所収「3. 材木座町屋遺跡 材木座一丁目256番1地点」でも若干述べられている。

### ＜遺物＞

遺物の出土量に関しては、遺構の様相が異なるためかI区のほとんどが小破片であった。しかしII区では遺構内から大量のかわらけが出土している。表4の出土遺物破片数表をみてもわかるように、出土遺物の94%近くをかわらけが占めている。これらはおもに土壌IIからの出土で、表1には土壌IIから出土した遺物の破片数を堆積土層別に分類したものである。この土壌内においてはかわらけが出土遺物の98%近くを占めている。法量的には口径が12～14cmの大型、10～11cmの中型、6.5～8cm小型の3タイプの組み合わせで、器壁はやや厚手で体部外面に縫をもち、やや内湾するものや直線的にひろがるもの、または精良胎土に近い薄手丸深型の傾向をもつ。大型・中型・小型の3タイプの組み合わせの傾向は特

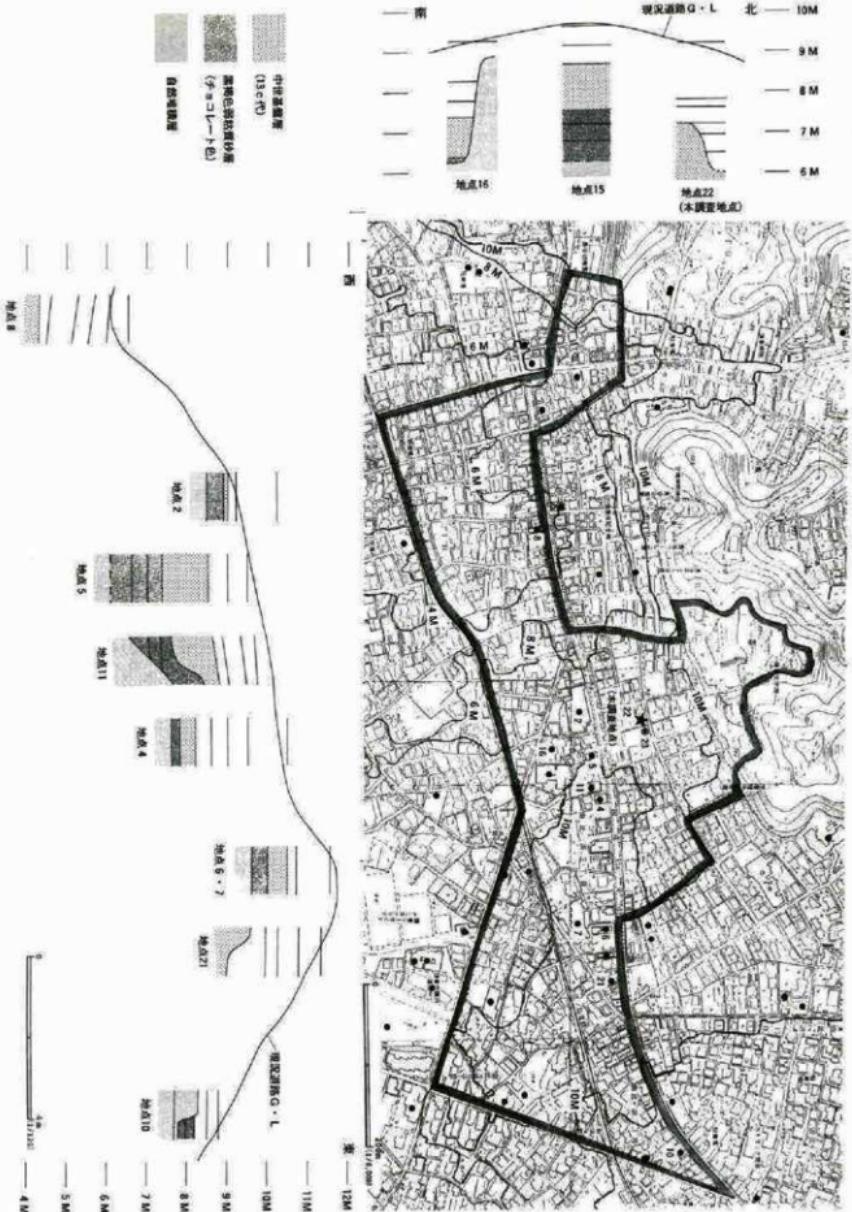


图13 長谷小路周辺遺跡地形概念図

表1 土壌11出土遺物破片数表

土層番号	かわらけ(系切り)					舶載陶磁器		国内産陶土器類	
	大型	中型	小型	超大型	その他	青磁	青白磁	瀬戸窯	常滑窯
上層①②	3,499	49	453	3	5	4	3	3	49
中層③	44	1	14						
下層④⑤	70		36						6
合計	3,613	50	503	3	5	4	3	3	55
割合	84.7%	1.2%	11.8%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	1.3%

土層番号	国内産陶土器類				鉄製品		石製品		自然遺物	合計
	焼前窯	山茶碗窯	火鉢	瓦	釘	砥石	鏡	鏡		
上層①②	1	3	7	1				2	5	4,087
中層③					2					61
下層④⑤			3			1				116
合計	1	3	10	1	2	1	2	5		4,261
割合	0.0%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%		100.0%

上層において顕著であり、大型が丸深化し、大口径化に伴うために中型が出現するのなら、超大型とした口径16.4cm(図6-61)のかわらけが出土することも違和感はない。また、かわらけ以外の遺物の出土も他の層に比べて多いことから、土壌10はもっと広範囲にわたって土壌11の上層に重複し、両土壌の遺物が混在している可能性も考えられる。上層において混在の可能性のある遺物を除けば、上層・中層・下層における顕著な時期的変化はみられず、概ね13世紀後葉～14世紀前葉と考えられる。

このような大量のかわらけが出土する遺構としては先述したように図1-1地点17(長谷一丁目33番3地点)において発見され、「検出状況・目的・性格を「廃棄」あるいは「埋納」・「埋没」であるのか、「舞宴」や「儀式」等の場において特殊な廃棄であるのか、日常のゴミを廃棄したのか」と多方面からの可能性を考察している。土壌11においては特に遺構の性格を示す出土遺物ではなく、大量のかわらけが出土したという事実のみである。しかし、明らかに他の土壌に比べその出土量は桁外れであることから特殊性を見出したいが、調査範囲が狭い上に、方形堅穴建築址等の遺構も発見されていないことから本調査地点周辺がどのような土地利用であったか不明なため、この土壌の性格も不明と言わざるを得ない。

土壌11を中心としたかわらけの年代を始め、瀬戸窯は後期のものは混じらず、常滑は若干第8型式に近い形態を有するものもみられるが概ね第6～第7型式である。しかし、これらの出土遺物はII区に集中し、I区では手捏ねかわらけは出土していないが、土壌11の出土遺物よりも先行する底径口径比が小さく器高の低い皿状タイプのかわらけがおもに出土しており、これらの結果をふまえて本調査地点の利用は13世紀中葉以降～14世紀前葉の年代が考えられる。またトレンチからは遺構の発見には至っていないが中世以前の遺物もみられる。これは本調査地点から国道をはさんだ長谷小路南遺跡(図1-2地点)等では中世以前の遺構も発見されていることから、その関連性も考えられる。

#### 【引用・参考文献】

- 藤澤良祐 「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1997年
- 「山茶碗研究と現状の課題」『研究紀要』第3輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1994年
- 中野晴久 「赤羽・中野一生涯における編年について」「中世常滑焼をとて」シンポジウム資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994年
- 河野寅知郎 「中世鎌倉火鉢考 一東国との関連において」『考古論叢神奈川』第2集 神奈川考古学会 1993年
- 宗臺秀明 「中世・14世紀かわらけの変遷」『考古論叢神奈川』第1集 神奈川考古学会 1992年
- 永井久美男 「日本出土銭鑄造」 1996年 1.兵庫県埋蔵文化財調査会
- 上本進二 「鎌倉・逗子の地形変遷史と遺跡形成」『東国歴史考古学研究所調査研究報告』第26集 神奈川県逗子市桃敷戸遺跡発掘調査報告書 2000年3月

表2 出土遺物法量表(1)

遺物名 No.	種別	計	測定値( ) - 残存部	算出 率	遺物名 No.	種別	計	測定値( ) - 残存部	算出 率			
図版 5 土壙 2	土器・器	口径: 7.6	底径: 5.4	器高: 1.7	図版 6 土壙 11	土器・器	口径: 7.8	底径: 5.2	器高: 2.0			
	土器・器	口径: 7.8	底径: 5.0	器高: 1.8		土器・器	口径: (7.7)	底径: 4.4	器高: 1.8			
	土器・器	口径: 7.2	底径: 5.2	器高: 1.5		土器・器	口径: 7.5	底径: 4.8	器高: 1.7			
	土器・器	底径: (11.0)				土器・器	口径: (7.7)	底径: 6.1	器高: 1.7			
	土器・器	文様: 格子文				土器・器	口径: (7.7)	底径: (5.2)	器高: 1.8			
図版 5 土壙 14	鐵製品	長さ: (7.1)	幅: (5.5)	厚さ: (5.0)		土器・器	口径: 7.4	底径: 5.0	器高: 1.7			
	銅鏡	初期 1023年	横書			土器・器	口径: 8.0	底径: 5.5	器高: 1.6			
	銅鏡	北宋 天聖元年	横書			土器・器	口径: 8.0	底径: 5.0	器高: 2.3			
	銅鏡	北宋 熙祐元年	横書			土器・器	口径: 8.0	底径: 5.0	器高: 2.3			
図版 5 土壙 3	銅鏡	初期 1039年	横書			土器・器	口径: 7.6	底径: 4.2	器高: 2.4			
	銅鏡	北宋 皇宋通寶	横書			土器・器	口径: 7.6	底径: 4.6	器高: 2.2			
図版 6 土壙 10	土器・器	口径: (4.5)	底径: (3.5)	器高: 1.0		土器・器	口径: 7.7	底径: 2.2	器高: 5.0			
	土器・器	口径: 7.5	底径: 5.4	器高: 1.7		土器・器	口径: 7.1	底径: 4.7	器高: 2.1			
	土器・器	口径: 7.4	底径: 4.3	器高: 1.6		土器・器	口径: 11.0	底径: 6.4	器高: 1.9			
	土器・器	口径: (7.5)	底径: 4.4	器高: 1.5		土器・器	口径: 11.2	底径: 6.0	器高: 3.4			
	土器・器	口径: 7.6	底径: 5.8	器高: 1.7		土器・器	口径: 11.0	底径: 6.1	器高: 3.2			
	土器・器	口径: (7.6)	底径: (5.2)	器高: 1.6		土器・器	口径: (10.9)	底径: (5.5)	器高: 3.0			
	土器・器	口径: (8.0)	底径: (5.2)	器高: 1.6		土器・器	口径: (12.1)	底径: (7.1)	器高: 3.3			
	土器・器	口径: (7.5)	底径: (4.6)	器高: 1.8		土器・器	口径: 11.8	底径: 6.8	器高: 3.2			
	土器・器	口径: 7.2	底径: 3.9	器高: 2.0		土器・器	口径: (12.1)	底径: (7.5)	器高: 3.1			
	土器・器	口径: (7.6)	底径: 4.6	器高: 2.2		土器・器	口径: (12.8)	底径: (7.5)	器高: 3.7			
	土器・器	口径: (7.1)	底径: (4.9)	器高: 2.0		土器・器	口径: 12.0	底径: 7.4	器高: 3.3			
	土器・器	口径: 7.2	底径: 4.2	器高: 2.1		土器・器	口径: 12.4	底径: 7.4	器高: 2.9			
	土器・器	口径: 6.5	底径: 4.3	器高: 1.9		土器・器	口径: 13.7	底径: 7.8	器高: 3.7			
	土器・器	口径: 11.9	底径: 6.4	器高: 3.2		土器・器	口径: 12.6	底径: 7.0	器高: 2.9			
	土器・器	文様: 格子文				土器・器	口径: 12.6	底径: 7.1	器高: 3.4			
図版 6 土壙 11	鐵製品	長さ: (7.2)	幅: (0.6)	厚さ: (0.5)		土器・器	口径: 13.2	底径: 7.4	器高: 3.6			
	土器・器	口径: (4.1)	底径: (3.6)	器高: 1.8		土器・器	口径: 13.8	底径: 7.8	器高: 2.5			
	土器・器	口径: (3.9)	底径: (3.2)	器高: 0.8		土器・器	口径: 13.2	底径: 7.6	器高: 3.4			
	土器・器	口径: 4.6	底径: 3.2	器高: 1.0		土器・器	口径: 13.4	底径: 7.6	器高: 3.5			
	土器・器	口径: (7.7)	底径: (5.3)	器高: 2.0		土器・器	口径: (15.4)	底径: 10.0	器高: 4.4			
	土器・器	口径: 8.1	底径: 5.2	器高: 2.1		土器・器	底径: 5.2					
	土器・器	口径: 7.8	底径: 5.0	器高: 2.0		土器・器	底径: (10.0)					
	土器・器	口径: 7.8	底径: 6.4	器高: 1.8		土器・器	口径: (21.8)	底径: (16.0)				
	土器・器	口径: 7.6	底径: 4.6	器高: 1.5		土器・器	口径: 13.2	底径: 7.8	器高: 2.5			
	土器・器	口径: 7.3	底径: 5.3	器高: 1.6		土器・器	口径: 13.4	底径: 7.6	器高: 3.5			
	土器・器	口径: 7.6	底径: 5.3	器高: 1.5		土器・器	口径: (15.4)	底径: 10.0	器高: 4.4			
	土器・器	口径: 7.9	底径: 5.4	器高: 2.2		土器・器	底径: 5.2					
	土器・器	口径: 8.0	底径: 5.6	器高: 1.8		土器・器	底径: (10.0)					
	土器・器	口径: (7.3)	底径: (4.6)	器高: 1.8		土器・器	口径: (21.8)	底径: (16.0)				
図版 7 土壙 11(2)	土器・器	底径: 5.2				土器・器	底径: 5.2					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					
	土器・器	底径: 5.0				土器・器	底径: 5.0					

表3 出土遺物法量表(2)

通構名 No.	遺物 種別	計			写真	回 周 道構名 No.	遺物 種別	計			写真
		単位: cm	(一) 原元積 ( )	(二) 現存積				単位: cm	(一) 原元積 ( )	(二) 現存積	
回8 土壤14	1 土 器 口徑 (7.5) 底径 5.8 高さ 1.5 ○					回10 道構外	4 常 滑				
	2 土 器 口徑 (7.7) 底径 5.8 高さ 1.8						5 常 滑 燒印文布影	文様: 格子文			
	3 土 器 口徑 (7.6) 底径 (5.6) 高さ 2.1						6 片口鉢 1 類	口徑 (27.2) 底径 (14.0) 高さ (11.0) ○			
	4 土 器 口徑 7.7 底径 4.3 高さ 1.8						7 初鉢 995年	北宋至道元寶	銘文		
	5 土 器 口徑 7.5 底径 5.0 高さ 2.1 ○						1 土 器 口徑 7.8 底径 5.6 高さ 1.6				
	6 土 器 口徑 (11.9) 底径 (8.1) 高さ 3.5 ○						2 土 器 口徑 7.6 底径 4.9 高さ 1.8				
	7 蓋 陶質青白釉	口徑 (16.4)					3 土 器 口徑 11.2 底径 6.4 高さ 3.0				
	8 中 国 青白釉划花瓶					回11 中包	4 常 滑 燒印文布影	文様: 格子文			
	9 灰陶折沿盤		底径 (9.9)		○		5 常 滑		底径 (18.4)		
	10 常 带 燒印文布影						6 土 器 口徑 7.9 底径 6.0 高さ 1.8				
	11 常 带 片口鉢 1 類	口徑 (30.4)	底径 (14.2)	高さ (14.5) ○			7 土 器 口徑 8.4 底径 6.2 高さ 1.8				
	12 土 器 茶葉紋						8 土 器 口徑 7.8 底径 5.1 高さ 1.9				
	13 土 製 品 かわらけ質蓋						9 常 滑				
	14 北部系東晉 茶葉紋						10 灰陶折沿盤	口徑 (18.8)			
回8 土壤15	15 常 滑					回11 中包	11 土 器 口徑 5.0 底径 2.6 高さ 1.7 ○				
	16 常 滑 燒印文布影						1 土 鏡 器	口徑 (12.0)			
							2 土 鏡 器	口徑 (13.0)			
回8 土壤16	1 土 器 口徑 (7.9) 底径 5.8 高さ 1.9						3 土 鏡 器	底径 5.8			
	2 土 器 口徑 (11.9) 底径 (8.2) 高さ 3.3						4 土 鏡 器	底径 11.0			
	3 土 器 口徑 8.0 底径 2.0 高さ 5.0 ○						5 土 鏡 器	口徑 (13.0)			
回9 土壤23	1 土 器 口徑 (12.8) 底径 8.4 高さ 3.5						6 銀 杯 器	口徑 6.0			
	2 白磁口元盤	口徑 (11.8) 底径 5.6			○		7 銀 杯 器	口徑 6.8			
	3 灰陶小壺口電子	口徑 2.6									
回10 道構外						回12 中以 前	1 土 鏡 器	口徑 (12.0)			
							2 土 鏡 器	口徑 (13.0)			
							3 土 鏡 器	底径 5.8			

表4 出土遺物破片数表

通構	遺物	かわらけ				船				載				陶				磁				器				國内產				陶土器類				火鉢	
		舟切り	青磁	白磁	青白磁	褐釉	物	漁	戸	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	火鉢	
表 採		34								1		1		13																					
機 亂		84																															3		
中世包含層		313	1							2		3		25		1		1																	
道構内		5,344	8	4	4					3		4		119		4		3													12				
道構外		163								1		2		29																					
トレンチ		5		1																															
破片数計		5,943	9	9	4					7		10		200		5		4												15					
%		93.5%	0.1%	0.1%	0.1%					0.1%		0.2%		3.1%		0.1%		0.1%											0.2%						

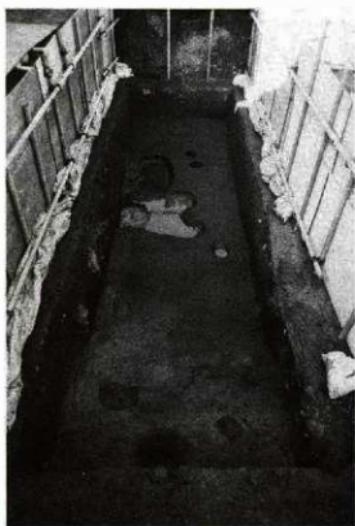
通構	遺物	瓦	金 属 製 品		石 製 品	自 然 遺 物	中 世 以 前	近 現 代	破 片 數 計	%	備 考
			釘	鋼 絲							
表 採			1						16	66	1.0%
機 亂			3		1				3	108	1.7%
中世包含層			1						2	349	5.5%
道構内		2	11	3	6	10	21	1	5,559	87.5%	
道構外		1	3	2	2	6	7	1	221	3.5%	
トレンチ								46		52	0.8%
破片数計		3	19	5	9	16	74	23	6,355	100.0%	
%		0.0%	0.3%	0.1%	0.1%	0.3%	1.2%	0.4%	100.0%		



▲ I区全景①（南から）



▲ I区全景②（南から）



▲ I区全景③（南から）



▲ II区全景（南から）

図版 2



▲ 北壁土層断面



▲ 西壁土層断面



▲ 西壁中央基盤層落ち込み



▲ 土壌11・14・15土層断面（北西から）

図版4



ほうじょう こ まちていあと  
北条小町邸跡 (No. 282)

雪ノ下一丁目400番 1 地点

## 例 言

1. 本報は「北条小町邸(№282)」内、雪ノ下一丁目400番1地点における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間 平成12年10月10日～同年11月30日  
調査面積 56m<sup>2</sup>
3. 調査体制  
担当者 馬瀬和雄  
調査員 鍛治屋勝二  
調査補助員 松原康子・土居裕治・遠藤啓介・沖元道(資料整理)  
調査協力者 奥山利平・杉浦永章・照井三喜・渡辺輝彦(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報作成分担  
造構図整理 馬瀬・鍛治屋・松原  
遺物実測 松原・土居・沖元  
同墨入れ 松原・土居  
同観察表 松原・沖元  
同集計表 沖元  
同写真撮影 鍛治屋・松原  
原稿執筆 馬瀬・鍛治屋・松原(担当箇所末尾に名を付す)  
編集馬瀬

## 目 次

例 言 .....	172
目 次 .....	173
第1章 調査地點概観 .....	175
1. 位置と地勢 .....	175
2. 歴史的環境 .....	175
第2章 調査の概略 .....	181
1. 調査にいたる経緯 .....	181
2. 方眼設定 .....	181
3. 調査経過 .....	181
第3章 遺構と遺物 .....	183
1. 層序と遺構の概要 .....	183
2. 中世 .....	184
3. 縄文時代晚期 .....	196
4. 採集遺物 .....	198
第4章 まとめと考察 .....	200
1. 縄文時代晚期 .....	200
2. 中世 .....	200

## 挿 図 目 次

図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡 .....	176	図9 側溝2出土遺物 .....	190
図2 遺跡付近変遷概念図 .....	178	図10 側溝3, 同出土遺物(1) .....	191
図3 調査区設定図 .....	182	図11 側溝3出土遺物(2) .....	192
図4 調査区北壁土層図 .....	183	図12 側溝3出土遺物(3) .....	193
図5 側溝1 .....	185	図13 縄文時代落込み .....	197
図6 側溝1部材 .....	186	図14 採集遺物 .....	199
図7 側溝1出土遺物 .....	187	図15 中世小町大路側溝変遷図 .....	201
図8 側溝2 .....	189	図16 近隣調査地点との対比 .....	202

## 表 目 次

表 1 側溝 1 出土遺物観察表	187	表 5 採集遺物観察表	199
表 2 側溝 2 出土遺物観察表	190	表 6 土師器皿技法別構成比	204
表 3 側溝 3 出土遺物観察表 (1)	194	表 7 出土遺物構成比 1 (大分類)	205
表 4 側溝 3 出土遺物観察表 (2)	195	表 8 出土遺物構成比 2 (中分類)	206

## 写 真 目 次

図版 1-1 調査地点鳥瞰	207	図版 6-1 繩文時代落込み深掘り状況	212
1-2 調査地点近景	207	6-2 同前	212
図版 2-1 中世面全景	208	6-3 同	
2-2 溝 3 北半部	208	切込み肩部分の土層断面	212
2-3 同前	208	6-4 火山灰層排除後の状況	212
図版 3-1 溝 1	209	6-5 火山灰層断面	212
3-2 同上	209	図版 7-1 北壁土層断面出土遺物	
3-3 同前 根太固定状況	209	(図 4)	213
図版 4-1 溝 2	210	7-2 側溝 1 出土遺物 (図 8)	213
4-2 同前 北半部部材出土状況	210	7-3 側溝 2 出土遺物 (図 10)	213
4-3 同前	210	7-4 側溝 3 出土遺物 1	
図版 5-1 溝北壁土層断面	211	(図 12・13)	213
5-2 同前 根太除去後	211	図版 8-1 側溝 3 出土遺物 2 (図 13)	214
5-3 同前 部材出土状況	211	8-2 採集遺物 (図 15)	214

# 第1章 調査地点概観

## 1. 位置と地勢

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにほぼ平行した東西2本の南北大路、および直交する何本かの東西大路と小路（「辻子」か）により区画される。市街地のほとんどの中には中世都市遺跡が存在するが、このうち若宮大路東側の鶴岡八幡宮前面（南）にある一辺約200mの方形区画が、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市No.282）として登録されている。この区画は西辻を若宮大路、北辻を横大路、東辻を小町大路に囲まれ、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正室のあった場所ともいわれるが（秋山1996・1997）、この点については後述する。

調査地点は横大路から約100m南下したこの場所の東辺中央部にあって、小町大路に臨む。方形区画の東側には鎌倉幕府終焉の地として知られる東勝寺跡があり、そこから下ってきた道が小町大路に突き当たる対面位置である。現在の地番は鎌倉市雪ノ下一丁目400番1。

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のようになる。鎌倉東辺の山中に源を発した滑川は、現在の淨明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷間を開拓したあと、大倉の辺から南に向きを変えて市内中心部の沖積平野を形成しつつ、相模湾に流れ込む。この間中流域から下流では東側の山裾を削り、右岸に河岸段丘が作られるが、調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。滑川までは約130m、現在の標高は前面の小町大路面で9.4m前後、中世期には、削平されて詳しいことは不明だが、ほぼ8.2～8.5m程度であったと推察される。現況で西の若宮大路よりほぼ80cm高い。

## 2. 歴史的環境

### 縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地は全体的に水面下であったと考えられる。次第に乾陸化する前期以後、二階堂や大倉の山裾で遺物が採集されるようになるが、全体にきわめて乏しい。上本進二によれば、当初鎌倉中心部の沖積平野中心部を流れていた古滑川が、現在の位置に近い東の山裾に流路を変えるのは縄文時代晚期以降である（上本2000）。

調査地点一帯で人の生活痕跡がみられるようになるのは弥生時代中期後半からである。この時期以降、大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成され（馬瀬1998・1999）、当地点付近でも中世層の中からしばしば中期後半～後期の土器が出土する。

古墳時代の集落は、周辺山稜部や海岸部・二階堂付近の平坦な微高地で発見されているが、当地点付近ではまだ例がない。地点24での花粉分析でイネ科のプラントオバールが析出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある。

### 律令期～平安時代後期

律令時代の鎌倉は、『相模國封戸租交易帳』に相模（模）国八郡のひとつとして現れる（『正倉院文書』正集十八『神奈川県史 資料編』1-58による）。現在の鎌倉市内中心部はおそらく当時の鎌倉郷にあたり、調査地点もこのうちに含まれていたとみられる。広範囲に集落が存在していたようで、市街地からの堅穴住居や掘立柱建物の検出例も漸増している。地点38では石造部材の駒尾が出土しており、

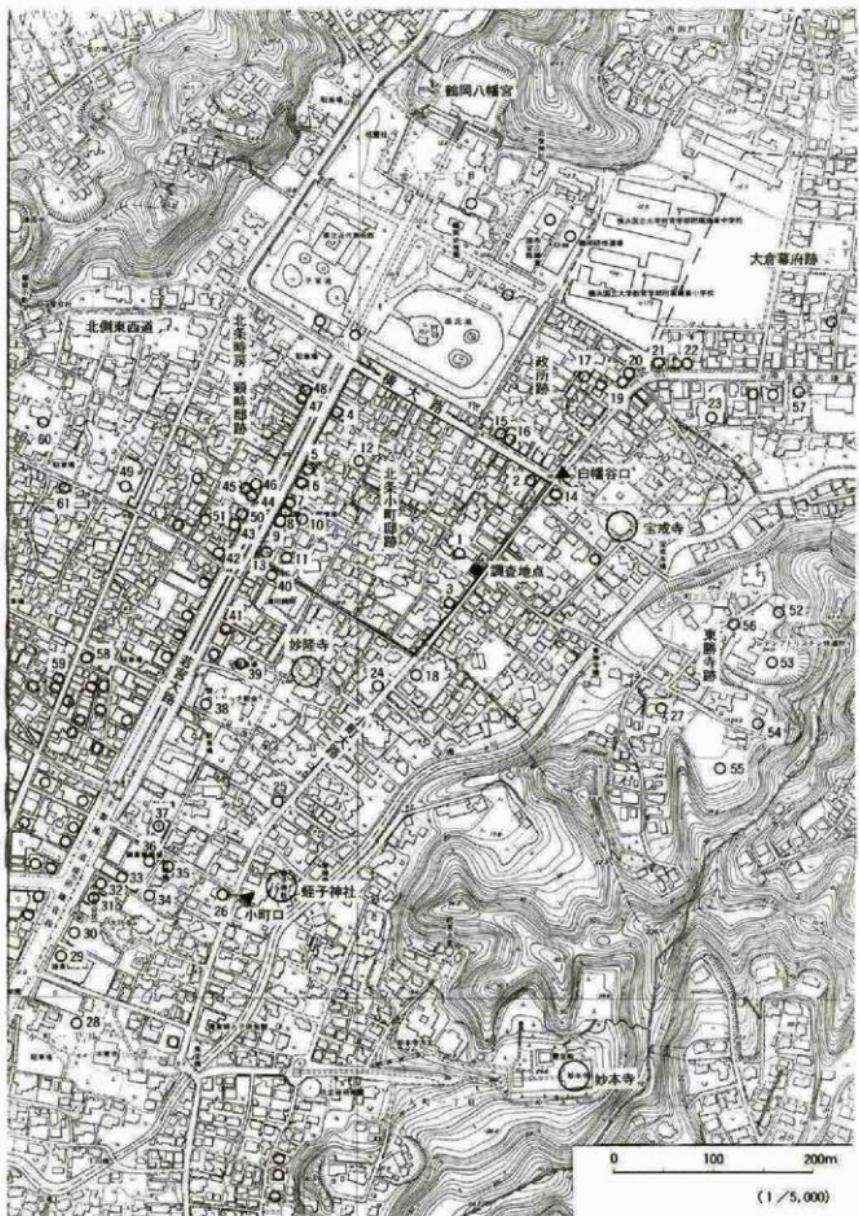


図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡

## 図1 調査地点名

1. 北（雪一丁目401番5）
2. 北（雪一丁目395番他）
3. 北（雪一丁目432番2）
4. 北（雪一丁目377番7）
5. 北（雪一丁目372番7）
6. 北（雪一丁目371番1）
7. 北（雪一丁目370番1）
8. 北（雪一丁目369番1）
9. 北（雪一丁目369番1）
10. 北（雪一丁目370番他）
11. 北（雪一丁目419番3）
12. 北（雪一丁目374番2）
13. 北（雪一丁目367番1）
13. 北（雪一丁目367番1）
14. 北条高時邸跡（小町三丁目426番3）
15. 政（雪三丁目988番）
16. 政（雪三丁目987番1・2）
17. 政（雪三丁目970番外）
18. 若（小町二丁目402番5）
19. 政（雪三丁目966番1）
20. 政（雪三丁目965番）
21. 大倉幕府周辺（雪三丁目606番1）
22. 大倉幕府周辺（雪三丁目607番外）
23. 大倉南御門B
24. 宇津宮辻子幕府跡（小町二丁目374番1）
25. 若（小町二丁目389番1）
26. 若（小町一丁目325番以外）
27. 東勝寺跡（小町三丁目468番2外）
28. 本覚寺旧境内
29. (推定) 藤内定員邸跡（鎌倉中央病院局）
30. (推定) 藤内定員邸跡（中央公館）
31. (推定) 藤内定員邸跡（鳥居書店）
32. 若（小町一丁目309番5）
33. 若（スマーミングクラブ）
34. 若（小町一丁目322番）
35. 若（駕輪場）
36. 若（小町一丁目321番1）
37. 若（小町二丁目345番2）
38. 若（雪ノ下カラリック教会）
39. 若（小町二丁目354番12）
40. 若（小町二丁目366番他）
41. 若（小町二丁目361番1）
42. 北時（雪一丁目274番2）
43. 北時（雪一丁目273番口）
44. 北時（雪一丁目271番4）
45. 北時（雪一丁目271番3）
46. 北時（雪一丁目271番1）
47. 北時（雪一丁目265番3）
48. 北時（雪一丁目293番1）
49. 若（雪一丁目198番6）
50. 北時（雪一丁目272番）
51. 北時（雪一丁目273番1）
- 52~55. 東勝寺跡（小町三丁目）
56. 東勝寺跡（小町三丁目523番14）
57. 大倉幕府周辺（雪四丁目620番5）
58. 若（小町二丁目5番8）
59. 若（小町二丁目12番18）
60. 若（雪一丁目210番）
61. 若（小町二丁目39番6他）

\*遺跡名称の「遺跡」「地点」「用地」は省略。略字は以下の通り

北=北条小町邸跡、雪=雪ノ下、政=政所、若=若宮大路周辺遺跡群、北時=北条時房・頼時邸跡

律令の官吏が一帯を往来していたことがわかる。地点4でも盤状坏が発見されている（馬淵1996）。王朝国家期の鎌倉には二十近い寺社があり、12世紀初頭までに都市神の勅請もおこなわれているので、このころすでにかなりの都市的な集住形態が形成されていたことが確実視されている（野口1993・馬淵1994）。市内のいくつかの地点から若宮大路と異なる軸線を持つ平安後期の溝の検出が相次いでおり、また鎌倉幕府以前に属する遺物の出土も珍しいことではない。

## 鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には横大路をはさんで鶴岡八幡宮と政所跡比定地、東側には東勝寺、南側には宇津宮辻子幕府跡比定地（嘉祥元年=1225以降）がある（文中「比定地」としたのは鎌倉市教育委員会による遺跡名称）。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれる場所である。そして当遺跡は北条小町邸跡とも「若宮大路幕府」跡ともいわれる場所である。以下、『吾妻鏡』によつてこの一帯の状況をみてみよう。

嘉祥元年（1225）7月11日に北条政子が死ぬと、前年第三代執権に就任したばかりの泰時はただちに「御所」移転を計画した。10月3日に計画が群議され、翌4日に候補地を巡査、12月にはやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、20日には將軍藤原頼經移従の儀がおこなわれた。あわただしい移転に違いないが、これによって政治の中心が大倉の地から若宮大路一帯に移行した。

このときの御所移転について、須藤博史・貫達人らは『鎌倉市史 総説編』の考察の誤りを指摘している（須藤／貫1963・貫1989）。すなわち『吾妻鏡』嘉祥元年十一月廿日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という長さが、新御所の大きさではなく、當時仮御所としていた勝長寿院前の伊賀朝行亭からの方違えにともなう測距の数値であることを明らかにした。松尾剛次はこの比定地を図示しており、それにしたがうならば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道の北側東半部ということになる（松尾1993）。しかし、松尾の論は実際の子午線によって東西南北が設定されているため、修正の必要があるかもしれない。というのは中世鎌倉にあっては若宮大路が子午線とみなされていた可能性が高いからである（川副1980）。

この移転にともない、泰時は鎌倉はじめて丈尺制を導入した。これは平城京や平安京で施行されていた都市の地割制度で、街区を方眼区画に再編しようとしたことを意味する。また星敷単位として戸主制を採用した。

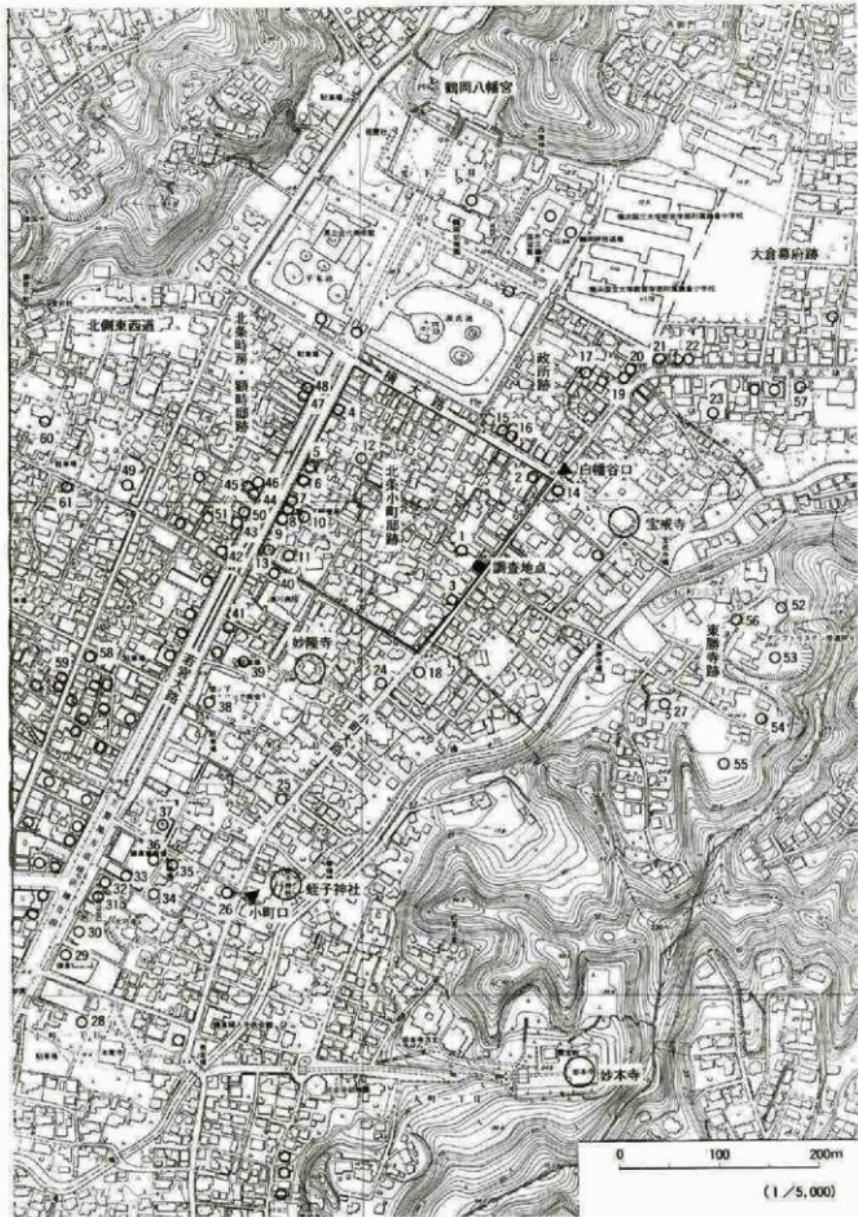


図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡

#### 図1 調査地点名

1. 北（雪一丁目401番5）
2. 北（雪一丁目395番他）
3. 北（雪一丁目432番2）
4. 北（雪一丁目377番7）
5. 北（雪一丁目372番7）
6. 北（雪一丁目371番1）
7. 北（雪一丁目370番1）
8. 北（雪一丁目369番1）
9. 北（雪一丁目369番1）
10. 北（雪一丁目370番他）
11. 北（雪一丁目419番3）
12. 北（雪一丁目374番2）
13. 北（雪一丁目367番1）
14. 北条高時邸跡（小町三丁目426番3）
15. 政（雪三丁目988番）
16. 政（雪三丁目987番1・2）
17. 政（雪三丁目970番外）
18. 若（小町二丁目402番5）
19. 政（雪三丁目966番1）
20. 政（雪三丁目965番）
21. 大倉幕府周辺（雪三丁目606番1）
22. 大倉幕府周辺（雪三丁目607番外）
23. 大倉南御門B
24. 宇津宮辻子幕府跡（小町二丁目374番1）
25. 若（小町二丁目389番1）
26. 若（小町一丁目325番イ外）
27. 東勝寺跡（小町三丁目468番2外）
28. 本覚寺田虎内
29. (推定)藤内定員邸跡（鎌倉中央郵便局）
30. (推定)藤内定員邸跡（中央公民館）
31. (推定)藤内定員邸跡（島森書店）
32. 若（小町一丁目309番5）
33. 若（スマイミングクラブ）
34. 若（小町一丁目322番）
35. 若（駐輪場）
36. 若（小町一丁目321番1）
37. 若（小町二丁目345番2）
38. 若（雪ノ下カトリック教会）
39. 若（小町二丁目354番12）
40. 若（小町二丁目366番他）
41. 若（小町二丁目361番1）
42. 北時（雪一丁目274番2）
43. 北時（雪一丁目273番口）
44. 北時（雪一丁目271番4）
45. 北時（雪一丁目271番3）
46. 北時（雪一丁目271番1）
47. 北時（雪一丁目265番3）
48. 北時（雪一丁目293番1）
49. 若（雪一丁目198番6）
50. 北時（雪一丁目272番）
51. 北時（雪一丁目273番イ）
- 52~55. 東勝寺跡（小町三丁目）
56. 東勝寺跡（小町三丁目523番14）
57. 大倉幕府周辺（雪四丁目620番5）
58. 若（小町二丁目5番8）
59. 若（小町二丁目12番18）
60. 若（雪一丁目210番）
61. 若（小町二丁目39番6他）

※遺跡名称の「遺跡」「地点」「用地」は省略。略字は以下の通り

北=北条小町邸跡、雪=雪ノ下、政=政所、若=若宮大路周辺遺跡群、北時=北条時房・頼時邸跡

律令の官吏が一帯を往来していたことがわかる。地点4でも盤状坏が発見されている(馬淵1996)。王朝国家期の鎌倉には二十近い寺社があり、12世紀初頭までに都市神の勅請もおこなわれているので、このころすでにかなりの都市的な集住形態が形成されていたことが確実視されている(野口1993・馬淵1994)。市内のいくつかの地点から若宮大路と異なる軸線を持つ平安後期の溝の検出が相次いでおり、また鎌倉幕府以前に属する遺物の出土も珍しいことではない。

#### 鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には横大路をはさんで鶴岡八幡宮と政所跡比定地、東側には東勝寺、南側には宇津宮辻子幕府跡比定地(嘉祥元年=1225以降)がある(文中「比定地」としたのは鎌倉市教育委員会による遺跡名称)。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれる場所である。そして当遺跡は北条小町邸跡とも「若宮大路幕府」跡ともいわれる場所である。以下、『吾妻鏡』によつてこの一帯の状況をみてみよう。

嘉祥元年(1225)7月11日に北条政子が死ぬと、前年第三代執権に就任したばかりの泰時はただちに「御所」移転を計画した。10月3日に計画が群議され、翌4日に候補地を巡査、12月にはやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、20日には将軍藤原頼經移徒の儀がおこなわれた。あわただしい移転に違いないが、これによって政治の中心が大倉の地から若宮大路一帯に移行した。

このときの御所移転について、須藤博史・貫達人らは『鎌倉市史 総説編』の考察の誤りを指摘している(須藤/貫1963・貫1989)。すなわち『吾妻鏡』嘉祥元年十一月廿日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という長さが、新御所の大きさではなく、当時仮御所としていた勝長寿院前の伊賀朝行亭からの方達えにともなう測距の数値であることを明らかにした。松尾剛次はこの比定地を図示しており、それにしたがうならば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道の北側東半部ということになる(松尾1993)。しかし、松尾の論は実際の子午線によって東西南北が設定されているため、修正の必要があるかもしれない。というのは中世鎌倉にあっては若宮大路が子午線とみなされていた可能性が高いからである(川副1980)。

この移転にともない、泰時は鎌倉はじめて丈尺制を導入した。これは平城京や平安京で施行されてきた都市の地割制度で、街区を方眼区画に再編しようと思案したことの意味する。また屋敷単位として戸主制を採用した。

11年後の嘉祐二年（1236）、幕府と持仏堂などを「若宮大路東頬」に新造する（三月廿日条）。その場所については、幕府郭内での移動、あるいは北側に移転したという二つの説がある。しかし、いずれの説もそれぞれの主張する宇津宮辻子幕府の位置から推測しているので、先にその点を解決しない限り、若宮大路幕府の位置は確定しない。

幕府の移転とともに近在の諸屋敷も影響を免れ得なかったはずである。この点については最近秋山哲雄が整理している（秋山1996・1997、図2）。

秋山によれば、建保元年（1213）頃当遺跡地方形区画の北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉祐元年に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉祐二年の幕府再移転まで当遺跡全体を泰時亭が占めるようになる。この年、「若宮大路の東頬」へ再移転した後、遺跡地は三つに分割される。すなわち南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭がある。秋山は、宝治元年（1247）以後経時亭および泰時亭は合わせて重時に相仮され、一方宝戒寺の地が得宗亭となるという。秋山は時宗以後の当遺跡地については、南半部に幕府を想定し、北域は不明としている。

この説の前半部には汲むべきところがあるが、嘉祐二年の再移転については、北方への移動であることを前提としているため、修正の必要があろう<sup>21</sup>。いずれにせよ方形区画内で地割改編があったことは確かであろうから、参考として挙げておいた。

調査地点南方約200mの地点24では小町大路側溝とみられる大溝が発見され、「三大・せきのやまの口口 宗近」と書かれた木簡も出土した（原1998）。これは幕府が公共事業を御家人に課役として割り当てた工事区間の表示札であり、從来若宮大路側溝からのみ出土していたものである。なお小町大路東側側溝が地点14・16で検出されており（原1996・野本2001）、大路幅を推定することが可能になりつつある。

#### 南北朝時代

南北朝時代の当地付近の様子はあまりよくわかっていないが、約100m南にある叡昌山妙隆寺は日蓮宗中山門流の鎌倉における拠点であり、重要な施設であると考えられるので、簡単に説明しておこう。

妙隆寺は小町大路西側にある日蓮宗寺院で、「日蓮辯説法跡」とされる場所の北（八幡宮方向）100mほどにある。一帯は鎌倉幕府の有力御家人であった千葉常胤の子孫胤貞（1288～

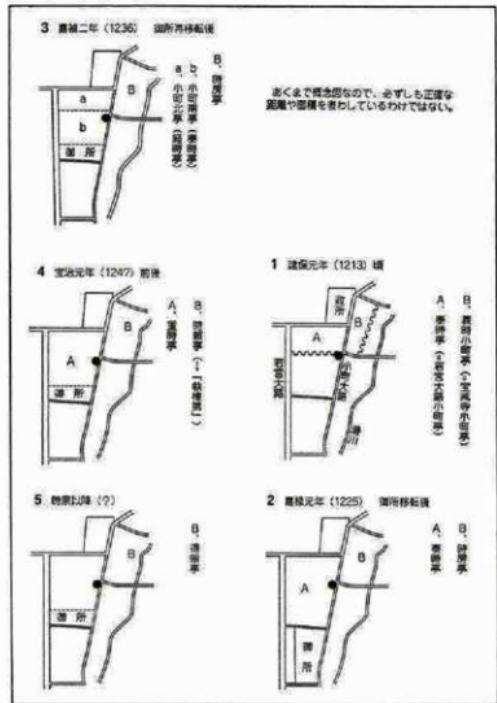


図2 遺跡付近変遷概念図  
(黒丸印が調査地点、秋山1997を改変)

1336) の故地(別邸か)と伝え、一般に「千葉屋敷」とも呼ばれている。胤貞は下総に広く保有する領地を積極的に經營し、自家とその氏寺である下総中山法華経寺の勢力を不動のものとしていた。胤貞が祖先追福のため至徳二年(1385)七堂伽藍をととのえ、中山法華経寺の日英上人を開山にむかえたという。しかし、胤貞はすでに建武三年(1336)に没しているので、これはのちの付会ということになる。

日英は、日蓮宗諸門流の激しい争いの中で身延山久遠寺の日叡との論争に勝利し、彼以後中山門流は大いに勢力をのばした。妙隆寺は鎌倉における中山門流の拠点となった。激しい修行で知られる第二代の日親は、室町幕府六代將軍足利義教に、宗祖日蓮に倣い『立正治国論』を献白しようとしたが容れられず、捕らえられて拷問を受けた。そのとき灼熱した鍋を被せられても主張を曲げなかつたという。

### 室町時代以後

調査地点南約400mの小町大路東側には商業の神である蛭子神社があり、さらに南の「大町四ツ角」近くには町衆の信仰を集めた八雲神社がある。室町時代から戦国時代にかけて、一帯は町衆の往来する賑やかな場所であったようである(藤木1993)。

### 小町大路と小町口について

最後に小町大路について簡単に要点を整理し、あわせて「小町口」などの呼称にみえる「口」の意味について、若干触れておきたい。

貞享二年(1685)完成の『新編鎌倉志』(卷之七)では、「小町は、若宮小(大)路の東より南へ折て行、夷堂橋の間を云。」とある(『大日本地誌大系』本)。ここにいう「小町」が、地区の名称なのか、通りの名称なのか判断としないが、これを信じるとすれば現・宝戒寺門前の交差点から現・本覚寺の門前(夷堂)付近ということになる。しかしこれに史料的裏づけはなく、編纂時点の地域呼称に従つただけの可能性がある。『鎌倉市史 総説編』で高柳光寿はこれを地区の範囲とし、大路自体はもっと海岸に近い九品寺あたりまでそう呼称されていたと想定している(高柳1959)。

「小町大路」の史料上の初出は『吾妻鏡』建久二年(1191)三月四日条で、この日丑刻小町大路の辺で失火があり、強い南風にあおられて、北条義時邸(現宝戒寺)をはじめ御家人らの屋敷十宇が焼けた。おそらく小町大路は、治承四年(1180)12月12日、頼朝が街並み改造に着手した(「閻巷直路。村里授号」)ときから設けられているのである。このとき比企能員邸(現妙本寺)も燃えているので、小町大路一帯は軒並み罹災したことがわかる。

小町大路にかかるは、「口」とついた地名が『吾妻鏡』にしばしば現われる。たとえば大路の北の起点である宝戒寺門前の交差点は、『宝戒寺文書』貞和四年(1348)十一月一日付恵鎮書状(『鎌倉市史 史料編』421号文書)に、「白幡谷口」として出てくる。この交差点には石塔が立っていたといわれ、「塔ノ辻」の呼称が残っている。小町大路南方には、「米町口」の地名が『吾妻鏡』建保元年(1213)五月二日条にある。これは小町大路が大町大路と交差する、現在の「大町四ツ角」のことであろうか。よく知られているのは「小町口」で、なかでもっと有名なのは、建長四年四月一日条にみえる將軍・親王宗尊鎌倉「下向」の記事であろう。

宗尊一行は由比ヶ浜の鳥居の西を経て下馬橋に至り、そこで輿を扣えて中の下馬橋を東行、小町口を経て時頼邸にはいった、とある。ここにいう「中の下馬橋」が現在の二ノ鳥居交差点であり、「小町口」がそこから東に入った先の、蛭子神社に突き当たる丁字路を指すのは明らかである。

では、これら「口」のついた地名には、どんな意味があるだろうか。

まず注意を要するのは、この3地点が鎌倉中核部の東側縁辺に位置するという点である。外との行き

来にはここを通過しなければならない。これまで「口」といえば、『市史 総説編』以来、若宮大路側から外に出る「出口」と解釈されてきた。たとえば「小町口」は、「若宮大路から小町へ出る道」という具合に(『総説編』286頁)。しかし、ここでは発想を逆にしてみたい。これはむしろ、外から鎌倉中核部に「入る」という意味の「口」ではないか。「小町口」は中核部への小町側からの入口を示す呼称ではないだろうか。出口という発想はおそらく、先に引いた『吾妻鏡』建長四年四月一日条の宗尊下向記事による先入主からきている。

なぜこんなことを問題にするのか、拘泥することに何の意味があるのか、いぶかしく思う読者は少なくないだろう。入口も出口も「口」であることに変わりはないからだ。しかし、境界に不可欠の祭祀・鎮護の存在を考えると、両者を語の原義において同等に扱うのは乱暴に過ぎることがわかる。なぜなら、それらは第一に外部からの疫神を迎撃ち、その侵入を阻止する意図に発しているからである。すなわち、語の意識の主格に若宮大路を中心とした聖域があり、「口」の呼称にはそこにいたる「入口」といったふうな語感が感じ取れる、といえばあいまいに過ぎるだろうか。そして、誤解を承知でさらに言えば、「口」の目的地は、おそらくは幕府である。

注1 『吾妻鏡』同年六月廿六日条には、(新御所は)宇津宮辻子御所の乾(北西)にある、とある。

#### 引用文献

- 秋山哲雄1996 「御所と北条氏亭」(「北条小町邸跡(泰時・時頼邸跡)」特論)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12  
鎌倉市教育委員会(以下発行者が鎌倉市教育委員会単独の場合はこれを略す)
- 秋山哲雄1997 「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編第9号
- 川副武胤1980 「鎌倉時代鎌倉の方位の観測」『日本歴史』第382号 日本歴史学会
- 須藤博史／貴達人1963 「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11 鎌倉文化研究会
- 高柳光寿1959 『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 貴達人1989 「第二章 古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史 近世通史編』吉川弘文館
- 野口実1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45 (財)古代学協会
- 野本賢二2001 「若宮大路周辺遺跡群一小町二丁目402番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
- 原廣志1996 「北条高時邸跡一小町三丁目426番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
- 原廣志1998 「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会・市教育委員会
- 藤木久志1993 「中世鎌倉の祇園会と民衆」『神奈川地域史研究』11号 神奈川地域史研究会
- 馬淵和雄1994 「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』(『中世の風景を読む』2)
- 新人往来社
- 馬淵和雄ほか1996 「北条小町邸跡(泰時・時頼邸) 雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
- 馬淵和雄1998 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
- 馬淵和雄1999 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点」大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
- 松尾剛次1993 『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館

(馬淵)

## 第2章 調査の概略

### 1. 調査にいたる経緯

平成12年9月に当該地において鋼管杭打ち工事が実施されている状況が確認されたため、工事関係者に事情を確認したところ、建築確認申請の手続き後の工法変更により杭打ちの基礎構造が採られ施工に至ったとのことであった。当該地における同種の工事内容では埋蔵文化財への影響が不可避であると考えられることから、急速、神奈川県教育庁生涯学習文化財課の担当者による現地確認を得て今後の対応策について指導を求めたところ、早急に確認調査を実施し埋蔵文化財の存在する深度及び現に損壊を受けている埋蔵文化財の状況を確実に把握したうえでさらなる対応を検討すべきとの指示を得た。これにより9月28日から10月2日にかけて、確認調査を実施し、現地表下120cm以下に小町大路の西側側溝跡と見られる具体的な遺構の存在を確認するに至った。このため建築主と数回にわたる協議を行うとともに、文化財保護法に基づく届出手続き等を行い、調査の実施方法についての協議が整った後、平成12年10月30日から11月30日まで発掘調査を実施した。

（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 X頁より抜粋）

### 2. 方眼設定

測量方眼の設定方法はつぎのとおり（図3）。

方眼軸線は小町大路に平行もしくは直交する形で、5mおきに配した。これは測量上の利便性を優先させたためであり、国家座標には一致しない。

まず調査区外北西に任意点1-Aを設け、そこから東と南に5m間隔の軸線を配し、東西軸線には算用数字を、南北軸線にはアルファベットの名称を付した。各方眼区画は北西角の軸線交点により呼称される。なお、2001年1～3月におこなわれた雪ノ下一丁目401番5地点の方眼軸線とは、本地点の調査実施時点においては開発予定を知りえなかつたため、一致しない。両地点の位置関係は、図3に示した。

交点2-Bにおける座標成果は次のとおり。

【AREA 9】 X-75563.127

Y-24880.693

北緯35° 19' 06"・東經139° 33' 34"

方眼南北軸とY系との偏差は次のとおり。

N-34° 14' 40" - E

調査にあたっては便宜上小町大路を子午線に見立てた上で、鶴岡八幡宮方向を「北」と認識した。

### 3. 調査経過

調査は2000年10月19日から同年11月29日までを要した。その間のおもな作業内容は次のとおり。

10月19日（木）重機により表土除去

21日（金）機材搬入

24日（火）水田面精査

26日（木）畦畔写真撮影と実測

28日（土）水田面全景写真撮影と実測

31日（火）小町大路側溝掘削開始

- 11月9日（木） 側溝木材写真撮影と実測  
 10日（金） 基盤層面出し  
 11月15日（水） 側溝実測  
 16日（木） 中世面全景写真撮影  
 18日（土） 北壁土層断面実測  
 21日（火） 中央部深掘り開始  
 22日（金） 深掘り写真撮影と平面・断面実測  
 27日（日） 基盤層内黒色土掘削  
 28日（月） 写真撮影・実測  
 30日（木） 機材撤収

(2・3 馬澤)

### 謝辞

次の方々に感謝の意を表する。

秋山哲雄・石元道子・伊丹まどか・汐見一夫・鈴木茂・原廣志・渡辺美佐子

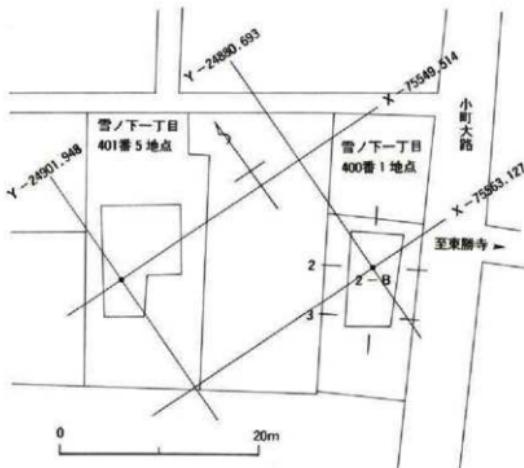


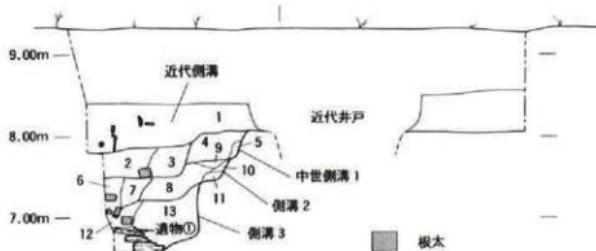
図3 調査区設定図

# 第3章 遺構と遺物

## 1. 層序と遺構の概要

調査区の地表面および隣接する現・小町大路の標高は、約9.30mである。地表下を70cmほど掘り下げた辺りから、硬くしまった暗褐色粘質の水田耕作土が現れる。この層からの出土遺物は全体に少ないが、若干のガラス片や合成コバルト使用の染付等がみられるので、年代的には幕末以降に属する。この耕作土は調査区内全域に広がっており、40~60cm程度の厚みがある。調査地点一帯は近代には水田だったと伝えるが、この耕作土がそれであらう。なおこの近代水田にともなう畦畔の木組み木材に中世期のものらしいホゾ穴を持つ根太が転用されている。近代遺構としては調査区北端にも直径約1mの石組み井戸が検出されているが、層位的には水田よりもさらに新しい。

耕作土を取り除くと基盤層になる。基盤層はよく締まった明灰黄色砂質土である。上面の標高は約8.05m。それまでの中世層は、近・現代の耕作によりすべて削平されていた。近世遺構も同じ理由で見つかなかった。中世遺構としては、基盤層に掘り込まれた、かつての小町大路の側溝の一部が検出で



1. 近代耕作土	
2. 暗青褐色粘質土	多量の貝殻粒・木片・土師器片・泥岩粒・炭化物を含む。しまり良し。
3. 暗青褐色粘質土	
4. 黒褐色粘質土	炭化物・泥岩粒を多く含む。しまり良し。
5. 暗茶色弱砂質土	
6. 黑褐色粘質土	貝殻粒・木片・土師器片・繊維を多く含む。
7. 黑褐色粘質土	泥岩・炭化物を多く含む。
8. 暗青褐色弱砂質土	含有物、4と類似する。
9. 暗青褐色粘質土	
10. 暗青褐色弱砂質土	
11. 暗青褐色弱砂質土	
12. 暗青褐色粘質土	貝殻粒・木片・繊維・泥岩・土師器片・炭化物を多く含む。
13. 明青褐色弱砂質土	若干の泥岩粒・土師器片・綠色土が混入する。



図4 調査区北壁土層図

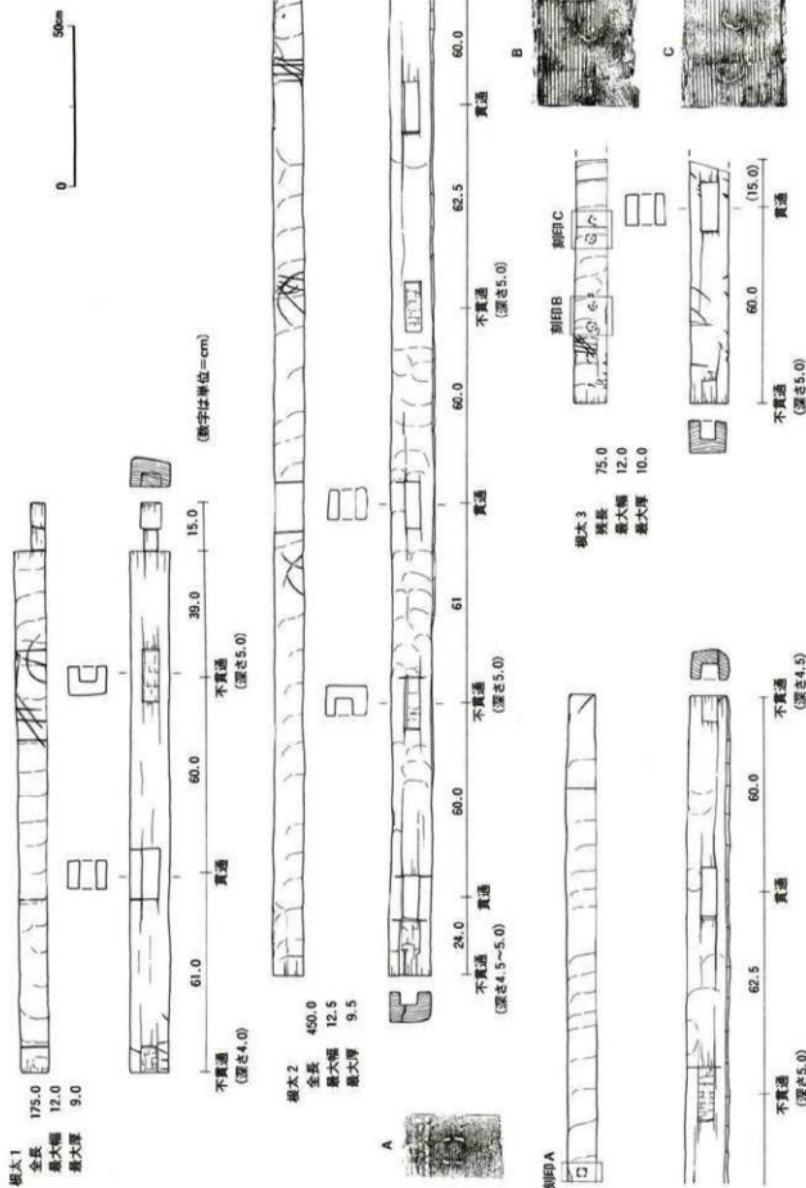


図 6 側溝 1 部材

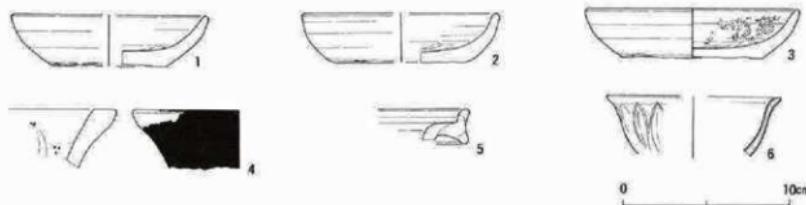


図7 側溝1出土遺物

ノ穴を穿つための印とみられる。

**根太2** 全長450cm、最大幅12.5cm、最大厚9.5cm。全面に手斧痕が残る。南端部は貫通したホゾ穴に接して、根太1の男木を納めるホゾ（女木）が彫り込まれている。ホゾ穴は貫通と不貫通が一つおきで、規格は幅5~5.5cm、長さ14.5cm~16cm。不貫通の場合の深さ5cm、ホゾ穴芯々距離は60~62.5cm。直線の傷の他、側溝に面した側面に2×2.5cmの方形の刻印が一ヵ所ある。

**根太3** 最大幅12cm、最大厚10cm。調査区北壁外に続くため長さ75cmまでしか取り出せなかつたが、ホゾ穴は貫通・不貫通が一つおきの様式と思われる。ホゾ穴の規格は幅5cm、長さ14.5cm。不貫通の場合の深さ5cm。南端から次のホゾ穴の中心までの距離は60cm。手斧痕は底面と側溝側の側面がはっきりしており、その側面には直線の傷および梅花の刻印が5点ある。

**根太4** 最大幅9.5cm、最大厚6cm。ほぼ全体にうすく手斧痕をとどめるが、一部に樹皮が残り、製材はやや粗雑である。南側が調査区外に続くため取り出した長さは189.5cm。ホゾ穴規格は幅4.3~4.5cm、長さ13.5~14.3cm、芯々距離61cmで、全て貫通する。

掘方規模：幅 不明（208cm以上）

深さ 北壁際-58cm、中央部-62cm、南壁際-62cm、上端の標高は不明。

掘方断面：逆台形

流下方向：北→南

主軸方位：N-39° - E

表1 側溝1出土遺物観察表

番号	種別	大きさ	せいけい	着地・騎士	その他特徴など
1	土師器 R種 大型	口径(11.6)cm 底径(7.0)cm	器高3.1cm 白色針状物質 泥岩粒含む	底部系切り 内底部ナデ 騎成良好	
2	土師器 R種 大型	口径(11.5)cm 底径(7.8)cm	器高3.0cm 底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板压痕あり	
3	土師器 R種 大型	口径(12.0)cm 底径(8.6)cm	器高3.0cm 底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板压痕あり	
4	瓦質	口縁部片	輪積み後口クロ成形 内面重複ナデ	口縁から外面全体に黒漆張り	
5	手鏡り	騎士	表面黒灰色 胎芯部灰褐色 雲母針 金雲母 石英含む		
6	常滑甕	口縁部片	輪積み成形		
	竈泉窯系青磁 越窯青白磁	表面茶褐色 胎芯部灰褐色 長石 泥橙色粒含む	焼成良好	口縁部内側に降灰釉 外底に輪の狹い鑄造弁文	

出土遺物：土師器R種（1～3）・外面漆塗りの瓦器質手焙り（4）・常滑甕（5）・竜泉窯青磁鑄蓮弁文碗（6）

特記事項：検出された根太材はそれぞれ四つに分割されていたが、元は二つであり、縫手部分は「鎌雜ぎ」技法が用いられる。今回の調査区の範囲内では、側溝の全貌は明らかにできないが、東側を見る限り、落込みは2段になっていて、とくに調査区北側はその様相が顕著である。この落ちは裏込めにともなうものと考えるのが妥当だが、調査区北半部は大きく東側に膨らんでいる。この膨らみは側溝2・3でも確認された。

### 側溝2（図8・9）

位置：1～3-A

構築方法：調査区内では北域に下段の根太が残っているのみだが、これもまた縦列においていた上下2段の角材で側板を止める構造になっているとみてよい。根太のホゾ穴は芯々50cm間隔で、すべて打抜くなっている。掘方底面は北側3分の2ほどの部分で南側より約20cm低く、この部分には根太の水平を確保するために、下に大きな角材が敷きこまれている。

溝枠規模：幅 不明（45cm以上）

深さ 北壁際-75cm、中央部-87cm、南壁際-76cm

溝枠断面：箱型（推定）

溝枠部材：根太 全長338cm、最大幅12cm、最大厚6.5cm。ホゾ穴は全て貫通する。ホゾ穴規格は幅5cm～5.5cm 長さ15cm～15.5cm、ホゾ穴の芯々距離はおおむね50cmであるが、南端から三番目と四番目の間のみ52cmとなっており、この部分には両側面と底面に「丸に点」の刻印が押されている。

掘方規模：幅 不明（170cm以上）

深さ 北壁際-104cm、中央部-98cm、南壁際-80cm

掘方断面：逆台形

流下方向：南→北

主軸方位：N-39° -E

出土遺物：土師器T種（1・2）・同R種（3～9）・瓦器質手焙り（10）・常滑甕（11）・竜泉窯青磁碗（12）・同安窯青磁皿（13）・鉄釘（14）

特記事項：側溝1の底部下からさらに20～50cm下がったところに検出された。北壁にかかった根太はホゾ穴の芯々が50cm間隔で全て打抜である。側溝1の根太ホゾ穴の場合、打抜と包込のものが交互であったが、本址の根太材との形態差が時期の違いによるものなのか、構築方法の違いによるものなのかは判然としない。また、若宮大路側溝との構築法上の関係についても今後十分に検討する余地はある。調査区北域の掘方にみられる東方への膨らみも、側溝1同様、性格が明らかでない。

### 側溝3（図11・12）

位置：1～3-A

構築方法：北域の一部に根太が残っているのみで詳細は不明だが、1・2と同様の方法によると推測できる。

溝枠規模：幅 不明（50cm以上）

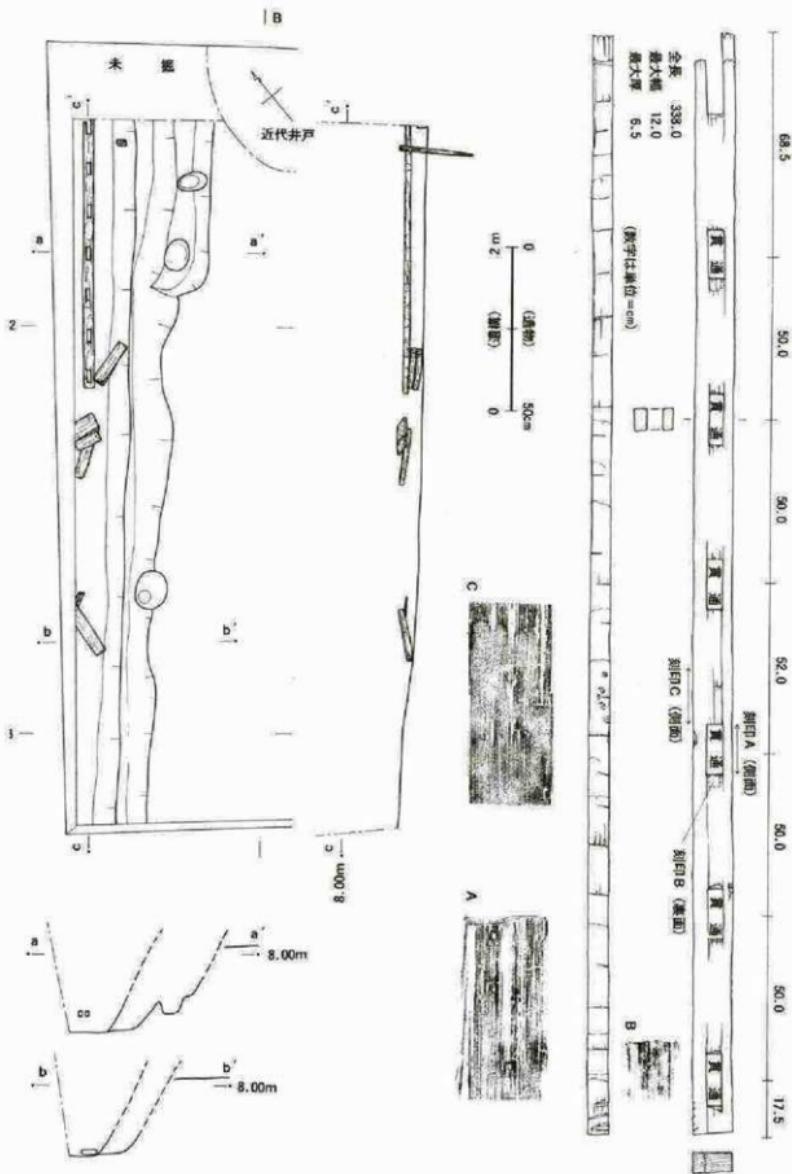


図8 倒溝2

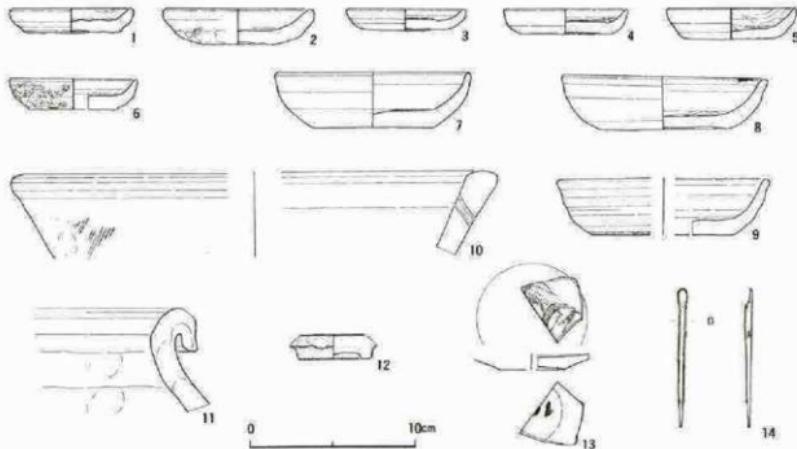


図9 側溝2出土遺物

表2 側溝2出土遺物観察表

番号	種別	大きさ	せいけい	着地・胎土	その他特徴など
図10	土・師 器	口径(7.2)cm 底径(5.2)cm 器高1.5cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
1	下種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
2	土・師 器	口径(8.8)cm 底径(4.5)cm 器高2.2cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	下種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
3	土・師 器	口径(7.1)cm 底径(5.1)cm 器高3.0cm	底部右回転系切り 内底部ナデ	外底面に板状痕あり	
	R種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
4	土・師 器	口径(7.3)cm 底径(5.5)cm 器高1.5cm	底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板状痕あり	
	R種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
5	土・師 器	口径(7.7)cm 底径(5.7)cm 器高1.9cm	底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板状痕あり	
	R種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質 褐岩粒・雲母含む	焼成良好		
6	土・師 器	口径(7.5)cm 底径(5.3)cm 器高1.9cm	底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板状痕あり	
	R種 小型	胎土 淡褐色 白色針状物質 白色鉱物含む	焼成良好 外面に黒い付着物あり		
7	土・師 器	口径(11.6cm) 底径(7.4cm) 器高3.5cm	底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板状痕あり	
	R種 大型	胎土 淡赤褐色 白色針状物質 雲母 硫黄含む	焼成良好		
8	土・師 器	口径(12.3cm) 底径(8.0cm) 器高3.3cm	底部右回転系切り	内底部ナデ 外底面に板状痕あり	
	R種 大型	胎土 棕褐色 白色針状物質 褐岩粒 砂礫含む	焼成良好 口縁部に崩壊少量付着		
9	土・師 器	口径(12.6cm) 脱径(8.5cm) 器高3.5cm	底部右回転系切り	内底部ナデ	
	R種 大型	胎土 赤褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
10	瓦 質	口縁部片 口径(28.0cm) 輪積み後口クロア成形	内面ナデ	外面上部ナデ 体部は斜位のハケナナデ	
	手 織り	胎土 表面墨灰色 脱芯部灰褐色 露母 砂粒 白色鉱物含む	口縁下に外方に傾斜した孔が貫通する		
11	常滑 製	口縁部片 輪積み成形 内面に指痕痕			
		胎土 灰茶褐色 灰石 多種含む	焼成良好		
12	雞泉窯系青磁 諸連井文碗	底部片 底径4.5cm ロクロア成形	削り出し高台 高台内露胎		
		胎土 灰色 黑色微粒子含む	釉薬 青緑色透明		
13	同安窯系青磁 繩摺文皿	底部片 底径(4.0)cm ロクロア成形	内底面に脚摺文 外底面は露胎で黒唇らしき痕跡あり		
		胎土 灰色 黑色微粒子含み め細かい	釉薬 灰緑色透明		
14	釘	長さ8.5cm 幅0.3cm 厚み0.45cm	重量4.4cm		

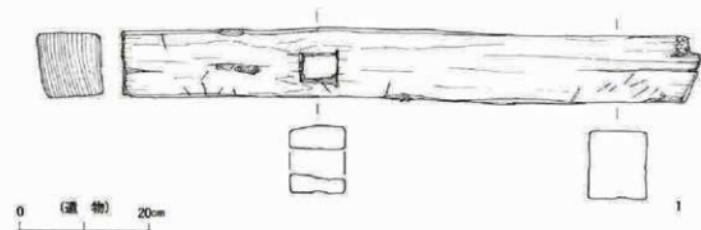
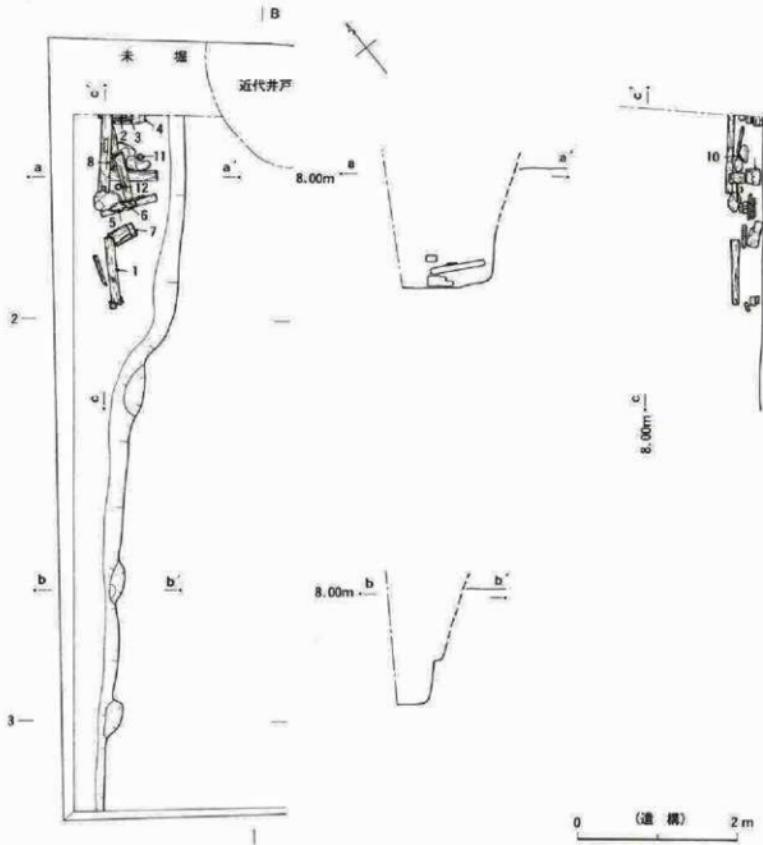
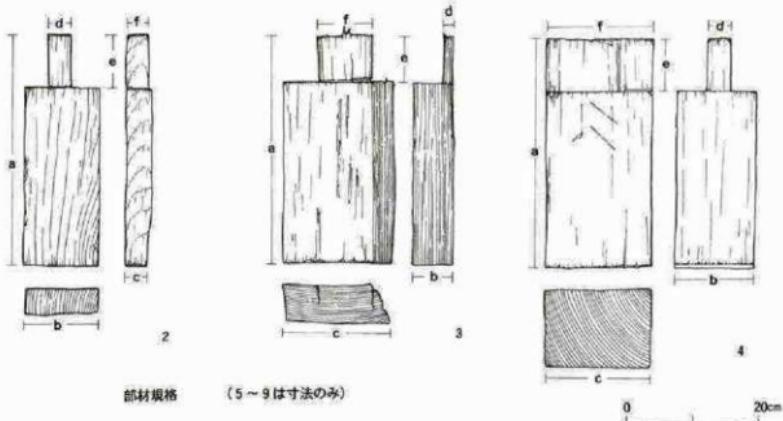
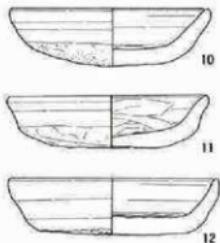


図10 剣溝3、同出土遺物(1)



	a	b	c	d	e	f
2	35.0	12.2	4.0	3.8	8.3	3.6
3	33.8	6.0	16.2	1.2	6.3	8.2
4	35.0	12.1	16.0	3.5	8.0	16.0
5	34.3	11.5	5.4	3.5	6.5	5.5
6	34.3	11.5	3.0	3.5	6.5	2.5
7	33.5	12.5	16.4	3.7	7.0	16.5
8	35.2	12.1	5.5	3.5	8.2	5.2
9	33.2	12.3	16.7	3.3	7.0	16.5

単位cm



1~12は図11中に出土位置を示す

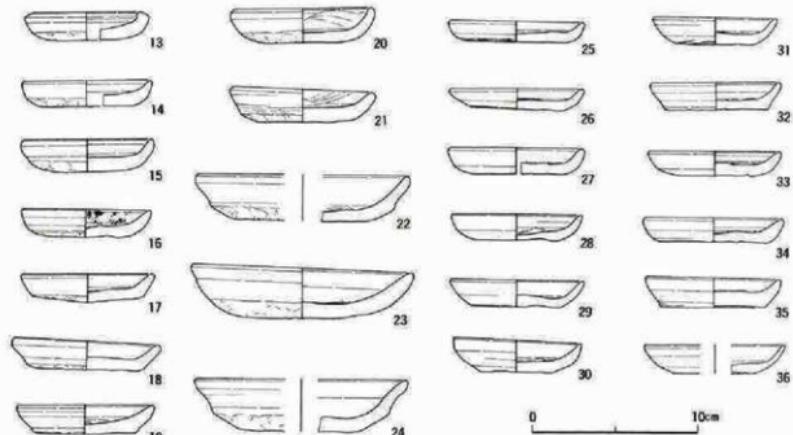


図11 側溝3出土遺物(2)

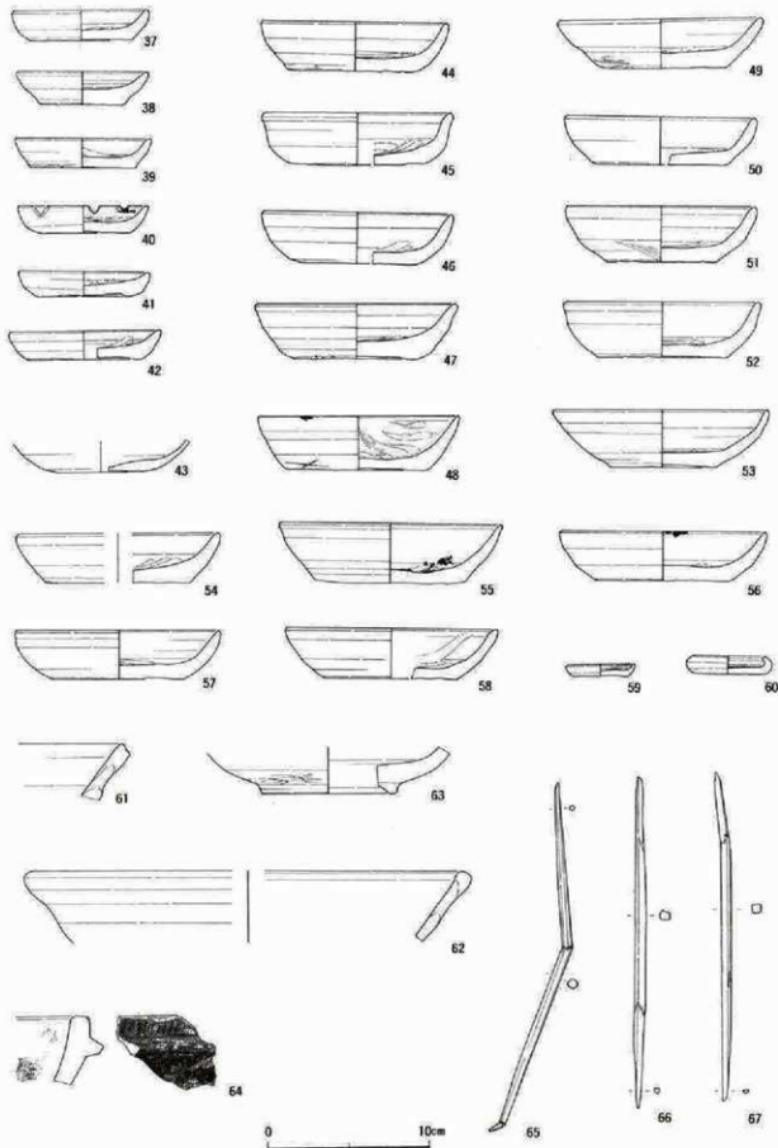


図12 墓3出土遺物(3)

表3 側溝3出土遺物観察表(1)

番号	種別	大きさ	せいせい	場地・胎土	その他特徴など
12	土師器	口径11.8cm 底径6.8cm 器高3.5cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
10	T種 大型	胎土 淡褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
11	土師器	口径(12.0)cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 大型	胎土 淡褐色～赤褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
12	土師器	口径12.4cm 底径9.1cm 器高3.5cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 大型	胎土 淡褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
13	土師器	口径(6.4cm) 底径(4.8cm) 器高1.7cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
14	土師器	口径(7.8cm) 底径(5.8cm) 器高1.6cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
15	土師器	口径(7.5cm) 底径(5.3cm) 器高1.9cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
16	土師器	口径(7.7cm) 底径(5.3cm) 器高1.7cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好	内面に焼付着	
17	土師器	口径7.9cm 底径6.3cm 器高1.8cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
18	土師器	口径8.8cm 底径6.3cm 器高1.8cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
19	土師器	口径(8.2cm) 底径(6.4cm) 器高1.8cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
20	土師器	口径(6.3cm) 底径(4.6cm) 器高2.1cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
21	土師器	口径8.4cm 底径5.5cm 器高2.0cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 小型	胎土 淡赤褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
22	土師器	口径(12.6cm) 底径(8.6cm) 器高2.8cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 大型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
23	土師器	口径13.2cm 底径6.5cm 器高3.1cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 大型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
24	土師器	口径(12.7cm) 底径(7.0cm) 器高3.2cm	手づくね後口縁部内底部ナデ		
	T種 大型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
25	土師器	口径(8.0cm) 底径(5.4cm) 器高1.3cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ		
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
26	土師器	口径7.9cm 底径5.6cm 器高1.3cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ		
	R種 小型	胎土 淡褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
27	土師器	口径(6.0cm) 底径(5.8cm) 器高1.6cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 淡褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
28	土師器	口径(7.8cm) 底径(5.0cm) 器高1.6cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	きめ細かい	焼成良好	
29	土師器	口径(8.0cm) 底径(5.3cm) 器高1.65cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
30	土師器	口径7.6cm 底径4.4cm 器高2.0cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
31	土師器	口径7.4cm 底径5.1cm 器高1.6cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
32	土師器	口径7.8cm 底径6.2cm 器高1.7cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
33	土師器	口径(7.9cm) 底径(4.8cm) 器高1.5cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ		
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
34	土師器	口径(8.3cm) 底径(6.5cm) 器高1.5cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ	外底面に板压痕あり	
	R種 小型	胎土 棕褐色 白色針状物質 含む	焼成良好		
35	土師器	口径8.0cm 底径6.4cm 器高1.8cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ		
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
36	土師器	口径(8.4cm) 底径(5.0cm) 器高1.8cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ		
	R種 小型	胎土 淡灰褐色 微砂粒 含む	きめ細かい	焼成良好	

表4 側溝3出土遺物観察表(2)

番号	種別	大きさ	せいわい	系地・胎土	その他特徴など
図13	土師器	底径(5.6)cm	底部右回転糸切り 内底部ナデ		
37	R種 小型	胎土 漆接褐色 磨砂粒 実母含む きめ細かい	焼成良好		
38	土師器	口径(7.9cm) 底径(5.3cm) 高さ2.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
	R種 小型				
39	土師器	胎土 漆灰褐色 砂粒 白色針状物質 置け合む	焼成良好		
	R種 小型	口径(8.8cm) 底径(6.7cm) 器高1.8cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
40	土師器	胎土 標色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 小型	口径(7.9cm) 底径(5.4cm) 高さ1.7cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
41	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 置け合む	焼成良好	口縁部を故意に打ち欠く	
	R種 小型	口径(7.8cm) 底径(5.7cm) 高さ1.6cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
42	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 小型	口径(9.3cm) 底径(7.0cm) 器高1.8cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
43	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 中型	底径(5.6cm) 胎土右回転糸切り 内底部ナデ			
44	土師器	胎土 漆接褐色 磨砂粒 実母含む きめ細かい	焼成良好		
	R種 大型	口径(11.4cm) 底径(9.8cm) 器高3.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
45	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 置け合む	焼成良好		
	R種 大型	口径(9.6cm) 底径(8.0cm) 実母含む きめ細かい	焼成良好		
46	土師器	胎土 灰褐色 砂粒 実母含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(11.6cm) 底径(10.0cm) 器高3.2cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
47	土師器	胎土 灰褐色 砂粒 実母含む きめ細かい	焼成良好		
	R種 大型	口径(12.2cm) 底径(10.7cm) 器高3.5cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
48	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 置け合む	焼成良好		
	R種 大型	口径(12.4cm) 底径(9.8cm) 器高3.4cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
49	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 置け合む	焼成良好	口縁部に油漬少量付着	
	R種 大型	口径(12.5cm) 底径(8.6cm) 器高3.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
50	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 置け合む	焼成良好		
	R種 大型	口径(11.7cm) 底径(8.5cm) 器高3.0cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
51	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(11.7cm) 底径(7.0cm) 器高3.5cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
52	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 砂粒 置け合む	焼成良好		
	R種 大型	口径(12.0cm) 底径(8.0cm) 器高3.5cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
53	土師器	胎土 灰褐色 砂粒 実母含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(13.2cm) 底径(6.7cm) 器高3.6cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
54	土師器	胎土 漆接褐色 実母含む きめ細かい	焼成良好		
	R種 大型	口径(12.3cm) 底径(9.0cm) 器高3.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
55	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(13.7cm) 底径(9.4cm) 器高3.8cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
56	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質 砂粒 置け合む	焼成良好	内底面に撲付着	
	R種 大型	口径(12.7cm) 底径(8.6cm) 器高3.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
57	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(12.6cm) 底径(8.3cm) 器高3.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
58	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(13.2cm) 底径(8.6cm) 器高3.2cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ	
59	土師器	胎土 漆接褐色 実母含む きめ細かい	焼成良好		
	R種 大型	口径(14.6cm) 底径(9.0cm) 器高3.1cm	底部右回転糸切り	内底部ナデ 外底面に板状圧痕あり	
60	土師器	胎土 灰褐色 白色針状物質含む	焼成良好		
	R種 大型	口径(14.6cm) 底径(9.0cm) 器高1.1cm	手づくね後口縁部、内底部ナデ		
61	土師器	胎土 漆接褐色 化粧小口	焼成良好		
	R種 超小型	口径(4.5cm) 底径(4.4cm) 器高1.1cm	手づくね後口縁部、内底部ナデ		
62	土師器	胎土 漆接褐色 長石 砂粒を少量含む	焼成良好	内面に隕灰	
	常滑	口径部断面 口径(27.0cm)	成形 輪積み		
63	二輪鉢1型	胎土 灰褐色 長石 砂粒を少量含む	焼成良好	内面に隕灰	
	東晩	底部断面 口径(8.2cm)	成形 輪積み後ロクロ 脊り付高台 外面下部へテ割り		
64	潛石鍋	口縁部断面 厚み1.4cm			
	常滑	外面にシミによる常滑崩が見られ、腰より下は厚く焼が付着する			
65	箸	長さ23.2cm 最大径0.6cm	両口		
66	箸	残長(20.7cm) 最大径0.7cm	両口		
67	箸	残長(20.6cm) 幅0.7cm 最大厚0.6cm	両口		

深さ 北壁際-113cm、中央部-122cm、南壁際-115cm

溝枠断面：箱型（推定）

溝枠部材：根太 採取部分の長さ85cm、最大幅12.5cm、最大厚6.5cm。ホゾ穴は全て貫通する。ホゾ穴規格は幅4cm、長さ16.5cm。北端から次のホゾ穴の中心までの距離は63cm。全面に手斧痕がみられるが成形はややいびつである。

部材1 残存長88.5cm、最大幅10.5cm、最大厚8.5cmの角材。端から27.5cmの部分に5.5×4.0cmの穴が貫通している。規格は根太材と異なるが、両端がそれぞれ礎板状の木片に支えられてほぼ北壁ぎわの根太と同じ高さに据えられる。

部材2～9 一定の規格の角材（長34～35cm、幅16cm前後、厚み12cm前後）に目違ホゾを刻んだ部材、あるいはそれを割ったものと考えられる。ホゾ部分の長さは6.5～8.2cm。部材2と8、部材5と6は接合する。本来の使用法は不明であるが、ここでは根太の高さを保持するための支持材に転用され、下に敷き込まれている。

掘方規模：幅 不明（135cm以上）

深さ 北壁際-150cm、中央部-132cm、南壁際-126cm

掘方断面：深い逆台形

流下方向：南→北

主軸方位：N-39°-E

出土遺物：部材（1～9）・土師器皿T種（10～23）・同R種（24～58）・同極小型（59・60）・常滑こね鉢I類（61・62）・渥美こね鉢（63）・滑石鍋（64）・箸状木製品（65～67）

特記事項：確認できた小町大路側溝としてはこれが最も古い。側溝2よりさらに60cmほど下がったところにある。掘り込みは側溝1・2のような二段落ちではないが、北側が大きく膨らんでいる点は類似している。とくに北側には根太だけでなく角材や板材が多数散乱していた。これらの全てが部材の一部とはいきれない。建物の角柱を切り落としたものが礎板として転用されているが、中には単に投棄されただけに見えるものもある。溝の底は明青灰色の固い粘土（基盤層）であるが、図1地点3（雪ノ下一丁目432-2）・地点24（小町二丁目374-1）での調査結果からいって、調査区西側外には未検出のままの側溝が存在していると推測できる。また、地点1（雪ノ下一丁目401）での調査では、小町大路側溝と同規模の東西溝が直交しているのが確認された。これらの側溝がどのような形で交差するのか、今後の周辺調査にまちたい。

（鍛冶屋／松原-溝枠部材の項）

### 3. 繩文時代晚期

先述のように、近代耕作土直下の標高約8.10m前後には明灰黄色砂質土層が広がっており、当初その全体を基盤層と認識していた。しかしながらの面精査や小町大路側溝の壁面観察から、基盤層は調査区内の南側3分の1のみで、以北は中世以前の大きな落込みの堆積土であることが判明した。そこで調査区中央部分に、確認のため深掘りトレンチを入れた（図13）。

調査区西北隅の小町大路側溝東壁の精査により、対（北）岸が調査区内にないことが確認されていたので、隣地への安全上の配慮からも、トレンチは調査区中央部の2軸以北へは延ばさなかった。推計ではこの落込みの幅は少なくとも8mを超える大規模なものになるが、人為によるものかどうかはわから

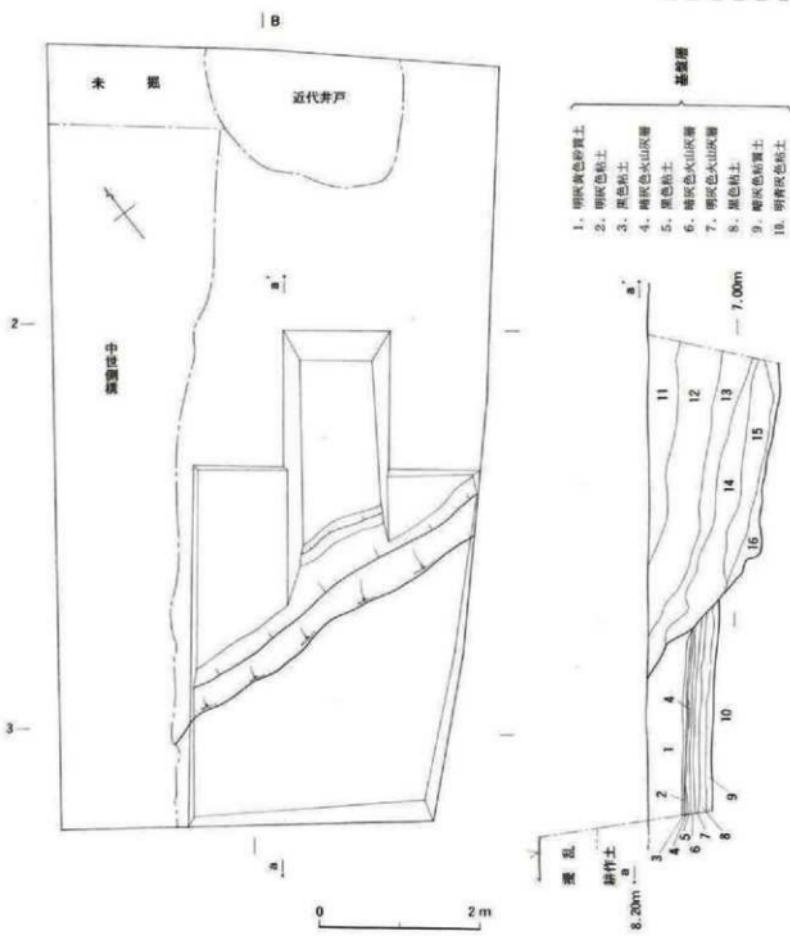


図13 繩文時代落込み

なかった。後述するように、堆積土の分析により、この落込みは縄文時代晚期ごろ埋没したことが判明した。また深掘りの際基盤層も約80cm掘り下げたが、海拔7m前後から、火山灰層の水平堆積が観察された。灰の色は灰白色で、黒色の軟質粘土と互層をなしている。

中世以前に属する遺構は、ほかには見当たらなかった。

位 置 : 1~2-A~B

規 模 : 幅 8m以上

ただし本地点西約20mの雪ノ下一丁目401番地点（2001年1月～3月調査）ではこの落込みは検出されていないので、13m（概測）以上にはならない。

深さ 160cm以上

断面形 : 逆台形？

壁傾斜 : 約60°（南壁直交方向）

主軸方位 : N-86.5°-W（南壁）

底面標高 : 6.5m

出土遺物 : 自然木

特記事項 : 基盤層を切る。堆積土（土層番号11～16）に人工遺物は含まれていなかったが、最下層の土層番号16から腐食した木片が出土しており、堆積状況からみても、滲水していたか流れているかはともかく、一時水があったことは確かである。

年代については、 $\beta$ 線計測法による数値が鈴木茂氏（（株）パレオ・ラボ）によって提出されている（土層番号15）。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正年代 : 2,600±60yrs B.P.

較正暦年代値 : B.C. 795年

$1\sigma$ 年代幅 : B.C. 810 to 775（確率 68%）

縄文時代晚期の始まりが紀元前1000年ごろだとすると、この落込みの埋没年代は、それに含まれているということになる。この時代のものとしては鎌倉市内中心部ではじめての発見であり、海退期以降の古鎌倉の地形変化を知る上で貴重である。これについては第四章であらためて触れてみたい。

（馬淵）

#### 4. 採集遺物

近代水田の畦畔や耕作土などから採集したものを提示する（図14）。白色系土師器（1）・竜泉窯青磁鍋蓮弁文碗（2）・砥石（3～5）・硯（6）・木簡（7）がある。

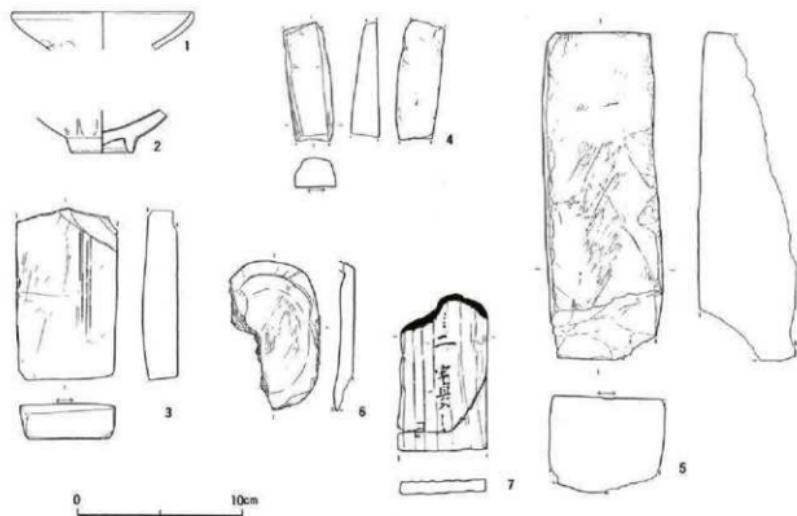


図14 採集遺物

表5 採集遺物観察表

番号	種別	大きさ	せいけい	素地・胎土	その他特徴など
図15	白色系土師器	口径(11.2cm)	手づくね後縫部ナデ		
1 T種	胎土 乳白色 焼成良好				
2	蘿系葉系青磁 結藻矢文施	底部片 底径3.8cm	クロコ成形 削り出し高台 裝付きのみ露胎	素地 灰白色 黒色微粒子含む 軸底 灰青色半透明	
3	礁石 中紙	残長(10.5cm)	幅6.0cm	最大厚2.2cm 色調 乳白色	1面が紙面 伊予産か?
4	礁石 中紙	残長(7.3cm)	幅2.7cm	最大厚1.8cm 色調 灰緑色	1面が紙面 上野産
5	礁石 中紙	残長(20.0cm)	幅7.0cm	厚さ6.0cm 色調 乳白色	1面が紙面 伊予産か?
6	礁	残長(9.1cm) 成形四隅は丸形	幅(7.0cm) 内側は四葉の形にくりぬく	厚さ1.3cm 石材 灰黒色 粘板岩	
7	木簡	残長(8.6cm)	幅5.3cm	厚さ0.8cm 木取 板目 片端は焼け焦げている 片面に墨書「……二 家主入」か?	

## 第4章　まとめと考察

### 1. 繩文時代晚期

#### 大型の落込みについて

今回の調査では、基盤層上から大型の落込みが検出された。堆積土最下層の年代は、鈴木茂（（株）バレオ・ラボ）のβ線計測法によれば、紀元前795年を中心とし、前後15年ほどに収まる（確率68%）というから、ほぼ繩文時代晚期に入っていることになる。人工的であると否とを問わず、市内中心部で当該期の落込みが発見されたのはこれがはじめてである。乾燥化して以降の古縁倉の地形変化を知る上で貴重だと思うので、触れておきたい。

この落込みは、調査区西北隅の小町大路側溝東壁の精査によっても対岸（北側）が発見されなかったので、幅8m以上はあることになる。ただし、本地点西約20mという至近距離で2001年1月～3月におこなわれた雪ノ下一丁目401番地点の調査でこの落込みは検出されておらず、13m以上（概算）にはならないはずである。深さは、土層堆積状況から上部を想定すると、2m以上にはなろう。8～13mの幅で深さ2m以上となると、かなり大規模なものであるのは確かである。全形は不明だが、逆台形の断面形状をもつと推測できる。壁は約60°の急角度で落ちてゆき、底部はほぼ平坦である。

落込みの底には自然木などを含むやや茶褐色味（黒味）を帯びた砂質土が堆積している。これは流れていたか滯っていたかはともかく、ある時期そこに水が存在していたことを示すものにほかなるまい。とすれば、池か川、もしくは大溝（堀）以外に考えられないが、人工遺物がまったく出土しない上、繩文時代晚期という時代背景からいっても後者の可能性は薄いのではないか。となれば池か河川ということになるが、結論をいえば、両者のいずれであっても、古滑川の流路のひとつである可能性が高いと考える。滞水していたにせよ、当時の池の成立要因を消去法で推測すると、その時点での滑川の河跡湖とみるのがもっとも妥当であるからだ。

上本進二によれば、この一帯は繩文中期～後期から晩期～弥生前期にかけ次第に砂質低湿地から砂泥質平野に変わるが（上本2000）、後者の段階においておそらく何本かあったであろう流路の1本だと考える。

埋没時期の推定は困難だが、堆積土に人工遺物のまったく含まれていないことからみて、この一帯に人跡のおよぶ弥生時代中期後半以前に完了していたと考えたい。

### 2. 中世

今回の調査では、これまであまり検出例のなかった小町大路側溝が長さ10m近くにわたって重複して現われ、変遷・軸方位などの復元がある程度可能になった。簡単に整理しておきたい。

#### 側溝の年代と変遷について

検出された側溝は1・2・3の3本である。年代は出土遺物からみて、13世紀前半にはじまり、14世紀初頭におよぶ。すなわち中世縁倉最盛期のものが検出されたとみられる。なお、図1地点3（雪ノ下一丁目432番2地点）・地点24（小町二丁目374番1地点）の調査では、西側にもう1条の溝が存在する。これは層位からみてもう一段階古いものであるが、今回は調査区外にあって検出できなかつた。

検出された3本の溝それぞれについて、出土遺物に即して年代を整理すると次のようになる。

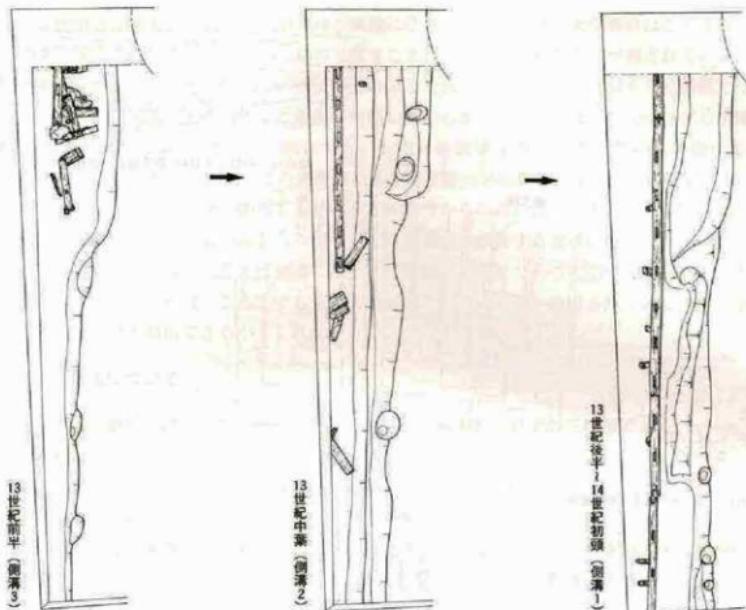


図15 中世小町大路側溝変遷図

溝3—13世紀前半

溝2—13世紀中葉

溝1—13世紀後半～14世紀初頭

いずれも逆台形の掘方に木枠をおさめるもので、この間に技法上の大きな変化はない。若宮大路側溝では13世紀前半のある時期、それまでの素掘り薙研形から、当地点のような逆台形の掘方に箱型の木枠を持つものが出現する（馬淵ほか1996）。この傾向は、当地点も含めたほかの場所においても同様であると予想される。13世紀前半のある時期、溝の形状に、素掘りから箱型木枠への大きな変革があったのである。それがいつかといえば、別稿にも書いたとおり（馬淵ほか1996）、やはり北条泰時による街区再編があったとされる嘉禄元年（1225）からそう遠くない時期と考えるのが自然であろう。そしてこの技法は以後鎌倉時代いっぱい維持される。南北朝期の構枠技法については保留しておきたい。

#### 調査区北域の側溝掘方のふくらみについて

側溝1から3までのいずれにおいても掘方が調査区北域で東にふくらみ、幅が広くなっているところが認められた。この遺構の性格について考えたい。

まず、位置に注意しなければならない。ここはちょうど東勝寺から降りてきた道が小町大路に突き当たる交差点である。そして、溝が改修を重ねられても、このふくらみ自体はつねに同じ場所に存在する。つまり、交差点であるというこの場所の性格とふくらみとのあいだには、密接な関係があると解釈するのが自然であろう。

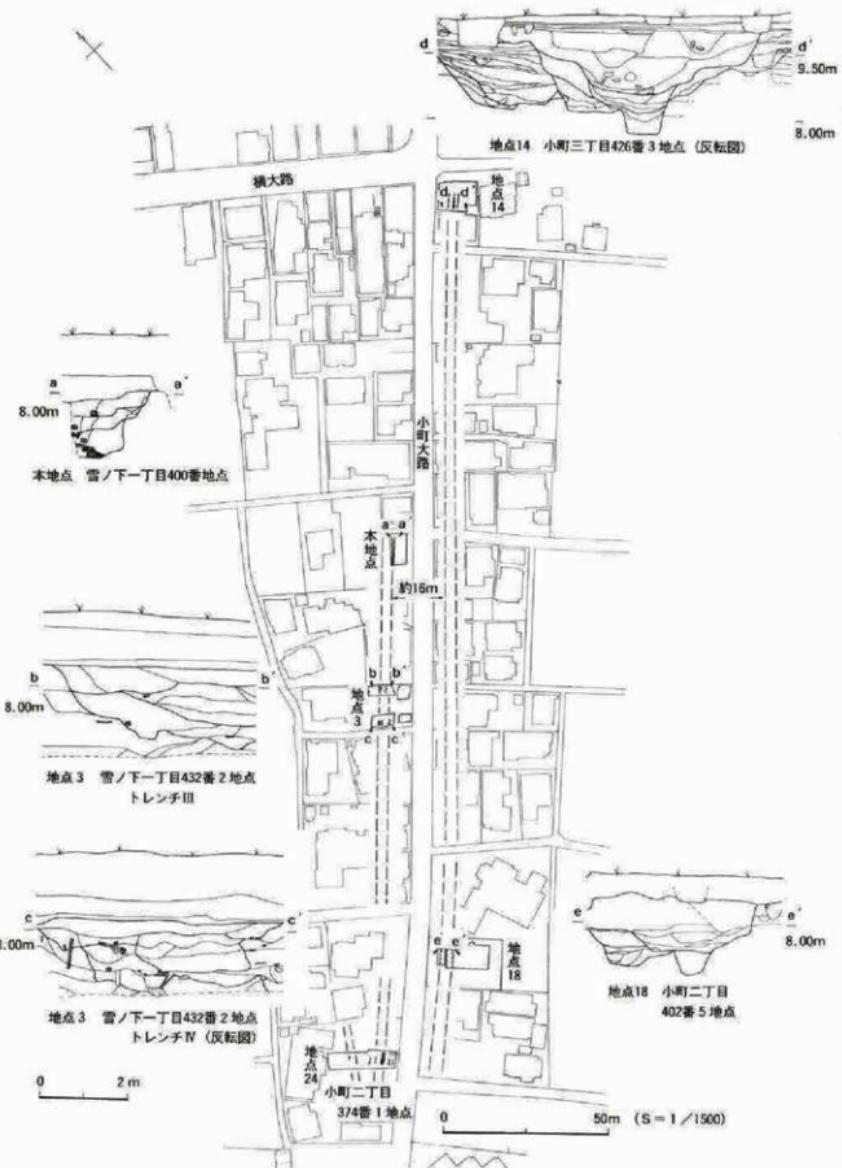


図16 近隣調査地点との対比

つぎに、側溝3に顕著にみられる大型部材の集積に注目したい。これら大型部材はこの地点においてのみ、根太の沈下を防ぐためにいくつか重ねて敷きこまれている。特別な工夫が施されているといつてよいが、第一の点を念頭に置けば、この場所にこのような状況がみられるのはおそらく偶然ではない。というのも、近在の調査でも次のような事実が判明しているからである。ほんの20mほどしか離れていない地点1（雪ノ下一丁目401番）での調査でも、小町大路側溝に直交する大型の東西溝が確認された（2001年1～3月調査、未報告）。この東西溝の東の延長線を想定すると本地点のはば中央部に行く。ふくらみの場所はそのやや北側に相当し、ちょうど東勝寺からの道の続きがあつてもよい位置にある。

これらの点を勘案すれば、このふくらみについては交差点を横断する側溝にともなう何かしらの施設と考えるのが自然であろう。たとえば側溝に渡された橋脚関連施設である可能性を指摘しておきたい。そして、もしそうだとすれば、これまで若宮大路側溝などでいくつか検出されている同様の遺構についても、その可能性が適用できるかもしれない。

#### 出土遺物の量比について

表5・6に出土遺物の破片点数を提示しておく。分類は基本的に以下の三種類である。

1. 土師器皿を技法別に計量したもの（表6）
2. 土器・陶器といった材質による分類一大分類（表7）
3. 2を产地・材質などで分類したもの一中分類（表8）

ほとんどが小町大路側溝からの出土であり、うち大半を土師器皿が占める。遺跡全体の平均比率では約87.5%となっており、これは北条小町邸の若宮大路側溝の92%という数値（馬淵1997）に近いといつてよいが、この点に関しては、もう少し資料の増加をまって評価を試みたい。

鎌倉市内においてばかりでなく、全国的にも破片点数による計量資料が相当に蓄積されてきており、共通の視点に立った分析が可能になりつつある。小野正敏や馬淵らがかねて主張しているように、個体数にとらわれる発想を捨て、単に目安としての破片数計量がいま求められている。この方法の意義については、馬淵1997を参照されたい。

#### 小町大路の幅について

これまでに小町大路沿いでおこなわれた調査の結果に今回の成果を重ね合わせてみれば、大路幅の復元がある程度可能になった。

小町大路側溝が検出されたのは、本地点以外で次の6地点（図1・17参照）がある。

- 西側側溝：地点3 雪ノ下一丁目432番2地点（菊川1989）  
地点24 小町二丁目374番1地点（原1998）  
地点25 小町二丁目389番1地点（原ほか1996）  
地点26 小町一丁目325番1外地点（佐藤ほか1994）

- 東側側溝：地点14 小町三丁目426番3地点（原1996）  
地点18 小町二丁目402番5地点（野本2001）

ここではこのうち地点3・14・18・24を500分の1の地図上に落とすことにより、その作業をおこなった。図17はそれをさらに3分の1に縮小したものである。縮尺比の大きい地図上での計測値なので、誤差が生じていると予想されるが、それを認識した上で検討の目安として理解されたい。

まず西側だが、本地点と地点3トレンチIII・IVを結ぶことにより、掘方および根太の想定線を引くことができる。東側は地点14と18検出の溝掘方資料を用いた。計測は東西溝枠の内側の距離を取った。内

法を巡んだ理由は、これまで筆者が何度か算出してきた若宮大路の幅がこれに基づいているからである。得られた小町大路の幅は、約16mとなった。

筆者は以前におこなった調査で、若宮大路の幅を約33mと推定した<sup>10</sup>（馬瀬1987・同ほか1996）。小町大路の幅が約16mとなったのは、地図上の作図にともなう誤差を考慮すれば、あるいは33mの半分を示している可能性がある。詳細な数値についてはもう少し資料の蓄積を待たねばならないが、他の大路との比較検討の材料として、とりあえず提示しておく。

#### 注

（1）馬瀬1987において33.6mとし、その後馬瀬ほか1996では誤差を修正して約33mとした。実際には33.3mとするべきか。

#### 引用文献

- 上本進二2000 「第4節 鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『神奈川県逗子市 池子桟敷戸遺跡』（仮称）医療保険センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団／東国歴史考古学研究所
- 菊川英政1989 「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5
- 佐藤仁彦ほか1994 「若宮大路周辺遺跡群 小町一丁目325番イ外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10
- 野本賢二2001 「若宮大路周辺遺跡群 小町二丁目402番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
- 原廣志1996 「北条高時邸跡 小町三丁目426番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
- 原廣志ほか1996 「宇津宮辻子幕府跡 小町二丁目389番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
- 原廣志1998 「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表旨』神奈川県考古学会・市教委
- 馬瀬和雄1987 「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
- 馬瀬和雄ほか1996 「北条小町邸跡（泰時・時頼邸） 雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
- 馬瀬和雄1997 「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

（馬瀬）

表6 土師器皿技法別構成比

	土師器皿T種	土師器皿R種	総計
側溝1	35 3.15%	1077 96.85%	1112 100%
側溝2	20 1.96%	998 98.04%	1018 100%
側溝3	208 13.45%	1339 86.55%	1547 100%
遺跡全体	280 5.44%	4869 94.56%	5149 100%

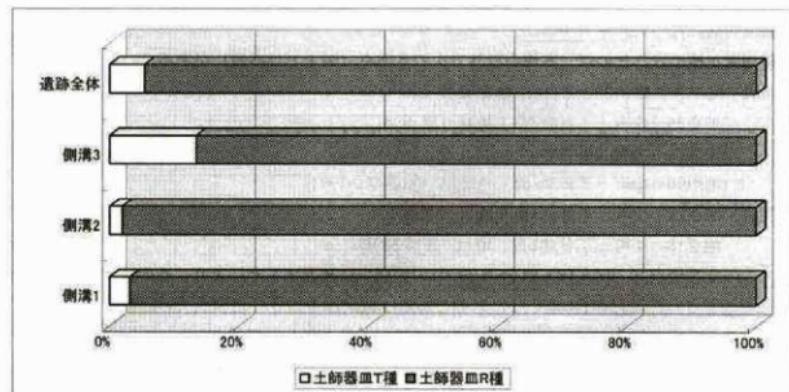


表7 出土遺物構成比1(大分類)

	側溝1	側溝2	側溝3	遺跡全体
土器	1114 92.68%	1018 84.55%	1552 85.27%	5158 87.63%
瓦器	2 0.17%	2 0.17%	0 0.00%	8 0.14%
国産陶器	27 2.25%	7 0.58%	18 0.99%	171 2.91%
瓦	4 0.33%	0 0.00%	2 0.11%	19 0.32%
舶載陶磁器	5 0.42%	5 0.42%	0 0.00%	21 0.36%
金属製品	47 3.91%	148 12.29%	193 10.60%	404 6.86%
木製品	0 0.00%	0 0.00%	1 0.05%	1 0.02%
石製品	1 0.08%	3 0.25%	1 0.05%	20 0.34%
骨	2 0.17%	21 1.74%	52 2.86%	83 1.41%
自然遺物	0 0.00%	0 0.00%	1 0.05%	1 0.02%
計集計	1202 100%	1264 100%	1820 100%	5885 100%

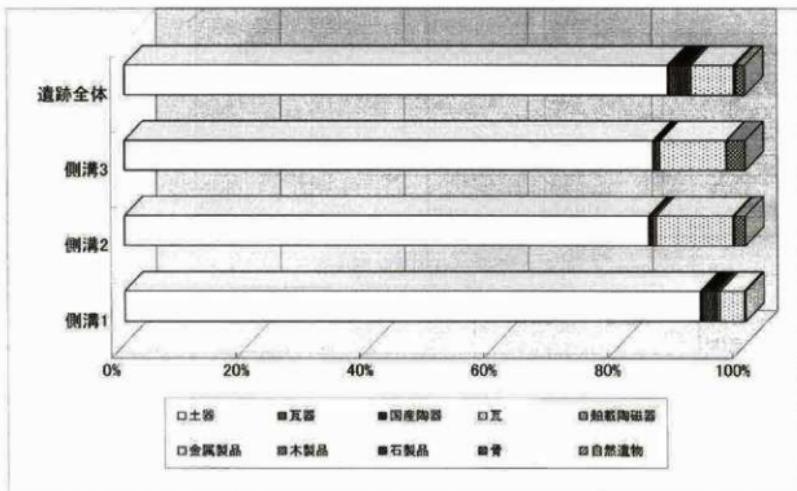


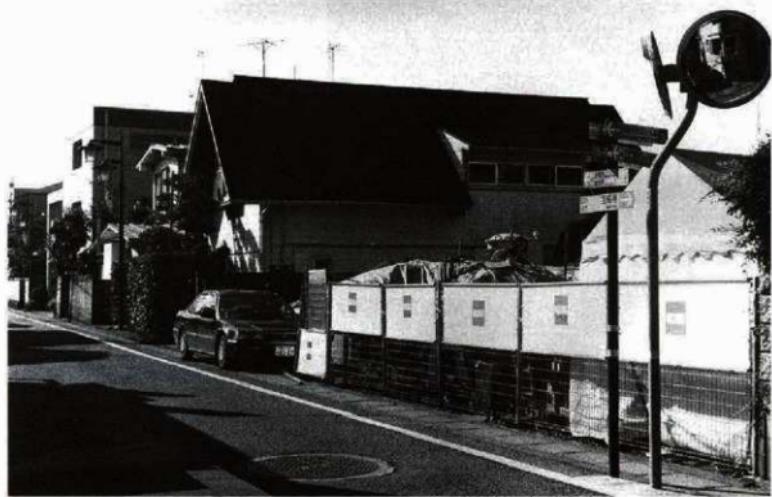
表8 出土遺物構成比2 (中分類)

	側溝1	側溝2	側溝3	遺跡全体
土師器皿	1112 92.51%	1018 84.55%	1547 85.00%	5149 87.51%
土師器皿白色系	1 0.08%	0 0.00%	5 0.27%	8 0.14%
土器	1 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.02%
瓦器	2 0.17%	2 0.17%	0 0.00%	8 0.14%
北部系山茶碗	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.02%
常滑	26 2.16%	6 0.50%	13 0.71%	155 2.63%
瀬美	0 0.00%	0 0.00%	4 0.22%	4 0.07%
東造系	0 0.00%	0 0.00%	1 0.05%	1 0.02%
瀬戸	1 0.08%	1 0.08%	0 0.00%	9 0.15%
備前	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.02%
瓦	4 0.33%	0 0.00%	2 0.11%	19 0.32%
青磁同安窯系	0 0.00%	1 0.08%	0 0.00%	1 0.02%
青磁毫泉窯系	4 0.33%	3 0.25%	0 0.00%	11 0.19%
青白磁	1 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.07%
白磁	0 0.00%	1 0.08%	0 0.00%	3 0.05%
鉄	47 3.91%	148 12.29%	193 10.60%	404 6.87%
漆器以外木製品	0 0.00%	0 0.00%	1 0.05%	1 0.02%
滑石	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.08%
砥石	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.02%
骨	1 0.08%	3 0.25%	1 0.05%	14 0.24%
骨	2 0.17%	21 1.74%	52 2.86%	83 1.41%
貝類	0 0.00%	0 0.00%	1 0.05%	1 0.02%
その他自然遺物	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%
總計	1202 100%	1204 100%	1820 100%	5584 100%



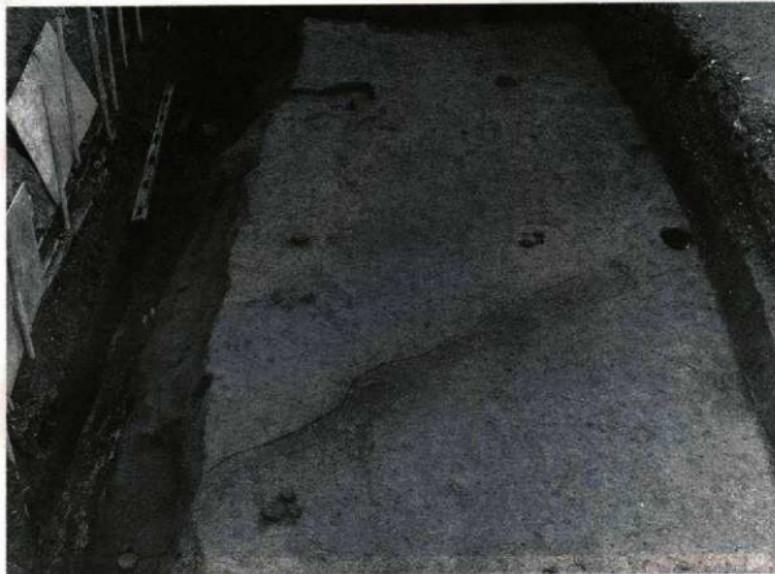


1. 調査地点鳥瞰（左が北）



2. 調査地点近景（手前の道路が現在の小町大路、北東から）

図版2



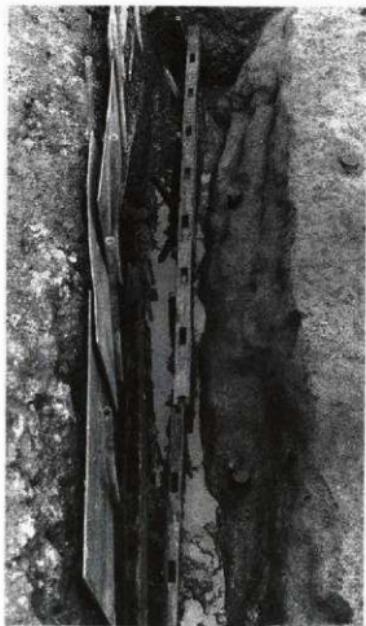
1. 中世面全景（側溝は溝3、南から）



2. 溝3北半部（東南から）



3. 同前（東から）

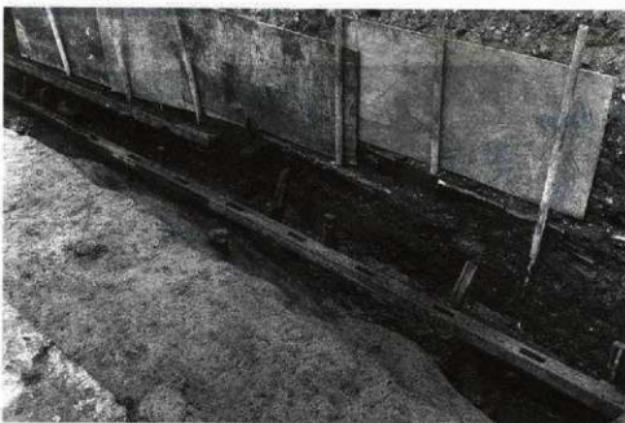


1. 溝1（南から）

3. 同前根太固定状況



2. 同上（北東から）



図版4



1. 溝2（南から）

2. 同前北半部部材出土状況（南から）



3. 同前（東から）





1. 漢北壁土層斷面



2. 同前根系除去後

3. 同前部材出土狀況



図版 6



1. 縄文時代落込み深掘り状況（南から）



2. 同前（東から）



4. 火山灰層排除後の状況（南から）



3. 同切込み肩部分の土層断面（東壁）

5. 火山灰層断面（南西角）





1. 北盤土層断面出土遺物 (図 4)



8-2

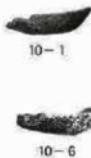


8-4

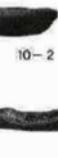


8-6

2. 側満 1 出土遺物 (図 8)



10-1



10-2



10-3



10-4



10-5



10-11

3. 側満 2 出土遺物 (図 10)



12-10



12-11



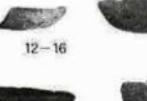
12-12



12-17



12-20



12-21



12-22



12-23



12-29



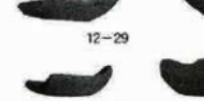
12-30



12-31



12-32



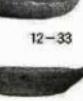
12-34



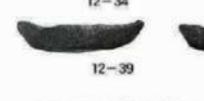
12-35



12-39



12-40



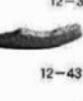
12-41



12-42



12-43



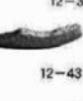
12-44



12-45



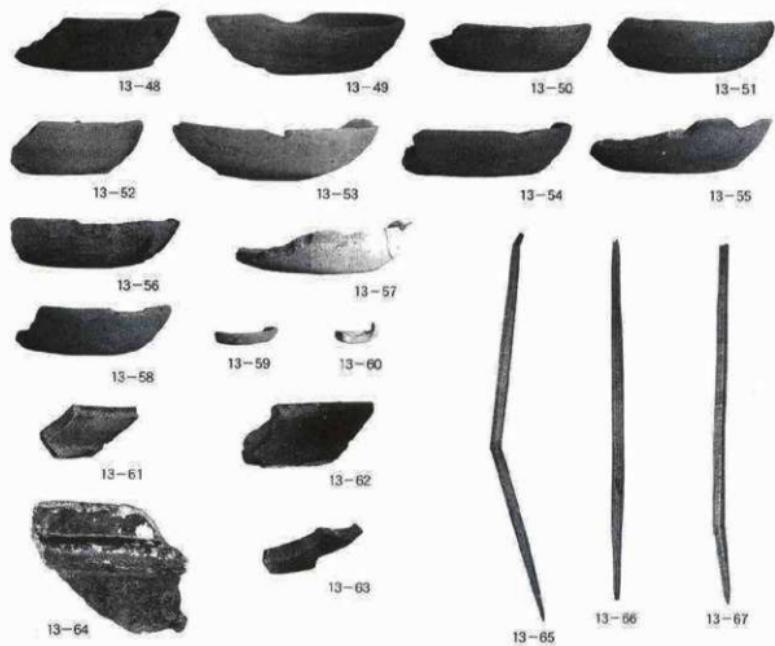
12-46



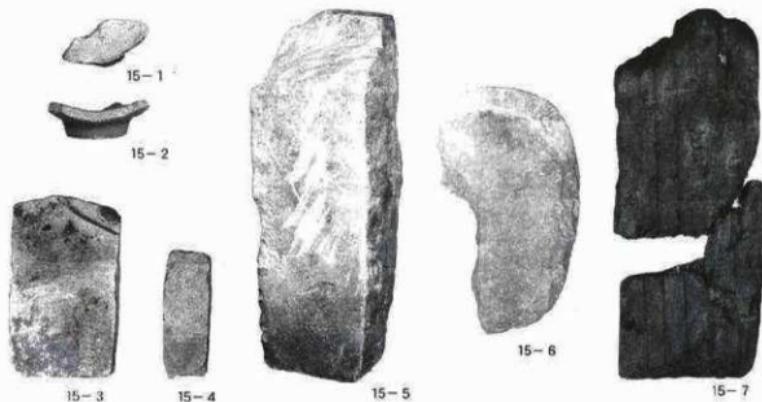
12-47

4. 側満 3 出土遺物 1 (図 12・13)

图版8



1. 倒溝3出土遺物2(図13)



2. 採集遺物(図15)

じょうみょう じ きゅうけいだい  
净妙寺旧境内遺跡 (No. 408)

淨明寺三丁目16番1地点

## 例　　言

1. 本書は、淨妙寺旧境内遺跡内の神奈川県鎌倉市淨明寺三丁目16番1地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、平成12年10月31日から同年11月9日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3. 調査に当たっては以下のとく体制を編成した。

担当者 繼 実

調査員 松山敬一朗、土屋浩美、若松美智子、根本志保

調査補助員 岩崎卓治

4. 本書作成に当たっては、松山敬一朗を中心とする現地調査員の作成した図面などの資料を基に、遺構図の合成・トレースを宗基秀明が行ったうえ、宗基秀明が執筆して編集した。

5. 本書に使用した写真は、松山敬一朗が撮影した。

6. 本書挿図の縮尺は次の通りである。

遺構全測図：1/60

調査区設定図：1/200

7. 報文中における事実認認・誤謬は、編集者の責任である。

8. 本調査に関わる資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	218
第2章 調査の経緯 .....	220
第3章 発見された遺構 .....	221
第1節 調査地内基本土層層序 .....	221
第2節 発見された遺構 .....	223
第4章 調査のまとめ .....	224

## 挿図目次

図1 遺跡位置図 .....	219
図2 調査区設定図 .....	220
図3 遺構全測図 .....	222

## 写真図版目次

図版1a. 調査区全景（北から）	b. 井戸最上層（南から） .....	225
------------------	---------------------	-----

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は、神奈川県鎌倉市の中でも中世都市として繁栄した旧鎌倉市街地の北東域に当たり、遺跡地の南方には滑川の中流域が西方へと流下する。滑川は、かつての六浦道とされる県道金沢鎌倉線の施設される谷を開析し、開析谷は中世鎌倉の南北中心基軸となった若宮大路が設置された沖積低地へと続くが、その手前で滑川は大きく蛇行する。滑川開析谷の南北両側には、低丘陵を削り込んだ小支谷がいくつも滑川に向かって開き、調査地は滑川が大きく蛇行する直前の北側に広がる支谷の北西の低丘陵間に位置する。

遺跡名の「淨妙寺」は、調査地点のある支谷のほぼ中央に位置する禅宗寺院である。調査地点から東方約300mに現存する淨妙寺は、もと極楽寺と称し、足利義兼が文治四年（1188）に開創（開山・退耕行勇）したとされるが、13世紀中ごろに禅宗に改宗し、寺名も淨妙寺に改められた。のち、足利貞氏によって整えられ、鎌倉五山の第五位に列せられる。現在、「淨妙寺旧境内遺跡」とされる地域は、滑川の北岸に広がる支谷のみを指すが、滑川南岸の地域も寺域であったかもしれない。

調査地点は、図1に示したように、現存する淨妙寺の位置する支谷内というよりは、滑川河岸に沿う滑川開析谷の北方丘陵麓の海拔18m前後の平坦地に位置する。空間的には、淨妙寺旧境内内とは性格の異なる可能性がある。

調査地点周辺では、これまでに多くの発掘調査が実施されている。図1には黒丸で調査地点を示したが、本調査地点は現在の淨妙寺境内とともに、滑川の南北岸に位置する調査地点との関連が予想される。本調査地点とも近く、滑川の北岸で現在の金沢鎌倉線に面した地点4では、活発な生活活動が継続して営まれたらしく、中世に帰属する遺構がほとんど削り取られ、数個のピットが遺存するのみであった。ただし、出土遺物には弥生中期後半から後期までの土器もあり、先史時代から継続して人々の生活領域であったことが示されている。滑川が大きく蛇行した地域の北岸に位置する地点8・9でも弥生時代の遺物が出土し、さらに鎌倉時代初期には道路状遺構と大溝（堀？）によって区画された空間に大型の掘立柱建物が建ち並ぶ有力御家人の屋敷跡が発見されている。また、地点7では中世の石塔類各部の石材を使った石列が発見されて、今回の調査地点と地点7に挟まれた丘陵上に現存する杉本寺との関連が暗示されている。

他方、淨妙寺旧境内遺跡に含まれる地点2・3では、13～15世紀の堀跡、掘立柱建物、礎石建物、道路、石列（鎌倉石）など、かなり整備された建物・遺構配置が見られ、寺域内の様相を見せていている。滑川河畔に接した地点5でも掘立柱建物、堀跡、溝跡が発見されている。

## 周辺調査地点と文献

- 1 竹木秀雄 1983 「淨妙寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 1』鎌倉市教育委員会。
- 2 大三輪・原・福田 1988 「淨妙寺旧境内遺跡（淨明寺字福荷小路129番2）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会。
- 3 田代・原 1991 「淨妙寺旧境内遺跡（No.408）（淨明寺向小路90番1地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会。
- 4 大河内・勉 1996 「淨妙寺旧境内遺跡（No.408）（淨明寺三丁目6番3外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告』（第2分冊）、鎌倉市教育委員会。
- 5 松山・宗基 1999 「淨妙寺旧境内遺跡（No.408）（淨明寺三丁目116番2地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15』

平成10年度発掘調査報告書（第1分冊）、鎌倉市教育委員会。

- 6 大上周三 1992「田楽辻子周辺遺跡（No. 33）（浄明寺字宅間562番33）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8 平成3年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会。
- 7 鎌倉市教育委員会 1983「杉本寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』鎌倉市教育委員会。
- 8 杉本寺周辺遺跡 1981年調査。未報告。
- 9 清水葉穂 1991「杉本寺周辺遺跡群の調査（二階堂912番外）」『第1回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会要旨』鎌倉考古学研究所・中世都市研究会。



図1 遺跡位置図

## 第2章 調査の経緯

神奈川県遺跡台帳に中世社寺遺跡として指定されている淨妙寺旧境内遺跡内に位置する本調査地点において、平成12年7月に個人専用住宅建設の事前相談が鎌倉市教育委員会文化財課にあった。住宅建設の計画は、基礎の構築にあたり表層の地盤改良を実施するものであった。相談を受けた文化財課は、工事の実施によって地中の埋蔵文化財への損傷が避けられないと想定し、実際の遺構の有無と遺構の存在する地中深度を確認する確認調査を同年8月15日に実施した。その結果、現地表下60cm以下に具体的な埋蔵文化財が確認されたため、計画にある基礎工事で破壊されることとなる埋蔵文化財を保護するための協議を事業者と文化財課の間で実施した。しかしながら、地盤改良計画に変更の余地がないとの意向が事業者側から示された。計画通りの基礎工事では地中に確認された中世期の遺構の破壊が避けられないと判断した文化財課は、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議を事業者との間で整った後、発掘調査を平成12年10月31日から同年11月9日まで実施した。

発掘調査実施面積は、住宅基礎工事によって地中の遺構が破壊される25m<sup>2</sup>である。調査地点周辺が閑静な住宅地であるとともに、調査面積が狭く、調査深度が地盤改良の及ぶ現地表下100cmまでと浅いために、発掘作業にベルトコンベアを終始用いず、表土層のみを重機で剥ぎ取った後の作業を全て人力で行うこととした。

発掘は、重機による表土掘削後、人力によって遺構面の精査を行った。その結果、調査区の北東部において現地表下55cmで泥岩の岩盤面が検出された。この岩盤の上面は、調査区の中央付近で南東に向けて急激に下方へと傾斜した。傾斜の始まる地点から東方には、破碎泥岩による版築層が水平に堆積していることが試掘調査で確認されていたが、調査区内での発掘深度内ではこの版築層まで達せずに、その上面の中世遺物包含層を認めることで、より下層の調査を断念した。また、岩盤面が浅く残されている部分では、その直上まで、表土層が深く入り込んでおり、調査対象となる生活面が良好に残されていないことが予想された。

発見された遺構群の測量には、調査地近隣に鎌倉市が設置しているArea 9国土座標点から派生させた基点を用いて行った。調査区に派生させた国土座標点の値は、x=-754631.234, y=-23773.528である。



図2 調査区設定図

## 第3章 発見された遺構

現地調査においては、掘り下げ深度が基礎工事の及ぶ現地表下100cmまでと規制されていたため、調査地点に残されていると思われる文化層の全てにわたった調査を行っていない。その結果、発見された遺構のうち、中世期に帰属すると確認できたものはなかった。ただし、調査を行った敷地内に中世まで遡る遺構と遺物の存在することは、今回の調査によって確かめられた。

### 第1節 調査地内基本土層層序

調査敷地内の西端に設定された25m<sup>2</sup>と狭小な調査区の現地表面は、海拔18~17.6mを測る平坦地である。調査はこの現地表から下方へ100cmまで掘り下げた。すでに試掘調査によって、調査対象敷地内的一部分では現地表下60cmに泥岩の岩盤面が見いだされ、またかわらけなどの中世遺物含む中世遺物包含層の存在も確認されていた。しかし、現地表下100cmまでの本調査では、以下に示すような堆積土層の観察によって、中世まで遡る生活面を確実にとられることができなかつた。

まず、最上層の現地表土が試掘結果より深くにまで及び、一部では岩盤面まで堆積し、また調査区の南方では70cmの深さまで達していたことは予想外であった。そのため、現地表土下に残された発掘調査対象の文化層堆積は30cmあまりしかなかつた。発掘調査で確認された最下層の土層は、調査区北側の泥岩の岩盤と南側の第1層である。北側の岩盤は海拔17.4~17.1mの緩やかな平坦面をなし、調査区の中央辺りから南東方へ向けて下方へ傾斜する。傾斜面は発掘調査深度限界の現地表下100cmまで追った限り、かなりの角度をもって落ち込んでいる。岩盤が傾斜し始める地点より南東に確認されたのが第1層である。第1層は、かわらけ細片が多く含み、粘性の強い中世遺物包含層をなす。本土層の上面は、海拔17.1~16.9mのやはり緩やかな平坦面をなすが、調査区の南東部分では岩盤の落ち込み地点よりさらに下方で始めて確認され、後述の第2・3層が残されていないことから、調査区の南東部分では第1層が後世の削平を受けていると考えられる。この第1層の下方に、破碎泥岩による版築地業層の存在することが調査に先立って行われた試掘調査で確認されている。確認された版築地業層は、敷地内の北側に発見される泥岩岩盤面が落ち込んでしばらくした現地表下110cmに認められていた。そのため、版築地業層の存在する深度までの発掘を本調査では行えなかつたのである。第2層は、上層の第3層とほぼ同様の土だが、調査区南側の比較的低位な部分のみに堆積している。現地表土直下の第3層は、調査区の北側にはほとんど残されておらず、南側に厚く堆積している。厚さ30~40cmの第3層は、泥岩疊とともに1707年噴火の富士山の火山灰をブロック状に混じえる堅く絞まつた土層である。この宝永四年の富士山噴火の50日前の10月には大地震があり、第3層はこれらの自然災害の後に行われた整地層である。第3層の上面は、表土層からの掘り込みが所々に見られるが、ほぼ水平である。

以上の調査区内土層堆積状況から、以下の点を確認できる。岩盤面の残る調査区北側では、近年にまで下る時期に行われた削平が部分的に岩盤面まで達していると同時に面上に18世紀代の土層が堆積する。そして調査区の南側では中世に遡る版築地業面まで掘り下げられずに、その上面に堆積する遺物包含層を確認したに留まるうえ、南東部では遺物包含層まで近年の削平を被っている。すなわち、調査区内のいずれの部分にあっても、中世にまで遡る生活面を確実に捉えきれず、北側に残る岩盤面上にわずかに中世遺構存在の可能性を残すのみであるが、後述のように結果として中世遺構は確認できなかつた。

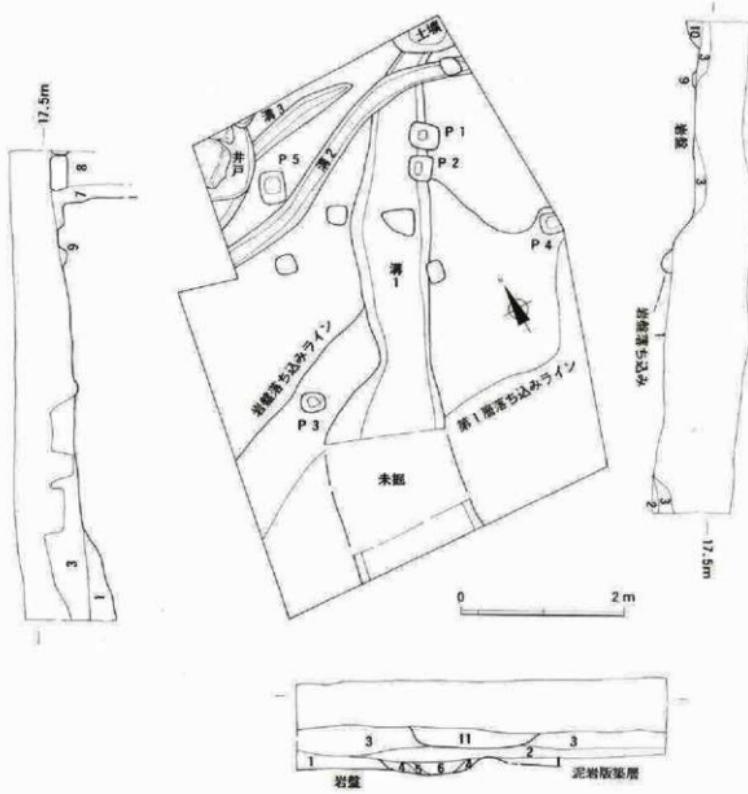


図3 造構全測図

## 第2節 発見された遺構

遺構の確認は、第3層を取り除いた岩盤面上と第1層の現地表下100cmの高さで行った。第1層は生活面でなく、その上面に乗る遺物包含層であるため、当然ながらこの部分からは遺構を発見することはできない。その結果、調査において発見できた遺構は、全て岩盤面上とそれが南方に向けて傾斜し始めた斜面部にてであった。

発見された遺構は、溝3条、土壙1基、井戸1基、ピット5口である。

### 溝1、土壙1

調査区内のほぼ中央を北東から南西に向けて調査区の外に広がるように発見された。溝幅は一定でなく、岩盤面上では狭く、第1層の堆積する地域では広い。岩盤に比べて軟弱な第1層堆積地域では周囲の土が削られてしまったのかもしれない。南端で163cm、北端で32cmを測る。深さは、12~13cmと浅い。溝底面海拔高は、北端で17.2m、南端で16.4mと、北西から南西へと傾斜する。調査区内での溝北端に、溝より9cm深い土壙が掘り込まれている。調査区のある敷地内に滲み出た水を土壙に集めて、溝で排出したものであろうか。

溝の南端域は、発掘調査深度の限界を超えるために未調査となつたが、調査区南壁下を部分的に掘り下げて溝覆土を観察した。溝は第1層の上面から掘り込まれるが、溝断面の中央には宝永火山灰の純層が堆積する。溝1は、富士山の宝永年間噴火前に掘り込まれ、噴火後の1707年12月から程なく埋没したと考えられる。また、第1層上面から掘り込まれているものの、中世前期の遺物を包含する第1層の本来の堆積時期直後とは時間的に隔たりがあるため、第1層自身が溝開墾以前に上面を削平されていたことを想定できる。

溝の南北軸線方位は、N-30°-Eである。

### 溝2・3

溝2は溝1に重複して、東西方向に蛇行しながら岩盤面上に掘り込まれる。調査区の東西外へと延伸する。幅はほぼ一定で25cmを測る。底面の平坦な断面逆台形を呈する。深さは6~12cmと所によりまちまちだが、17.28から17.20cmまでのほとんど平坦な海拔高を示して西方へと下がる。調査区の東西壁面に堆積土層と掘り込み面を確認できる。東壁面では、岩盤面から掘り込まれて、溝覆土の上に第3層が堆積する。覆土は泥岩粒子を多く交える青灰色の還元色を示す砂質土である。宝永火山灰をブロック状に含む第3層が上を覆うため本溝はそれ以前であり、また覆土に宝永の火山灰を含まないから、溝1よりも前に機能を停止したものと考えられる。

溝3は、溝2の北50cm程にやはり東西方向に軸線をもって掘り込まれている。10cm前後の深い溝である。発見された長さは短いが、東端が収束するため、西方へと下るものであろう。

これらの東西溝は、溝1が掘り込まれる以前に調査区の設定された敷地周辺の北から西側に迫る丘陵から滲み出る谷水を排水するために設けられたものであろう。

### 井戸

調査区の北西隅に発見されたものの、確認できたのは全体の一部のみで、遺構の性格も判然としないが、覆土内に差し入れた長さ1mのピンボールでも底面に届かず、また土質に軟弱な感触をえたため、井戸と判断した。確認できたのは井戸覆土最上層にのみである。矩形を呈すると思われる井戸枠内覆土

最上層に軟弱な覆土を覆うように砂質凝灰岩切石が置かれていた。この切石直上にまで現地表土が堆積していたために、井戸の掘り込み位置は不明である。

#### ピット

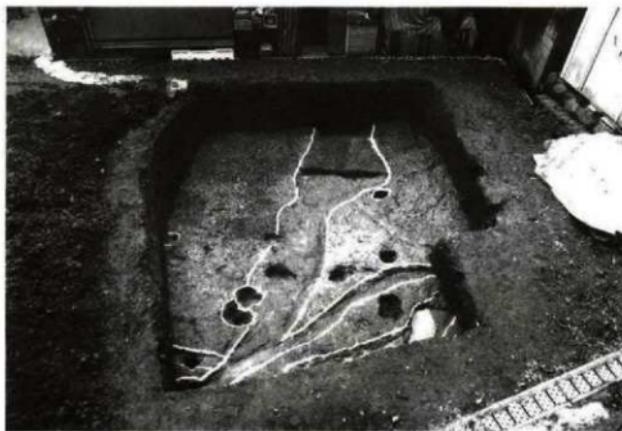
調査では矩形の小さな掘り込みが10口発見されたが、内5口の覆土からはビニール袋が発見されて、昭和以降に埋められたことがわかる。また、調査区東壁に土層堆積を確認できるピット4でも覆土の直上に現地表土が堆積するため、掘り込み時期を確定する資料が得られなかった。他の4口のピットも同様に掘り込み時期は不明である。

以上の遺構内覆土からの出土遺物はなかった。

## 第4章 調査のまとめ

今回の発掘調査では、海拔17.5m前後の丘陵麓の緩斜面地に江戸期前半の時期に岩盤面上に谷水排水施設を設けて生活空間を作成し、宝永の大規模な自然災害の後には大掛かりな整地作業を行うような住民の生活のあったことを確認できた。

また、調査区の北側に残されていた岩盤面上に確実な中世遺構を発見できなかつたものの、南側の第1層の中世前半期遺物包含層下に中世遺構の存在を示唆したことは一定の成果であったろう。



a. 調査区全景 (北から)



b. 井戸最上層 (南から)



ざいもくざまちやいせき  
材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座四丁目256番地点

## 例　　言

- 本報文は材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳 No.261）内、鎌倉市材木座四丁目256番1地点に於ける個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成12年11月9日から同年12月9日まで実施した。調査対象面積は約103m<sup>2</sup>。
- 調査体制は以下の通り。

調査員 野本 賢二 山上 玉恵 渡邊 美佐子  
調査補助員 繁治屋 勝二 田畠 衣理 土居 栄治  
作業員 河原 龍雄 藤枝 正義 吉本 脩三
- 本報文に關わる整理作業は、沙見一夫・宗基富貴子・渡邊・田畠が分担して行った。原稿は全て沙見が執筆したが、遺構の事実記載に関しては野本の調査日誌を参考に、遺物は宗基・渡邊・田畠の実測時観察記録を基にしている。編集は渡邊・田畠の協力の下沙見が行った。又、本報に使用した写真は遺構を野本が、遺物を田畠が撮影した。
- 出土遺物の内、船載陶器は手塚直樹氏（青山学院大学）に御教示を賜った。
- 現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。  
(社)鎌倉市シルバー人材センター 東国歴史考古学研究所 鎌倉考古学研究所 勝又建設
- 本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

## 目　　次 本文目次

第1章 環境と立地	.....	229
第2章 調査の概要	.....	232
第3章 遺構と遺物	.....	234
第4章 調査成果	.....	247

## 挿図・表目次

図1 材木座町屋遺跡の範囲と調査地点	229	図11 土坑6・方形竪穴6・7・8	243
図2 國土座標上の位置とグリッド配置	232	図12 土坑・ピット群	245
図3 遺構全測図と堆積土層	233	図13 遺構外出土遺物	246
図4 方形竪穴1・土坑	234	図14 材木座町屋遺跡の地形と河川	251
図5 土坑2	235		
図6 方形竪穴4・11	236	表1 遺構一覧表	247
図7 方形竪穴2	237	表2 出土遺物計測表(1)	248
図8 方形竪穴2出土遺物(1)	238	表3 出土遺物計測表(2)	249
図9 方形竪穴2出土遺物(2)	240	表4 出土遺物破片数表	249
図10 方形竪穴5	242	表5 確認調査地点一覧	250

## 写真図版目次

図版1 方竪1・土坑2(北から)	253	方竪2付近上層遺物出土状況(北から)	
方竪1内獸骨(北から)		土坑6土層断面(南から)	
土坑2内遺物出土状況(北から)		方竪6～8付近(南から)	
土坑2内貝類除去後(北から)		調査区北半調査最終状況	
方竪1・土坑2完掘(北から)		中世地山上の遺構	
方竪13(東から)		出土遺物	255
図版2 方竪11(南から)	254	出土遺物	256

# 第1章 環境と立地

材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No.261）は、旧市街地南西部の海に南面した低い範囲が呼称されている。JR横須賀線を挟んだ北側は、『吾妻鏡』の建長3年（1251）及び文永2年（1265）に商業地として定められた「大町」「米町（般町）」「魚町」を内包し、山裾平野と徹高地状の砂丘に立地する米町遺跡、滑川を境に西側一帯は群集する方形堅穴と人骨が多数発見される由比ヶ浜中世集団墓地遺跡、南西沖には貞永元年（1232）築港と伝える和賀江島を望み、中世鎌倉の中でも人馬・物資の往来が多く庶民層の生活感に溢れた地域であろう。一方、丘陵に限られた東側山裾には能藏寺・実相寺・感応寺各址の他、遺跡内には社寺が数多く現存する。東側の丘陵内海側に開口した谷戸内にも多くの寺院址が在り、この弁ヶ谷に源を発する豆腐川が海へと流下する。

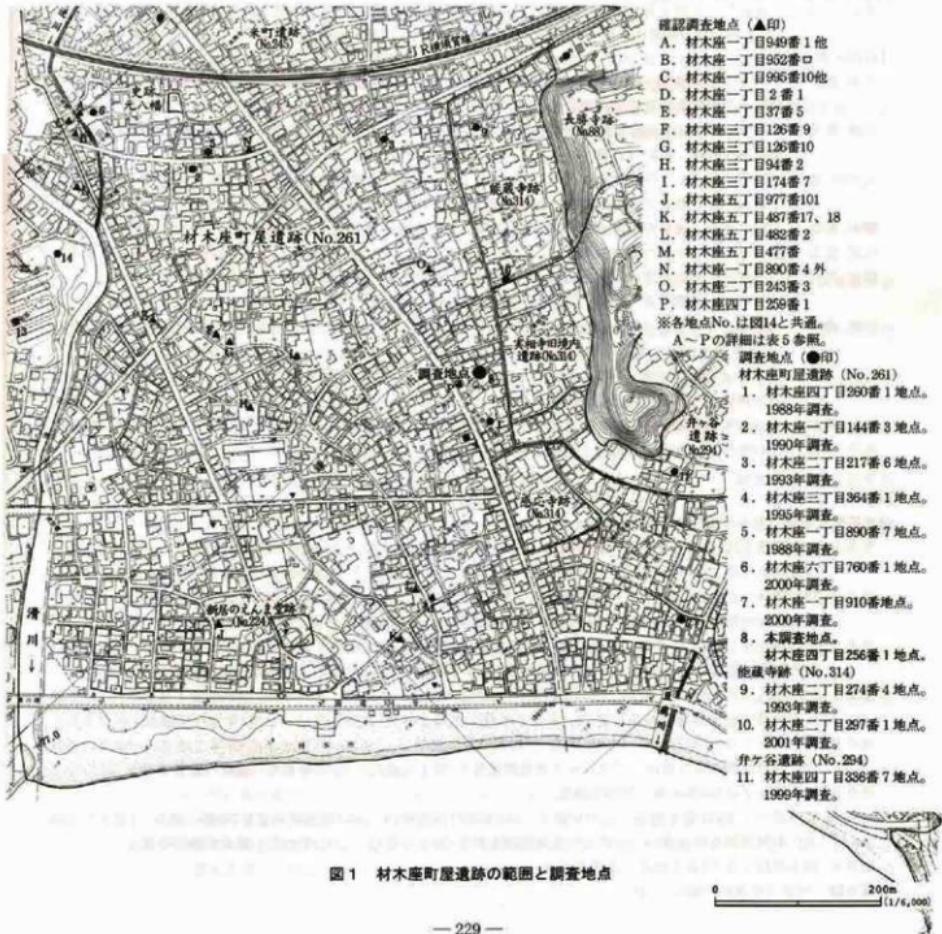


図1 材木座町屋遺跡の範囲と調査地点

本遺跡地は概ね風成或は海成砂層上に立地し、現況の海拔は東側山裾付近で10m前後、南と西に向って緩やかに傾斜して地点2から地点4を結ぶ辺りはほぼ5m前後、地点Eから南の海岸橋北西付近一帯に海拔3m前後の低い範囲があり、地点6から西の国道134号線北側では6~7mで新居のえんま堂跡付近は海拔10m程である。過去の調査例から観ると、大まかに地点7から地点4を経て地点6を現地形に沿って結んだ線より西（南）では、現段階では遺物は出土するものの中世期の生活址は発見されていない。

調査地点は遺跡地のほぼ中央東端で、実相寺旧境内遺跡とされる範囲にほど近く現況海拔8m程、付近の確認調査及び地点1・4の調査成果に違わず基盤層は砂層であり、上本（2000）に掲げば弥生時代から古墳時代にかけて閉塞された砂州上に堆積した砂丘状の微高地に立地する。遺構群の主体は方形堅穴建物と土壙群である。出土遺物から観た年代は14世紀代が主体であるが、瀬戸窯後期の製品が一定量出土することも知られている。

#### 【引用・参考文献】

- 上本 進二 2000年3月「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『東国歴史考古学研究所調査研究報告 第26集 神奈川県逗子市稲敷戸遺跡発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所 227~246頁
- 斎藤 直子 1999年3月「13~19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告第81集』国立歴史民俗博物館 115~129頁
- 大河内 敏 1997年3月「V. 中世鎌倉の河川について」『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』一小町一丁目1028番1地点一』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 10~22頁
- 齋木 秀雄 1989年4月「鎌倉の地形を復元する」『よみがえる中世【3】 武士の都鎌倉』平凡社 52~55頁
- 松尾 実方 1989年4月「中世の浜と海岸線」『よみがえる中世【3】 武士の都鎌倉』平凡社 228~232頁
- 藤沢 良祐 1994年「山茶碗研究の現状と課題」「研究紀要」第3輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1997年「中世瀬戸窯の動態」「研究紀要」第5輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中野 謙久 1992年「中世知多古窯址群の押印文」—ミクロ流通史のための予備的研究—『知多半島の歴史と現在 No. 4』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 1994年「赤羽・中野一産地における福岡年にについて」『中世常滑焼をおつて』シンポジウム資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 河野 誠知郎 1993年「中世鎌倉火跡考 一東国との関連において一」『考古論叢 神奈川』 第2集 神奈川県考古学会
- 永井 久美男 1996年「日本出土鉢統覧」兵庫県埋蔵文化財調査会

#### 調査地点・報告書

材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No. 261）

- 地点1. 材木座四丁目260番1地点 1988年調査。「材木座町屋遺跡（No. 261）（材木座四丁目260番1外）」  
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』1990年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点2. 材木座一丁目144番3地点 1990年調査。「材木座町屋遺跡（No. 261）（材木座一丁目144番3）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7 平成2年度発掘調査報告』1991年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点3. 材木座二丁目217番6地点 1993年調査。「材木座町屋遺跡（材木座二丁目217番6地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告（第2分冊）』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点4. 材木座三丁目364番1外地点 1995年調査。「材木座町屋遺跡（No. 261）（材木座三丁目364番1外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告（第1分冊）』1997年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点5. 材木座一丁目890番7地点 1998年調査。「材木座町屋遺跡（No. 261）（材木座一丁目890番7地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告（第1分冊）』2000年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点6. 材木座一丁目910番地点 2000年調査。
- 地点7. 材木座六丁目760番1地点 2000年調査。「材木座町屋遺跡（No. 261）（材木座六丁目760番1地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点8. 材木座四丁目256番1地点 本調査地点。

龍藏寺跡（神奈川県遺跡台帳No. 314）

- 地点9. 材木座二丁目274番4地点 1993年調査。『能郷寺跡 材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査』1995年7月  
能郷寺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会
- 地点10. 材木座二丁目297番1地点 2001年調査。2002年度報告。
- 弁ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No.294）
- 地点11. 材木座四丁目336番7地点 1999年調査。「弁ヶ谷遺跡（No.249）材木座四丁目336番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第1分冊）』2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（神奈川県遺跡台帳No.372）
- 地点12. 材木座四丁目336番7地点 1953・56年調査。『材木座遺跡 鎌倉市材木座発見の中世遺跡とその人骨』1956年3月 日本人類学会/岩波書店
- 地点13. 由比ガ浜二丁目1034番1外地点 1990・91年調査。「由比ガ浜中世集団墓地遺跡（由比ガ浜二丁目1034番1外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 平成4年度発掘調査報告（第1分冊）』
- 地点14. 由比ガ浜二丁目1037番1地点 1992年調査（未報告）。
- 名越ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No.231）
- 地点15. 大町三丁目1217番1地点 1993年調査。「名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1217番1地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告（第1分冊）』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点16. 大町四丁目1880番6地点 1993年調査。「名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1880番6地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告（第1分冊）』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点17. 大町四丁目1888番地点 1999年調査。「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1880番6地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 平成11年度発掘調査報告（第2分冊）』2000年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点18. 大町三丁目1826番9地点 2000年調査。本誌第1分冊所収。
- 地点19. 大町三丁目。 2000年調査（未報告）。
- 地点20. 大町三丁目2356番11地点 2001年調査。2001年度報告。
- 地点21. 大町三丁目。 2000年調査。2001年度報告。
- 米町遺跡（神奈川県遺跡台帳No.245）
- 地点22. 大町二丁目933番地点 1988年調査。「米町遺跡（大町二丁目933番地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』1990年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点23. 大町二丁目929番地点 1988年調査。「米町遺跡発掘調査概要」『神奈川県埋蔵文化財調査報告31 昭和62年度神奈川県埋蔵文化財緊急発掘調査概要』1988年3月 神奈川県教育委員会
- 地点24. 大町二丁目2411番2地点 1988年調査。「米町遺跡（大町二丁目2411番2地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5 昭和63年度発掘調査報告』1989年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点25. 大町二丁目2315番外地点 1993年調査。「米町遺跡（大町二丁目2315番外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 平成6年度発掘調査報告』1995年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点26. 大町二丁目391番1地点 1996年調査。「米町遺跡（No.245）大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 平成9年度発掘調査報告』1998年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点27. 大町二丁目2338番1地点 1997・98年調査。「米町遺跡発掘調査報告書」1999年9月 米町遺跡発掘調査団
- 地点28. 大町二丁目2312番4,10他 1998・99年調査。「米町遺跡 第6地点、第7地点発掘調査報告書」2000年12月 鎌倉市米町遺跡発掘調査団
- 地点29. 大町二丁目2404番地点 1999年調査。「米町遺跡（No.245）大町二丁目2404番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 平成11年度発掘調査報告（第2分冊）』2000年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点30. 大町二丁目2313番15地点 1999年調査。「米町遺跡（No.245）大町二丁目2313番15地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第1分冊）』2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点31. 大町二丁目2308番1地点 1999年調査。「米町遺跡（No.245）大町二丁目2308番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17 平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』2001年3月 鎌倉市教育委員会
- 地点32. 大町二丁目。 2001年調査（未報告）。
- 地点33. 大町二丁目。 2001年調査。2002年度報告。

注 \* 調査地点及び刊行報告書は2001年9月末日現在。未報告の地点は各調査担当者のご教示に依る。  
\* 地点・は材木座町屋遺跡・能郷寺跡・米町遺跡は全調査地点、由比ヶ浜中世集団墓地遺跡・弁ヶ谷遺跡・  
名越ヶ谷遺跡及び確認調査地点は、報文中で触れたものを各遺跡ごとに調査年順に付している。何れも渡邊美  
佐子協力の基筆者調べべに拠る。

## 第2章 調査の概要

### 1. 調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用住宅建設の事前相談を受け、確認調査と諸協議を経て建物基礎構造に因り埋蔵文化財への影響を避けられない範囲と深さを対象として実施された。調査対象面積は約103m<sup>2</sup>。

調査では確認調査の結果から現地表下約50mまでの近世以降の堆積土を重機に依って除去後、海拔6.8m前後の中世砂層上面（図3）で遺構確認を行った。調査深度には規制があることから発見した遺構の全てを完掘し得ない事が予想された為、遺構プラン確認時に全景写真的撮影と暫定的な記録保存を行った。その後各遺構を規定深度に注意しながら掘り下げた。

調査の結果、中世期は全ての遺構は完掘し得なかったものの、方形堅穴建物、土坑（溝状土坑を含む）、ピット他を発見し、記録保存等調査に係わる作業終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と器材等を撤収し調査終了とした。

### 2. 調査の方法（図2）

調査に際し、調査地点の敷地境界を囲む方眼を調査範囲の形状に合わせて任意に設定した。図2に国土座標上の位置とグリッド配置図を示した。グリッド杭C-5に求めた国土座標値（X : -77 061.434 Y : -25 184.549）は、付近3級基準点No. 53410・No. 53412とグリッド配置の位置関係を現地調査中に調査員が計測した数値を、整理作業の際に机上の計算で求めたものである。同様に付近の調査地点図1の地点1・地点4上に国土座標軸X : -77 105、Y : -25 210とY : -25 250を図上で求めた。調査区内グリッドは2m方眼とし、北西隅をA-1として東西方向に算用数字を、南北方向にはアルファベットを付した。グリッド軸は真北に対して26° 40' 東に振れている。

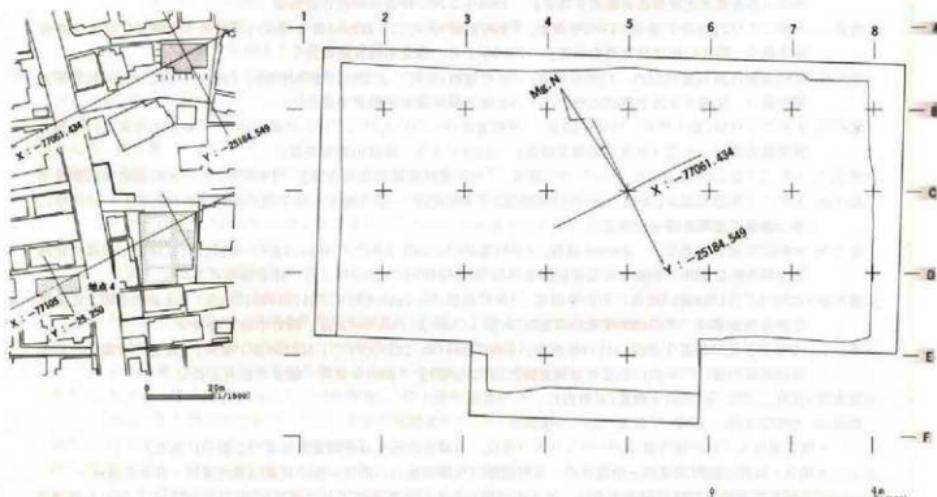


図2 國土座標上の位置とグリッド配置

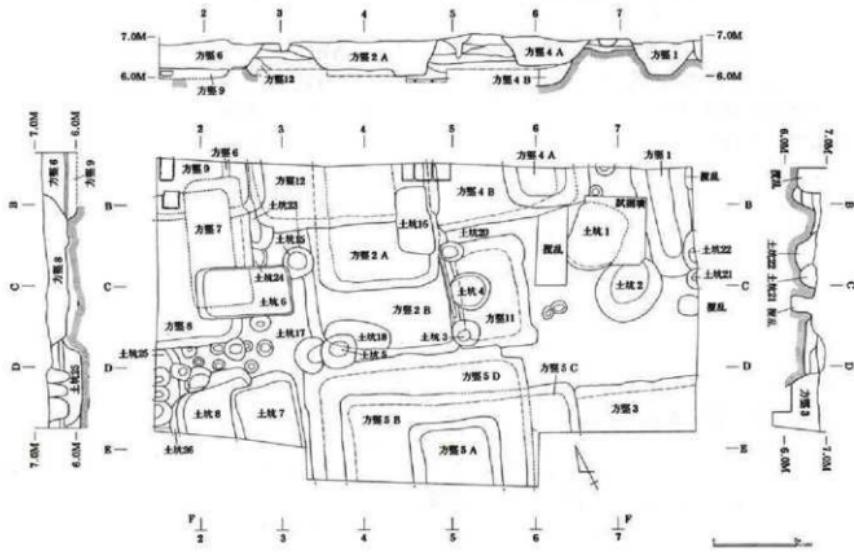


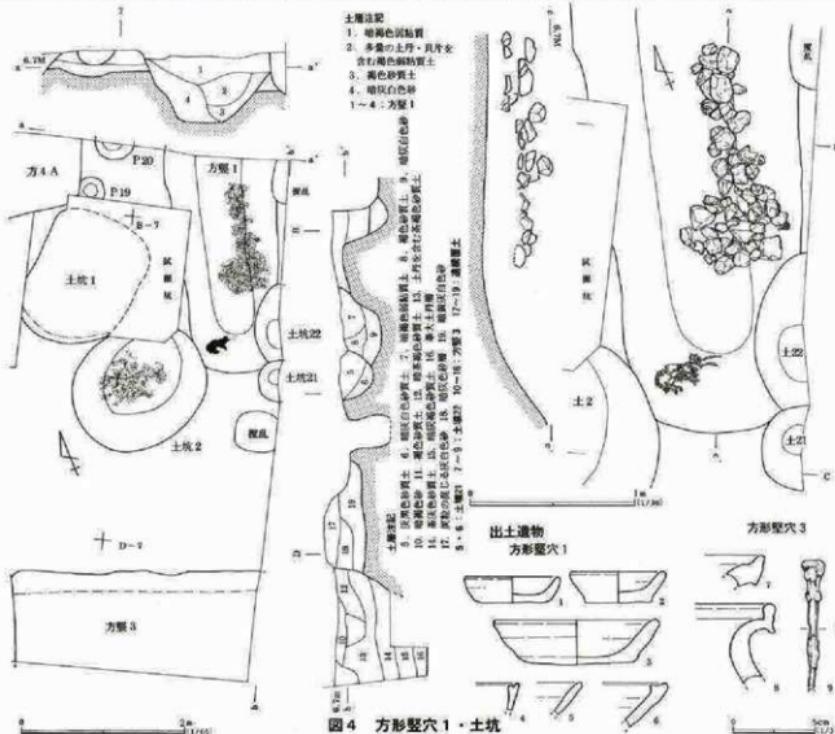
図3 遺構全測図と堆積土層

### 第3章 遺構と遺物

本章では発見された遺構と出土した遺物について述べる。調査では図3の砂層上で遺構確認を行い掘り下げたが、調査規定深度に掘り遺構の完掘を果せず底面が未確認のものが多い。重複関係の新旧は、遺構確認時の平面プランと規定深度までの土層断面から判断している。各遺構名称は調査時に付した遺構名そのまま使用し、規模や覆土及び新旧関係については報文末表1に纏めて記した。出土遺物については前掲引用・参考文献の内、瀬戸窯・山茶碗窯製品は藤沢（1994・1997）、常滑窯製品は中野（1992・1994）、火鉢類は河野（1993）を参考にし、計測値と出土破片数は報文末の表に示した。以下、概ね調査順に従い調査区北東から順に重複関係のまとまり毎に述べていく。報文中では便宜上挿図の天方向を北と表現し、遺構名称「方形堅穴建物」は挿図中及び文中でも適宜「方堅」（或は「方」）と略していく。

#### 方堅1・土坑1・土坑2

遺構名称は方堅1となっているが、平面範囲や土層断面の判断から、浜地によく発見される地割や境界を示唆する溝状土坑であろう。土坑2と方堅3の間は方形堅穴や土坑が繰返し興廃される中での地域で暗黙の内に残された通路状の空閑地と考えられる。土坑2上層から出土したかわらけは、土の移動に



伴つてもたらされたものと考えると、本調査地点付近には図示した遺物の年代を示す遺構が営まれていると推測される。図5に出土状況を図示した。土坑1は多量の獸魚骨がなげこまれているのが確認調査時に捉えられており、底部は完掘し得ていないものの確認調査の実測値を元に復元している。

### 方堅3

平面プランと堆積土の様相から方形堅穴の北西一角を発見したと判断した。16層が同一遺構の下層とすれば掘り方底面を人為的に強化化して考えられる。方堅3覆土より古い17層から19層は、調査時に平面的に明確に捉えられなかつたが、同範囲内・層位からの出土遺物は全て中世以前の土器小片である。

### 出土遺物（図4）

図4の1～6は方堅1出土遺物。1～3は糸切り底のかわらけ。何れも器表橙色で胎土は粉質。4は龍泉窯系青磁で香炉か。5・6は瀬戸窯の製品。5は灰釉縁袖小皿。軸は淡緑色、体部下半は露胎。6は灰釉折縁深皿。軸は灰緑色。方堅1の他の出土遺物は、舶載品が青磁碗2点と褐釉壺片1点、瀬戸窯製品は後期の灰釉瓶子が1点、火鉢類が出土している。本遺構は調査区内では遺構底面まで完掘しており、図示した遺物で年代は反映されている。

7～9は方堅3出土遺物。4は産地不明東播系片口鉢。胎土は暗灰色で、白色微石が多く混じる。5は常滑窯甕。9は鉄釘。方堅3の他の出土遺物は、かわらけは全て糸切り底で、胎土が粉質で体部が外反するタイプは含まれず、所謂薄手丸深形が1点出土している。舶載品は青磁劃花文碗1点を含めて6点、瀬戸窯製品は前期の瓶子、中期前半の折縁深皿、中・期の底卸目皿が各1点出土しているが、その殆どが被熱している。本遺構内の調査し得た深さと範囲内の出土遺物には、15世紀代のものは含まれない。

1～22は糸切り底のかわらけ。何れも器表橙色で胎土は粉質。23・24は瀬戸窯の製品で、23は灰釉折縁深皿。軸は黄緑色。24は灰釉縁袖小皿。外面は露胎、内面の軸は白濁気味の黄緑色。

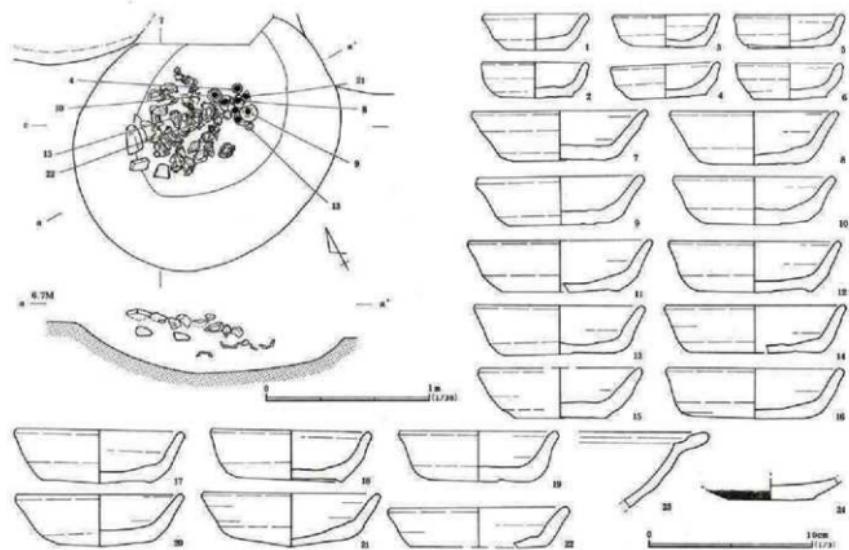


図5 土坑2

#### 方堅4・方堅11

方堅4は、プラン確認の不手際から土坑と石敷きの基礎構造を持つ方形堅穴を一緒に掘り上げ、更に西で重複する後述する方形堅穴2とも遺物が混在してしまった。調査区壁の土層断面と調査時の記録から、土坑を方堅4 A、底面に鎌倉石を3石確認した方形堅穴を方堅4 Bとした。方堅4 Aは覆土に粘質を含み、出土遺物は極少ない。確認範囲の平面形や堆積土層から観ても、溝状土坑とは異なると思われる性格は不明。方堅4 Bとした石敷きは東の限界と思われる17・18層中には発見されず、方向も上場プランとは若干ずれるため、方堅4 Bの基礎構造と判断するのは早計かもしれない。この範囲からの出土遺物は元々少ないとその内、方堅2と混在無く採り上げられてものを図示している。

方堅11は方堅2・5との重複に不安があるがほぼ単独で発見された小型の方形堅穴。方堅2が本方堅より新しいと判断しているが、

土坑3・4は本方堅の覆土最上層の可能性もある。遺構ほぼ中央に極狭い範囲で掘り下げた際に確認した砂層を、遺構底面とを考えている。

#### 出土遺物（図6）

図6の1~8は方堅4出土遺物。先に触れた通り4 Aとした土坑と、4 Bとした方形堅穴の出土遺物が混在している。

1は糸切り底のかわらけ。器表暗橙色で胎土は粉質。2~4は舶載品で2は景德鎮窯青白磁で梅瓶の蓋。釉は淡青色。3は白磁の壺。乳白色に極薄く施釉。4は白磁の口兀皿。やや緑味で乳白色の釉。5~7は常滑窯の製品。5は壺、6・7は片口鉢。8は土坑廃棄の際の混入品で、南多摩産須恵器の碗。胎土・器表は暗灰色弱粘質緻密土。他にはかわらけ片、常滑窯甕片、鉄釘が出土している。かわらけは、体部が外反傾向で粉質胎土のものが含まれる。

9は方堅11出土の龍泉窯系青磁蓮弁文碗。釉はオリーブ色で、外底面は露胎。方堅11からは他に、かわらけ小片、舶載品褐釉壺胸部小片、常滑窯甕片が出土している。それぞれ小破片からの観察ではあるが、15世紀代所産と判断されるものは含まれない。



図6 方堅4・11

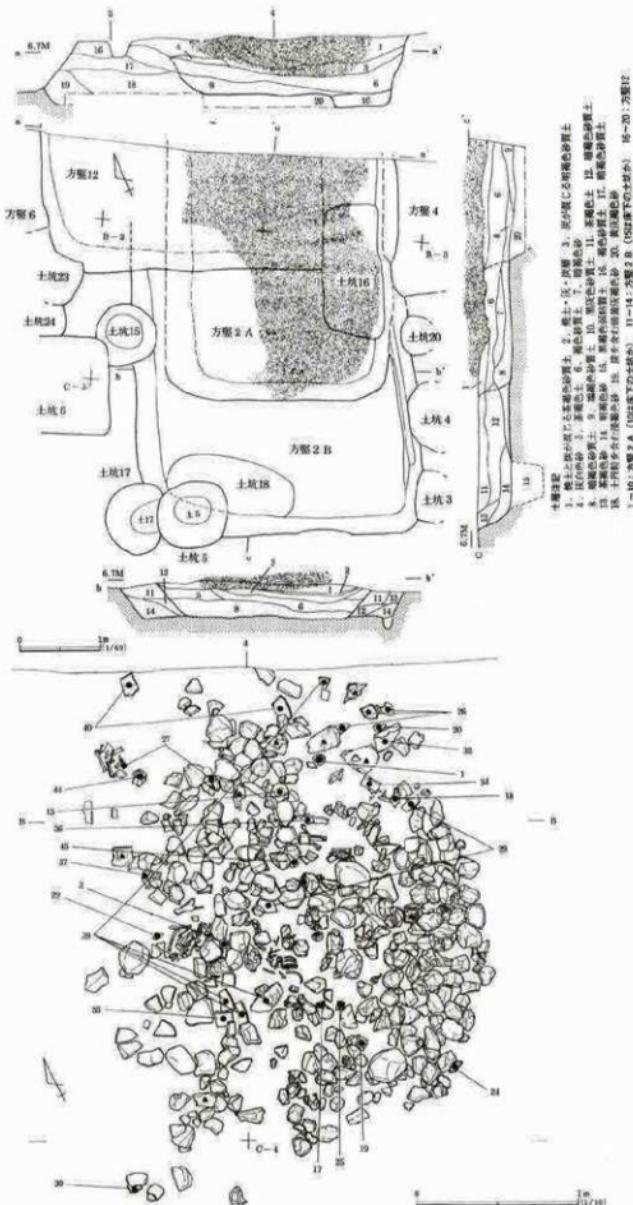


圖7 方形豎穴2

## 方堅2・方堅12

図示した範囲を検出する際に、複数の方形堅穴と一緒に掘り上げたらしく遺構内土及び調査区壁土層断面から、方堅2A・2B・12の少なくとも3基の重複と判断した。方堅2A・2Bは遺構平面図上分けてはいるが遺物は混在している。

方堅2Aは覆土上層に多量の人頭大土丹や鎌倉石、瀬戸窯製品をはじめとする被熱した遺物や獸骨が投込まれた範囲と判断している。上層の遺物他の出土状況を、図化した遺物番号と接合関係と共に縮尺1/30で図示した。土丹や鎌倉石の被熱痕は一定ではなく、本遺構が埋没する最終段階で他所からもたらされた土砂に多量の遺物他が混入したものであろう。土坑16は本遺構の底面に伴う可能性がある。

方堅2Bは方堅2Aよりやや南にずれてほぼ真下にあり、東壁直下南北方向に溝状に表現されている範囲は構造部材の痕跡と思われる。北側の限界が方堅2A・方堅12との重複で曖昧になってしまったが、確認し得た範囲だけでも大型の方形堅穴であろう。土坑18は本遺構の底面に伴うものか、下層の別遺構かは不明。

方堅12は方堅2A・2Bに因り覆土の大半を失われ、19層とB-3南に残る地山層から方堅2A・2Bとは別の遺構であると判断された。10層は本遺構の東壁下底面の堆積土の可能性もある。確認した範囲では構造や規模等は不明。

### 出土遺物（図8・9）

図8・9は方堅2とした範囲からの出土遺物。先に触れた通り方堅2A・2Bの遺物が混在している。

1～13は糸切り底のかわらけ。何れも器表橙色系で胎土は粉質。図化した以外にもかわらけは多量に出土しており、その中には小破片ではあるが胎土は粉質ではなく器壁薄く碗型のものも上層・下層を問

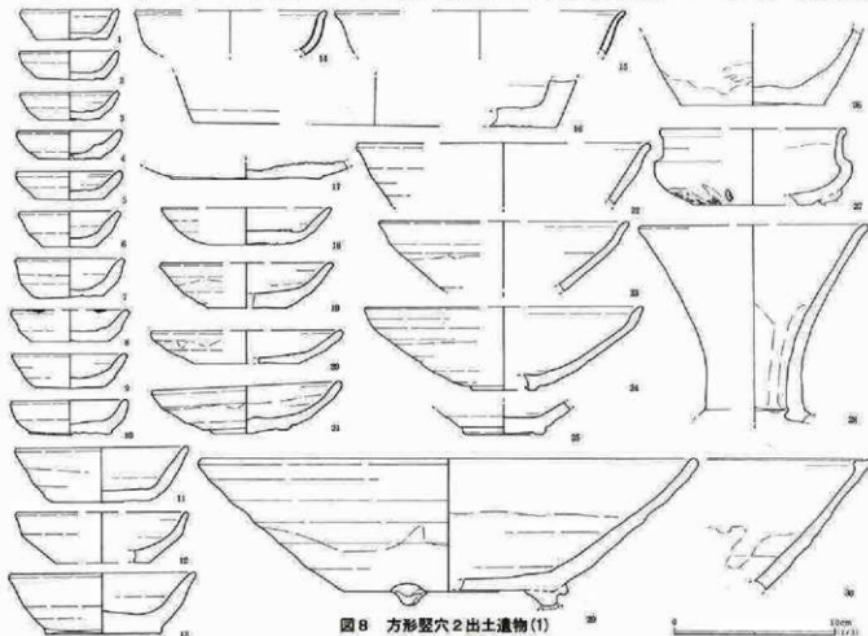


図8 方形堅穴2出土遺物(1)

10cm  
(12.7)

わず出土している。

14~16は舶載品。14は龍泉窯系の青磁端反碗。破損した状態で被熱しており、釉は白濁し草緑色。15は龍泉窯系青磁鉢。14と破損した状態で被熱し、釉は白濁した草緑色。16は掲軸の壺底部。遺存部は全面茶色に施釉される。接合はしないが胴部片も出土している。又、他には小破片で白磁瓶子片、青白磁梅瓶片も出土している。

17~30は瀬戸窯の諸製品。17は灰釉鉢。釉は淡黄緑色。18~21は縁釉小皿。18の釉は淡黄緑色で内底面はハケ塗り、19の釉は濃灰緑色、20の釉は淡灰乃至淡黄緑色で内底面は極薄いハケ塗り、21の釉は灰緑色で内底面は露胎。外底は雑な削り高台。22~25は平碗。22の釉は淡緑色で半透明。小片からの復元の為、口径には不安がある。23の釉は淡灰緑色で、外面体部下半は露胎。24の釉は灰緑乃至淡黄緑色で、外面体部下半は露胎。25の釉は淡灰緑色で、内底面は微妙に被熱。26は壺か瓶子の底部。釉は淡灰緑色。27は灰釉袴腰型の香炉。破片の状態で被熱しており、外面体部下位は煤が付着、口唇部の釉は吹き上がる。釉は淡緑色。28は尊式花瓶。釉は強い被熱により白濁気味の淡緑色。29は灰釉直線大皿。破片の状態で強く被熱し、釉は白濁気味の暗緑色。内面体部下半は雑なハケ塗り、内底面には遺存部分で目痕が3ヶ所残る。30は灰釉折縁深皿。釉は灰緑色乃至暗黄緑色で、外面体部下半は露胎。方堅2とした範囲内特に上層の被熱した土丹や鎌倉石と同レベルから出土した瀬戸窯製品はほぼ全てを固化している。

図9の31~40は常滑窯の製品。31~37は甕、内、31・36は頸部の傾きから壺かもしれない。35・36の胎土は暗紅色味で粗いが他は暗灰色系で概ね緻密。32・35は被熱。38~40は片口鉢II類。

41~44は火鉢類。41・42は瓦質でIV類。接合はしないが同一個体と観られるものが方堅5から出土している。43は瓦器質でIV類。44は瓦器質風炉の脚。方堅2とした範囲内から出土した火鉢は、I・II類は含まれないが、III類の胴部片は上層・下層を問わず破片ではあるが数点出土している。

45の石製品は上野産の中砥。生産地工具痕は観られない。46は用途不明鉄製品。47~50は鉄釘。51~56は銅錢。51は唐銭で乾元重寶、758年初鋤の楷書。52~55は北宋銭。52は天聖元寶、1023年初鋤の楷書。53は皇宋通寶、1038年初鋤の楷書。54・55は熙寧元寶、1068年初鋤で54は楷書、55は篆書。56は南宋銭で淳祐元寶、1241年初鋤の楷書。

図9の57~59は方堅12出土遺物。57は白磁の壺。釉は青味乳白色に極薄く施釉される。外面は部分的に鉄発色する。58は瀬戸窯灰釉の水滴で、釉は淡黄緑色、外底面は露胎。59は常滑窯の甕。破片の状態で強く被熱。方堅12からは他に薄手丸深型のかわらけ、瀬戸窯灰釉盤類、白磁壺等が出土している。

図9-60は土坑17出土の銅錢。北宋銭で政和通寶、1111年初鋤の篆書。

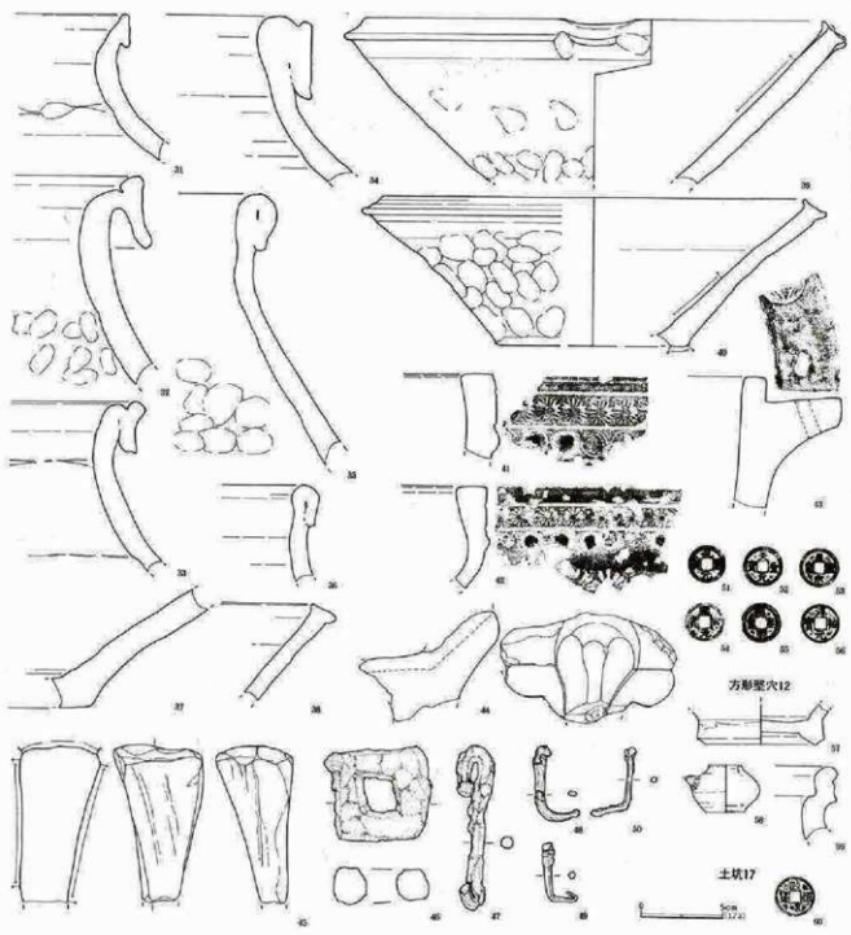


图9 方形竖穴2出土遗物(2)

## 方堅5

方堅5とした範囲内で、3基以上の方形堅穴が重複する。調査時に記録した造構内を横断する土層断面と調査区壁の土層断面から可能な限り復元して図示している。何れも構造は不明で、出土遺物も混在してしまった。

### 出土遺物

図10は方堅5とした範囲からの出土遺物。

1・2は糸切り底のかわらけ。1は器表橙色で胎土は粉質、2は器表肌色系で胎土は弱粉質。

3・4は舶載品で白磁。3は口兀皿。釉は微妙に緑味乳白色で、やや厚め。4は壺の底部。釉は青味乳白色で、外面下位は鉄発色。

5～15は瀬戸窯の諸製品。5は鉄釉の浅碗。釉は黒茶色で、内面体部中位～下方は薄いハケ塗り、4ヶ所目痕が観られる。口縁部周辺の破損断面も摩滅しており、破損後も使用しているかもしれない。6～8は灰釉卸皿。6・7は破片の状態で強く被熱し、6の釉は白濁気味の淡緑色、7は白濁気味の淡黄緑色。何れも外面部下位は露胎。8の釉は灰緑色で透明、外面部下位は露胎、外底面は糸切り。9は灰釉の盤類と思われるが直縁大皿かもしれない。釉は被熱で白濁した淡黄緑色。内底面はハケ塗りで2箇所目痕が観られる。外面部下端は露胎。10は鉄釉の袴腰型香炉。釉は暗茶色で、外面は軽い被熱。11は筒型香炉。釉は外面口唇下は茶褐色の鉄釉、口唇から内面は淡灰緑色の灰釉に掛け分けられる。12は片口鉢。内面は著しく摩滅する。13・14は灰釉折線深皿。何れも破片の状態で強く被熱し、釉は白濁した淡緑色。15は灰釉柄付片口。釉は黄味淡緑色。

16～18は常滑窯の製品。16は広口小壺。17は片口鉢1類。18は壺か壺。

19～21は火鉢類。19は瓦質IV類。方堅2出土図9～41と接合はしないが同一個体の可能性がある。20は瓦質IV類。体部上方の破片と思われ、突帯が廻る。21は瓦器質で小型の香炉。22は石製品で凝灰岩質系石質の石鉢。内面上半は摩滅し、下半の横方向の痕跡は使用痕か制作時かは不明。

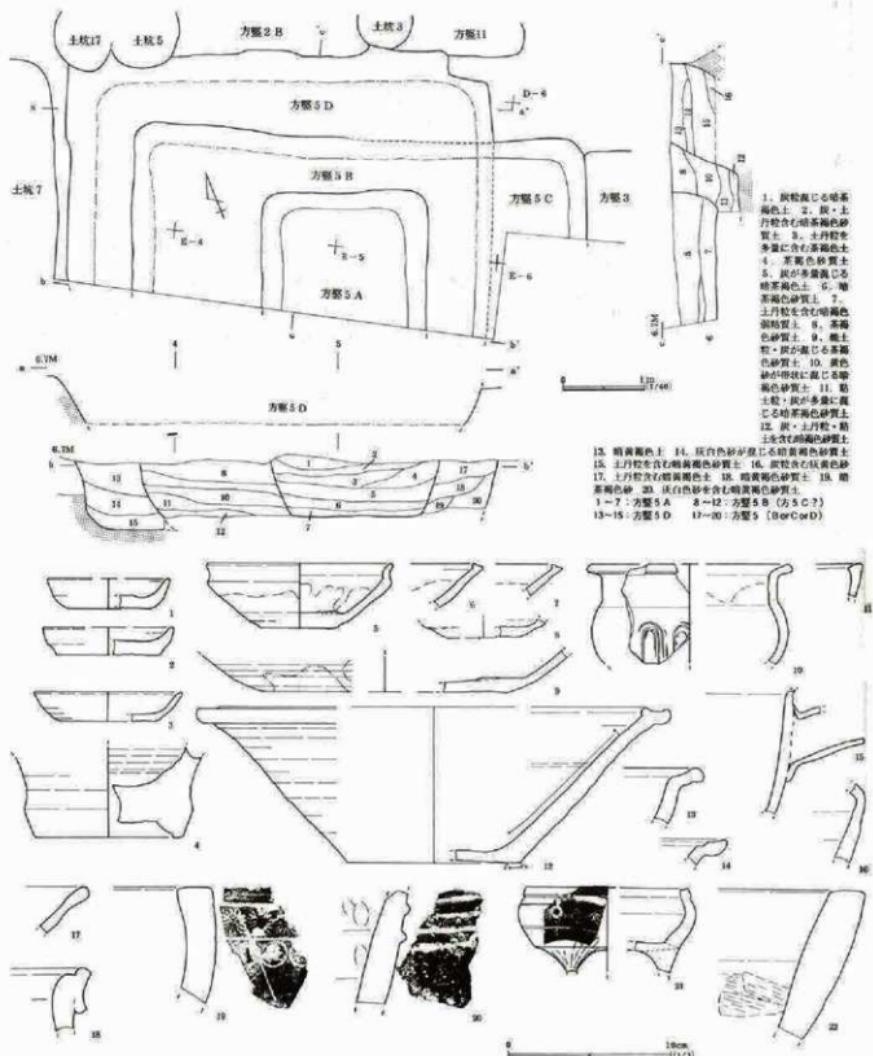


图10 方形竖穴5

## 方堅6・7・8

本調査区内で小規模な遺構が複雑に重複して発見された一角で、20層を境とした平面プランと、土層断面を本に可能な限り想定して図示している。出土遺物は最上層の土坑6は分離し得たが、他は混在してしまっている。

土坑6は最小規模の方形堅穴の可能性がある。16層で掘り方底面を強化している様子が窺えるものを方堅6、その下位に構造に係わるものか底面付近に鎌倉石が発見されたものを方堅9、20層を掘り方底面としながら壁の立上がりが不明瞭で方堅6・9の南限を不明瞭にしている上層の遺構を方堅8、方堅8の遺構底面でプランが確認された下位のものを方堅7とした。

### 出土遺物

図11の1～4は土坑6出土遺物。

1は糸切り底のかわらけ。器表肌色で胎土は粉質土。2は白磁の壺。乳白色で薄く施釉される。3は瀬戸窯青釉の播鉢1個。4は瀬戸窯灰釉鉢皿。釉は灰緑色だが殆ど剥離している。土坑6からは他に、白かわらけ、常滑窑瓈、土師器、自然遺物が出土している。

図11の5～14は方堅6～8とした範囲からの出土遺物。

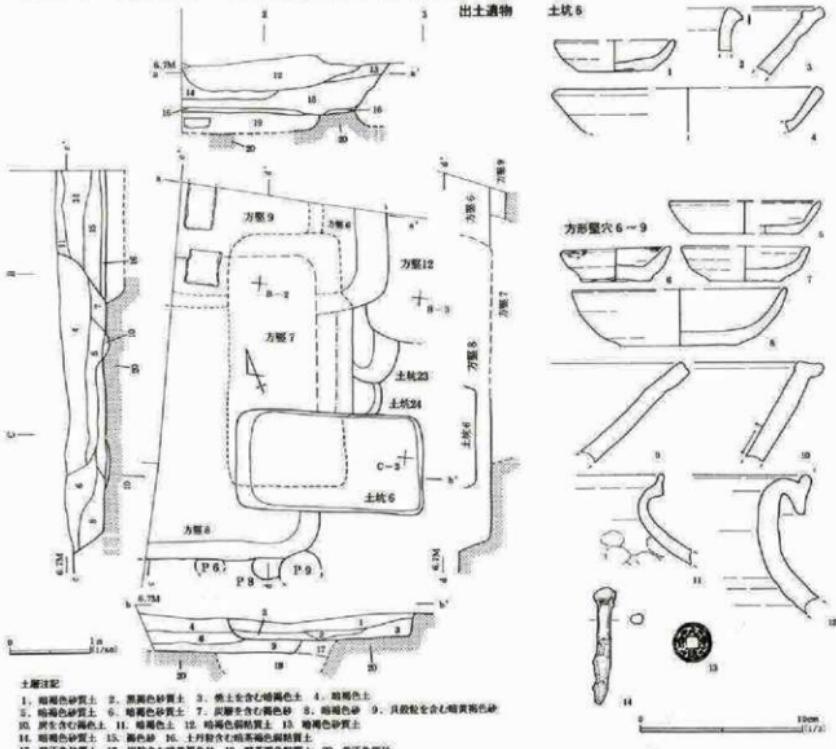


図11 土坑6・方形堅穴6・7・8

5は白磁の口兀皿。青味乳白色に厚めに施釉される。内外底面には煤が付着する。舶載品では他に青磁碗、青白磁梅瓶胴部小片等が出土している。

6～8は糸切り底のかわらけ。6は器表橙色で胎土は粉質。7は器表淡橙色で胎土は弱粉質土。8は器表暗橙色で胎土は弱粉質土。この範囲から出土したかわらけは8のタイプが一定量出土している。

9～12は常滑窯の製品。9・10は片口鉢II類。11・12は甕。小片ではあるが、備前窯播鉢、火鉢類、土鍋も出土している。13は北宋錢で元豐通寶、1078年初鋤の行書。14は鉄釘。

#### 土坑7・8

土坑とピット群から構成される。土坑の内、平面方形で壁の立上がりが垂直に近いものは、北側或は西側の大型の方堅に附隨する小方堅の可能性がある。ピット群は上層が削平されているとしてもやや浅く、方堅の軸方向では並びはつかみ得なかつた。土坑25～27は調査区南西隅にL字型に下層確認のトレシチを設定して掘り下げたところ発見した。間層を挟んで掘り込まれており、土坑25・26が区画や地割を示唆する溝状土坑の可能性があり、土坑27は平面形及び土層断面の観察から方堅の可能性がある。

#### 出土遺物

##### 図12の1～5は土坑7出土遺物。

1は糸切り底のかわらけ。器表淡褐色で胎土は弱粉質土。2は瀬戸窯製品で灰釉柄付片口。釉は淡灰色で極薄い。3～5は常滑窯の製品。3は山茶碗。口縁に降灰、内面は摩滅している。4は片口鉢I類。5は甕。

##### 図12の6～9は土坑8出土遺物。

6・7は糸切り底のかわらけ。器表淡褐色で胎土は弱粉質土。8は常滑窯の甕。外面は微かに被熱。9は常滑窯片口鉢I類。

##### 図12の10～14はピットからの出土遺物。

10はピット2出土の手捏ね成形のかわらけ。器表褐色で焼成は良好。11はピット6出土の手捏ね成形のかわらけ。器表褐色で焼成は良好。12・13はピット13出土。12は常滑窯片口鉢I類。外面は被熱、内面には極薄く煤が付着する。13は手捏ね成形のかわらけ。器表褐色で焼成は良好。内外面共に部分的に煤が付着する。14はピット10出土の糸切り底のかわらけ。器表褐色系で、胎土は弱粉質土。

土坑25～27からの出土遺物は極少ないが、かわらけは手捏ね成形のものを含み、厚手で体部が外反気味、粉質胎土のものは含まれない。常滑は甕の口縁部で観ると6型式である。先に触れた様に、間層を一層挟むことから、これまでに触れた方形堅穴が繰返し興廃する前の遺構群とその年代を示す遺物と考えられる。

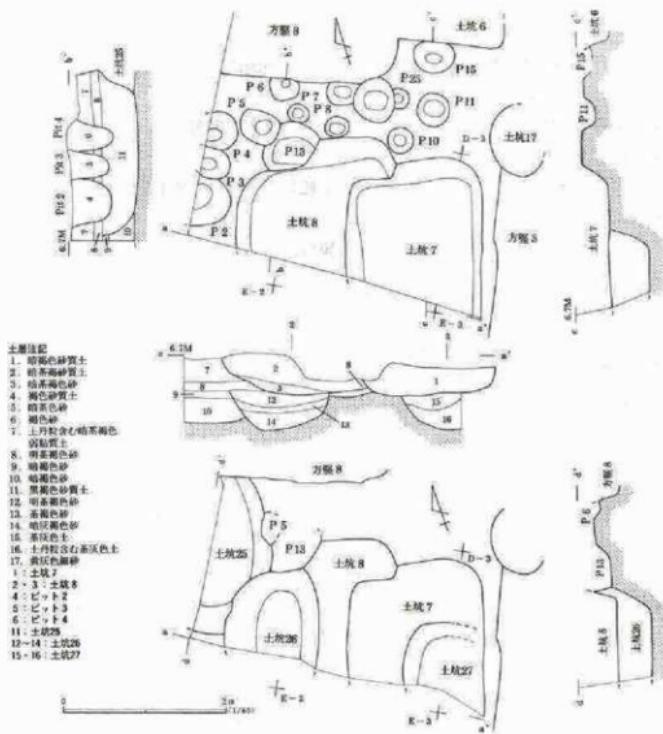
##### 図13には表土掘削時の採集遺物や、帰属は不明となってしまったものをここに含めた。

1～3は糸切り底のかわらけ。1は器表橙色で胎土は粉質土。2は器表暗橙色で胎土は弱粉質土。3は器表橙色で胎土は粉質土。

4は白磁玉縁碗。淡黃白色に極薄く施釉される。5は白磁の碗。釉は乳白色で極薄く、内底面は使用によるキズが目立つ。

6～9は瀬戸窯の製品。6は鉄釉天目茶碗。釉は口唇部付近は暗茶色、他は黒色に近い。7・8は灰釉折縁深皿。7は釉は淡緑色で透明、内外面とも軽い被熱。8は破片の状態で被熱し、釉は白濁した淡黄緑色。9は碗型入子。胎土は明灰色弱粘質緻密土。

10～16は常滑窯の製品。10～14は甕。13に内面には白色物が付着する。15は片口鉢I類。16は甕の胴部片軸用磨製品。17は備前窯播鉢。18は產地不明播鉢。胎土は長石や小石を多く含む灰白色弱粘質緻密土。内面下位に条線が微かに観られる。



**出土遺物**

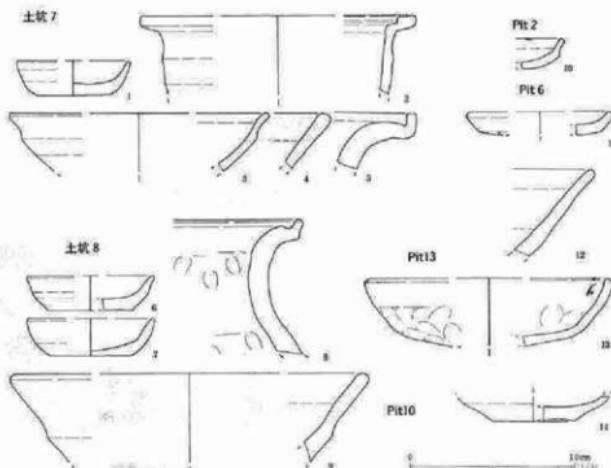


図12 土坑・ピット群

19・20は伊勢系の土鍋。19は胎土灰白色で瓦質に近く、外面には煤が付着。20は白色微石を含む暗灰色土で、外面はべつたりと煤が付着する。

21は赤間ヶ石産の硯。紫石。ムネの張りは弱く、オカは厚手。裏面に再加工の線刻と、オカの前縁寄りの鋸引き後の折り採りは消費地加工痕。縁は破損。

22は鳴滝産向田山の仕上砥。両側面の鋸痕は殆ど摩耗しているが生産地での幅が遺存し2寸四分を測る。所産は近世以降と思われる。

23は産地不明中砥。灰白色で黒斑と雲母が微かに観られ、やや砂っぽいが緻密な凝灰岩。裏面の生産地加工痕は丸鋸で近代以降の所産と思われる。24は骨角製品は笄。25は北宋の銅錢で景德元寶、1004年初鋤の楷書。26・27は常滑窑壺胴部片押印文拓影。

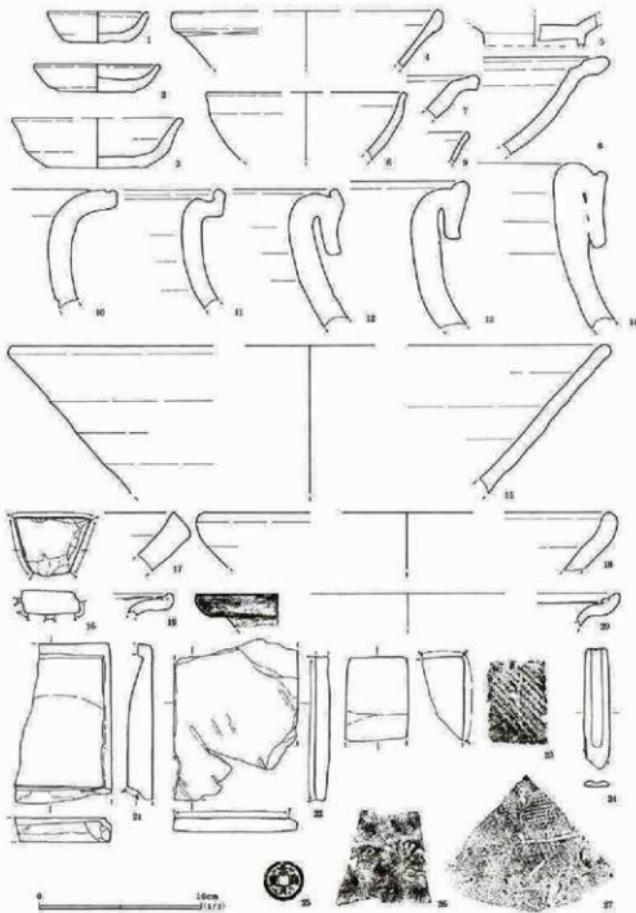


図13 遺構外出土遺物

## 第4章 調査成果

今回の調査では、確認調査の段階で遺構上面層が近世以降に削平を受けていることが予想された。又、調査深度も規制されていたこともあって殆どの遺構を完掘し得ず、遺構群の把握には困難を極め、複雑に重複する遺構群を層位的に把握し、その新旧関係を明らかにし得たとは言い難い。一方で、方形堅穴が繰り返し興廢し、付近の調査例と同様に瀬戸窯後期の製品が多量に出土する等一定の成果も得られた。遺構内遺物から観て、調査区南西の土坑やピット内の遺物から13世紀代にはこの付近に人の手が入ったことが窺え、方堅2や土坑2の出土状況から、15世紀の前半には方堅群は埋没していると考えられる。

本調査地点が含まれる材木座町屋遺跡は範囲が広いものの調査例が少なく、調査された地点も遺跡地の北及び東に偏っている。既に多くの考察がされていることではあるが確認調査の成果をも含めて今一度概観し、本調査のまとめとしたい。

表1 遺構一覧表

図No.	遺構名	平面形	長軸方向	南北m	東西m	推定高さm	深さm	備考 (印は遺構底面まで調査したもの)	新旧関係(新>旧)
4	方堅1	溝状	南北	(2.66)	1.36	6.80	0.82	○ 土坑・覆土上層に人骨	土坑31>土坑22>方堅1 土坑2>方堅1 方堅10>方堅3
	土坑1	不正円形	—	1.72	1.46	6.70	0.33	○ 鮫魚骨多量発見	
	土坑2	不正円形	—	1.65	(1.26)	6.75	0.42	○ 鮫魚骨・かわらけ発見	
	土坑21	不正円形	—	僅	0.52	6.75	0.44	○	
	土坑22	横円形	南北	(0.95)	(0.30)	6.80	0.52	○	
	方堅3	長方形?	東西?	(1.24)	(3.04)	6.85	(1.12)		
6	方堅4 A	長方形	南北	(1.00)	(2.00)	7.00	0.70	○ 土坑	方堅4 A>方堅4 B 土坑20・土坑4・土坑3>方堅11 方堅5と方堅11新旧不明
	方堅4 B	長方形	東西	(1.75)	(3.55)	6.60	0.80	△ 緑色石敷石(部分)	
	方堅11	長方形	南北	2.75	2.00	6.60	0.60		
	土坑20	不正円形	—	僅	(0.55)	6.60	0.25	○	
	土坑4	不正円形	—	僅	(0.90)	6.60	0.30	○	
	土坑3	不正円形	—	僅	(0.57)	6.60	0.30	○	
7	方堅2 A	長方形	南北	(3.50)	(2.70)	6.90	0.70	○ 覆土上層には被熱した骨・臓器・遺物が多い。	方堅2 A>方堅2 B>方堅4 B・方堅11 方堅12>方堅6 土坑20・土坑4・土坑3>方堅2 B 土坑15・土坑17・土坑5>方堅2 B 方堅12と方堅2 A・B・方堅2 Bと方堅5は新旧不明
	方堅2 B	長方形	南北	(3.85)	(3.45)	6.60	(0.40)	○	
	方堅12	長方形	東西	(1.65)	4.40	6.90	0.85		
	土坑15	不正円形	—	僅	(0.80)	6.50	0.50	○	
	土坑5	不正円形	—	僅	(0.90)	6.50	0.60	○	
	土坑17	不正円形	—	僅	(0.90)	6.50	0.50	○	
10	土坑16	長方形	南北	1.65	0.75	6.15	(0.25)	○ 方堅2 A床下土坑か	方堅5 a > 方堅5 b+c 方堅5 c > 方堅3 方堅5 dと方堅11は新旧不明
	土坑18	長方形	東西	0.70	1.60	6.20	(0.40)	○ 方堅2 B床下土坑か	
	方堅5 a	長方形	南北	(1.68)	2.05	6.65	0.75	○	
	方堅5 b	長方形	(南北)	(2.15)	(4.40)	6.78	(0.68)		
11	方堅5 c	長方形?	(南北)	(1.22)	(1.14)	6.76	(0.58)		土6>方8>方6>方7>方9 方6>方12
	方堅5 d	長(正)方形	(南北)	(3.48)	(5.14)	6.76	0.80		
	土坑6	長方形	南北	1.25	2.35	6.60	0.30	○ 小方堅か	
	方堅6	?	?	(1.70)	(2.65)	6.80	0.60	○	
	方堅7	長方形	南北	3.15	1.55	6.60	(0.35)		
12	方堅8	長(正)方形	(南北)	3.75	2.10	6.80	0.70	○	土7>土8 土7>土27、土8>土26
	方堅9	?	?	(1.55)	(1.80)	6.20	0.20	△ 底面に緑色石2	
	土坑7	長方形	南北	1.90	1.20	6.45	0.40	○ 小型方堅か	
	土坑8	長方形	南北	1.75	1.95	6.55	0.45	○ 小型方堅か	
13	土坑25	横円	南北	(1.90)	0.80	6.30	0.45	○ 溝状土坑か	土7>土8 土7>土27、土8>土26
	土坑26	横円	南北	(1.10)	1.20	6.30	0.50	○ 溝状土坑か	
	土坑27	方形?	?	(0.80)	0.70	6.20	0.45	○ 方堅か	

表2 出土遺物計測表(1)

遺物名	計測値	単位	(1)一式	備考
方1	1-1 土器	口径 5.5	底径 (4.7)	器高 1.6
	1-2 土器	口径 5.5	底径 3.9	器高 1.9
	1-3 土器	口径 9.7	底径 6.4	器高 2.8
	1-4 土器			
	1-5 土器			後期III
	1-6 土器			後期IV
方3	1-7 土器	長さ 8.0	太さ 0.4	6a型式
	1-8 土器			
	1-9 土器			
	1-10 土器			
	1-11 土器			
方2	2-1 土器	口径 6.1	底径 (3.4)	器高 2.8
	2-2 土器	口径 6.3	底径 4.3	器高 2.2
	2-3 土器	口径 6.2	底径 4.7	器高 2.0
	2-4 土器	口径 6.4	底径 4.6	器高 2.1
	2-5 土器	口径 6.4	底径 5.3	器高 2.1
	2-6 土器	口径 6.2	底径 4.5	器高 2.3
	2-7 土器	口径 10.5	底径 6.0	器高 2.1
	2-8 土器	口径 10.0	底径 6.6	器高 3.3
	2-9 土器	口径 9.6	底径 6.0	器高 3.0
	2-10 土器	口径 9.6	底径 6.4	器高 3.0
	2-11 土器	口径 10.0	底径 7.2	器高 3.2
	2-12 土器	口径 10.3	底径 7.0	器高 3.2
	2-13 土器	口径 10.2	底径 7.2	器高 3.0
	2-14 土器	口径 9.0	底径 6.0	器高 3.0
方4	4-1 土器	口径 11.1	底径 6.2	器高 3.3
	4-2 土器			
	4-3 中型			
	4-4 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 1.6
	4-5 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 1.8
	4-6 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 2.2
	4-7 土器	口径 6.6	底径 4.3	器高 2.4
	4-8 土器			
	4-9 土器			
	4-10 土器			
方11	11-9 土器			後期I
	11-10 土器			後期前半
	11-11 土器			
	11-12 土器			
方2	2-1 土器	口径 5.8	底径 4.3	器高 1.9
	2-2 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 1.8
	2-3 土器	口径 5.9	底径 3.7	器高 1.8
	2-4 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 1.8
	2-5 土器			
	2-6 土器			
	2-7 土器			
	2-8 土器			
方3	3-5 土器	口径 6.0	底径 5.0	器高 2.2
	3-6 土器	口径 6.0	底径 4.3	器高 2.4
	3-7 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 2.2
	3-8 土器	口径 6.0	底径 5.0	器高 2.2
	3-9 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 2.2
	3-10 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 2.2
	3-11 土器	口径 6.0	底径 4.0	器高 3.4
	3-12 土器	口径 6.0	底径 5.0	器高 3.0
	3-13 土器	口径 11.0	底径 7.2	器高 3.8
	3-14 土器	口径 11.0		
方4	4-15 土器	口径 17.0		
	4-16 土器			後期II
	4-17 土器			中期以降
	4-18 土器	口径 10.0	底径 9.4	器高 2.5
	4-19 土器	口径 10.0	底径 5.8	器高 2.8
	4-20 土器	口径 11.0	底径 6.4	器高 2.0
	4-21 土器	口径 11.5	底径 4.7	器高 3.0
	4-22 土器	口径 10.0		後期III
	4-23 土器	口径 15.2		後期III
	4-24 土器	口径 17.0	底径 14.0	器高 5.0
方5	5-1 土器			後期IV
	5-2 土器			後期
	5-3 土器			後期
	5-4 土器			後期
	5-5 土器			後期
	5-6 土器			後期
	5-7 土器			後期
	5-8 土器			後期
	5-9 土器			後期
	5-10 土器			後期
方6	6-1 土器			大型
	6-2 土器			8型式
	6-3 土器			9型式
	6-4 土器			9型式
	6-5 土器			9型式
	6-6 土器			10型式
	6-7 土器			10型式
	6-8 土器	口径 28.0	底径 12.0	器高 9.2
	6-9 土器			10型式
	6-10 土器			
方7	7-1 土器			
	7-2 土器			
	7-3 土器			
	7-4 土器			
	7-5 土器			
	7-6 土器			
	7-7 土器			
	7-8 土器			
	7-9 土器			
	7-10 土器			
方8	8-1 土器	長さ 6.5	太さ 0.5	
	8-2 土器	長さ 5.5	太さ 0.4	
	8-3 土器	長さ 5.5	太さ 0.4	
	8-4 土器	長さ 5.5	太さ 0.4	
	8-5 土器	長さ 2.3	太さ 0.4	箱内
	8-6 土器	長さ 2.4	太さ 0.4	箱内
	8-7 土器			
	8-8 土器			
	8-9 土器			
	8-10 土器			

表3 出土遺物計測表(2)

遺物名	No.	遺物名	計測値	単位	(1)=舊元號 (2)=西暦	備考	方6~11-13		方6~11-13		方6~11-13		行書
							長さ	幅	高さ	厚さ	長さ	幅	
方6	9-53	金 手 箸 旗	径 2.4	cm	聖武天皇 1008年(延喜)	相書	-14	金 手 箔 旗	長さ 7.3	太さ 0.6			
	-54	金 手 箔 旗	径 2.4	cm	聖武天皇 1008年(延喜)	相書	-12-1	土 壁 箔 旗	口径 5.5	底径 (4.4)	基高 2.1		
	-55	金 手 箔 旗	径 2.4	cm	聖武天皇 1008年(延喜)	相書	-2	灰 瓦 戸 口 片	口径 (16.8)				
	-56	金 手 箔 旗	径 2.4	cm	聖武天皇 1008年(延喜)	相書	-3	灰 瓦 戸 口 片	口径 (15.8)			6型式	
方12	9-57	中 国 銀	底径 1.8				-4	青 瓦 戸 口 片					
	-58	白 銀	口径 1.7		基高 2.9	中期前半	-5	青 瓦 戸 口 片					
	-59	青 銀	底径 1.8			5期 or 6期							
方17	9-60	金 手 箔 旗	径 2.4	cm	義和通寶 1011年(延喜)	相書							
	-61	土 壁 箔 旗	口径 (7.2)	cm	底径 4.8	基高 1.9							
方5	-1	土 壁 箔 旗	口径 (7.2)	cm	底径 4.8	基高 1.9							
	-2	土 壁 箔 旗	口径 (7.0)	cm	底径 4.6	基高 1.7							
	-3	白 銀 戸 口 片	口径 (9.0)	cm	底径 (5.0)	基高 1.9							
	-4	中 国 銀	底径 (9.1)										
方6	-5	白 銀 戸 口 片	口径 11.2	cm	底径 4.8	芯高 4.0	後期						
	-6	白 銀 戸 口 片	口径 11.2	cm	底径 4.8	芯高 4.0	後期						
	-7	白 銀 戸 口 片	口径 11.2	cm	底径 4.8	芯高 4.0	後期						
	-8	白 銀 戸 口 片	口径 11.2	cm	底径 4.8	芯高 4.0	後期						
方12	-9	白 銀 戸 口 片	口径 (15.0)	cm	底径 (15.0)	基高 1.7	前期前半						
	-10	白 銀 戸 口 片	口径 (12.1)	cm	底径 (12.1)	基高 1.7	中期前半						
	-11	白 銀 戸 口 片	口径 (26.1)	cm	底径 (10.0)	基高 1.7	後期						
	-12	白 銀 戸 口 片	口径 (26.1)	cm	底径 (10.0)	基高 1.7	後期						
方17	-13	白 銀 戸 口 片	口径 (26.1)	cm	底径 (10.0)	基高 1.7	中期前半						
	-14	白 銀 戸 口 片	口径 (26.1)	cm	底径 (10.0)	基高 1.7	後期						
	-15	白 銀 戸 口 片	口径 (26.1)	cm	底径 (10.0)	基高 1.7	後期						
	-16	白 銀 戸 口 片	口径 (26.1)	cm	底径 (10.0)	基高 1.7	後期						
方6	-17	金 手 箔 旗	口径 (4.5)	cm	基高 2.0								
	-18	金 手 箔 旗	口径 (4.5)	cm	基高 2.0								
	-19	金 手 箔 旗	口径 (4.5)	cm	基高 2.0								
	-20	金 手 箔 旗	口径 (4.5)	cm	基高 2.0								
方12	-21	金 手 箔 旗	口径 (10.0)	cm	基高 2.0								
	-22	金 手 箔 旗	口径 (10.0)	cm	基高 2.0								
	-23	金 手 箔 旗	口径 (10.0)	cm	基高 2.0								
	-24	土 壁 箔 旗	口径 (15.0)	cm	基高 2.0								
方6~8	11-1	土 壁 箔 旗	口径 (7.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-2	土 壁 箔 旗	口径 (7.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-3	土 壁 箔 旗	口径 (7.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0	後期						
	-4	土 壁 箔 旗	口径 (15.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0	中 or 後期						
方6~8~9	11-1	白 銀 戸 口 片	口径 (7.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-2	白 銀 戸 口 片	口径 (7.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-3	白 銀 戸 口 片	口径 (7.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-4	白 銀 戸 口 片	口径 (15.0)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-5	白 銀 戸 口 片	口径 (6.5)	cm	底径 4.5	基高 2.0							
	-6	白 銀 戸 口 片	口径 6.5	cm	底径 4.5	基高 2.1							
	-7	白 銀 戸 口 片	口径 (7.0)	cm	底径 4.4	基高 2.2							
	-8	白 銀 戸 口 片	口径 (13.0)	cm	底径 7.4	基高 3.5							
	-9	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-10	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0	6期						
	-11	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0	5期?						
	-12	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0	5期						
	-13	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0	6期						
	-14	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-15	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-16	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0		長さ 3.5	幅 4.7	厚さ 1.5			
	-17	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-18	金 手 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0		24.9					
	-19	土 壁 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-20	土 壁 箔 旗	口径 (6.5)	cm	底径 6.5	基高 2.0		25.8					
	-21	石 刃 品	長さ 12.0	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-22	石 刃 品	長さ 10.9	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-23	石 刃 品	長さ 9.3	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-24	青 瓦 戸 口 片	長さ 7.4	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-25	青 瓦 戸 口 片	長さ 7.4	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-26	青 瓦 戸 口 片	長さ 7.4	cm	底径 6.5	基高 2.0							
	-27	青 瓦 戸 口 片	長さ 7.4	cm	底径 6.5	基高 2.0							

表4 出土遺物破片数表

遺物種	か わ ら け						舶 故 陶 瓶 鍋 茶 茶 茶						國 内 產 著 実・製 品 類	
	手 破	手 捺	ね	青 瓦	白 瓦	青 白 瓦	白 瓦	青 瓦	白 瓦	青 白 瓦	白 瓦	青 瓦	火 筒	瓦
道構内	1,693	68	21	22	6	13	128	1,004	23	54	3			
道構外	191	89	14	7	2	1	20	105	6	11	0			
計	1,884	151	35	29	8	14	148	1,109	29	68	3			
%	37.7%	3.0%	0.2%	0.6%	0.2%	0.3%	3.0%	22.2%	0.6%	1.3%	0.1%			
遺物種	土 器 類	土 器 品	石 石 品	金 属 品	木 木 品	骨 角 品	中世以前	自然遺物	その 他	火 筒	瓦			
道構内	12	4	16	213	3	2	51	1,026	1	4,357	87.3%			
道構外	5	1	11	2	0	0	4	164	3	636	12.7%			
計	17	5	27	215	3	2	55	1,190	4	4,993	100%			
%	0.3%	0.1%	0.5%	4.3%	0.1%	0.0%	1.1%	23.8%	0.1%					

図14には現況の河川流路と等高線、発掘調査地点と確認調査地点を示した。

若宮大路と平行するが如く南下する滑川は、八雲神社東の尾根が段丘状に張出す為西へと蛇行する。寅室橋から地点34の間は現況では蛇行しているが、時期不明乍ら（上本2000）元々は直線的に流下するのであるが、地点Qの成果から現流路より東へは行き難い。下馬四ヶ角付近では扇ガ谷川や西から合流する小河川の影響もあり、氾濫原的な低湿地が形成されるのであるが、現況河川の東側で調査例が少なく不明な点が多い。さらに南下すると地点13の調査区東端に発見された土丹敷きの道路状遺構に面して東側にも方形堅穴群が拡がることや、現若宮大路車道下の調査では中世飛砂が確認されていることから、流路が現況より大きく西に振れることはないものの、堆積層の傾斜から流路或は氾濫原からそう遠くはないと思われる。

地点A～Iの堆積土は河川若しくは氾濫原と考えられ、内A～Dに顕著な人頭大の土丹層で一気に埋め戻された状況は齋木1989に掲れば、横須賀線開通の折にトンネルを掘って出た泥岩塊で滑川の河口氾濫原（東側低湿地）を埋めたとされる。E～Iの各地点の堆積土は流路内を示唆し、一方J～Mの各地点は堆積土の特徴等から滑川が明治4（1871）年の鶴岡八幡宮境内絵図に現る新川（ほぼ現在の流路）に付け替えた後に堆積した近世以降の海岸からの飛砂と考えられる。J・K間の海拔10mを測る一帯は新居のえんま堂跡（神奈川県遺跡台帳No.224）に比定され、L・Mの東の海拔10mには現九品寺が位置する。こうして現況の海拔から遺跡地周辺を概観すると、海拔4mの等高線を南北に結んだ線より西には庵寺を含めて寺院ではなく、確認調査の成果から観ても水磨した遺物は出土するものの、最近の調査で地点7では海拔2～3m間に生活面が複数時期確認されているが、他には生活の痕跡は認められていない。

表5 確認調査地点一覧

地點	地番	面積	調査年/月	現地表海抜高	中世層海抜高	(中世)地山)砂層	中世層厚	堆積層	遺構	出土物	備考
A	材木座一丁目949番1地	6.0af	97/9	4.6m		2.1m	黄褐色砂層	2.0m	無	有	砂層以外は近代
B	材木座一丁目952番口	6.0af	98/11	4.1m				1.8m	無	無	全て古世・近代
C	材木座一丁目952番10地	3.8af	01/06	3.8m				1.8m	無	無	全て近世・近代
D	材木座一丁目2番1	6.0af	01/01	3.5m				1.5m	無	無	全て近代
E	材木座一丁目37番5	6.0af	98/11	3.4m	2.0m			1.5m	*	有	上層は近代、下層遺物は水磨。
F	材木座三丁目126番9	6.0af	98/07	3.0m	2.1m			1.4m	*	多	上層は近世・近代、中世遺物は水磨。
G	材木座三丁目126番10	11.0af	01/01	3.0m	2.0m	1.3m	青黑色細砂	0.7m	*	多	上層は近世以降、中世遺物は水磨。
H	材木座三丁目94番2	6.0af	01/04	3.2m	1.4m			1.1m	*	有	砂層の堆积。
I	材木座三丁目174番7	5.0af	01/07	3.0m	2.1m			1.0m	*	有	中世遺物は水磨。
J	材木座五丁目977番10	6.0af	98/09	7.2m				5.0m	無	無	上層は近代、以下は近世風砂。
K	材木座五丁目487番17,18	6.0af	98/11	4.8m		(3.2m)	灰褐色細砂	2.2m	無	無	上層は近代、以下風成砂。
L	材木座五丁目482番2	4.0af	98/02	5.4m				3.7m	無	無	上層は近代、以下は近世風成砂。
M	材木座五丁目477番	6.0af	97/10	6.3m				4.5m	無	無	上層は近代、以下は近世風成砂。
N	材木座一丁目890番4外	3.6af	97/10	5.8m	5.2m	4.5m	黄褐色砂層	3.9m	井戸跡	多量	中世遺物4箇所、古代1箇。
O	材木座二丁目245番3	6.0af	99/10	6.0m	5.0m			4.8m	無	有	上層は古世以降。
P	材木座四丁目1259番1	6.0af	99/01	9.2m	8.9m	7.9m	灰白色細砂	7.6m	方壁	多量	調査堆の遺構内。
Q	大町一丁目1034番1	4.5af	00/09	6.6m	6.2m	5.1m	黄褐色細砂	4.8m	方壁	多量	中世遺物2箇。
R	大町二丁目2338番6	4.0af	00/04	6.5m				4.5m	無	無	全て近代
S	大町二丁目2412番2	1.5af	97/10	10.6m	9.9m	9.5m	暗褐色山砂	9.1m	土壤	有	中世遺物2箇。
T	大町二丁目2400番1	2.5af	98/02	9.3m	8.2m	7.3m	暗褐色粘土	8.0m	土壤	多量	中世遺物4箇。

\*は河川氾濫原を示す



図14 材木座町屋遺跡の地形と河川

滑川の旧流路については、既に推定されている位置とそう大差はないものの、中世飛砂の影響を考えるとき、図14に図示した位置より河口は今少し東に逸れる可能性もあるうか。とすれば、既に述べられていることではあるが本調査地点西前海拔6m付近を海岸線から南北に貫き夷堂橋を経て小町大路へと延びる現況の道筋付近が、河川或は氾濫原と生活域の境を暗示していることも想起される。現状では諸処の制約があり、本稿で触れた確認調査の成果からは平面的一定範囲の調査は望み難いと言わざるをえないが、嘗ての流路範囲や山裾の地形をえた上での道筋や生活域を考えるためにには、狹小な範囲とはいえ確認調査の成果を資料化し積重ねることも必要と思われる。



▲ 方墳1・土坑2（北から）



▲ 方墳1 内獸骨（北から）



▲ 土坑2 内遺物出土状況（北から）



▲ 土坑2 内貝類除去後（北から）



▲ 方墳1・土坑2 完搬（北から）



▲ 方墳13（東から）

図版 2



▲ 方窓11（南から）



▲ 方窓2付近上層遺物出土状況（北から）



▲ 土坑6土層断面（南から）



▲ 方窓6～8付近（南から）

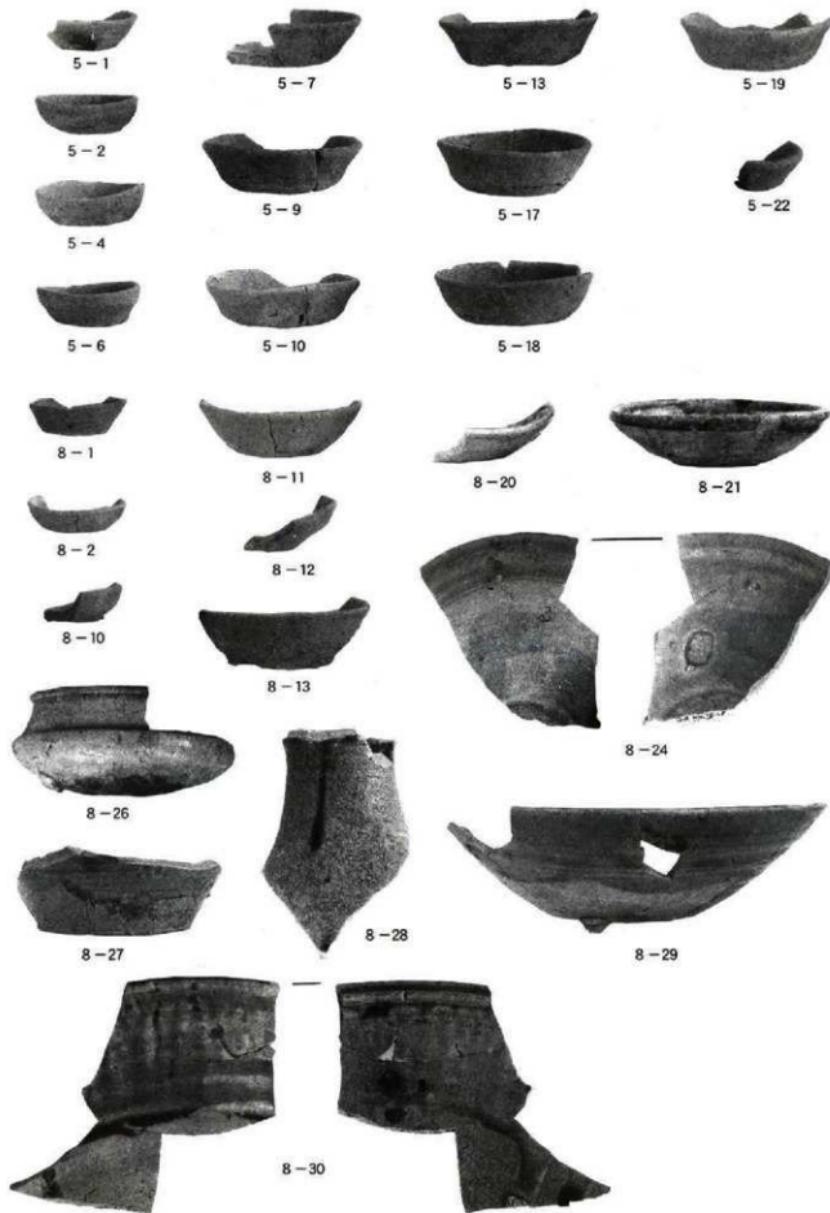


▲ 調査区北半調査最終状況

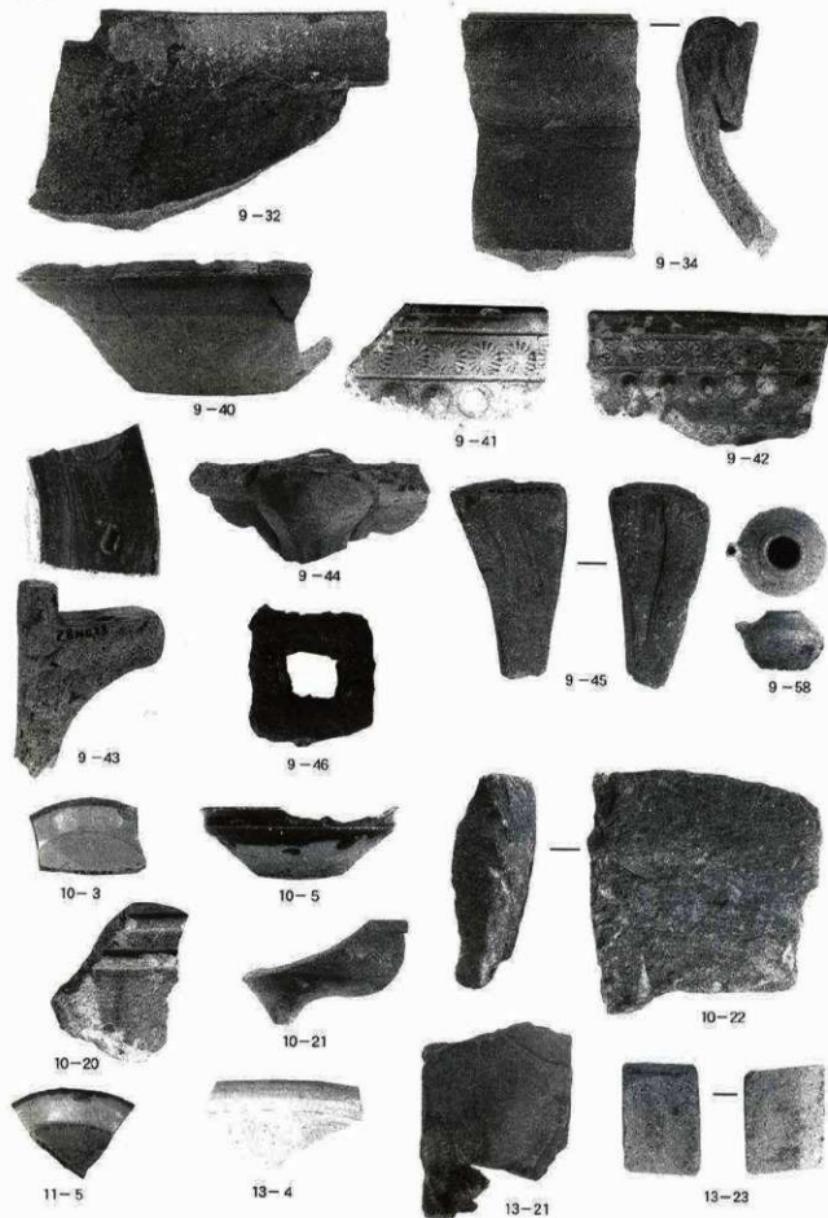


▲ 中世地山上の遺構

図版 3



図版4



ささ め  
笹目遺跡 (No. 207)

笹目町302番11地点

## 例　　言

1. 本書は、鎌目遺跡内の神奈川県鎌倉市鎌目町302番11地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成12年11月9日から同年12月8日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査に当たっては以下のとく体制を編成した。

担当者　維 実（東国歴史考古学研究所主任研究員）  
調査員　土屋浩美・若松美智子・松山敬一朗（以上、東国歴史考古学研究所研究員）、沙見一夫・野本賢二（以上、鎌倉考古学研究所員）、渡邊美佐子  
調査協力者　牛嶋道夫、多田徳彌、沼上三代次、田口康雄、町田義一、中須洋二（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書作成に当たっては、土屋浩美を中心とする現地調査員の作成した図面などの資料を基に、遺構図の合成・トレースを宗基秀明が、遺物実測・トレースを渡邊美佐子と宗基富貴子が行ったうえ、遺構関係を宗基秀明が、遺物関係を宗基富貴子が執筆し、両者で編集した。
5. 本書に使用した写真的うち、遺構関係を土屋浩美が、遺物を宗基秀明が撮影した。
6. 本書の遺構と遺物の挿図の縮尺は次の通りである。

遺構全測図：1/120、個別遺構図：1/60、遺物実測図：1/3  
なお、各挿図には縮尺を表示した。
7. 報文中における事実誤認・誤認は、編集者の責任である。
8. 本調査に関わる資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

# 本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	261
第2章 調査の経緯 .....	263
第3章 発見された遺構と遺物 .....	264
第1節 調査地内基本土層層序 .....	264
第2節 第3面 .....	265
第3節 第2面 .....	268
第4節 第1面 .....	273
第4章 調査成果のまとめと課題 .....	278

## 挿図目次

図1 遺跡位置図 .....	260
図2 調査位置図 .....	261
図3 測量方眼設定図 .....	262
図4 第3面全測図 .....	264
図5 第3面溝9・14・19、土壤18 .....	265
図6 第3面溝14出土遺物 .....	266
図7 第3面方形堅穴建物12・16 .....	266
図8 第3面方形堅穴建物12出土遺物 .....	267
図9 第3面方形堅穴建物16出土遺物 .....	267
図10 第3面方形堅穴建物17 .....	267
図11 第2面全測図 .....	268
図12 第2面方形堅穴建物8 .....	268
図13 第2面方形堅穴建物8出土遺物 .....	269
図14 第2面方形堅穴建物13 .....	270
図15 第2面土壤1・3・5・6 .....	271
図16 第2面土壤1出土遺物 .....	271
図17 第2面土壤3出土遺物 .....	272
図18 第2面土壤5出土遺物 .....	272
図19 第2面土壤6出土遺物 .....	272
図20 第1面全測図 .....	273
図21 第1面溝2（A・B） .....	273
図22 第1面溝2（A・B）出土遺物 .....	274
図23 第1面方形堅穴建物4 .....	274
図24 第1面方形堅穴建物4出土遺物 .....	275
図25 第1面方形堅穴建物15、土壤10 .....	275
図26 第1面上出土遺物 .....	276

## 図版目次

図版1a. 第3面全景（西から）	
b. 調査途中全景（西から）	
c. 方形堅穴建物17（南から） .....	283
図版2a. 方形堅穴建物8（南から）	
b. 調査区東壁土層（溝2・9・19） .....	284
図版3 出土遺物（1）かわらけ・輪羽口・ こね鉢・常滑甕 .....	285
図版4 出土遺物（2）火鉢・擂鉢・瀬戸・ 舶載陶磁器 .....	286
図版5 出土遺物（3）石鍋・すり陶片 .....	287

## 表目次

表1 遺物観察表（1）～（3） .....	279
-----------------------	-----



図 1 滝沢地区地図

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は、神奈川県鎌倉市の中でも中世都市として繁栄した旧鎌倉市街地の北西域に当たる。遺跡名の「笹目」は、近世の江戸期頃より用いられた字名で、中世の文書などには「佐々目」と記述される。『吾妻鏡』に現れる「佐々目」の記述から、佐々目の東方に若宮大路、南方に前浜が位置していたことが解る。近世以降の「笹目」と中世期の「佐々目」がほぼ同一地域を指しているとみて間違いないだろう。

建長三年二月十日庚子

天晴る。甘繩の邊焼亡。火は地相法橋が宅より起る。戌の刻より子の一時に到るまで止まず。

東は若宮大路、南は由比の濱、北は中下馬橋、西は佐々目谷なり。相模右近大夫将監（北條）時定・相模八郎（北條）時隆等が第以下数箇所災すと云々。……。

神奈川県遺跡台帳に記載されている笹目遺跡は、鎌倉旧市街地の南北軸道路である若宮大路、その西方の南北道路の今小路を越えた西方に、国道134号線（大町大路・長谷小路）の北側で北方へと深く入り込んだ笹目谷戸を中心とした地域を指す。

笹目遺跡内のこれまでの調査地点は6地点に上り、今回で7地点目になる。これまでの調査では、谷戸の崖下に開墾された「やぐら」の他に岩盤面を削平・造成した寺院関連施設と思われる構造群が発見されてきた。『鎌倉廃寺事典』は、中世期笹目谷戸内に「遣身院」・「長楽寺」の存在を挙げている。また、『吾妻鏡』には

寶治元年五月十四日丙

戌の魁、御臺所（=頼嗣の御臺所）を佐々目谷の故武州値揮室（経時）の墳墓の傍に送りたてまつるなり。人々素服を著し供華す。いはゆる、……。



図2 調査位置図

の記述もある。

この他に赤星氏によって古墳時代後期の横穴墓の存在も指摘されている。また、平成12年度以降の長谷小路に面した谷戸の開口部で行われた調査では、最下層より奈良時代に相当するであろう8世紀前半の「相模型」土師器甕が出土し、当該地域に古墳時代後期以降の人々の生活痕跡を認めることができる。笛目遺跡の北東には奈良時代の鎌倉郡衙跡が発見された今小路西遺跡・御成小学校地点がある。

この長谷小路に面した調査地では、より南方の砂層を生活面とする長谷小路周辺遺跡に発見される遺構様相と近似した砂質土壤から掘り込まれた方形堅穴建物を含む遺構群が確認されている。寺院跡が想定されている泥岩岩盤面を削平・整地した谷戸内の調査地点とは基盤層を異にしている点が注意される。

今回の調査地点は、「笛目遺跡」と指定されている範囲のなかでも「笛目谷戸」の東方を限る尾根の東麓に位置している。遺跡地の北方には、北東方の今小路西遺跡の西方の背後を南北に伸びる尾根と笛目谷戸の東の尾根の間を流れ下る佐助川が「佐助が谷」を形成している。現在調査地点が西面する「笛目遺跡」の東を限る道路が長谷小路から「佐助が谷」へと通り抜ける道となっている。

以上の、自然地理的環境をふまえた人文地理的環境の複雑な地点に位置する今回の調査地点の発掘調査からどのような成果が得られるのか注目される。

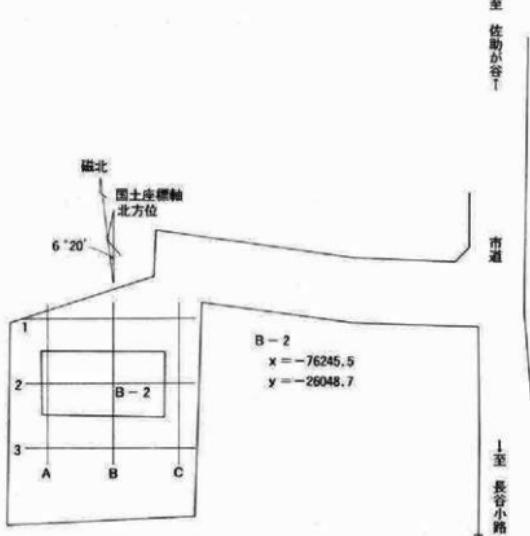


図3 測量方略設定図

## 第2章 調査の経緯

神奈川県遺跡台帳に中世都市遺跡と指定されている鎌倉市教育委員会文化財課であった。住宅建設の計画は、その基礎を杭構造とするものであった。相談を受けた文化財課は、工事の実施によって地中の埋蔵文化財への損傷が避けられないと想定し、実際の遺構の有無と遺構の存在する地中深度を見極めるための確認調査を実施した。その結果、現地表下60cm以下から200cmまでに具体的な埋蔵文化財が確認されたため、計画にある基礎工事で破壊されることとなる埋蔵文化財を保護するための協議を事業者と文化財課の間で実施した。しかしながら、当該地の地盤が砂質であるために予定の鋼管杭基礎計画に変更の余地がないとの意向が事業者側から示された。計画通りの基礎工事では地中に確認された中世期の遺構の破壊が避けられないと判断した文化財課は、文化財保護法に基づく手続きを行い、調査実施方法等の協議が事業者との間で整った後、発掘調査を平成12年11月9日から同年12月8日まで実施した。

発掘調査実施面積は、住宅基礎工事によって地中の遺構が破壊される30m<sup>2</sup>である。調査地点周辺が閑静な住宅地であるとともに、調査面積が狭く、調査深度が深いために発掘作業にベルトコンベアなどの機材を終始用いることができなかった。表土層のみを重機で剥ぎ取った後の作業を、全て人力で行うこととした。調査進行に伴って深くなる調査坑の壁面を保持するための擁壁は設置せず、土層堆積を分析するために法面として安全対策を行った。しかしながら、発掘調査の進行に伴って生じる残土は基礎工事の及ばない敷地内に積み上げた。このため、発掘調査の進行とともに深くなる調査壕の深度に残土の山の高さを加えた分が調査作業者に圧迫を加えることとなってしまった点は、今後の同様の調査において考慮すべき課題であろう。

発掘は、重機による表土掘削後、確認できた生活面を上層より下層へと順次進め、現地では4枚の生活面とそこから掘り込まれた遺構群の掘り上げ調査を行った。発見された生活面は、基本的に破碎した泥岩を搗き固めた地業層であり、最下面のみが中世地山層の砂質土の自然堆積土であった。各生活面からは、相前後して多数の遺構が掘り込まれ、遺構を掘り上げると本来の生活面がほとんど残されないような状況を呈した。そのため、各遺構の前後関係を把握する土層観察に多くの時間を費やす調査であった。こうした現地での土層観察に万全を期したつもりであったが、その後の室内整理作業によって、最下面の地山から掘り込まれた遺構群を確認できずに、生活面はその上層に作られた3枚とせざるを得なかつた。

発見された遺構群の測量に当たっては、調査地点に4m単位の方眼を設置した。方眼の軸線は、国土座標軸の方位に一致し、南北軸線は国土座標の北方位を示す。真北ではない。また磁北とは6° 20' のずれをもつ。設定した方眼には北西隅をA-1グリッド交点とし、南北に1~3を、東西にA~Cのライン名を付した。調査区中央に位置するB-2グリッド交点の国土座標値は、x=-76245.5, y=-26048.5である。

## 第3章 発見された遺構と遺物

現地調査においては最下層の中世地山面を第4面とした4枚の生活面と捉え、そこに発見された遺構群を調査・掘り上げたが、上述のように整理作業での図面精査と土層の再検討から、地山面からの掘り込みを確認できなかったために、3枚の生活面に遺構が発見されたものと訂正した。

発見された生活面は、後述の出土遺物から判断できるように全て中世前期に帰属する。また、確認できた遺構も方形堅穴建物、溝、土壤であり、中世前期の鎌倉の前浜地域を代表とする、武家地・社寺地を除いた商工人の居住が想定できる地域の遺構様相と近似している。

### 第1節 調査地内基本土層層序

30m<sup>2</sup>と狭小な調査地に方形堅穴建物と溝を主体とする多くの遺構が掘り込まれて、遺構覆土が調査地のほとんどを覆う状況であったが、生活面を部分的に確認できた。遺構の存在を確認できなかった茶黄色砂質土の中世地山面を構成する最下層土上に第3面が構築される。ただし、本来の第3面構成土層は後世の遺構掘り込みによって全て失われ、第3面構築直後に掘り込まれた遺構が、後に埋め戻されて、第3面の後半期に生活面とされた遺構覆土最上面を確認できるのみである。海拔高は9.0~9.16mを測る。そうした第3面の後半期に生活面を構成した土層は、細粒泥岩を交えた暗茶色砂層である（第1層）。

この第1層直上に泥岩礫を部分的に交えて版築された暗褐色砂質土が第2面を構成する地業土層である（第II層）。地業土版築の厚さは、10cmに満たない部分から40cm近くにまで達する部分もあり、一定でない。これは、第3面で掘込まれた遺構の新旧に関係し、古くに掘り込まれ、後に第3面後半期に埋め戻されて生活面が更新された部分で版築が薄くなっている。このため第2面の海拔高は、9.14~9.26mを測

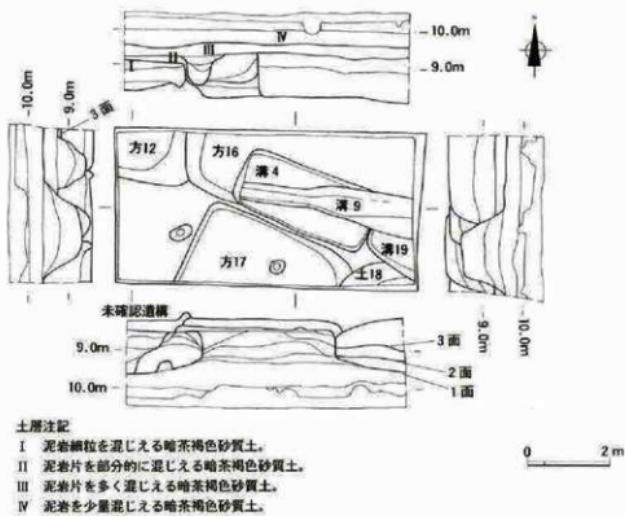


図4 第3面全測図

る。第2面直上に再度更新された第1面は、泥岩礫を多く交える暗褐色砂質土で構成される（第Ⅲ層）。第1面から掘り込まれた溝内覆土は泥岩礫を多く含む土層によって溝の改修がなされており、この時期の調査地では丘陵の削平によってえられる泥岩が頻繁に用いられる傾向がある。第1面の海拔高は、9.5～9.6mを測る。

第1面上に堆積する第Ⅳ層にも多くの泥岩礫が用いられている。土層中には中世期かわらけの破片も含まれ、より上層の近代遺物を交えた黒色の軟質土と異なりかなり締っている。この第Ⅳ層もおそらくは中世期の地業層と思われるが、遺構の掘り込みは全く見られなかった。

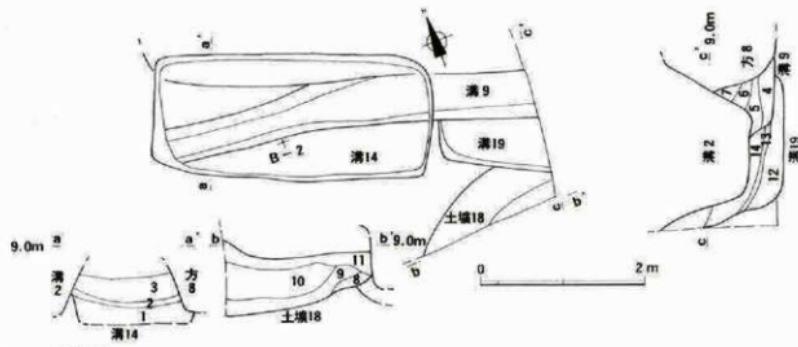
## 第2節 第3面

第3面からは溝3条、方形窓穴建物3棟、土壙1基、ピット1口を発見した。ただし、調査区が狭小であつたこともあり、大方の遺構は調査区外にまで広がり、全体の一部のみを確認したに留まる。発見された溝と方形窓穴建物の軸線は、調査区に設定した方眼の軸線方位から $15^{\circ}$ 前後ぶれて位置していた。同様の遺構軸線の方位は上層の第2面と第1面にも見てとれた。

### 溝14

調査区内のほぼ中央に発見された。第3面に発見された溝のうち溝19とともに古い。調査進行に伴つて地下水位面に達し、湧水のために最下層まで調査できなかつた。確認したかぎりでは、東西の長軸342cm、南北幅159cm、深さ63cmを測る。底面を確認していないが、覆土堆積を観察するかぎりは平坦な断面逆台形を呈するものと思われる。長谷小路周辺遺跡などの砂質土壙を生活面とする遺跡に数多く発見されている土壙状の溝である。掘り込み面自身は後世の生活面から掘り込まれた遺構によって失われてしまつたために、ここでの数値は本来の深さではない。覆土最下層には貝殻が砂質土内に繊維に堆積する一方、上層では炭化物を大量に交えているため、最後にはごみ捨て場になつてゐるものと思われる。

東西の軸線方位は、E- $20^{\circ}$ -Sである。



#### 土層記号

- |                            |                          |              |
|----------------------------|--------------------------|--------------|
| 1. 明褐色砂質土。<br>貝殻片が繊維状に混じる。 | 6. 明褐色砂質土。<br>泥炭小塊を混じえる。 | 11. 茶褐色弱粘質砂。 |
| 2. 明褐色砂質土。<br>炭化物が繊維状に混じる。 | 7. 明褐色砂質土。<br>炭化物多く混じえる。 | 12. 不明砂質土。   |
| 3. 明褐色砂質土。<br>炭化物を多く混じえる。  | 8. 茶褐色粘質砂。               | 13. 不明砂質土。   |
| 4. 黒褐色砂質土。<br>水分多し。        | 9. 黑褐色粘質砂。               | 14. 茶褐色弱粘質砂。 |
| 5. 明褐色砂質土。                 | 10. 不明。                  |              |

図5 第3面溝9・14・19、土壙18

図6: 1~4はかわらけ。胎土はいずれも橙色弱粉質土。小型かわらけの器形は背低で内底面が広く、器壁は薄く、開きながら立ち上がる。大型かわらけは小型かわらけと同器形と考えられるが、器壁はやや直立気味である。

5は白磁口兀皿。口縁部付近は大きく外反する。施釉はごく薄い。

#### 溝9

第3面最古の溝である。遺構掘り込みの一部を調査区内に発見され、大方が東外に続いている。

また、調査区内においても溝9の他に後世の方形堅穴建物に壠されて、平面的にはほんの一部を調査できたのみである。調査区東壁の土層観察から深さ104cm、底面幅149cmを確認できる。底面はやはり平坦な断面逆台形を呈するものと考えられる。覆土の土質は、現地での資料がないために不明である。

確認できた範囲は非常に限られたものであったが、発見された形状と土層観察から、溝14に似た東西に長軸を持つ土壤状の溝と考えられる。遺構の切り合ひ関係から、同時期にあったと考えられる共に空間分離機能を担ったであろう溝14の東端に位置し、残されていた南側の掘り込み肩の東西方位も似ている。

#### 溝9

溝14に重なるように東西に延伸する溝である。西端は後世の遺構に、東端は調査区外に伸びて、本来の形状を全く残していないが、確認できた長さ449cm、幅59cm、深さ79cmを測る。底面の平坦な断面逆台形を呈する。覆土最下層には、若干の炭化物と泥岩粒子を交えた黒褐色の強粘質土が堆積し、遺構の機能していた時期に水分の多かったことを窺わせる。

東西の軸線方位は、E-11.5°-Sである。

#### 土壤18

調査区の南東隅に発見されたものの、確認できたのは全体の一部のみと思われ、遺構の性格も判然としない。緩やかに下る底面と調査区内に発見された掘り込みの形状から、溝や方形堅穴建物ではないと判断した。覆土は砂質土を基本とするが、底面に堆積する第9層は粘性を帯びている。

#### 方形堅穴建物12

調査区の北西隅に発見された。方形堅穴建物全体の南東隅部分と思われるが、方形堅穴建物と判断し

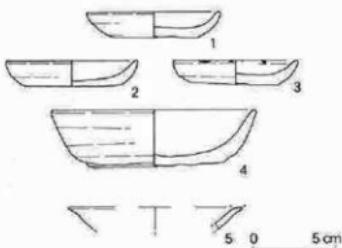


図6 第3面溝14出土遺物

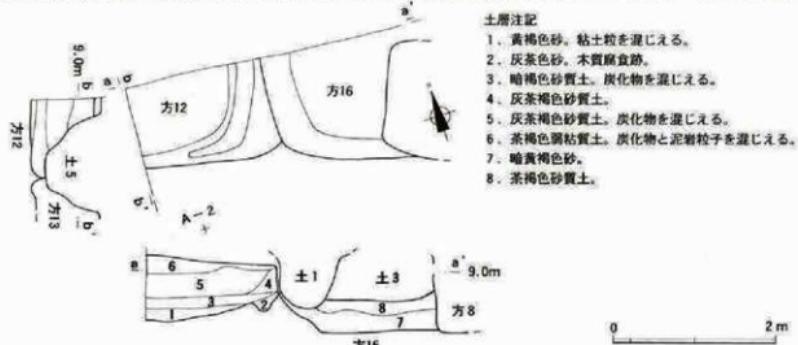


図7 第3面方形堅穴建物12・16

た理由は、掘り込み底面の平坦さと覆土堆積状況による。底面上に粘土粒子を交えて薄く堆積する黄褐色砂の第1層が床下土を形成し、第2層の堆積する産みが根太木跡と考えられる。床下土までの深さ71cmを測る。底面および床下土上には何ら施設を見つけることができなかった。本来の規模は全く不明である。掘り込み形状の軸線方位を強いて算出すれば、東西の軸線方位は、E-12° -Sである。

図8：1は青磁蓮弁文碗。蓮弁はだいぶ退化している

るうえに、施釉が厚く不明瞭である。疊付周辺は露胎で鉄発色。使用によるキズは見られない。

#### 方形堅穴建物16

方形堅穴建物12を壊して、その東隣に掘り込まれる。調査区内に本来の形状の南半分ほどを残していたと思われるが、その東側を溝14と後世の方形堅穴建物の掘り込みによって失われ、確認できたのは南西隅部分に限られた。方形堅穴建物12埋設後に設定された生活面からの掘り込みの深さ85cmを測る。残されていた範囲内の覆土も、その上層は後世の土壤掘り込みで失されている。観察できた覆土下層は壁面側から緩やかに傾斜した後に、ほぼ水平に堆積するのみで、方形堅穴建物構築材の痕跡を認めることはできなかった。

東西の軸線方位は、E-19.5° -Sである。ほぼ溝14もしくは19と平行する。

図9：1は大型かわらけ。背低気味で、内底面が広く、器壁はやや内湾気味に立ち上がる。

#### 方形堅穴建物17

調査区中央の南半に発見され、本来の規模の半分ほどが調査区南外に広がっているものと思われる。確認できた掘り込み規模は、東西393cm、南北225cm以上を測り、壁の北東隅が土壌18に壊される。掘り込みの深さは、覆土のほとんどが後世の方形堅穴建物構築によって失われているために不明である。残されていた覆土はわずかに底面直上の18cm程である。ちなみに平坦な掘り込み底面の海拔高は、8.13mである。確認できた底面に、深さ11cmの浅いピット状の産みが残されている。方形堅穴建物の底面中央に棟持柱を設置する例が鎌倉市内の調査で認められているが、本例は掘り込み北壁から80cm程しか離れていないため、底面中央の棟持柱とは異なり、掘り方の四周に設置された土台角材、もしくはそれから渡しかけられた根太木やその下に配された板材の腐食痕跡を掘り上げたものと思われる。このピット状産みのほかには構築材の痕跡を確認できなかった。

東西の軸線方位は、E-22° -Sである。

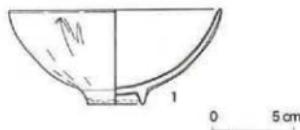


図8 第3面方形堅穴建物12出土遺物

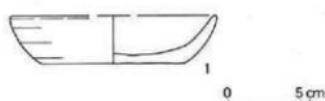


図9 第3面方形堅穴建物16出土遺物

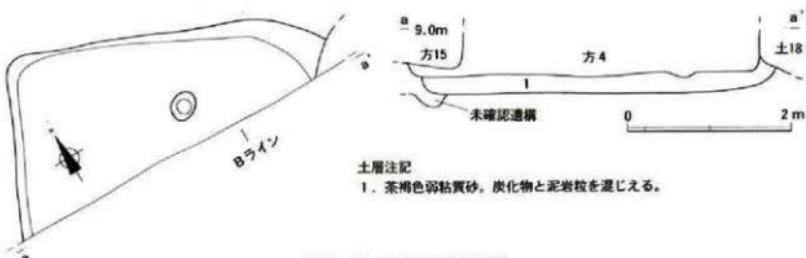


図10 第3面方形堅穴建物17

### 未確認遺構

方形堅穴建物17の西端下層に、方形堅穴建物の土材角材の設置跡を思わせる落ち込みを有する平坦な掘り込み底面の遺構を調査区の南壁の土層に認めることができる。本土層は、現地調査における調査最終段階において、より下層の土層堆積を確認するために、南壁際に設けたトレーナー状の掘り下げで発見されたが、現地調査では第2面の方形堅穴建物13の底面として誤認したために土層理解に混乱を起こしている。

### 第3節 第2面

第3面上に泥岩礫を部分的に交えて版築された暗褐色砂質土を用いて嵩上げされた第2面からは、調査区の北側に偏って方形堅穴建物2棟、土壙3基が発見された。この時期、調査区北側のみに遺構が掘り込まれたのではなく、調査区南側の遺構が後世の第1面時に深く掘り込まれた遺構によって壊わされてしまった可能性が高い。

発見された方形堅穴建物や土壙の東西軸線の方位は、第3面の遺構と同様に、やはり測量方眼の軸線から $20^{\circ}$ 前後ずれている。

#### 方形堅穴建物8

調査区の北東に発見された。調査区内に確認できた規模は東西445cm以上、南北213cm以上の掘り込みを持ち、調査区外の北東へ延びる全体の南西部を調査した。掘り込み肩から底面までの深さ116cmを測り、調査区内的東方1/3ほどはさらに13cm下がる。こうした掘り方の壁面下を中心ピット状、もしくは溝状に底面が6~8cm窪む。これらのピット状もしくは溝状の窪みは底面の四周に設置された土台角材腐食跡であり、底面の中央付近のものは根太木もしくは根太木の安定を保つために根太木の下に敷かれた板材の腐食痕跡を掘り上げたものである。方形堅穴建物には掘り方底面に設けられた柱穴から立ち上がる側柱によって構築する例もあるが、今回の例は柱穴にしては浅すぎる。

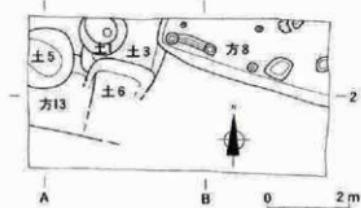


図11 第2面全測図

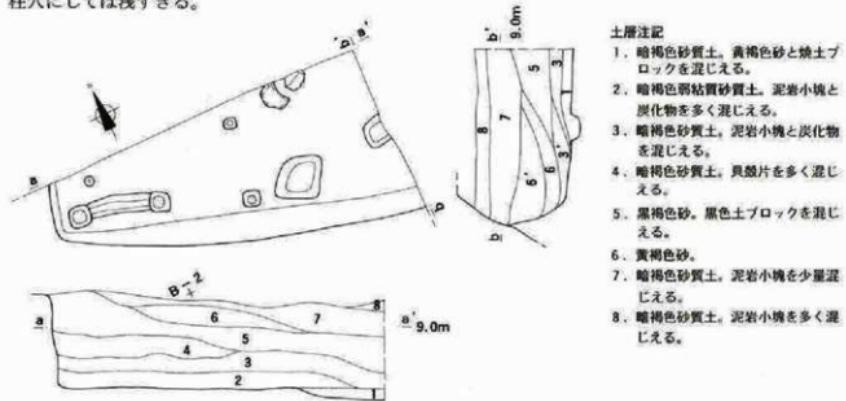


図12 第2面方形堅穴建物8

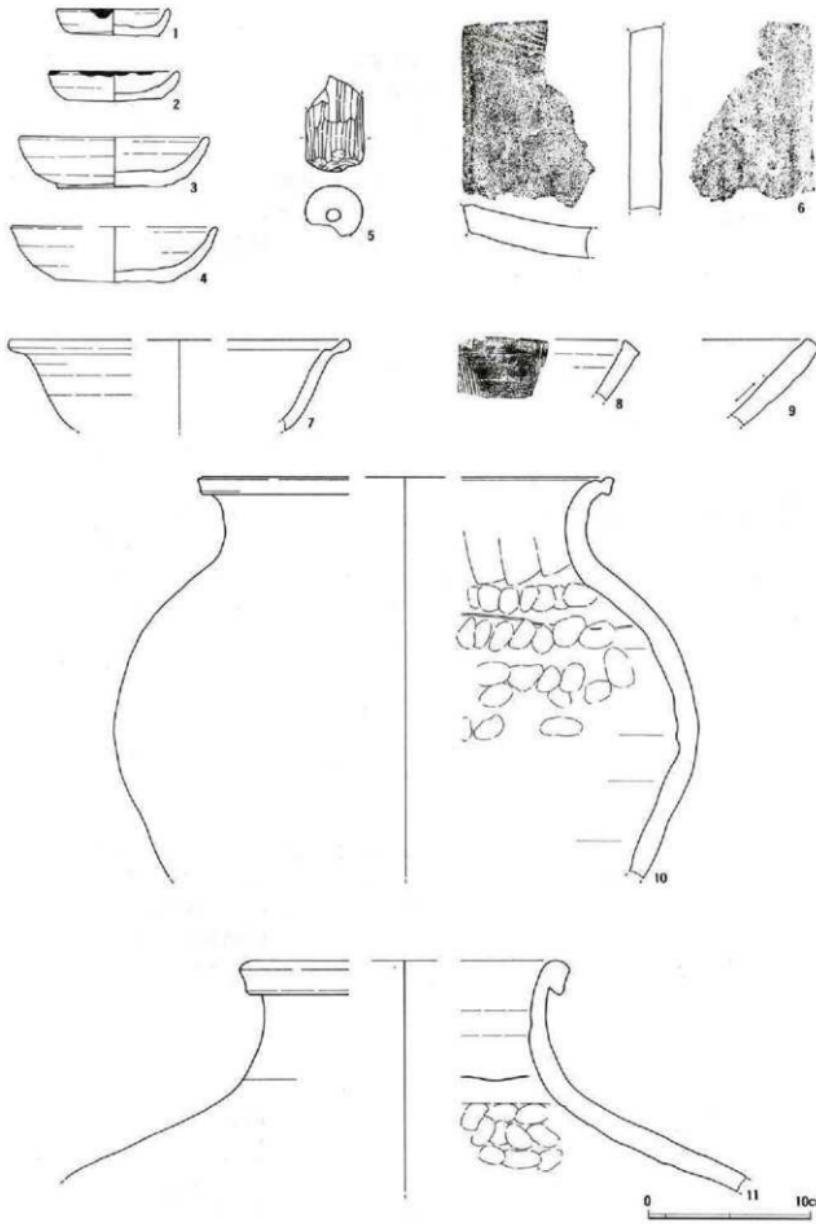


圖13 第2面方形堅穴建物B出土遺物

調査区東壁に認められた本方形竪穴建物の覆土堆積の観察では、ピット状落ち込み外側に、掘り方内に設置された構築材の裏込めを、また最下層の第1層掘り方底面上に設けられた床下土として確認できる。調査区北壁下の掘り方底面から5cm浮いた第2層中に、厚さ13cmの砂質凝灰岩（鎌倉石）礫2点が発見された。内1点（東側のもの）は、切石が破碎したものである。

従来の方形竪穴建物の研究では、土台角材下の基礎や壁面に砂質凝灰岩切石を用いた例の多くは、倉などの収納施設であろうと考えられている。今回発見された砂質凝灰岩切石も本来はそうした用いられ方をしたのかもしれないが、方形竪穴建物8の構築法が土台角材から側柱を建ち上げる構造と考えられるために、切石は本方形竪穴建物に伴うものではないであろう。床下土から浮いた状況で発見されたこともそのことを示している。

東西の軸線方位は、E-19.5° -Sである。

図13：1～4はかわらけ。1～3の胎土はいずれも橙色弱粉質土だが、2は黒色微砂が多く含り、砂っぽい。1は内底面が広く、器壁は内窓気味に直立する。2は器壁は厚く、開きながら立ち上がる。内底面は灯明皿に使用した際に焼けたものと思われる。3は2と同様、器壁は厚めで、やや内窓気味に立ち上がる。4はいわゆる「薄手丸深」型の大型かわらけ。胎土は混入物の少ない精良な橙色粉質土。器壁は薄く、内窓気味に立ち上がり、口唇部は外反する。5は不明土製品。中心には直径0.8cmの空洞になっている。外面は丁寧なミガキがなされる。6は平瓦。四面は砂目痕と縦方向の指頭ナデ調整痕、凸面は砂目痕が残る。

7は古瀬戸中II期の瀬戸灰釉折縁深皿。口径は小振りで器壁は薄い。外面ともに二次焼成を受けるが、とくに外面は強い被火を受けている。8は備前鉢の口縁部片。小片のため、使用による摩滅痕は確認できなかった。14世紀後半くらいか。9は14世紀代に編年しうる常滑II類鉢の口縁部片。口縁部付近～体部上位の器壁は肥厚するが、中位以下は薄いと思われる。体部内面中位から下方は使用による摩滅痕が著しく残る。10～11は常滑甕。10は縁帯の幅はとても狭く、口唇端部は上方に尖らない。体部内面上位は木口状工具による、また肩部付近は指頭押さえによる調整がなされる。13世紀前半頃か。11は縁帯幅は広くなりはじめているが器壁と接することはない。肩部内面付近は指頭による調整がなされる。13世紀後半に比定できよう。

### 方形竪穴建物13

調査区の西端に発見されたが、後続する時期の多数の遺構に埋され、平面的にはほとんどその形状と掘り込みが失われている。調査区壁面に観察できた覆土堆積などから確認できる掘り込みの深さは83cm、東西170cm以上、南北184cm以上の規模をもつと思われる。掘り方底面下に3～5cm程度に埋む木材腐食跡が認められ、覆土最下層の粘質土が床下土となる土台角材によって構築されたものと考えられる。

掘り込みの東西軸線方位も平面的に確認できた部位が狭小すぎるために、明確にはしがたいが、方形竪穴建物8の東西軸線方位に近いと思われる。

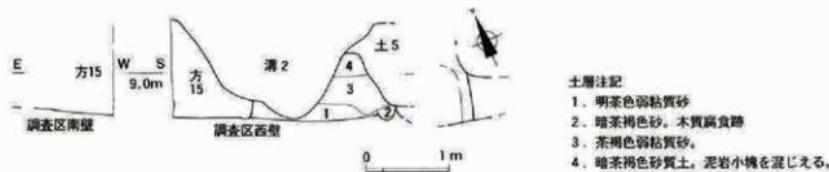


図14 第2面方形竪穴建物13

## 土壤

方形堅穴建物8と13の間に4基の土壤が発見された。この内、土壤3と5がほぼ同時期に掘り込まれ、土壤1が新しく掘られた。また、土壤3と5は方形堅穴建物13を壊すが、土壤3は方形堅穴建物8に壊される。土壤6は土壤3と方形堅穴建物13を壊し、土壤1に壊されている。このことから第2面において、最古の方形堅穴建物13の後に土壤3と5が、そして土壤6が掘り込まれて埋没した後に方形堅穴建物13と土壤1が構築されたと考えられる。

土壤1は方形堅穴建物8の西方1mほどに位置し、調査区の北壁外へ若干拡がる。最大直径137cmの不正円形の掘り込みから80cm×55cmの楕円形底面までいたん緩やかに下ってから急激に落ち込む。深さ75cmを測る。覆土は下層から上層まで泥岩小礫の詰まった堅緻なもので、ゴミ穴などに見られる軟弱な土ではない。柱穴の根固めのような覆土である。このような覆土は調査区内には後述の土壤3を除いて発見されていない。

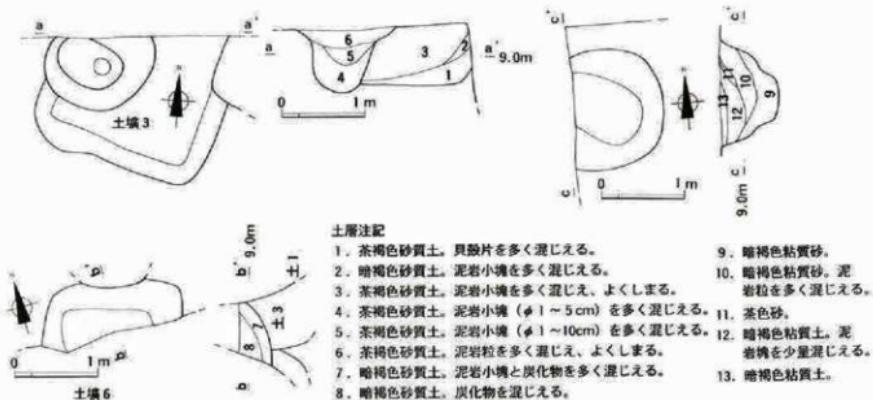


図15 第2面土壤1・3・5・6

図16: 1~3は小型かわらけ。胎土はいずれも肌色粉質土。内底面は広く、器壁は薄く、やや内弯氣味に立ち上がり口縁部付近で外反する。4は浅鉢型火鉢。体外上面は指頭によるナデ、上位から下方は指頭による押さえ調整がなされる。破片の状態で被火を受けている。

土壤3は土壤1に壊されてほぼ重なるように位置

する。調査区内には東西220cm、南北190cmを確認でき、調査区北外へと続いている矩形の土壤である。掘り込み面から平坦な底面までの深さ76cmを測る。土壤内覆土は貝殻片を少量交えた最下層の茶褐色砂質土を除いて泥岩小塊を密に交えた土壤1の覆土と同様である。同一地点に相前後して掘り込まれた土壤に堅緻な根固め状の覆土を充填した遺構の存在は、調査区外における遺構の広がりを今後の周辺地点での調査に期待を抱かせる。

図17: 1~4は小型かわらけ。胎土はいずれも肌色→橙色弱粉質土。内底面は広く背低である。1~2の

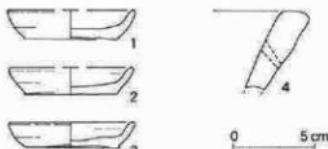


図16 第2面土壤1出土遺物

器壁は大きく開きながら立ち上がり、3～4は直立気味に立ち上がり、口縁部付近で外反する。2は口縁部付近に煤が付着する。

5は古瀬戸前期の瀬戸灰釉四耳壺。破片の状態で被火を受けている。6は舶載黄釉盤の口縁部片。

7は青磁鑄蓮弁文碗。施釉は厚く、蓮弁文はやや不明瞭である。体部内面は使用によるキズがわずかに残る。8は青磁鑄蓮弁文碗か鉢。口径は10.6cmを測るが、小片のため不安。体部中位付近で強く屈曲し、口縁部は大きく外反する。明灰緑色を呈する釉は薄めに施釉される。使用によるキズは体部内面には見られないが、外面の屈曲部付近には細かなキズが多く残る。

土壤5は、調査区の西壁際に発見され、調査区西外へと一部が拡がっている。確認できた規模は最大径153cmの隅丸矩形ないしは円形をなすものと思われ、深さ73cmの平坦な底面まで落ち込む。泥岩礫を少量交える暗褐色砂質土の覆土は、断面が溝を思わせる2段に落ち込む下層に堆積し、第11層より上層では砂と軟弱な粘質土が堆積する。

図18：1～3は小型、4は中型、5～6は大型かわらけである。小型かわらけはいずれも肌色粉質土で、内底面が広く、器壁は薄く、内湾気味に立ち上がり、口縁部付近でわずかに外反する。2と3は口縁部付近に煤が付着する。4は混入物の少ない淡橙色精良粉質胎土。背高で、側面觀碗型を呈する、いわゆる「薄手丸深」型の中型かわらけである。5～6は橙～肌色粉質胎土で、内底面が広く、器壁は薄く大きく開きながら立ち上がる。口径は14cm前後を測る。

7～8は常滑I類鉢。7は口縁部片。小片のため、使用による摩滅痕は未確認である。8の高台貼付けは丁寧になされる。体部内面は使用による著しい摩滅痕が残る。

土壤6は土壤3の南に発見された。本来の形状の南側を第1面の溝に埋されて失っている。一边154cmの矩形であったろうと思われる。確認面からの掘り込みは浅く、底面まで38cmを測る。覆土には泥岩礫を交えた暗褐色砂質土が堆積し、下層には炭化物がブロック状に混じる。

図19：1は錢。998年に初鋤の「咸平通寶」である。背面に文字等は見られない。

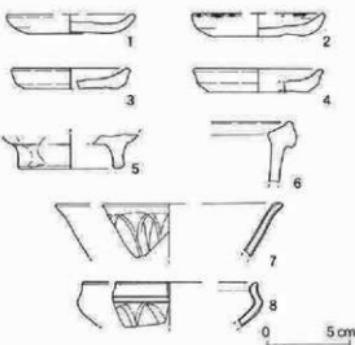


図17 第2面土壤3出土遺物

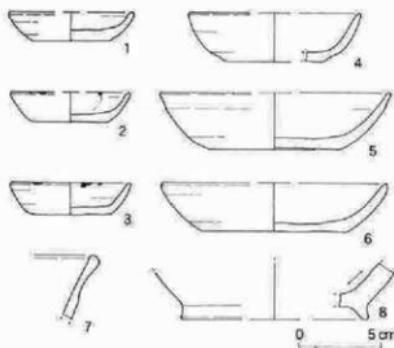


図18 第2面土壤5出土遺物



図19 第2面土壤6出土遺物

#### 第4節 第1面

第2面上に版築された泥岩礫を多く交える暗褐色砂質土の第1面からは、溝2条と方形堅穴建物2棟、土壤1基にピットが7口発見された。溝と方形堅穴建物は調査区の南半に発見され、ピットの多くが溝の北側からその北方に位置している。調査区内を東西に横切る幅の広く深い溝は、おそらくは敷地境や地割の区分機能を担っていると考えられる。6口のピットが発見された溝の北方には規模の大きな遺構は見られず、狭小な調査区内で見るかぎり空閑地となっている。ピットは溝に沿って並ぶようにもみえるが、整然とした配置はなく明らかな層や櫛列を形成してはいない。

#### 溝2

調査区内を東西方向に横切って測量方眼2ライン付近より南に発見され、調査区の東西幅7.5メートルを越えて東西の外側へと延伸している。調査当初は1条の溝と思われたが、調査の進展に伴って、下層にほぼ同一方向に古い溝が存在していたことが判明した。しかしながら、最初に確認した溝の掘り込みが深く、古期の溝は調査区西1/3ほどの範囲でのみ確認することができた。以下、古期の溝を溝2B、新期の溝を溝2Aとする。

#### 溝2A

底面の平坦な断面逆台形を呈する。調査区西壁での規模は上幅242cm、下幅122cm、深さ94cmを測る。調査区東壁での規模は、上幅206cm、下幅104cm、深さ107cmを測る。溝底面の海拔高は、調査区西端

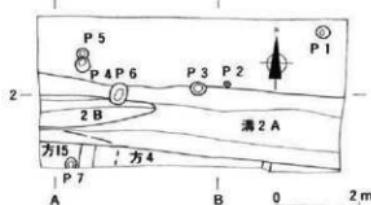
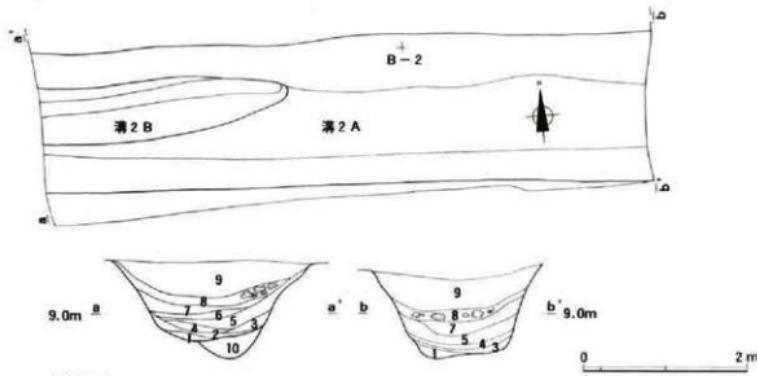


図20 第1面全測図



#### 土層注記

- |                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色粘質土。泥岩粒と炭化物を混じえる。 | 6. 暗茶褐色粘質土。                 |
| 2. 黒灰色粘土。               | 7. 暗茶褐色砂質土。                 |
| 3. 反褐色粘質土。泥岩粒を多く混じえる。   | 8. 暗茶褐色砂質土。草木大泥炭块と炭化物を混じえる。 |
| 4. 暗褐色粘質土。              | 9. 茶褐色砂質土。泥岩粒と炭化物を混じえる。     |
| 5. 暗褐色粘質土。泥岩粒を混じえる。     | 10. 黒褐色粘質土。—溝2B。            |

図21 第1面溝2 (A・B)

で8.67m、東端で8.45mを測り、距離7.5mで比高差22cmの西から東へと流下する。覆土下層の第1層から第6層までは泥岩の粒子や炭化物を混じえる水分の多い粘質土が互層状に堆積する一方、砂質の第7層と第8層に拳大の泥岩礫を密に交える砂質土が溝底を一度に覆うように堆積して、溝底面の改修が行われている。

東西の軸線方位は、E-3°-Sである。

#### 溝2B

溝2A調査後にその底面下に発見された。確認で

きた範囲は調査区西壁から東方へ300cmである。西端で幅80cm、深さ28cmを残し、底面海拔高は8.46mを測る。本溝の調査区西端での底面海拔高が、溝2Aの調査区東端での底面海拔高とほぼ同一であるため、溝2Aと同様に東方に流下するものであれば、調査区東壁の土層に現れるはずであるが、それは確認できなかった。平面的に確認できた調査区西端から300cmまでしか本来存在しなかったものと考えられる。また、残されていた底面付近の形状は薬研状を呈し、溝2Aの底面付近のそれと異なる。こうした観察結果から、本溝は機能的には後に溝2Aへと作り替えられるが、調査区内で収束する溝であったと考えられる。

東西の軸線方位は判然としないが、溝2Aの方位に近いものであったと思われる。

図22: 1~3は小型の、4は大型のかわらけである。胎土はいずれも肌~橙色粉質土。1は背高気味で、器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近はわずかに外反する。2は背低で、内底面が広く、器壁は大きく開きながら立ち上がる。3は背高で、器壁は体部中位に強い稜を持ち、側面觀碗型を呈する。4は背低で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近は外反する。

#### 方形堅穴建物4

調査区南壁中央付近に発見された。確認できた規模は東西483cm、南北130cm以上、深さ83cmの掘り込みで、溝2を擴している。調査区南外へと大きく拡がっている。平坦な底面には、土層観察によって西端と東端から70cmに6cm程の浅い溝状の落ち込みが見られ、土台角材の腐食跡と考えられる。大きな掘

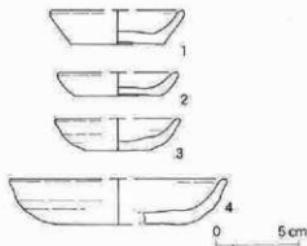
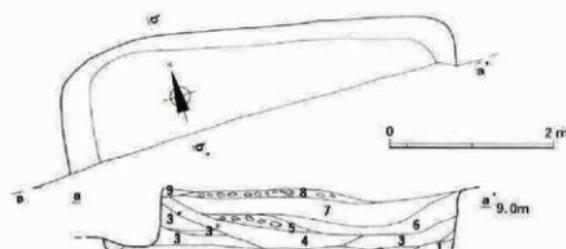


図22 第1面溝2 (A・B) 出土遺物



##### 土層注記

1. 茶褐色砂質土。木質腐食土を混じえる。
2. 暗褐色砂質土。泥岩粒、粘土粒を混じえる。
3. 茶褐色砂質土。
4. 暗褐色砂質土。炭化物混じえる。
5. 暗褐色砂質土。砂分多し。泥岩小塊を混じえる。
6. 暗褐色砂質土。炭化物を多く混じえる。
7. 暗褐色砂質土。
8. 暗褐色砂質土。泥岩小塊を多量に混じえる。
9. 暗褐色砂質土。

図23 第1面方形堅穴建物4

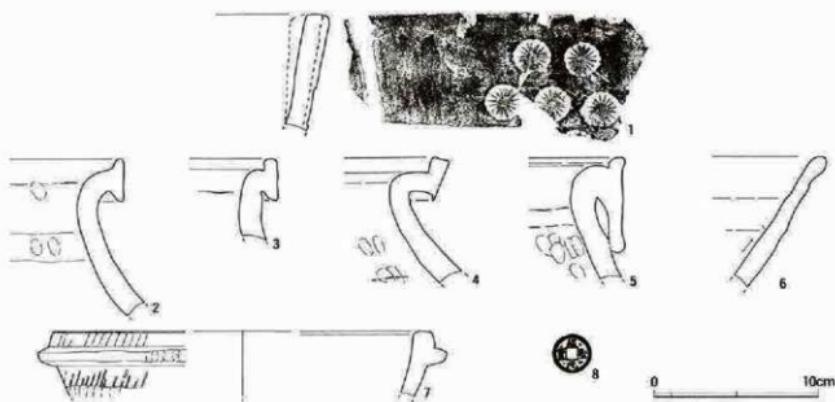


図24 第1面方形堅穴建物4出土遺物

り方の内部の西に偏って壁が構築されたのであろう。平面調査ではこのような木材腐食跡や他の施設を確認できなかった。調査区南壁に観察された覆土堆積からは、底面状に泥岩粒子と焼土粒子を交えた床下土の上に壁の裏込め土が大きく崩れ落ちた状況が認められる。その後は、3~5cmの泥岩疊を交えた砂質土で埋め戻されている。掘り方の西端部が後述の方形堅穴建物15によって壊されている。

東西の軸線方位は、E-12°-Sである。

図24:1は瓦質輪花型火鉢。体部外面は縦横方向、体部内上面は横方向の丁寧なミガキ、体部内上面から下方は指頭による横ナデ調整がなされる。体部外面には陰刻の16弁菊花スタンプが6ヶ所に押印される。2~5は常滑甌。2~4は13世紀後半、5は14世紀後半くらいか。6は常滑1類鉢の口縁部分。体部内面中位より下方は使用による著しい摩滅痕が残る。

7は滑石鍋。8は銭。1094年初鋤の「紹聖元寶」。背面に文字等は見られない。

#### 方形堅穴建物15

調査区の南西隅に発見されたが、溝2と方形堅穴建物4に、また後述の土壙10にも壊されて平面形状がほとんど失われ、調査区壁の土層堆積と底面に残されていた木材腐食跡から、その範囲を想定した。残されていた覆土から、掘り込みの深さは106cmを測り、その底面周囲に10cm程の木材腐食跡を掘り上げてしまつた窪みが巡る。木材腐食跡は掘り込み壁面直下に残されたと土層観察から導き出され、掘り方内いっぱいに建物が構築されている。平面図のピット状落ち込みも木材腐食跡を円形に掘り上げたもの

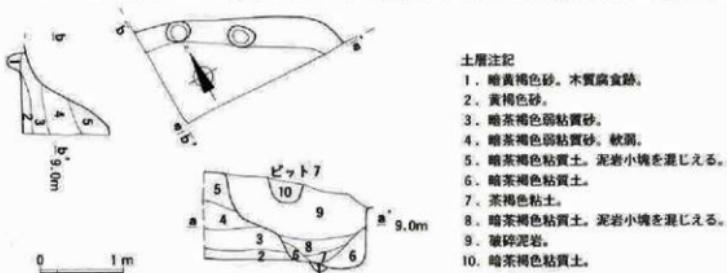


図25 第1面方形堅穴建物15、土壙10

である。掘り方底面直上に堆積する第2層の粘質砂が床下土となる。

東西の軸線方位は判然としない。

#### 土壤10

方形堅穴建物4の西隣に、方形堅穴建物4と15を横して掘り込まれる。本土壙は、現地調査において、平面的な発掘がなされずに、より下層の生活面へと調査が進行した時点に調査区壁面の土層観察にてその存在が認識された。そのため、平面形状などは全く失われている。残されていた土層堆積を見るかぎり、西方から段をもって緩やかに掘り込まれ、東方にあっては急激に立ち上がる不整形な掘り込みである。最下層を除いては泥岩疊を多く交えた粘質土が覆土となっている。深さは110cmを測る。

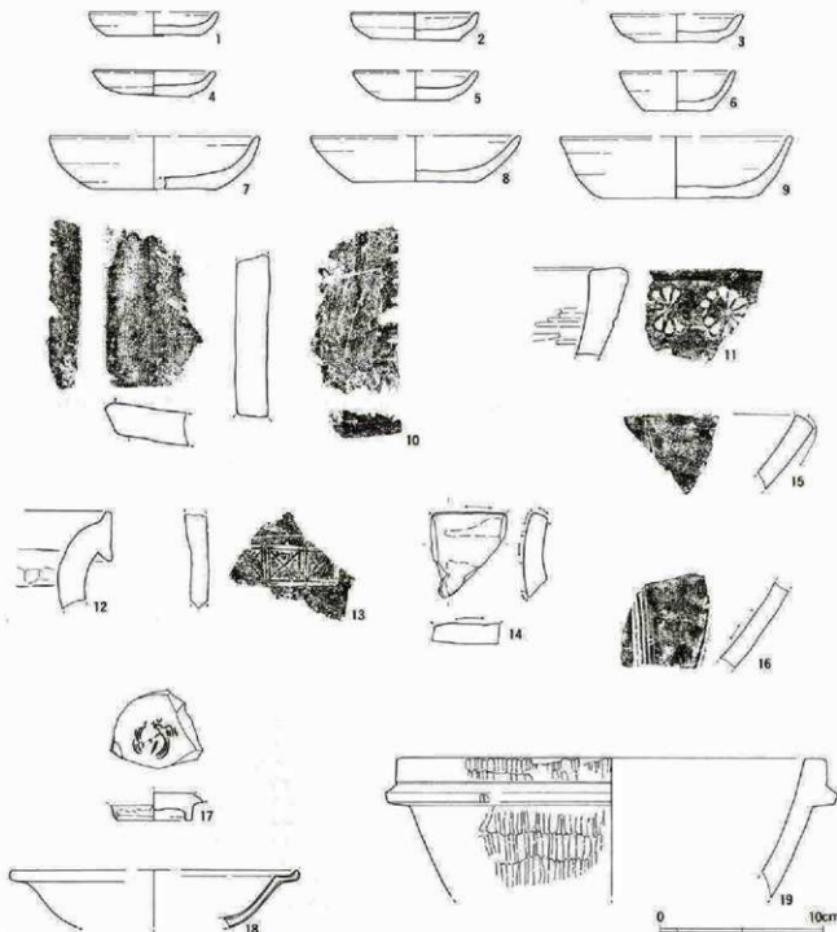


図26 第1面上出土遺物

なお、覆土最上層から掘り込まれた深さ30cmの遺構は、本遺跡地において確認した中世期最新のピットである。

#### 第1面上出土遺物（図26）

1～6は小型、7～9は大型のかわらけ。1は背低で、内底面が広く、器壁は薄く、内弯気味に立ち上がり、口縁部付近は外反する。2～4は底径口径比が大きく、体部外面中位付近に強い稜を持つ。器壁はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部付近は外反する。4～5は底径口径比が大きく、底部厚に対して器壁は薄く、大きく開きながら立ち上がる。6は淡橙色粉質精良胎土の「薄手丸深」型である。7は背低気味で、器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。8は背低で、内底面は広い。器壁は薄く、大きく開きながら立ち上がる。9は背高気味で、内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がる。

10は瓦質胎土の平瓦。凹面は砂目痕と指頭によるナデ調整痕、凸面は砂目痕が残る。11は瓦質輪花型火鉢の口縁部片。体部内外面に雑なミガキが施される。体部外面には陽刻のだいぶ退化した12弁菊花スタンプが押印される。

12は13世紀後半の常滑甕口縁部片。13は常滑甕の叩き目スタンプの拓本である。14はすり常滑。表面と上方側面に著しい摩滅痕が残る。15～16は備前播鉢。15は口縁部片。焼成の甘さによるものか、胎土は明灰色を呈する、まるで瓦質土のようである。小片のため、播鉢としての使用による摩滅痕は確認できなかったが、口縁端部から体部外面には著しい摩滅痕が残る。14世紀後半くらいか。15は体部片である。条線は5本。使用による摩滅痕が残る。

17は青磁碗。内底面にスタンプによる文様が押印される。施釉は薄く、疊付付近より底裏にかけては露胎。内底面に使用によるキズが著しく残る。18は青磁折縁鉢。施釉は厚めになされる。体部内面に使用によるキズがわずかに残る。

19は滑石鍋。鋤部より下方に煤が付着する。

## 第4章 調査成果のまとめと課題

### 年代

第四章にて詳述した発見された遺構と遺物に認められるように、各生活面、または遺構出土の遺物に、下層から上層へと年代の推移を見て取ることができない。とくに、かわらけにおいては、第3面から第1面のそれぞれの遺構から13世紀中頃から14世紀中頃に帰属する器型が出土している。これは、現地調査時点での生活面把握と遺構の掘り分けが明確でなかったための結果である。

### 遺跡地の性格

今回の調査で発見された3枚の中世生活面に掘り込まれた、または構築された遺構の主体は、溝と方形竪穴建物であった。溝は方形竪穴建物が構築される調査地における地境の機能を持っていたと想定できる。こうした方形竪穴建物が同一地点で連続して構築され、それらの間を溝が区切る姿は、笹目遺跡の南方に広がる長谷小路周辺遺跡内にしばしば認められる空間構成である。

笹目遺跡内でも、谷戸内の泥岩岩盤面や破碎泥岩による厚い地業層を持つ調査地とでは。今回のような方形竪穴建物が連続して構築される様子は確認されていない一方、今回の調査地点と同様に砂質土を中世地山とする笹目町258番1外地点、笹目町286番1外地点では、やはり方形竪穴建物が連続的に構築されている。

鎌倉旧市内の発掘調査で見られる中世地山と砂層、もしくは砂質土とする地点は、かつての海浜砂丘から砂丘後背地、さらに河川流域の砂泥堆積地である。これらの地域は、海浜砂丘と河川の自然堤防上を除いて、総じてかつては低湿地であった空間である。今回の調査地点の北東に西から東へ流下する佐助川と北方から流下する河川に挟まれた今小路周辺遺跡・御成小学校地点の調査に丘陵麓の高位面と砂層堆積の低位面との生活空間としての利用の違いが確認されている事例が参考となる。

御成小学校地点では、南に張り出した丘陵を西に背負った高位面に八戸主に及ぶ広大な武家屋敷が南北に2区画配置され、その東方全面の砂層を地山とする南北流する河川の自然堤防へ向けた底面に方形竪穴建物を主体とする商工人居住区が確認されている。さらに東方には、自然堤防上にあると思われる現在の今小路の東に面する若宮大路周辺遺跡群（第84次地点・小町二丁目280番3・12）では、南北流する河川脇に方形竪穴建物が発見されている。

御成小学校地点周辺の遺跡群に確認できるこのような微地形を利用した生活空間の機能分担、もしくは分離が、今回の調査地点とその周辺にも適用するには事例が不足している。しかしながら、この問題は、笹目遺跡だけに限らず、中世都市鎌倉全城で確認する必要があろう。

### 引用・参考文献

- 河野 他 1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会。  
宗基・宗基 1994『長谷小路周辺遺跡』長谷小路周辺遺跡発掘調査団。  
齋木秀雄・降矢順子 2000『若宮大路周辺遺跡群の調査－第84次（地点）の概要報告－』『鎌倉考古』No. 45、1~8頁。  
伊丹 他 2001「笹目遺跡 笹目町286番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17』第2分冊、73~94頁。  
伊丹 他 2201「笹目遺跡 笹目町285番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17』第2分冊、47~72頁。

表1 遺物観察表(1)

団版番号	出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
6 1	溝14	かわらけ	8.0	5.05	1.6	胎土は黒色微砂、白針、雲母を多く混じえる淡橙色弱粉質土
6 2	溝14	かわらけ	7.9	5.6	1.6	胎土は白針、雲母と多めの黒色微砂を混じえる淡褐色弱粉質土
6 3	溝14	かわらけ	7.4	5.5	1.45	胎土は黒色微砂、白針、雲母を多く混じえる橙色弱粉質土 煤付着
6 4	溝14	かわらけ	12.3	8.4	3.5	胎土は黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土少量混じえる橙色弱粉質土
6 5	溝14	白口鉢	10.5			素地は灰白色弱粘質細密土 軸は青味乳白色を呈する
8 1	方形堅穴建物12	青磁鑄蓮弁文鏡	13.0	3.5	5.9	素地は明灰色弱粘質細密土 軸は青緑色を呈する
9 1	方形堅穴建物16	かわらけ	12.6	8.8	2.9	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる暗橙色弱粉質土
13 1	方形堅穴建物8	かわらけ	6.8	5.4	2.1	胎土は黒色微砂、白針を多めに混じえる暗橙色弱粉質土 蘭付着
13 2	方形堅穴建物8	かわらけ	7.9	5.6	1.8	胎土は黒色微砂、白針、雲母を多く混じえる暗橙色弱粉質土 煤付着
13 3	方形堅穴建物8	かわらけ	11.5	6.9	3.15	胎土は白針を多く混じえる暗橙色弱粉質土
13 4	方形堅穴建物8	かわらけ	12.5	7.2	3.4	胎土は橙色粉質精良土
13 5	方形堅穴建物8	不明土製品	遺存長5.9 幅3.6			胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる暗肌色粉質土
13 6	方形堅穴建物8	平瓦				胎土は白色微粒～小石を多く混じえる灰色細密土
13 7	方形堅穴建物8	瀬戸灰釉折線深皿	20.9			胎土は淡黄色弱粘質土 軸は軽い二次焼成を受け白濁した淡緑色
13 8	方形堅穴建物8	備前播鉢				胎土は白色微石を混じえる赤褐色弱粘質細密土
13 9	方形堅穴建物8	常滑日類鉢				胎土は暗灰色細密土
13 10	方形堅穴建物8	常滑甕	(25.0)			胎土は白色微石～小石を混じえる灰色弱粘質土
13 11	方形堅穴建物8	常滑甕	(19.0)			胎土は白色微石～小石を混じえる灰色弱粘質細密土
16 1	土壤1	かわらけ	7.8	5.7	1.8	胎土は白針、雲母粒、黒色微砂、白色微粒を混じえる肌色希質土
16 2	土壤1	かわらけ	7.6	5.8	1.7	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土
16 3	土壤1	かわらけ	7.7	5.8	1.6	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土
16 4	土壤1	浅鉢型火鉢				胎土は白針を多く混じえる暗灰色粉質土 器表は暗茶褐色を呈する
17 1	土壤3	かわらけ	7.8	5.0	1.2	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色弱粉質土
17 2	土壤3	かわらけ	8.1	5.5	1.5	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色弱粉質土 煤付着
17 3	土壤3	かわらけ	6.9	5.8	1.2	胎土は黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
17 4	土壤3	かわらけ	7.7	6.1	1.45	胎土は黒色微砂、白色微粒、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
17 5	土壤3	瀬戸灰釉四耳壺		6.5		胎土は明灰色弱粘質細密土 軸は白濁した淡緑色を呈する
17 6	土壤3	黄釉盤				胎土は混入物を多く含む明灰色粘質土 軸は透明な黄緑色を呈する
17 7	土壤3	青磁鑄蓮弁文鏡	(13.5)			素地は明灰色弱粘質細密土 軸は淡灰緑色
17 8	土壤3	青磁鑄蓮弁文鉢	(10.6)			素地は暗灰色弱粘質細密土 軸は明灰緑色を呈する
18 1	土壤5	かわらけ	7.6	5.0	1.8	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土

表1 遺物観察表(2)

図版番号	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
18 2	土塙5	かわらけ	7.3	4.6	1.9	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土 焼付着
18 3	土塙5	かわらけ	7.3	5.3	2.0	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土 焼付着
18 4	土塙5	かわらけ	10.5	6.2	3.0	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂をわずかに混じえる淡橙色粉質土
18 5	土塙5	かわらけ	14.1	8.0	3.5	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる明赤褐色粉質土
18 6	土塙5	かわらけ	13.7	8.8	3.0	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土
18 7	土塙5	常滑I類鉢				胎土は白色微石を少量混じえる灰色土
18 8	土塙5	常滑I類鉢		(11.5)		胎土は白色微石～小石を混じえる暗灰色土
19 1	土塙6	錢				「咸平元寶」初跡年は998年
22 1	溝2	かわらけ	8.2	5.9	2.1	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土
22 2	溝2	かわらけ	7.3	5.4	1.4	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる暗橙色粉質土
22 3	溝2	かわらけ	7.6	4.0	1.95	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土
22 4	溝2	かわらけ	13.2	7.6	2.8	胎土は白針、白色微粒、黒色微砂を混じえる肌色粉質土
24 1	方形堅穴建物4	輪花型火鉢				胎土は白色微粒～小石を多く混じえる明灰色瓦質土
24 2	方形堅穴建物4	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を混じえる暗灰色土
24 3	方形堅穴建物4	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を混じえる暗灰色緻密土
24 4	方形堅穴建物4	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を混じえる暗灰色土
24 5	方形堅穴建物4	常滑甕				胎土は白色微石～小石を多く混じえる暗灰色土
24 6	方形堅穴建物4	常滑I類鉢				胎土は白色微石～小石を混じえる明灰色土。使用による粉滅痕は未確認
24 7	方形堅穴建物4	滑石鍋	(21.7)			
24 8	方形堅穴建物4	錢				「紹聖元寶」
26 1	1面上	かわらけ	7.9	5.7	1.5	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる淡橙色粉質土
26 2	2面上	かわらけ	7.7	5.5	1.65	胎土は白針、黒色、および白色微砂を混じえる淡橙色粉質土
26 3	3面上	かわらけ	8.1	5.1	1.7	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる肌色粉質土
26 4	4面上	かわらけ	7.4	4.2	1.5	胎土は白針、雲母、白色微粒、黒色微砂を混じえる淡茶色粉質土
26 5	5面上	かわらけ	7.6	4.3	1.8	胎土は白針、黒色、および白色微砂を混じえる肌色粉質土
26 6	6面上	かわらけ	7.1	4.5	2.4	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒をごくわずかに混じえる淡橙色粉質土
26 7	7面上	かわらけ	12.9	7.7	3.3	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる暗橙色弱粉質土
26 8	8面上	かわらけ	12.8	7.6	2.8	胎土は白針、雲母、白色微粒、黒色微砂を混じえる暗橙色粉質土
26 9	9面上	かわらけ	14.2	9.3	3.8	胎土は白針、黒色微砂、白色微粒を混じえる肌色粉質土
26 10	1面上	平瓦				胎土は明灰色瓦質土
26 11	1面上	輪花型火鉢				胎土は黒色微砂、白色微粒～小石を混じえる暗灰赤褐色瓦質土

表1 遺物観察表(3)

図版番号	出土地	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
26	12 1面上	常滑甕				胎土は白色微石を多く混じえる暗灰色土
26	13 1面上	常滑甕				胎土は白色微石・小石を多く混じえる暗灰色土 脊表は赤褐色を呈する
26	14 1面上	すり常滑		5.5×4.7×1.2		甕板用 胎土は白色微石を多く混じえる灰色緻密土
26	15 1面上	備前擂鉢				胎土は黒色、および白色微粒を混じえる明灰色土
26	16 1面上	備前擂鉢				胎土は黒色微砂、白色微粒を混じえる暗灰色緻密土
26	17 1面上	青磁碗		4.9		素地は白色微粒をわずかに混じえる灰色弱粘質緻密土 脊は灰緑色を呈する 内底面は牡丹文?の押印
26	18 1面上	青磁折縁鉢	17.6			素地は黒色微砂をわずかに混じえる白色粘質緻密土 脊は青緑色を呈する
26	19 1面上	滑石鍋	(26.3)			





a. 第3面全景（西から）

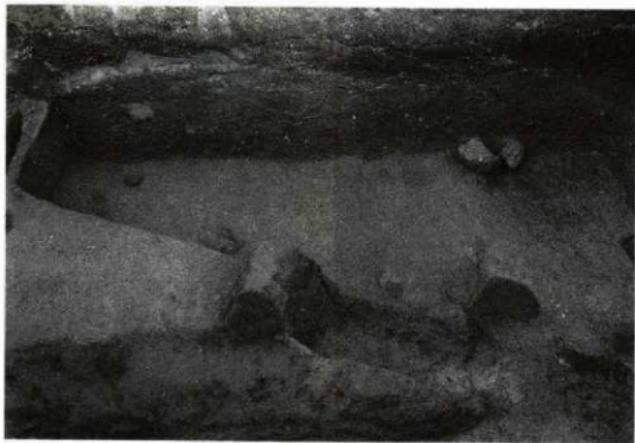


b. 調査途中全景（西から）



c. 方形竪穴建物17（南から）

図版 2



a. 方形竪穴建物 8 (南から)



b. 調査区東壁土層 (満2・9・19)

図版3



18-5



6-4



6-3



26-4



18-2

かわらけ



13-5

縁  
羽  
口



24-6



18-8



13-9

こね鉢



13-10

常  
滑  
甕



13-11

出土遺物（1）

図版4



火鉢



13-8



26-15



26-16

擂鉢



13-7



18-7

瀬戸

17-5



26-18



17-7



17-6

船載陶器



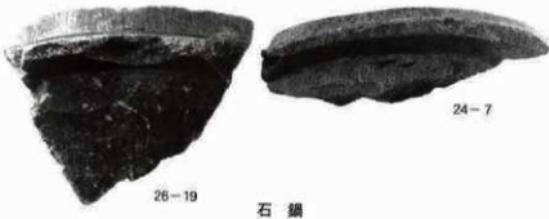
26-17

17-8

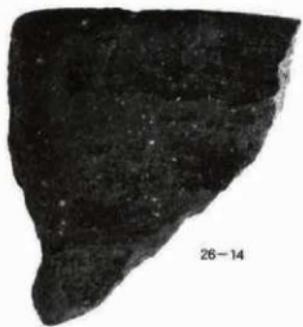


6-5

出土遺物(2)



石 鋸



すり陶片

出土遺物 (3)



◎新川原本 322

◎販99 194

◎本 194

◎本 194

◎本 194

かめがやつさんのうどうあと  
**亀谷山王堂跡(No. 185)**

扇ガ谷四丁目327番5地点

## 例　　言

1 本報は鎌倉市扇ガ谷四丁目327番5地点における住宅建設（地下部分）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。調査面積は12m<sup>2</sup>である。

2 発掘調査期間は平成12年12月11日から同年21日までである。

3 調査体制は以下の通りである。

担当者 大河内勉

調査員 熊谷満・伊丹まどか

調査参加者 大戸迫猛・宮崎明・荻野勲

整理参加者 石元道子・伊丹まどか

遺物水洗い 向後博之・福田洋三・高橋寛・平川康展

協力機関名 (社)鎌倉市シルバー人材センター

(株)齊藤建設

鎌倉考古学研究所

鎌倉遺跡調査会

宮田調査事務所

4 本報に関わる整理・編集作業は、伊丹まどか・石元道子が分担して行なった。執筆は第2章第2節を川又隆央、第4章を石元が、その他は伊丹が執筆した。

5 本報で使用した写真は、遺構を熊谷満が、遺物を石元が撮影した。

6 挿図の縮尺は、全測図が1/40、出土遺物が1/3などとなっている。

7 出土遺物の破片数計測を行なったが、かわらけの場合1.5cm以下の大、小の区別が出来なかつものについては全て大として数えた。

6 本調査に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

7 現地調査および資料整理に際しては、次の諸氏から貴重なご教授を賜った。(順不同・敬称略)

宮田眞・滝沢晶子・森孝子・野本賢二・汐見一夫・菊川英政・馬淵和雄・宗基富貴子・川又隆央  
東濃製品および動物骨については宗基富貴子氏にご教授いただいた。

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	292
第2章 調査の概要 .....	294
第3章 遺構と遺物 .....	296
第1節 検出遺構 .....	296
I 上層遺構 .....	296
II 中層遺構 .....	297
III 下層遺構 .....	298
第2節 出土遺物 .....	298
I 上層出土遺物 .....	298
II 中層出土遺物 .....	300
III 下層出土遺物 .....	300
IV 表土掘削時出土遺物 .....	300
法量表 .....	304
第4章 まとめ .....	307

## 挿図目次

図1 調査地点位置図 .....	293
図2 国土座標位置図 .....	294
図3 堆積土層図 .....	295
図4 上層遺構全図 .....	296
図5 中層・下層遺構全図 .....	297
図6 上層出土遺物 .....	299
図7 土壌1・出土遺物 .....	300
図8 中層出土遺物(1) .....	301
図9 中層出土遺物(2) .....	302
図10 下層・表土掘削時出土遺物 .....	303

## 図版目次

図版1 上層遺構 .....	309
図版2 中層遺構 .....	310
図版3 下層遺構 .....	311
図版4 調査地全景 .....	312
図版5 上層出土遺物 .....	313
図版6 土壌1・中層出土遺物(1) .....	314
図版7 中層出土遺物(2) .....	315

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地は、扇ヶ谷の支谷のひとつである山王ヶ谷に位置する。現在、この谷戸は住宅地となっているが、『鎌倉志』に「山王堂ハ源氏山ノ西北ニアリ」と記され、『吾妻鏡』に寛元三年(1245)三月十九日、頼経が「亀谷山王室前」に参詣した記事があり、山王神道の拠点であった山王堂という寺社があった谷戸と考えられる(註1)。扇ヶ谷は、古くは亀ヶ谷と呼ばれ、清水ヶ谷(浄光明寺)・多宝寺ヶ谷・藤ヶ谷・勝勝寺ヶ谷・法泉寺ヶ谷・清涼寺ヶ谷・梅ヶ谷(海藏寺付近)・山王ヶ谷(山王堂ヶ谷(註2))等の支谷を含む一帯の総称である(註3)。また、浄光明寺・薬王寺・多宝寺(廃寺)・勝因寺・正円寺(註4)・智岸寺(廃寺)・海藏寺・法泉寺(廃寺)・新清涼寺(廃寺)など多くの寺院が存在し、299穴のやぐらが確認されている(註5)。鎌倉の内に入るには、山稜部を通過するために「切通し」と呼ばれる峠道を使わなくてはならず、その代表的な峠道は「七切通し」と呼ばれ、西から極楽寺坂・大仏坂・仮坂坂・亀ヶ谷坂・巨福呂坂・朝比奈切通・名越坂がある。扇ヶ谷には、その内の仮坂坂・亀ヶ谷の切通しとそれに通ずる武藏大路と呼ばれた街道が在ったことが知られている。武藏大路が鎌倉郡衙に通ずる現在の今小路とつながることや、新田義貞の鎌倉攻めのさいに使用した街道であること、建長三年(1251)に幕府が定めた商業地域の中に「氣和飛坂山上」(註6)があることから、仮坂坂は鎌倉街道上ノ道から武藏の国を経て鎌倉の内に入る重要な防衛施設のある場所であり、往来の激しい商業地域でもあったと考えられる。また、『吾妻鏡』の義和元年(1181)九月、桐生六郎が主君足利俊綱の首を持って鎌倉に入ろうとしたときに武藏大路から深沢を経て藤越に向うように言い渡された記事から、仮坂坂・武藏大路付近が鎌倉の内と外を隔てる境界ではないかと考えられ(註7)、山王堂ヶ谷の西、源氏山山頂では土壙墓を数基確認しており(註8)葬送の地としての性格をも含む地域であったと考えられる。

調査地の位置する山王ヶ谷は、武藏大路を仮坂坂に上る途中を南に上る谷であり、道の分岐点には景清牢の伝説をもつやぐらがある。谷戸のなかは、山腹にやぐらを5穴確認するのみで、後は宅地造成によって壊されており、山王堂に関連するような痕跡は確認できていない。また、扇ヶ谷では発掘調査の事例が少なく中世の様相を明確に出来ていないが、近年鎌倉市教育委員会による遺跡の詳細分布調査等により、扇ヶ谷・仮坂坂・亀ヶ谷の様相が徐々に明らかになっている。

.....註.....

(註1) 鎌倉の内には、鎌倉の東の境にあたる「名越の切通」付近にも山王堂があったといわれている。『鎌倉廃寺事典』 貢達人・川副武胤編 有隣堂 1980年

(註2) 『鎌倉事典』の「山王堂」の項に「山王ヶ谷」の記載が見られる

(註3) 勝因寺・正円寺は同じ寺の可能性がある。『鎌倉事典』 白井永二 東京堂出版

(註4) 『鎌倉廃寺事典』 貢達人・川副武胤編 有隣堂 1980年

(註5) 『鎌倉』 50号・1985年「扇ヶ谷地域内の中ぐら群について」宮田義において、総数293穴のやぐらが確認されているが、「海藏寺旧境内遺跡」手塚直樹・岡陽一郎・野本賀二(『鎌倉市緊急調査報告書16』、平成12年3月)で、新たに6穴が確認されている。

(註6) 『吾妻鏡』建長三年十二月三日条

(註7) 『鎌倉の史跡』 三浦勝男(株)鎌倉春秋社 1983年8月

『御家人制の研究』 石井進 吉川弘文館 1981年

(註8) 『第2回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』「鎌倉の葬制-源氏山出土の土壙墓-」 萩川英政 鎌倉考古学研究所 中世都市研究会 1992年

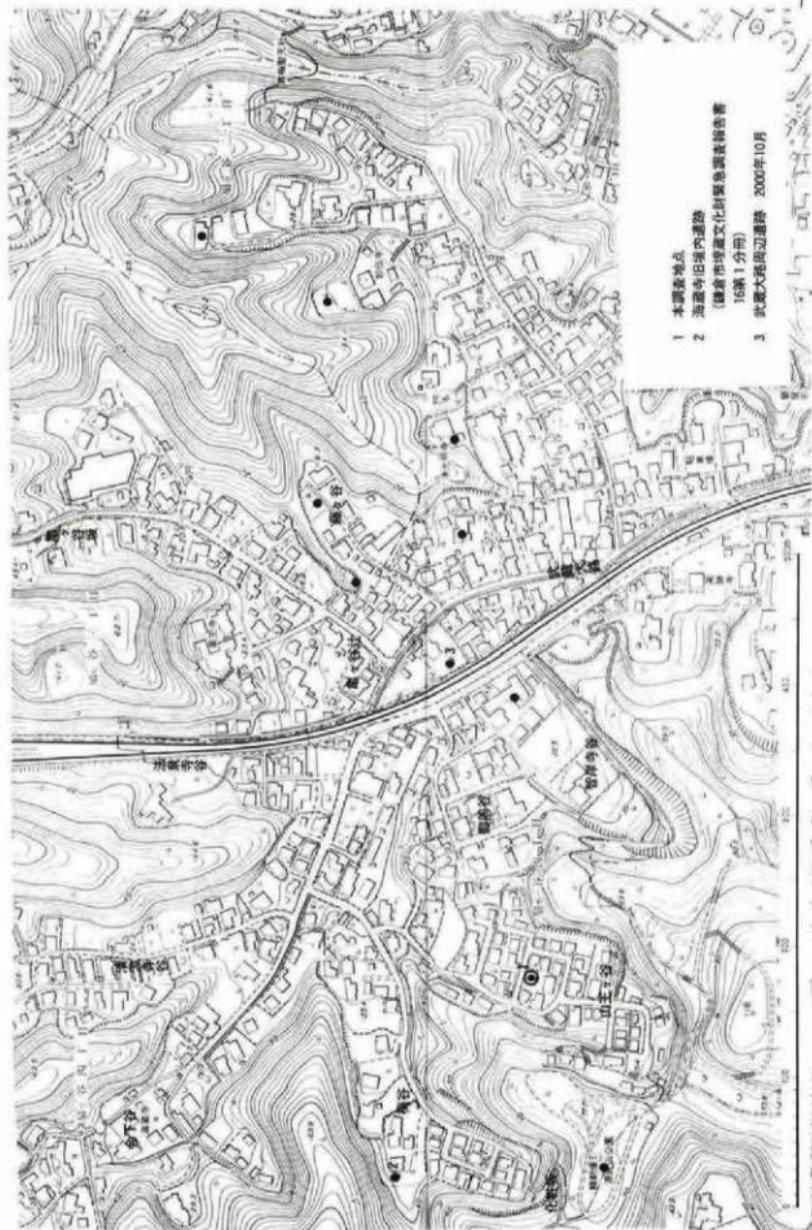


図1 調査地点位置図

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の経過

調査は個人専用住宅の地下室建築にともなって、事前に確認調査を実施したところ、住宅建設予定地前の道路面より約2m下で、中世の遺物包含層を検出したため関係者協議のうえ建設に先立ち発掘調査を実施した。施工業者の協力を得、建設予定地の約半分の面積の盛土（表土）を現地表から2m、重機によって掘削し残土は撤出した。調査予定の12m<sup>2</sup>の、上層約1.5mは重機によって掘削した。その後の調査に伴う残土撤出作業は調査従事者によって行ない、残土は敷地内で処理した。安全を考慮し、土留め工事を行ない調査を実施し調査地の南半分を犬走り状の段差として残し、残りの北側部分のみを調査したが、遺構包含層確認部分までの深度が深いことや、湧水量が激しい事などから生活面を確認する事は困難で土層の堆積状況と若干の遺構・遺物を検出したにとどまる。

調査は平成12年12月11日より同月21日にかけて実施した。

### 第2節 國土座標上の位置（図2）

調査区外に基準となる杭を任意に2点（A・B）設定し光波測量機によって平面図の測量を行った。基準杭A・Bは調査区の軸線と平行させたために、主軸方位は國土座標と一致していない。

基準杭Aの國土座標値は、4級基準点P138・P139を用いて算出した。

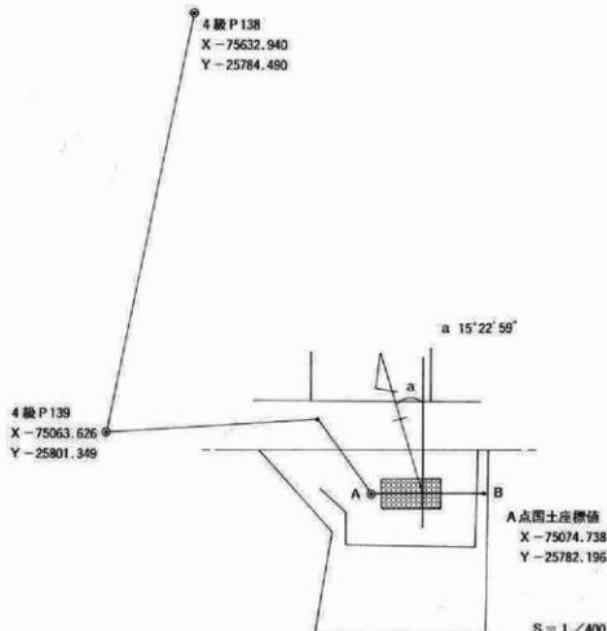


図2 國土座標位置図

### 第3節 堆積土層（図3）

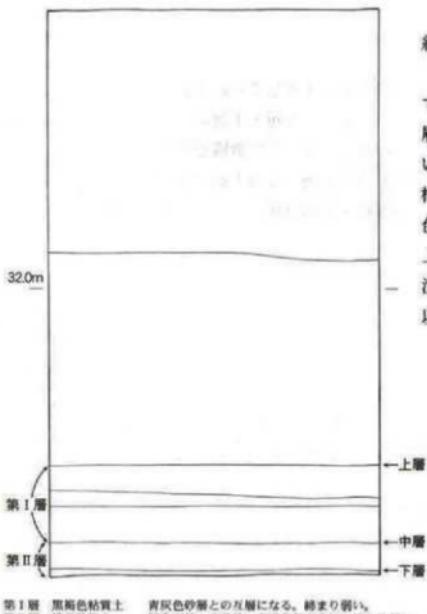


図3 堆積土層図

調査区上層の盛土（表土）を取り除いた後、約7m下で中世の遺物包含層を検出した。

上層遺構を検出した第Ⅰ層は黒褐色粘質土の層で、青灰色砂の砂層との互層となっている。第Ⅰ層を図面上で4層に分けているが、生活面、あるいは地業面を表しているのではなく、調査時に遺構を確認したレベルで分けてある。第Ⅱ層は、褐色粘質土と青灰色砂の互層となっていた。第Ⅱ層上層は、地業は確認できなかったが遺構の検出状況から考えて生活面であったと思われる。第Ⅱ層以下の土層は確認できなかった。

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 検出遺構

調査は地盤が軟弱で湧水が激しいため、当初、平面積12m<sup>2</sup>を予定していた調査区の南側約半分を犬走り状に残し、北側半分約5m<sup>2</sup>のみを調査した。検出遺構は上層・中層・下層に分けた。これは、調査地が、水中ポンプを常時作動させていても水が引くことが無く、面として遺構を捉えることが困難であったためである。堆積土層のI層で検出した遺構を上層、堆積土層のII層上面で検出した遺構を中層、中層遺構の石列を取り去り、最終確認レベルで検出した遺構を下層遺構とした。下層遺構検出レベル以下の土層、及び遺構の確認は出来なかった。

厳しい条件下においての調査ではあったが、礎板・杭列・石列などを検出し調査事例のない山王ヶ谷の様相の一端を明らかにすることが出来た。

#### I 上層遺構（図4）

上層遺構は、堆積土層（図3）の第I層で検出した遺構である。第I層は黒褐色粘質土層と青灰色砂層の互層となっていた。検出した杭・礎板・土壙等の遺構は、同一のレベルで検出したものではないが、全て上層遺構出土として示している。土壙1は、確認したと同時に湧水により埋没するという状況下で検出したため、土壙の規模などは不明である。

検出した杭・礎板などについて若干の説明を述べる。

A～Fは杭。Aは厚さ5.4×4cm・長さ53cmを測る。Bは厚さ11×7cm・長さ38cmを測る。柱か？Cは厚さ3.2×1.2cm・長さ17.5cmを測る。Dは厚さ5×3cm・長さ18.5cmを測る。Eは厚さ5.8×3.6cm・長さ24.5cmを測る。柱か？Fは遺存状況が悪く計測不可能であった。A・D・Fは地中部分の端を尖らせてあった。Gは礎板である。幅24×13.3cm・厚さ1.5cmを測る。それぞれの関係などは残念ながら確認できなかった。

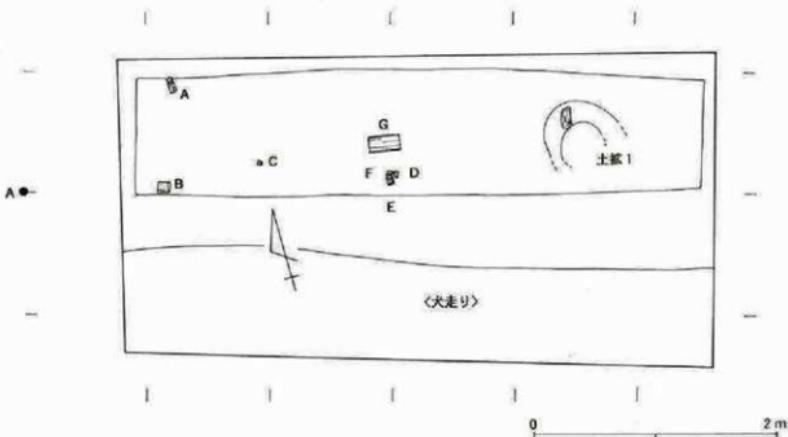


図4：上層遺構全図

## II 中層遺構（図5）

中層遺構は、堆積土層の第Ⅱ層上面で検出した遺構である。礎板と石列を検出した。

調査区の東側で、石列を検出した。一見すると不正形であるが、石列の北側面は意識的に面を合わせているようである。石列は調査区外に向って、東西に延びていることを確認している。石材は全て鎌倉石と呼ばれる粗粒凝灰岩であった。軸方位はN-94°-Eである。

検出した礎板Aは建築部材の廃材を転用している。幅19×10cm・厚さ3cmを測る。

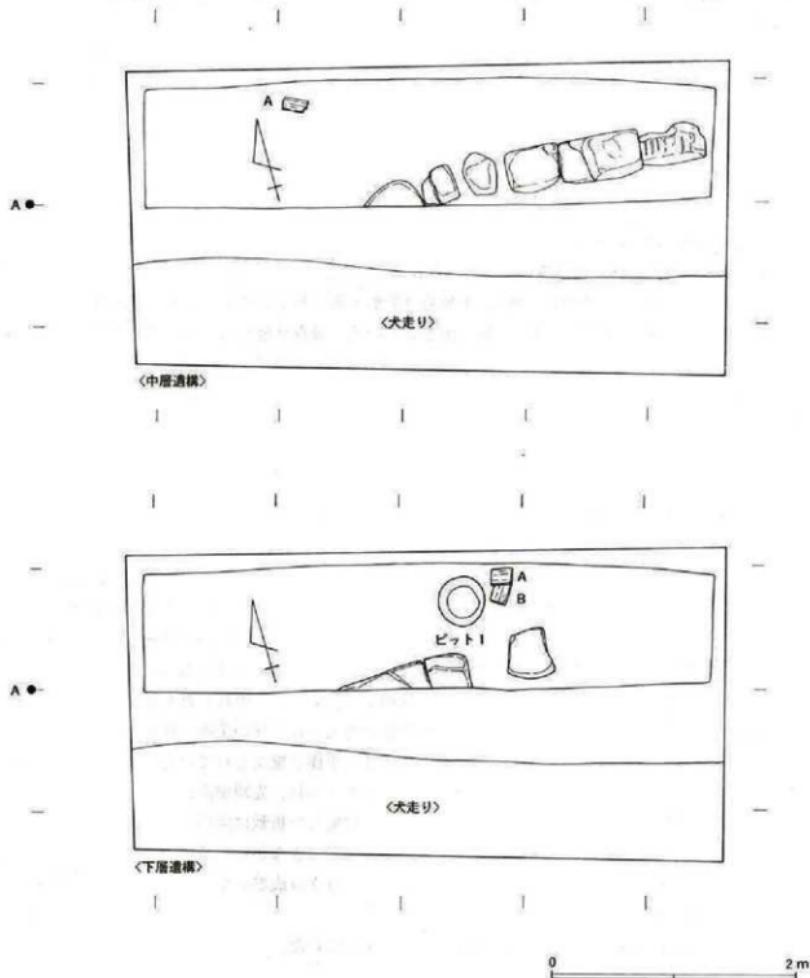


図5 中層遺構・下層遺構全図

### III 下層遺構（図5）

下層遺構は、中層の石列を取り除いた時点でピット・礎板・石列を確認した。

下層で検出した石列は、中層の石列検出時に確認しており、当初2段組の石垣の可能性も考えられたが、如何せん調査状況が劣悪であり断定は出来ない。また、石列の西で検出した石材は、調査区外に延びてしまっているが、確認できた範囲で東西142cm以上・南北25cm・厚さ26cmを測る大型の石であった。下層遺構では、石列が東に延びることを確認していないが、調査区外に広がっている可能性もある。石材は全て鎌倉石。中層の石列と同様に北側面は意識的に面を合わせていると思われる。軸方位は中層の石列と同方位を示す。

ピット1は平面円形を呈し、径約40cm、深さ5cmを測る。（湧水の中での計測のため不正確）

礎板Aは幅15.7×12.3cm・厚さ3cmを測る。礎板Bは幅14.5×12.2cm・厚さ4.8cmを測る。

下層遺構検出後の調査は安全を考慮して実施していないが、排水溝の壁を観察したところ、下層検出レベルの約40cm下まで、堆積土層の第II層が堆積していることを確認した。

## 第2節 出土遺物

出土遺物総量は整理箱数にして4箱であった。出土遺物は、瀬戸窯製品（鉢皿・折縁皿・盤・四耳壺・壺）、山茶碗窯系捏ね鉢、常滑窯製品（甕・捏ね鉢）、瓦器質皿、手焼り、ロクロ成形かわらけ、骨製品（笄）、石製品（砥石）、漆製品（皿）、木製品（折敷・箸・杓子・円盤・工具の柄・堅櫛・草履芯・用途不明品）、自然遺物（獸骨・種子）等が出土している。遺存状態から、図示できたのは国内産陶磁器9点、土器類25点、骨製品1点、石製品1点、漆製品2点、木製品59点、の計97点であった。

その外に建築部材と思われる木製品が多く出土していたが、現地にて一部計測をし採集はしていない。又、その他の木製品は基本的に完形品を採集した。

### I 上層出土遺物（図6）

1は常滑窯甕。縁帯部の幅が約5.5cmと広く、縁帯が頸部に接している。内外に油煤痕が付着している。（縮尺1/6）2は常滑窯捏ね鉢2類。口縁端部は平らでやや外に引かれている。3は常滑窯捏ね鉢1類。口縁外端部が突出し端部先端に瘤みが巡る。全体に煤けており油煤痕付着。4は瓦器質黒縁皿。外面下半に指頭圧痕の整形が強く入る。内底面を除き油煤痕が全体に付着。5～10はロクロ成形かわらけ。5・6はやや薄手で精良な胎土。内外両側面煤けている。外側面中頃に稜をもつ。7・9は器壁は薄く胎土は粉質である。口唇端部やや外反する。8は外側面中頃下に稜をもつ。内外両側面が煤けている。外底面は糸切り痕が擦って消してあった。使用しているうちに磨耗した可能性もあるが、意識的に外底面を擦っているようである。内底面には使用痕と考えられる細い条線が複数みられた。11は漆製品皿。内外面ともに黒色系漆。文様は不明だが赤色系漆で手描き施文されている。無高台。12は木製品。工具の柄か？端部の割れ目に工具を嵌め込み縛ったと考えられ、先端側面に圧痕が遺存していた。13は木製品。用途不明。14～16は草履芯。17～19は折敷。採集した折敷は図示した以外の物も全て長さ12cm前後の小型の折敷であった。20～34は完形品の箸。図示できなかった遺物は破片点数として、瀬戸盤1点、常滑窯甕の胴部9点、捏ね鉢1点、手焼り1点、ロクロ成形のかわらけ大型46点、小型5点。木製品は箸の不完形品として67本出土している。

その外に、建築部材と考えられる木製品が多く出土していた。

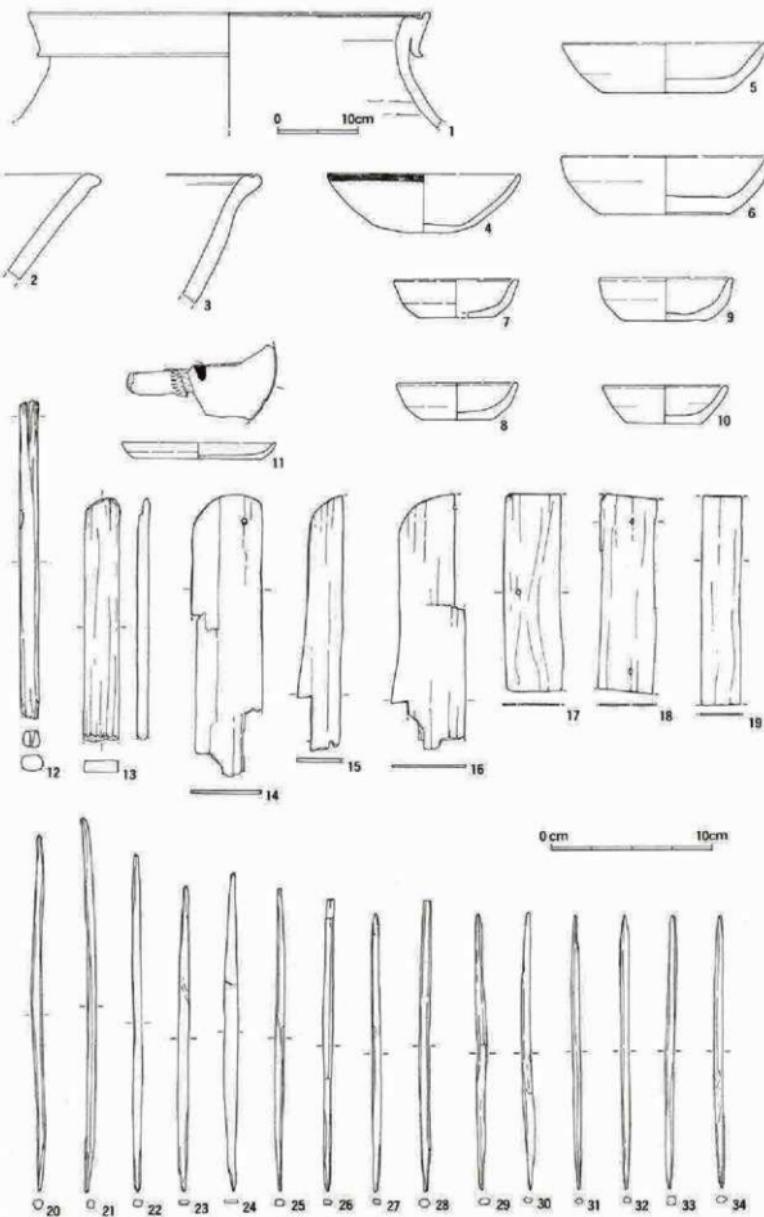


图6 上层出土遗物

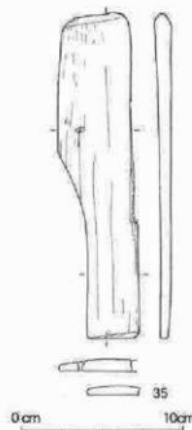


図7 土壌1 出土遺物

### 土壤1出土遺物(図7)

35は用途不明の木製品。製品中央付近に細い釘痕が残る。杓子か?

図示できなかった破片数としてロクロ成形のかわらけ大型5点、小型1点。

### II 中層出土遺物(図8・9)

36は瀬戸折縁鉢。口縁外端部は丸みがあり、口縁から内面にかけて灰釉の刷毛塗り痕が残る。37～40は常滑窯甕。37は頸部が直立気味に立ち上がる。口縁部も直線的に約2cm張り出し口縁端部下方にやや延びる。38は口縁端部下方にやや延びる。39は縁帶の幅約4cmで内向するも頸部には接していない。40は胴部片。叩き文拓影。41～43は手焼り。41は瓦質。黒色処理で口縁から内面にかけて横方向に磨きが入る。外面は縦方向の磨きが施されている。菊花スタンプ押印。42は瓦質黒色処理。口縁部を除き外側面に火熱を受けた痕跡がある。43は瓦質。口縁から外底面まで黒色処理。外側面に横方向の磨きが入る。内面は上位5cmが銀灰色となり火熱を受けたのか内面剥離している。銚に菊花スタンプ押印。44～55はロクロ成形かわらけ。44は外側やや上位に後を持つ墨書かわらけ。内面全体と、外面は底部および側面にかけて墨書の痕が残っていた。文字は判読できなかった。

47は薄手で粉質胎土である。48～55までは小型で器壁が薄く精良な胎土を持つ。49・53・55は、油煤痕が付着。55は意識的に器壁を欠いている。52は口唇部3ヵ所を打欠いている。配列の状況から破損部分も打欠いていたと思われる。内底のナデ強く指頭痕がはっきりと残る。56は骨製品の笄。57は石製品の砥石片で鳴滝産系仕上げ砥。58は漆製品、皿。内外ともに黒色系漆で文様は内面に松・土坡は、三方に筆を配し外側面にも3箇所筆が施されている。いずれも赤色系漆で手書き施文である。浅い削り込みの輪高台。59～92は木製品。59は小型の円盤である。60は堅櫛と思われる。61は杓子。62～65は折敷。いずれも厚さ0.1mmと薄い。中層遺構で出土した折敷は長さが12cm前後と16cm前後のふたつのタイプに別れた。66～67は草履芯。68は円盤状木製品、円盤の中心付近に穿孔が開いていたのが浅い溝みがある。樹皮紋が残る2孔一対の孔が開くが対称位置には開いていない。69～92は箸。図示できなかった遺物として、瀬戸製品、壺2点。内1点は肩部に沈線の巡る四耳壺。東濃系山茶碗1点。常滑窯、甕の胴部45点。幅5・5cmの縁帶1点。捏ね鉢4点。山茶碗窯系捏ね鉢1点。土器質手焼り1点。瓦質黒色処理の手焼り1点。手焼りの逆台形状の脚1点。ロクロ成形かわらけ大型299点。小型27点。木製品の折敷は長さの解るものとして13・9cm・15・9cm・16・1cm・16・4cm・18・0cmがあった。箸は不完形品として他58本が出土している。獸骨として牛か馬の骨、大型魚類の骨の一部が出土している。

### III 下層出土遺物(図10)

93～94はロクロ成形かわらけ。93は精良粉質胎土で堅く焼き縮まる。94は外側中頃に強い陵をもつ。図示できなかった遺物として、ロクロ成形かわらけ大型12点。小型1点であった。

### IV 表土掘削時出土遺物(図10)

96は瀬戸御皿。内底面は灰釉がかかる。外面は剥離しているが外底近くまで釉がかかっていたものと思われる。糸切り底。97はロクロ成形かわらけ。中型で器壁が薄く見込みの横ナデが強い。図示できなかった遺物として、常滑窯の胴部1点。ロクロ成形のかわらけ大型1点であった。

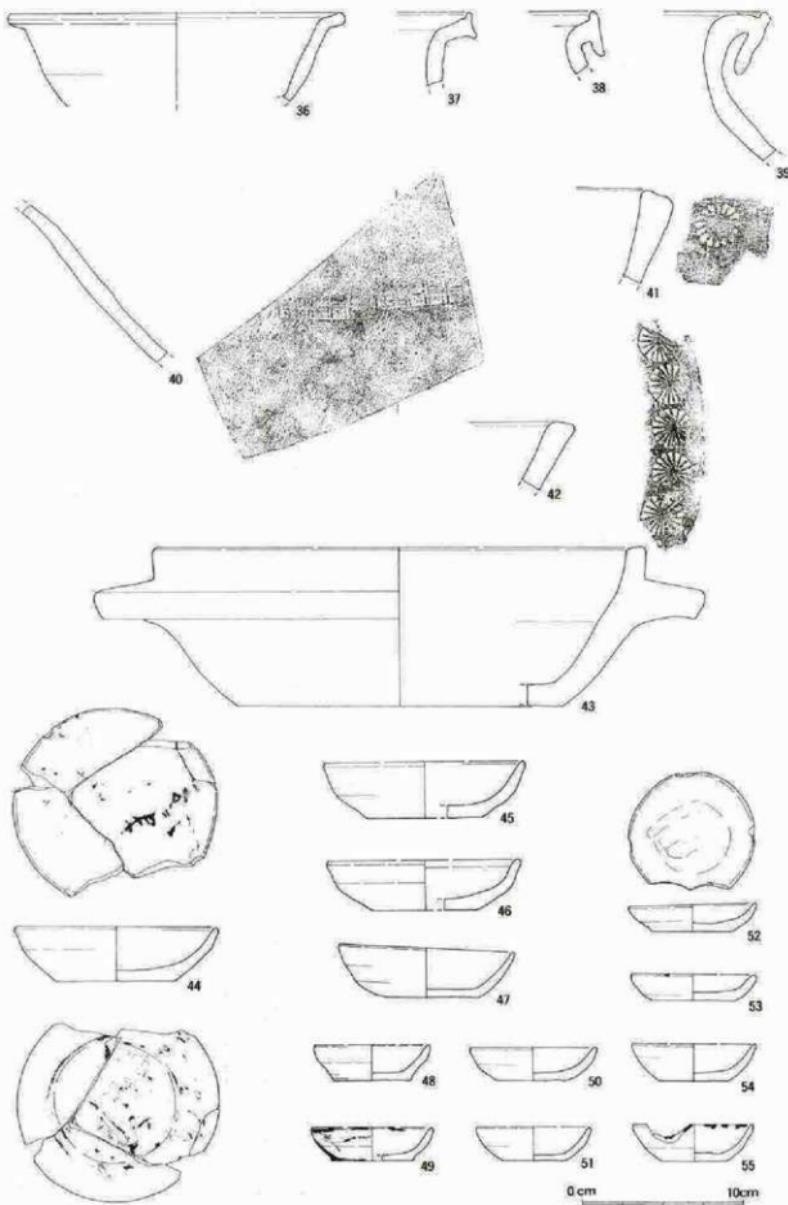


图8 中层出土遗物(1)

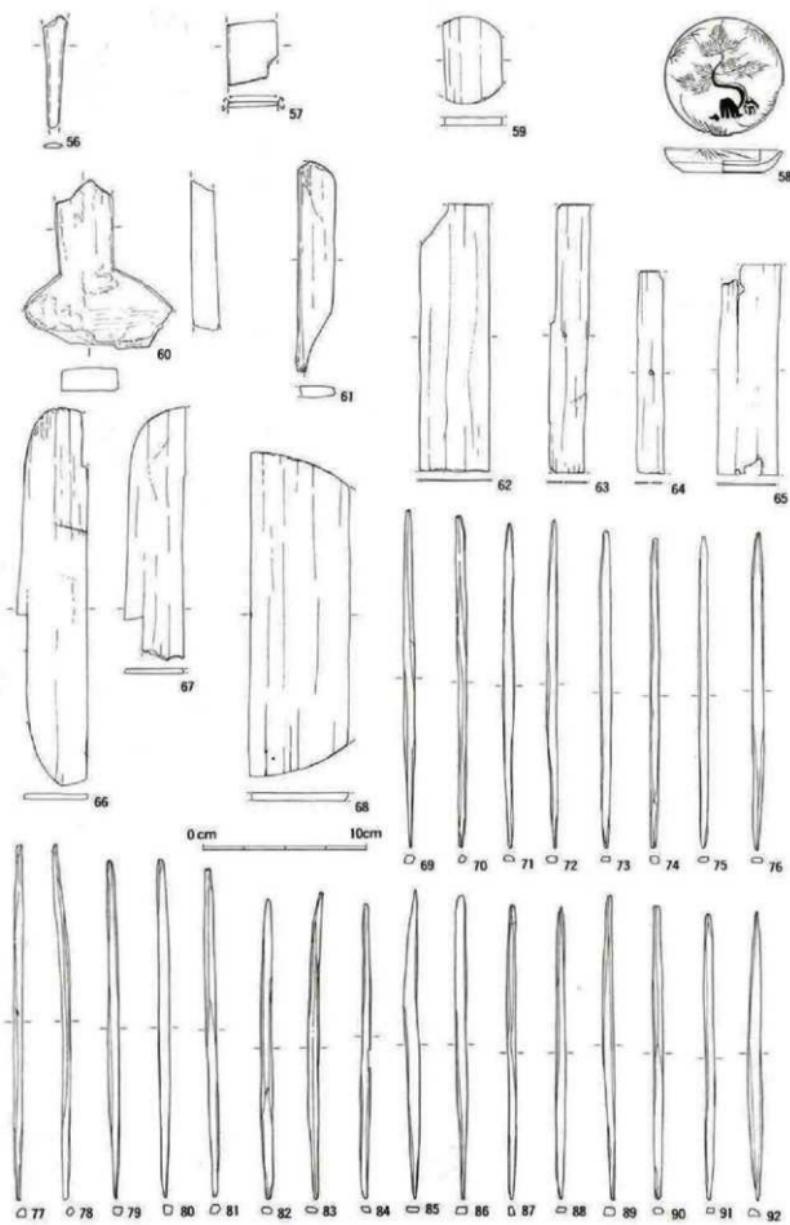


図8 中層出土遺物（2）

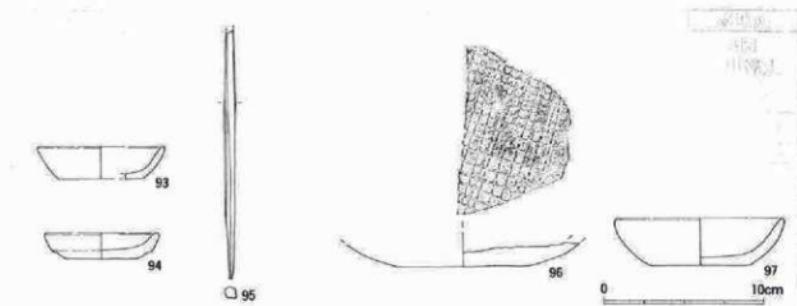


図10 下層・表土掘削時出土遺物

法量表

図版No.	No.	遺物名	法量(cm)			No.	遺物名	法量(cm)		
図6 上層出土	1	常滑窯 甕	口径 (48, 6)	底径	器高	—	常滑窯 捏ね鉢	口径	底径	器高
	3	常滑窯 捏ね鉢	口径	底径	器高	—	瓦器質 黒縁皿	底径	底径	器高
	5	ロクロ成形 かわらけ	口径 (12, 6)	底径 (7, 6)	器高 (3, 1)	—	ロクロ成形 かわらけ	口径 (12, 9)	底径 (8, 0)	器高 (3, 6)
	7	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7, 6)	底径 (4, 6)	器高 (2, 4)	—	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7, 4)	底径 (4, 4)	器高 (2, 3)
	9	ロクロ成形 かわらけ	口径 (8, 2)	底径 (5, 6)	器高 (2, 7)	—	ロクロ成形 かわらけ	口径 7, 6	底径 4, 7	器高 2, 4
	11	漆器 皿	口径 (9, 6)	底径 (8, 0)	器高 (1, 0)	—	木製品 工具の柄	長さ (19, 8)	幅 1, 2	厚さ 1, 0
	13	木製品 用途不明	長さ (15, 1)	幅 2, 1	厚さ 0, 7	—	木製品 草履芯	長さ	幅 4, 4	厚さ 0, 2
	15	木製品 草履芯	長さ —	幅 —	厚さ 0, 2	—	木製品 草履芯	長さ	幅 4, 6	厚さ 0, 15
	17	木製品 折敷	長さ 12, 2	幅 —	厚さ 0, 1	—	木製品 折敷	長さ 12, 0	幅 —	厚さ 0, 1
	19	木製品 折敷	長さ 13, 0	幅 —	厚さ 0, 1	—	木製品 箸	長さ 22, 2	幅 0, 6	厚さ 0, 6
	21	木製品 箸	長さ 23, 2	幅 0, 5	厚さ 0, 5	—	木製品 箸	長さ 20, 9	幅 0, 5	厚さ 0, 4
	23	木製品 箸	長さ 19, 0	幅 0, 6	厚さ 0, 3	—	木製品 箸	長さ 19, 7	幅 0, 1	厚さ 0, 2
	25	木製品 箸	長さ 18, 8	幅 0, 55	厚さ 0, 4	—	木製品 箸	長さ 18, 1	幅 0, 5	厚さ 0, 3
	27	木製品 箸	長さ 17, 2	幅 0, 5	厚さ 0, 3	—	木製品 箸	長さ 18, 0	幅 0, 7	厚さ 0, 5
	29	木製品 箸	長さ 17, 1	幅 0, 6	厚さ 0, 4	—	木製品 箸	長さ 17, 1	幅 0, 5	厚さ 0, 3
	31	木製品 箸	長さ 17, 0	幅 0, 4	厚さ 0, 4	—	木製品 箸	長さ 17, 0	幅 0, 45	厚さ 0, 3
	33	木製品 箸	長さ 16, 9	幅 0, 55	厚さ 0, 5	—	木製品 箸	長さ 16, 9	幅 0, 6	厚さ 0, 4
図7 土壤1出土	35	木製品 用途不明	長さ 20, 3	幅 4, 5	厚さ 0, 8					
図8・9 中層出土	36	瀬戸 折縁皿	口径 (20, 6)	底径 —	器高 —	37	常滑窯 甕	口径	底径	器高
	38	常滑窯 甕	口径	底径	器高	—	常滑窯 甕	口径	底径	器高
	40	常滑窯 甕	口径	底径	器高	—	手焙り	口径	底径	器高
	42	手焙り	口径 —	底径 —	器高 —	—	手焙り	口径(30)	底径(20)	器高(9, 9) 鑄径(37, 8)

	44	ロクロ成形 かわらけ	口径 12.4	底径 7.3	器高 3.4	45	ロクロ成形 かわらけ	口径 (12.4)	底径 (7.0)	器高 (3.5)
	46	ロクロ成形 かわらけ	底径 (11.8)	底径 (6.4)	器高 (3.1)	47	ロクロ成形 かわらけ	口径 10.7	底径 6.5	器高 3.1
	48	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7.2)	底径 (4.7)	器高 (2.2)	49	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7.5)	底径 (5.0)	器高 (2.1)
	50	ロクロ成形 かわらけ	口径 7.7	底径 4.9	器高 2.0	51	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7.0)	底径 (3.9)	器高 (2.1)
	52	ロクロ成形 かわらけ	口径 7.9	底径 5.0	器高 1.7	53	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7.6)	底径 (5.1)	器高 (1.6)
	54	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7.6)	底径 (4.4)	器高 (2.3)	55	ロクロ成形 かわらけ	長さ (7.6)	幅 (4.0)	厚さ (2.3)
	56	骨製品 笄	長さ —	幅 —	厚さ —	57	石製品 砥石	長さ (3.7)	幅 (3.1)	厚さ (0.2)
	58	漆製品 皿	口径 7.0	底径 5.0	器高 1.4	59	木製品 円盤	直径 5.4	—	厚さ 0.5
	60	木製品 堅櫛	長さ —	幅 —	厚さ (1.5)	61	木製品 杓子	長さ —	幅 —	厚さ 0.7
	62	木製品 折敷	長さ 16.5	幅 —	厚さ 0.1	63	木製品 折敷	長さ 16.6	幅 —	厚さ 0.1
	64	木製品 折敷	長さ 12.5	幅 —	厚さ 0.1	65	木製品 折敷	長さ 13.0	幅 —	厚さ 0.1
	66	木製品 草履芯	長さ 23.4	幅 4.3	厚さ 0.35	67	木製品 草履芯	長さ —	幅 —	厚さ 0.3
	68	木製品 円盤	直径 (20.0)	—	厚さ 0.5	69	木製品 箸	長さ 20.8	幅 0.7	厚さ 0.5
	70	木製品 箸	長さ 20.5	幅 0.5	厚さ 0.4	71	木製品 箸	長さ 20.0	幅 0.6	厚さ 0.3
	72	木製品 箸	長さ 20.3	幅 0.6	厚さ 0.4	73	木製品 箸	長さ 19.6	幅 0.6	厚さ 0.3
	74	木製品 箸	長さ 20.2	幅 0.5	厚さ 0.5	75	木製品 箸	長さ 20.3	幅 0.6	厚さ 0.3
	76	木製品 箸	長さ 19.5	幅 0.7	厚さ 0.3	77	木製品 箸	長さ 21.9	幅 0.6	厚さ 0.5
	78	木製品 箸	長さ 21.9	幅 0.5	厚さ 0.5	79	木製品 箸	長さ 20.9	幅 0.5	厚さ 0.5
	80	木製品 箸	長さ 20.9	幅 0.5	厚さ 0.5	81	木製品 箸	長さ 20.3	幅 0.7	厚さ 0.5
	82	木製品 箸	長さ 18.5	幅 0.6	厚さ 0.4	83	木製品 箸	長さ 18.9	幅 0.7	厚さ 0.4
	84	木製品 箸	長さ 18.2	幅 0.6	厚さ 0.3	85	木製品 箸	長さ 19.1	幅 0.8	厚さ 0.3
	86	木製品 箸	長さ 18.7	幅 0.7	厚さ 0.4	87	木製品 箸	長さ 18.1	幅 0.4	厚さ 0.5
	88	木製品 箸	長さ 18.0	幅 0.6	厚さ 0.3	89	木製品 箸	長さ 18.7	幅 0.7	厚さ 0.5

	90	木製品 箸	長さ 18、1	幅 0、6	厚さ 0、4	91	木製品 箸	長さ 17、6	幅 0、5	厚さ 0、3
	92	木製品 箸	長さ 17、8	幅 0、8	厚さ 0、5					
図10 下層出土	93	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7、8)	底径 (5、2)	高 (2、0)	94	ロクロ成形 かわらけ	口径 (7、0)	底径 (4、6)	器高 (1、6)
	95	木製品 箸	長さ —	幅 0、7	厚さ 0、7					
図10 表土掘削時出土	96	瀬戸 卸皿	口径 (8、0)	底径 —	器高 —	97	ロクロ成形 かわらけ	口径 (10、4)	底径 (6、2)	器高 (2、9)

## 第4章 まとめ

本調査地は、扇が谷の西の支谷山王ヶ谷に位置する。山王ヶ谷は、13世紀半ばには文献にその名前が登場する谷戸であり、山王堂というという寺社があったと伝承される谷戸である。現在は宅地造成によって谷全体が開かれ、谷戸の西側の山腹に数基のやぐらを確認するのみであるため、遺構の大半は失われていると考えていた。調査面積は12m<sup>2</sup>と狭く、安全を考慮して約半分の面積のみの調査となってしまったため、十分な調査をしたとは言い難いが、興味深い遺構を検出することが出来た。また、湧水量が激しく生活面（地業層）を検出することが困難だったため、検出した遺構群は上層・中層・下層に分けて示している。

上層遺構では、土壌・礎板・杭・柱を検出した。調査面積が狭かったこともあり検出した、遺構から建物址などを想像するのは難しい。上層遺構を検出した第Ⅰ層は黒褐色粘質土と締まった粗い青灰色砂層が交互に堆積していた。本調査地の北東、梅ヶ谷に位置する海藏寺旧境内遺跡（図1・地点2）の調査において、繰り返し粗砂による地業が行なわれていたことが報告されており、同様に本地点の青灰色砂層の堆積が地業層であった可能性もある。

第Ⅱ層上層で検出した中層遺構では、石列と礎板を検出した。石列は北側の侧面を合わせている。この石列は下層遺構で検出した石列と同位置に配されており2段組であった可能性もある。2段組であった場合整層積みの石垣が考えられるが、下層で検出した石列が東に延びることを確認できなかつたため不明である。切石敷き遺構が造り替えられた可能性もある。下層遺構ではこの他にピット・礎板を検出した。

遺物の出土状況を観察すると、湧水と戦いつつ注意深く層位別に遺物を分ける努力をしたにもかかわらず、上、中、下層にわたって13世紀後半から15世紀初頭にかけての遺物が混在して出土しており、層位の変遷を出土遺物のそれぞれの編年に照らし合わせて考えることは出来ない。又、遺物の出土傾向から遺跡地の性格を想像することも難しい。

鎌倉の谷戸内の利用は、これまでの発掘調査成果や史料から寺社地がその多くを占め、屋敷地も存在するが庶民居住地は極僅かであったことが分かっている。また、鎌倉では三方を開む山から産出する石材が豊富であり、石材を利用した遺構が多く検出されている。代表的な石材としては、伊豆石、土丹、鎌倉石などがあげられる。特に鎌倉石は価値ある商品として使用、流通していた石材であり、購入できる財力のある階層が使用していた石材である。調査地近辺の海藏寺旧境内遺跡（図1・地点）においては、14世紀中頃から後半に比定される土丹（泥岩）を用いた石積遺構が検出されており、寺院址との関連が指摘されている。武藏大路周辺遺跡（図1・地点3）では、土丹を利用した石積遺構と鎌倉石を利用した切石遺構を検出しており、前者は寺院址に関連した遺構である可能性があるが、後者は町屋の要素が高いと報告している。本調査地は遺物の出土状況から見て寺院址との関連性は低いようにも思われるが、谷戸内という立地条件、周辺の調査成果、石列の石材が大型の鎌倉石を用いているところ等から考えて、財力を持つ階層（寺社も含めて）の居住地があったのではないかと考えられる。





上層全景（東から）



杭検出状況

図版2



中層全景（西から）



中層石列検出状況（西から）

図版2 中層遺構

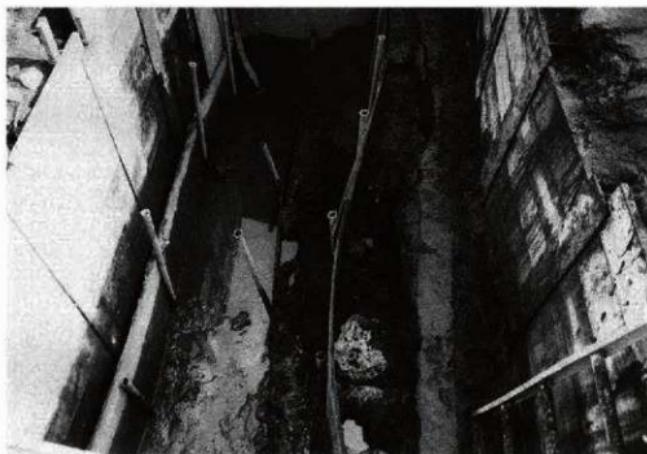


下層石列検出状況（南から）

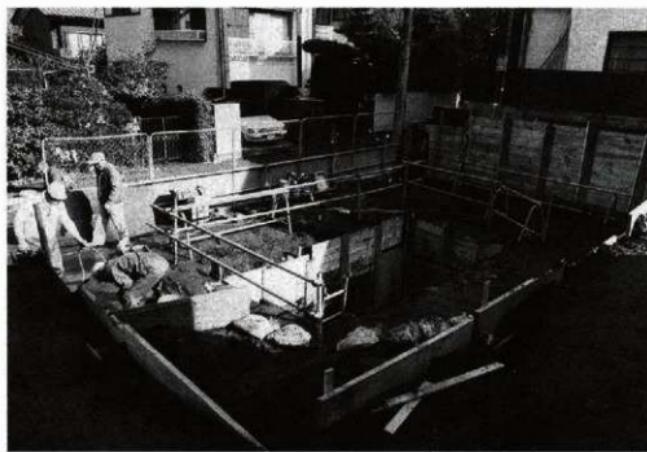


下層全景（西から）

図版4



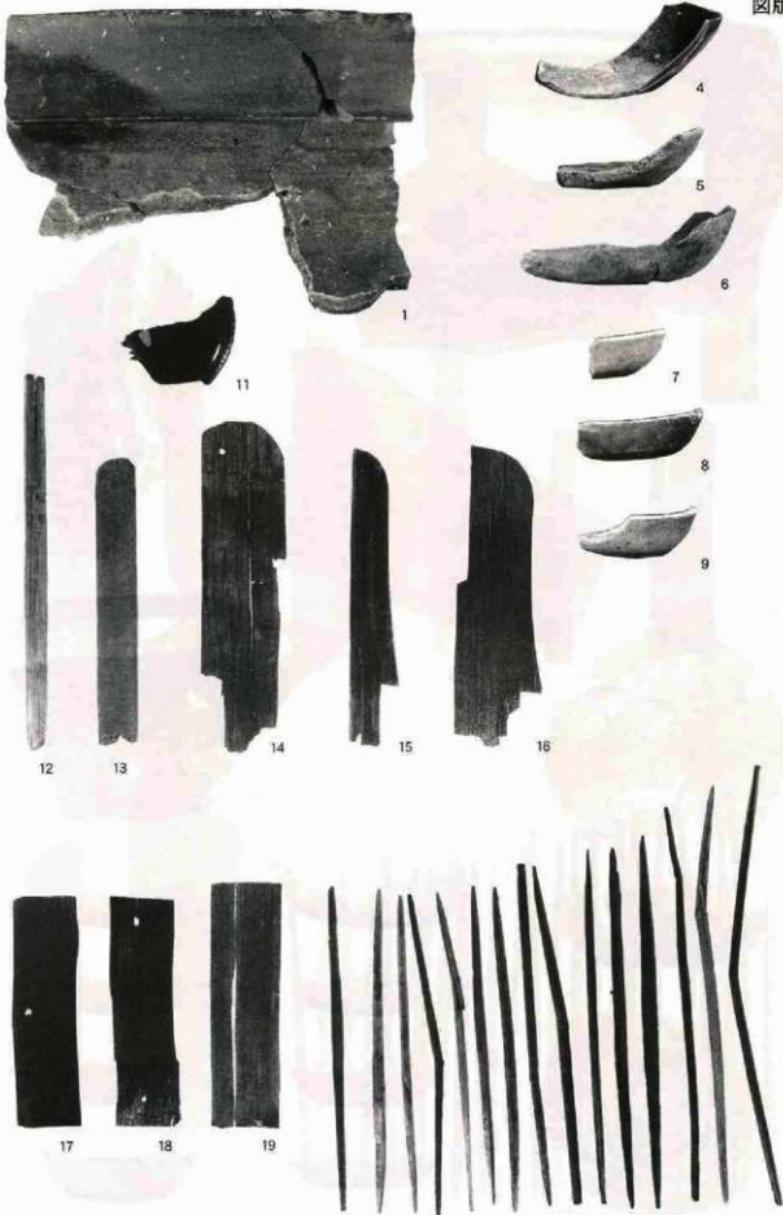
調査終了時の状況



調査地全景

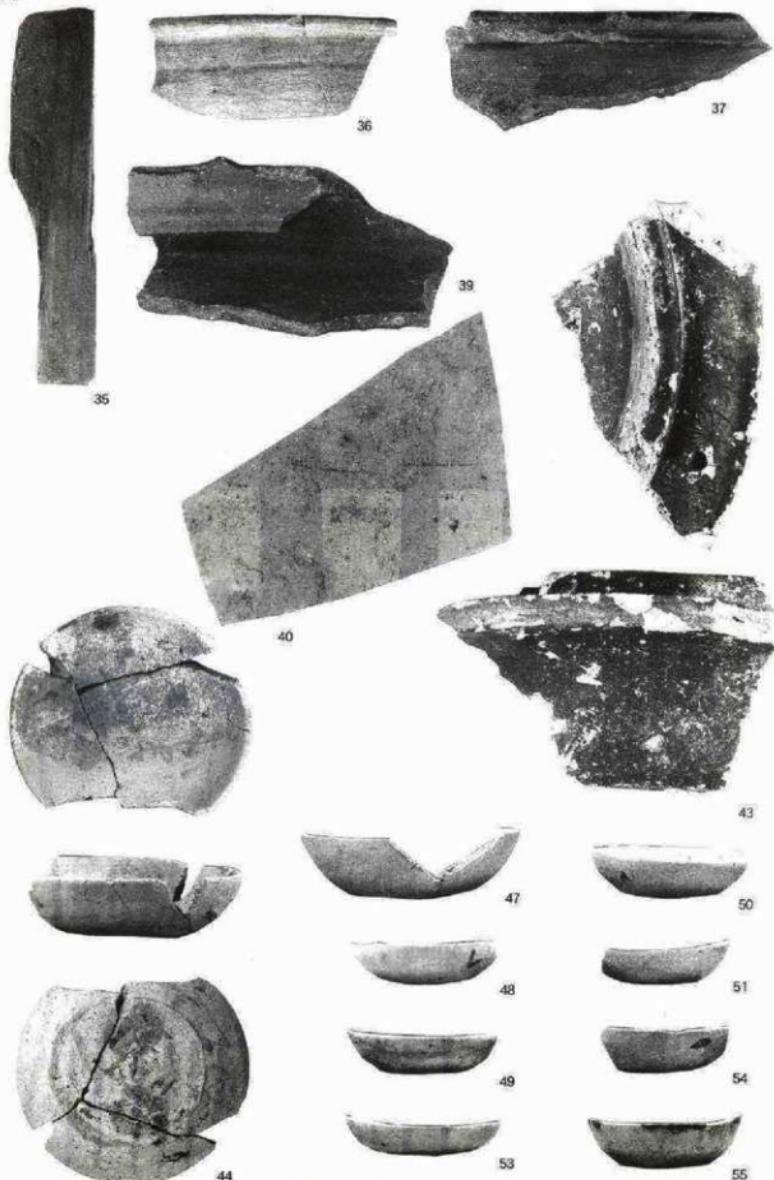
図版4 調査地全景

図版 5



図版 5 上層出土遺物

図版 6



図版 6 中層出土遺物(1)  
土壙 1 出土遺物



圖版 7 中層出土遺物(2)



# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成13年度発掘調査報告							
巻次	18							
シリーズ名	第2分冊							
シリーズ番号								
編集者名	手塚直樹・野本賛二／汐見一夫／若松美智子・上本進二／汐見一夫・田畠衣理／馬淵和雄・飯治屋勝二・松原康子／宗基秀明／汐見一夫・宗基富貴子／宗基秀明・宗基富貴子／伊丹まどか・石元道子・川又隆央							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 1826番9	14204	231		20000801 ～ 20000921	52.25	個人専用住宅	
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 183番1	14204	201	35° 18' 43"	139° 32' 58"	20000811 ～ 20000831	40.00	自己用店舗併用住宅
すいどうやまいせき 水道山遺跡	神奈川県鎌倉市 台四丁目 1169番1	14204	20		20000811 ～ 20001019	163.90	個人専用住宅	
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 長谷一丁目 205番12	14204	236	35° 18' 40"	139° 32' 35"	20001010 ～ 20001110	31.50	個人専用住宅
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 400番1	14204	282	35° 19' 6"	139° 33' 34"	20001023 ～ 20001110	56.00	個人専用住宅
じょうみょうじきゅうけいだいせき 淨妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 淨明寺三丁目 16番1	14204	246		20001031 ～ 20001109	26.00	個人専用住宅	
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 256番1の一部	14204	261	35° 18' 18"	139° 33' 22"	20001109 ～ 20001208	103.10	個人専用住宅
ささめいせき 笹目遺跡	神奈川県鎌倉市 笹目町 302番11	14204	261		20010803 ～ 20011130	122.20	個人専用住宅	
かめがやつさんのうどうあと 龜谷山王堂跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷四丁目 327番5	14204	185		20010719 ～ 20010731	26.00	個人専用住宅	

# 報告書抄録

ふりがな 書名	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成13年度発掘調査報告							
卷次	18							
シリーズ名	第2分冊							
シリーズ番号								
編集者名	手塚直樹・野本賛二／汐見一夫／若松美智子・上本進二／汐見一夫・田畠衣理／馬淵和雄・鎌治屋勝二・松原康子／宗基秀明／汐見一夫・宗基富貴子／宗基秀明・宗基富貴子／伊丹まだか・石元道子・川又隆央							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 1826番9	14204	231		20000801 20000921	* 62.25 64.00	個人専用住 宅	
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 183番1	14204	201	35° 18' 43"	139° 32' 58"	20000814 20000831	40.00	自己用店舗併用住宅
すいどうやまいせき 水道山遺跡	神奈川県鎌倉市 台四丁目 1169番1	14204	20			20000814 * 0904 20001010 105.00	163.00 105.00	個人専用住 宅
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路西遺跡 長谷小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 長谷一丁目 205番12	14204	236	35° 18' 40"	139° 32' 35"	20001010 20001110	31.50	個人専用住 宅
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 400番1	14204	282	35° 19' 6"	139° 33' 34"	20001023 * 10 20001110 30	56.00	個人専用住 宅
じょうふようじきうけいせい 淨妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 淨明寺三丁目 16番1	14204	*	246 408		20001031 20001109	26.00	個人専用住 宅
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 256番1の一部	14204	261	35° 18' 18"	139° 33' 22"	20001109 20001208	103.10	個人専用住 宅
ささめいせき 菅目遺跡	神奈川県鎌倉市 菅目町 302番11	14204	*	261 207		20010803 20011130	122.20	個人専用住 宅
かめがやつさんのうどうあと 龜谷山王堂跡	神奈川県鎌倉市 扇ガ谷四丁目 327番5	14204	185			20010719 * 1211 20010721 1221	26.00 12.00	個人専用住 宅

\*令和6年1月12日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名越ヶ谷遺跡	都市	鎌倉	河川護岸施設、柱穴、土壙	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・瓦、金属製品、石製品、木製品、土師器、須恵器、縄文土器	滑川の支流である逆川の旧護岸を発見。旧河川が現在の流路よりやや西にずれていたことが判明。
今小路西遺跡	都市	中世	方形竪穴建物、溝、柱穴群	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品、貝、獸骨等	
水道山遺跡	集落	縄文 弥生 古墳		縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、石器、鉄製品、石製模造品	
長谷小路西遺跡	都市	中世	砂丘斜面、土壙	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品、貝、獸骨等	
北条小町邸跡	城館	縄文時代 鎌倉時代	縄文晚期の流路、小町大路の側溝	土師器皿、土器、国産陶器・舶載陶磁器、石製品、木製品、自然遺物	周辺の調査成果とあわせることにより小町大路の幅不がある程度推定可能になった。また、縄文晚期の流路が確認された。
淨妙寺旧境内遺跡	社寺	近世	溝、土壙、柱穴		
材木座町屋遺跡	都市	中世	方形竪穴建物、土壙、柱穴群	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器・土器、金属製品、石製品、木製品、貝、獸骨等	
猪目遺跡	都市	中世前期	方形竪穴建物、溝	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器	
龟谷山王堂跡	社寺	鎌倉	土壙、杭列、石列	かわらけ、常滑窯窓、漆器、木製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18

平成13年度発掘調査報告（第2分冊）

発行日 平成14年3月

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 刷 (有)湘南グッド